

---

# 造られし空の下で（３）～正と悪の均衡～

ユウチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

造られし空の下で（3）〜正と悪の均衡〜

### 【Nコード】

N1162E

### 【作者名】

ユウチ

### 【あらすじ】

「すべてを切り裂く覚悟はできている」 因縁を断ち切るため、男は剣を握る。そのためには『信念』さえも犠牲にして……。 「やっつてやるよ！」 力強く掲げられた三つの拳。少年たちもまた、新たな危機に立ち向かう。 結束の力を信じて！…… 半ば強制的に。（第三章）

00 1：新たなる危機（前書き）

『第三章！』ということで、今回も全力を出して書いていきます。

これは『第三章！』ですからね！

## 00 1：新たなる危機

すべてを切り裂く覚悟はできている。

過去も

記憶も

自分自身も

セルヴォオ世界、人間世界　二つの現実世界。  
すべてを滅ぼす脅威は去った。  
だがそれはあくまで、目に見える“現実”の話。

マハエ、ハルトキ、エンドー。三人が人工島での戦いを終える頃

デンテールの人工島、船着場

「ふんぬっ！！！」

筋肉モード全開。窪井の重たい横振りの拳が風を起こした。  
大林は体勢を低くしてそれをかわした後、地面に片手について全身に回転を加えながら蹴りを放った。

腹部に攻撃をくらった窪井。だがその痛みをねじ伏せて、すぎが

できた大林を蹴り飛ばす。

何メートルか吹っ飛ばされた大林は、背中であらへ一回転し、足を踏み込んでブレーキをかけた。

とっさに蹴りから身をかばっていた左腕をさすりながら、立ち上がる。

二人は向き合い、にらみ合ったまま動かない。

二つの激しい息づかいが、コンクリートにぶつかる波の音にかき消される。

「ぬぐう……！ ちくしょーめ……！」

窪井の低い声が波の音をかき消す。

「てめえなんぞに……！」

大林は「フー……」と、細長い息を吐き出して呼吸を整えた。

「まさかオレも、弱ったお前にここまでやられるとは思わなかった

……」

しばらく波の音だけが続いた。

風が、停泊している船のマストに当たって、ヒュオオオと鈍い音を出す。

その音の終わりを合図にするように、二人はほぼ同時に地面を蹴った。

「おおああああっ……！」

二つのおたけびが重なる。

急接近し、すれ違う拳、腕。たとえクロスして相打ちになったとしても、窪井のバケモノ的頑丈な肉体と、まだ人のレベルを超えていない大林の肉体。

どちらが倒れるかは、火を見るよりも明らかだ。

窪井の拳が先に、大林の横顔を打った。

だが、窪井は不思議そうに目を細める。

殴った感触が伝わってこない。

それは、大林が窪井の攻撃の速度に合わせて首を動かしていたせい。

大林の構えていた腕はフェイク。

彼はそのまま体を回転させて攻撃を受け流すと、窪井の背後へ回り、回転の速度を上乘せした強烈な肘を放った。

「！！！」

窪井は後ろへ体を反らせた後、ドンツと片膝を着いた。

大林は窪井から五歩ほど距離をとり、その背中に警戒する。

窪井に動きはなく、苦しそうに、それでいてどこか嬉しそうになり、息を吐いた。

「……大林……、さすがは、オレのライバルだ」

大林は大きな背中をにらみ付けた。

「ライバルだと？ バカを言うな。お前は“敵”だ」

窪井が「ハッ」と笑って、腕を動かす。

次の攻撃を想定し、大林は構えた拳に力を込める。

だが、窪井がレスリングコスチュームの、収納に便利な部分から取り出したのは、小さくて丸い白いボール。大林は即座にそれが何なのか理解した。が、すでに遅く、パシッ！とボールがはじける音とともに、視界を白い光が支配した。

閃光弾だ。

「あばよ、また会おう」

その言葉の後に、何かが海に飛び込む大きな音がし、大林は握っていた拳を下ろした。

「くそっ……！」

白が薄れて目は見えるようになったが、その視界に窪井の姿はなく、波と風の音だけが、虚しく耳に聞こえていた。

戦いの中で袖の一部が破れたローブを肩にかけ、大林は赤く染まった空を見上げた。

「ちくしょう……！」

大林はもう一度毒づいた。

この時、窪井が逃走したことにより、このセルヴオ世界はまた、新たな危機にさらされることとなる。

## 00 2：危機の始まり

「はあ……、はあ……」

窪井は冷たい鉄の壁に肩を預け、ぬれた体の上に羽織った自分のローブを握りしめた。

ローブの下にはレスリングコスチュームを装着しているが、今の彼の体は、もとの“人”である姿にもどっている。

「くっ……、大林のやろう……！ まさかあいつ一人に、ここまでやられるとは……」

全身から海水が滴り落ちる。

窪井は、デンテールの研究所 ミサイルの発射施設にいた。

大林との戦闘から脱した彼は、下水道のような隠し通路を使って、ここまでたどり着いた。

激痛に顔をゆがめながら、三人、グラソンとデンテールが戦った部屋の扉を開ける。

開いた天井から、黄色い月の光が差し込んでいる。機械だらけの部屋は、戦闘の後で派手に散らかっていた。

「まさかデンテール様まで倒されるとは……。あの三人、あなどれんな」

部屋の中央あたりで、窪井は足を止めた。

壁に、男がぐったりと、もたれかかっている。

窪井は男を見下ろすと、「フン」と鼻を鳴らした。

「グラソン……、こいつも、くたばったのか」

ピクリとも動かないグラソンを、とくに気にもせず、窪井は奥にある大きなコンピューターへ向かった。

ほとんどの機械は、穴が開いていたりショートしていたりして壊れている。そのコンピューターも例外ではなく、中の電気回路がショートしたおかげか、複雑な操作をせずとも壁の隠し扉がすでに半



分ほど開いていた。

「隠し部屋か」

窪井は薄ら笑いを浮かべると、歩を進めた。

誰かがいる

オレのそばに誰かがいる

敵？

(……………)

誰かがオレを支えている

誰かがオレを支えて……………、どこへ連れて行く？

敵？

(……………)

敵じゃ……………、ない……………？

(……………)

ガチャ。

ドアが開く音で、グラソンは目を覚ました。

白いベッド、明るい部屋、何も置かれていない机。

「……………」

彼はこの部屋に見覚えがあった。

「……生きていたのか、オレ……」

「生きていましたよ。危ない状態でしたけどね」

「!?」

グラソンは起き上がって、その声の人物を見た。

「お前は……」

つばの垂れた黒い帽子、詰襟の黒い服　　全身を黒におおわれた、細目の男。

「S A A Pか……。なんだ、生きていたのか」

「何を言っているんです。あなたが逃がしてくれたのでしょうか。あなたの助太刀がなければ、わたしはとっくに死んでいましたよ。元部下達に殺されて、ね」

「ははは……。そういや、そうだったな」

グラソンは部屋の中を見回す。

「……ここは、デンテールの城か」

「はい。あなた、三日も眠っていましたよ」

「三日……。もっと長く感じていた」

「案内人の話によれば、殺気にまみれたエネルギーをまともに浴びたらしいですね」

「……そのようだな。よく覚えていない」

グラソンは、またまくらに頭をあずけ、天井を見た。

宗萱は近くの椅子に腰をかけ、グラソンを見つめる。

一切の音はない。もっとも、この城内ではそれが普通なのだが。

「……ところで、人工島にウィルスのサンプルが残っていたはずだが……」

「あなたを発見した場所の隠し部屋にあったサンプルと資料なら、すべて回収しましたが？」

「そうか、それならいい。サンプルとそれに関する資料が、もしも先に誰かに回収されていたら、この世界は終わりだ」

安心したように息を吐く。だが、宗萱は少しも表情を変えないまま、言った。

「KEN 窪井、という男が、まだどこかで動いているようです。あなたはどうします？」

「……窪井が？ そうか、やはり生きていたか」

「目立った行動がなければいいのですが、危険性ありと判断した場合……」

「……」

グラソンは起き上がり、ベッドから立ち上がって伸びをした。

「それで？ オレを助けたということは、何か目的があるんだろ？」

ベッドに座って足を組んで、グラソンは宗萱を見た。

「あなたを助けたのは、単にあなたが無害だと確信したからです」

「ついでに、オレが知っている情報を聞き出す。ってことか？」

「……ええ、まあ」

宗萱が、四角い平皿に乗せて持ってきたカップに熱いコーヒーを入れ、一つをグラソンに渡して再び椅子に腰掛けた。

「いくつか、お聞きしたいことがあります」

「……」

グラソンはブラックのコーヒーを一口すすり、微笑した。

## 01・再び始まる戦い（前書き）

ややこしくなる部分があったので、案内人のセリフを、「~~~~」  
から「~~~~」に修正いたしました。

## 01：再び始まる戦い

「そんなことだろうと思ったよ」  
話を聞いたハルトキが、首を振りながら溜め息をつく。

港町の展望台は、赤い夕日に照らされていた。  
潮の香りに乗せた風が、髪を梳いて吹き過ぎる。

展望台には、小守真栄、<sup>マハエ</sup>吉野春時、<sup>ハルトキ</sup>遠藤京助以外に人の姿はなく、  
三人は海をバックにして手すりに寄りかかり、人目を気にすることなく案内人と話をしていた。

溜め息をつきたいのはハルトキだけではない。

「ここまで楽しませておいて、さあ帰ろうと思ったとたんこれだと、マハエ。」

「けっきょく、お前は嘘つきだ」

エンドーが大げさに溜め息をつく、今度は案内人の言い訳。

「嘘は嘘でも、これはやむを得ない嘘です。最初、話そうと思いましたが。ですが、あの場であなた達を怒らせるよりは、この世界で少しはいい思いをしてからですね……」

マハエが「もういい」と、案内人の言葉を制する。

「手口が卑怯なんだ、お前は。考えてもみろ、オレ達はいたいけない育ち盛りの思春期少年だぞ。それを無理矢理戦いの中に引っ張り出してよー」

「そうだそうだー！」と、ハルトキとエンドーも拳を突き上げる。

「何を言ってるんですか。ひと月前だって、見事にデントールを倒したじゃないですか」

「だからさあ、そういう問題じゃなくて」

「まあマハエよ。この野郎に何を言っても無駄だということくらい、

さんざんわかってきたはずだぞ」

エンドーの言葉に、マハエは口を開いたまま固まった後、ゆっくりと閉じた。

「よろしいでしょうか？」

「……………」

三人はうなづく代わりに沈黙した。

案内人と言い争うのは、無駄な体力を使うだけだ。

「KEN 窪井。正確にはまだ、彼は見つかっていません」

「何か手掛かりでも？」

ハルトキが訊く。

「ええ、手掛かりというよりは……、大きな動きがありました」

案内人の声が真剣になる。いたって真剣に。

「二日前、ここから西地方にある一つの町が消えました」

三人も真剣な表情になり、腕を組んで話の先を促す。

「人口は七十人程度の小さな町ですが、二日前にこの町に隕石が落下したそうです」

「さてさて、隕石だって？」

マハエが顔をしかめる。

「とりあえず聞いてください。その隕石自体の被害はほとんどなかったのですが……。その後、町の人口七十人の中の約五十人が、突如行方不明になりました」

マハエが「謎が解けた」と手を叩く。

「宇宙人来襲だ。きつとみんな食われたか、実験用に連れて行かれたんだ。くそつ、いよいよ大規模宇宙戦争の始まりか」

「真面目に聞いてください」

「真面目だよ？」

マハエが目を大きくして大げさに言った。

ハルトキがため息をつく。

「それで？　それが窪井とどう関係するの？」

「そうですね。“隕石”というのは目撃者の証言でして、実際にはそれが隕石だと確認されていません。それが隕石ではなく、ミサイルだったとしたらどうでしょう？」

「……………」

三人は黙った。

エンドーは思い出していた。前回彼を殺そうとした、クソツタレ町長のことを。

町長は隕石で死んだ。だがそれをたしかに確信したわけではない。思い返せば、あれは隕石ではなく、ミサイルだったようにも思える。この世界の住人達は、当然『ミサイル』なんていう兵器を知るはずがない。だから『隕石』が落ちたと騒ぎ立てていたのかもしれない。エンドーは口を開いた。

「ミサイル……。ってことは、まさかその行方不明者って」

ミサイルによる被害はほとんどなく、その後に出続出した行方不明者。そこから考えられることは一つしかなかった。

「ウイルス……」

三人同時につぶやいた。

「そうです。そしてそれができるのは、あのと島にいて、闘いから逃走した窪井以外に考えられません」

「それが手掛かりか……」

マハエが肩を落とした。

「確実じゃないな。それだけの手掛かりでオレ達を呼んだのか？」

「今回のあなた達の任務は、窪井の搜索と発見、および被害拡大の完全阻止です」

「つまりは、窪井を見つけ出して倒せってことだろ？」

エンドーが簡潔にまとめる。

「できれば生かしたまま、です。彼は最初からこの世界の住人ですから、デンテールとは話が違います。つまり、こちらの目的は、  
“デンテールの尻拭い”です」

それを聞いたエンドーは表情を和らげた。

「よかった、安心したぜ。殺せって言われたら断ってる」

「引き受けてくれますね？」

「どうせ選択肢はそれしかないんだろ。なら、さっさと終わらせよう」

マハエが伸びをして歩き出した。

「簡単に終わればいいのですけどね。問題はまだあるんですよ。」

まあ、詳しいことは明日話します。今日はこの町で宿をとってください」

「デンテールよりも厄介な存在でないことを、心から願うよ」

ハルトキが言った。

願いたい気持ちは三人とも、案内人も同じだった。

「宿代、<sup>ペオーラ</sup>15Pいただきます」

宿のフロントに硬貨を払い、三人は二階へ、階段を登った。

港町の西側にある宿は、安いうえにサービスがよい。一階には一人用の部屋が五つあり、二階には三人用の部屋が三つある。そして地下には浴場があるらしい。

フロントで渡されたカギで、部屋のドアを開けようとしたエンドーが、振り向いて言った。

「その前に風呂だ。風呂入ろう！」

一日中遊びまわったせいで、汗で汚れてへとへと三人。浴場で



疲れを癒そうというエンドーの案に、マハエとハルトキは即賛成した。

「わーい、大浴場だ〜！」

小学生にもどったように、はしゃいで廊下を走る三人。

深く帽子をかぶった少年とすれ違い、階段を下りていった。

「……………」

一階から上ってきた帽子の少年は、しばらく立ちつくしてから、帽子の前の部分を持ち上げて、紫色の短髪を覗かせた。

「間違いなく、ターゲットだ……………」

ニヤリと笑うと、静かに踵を返した。

## 02：またこの世界の朝

どの世界でも、力がすべてを支配するものだ。頂点に立ち、すべてを見下ろす者が必要なのだ

誰の手も届かぬほどの高みに存在するたった一人がな

オレの力でセルヴオどもを改造できなくとも、方法はある。  
お前ら、これが何かわかるか？

ミサイルだよ

オレが開発したウィルスに感染したセルヴオどもは、思考操作によって、みなオレの忠実なしもべとなる

忠実な、しもべとなる

しもべとなる

オワツティナイ

「おはようございます。起きてくださいーいー」

「……………」

「……………」

「……………」

熟睡。

「朝ですよー！ おーきーてーくーだーさーいー！」

「……………」

「……………」

「……………」

熟睡。

案内人は、やれやれとため息をついて、小さくつぶやくように言った。

「…………カレー」

「…………！」

三人の鼻がヒクツと動く。

「…………ハンバーグ」

「…………！！」

「…………クリームシチュー、オムライス、エビフライ」

「…………！！！！」

「ラーメン、ギョーザ、チャーハンに、たこ焼き、お好み焼き、デザートはコッヒーゼリ〜」

三人の目がバツと開いた。

「…………メシ…………！！」

そして音の速さで部屋のテーブルに着席した。

「おはようございます」

案内人が改めて言う。

「朝メシは？」

「この宿で朝食は出ません」

あいさつそつちのけのエンドーに、案内人が冷たく即答する。

「起きたばかりで申し訳ありませんが、今回の任務の詳細を説明させていただきます」

椅子から立ち上がる三人。

「昨日も言ったとおり、今回のあなた達の任務は、窪井の捜索と発見、そしてウイルスによる被害拡大の完全阻止です」

部屋から出て行く三人。

「そこで、まずはある場所へ行ってもらいたく　　ちよつと、まだ話は　　どこへ行くんですかー!?」

「話は朝メシ食ってからな」

マハエがひらひらと後ろに手を振る。

「……………」

案内人はそれで黙った。再び戦いを強いられたにも関わらず、三人とも案外元気だったことにホッとしていた。

「食った食った」

宿から少し歩いた場所にある、この港町唯一の食堂。三人は楊枝をくわえて、満足そうに腹をさすりながら出てきた。

「さすがは港町だ。海鮮料理は最高だな。なあ、エンドー」

「ああ、あのエビフライ定食は絶品だった。マハエの焼き魚定食もつまそうだったな」

「キミ達、よく朝から定食なんて腹に入るね」

「　　て、ヨツくん、お茶漬けて……………」

朝食を終えた三人に、案内人が咳払いをしてしゃべりだす。

「ようやく本題に入れますね。今回のあなた達の任務は」

「何度も言わなくてもわかっているって。それで、どこへ行けばいいんだ？」

「理解力があつて助かります、エンドーさん。そうですね、町の東側まで散歩をしましょう」

「散歩って　いや、お前の言うことだから、何か意味があるんだろうな」

マハエがうなずいて、三人は並んで歩き出す。

港町は、海に沿った道の両側に、家や店などの建物が並んでいる、長細い形の町だ。

案内人いわく、人口は百二十人程度。人間世界と比べると、一つの町としてはかなり少ないが、これが普通だという。

規模は小さいながらも、活気あふれる町。

「窪井は何のために、あのウイルスを放ったのかな？」

メインストリートを東へ進みながら、ハルトキが疑問を口にする。

「デンテールは復讐のためにウイルスをつくった。でも窪井は」

「まあ、あの“キモイ筋肉男”が、あのウイルスがどういう物かを知らずに放った、なんてことはないだろ」

マハエが言った。

「デンテールと関わってしまったばかりに、ただの悪党が、いつきに極悪人に昇進したわけだ」

エンドーが「ハッ」と笑った。

「笑い事ではないですよ。デンテールのせいであな達は、まだ戦いの連鎖から抜け出せないのですよ」

「案内人、それは違うよ。ボク達がすべきことはデンテールの尻拭いじゃない。“制作者の尻拭い”だよ」

「それは……」

案内人は少し悲しそうに、

「あまり、制作者を責めないでください。これはけっして、あの人が望んだことではないんです」

「……わかってる。だから、オレ達が代わりに尻を拭ってやるんだろ」

マハエの言葉に、案内人は「はい」と返した。「ありがとう」の意味を込めて。

いつの間にか、周囲に家屋が少なくなっていた。

「あそこです。あの赤い屋根の小屋に入ってください」

案内人が示した建物は、マハエとハルトキには見覚えのあるものだった。

「城へのテレポート装置？ 城へ行けつてののか？」

マハエが訊く。

「はい。城は爆破されずに残っていたので、デンテール亡き今は、打ってつけの拠点です」

「拠点つて、誰の？ オレ達？」

「ええ、“我々の”拠点です」

マハエの質問に、案内人は意味ありげな言葉を返した。それ以上の質問はなしに、三人は素直に指示に従った。

一人ずつ光の空間を移動し、直前とは全く別の場所へ降り立つ。

空気と気温もがらりと変わり、薄暗かった小屋から明るい室内へ。そこはマハエとハルトキには、見覚えのある場所。

「やっぱこれには慣れないな……」

マハエが頭を押さえて壁にもたれる。

「デンテールの城……。大林さんと一緒に脱出するときに来た場所だよな？」

ハルトキが確かめるように言う。

そこはたしかに、城の屋上テラスから続いていた建物の中にある、グラソンの教えた『装置の部屋』だ。だが、以前とはどこことなく雰囲気が違う。

「おかしいな。なんだか人の気配がするんだけど？」

ハルトキが案内人に尋ねるように言う。

「詳しいことは後ほど、です」

「後ほどねえ……。まどろっこしいのは好きじゃねえんだけどな」  
「やれやれと言いながら、エンドーがドアを開けた。」

以前は無駄に壁で隔てられていて、装置以外はまるで空っぽだったが、今は命を得たように明るくなっていった。天井にいくつもある電灯の効果はもちろん、壁際に置かれた広葉樹が、さらにそれをきわだたせている。

三人が感心した顔をしていると、一人の人物が歩み寄ってきた。

「お待ちしました。こちらへどうぞ」

その人物の出で立ちを見た三人はぎょっとした。

真っ白で派手な模様をした鎧を着て、腰には片手剣、頭には、鎧と同じで真っ白な三角型の兜をかぶっている。そのせいで目は陰になっていて、一見　いや、完全に怪しい外見だ。左手のグローブの甲に埋め込んである青い宝石がキラリと光る。

マハエよりも高い身長とその声から、男だということがわかる。

目を点にする三人。だが、男は事務的に、彼らを奥へと先導する。

「案内人……、いつたい彼は……」

マハエが目を点にしたまま尋ねる。

「驚きましたか？　彼は新型のS A A P。前回のS A A Pを、この世界の情報を組み込んで改良した、『高性能人工セルヴオ』です」  
「驚いたよ、いろんな意味で。今回は“死神”じゃないんだな」

「さすがに、あのデザインで町をうるつかねれば、大騒ぎになりま  
すよ。今回はS A A Pも表の世界を堂々と行動しますからね。まわ  
りに溶け込むデザインにしたぞ、と制作者が自慢げに話してました」  
エンドーが指で耳をほじって、

「まわりに溶け込む 何だつて？」

「……あまり細かい部分を突っ込むのはやめてください」

「いやいや、細かいか？ ぜってー目立つよ！ 一緒に歩きたくね  
ーって！」

「まあまあ、エンドーちゃん。突っ込んでたら先続かないから、そ  
のへんで」

マハエが笑顔で止めた。

不満げに頬を膨らませて、まだ何か言いたそうにしているエンド  
ーの横で、ハルトキがひとり冷静に質問する。

「ところで、S A A Pはわかったけど、いったい何なの？ ここは」

「はい。ここは対モンスター組織 我々の本部です」  
そして一息置く。

「ようこそ、『白剣』<sup>シラタチ</sup>本部へ」

案内人は楽しそうに言った。



### 03：シラタチ

三人が白い鎧のS A A Pに案内されたのは、装置があつた部屋から、廊下を少し進んだところにある『休憩室』だつた。

途中、先導するS A A Pと同じ格好をした人物、二人とすれ違つた。どちらも足を止めて頭を下げたので、三人は自分達が彼らにとって“目上”の存在だということを感じ取つていた（感情の見られない事務的な対応なのだ）。

「量産型のS A A Pは、感情が乏しいようです。完全なセルヴオとはいえない存在ですね」

案内人が言つていた。

休憩室の畳の床にあぐらをかいて、目の前のテーブルに置かれた茶をすすりながら、三人は案内人の説明を聞いていた。

「ひと月前に起こつたモンスター出現の件ですが、これまで前例がなかつたようで、この世界の警察 一般に『守民軍』と呼ばれ、この世界の中枢的存在なのですが、彼ら守民軍にも、やはりなかなか手が出せなかつたそうです。そもそも軍は人を相手に戦う組織です。モンスターという存在には対処が難しく、どうにか殲滅は成功しましたが、軍人と一般民、確認されているだけで合わせて三十五名が死亡しました」

「三十五人……、むしろ被害がそれだけでよかつたじゃん」

エンドーが言う。

「そう言つてしまえばそうなのですが、モンスターが出現したのはこの地方の、この辺の地域だけでしたので、被害は大きかつた、とも言えます。実際、モンスターの集団によって、小さな町が二つ潰されました」

ハルトキが「ふむ」とうなずく。

「なるほど。モンスターの勢力を抑えつけるのに、軍だけでは力不足だったと。とくにこの世界は、連絡の手段も移動の手段も満足ではないから、なおさら」

「それと、一番深刻だったのは、戦闘員不足です。人相手ではない強敵と戦うだけの能力を持った者が極端に少なかったと」

「たしかに、剣や槍なんかで簡単に勝てる相手じゃねえからな」

エンドーが言った。

マハエも、

「オレ達には魔力があるから、まだいいけど」  
「そこで気がついた。」

「ああ、そうか、だからこの組織」

「そうです。これ以上のモンスターによる被害を抑えるためには、守民軍の他にそれ専門の組織が必要です。この我々の組織シラタチ『白剣』は、そのために設立されました」

「……表向きはでしょ？」

ハルトキが言う。

「ボク達の最大の目的は、デンテール　もとい、制作者の尻拭いでしょ？　表で堂々と行動するには、そういう組織の一員だという理由が必要だった」

「……たしかにその目的もあります。ですが、本来の目的ではありません。純粹に、この世界を守っていかうというものですよ。軍の直属ではないので、彼らの認定も必要でしたが、モンスターの殲滅には、S A A Pも大いに貢献しましたから、楽勝でした。あちらの上層部の方々は意外とかしこいですよ」

その話を聞いたマハエは大げさに何度もうなずいて見せた。

「ほほう？　それじゃ、窪井の件もS A A Pに任せておけばいいんじゃないの？」

「……………」

案内人は黙った。それは「たしかにそのとおりなので言い訳に困った」というわけではない。

「昨日言いましたよね。問題はそれだけではないんです」  
「……………」

「今回、戦闘用S A A Pは、第三部隊まで存在していました。ですが、一週間ほど前、突然、第一部隊との連絡がとれなくなったんです。一つの部隊が丸ごと、消えたのです」

「それって……………」

苦笑いするハルトキ。

「窪井の仕業、という可能性が高いです。新型の戦闘能力は旧型の倍以上ですよ」

「それを消せるほどの力が、窪井にはある？」  
マハエが拳をにぎる。

「ですから、むやみにS A A Pを投入するのは、危険なのです」

「だからオレ達ってわけか」

エンドーがため息をつく。そしてお茶を飲み干した。

「何にしても、戦うしかない！ そうだろ？」

それを聞いたマハエが拍手する。

「おお、エンドーちゃんが頼もしい！」

「けど、湯呑みをにぎる手が震えてる」

ハルトキが付け加えた。

「『<sup>シラタチ</sup>白剣』は、赤く染まらない真っ白な剣。平和をつくる、汚れなき剣です。あなた達はシラタチの、三人部隊『銀の矢』として動いてもらいます！」

「(さ…… 三人部隊……!)」

三人はぐつと、拳をにぎりしめた。  
目を輝かせて……。

「やってやるよ!」

マハエが拳をあげた。

「戦って、勝つ! 単純な話だ」

エンドーが拳をあげた。

「ボク達にできることなら」

ハルトキが拳をあげた。

力強く掲げられた三つの拳に、迷いはない。彼らが覚悟したのは『死』ではなく、勝利へ向かって突き進むこと。

結束の三本の矢。力を合わせれば、どんな困難でも乗り越えられる。

「えー、それでは、さっそく任務です」

「……………」

三人はピタリと固まった。

拳がゆるゆると下がる。

「計ったな……?」

マハエが言うが、遅かった。

「いやあ、やる気になってもらえて助かりますよ、ほんと。今日はまず、昨日話しました、“隕石”が落ちた町へ行ってもらいます」

「……………」

「先ほどのテレポート装置で、その町の近くまで移動できますから。ささ、お茶を飲み干して、靴をはいて、レッツゴーです」

「……アイアイサー……」

この建物には、休憩室のほかに医務室も設備されている。一応、城全体が『シラタチ』という組織だが、本部と呼べるのはこの最上階だけ。それよりも下は、“異”テクノロジーのかたまりである本部を隠す、『仮本部』となっていて、十数人のS A A Pが受け持っている。

「……それにしても、一ヶ月前とはえらく違うな」

装置の部屋への短い廊下を進みながら、マハエは観察するようにそこかしこを見回していた。

「新型S A A Pがこちらへ送り込まれたのは、あなた達が人間の世界へ帰った翌々日でした。一ヶ月もあれば、城を改装するくらいS A A Pには十分ですよ。それに、もっとすごいものも用意されています」

「へー、楽しみにしておこー」

マハエは棒読みで言った。

### 装置の部屋

「テレポートは、装置から装置へ行き来できるのですが、移動先の装置に登録してある人物しか、その場所へは移動できません。ですから、他の誰かが装置を使って本部に忍び込むという心配はないです」

説明を聞きながら、まずはエンドーが、白い光を放つプレートに立った。

装置を使って平然とした顔をしているのはエンドーだけだったの  
で、マハエとハルトキは先陣を譲った。

「まずは、となりのディスプレイで、移動先を指定してください」

「おいおい、変な場所に飛ばすなよ？」

ディスプレイの下にあるスイッチをいじっているマハエに、エンドーが冗談めかして言う。

「任せとけて、この『地獄の三丁目』ってところでいいんだよね？ 案内人」

「はい。そこでオーケーです」

「まてこら」

エンドーがプレートから降りる。

「冗談だよ。この『ソレイアド』ってのでもいいんだよね？」

「はい」

「ソレイアドって何だ？」

エンドーが訊く。

「ここから西にある地方のことを、『ソレイアド地方』というんです」

「ほらエンドー、プレートに立て。本当に地獄の四丁目に飛ばすぞ」「なんかレベルアップしてるっ!？」

マハエは笑いながら、エンドーが再度プレートに立ったのを確認すると、上下に動く大きなレバーを下げた。

三人全員がテレポートした先は、港町のものとまったく同じ、レンガの小屋の中だった。

だが外に出てみると、そこはまったく違う場所だ。

黄色い荒野の中にぽつんと建つ、赤い屋根の小屋。

「ここは『ソレイアド地方』。港町と本部の城があるのは、ここから東の『フーレンツ地方』です」

案内人が説明する。

「西へ少し行けば、目的の“町” だった場所に到着します。

もうほとんど消えたも同然の町ですから」

西側は荒野が広がっていて、そう遠くない場所に、本当に小さな

町がぼつんとある。東側を見ると遠くに高い山があつて、北と南には水平線がうつすらと見える。海に挟まれた細長い地形のようだ。

「この世界は、一つの大陸が主となっていて、それが五つの地方に分けられているのです。本部がある『フーレンツ地方』、今あなた方がいる『ソレイアド地方』、フーレンツ地方の東に『サラバツク地方』、フーレンツ地方の南に『クラウルル地方』、そのさらに南に『トーネリカ地方』。このソレイアド地方は、中でも一番小さく、荒れている地方です」

「どうしてこんなに荒れてるのかな？」

町を指して植物のない地面を踏みしめながら、ハルトキが首をかしげる。

「理由はわかりません。ですが、ずっと昔からこのような状態らしいです」

「ん〜、いい気分じゃねえな。ここ空気は」

エンドーは眉間をしかめ、荒野のあちこちに目を向ける。

「……生暖かい風だ」

#### 04：見覚えのある顔

町は完全に息吹を失っていた。

ほんの数日前までは、小さいながらも、活気にあふれていたであろうメインストリート、酒場、店　　すべてに生氣はない。

建物自体は最近まで機能していただけに、少しも荒廃してはいない。それがかえって、全体に奇妙な寂しさをかもし出している。

だが完全なゴースタウンというわけではなく、人の姿もあるにはある。

ぼー、と立ちつくす人。座り込んでうつむいている人。

「町に残された人々です。娘、息子を失った親。夫を失った妻。中には、両親を失った幼い子供もいます」

「ひどいな……」

マハエは苦い顔をした。

会う人会う人、目が死んでいる。

町民の半数以上が、突然姿を消したのだ。そのショックは計り知れない。

「消えたも同然の町……　ね」

ハルトキがつぶやいた。

「消えた人々は、守民軍が搜索しています。しかし、見つからないでしょう」

「人々は窪井の配下にある、か」

ハルトキが「ふむ」とあごに手を当てて、考えるしぐさをする。

「支配した人達を使って、窪井は何を仕掛けてくるのか……」



「……………」

マハエは、町の入り口を見つめて泣いている女の子を見ていた。案内人が言っていた、両親を失った幼い子供とは、この子のことだろう。父さん、母さんの帰りを信じて、ずっと待っているのだ。

「どうにかできないかな……………」

「あなたがすべきことは、ここのような“悲しい町”を、これ以上生み出させないようにすることです」

「わかってる。けど…………、いや、そのとおりだよな。オレ達が嘆いたってしかたがない」

「そうだ。オレらは、目に見えていることしかできないんだからよ」  
エンドーが言った。

「さて、まずは隕石が落下した場所まで案内します。落下地点は、町の中心。小さな町ですので、ここからすぐですよ」

「近づいて大丈夫なの？ ボク達が感染したり…………」

「心配ありません。放たれたウイルスは、空気中では短時間で死滅します。それに、セルヴオではないあなた達には効き目はないですよ」

「そう。よかった」

ハルトキはほっとした。

「こら、キミ達！ 何をしている！」

三人の前方から、木製の鎧を装着して腰に短刀を装備した、守民軍兵とおぼしき男が一人歩いてくる。

「この町の住人ではないな。ここで何が起こったかは知っているだろう？ 遊び半分でこんな場所に来るんじゃない！」

三人と同じく、この町へ調査に来た軍の一人だろう。

ハルトキが手を前で振りながら説明する。

「すいません、違うんです。ボクら三人は『シラタチ』の一員で

「シラタチ？ あっはっは、バカを言うな。お前らみたいな子供がか？」

「そうです」

「ふん。さっきも向こうでシラタチと名乗るやつを二人見かけたが、あいつらは何がしたいんだか。消えた町民の捜索をしているように見える。だいたい、対モンスター組織が出しゃばる幕じゃないんだ。お前らもくだらん嘘はやめて、とっとと家へ帰れ！」

軍兵は三人の肩を押し、追い払おうとする。

「ちょ……、本当なんですって！ マジ」

マハエはわかってもらおうとするが、軍兵は聞き耳を持たない。

「帰れ帰れ！」

「わからず屋め！」

三人が本気で抵抗しようとしたその時

「う、うわああ!!」

男の人の悲鳴が響いた。

「何だ!？」

軍兵が、はっと町の入り口を見る。三人も振り返って見た。

真っ黒なマントで全身を覆った人物が、入り口のところ立っている。

三人はギクリと、身が固まる感覚を覚えた。

黒いマント 三人には吐き捨てたい記憶しかない。しかもそのマントが顔につけているのは、ドクロの仮面。

「対S A A P……!？」

その姿はまさに、前回三人を苦しめた改造プログラム、対SAA Pそのものだった。

なぜアレが？

今はそれどころではない。対SAA Pは腰を抜かしてしまった男の人に、今まさに剣を振り下ろそうとしている。

「 まずい！」

駆け出したのはマハエ。対SAA Pが剣を振り下ろす。

「（まだ間に合う！）」

マハエは片足から、凝縮した衝撃を放ち、いっきに加速した。

ガキンツ！ と、剣がはじかれる。

「間に合った！」

次に、剣をはじめいた肘を対SAA Pの胸に叩き込む。

「（しまった！ そういえば……） あれ？」

マハエは首をかしげた。

足音が近づく。いくつもの足音が。

大勢の対SAA Pが、次々と町へ入ってくる。

「どういうことだ？ 何だこいつら！」

軍兵がわめく。

「くそっ！」

ハルトキとエンドーは、対SAA Pの進攻を阻止しようと、駆け出した。

さっきまで立ちつくしていたり、座り込んでいた町民達も、悲鳴を上げて逃げ出す。

剣をはじめかれ、肘を叩き込まれた対SAA Pがよろめく。

ハルトキとエンドーも戦いに加わったが、次々と押し寄せるやつらを止めることはできない。

「こいつらの弱点は仮面だ！」

マハエは前の戦いを思い出し、地面に転がった剣を拾い上げると、柄頭で仮面を打った。

仮面にヒビが入り、ぼろぼろと崩れる。

「!?」

その下にあつた顔を見て、マハエはたじろいだ。

人の顔。茶髪で鼻の高い男の顔。だがその眼は、異常なほど黄色に輝いている。

「まさか……！」

マハエは対S A A Pの頭部を覆っているフードを除けた。

「ライル……!?」

後ろにかばっていた男が、驚いた声を上げる。

「やっぱり……!!」

マハエは衝撃波で対S A A Pを転倒させると、ハルトキとエンドーに向かつて叫んだ。

「ヨツくん、エンドー！ 攻撃するな！」

言つて、ふと後ろの軍兵を振り返った。

軍兵はおびえる女の子を後ろに、短剣を対S A A Pに向けている。

「賊め……!! それ以上近づけば容赦はしない!!」

「殺しちやダメだ!!」

マハエが叫ぶ。

「こちらの命令に背く場合は、止む終えん！」

「そうじゃなくて……!!」

軍兵は短剣を逆手に持ちかえ、敵の首を掻っ切るように振った。

が、マントから素早く伸びてきた手に腕を掴まれ、締め上げられた。そしてそのまま横へ放り投げられ、頭を打って気絶した。

ハルトキが目の前の敵に『金縛り』をかけ、女の子に向けて『メイス』を振りかぶっている対S A A Pに飛びついた。

そのとき、締め上げる対S A A Pの仮面とフードが取れ、素顔があらわに

「え……！？」

ハルトキは目を見開いた。その顔に見覚えがあったからだ。茶髪リーゼントの不良の顔に。

「ヨウ、ハルトキ……」

対S A A Pがニヤリと笑った。

「なんで……？」

「ヨツくん！ こいつらは対S A A Pじゃない！」

マハエが叫ぶ。

「こいつらは、この町で行方不明になった町民達だ！！」

ハルトキは力をゆるめた。

「そんな……」

“ 田島弘之の不良 ” “ ソウシ ” が、ハルトキを振り落とし、メイスを構えた。

「消エトケ」

ハルトキは驚きとショックで動けなかった。『動体視』で、ゆっくりと自分の頭に振り下ろされる凶器を呆然と眺めていた。

「 ソウシ！！ 」

一筋の風が吹いた。

誰かがソウシを横から押し倒した。

朱色の髪と灰色のローブ。その人物はソウシとともに地面に倒れ、メイスを取り上げると、彼の腕を後ろへねじって抵抗を防いだ。

「何をしているんだソウシ！」

メイスを投げ捨て、男が叫ぶ。

聞き覚えのある声で、ハルトキは我に返った。

「ハル！ 無事か！」

「……大林さん……」

ハルトキは驚きの顔を微笑みに変え、男の名を呼んだ。

## 05・黄色に染まって

「黒い黒い黒い……。真つ黒集団か、気持ち悪い！」  
エンドーが悪態をつく。

「言うなれば『黒猫集団』というところか」

マハエが言うと、エンドーが微笑した。

「『黒猫』か、そりゃいい。しかし、この黒猫ども、全員ウイルス感染者つて……。それじゃ、どうすりゃいいんだ!？」

一人の対S A A Pもどき 『黒猫』を押さえつけながら、マハエを見る。

「まともに攻撃できないんじゃない……。とりあえず気を失う程度に！」

「わかった!」

エンドーが腕を振り上げ、『黒猫』の後頭部に向けて手刀を大きく構えた。

「まてまてまて!! やつぱお前は攻撃するな! 一切するな!!」

「オレを信じろ」

「やめろ! お前は自分が思っているほど器用じゃないんだ!!」

「じゃ、どうすりゃいい?」

「……………」

その間も、『黒猫』達は続々と町に侵入し、あっという間に十人をこえた。

ハルトキが『金縛り』の連射で縛っていくが、数が多すぎる。

「だめだ、抑えきれない……………」

すぐに魔力切れで膝をついた。

敵の数はいつの間にか十五人に増え、動けなくなつた仲間の横を

素通りして前進する。

「ハハハハハ……！　ボス、何ヲシテイルンデスカ。放シテクダサイヨ」

「ソウシ……！」

大林は歯を食いしばり、笑うソウシを見下ろしていた。

「ちっ！　すまん、ソウシ！」

大林はソウシをいったん解放し、振り向いたところで腹を殴って気絶させた。

「ハル！　いつたい、どうなったってんだ！？　なぜこいつらは…

…」

「……………」

ハルトキは何も答えることができない。「これは窪井のしわざです」と彼に言うべきか、迷っていた。

「まあいい。今はこの悪状況を打破するのが先だ」

大林は立ち上がり、群れの前に立ちふさがった。

『黒猫』はそれぞれが何かしらの武器を持ち、それを掲げて迫り来る。

「オレがこいつらの相手をする。ハル達はみんなを避難させる」

「でも」

「いいから早く！」

大林は構えた。

敵の数は多い。しかも相手は得体の知れない不気味な連中だ。だが明らかなが一つある。武器の構え方、足取りから、そのほとんどが戦闘慣れしていない素人だということ。

すきは大きい。

「（　　）いける！」

そう確信し、足を踏み込んだとき、



「さて、こいつを使え」

大林の足元に、丸く束ねてあるロープが投げられた。大林は振り向く。

二人の男が、ロープを担いで歩いてくる。

一人は全身を黒で包んだような服装の小柄な男。もう一人は銀色の長髪。紺色のノースリーブシャツから伸びている腕は、茶色肌で筋肉質。

「宗萱さん！ グラソン！」

マハエが二人の名を呼んだ。

「ドクロの仮面に、黒いマントですか。たしかに、完全に対SAA Pを模した姿ですね」

「間違いない。出で立ちはどうであれ、こいつらは感染者だ」

二人はのんびりとした様子で、いや、冷静に相手を分析している。「……！」

そちらに気をとられていた大林だが、目の前の殺気に気付いて身を屈めた。

そのまま足元のロープを掴むと、低い姿勢のまま『黒猫』の背後へまわり、腕、胴を縛る。その近くにいたやつも同じように縛り、次に移る。

「オレたちも行くぞ」

「ええ」

グラソン、宗萱もロープを構えた。

数分後には、その場にいたすべての『黒猫』は行動不能となっていた。

最後に大林が自らの手でソウシを縛り、全員が一息ついた。

「大林さんまで来ていたなんて……。なぜここへ？」  
包帯でかすり傷の処置をしながら、大林は答える。

「……オレはソウシにちよっとした“使い”を頼んだ。この地方に滞在している知り合いに、届け物があつてな。だが、やけに帰りが遅い。そんなとき、隕石が落下して何人も行方不明になったという話を聞いた」

「それで心配になってこの町へ……？」

「そうだ。で、さつき、隕石が落下したという場所で、この“シラタチの二人”に会ったわけだ」

親指で宗萱とグラソンを指す。二人も負った傷の手当をしていた。  
「シラタチ……、あの人達も……？」

「……だが、どうしてこんな……」

大林は苦い顔でソウシを見て、拳を握った。  
ソウシは黄色い眼で、大林をじっと見つめてニヤニヤと笑っている。

ハルトキには、これがあのソウシだとは、信じられなかった。大林に忠実な、『田島弘之』の一員ならば、大林を目の前にして、こんなふざけた顔はしないはずなのだ。

まだ『田島弘之』の一員ならば。

「二十一人……、これで全員ですか」

手当てが終わり、宗萱は「もういませんよね」と見回してから、縛ってまとめた『黒猫』集団に目をやった。

全員、仮面をとられ、素顔をさらしている。

「この町で行方不明になった人達に間違いありませんね？」

宗萱が残っていた町民の一人に尋ねる。

「ああ……、間違いないです……。しかし、なぜこのような……」

『黒猫』達は、縛られてからは大人しく、抵抗はしない。

「どうやら、しゃべることはできるみたいだな。おい答えろ、お前らのボスは？」

グラソンが一人の目の前にしゃがみ、黄色い眼を覗き込んだ。

「……何モ話スコトハデキナイ。ソレガ命令ダ」

「ソウ、命令」

「命令ヨ」

「アノ方ノ命令ニハ、逆ラエナイ」

男、女 中にはマハ工達と同じような年齢の男女もいる。その誰もが口々に言う。

グラソンは「フン」と鼻を鳴らした。

「あの方”ねえ……”」

大林が握っていた拳で膝を叩く。

「どうということなんだ!? 『あの方』ってというのは誰なんだ!? 教えてくれ!!!」

「………」

「……おい、ソウシ! お前なら何か言ってくれるよな!? ソウシ!」

「ボス、モウアナタハ、オレノボスデハナイ。オレノボスハ、『アノ方』ノミ」

「……くっ!」

大林はもう一度、宗萱、グラソンと三人のほうを向いた。

「教えてくれ……! 頼むっ……!!!」

その声はかすれ、力を失いかけていた。

長い沈黙。その間、大林はずっと頭を下げ、言葉を待っていた。

だが、沈黙の果てにグラソンの口から出た言葉は、彼の期待を裏切った。

「……教えることはできない。あんたのためでもある」

「……………」

「グラソン……………」

ハルトキはグラソンを見た。

たしかに、大林に真実を話せば、確実に彼もこの戦いに巻き込まれる。いや、自ら飛び込んでくるだろう。デンテールの尻拭い。制作者の尻拭い。いくらそこに窪井が絡んでいたとしても、もともとこの世界に住む者には縁があつてはならないものだ。それに、一つを知ってしまったえば、隠し通さなくてはならない重要なことも知られてしまう。窪井がこの世界とは別のものに関わってしまったこと、三人が住む世界のこと。

グラソンもそれはわかっているようで、強い決心の目を大林に向けている。

だが、これで大林があきらめるわけがないということも、グラソン、宗萱や三人にもわかっていた。

大林も、同じく強い決心の目を、グラソンに向けていた。

「……………覚悟はできているのですね」

にらみ合った形の二人に、宗萱が割って入った。

「なっ、宗萱……………!!」

「グラソン、彼は自分の仲間を探してここへ来たのです。それに、この戦いと完全に無関係というわけではないようですよ。すべてを話したほうが、彼のためなのでは？」

「……………」

グラソンはため息をついて肩をすくめた。そしてその場を宗萱にゆずる。

「すべては教えられませんが、真実をお話ししましょう」



## 06・三種の生命体で

シラタチ本部の『休憩室』

ソレイアドの町で合流したメンバーは、一つのテーブルを囲っていた。

その中で大林は一言もしゃべらず、出された茶を飲みもせず、宗萱の話に耳をかたむけていた。

「我々の目的は、デンテールの出現によって発生した、この世界の危機を浄化すること。そしてこの世界を守ること。そのために我々が設立したのが『白剣』<sup>シラタチ</sup>という組織です」

宗萱はそれまでの経緯を話して聞かせた。

デンテールという脅威の存在。彼が進めていた恐ろしい計画。それを阻止したこと。そして宗萱、グラソンが立ち上げた組織、『シラタチ』。

「そのデンテールというやつが、ウイルスをつくって世界を乗っ取るうとしたのはわかった。それで、そのウイルスを使ってあの町での事件を起こしたのは……、窪井なのか……？」

宗萱はうなずく。

「我々がウイルスのサンプルを回収する前に、窪井が一部を持ち出していたのです。それに関する資料も一緒に」

「そうか……」

大林はただ一点を見つめ、表情に怒りをあらわにしていた。

同時にその怒りは、自分にも向いていた。何の罪もない町の人々を、ソウシを狂戦士に変貌させた窪井、人工島で彼を逃がしてしまった自分に。

あのとき、無理をしても彼を追っていれば、もしくは、このよ

うな事態を防ぐことができたかもしれないと。

「自分を責めても、どうにもならない」

グラソンが言った。

「わかっている。だがオレはソウシを……」

「現在、ウイルスを殺すワクチンを開発中です。完成すれば、窪井のしもべとなった町の人々、あなたの仲間も元にもどせるはずですが、宗萱が茶をすすった。」

「さいわい、窪井が持ち出したのは、プロトタイプ試作品のサンプルだ。伝染はせず、空気中では短時間で死滅し、確実に発症するわけではない。デントールが放とうとしていたものは、それを改良した完成品だったが、窪井が完璧なウイルスを作り上げるということは、ないだろう」

しかし、放っておくと被害は少しずつ拡大していく。

「問題は、どうやって窪井を見つけ出すか、だ」

そのとき、ドアがノックされ、S A A Pが入ってきた。

「報告、守民軍ソレイアド支部への、感染者移送が完了しました」

「ご苦勞、監視にS A A Pを二人ほど送れ。何かあれば連絡しろ」

「了解しました。それと、これを」

S A A Pが白い封筒を差し出した。

「下のフロントに届いていました。中は確認していません」

グラソンが受け取ると、S A A Pはお辞儀をして出て行った。

ハルトキが質問する。

「感染者達は今、軍へ？」

「ああ、牢に入れて監視させている。こっちで管理したいところだが、さすがに、あの大人数をここまで連れてくるのは無理だ。軍は各地方に支部を持っているし、人手もある。あまり協力的ではないがな」

グラソンは封筒を開いて、便せんに目を落とした。

「……………」

「何が書いてあるんです？」

宗萱に便せんに渡し、グラソンはため息をつく。

「…………厄介なことになった」

「…………これは」

全員が宗萱を見る。

「忠実なるしもべは『黒き魔物』に従い、世界は赤く染まる。

タイムリミットは四日だ」

便せんに書かれている文字はそれだけで、文末に黒いトカゲが描かれている。

「窪井か…………、あの野郎…………！」

「大林、空気が震えているぞ、殺気を抑えろ」

大林がギツと、グラソンに目を向けると、放っていた殺気が彼に集中する。

「…………すまん。どうかしてるな、オレは…………」

大林は心を鎮め、一瞬でも殺気を向けてしまったグラソンに謝罪するが、彼はそ知らぬ顔。

険悪な空気をごまかすように、ハルトキが口を開く。

「で、でもさ、タイムリミットってどういうことかな？」

だが、グラソンは微塵も気にしている様子はなく、

「タイムリミットは四日、そしてこの文章から、おそらく次のミサイルをどこかに落とすという予告だろう」

エンドーは同感し、また、そこから生じる疑問に首をかしげた。

「んー、なぜ窪井はわざわざこんな手紙を？」

これに答えたのは大林だった。

「…………あいつは楽しんでいるんだ。タイムリミットまでに自分を見つけられるか、とな。根っから腐ったやつなんだよ、あいつは」



「急がなくてはいけませんね。難しいでしょうけど、軍は当てにならないでしょうし、今のニュートリア・ベネツへに対抗できるのは、おそらく我々だけでしょう」

大林は不思議な気配を感じ、宗萱の目を見た。

この感覚は何なのか……。宗萱、グラソン　自分を取り囲む人物達が放つ、よくわからない力に、自分の心、魂の中核的な部分を揺さぶられる感覚を覚えた。

大林は全員の顔を見回した。

「あんたらは……、何者なんだ？」

呑み込みきれない疑問が、口から飛び出した。訊いてもよいものか、聞くべきことなのか。それを考える前に、口が開いていた。

瞬間に彼が予想したとおり、その言葉によって、緊迫した空気が重量を増した。しまった、とは思ったが、後悔したわけではない。胸の中で這い回る、奇妙な疑問を解決しておきたかった。

「初めてハルに会ったときにも感じた。オレは今までさまざま人物と関わってきたが、こんなにも不思議に感じることはなかった」  
教えてはくれないかもしれない。そう思ったが、何かしらの答えが返ってくるのを待った。

S A A Pが廊下を歩く足音や、時おり強くなる風の音が、声も動きもなくなくなった室内に微かに響く。

宗萱はグラソンと目を見かわし（グラソンは、好きにしろと言うように、目をくるっとよそへ向けた）、マハ工達を一瞥してから話し出す。

「……やはり、言うべきでしょうね……」

大林はごくりとツバを呑む。

「詳しく話せば長くなりますし、あなたには理解できないでしょう。ですから、簡潔に話します。嘘は言いません。その代わり、けっして口外しないよう、お願いします」

数秒、大林の目を見つめてから、宗萱は続ける。

「あなたも気付いていますね？ わたしやグラソン、そしてこの三人に、特別な力が宿っていることは」

「……ああ」

「デンテールのことは話しました。あなたも大いに動揺したことでしよう、この城の技術には。この世界に存在し得ない技術に。見たこともない、魔法のような装置の数々。それにはみな、この世界とは別に存在するもう一つの世界が、大きく関わっています」

「別の世界……、異世界ということか？」

「そうです。その異世界と、この世界はよく似ています。同じような形の人々が住まい、同じように時を送る。ただ違うのは、あちらの世界のほうがるかに技術が進歩しているという点。デンテールが利用した技術は、異世界のもの 中にはそれ以上に進んだ物もあります」

「……」

耳を疑うような話の数々に、大林は戸惑いながらも、確実に納得していく。

この世界に、本来ならば存在するはずのない、考えすら及ばない物まで目の当たりにしては それを話す宗萱や、周りのみんなが恐ろしいほどに真剣な顔をしていることも、納得せざるを得ない要因の一つだ。

宗萱はそれらの話を、最初に話したデンテールの脅威と結びつけて説明してから、本題に入った。

「大林さん、あなたは这个世界で産まれ、育って来ました。ですが、わたしとグラソンは違います。我々は目的を成し遂げる、任務のために生まれた存在　つまり『造られし者』」

「……造られた……？」

大林は眉をしかめる。

「ええ、つまり」

宗萱は言葉に迷って口をつぐむ。ここで、それまで宗萱に説明を任せていたグラソンが、代わりに続ける。

「もともとオレ達は生き物ではない、ということだ。言ってみれば、形も意思もない、生命には遠く及ばない粗末な“何か”が、都合のいいように肉体と魂を与えられ、強制的に生命体となった存在　というところか」

「……………」

「そう、今この場に存在しているのは三種の生命体。さつきも言った、強制的に生命を得た者、わたしとグラソンがそれです。それと大林さん、あなたやこの世界に住む人々。そして」

宗萱とグラソンの視線がマハ工達三人に集まり、追って大林の視線も加わる。

「ここにいる、異世界の住人です」

注目され、マハ工とハルトキは苦笑う。話を無視して半ば眠っていたエンドーが、パチンと目を覚まし、状況を理解できないまま、宗萱達にならって、となりの二人に注目した。

大林はしばし固まり、それから戸惑ったような声を出した。

「……………どういうことだ？　つまりハル達は……、異世界から来たっというのか？」

マハ工とハルトキはゆっくりとうなずいた。

「黙っていて、すみません」

「……………」  
ハルトキが下げた頭を、大林はただ黙視していた。

「……………本当なんだな？」

「はい。事実です」

ハルトキはまっすぐに、大林の目を見つめて答えた。

「……………そうか」

心の中で否定する自分を説得するように、大林は何度もうなずいていた。

「とにかく、こんな無駄話をしているヒマはない。一刻を争うんだ。全力で窪井を見つけ出す」

休憩室から出て行こうと、ドアを半分開けたグラソンを、大林が呼び止めた。

「……………あんたは反対するだろう。だがオレは今、この頼みに命をかける」

両の拳を畳に着け、深々と頭を下げる。

「オレを『シラタチ』に置いてくれ。頼む、協力させてくれ！」

「……………」

「足手まといにならないよう、努力する。いざというときには盾にでもなんでもなる！一緒に戦わせてくれ！！……………今のオレには、それしかない」

揺るぎない決意と覚悟が窺える。

その必死な姿にグラソンは言葉を返すことも、目を向けることもせず、微かに口元を吊り上げると、廊下に出てパタンとドアを閉めた。

グラソンが居なくなっても、頭を上げない大林。宗萱はその前で片膝をつく、頭を上げるように言った。

「あなたは我々よりも窪井をよく知っています。それに、向こう側に付くということもないでしょう。真実を話してしまった以上、こちらにも協力を拒む理由はありません」

宗萱が差し出した手を、大林は固く握った。

「……ありがとう」

## 07：旅の武器商人

「やれやれ、まあたここか……」  
いささか気分悪そうに、エンドーが頭をかいた。

マハ工達三人と大林は、再び『ソレイアド』の荒野を西へ歩いて  
いた。

『シラタチ』に協力することを許された後、大林は「会わせたい  
人がいる」と、三人を連れ、装置を使って、つい先刻までいたこの  
地へレポートしてきたのだ。

「その人物の詳しい情報をお願いします」

案内人が大林に言う。

「……あなたは、どこからしゃべってるんだ？」

声の主を探してきよるきよると見回しながら、尋ね返す。

「わたしの声は、設定した特定の人物にしか聞こえません。ですが  
ら、どこからしゃべっているのかとか、そういう疑問を投げかけら  
れても困ります」

「それがよくわからない。つまり、あなたは何者なんだ？」

「そうですね……、宗萱さんが言っていた『三種の生命体』。その  
中には入らない、もう一つの生命体というところですよ」

「……」

「まあ、わたしのことはこの三人がよく知っていますから」

三人はブンブンと首を振った。

「（案内人のことを説明するのは、もつとも難しい！）」  
その様子を見て大林は、「まあいい」と。あきらめたようだ。

「……これから会うのは、オレら『田島弘之』が世話になっている

武器商人だ。単身、各地方を旅しながら武器を売っている。今はこのソレイアドに滞在していて、ソウシに頼んだ使いつていうのも、その男に武器の修理を依頼するためだった」

「そうですか。それで、その武器商人に『シラタチ』としてどのような用件が？」

「その男は、オレらだけではなく窪井とも繋がりががある。“お得意様”としてだが。ヤツについて何か知っているかもしれない」

「……たしかに、会ってみる価値は十分にありますね」

納得した案内人に、ハルトキが思い出したように訊く。

「宗萱さんとグラソンは何をしているの？　そういう重要な用件ならあの二人も来るべきだったんじゃない？」

「あの方達は忙しい身なので。窪井の件もちろんそうですが、立ち上げたばかりの組織を潰さないために」

それを聞き、マハエが少し不安そうな表情になる。

「多忙か……。でもまあ、どんなに忙しくても、子供の相手をきちんとできる父親にはなってほしい！」

腕を組んで口をへの字にゆがめた。そんな友人に、エンドーが非難の視線を浴びせる。

「あのなあマハエ……、父親も大変なんだぞ！　バブルが崩壊し、今はまったく不景気な時代。子供の気持ちもよくわかるが、父親からすれば、すべては子供の　家族のための自己犠牲さ！　裕福に暮らしていくには、いくら働いても足りはしない！　……その上、リストラなんてされれば再就職も難しくなる！！　崖上の細い道を歩いているようなものなんだ！！　その細道をさらに重荷を背負って歩いていけというのか！？」

両腕に力を込め、全力で訴えるエンドー。

「それにしても、あの二人が『シラタチ』のトップだったとはね……」

ハルトキが、意外だというように、ため息を吐きながら言う。

「わたしも意外に思いました。初めて『シラタチ』の話聞いたときは。もともと一つの任務のために造られたはずの宗萱さんと、デントールの手下だったグラソンさんが……」

「……………」

話が途切れる。

二人ともこの世界を滅ぼすために造られた存在だった。それがまさか世界を救うために働いているとは。何より、造られし者が、自分達の意思で行動していることに驚きだったのだ。

「お父様が悪いわけじゃないんだ！ 時代の流れは、子供には理解できないかもしれない。けど……、責めないでやってくれ……」

「……そんなことはわかっているさ！ でも今の子供は愛に飢えている！ そんな子供達が育ってしまえば、世の中どんどん腐っていくぞ！！ ここで止めようじゃないか……！ 今の親御さん方が、崩壊寸前のわが国の、最後の砦なのではないか……！？」

案内人は途切れた話を中断し、別の話に変えた。

「しかし、今の制作者の目的は、この世界の研究、分析です。それで、わたしも彼らに協力するよう、命令を受けました」

「命令ね……」

ハルトキはどことなく悲しそうに、微かに肩を落とした。

話を中断する前の案内人のしゃべり方が、どこかうらやましそうに聞こえていたから。

「最後の砦か……」

「止めよう！ 止めねばならない！ 明るい未来のために……」

「ああ！」

向かい合い、涙を流しながら力強く握手を交わすマハエとエンドー。

誰もが幸せになれる世の中をつくっていこう！ 強く誓うように、



また、互いの友情を確認し合うかのように、がっちり抱き合っただった。

本来の目的を忘れつつある二人を、ハルトキと大林と案内人は完全無視し、後ろに置き去りにする。

「ところで、あの町の住民で、行方不明者は五十人。ソウシさんを除いて、帰ってきた人達は二十人。あと三十人はまだ窪井のもとにいるわけだよね？」

「そういうことですね……。これからどのような形で攻撃をしかけてくるのか。大林さんは何かわかりますか？」

「……ヤツが何を考えているのか、オレにはわかりかねる。だが、あの予告状を見る限りでは、四日以内に大きな動きがあるとは思えない。腐ってはいるが、自分の決めたルールにだけは従うやつだ」

「それが確かなら、四日後に行動を起こしてくるとわかっている分、マシなのですが……」

「……………」

大林は何も言い返せなかった。

『ニユートリア・ベネツへ』という存在が、大きく膨らんでいく今、窪井が『田島弘之』と敵対していたころの窪井であるという確証はない。もしくは、そんなルールなんて、とっくに捨てているかもしれないのだから。

ミサイルが落ちた町の付近まで来ると、大林が、取り出した白い筒の導火線に火をつけた。

「発煙筒だ。これで相手の位置がわかる」

筒から白い煙がまっすぐに、空高く昇り、数分後、それに答えるように同じ色の煙が昇った。そう遠くない場所だ。

大林はすぐに歩き出し、三人も後に続いた。

その場所にはオアシスのような小さな池があり、木もいくらか生えていて、涼しい。

一頭の馬が馬車に繫げられていて、そのすぐそばには白いテント。打ち付けてある看板には、『WEAPON』の文字。

「よう、久しぶりだなあ、大林」

男がテントの前で木箱に腰かけ、手を振っていた。

鮮やかな山吹色の髪を後ろで束ね、暗緑色のマントを身に巻いている、いかにも旅商人風の男に、大林も手を振り返す。

「おう、儲かっているか？ レック」

「ぼちぼちだ。まあ、少し前より客は増えた。……モンスターの件でな」

レックと呼ばれた男は、見たところ大林よりもいくらか年上のようだ。彼とは古くからの知り合いらしく、会話は親しげだ。

「三日前に若いのをよこしたな。依頼されたやつなら、まだ直っていないぞ」

「いや、そういう用件ではない。少し訊きたいことがあってな」

大林は後ろの三人をちらつと見た。

「こいつが、武器商人のクリング・レックだ」

どうも。とあいさつする三人。

「何だ？ お前んとこの新入り？」

「そうではないが、まあ、事情があつてな」

レックは座ったまま、まじまじと三人を とくに三人の黒髪を見つめ、表情に面倒くささを浮かべて大林を見上げた。

「事情か……。お前が遠出してまで、わざわざオレを訪ねたということは……。何かヤバイことに巻き込まれたか、首を突っ込んだか？」

「……………」

「凶星だな？ これだけは言うておく。オレを巻き込むのだけはや

てくれ。二年前だって」

「違う。そういうつもりで来たわけじゃない。言ったる？ 訊きたいことがあると」

レックはしばし訝しんで大林とにらみ合っていたが、根負けして首を振った。

「何だ？ 言っておくが、タダでオレから情報を聞き出そうなんて思っなよ？」

ケチだ。ケチだな。と、離れてひそひそ悪口を言う黒髪三人。レックが投げたナイフが、ビヒュツ！と三人の顔面すれすれを抜けて馬車に突き刺さった。

「……………」

「仕方ない。少しだけ安くしてやろう。お得意様だからな」

文句あるか？ と三人を見る。三人は正座してプルプルと首を振った。

「KEN 窪井と、最近会わなかったか？」

情報代を払って、大林は訊く。

「窪井か？ ああ、あいつならつい先日、会ったぞ」

「なに？ どこでだ？」

「フーレンツの西だ。五人くらい手下率いて、荷車引いて来てな。ありったけの武器を買っていった。でかいケンカでも、おっぱじめるつもりかねえ？」

「フーレンツの西か……。何か言っでなかったか？ どこへ行くとか」

そう質問され、レックは「さてねえ」と考える。

「……ああそうそう、ヘルプストの町にどうとか、手下に言っっていたな」

「ヘルプスト？ フーレンツの、東の町か……」

「それ以上は知らないぜ。なんだ？ またニュートリアと何かあったのか？」

表情を曇らせて考え事をする大林の姿は、誰の目にも、尋常ではない何かがあった。としか見えない。大林もそんな自分に気付いてか、ごまかすように微笑んだ。

「……いや、すまん。ありがとう」

大林は三人のほうを向き、「帰ろう」と言う。

「なんだなんだ、もう帰るのか？ 武器は？ 安くしとくぞ、少しだけ。新しいのを仕入れたんだ。WC社の新製品だぞ」

「またこんどにしておくよ」

「おい、大林ー！」

レックは背を向けた大林を呼びとめ、真剣な眼差しで言った。

「無理はするんじゃないぞ」

大林は無言で彼を見つめ、微笑みもなしに手を振った。

大林と三人を見送りながら、レックは「やれやれ」と、心底呆れた顔でつぶやいた。

## 08：謎めいた自分

シラタチ本部の一室。宗萱とグラソンの前には、机の上に積み重ねた、本や資料の山。『ただ今、勉強中』というところだろう。宗萱は小さな椅子で、グラソンは立ったまま、書物に目を走らせていた。

「ヘルプスト？」

話を聞いた宗萱は、読んでいた資料から顔を上げ、大林を見た。

「ああ、ヘルプストに　とかなんとか、窪井が手下に言っていたらしい」

宗萱は資料の中から、簡単な絵で描かれた地方のマップを探し出し、町の位置を指で示した。

「港町から東へ行つた町ですね」

海沿いにルートをなぞる。

「そうだ。そう遠くはないから、今からでも調査に　」

「ちよつと待て、大林。たしかに、有力な情報だ。だが問題は、窪井がどういう意味でその言葉を使っていたかだ。何の意味もなく言っただけかもしれん。あるいは、次のミサイルのターゲットだという可能性もある。もちろん、その他の理由も、多々考えられるが、あせつてむやみに嗅ぎまわり、敵に警戒されれば、逆にチャンス逃してしまうかもしれない」

グラソンは厳しい目つきで言った。

「だが、もたもたしていてもチャンス逃すかもしれない！」

二人の視線が、火花を散らすようにぶつかる。

「……ズバリ、そのヘルプストって町が、窪井の本拠地とか」

エンドーが、自分なりの結論を出すが、大林に否定される。

「レックはフーレンツの西で窪井に会った。まさか、武器を積んだ荷車を引いて東まで行くはずはないだろう。ヘルプストへ使いを送

るために手下に指示を出していたとしたら　　もう遅いかもしれないが、うまくいけばそいつを捕まえることだって　　」  
グラソンが、バンツ！と机を叩いた。

「大林！　　何事も慎重に、だ」

これは命令だ。間接的にそう言っている。

大林は、反論の言葉を放とうと開いた口を、静かに閉じた。  
「……………そうだな」

警戒されるのはマズイ。そんなことは大林にもわかっている。だが、腹の中に残って消えない怒りの感情が、どうしても自らをせき立ててしまう。

「（少し頭を冷やしたほうがよさそうだ）」

大林は頭を下げて部屋を出た。

宗萱が顔を上げてグラソンを見、マハ工達三人は、大林が出ていったドアとグラソンとを見比べていた。

やがて、宗萱が資料に目をもどし、三人がそれらから目をそらし、でも、グラソンはただ、無表情でドアだけを見つめていた。

芝が敷き詰めてある城の屋上テラスで、大林は壁に寄りかかって空を眺めていた。

冷たく、心地よい風が顔をなで、少しずつ頭も冷えて冷静さがもどってくる。だが、腹の中で微かに燃えている怒りの炎は、弱くなくとも消えることはない。

「（そういえば、ここ二年ずっとそうだった……………）」  
地獄の間の、つかの間の天国。大林は過去を思い出して悲しげに苦笑した。

「自由を求めて高みを目指す黒き魔物は、赤く染まった道を見上げ

ながら、ひたすらに這い登る。その腹が汚れてもなお、また、自らの赤で染まりながらも、たどり着けない高みを見上げ続ける……」

大林は目を閉じて、スウ……と深呼吸をする。  
風が嫌に冷たくなったように感じた。

「田島さん……」

吐き出した息が言葉を成していたことに、大林は少しの間、気付かなかった。

何もできないまま、あつという間に日が沈んだ。

三人と宗萱、グラソン、大林は、港町の食堂で夕食をすませ、宗萱とグラソンは本部へ、三人と大林は宿へ向かった。

本部には寝室がない。だから、町の宿を利用してくれ、ということだ。

「疲れた日は、やっぱり風呂が一番さね」

エンドーが、年寄りのように腰を叩く。

「大林さんも風呂入ります？ 宿の浴場」

「……ん？ あ、いや……、今日は寝る。すまん」

「……そうですか」

食堂でもどこか元気がなかった大林を、ハルトキは気にして、風呂に入ればスッキリするだろうと思い誘ったのだが……。

「（今はあまり触れないほうがよさそうだね……）」

無理には誘わず、宿に入って大林がとなりの部屋に入るのを「おやすみなさい」と言って見送った。大林は「ああ、おやすみ」と、笑顔で返し、部屋に入ってしまった。

「ところでどうする？ 今晚？ トランプでフィーバーしないかい！？」

マハエが「ウヒヒヒ！」と不気味に笑って、ズバツ！と、トランプの束をかかげた。

エンドーが一步後ずさる。

「そ、それは五大徹夜アイテムの一つ……！ ナイスだマハエ！どこから持ってきたか知らんが、ヒマな夏の夜を楽しく過ごそうという精神はナイスだ！」

二人はガシツと手を組み合い、キラリとハルトキに顔を向ける。

「……なんか、今日は変に馬が合ってるね、二人とも。……あのさ、今夜は、騒ぐのはやめにしよう」

そう言つてとなりの部屋に目を向ける。

ゆっくり寝させてあげよう。ハルトキの意思は、すぐに二人に通じた。

マハエが申し訳なさそうに、頭をかく。

「そうだな、すまん。KYで」

「ああ……、KonnaバカでマヌケなオレをどうかYurして」

「そこまで自分を追いつめなくても」

「ようし！ そんじゃ、風呂でフィーバーしようぜえ！ ひゃっほーっ！」

バタバタバタ……

「……………」

ベッドに横になった大林は、風呂へ下りていく三人の足音を聞きながら、彼らに感謝した。

「……まだ、オレも弱いな」

本部の屋上テラス



仕事を一区切りし、宗萱とグラソンは並んで夜風に当たっていた。空では星がきらめき、明日のよい天気知らせている。

「……怒ってますか？」

宗萱が星空を見上げたまま、グラソンに言葉をかけた。

「何が？」

「大林さんに真実を話したこと、困ったことをしてくれただか思ってます？」

「……ふっ、そうだな」

グラソンも星空を見上げたまま答える。

「まったく、困ったことをしてくれただか。だが仕方がないさ、それが

“最高責任者”である、お前の判断なら

「責任者、ですか……」

宗萱はうつむいて帽子を下げた。

「わたし達は、どう足掻いても大人ではありません。大人のような知識をプログラムされただけの、幼子です」

「そうだな。そういう見方をすれば、大林のほうがずっと大人だ。

オレ達には生きた記憶なんてものはほとんどない。何が悪くて、何が正しいか、正直、言い切れる自信はないからな」

過去、記憶が存在しない苦しさ。自分が信じている道が正しいと胸を張って言い切れない苦しさ、彼らを締め付ける。今正しいと思っていることは、自分の意思なのか 『正しい』とプログラムされた、造られた意思ではない、自分自身で造った意思なのかと。

「重い話になってしまいましたね。……ですが所詮、わたし達は『造られし者』なのです。……大林さんは、自分の強い意思で行動しています。たまに感情に任せて冷静さを欠く、中途半端な生き物が“人”なのですな」

そのとき、頭上から別の声が降った。

「中途半端な、ですか。演じてみてはどうですか？」

案内人だ。

「わたしも、ときどき恐くなります。わたしという存在は何なのかと。わたしは、セルヴオですらない。それを真似て造られただけの生き物ですよ」

宗萱は微笑した。

「それは演技ですか？ 自分を生き物だと言い張るあなたは」

「……どうでしょうか？ それを考えようとすると、思考にブレキがかかってしまいます。いえ、きっとわたしも生き物です。そう信じています」

「我々も、ときには冷静さを欠く。それが、演技でないことを願うばかりですよ」

そうですね。と言う案内人が、宗萱には笑っているように感じた。「似ているな、お前らは」

グラソンが一人だけ、声を出して笑っていた。

「宗萱さんとわたしは、兄弟のようなものですから、もちろん、わたしが“兄”です！」

「ふん。性別すらもわからないが、な」

「一応、わたしは男性です」

堂々と答える案内人。

宗萱は言つ。

「我々は造られし者……。ですが、やはり“生き物”なのですね」「無機質な、生き物だな」

……冷たい風が吹いた。

「グラソンさん。あなたの遠い兄でもあるわたしから一つ言っておきます。人間の世界ではそういうの、『KY』っていうそうです」

すよ」

「『簡潔でよろしい』だろ？」

「……………ええ、そうですね」

二人のやりとりを愉快的な気持ちで聞きながら、宗萱は生き物のように瞬く星を見つめていた。

「人という生き物が、何を考え、どう感じているのか。ですね」

## 09：背後を警戒せよ

朝が来た。

予告のタイムリミットはあと三日。

早朝、目が覚めた三人は、さっそく本部へ向かった。大林はすでに宿を出ていたようで、どこにも姿はなかった。

「おはようございまーす！」

本部に着いた三人は、昨日宗萱達が勉強をしていた部屋のドアを開け、できる限り元気にあいさつする。

しかし、そこには宗萱もグラソンもいなかった。

「ハズレか。勉強中ではなかったようだ」

「ちっ、今のあいさつ返せって」

「ここじゃないなら、どこかな？」

ハルトキが通りかかったS A A Pを捉まえて訊くと、S A A Pは「こちらです」と言って案内する。

「あ、こういうとき、案内人の存在を忘れるね……」

屋上テラスに出て、その鉄扉から中に入る。前回、マハエ、ハルトキと『田島弘之』が窪井と戦ったホールだ。が、入ると以前はなかったもう一つの扉がすぐ正面にあり、左手に階段が造られている。

S A A Pは、正面の扉ではなく、階段を登っていく。三人は迷わず従った。

「システム正常。すべての機関も正常に作動します」

S A A Pの声が聞こえた。彼らは一人ひとり顔も声も異なり、完

壁な区別ができる（名前は不明だが）。

三人のS A A Pが、三つあるコンピューターの前にそれぞれ座り、その間に腕組みをしたグラソンが立っている。

グラソンは、自分の正面の強化ガラスから、ホールを見下ろしている。後に設けられたのであろう、その空間に、三人は恐る恐る足を踏み入れた。

「ターゲット『5』<sup>ファイブ</sup>、バトルスタート」

S A A Pが言うのと同時に、ホールに動きがあった。

三人もグラソンのとなりで、ガラスの向こうを見下ろす。

まず目に入ったのは、いかにも凶暴そうなモンスター、『ドラゴン』の巨体。次に、それと対峙する宗萱の姿。

「宗萱さん？ 何してるんだ？」

マハエがガラスに顔を近づける。

宗萱はすでに刀を抜いていた。

ドラゴンがじりじりと彼に迫る。

「戦闘の訓練か。わざわざドラゴンまで連れてくるとは、大掛かりだな」

エンドーもグラソンと同じように腕を組んでいた。

「……ん？」

マハエはどこか様子のおかしい宗萱に気付き、グラソンを見る。

「なんか、宗萱さん疲れてない？」

「これで五戦目だからな。それもぶっ続けに」

「五戦！？」

「最初、戦闘S A A P二体を相手にした後、二足歩行のトカゲを三体、動きの素早い肉食鳥を三体、巨大な力エルを三体」

「朝から不快なフルコースだな」

エンドーが言った。

この過酷すぎる訓練を、あまりにも冷静に眺めているグラソンとエンドー。ハルトキは無言で、だが、マハエと同じように心配そうに眺めていた。

「訓練にしては厳しすぎじゃないか？」

「まだたったの五戦目だ。次はドラゴン二体、その次はドラゴン三体との戦闘　の予定だ」

「おお、ちょうど見せ場のタイミングで来たなあ」  
「……………」

マハエは無性に、この二人の血の色を見てみたくなった。

ドラゴンの爪を回避して、宗萱は背後にまわり、一太刀浴びせる。だがあまり効果はなく、反撃された。

それまでの戦闘で魔力をだいぶ削ったのか、なかなか魔力による攻撃をしようとしない。

再びドラゴンの背後に立ち、ようやく刀に魔力を込めた。

グラソンが横のS A A Pに、なにやら小声で指示を出す。

するとどこからか、さらに一体のドラゴンが現れた。宗萱はそれに気付かない。

「ちよっと　予定と違うんじゃない？！」

マハエがグラソンに文句を言うが、

「実戦では予定などというものはない。兵士のほとんどは、不意打ちによって命を落とす」

残酷に言い放った。

マハエは即座にホールに向き直る。

突然追加されたドラゴンの気配に、宗萱は気付いた。

刀に込めた魔力を放たず、飛び退くように二体から距離をとり、恨めしそうにガラスの向こうのグラソンに目をやる。

グラソンは薄ら笑いを浮かべていた。

ドラゴンの一体は爪を振り、もう一体は噛み付こうと口を広げて迫った。彼は二体の周りを半周し、壁際に寄った。

ドラゴンは一列になって、逃げ場をなくした獲物を追いつめる。

ここで宗萱は刀を構え、足を踏み込んだ。

シュパアン……

先頭にいたドラゴンの動きが止まった。

縦に伸びた光の柱が、ドラゴンを中央から切り裂き、消えていく。

斬灯『灯柱』

宗萱は“自分の後ろで”巨体が倒れる音を聞き、その流れで正面にいるもう一体も、魔力で切り裂き、倒した。

ドラゴンが一体でも二体でも、彼にとっては同じこと。

勝利を見届けたマハエは、安堵の息を漏らした。

「グルル……」

だが、敵の数が一体と二体とでは、明らかに大きな違いも出てくる。それは、前に倒した敵の存在が、意識から薄れてしまうこと。

「っ……」

宗萱はとっさに、刀を逆手に持ち替えた。

「宗萱……」

マハエが叫んだ。

最初に『斬灯』で倒したはずのドラゴンは、まだ生きていた。おそらく急所を外したのだろう。完全に、致命的なミスだった。

ドラゴンの長い爪、三本が、宗萱の腹を貫通し、彼は苦痛の声をあげた。

「宗萱――！！！！」

マハエはべつたりとガラスに張り付き、力なく床に倒れる宗萱に向かつて、絶叫した。

爪に貫かれる寸前に、自らも敵の頭部に刀を突き刺し、トドメをさしており、相打ち。だが、とても悲惨な結果だった。

「何してんだ、早く助けるよ！！　おい、救護班！！　いないのか！！！！？」

涙を浮かべながら怒鳴るマハエ。ハルトキも、さすがにエンドーもその光景に固まった。ただ、グラソンだけは、三人とは明らかに違う、シヨックというよりも残念そうに、倒れた宗萱を見下ろし、……残念そうに、ため息を吐いた。

「てめえええ！！！！」

マハエがグラソンに殴りかかるが、その拳はあっさりと片手で掴まれる。マハエは足に魔力を込めた。

「　　おい、早く起きろ宗萱。でないよ、こいつに全部ぶっ壊されるぞ」

グラソンの言葉に、マハエは「へ……？」と、放とうとした足を止めた。



倒れていたはずの二体のドラゴンは、跡形もなく消えていた。ホールに倒れているのは宗萱のみ。

「……不意打ちでしたね」

苦笑いしながら、宗萱が立ち上がる。

「……………はい？」

マハエは首をかしげた。

落ちた帽子を拾い上げて頭にかぶり、宗萱は四人に笑いかけた。

「『VBT』。バーチャル・バトル・トレーニングだ。宗萱が戦っていたのは、モンスターの虚像。といっても、プログラムのセルヴオ変換を応用した、実体に近い、虚像だ。訓練者が攻撃を受けても、相応の痛みを感じるが、かすり傷一つ負わない。だから、致命的な攻撃を受けても、死ぬことはない」

「……………」

マハエは咳払いをして、魔力を解いた。

「……肩凝ってます？ おもひましましょう」

グラソンの肩をもみ始める。

そうしているうちに、宗萱が上がってきた。

「おはようございます。朝から元気ですね」

「お疲れ。楽しめたか？」

「ええ、とても楽しめました」

皮肉を込めた笑顔を向ける宗萱。

「こっちは冷や冷やしましたよ。ねえ？」

ハルトキがマハエを見る。マハエはそっぽを向いて、ひたすら肩もみに励んでいた。

「この『VBT』は、昨夜完成したばかりで、そのテストにわたしが選ばれたわけです」

「案内人が言ってたすごいのもって、これのことかあ」  
「へえ〜、とエンドーは感心しているようだった。」

グラソンが、パン、と手を叩いた。

「さて、今日の打ち合わせ、といきたいところだが、まずはお前達三人に渡す物がある」

近くのS A A Pが反応し、なにやら平べったい木の箱を持ってきた。

「菓子でもくれんの？」

エンドーはすでに両手を差し出している。

「いや、もつといい物だ」

グラソンは箱を受け取ると、三人のほうにかたむけ、フタを取った。

## 10：洗脳で留守番

拳が空を切る。

突き上げられた膝が風を打つ。

ローブが舞った。

下段、中段、上段と、素早く放たれた蹴り、続く回し蹴り。

削れた芝が舞い上がり、風に乗って飛んでいく。

「はあっ！」

そろえた両の拳が前方に放たれ、空間を揺るがした。

大林は「ふうっ」と息を吐き、もう一度構える。

「我流ですか？」

宗萱がいつの間にか、鉄扉からテラスに出ていた。

「『田島流』だ。といっても、教わったり教えたりするのは、基本の動きだけで、あとは自分自身で学んでいく。ケンカに形式は必要ない。必要なのは、『威嚇』、『威力』、『意表性』」

「意表性？」

「いかに相手の意表をつく動きを組み立てるか。予測不能な流れをつくることだ。その三つを基盤に、独自の闘いをする。それが『田島流』だ」

ジャブから一瞬で姿勢を落とし、足払いを繰り出して見せる。

「流れを読まれないように闘う、ですか」

「オレもまだまだ、だけどな」

そうしているうちに、グラソンと三人が鉄扉を開けて出てきた。

「大林、来てたのか。行くぞ、打ち合わせだ」

「ああ」

大林は、ちらっと三人を見た。三人の腰には、革製のソードホルダーがぶら下がり、銀色の短剣が光っていた。

「まず、あらゆる場合に備え、基本のチームを決めておく必要がある」

『休憩室』で、グラソンはそう切り出した。

「二人で一つのチームがいいだろう。じっくり考えてみたが、やはり経験を重視したい。まず、宗萱と真栄のチームだ。お前らは前回、ともに戦った経験があり、その能力はオレもよく知っている。次に大林と春時のチーム。そちらも同じく、ともに戦った経験があるのだ。そして、残ったオレと京助だ。この決定に意見のある者は？」

エンドーが、ズバツ！と挙手する。

「よし、それじゃ、このチームで決定だ」

エンドーが、ズババツ！と挙手する。

「今日、これからの行動を説明する。よく聞け」

エンドーが、ズバババツ！と

「意見があるつつつてんだろがぁー！！！！ 残り物ってなんだコラアー！！！！」

「……しかたないだろ、残り物は残り物だ。オレとお前に何の繋がりもなくとも、これが最良のチーム割だと思う」

「納得いかねえー！ そうさ、たしかにオレは前回、誰とも連るま

なかつたさ！　だがそれはオレが悪かつたわけじゃない、オレに向かつて吹いていた風が冷たすぎただけだ！！　いわば一匹オオカミ！！　グラソン、あんただってそうだろ！？　デンテールから隠れて、孤立して動いていた！！　つまりこのチームは、一匹オオカミが二匹連るんで　ん？　それってなんかカッコイーー！！」

目をららんと輝かせるエンドー。その隣で友人二人は呆れた汗を垂らしていた。

「……全員が納得したところで、話を続ける。昨日の大林の情報、『ヘルプスト』の町の調査についてだが、さつそくこのチームで行動してもらおうと思う」

「よっしゃあ！　どんな任務もドーンと来いだあ！」

感情が百八十度方向転換したエンドーが、胸を張って高笑いする。

「町の調査へは、大林、春時チームと、オレ、京助のチームが行こうと思うのだが」

グラソンは宗萱に目をやる。宗萱は首を横に振って、

「いえ、調査へは大林さんのチームとわたしのチームが行きます」

彼にしてはめずらしく、強めの口調でキツパリと言った。グラソンは少したじろいだ風で間を置いたが、文句なさそうにうなずいた。

「わかつた。そうしてくれ」

「え。じゃ、オレは？」

エンドーが自分を指差す。

「本部待機だ」

「ええー！？　そりゃないよ！　気合入れたばかりじゃんかあ！　ねえ、オレにも行かせてよあ！　ねえ！！」

今にも床を転がりまわって駄々をこねそうなエンドーの両肩を、ハルトキがガシツと掴んだ。そしてまっすぐにエンドーと視線を合わせ、諭す。

「エンドー、キミは残るべきだ。本部を守るのも任務なんだよ。…

…万が一、ボク達が帰ってこなかったら……、その後をキミが継いでくれ」

エンドーは胸打たれたように目を見開き、しばらくして「ふつ」と口の端を吊り上げると、ゆっくりとハルトキの手を肩から下ろした。

「当然だろ？」

キラリ、と歯が光った。ように見えた。

「洗脳成功です」

ハルトキがグラソンに親指を向ける。

マハエがコホンと咳払いをして、

「えーと、このように、エンドー君の心の回路は、複雑すぎて変化が激しいです。ですが、単純な言葉一つで問題は解決できます。たまに勘が良すぎることもあります。その場合は時間を置いてもう一度試してみてください。その他、細かい取り扱い方法は、こちらをご参照ください」

そして小さく折りたたまれた紙を渡す。

『「遠藤京助、取り扱い説明書」 行動をとにもする場合の対応法、および注意事項』という文字の下に、びっしりと細かい文字が記載されている（赤文字が妙に目立つ）。

「こんなこともあるのかと、徹夜で作成いたしました」

「……ありがたく、受け取っておこう」

グラソンは『取り扱い説明書』を、ていねいにズボンのポケットに収めた。

「話をもどすが オレと京助が本部待機だ。ここを手薄にする

のは避けたいからな。いざというときは、宗萱が指示を出す。何が起ころうと、彼に従うこと、それだけは忘れるな」

宗萱が前に出た。

「それでは、『ヘルプスト』調査チーム、出発します」

グラソンと、歯を光らせたままのエンドーに見送られ、宗萱を先頭にしてマハエ、ハルトキ、大林は『ヘルプスト』の町を指すのだった。

エンドーが前を向いたまま質問する。

「ちなみにグラソン。おやつは三百円までだった？」

「……………」

グラソンはさっそく、ポケットから『取り扱い説明書』を取り出した。

港町から東へ

四人は海沿いの道をまっすぐに歩いていった。左手に海、もともと山の一部が崩れて自然にできた道なのか、右手には急な崖が。決して広くはない一本道だが、町と町をつなぐ重要な道だけあって、人の数もそれなりにある。

「どうしてグラソン達を本部に残したんですか？」

宗萱の隣を歩きながら、マハエが訊く。

「……………何か不思議でしたか？」

「いや、べつにどっちが行ったって変わらないように思えたから」

「……………」

宗萱は何も言わない。

何か事情があることを察し、マハエは答えをあきらめた。だが、沈黙の果てに、宗萱は口を開いた。

「……もしかすれば窪井の手下がいるかもしれない。そういう町にグラソンを行かせるのに、気が進まなかっただけです」

「……どういうことですか？」

「彼は　裏切ったといっても、元はデンテールの手下でした。当然、窪井とも繋がりがあったわけです」

「……もしかして……、グラソンを信用してない、ってこと？」

「信用はしています。ですが、可能性から考えて、まだその繋がりが消えていないということも考えられます。……正直わかりません。ときどき、彼を見ていると不安になります。どことなく孤立しているようで……」

マハエは「うーん」とうなる。

「あんまり考えないほうが良さそうな気がする。不安がつのると、ますます信じられなくなるよ」

「……そうですね。仲間は信じ合うものですから」

宗萱は妙な話をしてしまったことを謝り、ありがとと頭を下げた。

「あれが『ヘルプスト』ですか？」

ハルトキが目の上に手をかざし、前方を眺める。

途中のゆるやかな坂を越えると、平坦な道でよく見渡せるようになっていた。先のほうで地形が少しカーブして、海に突き出しているように見える。穏やかな波がぶつかる断崖。その上にある町が『ヘルプスト』　陽炎がゆらめく先に、白い町がぼんやりと映る。港町を出て二十分程度。それほど時間はかからなかった。

「のんびりと楽しみたい景色なんだけどなあ」

カメラでも持ってくるんだった。と、マハエが残念そうに言う。

道の端でのんびりと海を眺める少女がいるが、当然、このシラタ



チ一行に景色を楽しむ時間的余裕などない。今こうして歩いていること自体が任務なのだから。

もう少しで海と崖に挟まれた狭い道を抜ける。

「窪井の手下はいるだろうか」

大林がつぶやく。

「可能性は低いですが……」

そのとき、頭上で爆発が起こった。

「何だ!？」

反射的に見上げた四人を目がけて、いくつもの岩が斜面を転がり落ちてきた。

「うわぁ!!!!!」

ドンッ!!!　ズシャンッ!!!!

一瞬にして、狭い道を砂けむりが支配した。

## 11:これが力の形(前書き)

ややこしくなる部分があったので、案内人のセリフを、「~~~~」  
から「~~~~」に修正いたしました。

## 11：これが力の形

一瞬だった。

岩が斜面を転がり落ちてくる。

宗萱がマハエを押し跳び、大林も逃れようと足を踏み込んだ。だが

「きゃああー!!」

女の悲鳴に大林は振り向いた。

海を眺めていた少女だ。落石に気付いたものの、動けずにいる。助けなければ確実に巻き込まれる。

「くそっ!!」

大林はとっさに方向を変えてジャンプした。

「大林さん!!」

「!!」

ハルトキが大林に手を伸ばすが、無駄だった。

「きゃああああー!!!」

ひと際大きな悲鳴。少女を抱きかかえた大林が、そのまま足を踏み外して海へ真つ逆さまに落ちていく。

「(ちくしょう!!)」

十メートル下の海面からは、いくつも、とがった岩が突き出ている。

大林は死を覚悟し、目を閉じて歯を食いしばった。少女の体を強く抱きしめ、頭を押さえつけてかばう。

「(せめてこの少女だけは!!)」

ハルトキが叫ぶ声が聞こえた。……だが、もう関係なかった。

大林は気付く。

これは畏だったのだ。大林や『シラタチ』をヘルプストにおびき寄せ、かけ崩れを起こして、まとめて始末するつもりだったのだ。悪知恵の働く窪井によって、すべては仕組まれていた。

そして、すべて遅すぎた。

お前は生きるんだ。生きて、仲間を守れ。

それができるのは、お前しかない。

懐かしい声がよみがえった。

大林は心の中で叫ぶ。まだ死ぬわけにはいかないんだ！ と。  
そのとき

「縛連鎖はくれんさ！」

一筋の光が伸びた。

薄く目蓋を開いた大林の視界に飛び込んできたのは、へびの如くうねりながら音の速さで伸びてくる光。

「……………」

大林は波の音を聞いた。それはたしかに自分の頭の下で轟いている。

ゆっくりと目を開けると、海面はまだ頭のずっと下のほうにあった。

落下していない。空中でピタリと止まっている。

「……なんだ？」

大林は銀色の鎖に縛られて、ゆらゆらと左右に揺れていた。

「剣をしっかりと握れ。そして集中しろ。お前達にはできるはずだ」

三人は、銀色の短剣を両手で握り、じっと手元をにらんだ。

約一時間前

『バーチャル・バトル・トレーニング（VBT）』の闘技場に改造されたホールに、三人の力む声が響く。

グラソンが彼らに一本ずつ渡した、全長三十センチほどの銀色の短剣は、鉄をそのまま剣の形にしたような物で、全体が銀色。柄と刃の中間部分には、青い石が埋め込まれている。刀身にはそれぞれ別の絵が彫刻されていて、マハエのは口ばしが長い鳥、エンドーは二股の角がある鳥、ハルトキは尾の長い鳥だ。

「どうした？ 思い出せ、デントールと戦ったときの感覚を」

「……！！！」

短剣にも石にも変化は起こらない。

「そいつに埋め込んである『陰の石』には、お前達の魔力を実体化する力がある。短剣をベースに、力の形をイメージしろ」

「……！！！」

変化は起こらない。

「いいか、見る」

グラソンが腰に差していた四本の金属棒のうち的一本を右手に持

ち、魔力を込める。

空気中の水分が金属棒に集中し、氷結する。

「オレの魔力の形は『氷』だ」

そして、離れた所で眺めていた宗萱を呼ぶ。

宗萱は黒い鞘から直刀を抜き、構えた。

「わたしの魔力の形は……、『風』です」

刀を光が覆った。

光は淡いながらも、鋭く、研ぎ澄まされている。

「あらゆる物をたやすく切断する、『風』です」

三人はもう一度、短剣を構えてみた。

「それじゃあ、オレ達の魔力の形は何なんだ？」

マハエが問う。

「……謎だ。オレと宗萱の魔力は、ちゃんとした『形』がある。だが、お前達の魔力には、それが見られない」

「わたしも初めてマハエさんの魔力を見たときから感じていました。が、どうやら、性質が違うようです。『氷』や『風』といった、自然的な形などなく……、人工的　　といえますか……。我々とは似ているようで、まったく異なるものだと思います。そして、それを理解できるのは、あなた達自身です」

「オレ達自身か……」

三人は目を閉じて感じた。

デンテールを倒した、あの銀色の魔力。『陰の石』と共鳴し、作り出した形。

銀色の鳥。

銀色の槍、金棒、鎖。

「……………っ！！！！」

三人は目を見開いた。

手に持った短剣から、銀色の光があふれる。

「……………ふん、できるじゃないか」

グラソンが嬉しそうに微笑んだ。

彼らが握る、それぞれ異なる武器  
『鎖』。

銀色の『槍』、  
『金棒』、

「……………名前を聞いた。」

波打った形状の刃を持つ『槍』を握ったマハエが言う。

「壊波槍」  
かいはそう

ドクン。と、空気が振動した。

エンドーは、八角形の長い金棒を。

「発破鋼」  
はつぱこう

また、ドクン。と、空気が振動する。

ハルトキは、錠状の鉤が付いた鎖。鎖は柄の周りでとぐるを巻いている。軽く振ると、ジャラジャラと鎖が伸縮した。

「縛連鎖」  
ばくれんさ

ハルトキは伸ばした鎖を思い切り引き上げ、大林と少女を救出した。

ドサリと地面に倒れた大林の体から、縛っていた鎖がするすると抜け、ハルトキの手元に収まった。

「無事ですか？」

「……何とかな。その武器は？」

「これが、ボクの『力の形』です」

ハルトキが力を解くと鎖は消え、ベースである、尾の長い鳥の短剣にもどった。

「……とにかく、助かった。ありがとう」

ハルトキはうなずいて、『銀の短剣』を腰のソードホルダーにもどした。

落石は収まり、周りには石や岩が無数に転がっていた。ハルトキは『動体視』で逃れていたが、宗萱とマハエは

ハルトキが二人の名を呼ぶと、声が返ってきた。無事らしい。

道は大きな岩で完全にふさがれていて、マハエと宗萱はその岩の向こうにいるようだ。

「大丈夫かヨツくん！」

「うん、怪我はないよ。……それよりも、完全に分断されたね」

「待っていてください。すぐに岩を破壊します」

宗萱とマハエの魔力なら、大きな岩でも数分あれば砕くことができるだろう。ハルトキと大林は分断された東　ヘルプスト側にいる。岩を破壊しなければ、本部へ帰還することもできない。

「ここは危険だ。離れるぞ」

大林は気を失った少女を抱え、さらに落石する恐れのある現場から離れた。



栗色の髪の可愛い少女は、大きなバッグを背負っていた。傘やランプ、寝袋など、装備を見るからにどうやら旅人らしい。

少女が落石に巻き込まれたのは、明らかに偶然だ。この“罨”は大林達を狙ったもの。そしてその罨にまんまと引っかかってしまった。紙一重で誰も命を落とさなかったが、それに何の関係もない少女を巻き込んでしまったことに、大林は悔しさを覚えた。

「ん？」

大林は視線を感じて落石が起こった崖を見た。

紫色の髪の少年が三人、えぐれた崖の足場に立って、彼らを見下ろしていた。少年達は大林と目が合うと、近くの横穴に逃げ込んだ。

「あいつら！」

大林はそつと少女を地面に寝かせると、少年達を追って崖を駆け登った。

「大林さん！」

大林に続くべきか、マハ工達を待つべきか、ハルトキは少し躊躇してから、銀の短剣を再び抜いて走り出した。

## 12：トンネルにこだまする……

崖の途中にぽっかりと開いていた横穴は、大林でも立って移動できるほど広く、自然にできたものでも、ずっと以前にできたものでもない。人工的で、それもつい最近に掘られたばかりのようだ。

「あいつら、手の込んだ罠をしかけやがる。まさに、手段を選ばない連中だ」

「やっぱり罠だったんですか……。それにしても、こんな大穴、どうやって?」

紫髪の少年　窪井の手下三人は完全に見失ってしまった。

とくに、先のほうは真っ暗で何一つ見えない。

「吉野さん、大林さん、こんな場所で何をしているんですか?」

二人の声はトンネルに反響するが、案内人の声はそうではない。

「案内人、今、窪井の手下を追跡中なんだよ。落石は罠だったんだ。早くマハ工達と合流したいんだけど」

「それが……、あちらも厄介な敵にからまれていまして……」  
大林が反応する。

「敵だと?　窪井の手下が向こうにも?」

「そんなところですかね?　……それよりも、あなた方は追跡を続けてください」

「……そうしよう」

だが、さすがに暗すぎる。ハルトキは『暗視』が使えるおかげで支障はないが……。

「ランプでも持ってくるんだった。この暗さじゃ、目が慣れても、

とつさの判断が鈍ってくる」

大林は暗闇に目を凝らしていた。

「あら、ランプならありますよ？」

「ん？ 本当か？」

「はい。少し待っててくださいね」

「助かったよ」

「いえいえ」

洞窟にオレンジ色の明かりが広がった。

大林は受け取ったランプを前にして進む。

壁や天井に、三つの足音が反響、膨張し、不気味なムードをつくりあげる。

「……ところでハル」

「……何ですか？」

「オレはさつき、女と話していたような気がするのだが？」

ハルトキも「そういえば」と、

「まあ、こういう暗いトンネルでは、生き物でない生き物も珍しくないらしいですから」

その説明に、大林は無理矢理うなずいてみる。

「失礼ねえー、わたしは生きてますー」

「そういうやつらの中には、自分がまだ生き物だと信じて、さまよってるやつも少なくないと聞きます」

「……なるほど」

「いいかげんにしてください。怒りますよー？」

「……………」

面倒くさそうに後ろ頭をかいて振り向いた二人の目の前で、大きなバッグを背負った、栗色の髪の少女が、ニコニコ笑って手を振っていた。

「……なんでキミがいるんだ？」

大林はできる限り平常心を保って尋ねる。

「だって、あなたは命の恩人ですもの、お役に立ちたいと思いまして」

語尾にハートが付いている。

「いつからいた？」

「何を言ってるんですか、最初からですよ」

「気を失っていたんじゃないのか……」

大林は頭を抱える。

「眠った美女は王子様のキスで目覚めるっていうのが定番なのに、置いていくんですもの」

少女は可愛らしく頬を膨らませた。

前方ばかりに気をとられ、すぐ後ろに引っ付いて来ていた、少女の気配に気付かなかった自分が情けなく。それと、死にかけた直後だというのに、見ず知らずの男二人についてくる、呆れた少女の肩を揺さぶってやりたくなった。

大林はため息を吐いて、少女と目を合わせる。

「オレは大林鷹光。キミは？」

「申し遅れました。わたしは『ミチル』といます。トーネリ力出身のぴちぴち十七歳です」

ハルトキも自己紹介をする。 が、無視された。

「呼び捨てで構いませんからね。大林さんっ」

「ミチルさん、ここは危険なんだ。外へ出ていてくれないか？」

「そんな冷たいこと言わないでくださいよ。邪魔はしませんから。あ、それにわたし、こう見えて足腰強いんですよ？」

「そうじゃなくてだな」

そのとき、ハルトキが「静かに」と、鼻の前で人差し指を立てた。大林もすぐさま気配に気付く。

「ミチルさん。下がってる」

闇の中に誰かがいる。『暗視』と『望遠』を発動していたハルトキには、敵の姿がはっきりと見える。

数は三人。ハルトキ達のほうへ、並んで歩いてくる。

大林はランプを地面に置いた。

「え？ なになに？」

敵の姿も見えず、気配もわからないミチルは、大林の後ろでぴよんぴよん跳ねている。

「へえ、女連れとは珍しいなあ、大林」

ようやく、明かりのとどく範囲まで来て、敵三人は足を止めた。

おそろいの紫頭。間違いなく窪井の手下だ。

その手下三人は、ハルトキやマハエらと歳は同じくらいだろう。

だが、その口調は完全に大林すらも見下している。

「てめえらのようなやつに、気安く呼び捨てされるってのは気に食わねえが……」

一歩、大林が手下に踏み寄る。

でかい態度をとっていた手下達も、彼の気迫に圧されてたじろぐ。

「ハルはミチルさんを守っている。こんなやつら、オレだけで十分だ」

「ふ、ふん。一人でかかってくるつもりか？ なめんなよ！」

真ん中の手下Aがわめき、長い棍棒を振り回して構えた。両側二人は、片手剣だ。それに対し、大林は素手。だが、ハルトキは微塵も不安など抱かなかった。

一分もあれば足りるだろう。

生暖かい風を切り裂いて、鋭い真空の刃がマハエへ飛んだ。

宗萱が一瞬で抜いた刀がそれを弾き、刃はマハエの両側をかすつて消えた。

「なんだ、いつたい!？」

それは、二人が道を塞ぐ岩を破壊しようとしたときだった。

空間の一部がゆがみ、中心から赤く染まっていく。

まず現れたのは、ドクロの仮面。まっすぐなツノが二本あり、目の部分から赤い光がもれている。

「まさか!？」

マハエと宗萱は立ち尽くした。

体中に鳥肌が立つほどの不気味な気配とともに、徐々に全身が現れる。

真っ赤なフードが頭を覆い、胴体は真っ赤なマントで完全に見えない。いや、こいつに胴体はない。マハエと宗萱は確信している。

『黒猫集団』のような、まがい物ではない。こいつは本物だ。しかも、前に戦ったザコなど比にならない、自分達が想像しているものよりも、ずっと強敵だろう、と。

マハエは、口ばしの長い鳥が彫刻された『銀の短剣』を抜き、魔力を注いだ。

イメージする。己の力の形を

横に一振りすると、短剣は槍の形に変化していた。

「コツをつかめたようですね」

宗萱はほめながらも、敵から目を離さない。

「対S A A P……、本物の……？　もしかして、デンテールがつくった兵の残党？」

「　の可能性もあります。それを窪井が引き継いだのだとしたら」  
「思ってるほど簡単じゃないな」

二人は左右に散って、再び放たれた刃をかわした。

宗萱が対S A A Pとの間合いをいつきに縮め、刀を振る。だが、まるで紙を切ろうとするように、ひらりひらりと受け流された。

「やりますね……」

「はあっ！」

背後からマハエが槍で突くが、胴体に効果はない。

対S A A Pは高く跳び上がり　空間のゆがみとともに姿を消した。

「消えた……！」

「油断しないでください。近くにいます」

宗萱は刀を鞘におさめ、魔力を込めながら精神を集中した。

嫌な気配が周りを移動しているのがわかる。さらに集中し、正確な位置を感じ取る。

「……………」

マハエは、どこにいるのか、わからぬ敵に恐怖しながら、いろんな方向に槍を構える。

ゾクリ。背中いっぱい鳥肌が立った。

「真栄さん、後ろです！」

宗萱が叫ぶのとほぼ同時に、マハエは気配に反応し、横へ転がって回避した。

直後、立っていた地面に、刃物が食い込んだような穴が開く。かすった腕から血が飛び出た。

「斬灯 、『瞬風居合』」

瞬息で間合いを詰め、鞘から刀を抜き放つ。

対S A A Pが姿を見せたところを、斜めに光がはしった。

「（外した!?!）」

敵はすばやい。仮面が少し削れただけで、ダメージを与えることはできなかった。

ふわっと浮くように跳んで、二人から離れた対S A A Pは、相手の出かたをうかがうように、動きを止めた。

「ずっと姿を消していられるわけでは、ないようですね」

「また消えられたら厄介だな……」

「攻撃も黒マントより強力ですからね」

様子を見ていた対S A A Pだったが、先に自らが動いた。マントがガバツと開き、そこから真空の刃が連続で放たれる。

武器を前に構えた二人を刃が襲い、腕や足を、防ぎそこねた刃がかすめる。

攻撃が終わったとき、敵にすぎができた。宗萱はそれを逃さ



ず、即座に反撃。だが、魔力を備えた攻撃も、ぎりぎりでかわされてしまう。

「（わたしの『風』が、読まれている……!!?）」

動揺する宗萱。マハエもその後ろで動揺していた。頼れる宗萱の技が通用しないとは、予想だにしていなかった。

「くっ……!! どうする……!!?」

そのとき、マハエはふと、気付いた。

対S A A Pは今、崖の真下にいる。そしてその頭上には

「宗萱さん！ 避けて！」

その声に振り向く宗萱。マハエが槍を構えて突っ込んでくる。横跳びで退いた宗萱の横をマハエが走り抜け、対S A A Pが逃れる直前に、槍先がマントを貫通し、後ろの崖肌に突き刺さった。

「これで逃げられないだろ!？」

ギリッ、と槍先がさらに食い込む。

「くっらえ!!!」

ドグンッ!

波型の刃から衝撃波が発生し、崖を揺るがした。

「!!!?」

頭上を見上げた対S A A Pに、岩が降り注ぎ、押しつぶす。

マハエは、彼に向かって飛び込んだ宗萱のおかげで、落石に巻き込まれる寸前に脱した。

### 13：敵戦力・未知数

「また一つ、仕事が増えてしまいました……」

宗萱は腰に手を当てる、新たにできた岩の山を見つめていた。

「まあ、敵を倒せたんだから、結果オーライでしょ」

マハエが言う。

「ええ、少し無茶でしたが、あの状況からすれば、良い戦法だったと思います。後でS A A Pにでも処理させましょう」

マハエが起こした落石によって、赤い対S A A Pは完全に沈黙した。

『壊波槍』を解き、疲れたと言って座り込む。宗萱も痛む傷を押さえて岩に腰を下ろした。

すぐに、出血している傷に包帯を巻く宗萱を見て、マハエが言う。「魔力があるんですから、怪我なんてすぐに治るんじゃない？」

「わたしやグラソンは、そうはいかないみたいです。かすり傷でも、完全に塞がるまで数時間かかります」

「ふーん……」

マハエは完全に傷が消え失せている自分の腕を見た。

『魔力の性質が違う』という、宗萱の言葉を思い出し、「何が違うんだろ？」と首をかしげた。

「おや？ これは……」

宗萱が、足元で赤く光る、小さな石を拾い上げた。

マハエも近くで見る。

赤い宝石だ。

崖に埋まっていた物だろう。マハエはそう思った。だが、宗萱は

何か驚いた表情をしている。

「この宝石は、新型S A A Pのグローブにはまっている、隊を識別するための物です」

「え？ それがなぜここに？」

「……赤い宝石は第一部隊の象徴……」

「第一部隊？ ……たしか、連絡が取れなくなった、消えた部隊も」

宗萱は深いため息を吐いて、対S A A Pを押し潰した岩を見た。

「どうやら、先ほどの赤い対S A A Pは 消えた新型S A A P、第一部隊の隊員のようです」

口を開いて啞然とするマハエ。

「……どうということなんだ？ まさか、部隊が一つ、窪井の手に落ちたってこと？」

「そういうことです」

だがマハエは腑に落ちない。

「全然形が違うじゃん。死神型は旧S A A Pだろ？」

すると、一部始終を見聞きしていたのか、案内人が、

「わたしがお答えしましょう。新型S A A Pというのは、もともとあのような死神型でつくられたものでした。ですが、この世界で行動するにあたり、自然なデザインにつくり変えたわけです」

「なるほど、説明ご苦労。けど、それがなぜ、今になってもとの姿に？」

案内人はすぐに答える。

「ウイルスの影響だと考えられます。宗萱さんさえ手こずるあの強さ。新型のS A A Pを、ウイルスでさらに強化したのでしょうか」

マハエは呆然と立ちつくし、思いを巡らせて、案内人に訊く。

「第一部隊って、何人いる？」

「一つの部隊は、十人で編制されています」

「十人……」

シヨックを受ける彼に、宗萱が追い討ちをかけるように言う。

「しかも、部隊の隊長には、特殊なデータが組み込まれていますから、先ほどの対S A A Pよりも、はるかに強力でしょう」

真っ青になるマハエ。

「また、仕事が増えましたね」

他人事のように案内人が言う。

マハエはうなだれた。

その頃、トンネル内での戦闘はとっくに終了していた。

「言え。窪井はどこにいる？」

大林が手下『A』を壁に押し付け、尋問する。

他二名は、ハルトキの『縛連鎖』で捕縛され、大人しく座っている。

「……………」

「ああ！？ 答えろ！」

「……………だ、誰が吐くかよ……………!!」

見ているハルトキさえツバを呑むほどの、凄みのある尋問。ミチルはそれを楽しそうに眺めている。

だが、さすがに窪井の手下だけあって、なかなか白状しない。

「命落とさねえ程度になら、いくらでもいたぶってやれるんだぞ？」

大林はニヤリと笑ってみせる。

「……そ、そんな脅しは通用しないぞ……！ 吐くくらいなら、死んだほうがマシだ！！ 正直言つて、頭領のお仕置きのほうが恐ろしい……！」

大林は肩をすくめると、縛ってある手下『B』と『C』に親指を向けた。

「それなら、お前の仲間が一人ずつ、苦痛の悲鳴を上げることになるぞ？」

「……けっ、そんな脅しも通用しねえ！ そいつらに何をしても、オレは何も吐かねえし、口を閉ざしたままくたばるんなら、そいつらも本望だろうよ……！」

手下Aはフンと得意げに鼻を鳴らした。

大林はギロリと、二人の手下をにらんだ。

「オレ達の隠れ家は、フーレンツ南西の『ネーベル山』にある。登山道から少し外れたところに山小屋があつて、そこから地下通路を通れば行けるよ」

『B』がぺらぺらとしゃべった。

「ええええええ……！！？ なにあっさりと白状しちゃってんのおお……！！？」

「安全第一でしょ」

「てめえの安全だろお……！！？」

大林の腕に絞められながらも、手下Aは怒声を散らす。

「なるほど、『ネーベル山』か」

「いやいや、嘘だよ嘘……！ あいつ大嘘つきなんだよ、真に受けないほうがいいよ……！！？」

「ほう？ 嘘なら、なぜ嘘だとオレに教える？」

「あ。」

手下Aは言葉を詰まらせた。そこへ、手下Bがやれやれと首を振って、

「キミの余計なりアクションのせいで、嘘じゃないとバレてしまったじゃないか」

「なにオレに責任なすりつけようとしてんのお!!!?」

「もー、いーじゃん、『ゴトー』。痛いのはやめようぜー」

手下Cも加わり、壮絶な言い争いが勃発。

本当に状況がわかつているのか。大林やハルトキは完全にそつちのけだ。

「ええい！ 黙れ!!」

大林が一括し、ようやく静まった。

「ハルトキ、そいつらを立たせる。本部へ連れて行こう」

「はい。ほら、立て」

ハルトキの言葉に素直に従う手下達だが

「逃げるぞ、撤退!!」

手下Aが白いボールを投げると、トンネル内を一瞬で白い光が支配した。

「しまった！ 閃光弾か！」

腕をすり抜ける手下に、大林は見えない目で手を伸ばすが、捕らえることはできなかった。

足音が走り去っていく。

なす術もないまま、完全に気配が消えたところになって、視界

が元にもどった。

手下はハルトキの鎖さえもすり抜け、そこに一人の姿もなかった。

「くそっ……」

窪井と同じ手で逃げられた。二度も同じ手で……。大林は脱力して座り込んだ。

「でも、無駄ではなかったでしょ。大きな手掛かりも得ましたし」「そうだな。『ネーベル山』……、そこに窪井の隠れ家がある」

大林は気合を入れなおし、立ち上がった。

さっぱり話のわからないミチルが、小さく首をかしげていた。

宗萱のチームと大林のチームは、『ヘルプスト』の町で合流。

その町の人口は港町とほぼ同じくらいだろう。十字の道を大通りにして、レンガ造りの住宅が立ち並んでいる。

ミチルと別れた大林とハルトキは、宗萱に『ネーベル山』のことを報告した。

「確かな情報のようですね。ですが、手下に逃げられたということは、こちらに情報がもれたところが、敵に知られてしまうということですよ」

「そうなんだよなあ」

「それに、厄介な敵も現れました。窪井側の戦力は、とても強力です。デンテールを上回るレベルかもしれないかもしれません」

全員の顔が強張った。

「事態は急を要しますが、慎重も要します」

「つまり、へたに動けないと？」

大林は目を細めた。

「そういうことです。ですが、もたもたしてもいられません」

「……………」

「本部へ、もどりましてよ」



## 14：ちんけな客人

本部待機中のエンドーは、『VBT』に励んでいた。

トカゲ三体との対決。二体倒し、残りは一体だ。棍棒『発

破鋼』が敵を打ち、触発するように爆発が起こった。

倒れたバーチャルモンスターは消えていく。

「ら、楽勝……！」

顔面いっぱい汗を浮かべながら、エンドーは「へへっ」と笑った。

「何が楽勝だ。二回も死んだぞ」

ガラスの向こうでグラソンが声をかける。

「たったの二回だろ！？ 上出来だ！ とかほめるべきだとオレは思う！」

「実戦は一回死んだ時点で終わりだ。ゲームじゃないんだからな」  
「わかつてる！ ほら、次出せ、次！」

金棒をぶんぶん振り回すエンドーを、グラソンは少々呆れて見つめていた。『VBT』をゲーム感覚で行なっているからではなく、バーチャルとはいえ、本物の痛みを体感してしまうトレーニングで、二度も『死』の痛みを味わったというのに、まだ続けようとする精神に、感心しながらも呆れているのだ。

「休憩にしよう。ぶっ続けて死んでると、気が狂うぞ」

「なに言ってるんだ！ ぶっ倒れるまでやるぞ、オレは……！」

「……………」

もしかしたらもう狂っているのかもしれない。とグラソンは思った。

「副チーフ。お時間はありますか？」

「S A A Pが階段を登ってきて言った。

グラソンは「ああ」と返事をしてS A A Pに寄った。

「今、一階のフロントに妙な客が来ています。若い男なのですが、この建物の中を案内してほしいと」

「断っておけ」

「そうしたのですが、引く様子はなく、責任者を呼んでくれと言うので」

グラソンは頭をかいた。

「……わかった。すぐに行く」

『V B T』のコンピューターの前にいるS A A Pに、「ドラゴンの相手をさせておけ」と指示を出し、グラソンは一階へ向かった。

トレーニングルームの扉横にある階段から、階下へ行き、途中のエレベーターを使って一階へ。

フロントに出ると、グラソンはすぐに、そこに立っている男に目をやった。

もともと『シラタチ』に、一般の客なんて滅多にこない。フロントにはいつも数人のS A A Pしかいないせいで、他の人物は目立つ。だが、その男はそれだけではなく、金髪でハンサムな顔立ちに、グラソンに負けないほどの長身。その身を青い服でまとい、緑色のマントを背に付けている。その格好が彼をさらに目立たせる。

「オレは副責任者のグラソんだ。この『シラタチ』に何か用か？」

「失礼、わたくしは『ハクト』と申します。最近、この組織の噂を

耳にしまして、ちょうど近くを通りかかったものですから、少し見物させていただけようかと」

男は紳士的な口調で言つて、ニコリと微笑んだ。

グラソンは男が肩にかけている、大きな皮袋を見た。

「あんた、旅人か？」

「いかにも。“賞金稼ぎの”旅人です」

「なるほど。それで、こんな組織に興味を持ったと？」

男はうなずいた。

「少し、お話も聞きたいですし、ついでに城内を拝見させていただきたく」

「ほう。まあ、今はそれほど時間を気にしてはいないから、少しくらいなら時間を割くことはできる」

「ありがとうございます」

男は笑顔のままお辞儀をし、背を向けて歩き出すグラソンの後に続いた。

## トレーニングルーム

ドラゴンを倒したエンドーは、「疲れたあ」と、床に大の字に寝転んだ。

銀色の金棒を短剣の状態にもどして、顔の上に持ち上げる。

それなりに使い方を覚えてきた。

この短剣は、埋め込んである『陰の石』と魔力が同化し、力を実体化させる。

エンドーの持つ魔力の形は、『金棒』。八角形の長い金棒だが、重さは短剣と変わらない。そのおかげで楽々振り回すことができる。

この金棒 『発破鋼』は、エンドーの意思で、触れた物を爆破させることができるのだ。

「（何事も鍛錬、鍛錬！）」

エンドーは気合を入れなおして起き上がった。

「グラソン！ 次だ次！」

上のガラスに顔を向ける。が、その向こうにグラソンの姿はない。

「ん？ どこ行った！？ あのヤロー！」

ぴよんと立ち上がり、駆け出す。バトル直後だとは思えない気力だ。

「グラソンはどこ行った!？」

『傍観室』の階段を駆け上がり、S A A Pに訊く。

「つい先ほど、一階へ向かわれました。なんでも、妙な客が」

エンドーは話を最後まで聞かず、すでに去っていた。

「くっそー！ グラソンのやつ、オレの戦闘を指導してやるとか言  
つて、黙ってどこ行きやがった!？ 見つけたらタダじゃ（あ、

でもオレ、グラソンに勝てないや）……でも見つけたら、ど頭一発  
ぶん殴って（無理か）……せめてチョップかまして（これ

も無理そう）……入魂のデコピン食らわせてやる!! ……って、  
なんでオレこんなに怒ってんの？」

ぶつぶつ言いながら一階へ向かうエンドーだが、一度も階下へ行  
ったことがなく、階段を下りたところで、

「 よしっ！ 迷った！」

パンと手を叩いた。

「（適当に歩いとけば大丈夫だろう。どう迷っても、ここ本部だし）」

口笛を吹きながら歩き出した。

と、迷いながらも、どうにかエレベーターを発見し、一階へ到達。そこからまた、さ迷い歩いていると、十字になった廊下の右方向から、人の声が反響して届いた。

「お、グラソンだ」

エンドーはその声へ向かって走り出そうとし、もう一人の声に気付いて踏みとどまった。

「そうですか。では、お二人でこの組織を立ち上げたとき？」

「そうだ」

「しかし、この城はずっと以前からここにあったようですが？」

「まあな。もとは知り合いの所有物だったが、そいつが死んでしまつて、オレらが引き継いだ」

「ほほう……」

エンドーの知らない男。どうも怪しいが、グラソンが平気で話しているのなら、安全なのだろうと、とりあえず様子を見ることにした。

男が十字廊下の真ん中で立ち止まり、エンドーが潜む廊下の反対  
細い廊下の先を見つめた。エンドーは柱の陰に隠れて、男の  
背中越しに同じ所を見た。

奥に、やたら大きな扉がある。一人で開くには苦勞するであろう、  
重厚そうな扉だ。おまけに、それに見合った大きな錠前でしっかりと  
閉ざされている。

「ここには何が？」

男が訊く。

「ただの地下室だ」

グラソンは男の前に立ち、「もういいか？」と言つ。

「そろそろ時間だ。すまないが、今日のところはお帰り願う」

「そうですか、それは残念です。……ところであなた、この城の所有者の知り合いだったと、おっしゃいましたね？ では、それよりもずっと以前、この土地に何があったのか、ご存知で？」

「……知らない。だいたい、オレが産まれる前の話だろ」

「ふふ……、そうですか」

男は肩にかけた皮袋をぐっと握った。

「オレからもいいか？ あんた、実は紳士じゃないだろ？ そ

のしゃべり方、不自然だぞ」

「そう思いますか？ ……残念ですね。ここへ来るまで、けっこう訓練したんだけどなあ。怪しまれないようにと思って、さ」

「……！！」

グラソンは腰の金属棒に手を伸ばした。

ガチインツ！！

火花が散った。

振り下ろされた皮袋を四本の金属棒が受け止めている。

「（ 重い！？ ）」

皮の袋がたやすく破れ、散り、白い三本の鉤爪が現れた。

それを弾き、飛び退いたグラソンの足元に巨大な鉤爪が、ギャシヤン！と落下した。

鉤爪には鎖が繋がっている。男はその長い鎖を右腕に巻きつけ、左手で鉤爪を引いて、ぶんぶんと頭の上で回す。常人が軽々と振り回せる大きさではないのだが。

「よく気付いたな」

男は不敵に笑う。

「紳士の真似なら……、もっと上手いやつがいる」

「ふ、そうか。それは存外　　だ！」

鉤爪が飛ぶ。

避けたグラソンの横で、砕けた床の破片が舞った。

男は鉤爪を引きもどし、再び頭上で回す。

「狭い廊下じゃ、オレのほう不利ってわけか」

言って、グラソンは「ふっ」と口元を吊り上げた。

「　　ん!？」

男は反応したが、振り回す鎖のせいで行動が遅れ、魔力球の爆発に吹っ飛ばされた。

「ぐあっ！」

床を転がる男。だが、すぐに受け身をとるようにして体勢を持ち直す。

「くっ……!　爆薬か……!」

暗闇から、金棒を肩に乗せたエンドーが歩み寄る。

「もう一人いたのか」

「何者だ？」

エンドーが男をにらむ。

「どうやら、分が悪いのはオレのほうだな」

騒ぎを聞きつけたS A A P達の足音が近づく。

男は鉤爪を担ぎ上げると、舌打ちを残して逃げ去った。

「まて！」

「京助!　追うな、一人では危険だ！」

叫ぶグラソンは、壁にもたれて腕を押さえている。

「大丈夫か?　怪我したのか？」

「いや……」

出血はしていない。打撲だろうと、エンドーは思った。

「何かありましたか」

一足遅く、S A A P 達が駆けつけた。

「侵入者だ。追ってくれ」

エンドーは彼らにそう言つと、グラソンを支える。

数人のS A A Pが、男が逃げていったほうへ走るが、おそらく捕らえることはできないだろう。

「窪井の手の者かな？」

「……違うな。あれはただの、ちんけな“侵入者”だ。気にするな」  
エンドーはじつと、目を細めてグラソンを見た。

「グラソン……」

「なんだ？」

「……髪、立ってる」

「静電気だ」



## 15：信じる

宗萱チーム、大林チームが本部に帰還したのは、正午を少し回った頃だった。

全員そろって、町の食堂で昼食をとるが、グラソンは侵入者の話を一切しなかった（あの後、男は城から逃げ去ったと報告が入った）。いつもどおりに振舞うグラソンを見て、エンドーもそれに合わせる。

なぜ言おうとしないのか、エンドーにはわからない。グラソンにとって 『シラタチ』 にとって、今は窪井に関わる情報以外はどうでもいいことなのかもしれない。どうでもいい出来事に振り回されている余裕がないからかもしれない。一応報告しておくべきだと彼は思うが、グラソンがそうしないのなら、勝手なことをするわけにはいかない。

それに、今、目の前にある情報は、『シラタチ』 にとって、とても重要なことなのだ。

「『ネーベル山』か……」

食事を終えたグラソンが、一息つく代わりに言った。

「急ぐべきだと思う。情報を吐いた三人が隠れ家にもどれば、警戒強化される。予告の期日は残り三日。時間的余裕もない。乗り込むのは、できるだけ早いほうがいいだろう」

「そうですね……」

「今日ならまだ時間はありますよ。どうするんですか？ 早いほうがいいのなら」

「いや、それでは焦りすぎだ。……オレの考えでは 乗り込む

のなら明日がいい。この情報がおとりだという可能性も踏まえて、時間は残しておきたい」

グラソンが、パンにかじりついていて、エンドーに目を向ける。エンドーは口をもぐもぐさせながら見返した。

「オレと京助が、これから周辺の調査に向かおうと思うのだが？」

「ふおおお？（オレも？）」

動かす口を止め、エンドーは目を丸くする。

「人数は少ないほうがいい」

「……………」

宗萱は思考を巡らしているように、すぐには何も返さない。

彼が何を考えているのか、マハエはわかっている。『グラソンを信用したい』そんな気持ちとは裏腹に、拭いきれない不安がある。

ちくちくとする胸をぎゅっと握った。

「……………いいでしょう。調査は任せます」

宗萱は言った。

大林も、うなずいて一言。

「気をつける。すきを見せると噛み付かれる」

「忠告か？」

「あいつは、あんたらが思っているほど、甘くはないってことだ」

「……………気をつけるでしょう」

フーレンツの南西にある、目的の『ネーベル山』へは、港町よりも、本部から出発したほうが時間は短縮される。

それでも徒歩でやすやすと行ける距離ではなく、馬が必要になる。一台だけだが、『シラタチ』が馬車を所有していたおかげで、それは解決。二頭立ての馬車で、グラソンとエンドーはさっそく本部を出発した。

屋根のない馬車は三人乗りで、後部には二人用の椅子が備えてある。馬を操るグラソンの後ろで、エンドーは椅子の真ん中を陣取って、青空を仰いでいた。

呼吸のたびに、木や葉の香りが鼻腔を満たす。

「夕飯までに帰れるか？」

「今日は適当な町で宿を取ろうと思う。明日、その町でみんなと合流だ」

それを聞いて、エンドーは不満そうな顔をする。

今夜は友人二人とトランプでフィーバーするつもりだったのに、なぜこんな馬が合いそうにないやつと、ともに過ごさねばならないんだ？ そう、顔に書いてある。

が、前方ばかりに目を向けているグラソンが、そんなエンドーに気付くはずもなく。

エンドーは思いつ切り不満な顔をしてやった。

「それにしてもよお、馬車まで操れるとはなあ……。弱点なしか、あんたは」

「なに、簡単なことだ。お前も覚えておくか？」

「けっこうです。オレはこうやって、のんびりしているほうがいい。

……それより、あまり飛ばさないでくれよ、オレ乗り物酔いするからよ。ただでさえ揺れる道だったのに」

「林道だから、しかたない。広い道に出たら容赦なく飛ばす」

「……今のうちに寝とくかね……」

それが得策だと思い、エンドーは一つ息を吐いて目を閉じた。

パカパカ、ガタガタ

二頭の馬がしきりに地面を踏む音、車輪が転がる音。しばらく、

それだけが続いた。

エンドーは座ったまま、じきに眠り、小さないびきをかいている。それを確認し、グラソンは案内人に声をかけた。

「おい、案内人、いるんだろ？」

「……はい。どうしました？」

「……信用ないみたいだな、オレは」

「何が、です？」

案内人の疑問符に対し、「わかってるんだろ？」と言うように短く笑うグラソン。

「お前は監視役つてところだろう？ オレは『シラタチ』に信用されていない。当然のことだ、デンテールの手下だったオレを、信用できるはずはない」

「………気付いていたんですか」

「合理的なことだ。オレも、自分は信用されるべき存在ではないとわかっている」

「あ、勘違いしないでくださいよ。宗萱さんはあなたを信用しています。もちろん、他の誰だって。……ただ」

「人は感情だけで人を信用できる生き物ではない。わかっている」

車輪が小石を踏んで、大きく揺れた。

衝撃で横に倒れたエンドーが、ゴツ。と鈍い音で頭をぶつけたが、変わらずいびきをかいている。

「やめましょう、この話は」

「ふん。“兄弟”を疑うっていうのは、気が引けるか」

「……気分が悪いです」

「忘れてくれ。お前は、オレの話の聞かなかつた」

「そうします。………ただ、これだけは、もう一度言わせてください。

宗萱さんは、あなたを信用しています。わたしも、あなたを信

用します。ですから、あなたもわたし達を信用してください」

「……ふっ」

グラソンはうなずく代わりに、笑ってみせた。

三時間、馬車を走らせ、ようやく『ネーベル山』のふもと町に到着した。

「うあー、腰が痛い……」

あくびをし、腰を叩きながらエンドーが馬車を降りる。

固まった全身の筋肉を伸ばそうと、ぐうっと身体を反らしたとき、深緑の木々が目に入った。

「あれが、例の山？」

「そうだ」

『ネーベル山』は、首を傾けて見上げるほど大きな山ではない。だが敵はそのどこかにいる。そう思うと、山の周囲を黒い霧が取り巻いているように見え、エンドーは身震いした。

そして、今二人が立っているのは、その恐ろしい山を背景にする町の入り口。

町は小さく、その分、人の気配も少ない。だが食事処や宿はあるらしく、一瞬、山中での野宿を想定したエンドーは、心の底からほっとした。

グラソンがさっさと歩き出して言う。

「ここで待ってる」

「え、どこ行くんだよ？」

「寝袋買ってくる」

「は！！！？」

「冗談だ。宿を探してくる」

「……笑えねえ……」

グラソンがもどつてくるまで、数十分かった。その間、エンドーは馬車の座席で眠りこけていた。

馬車が動き出した振動で目覚め、前の席で手綱を握るグラソンに開口一番、

「遅い」

「すまん。情報収集だ。町の連中に、山へ入るためのルートや、登山道について尋ねていた。迷うのは嫌だろ？」

「たしかに。ところで、明日本部の連中はどうやってここまで来るんだ？」

「乗合馬車が、地方をいくつも走っている。朝早く、港町から乗り継いで来る予定だ」

「そうか。それなら寝坊しても平気だな」

「あれだけ寝て、まだ寝坊する自信があるのか？」

「まだまだ寝るぞオレは」

エンドーはふんぞり返った。

馬車は町中を走り、宿の前で停止。

宿の主人らしい男に馬を預け、二人は山へ向かう。

「見張られて……、ないよな？」

エンドーが左、右へと顔を向ける。

「さあ。そうだとしても」

「オレ達は行くしかないってか？ ああ……、今握っている紐の先が、大吉か大凶のどちらか、とはな……」

「ふん。大凶でも、大吉に変えればいいだけのことだ」  
気を引き締める。と言って、グラソンは足を速めた。

「そういう考え方も……、あり、かな？」

不安をものともしない人物がパートナーだと、じつに落ち着く。  
不満は残るものの、このチーム割は悪くないと、ようやく思えるエ  
ンドーだった。

## 16・手を挙げる

『ネーベル山』に踏み入ったグラソンとエンドーは、登山道に沿って進む。といっても、登山のための道などというものは名ばかりで、雑草だらけ、穴だらけのただの足場でしかない。

小さな山だ。わざわざ登山に訪れる者も少ないのだろう。荒れるのもしかたがない。

「登山口の場所を尋ねたとき、物好きだな、と言われたよ」

グラソンが苦笑う。

たしかに、こんな荒んだ山を登山するなんて、普通に考えれば物好き以外の何者でもない。

二人は足元に気をつけながら、狭い道をずんずん進む。

地面が悪いうえに、上り坂だ。まともに歩ける道に出たときには、エンドーはすでに息が上がっていた。

「この道……、また下るのかよ……？」

「他に道がないならな……」

「窪井組の連中、本当にこんな道を使ってるのか？　　」　　つたく、

舗装くらいしとけっつーの」

悪態をつくエンドーだが、グラソンがマイペースに先へ進むを見て、だらしな足取りで追いかけた。

だが、「ファイター」と応援する案内人に悪態をつく元気はあるようだった。

そんな調子で上り坂をクリアーし、平坦な道。

さすがに山頂は遠く、また先のほうに上り坂が見える。だが途中、雑草がなぎ倒されてできた、わき道があった。



「人が通った跡のようだ。手下は、登山道から外れた場所、とか言っていたらしいな」

「……ただのケモノ道だったらどうするよ？」  
「行く」

グラソンは即答する。

「へいへい……。言うと思いましたよー」

ため息一つでエンドーは了解し、グラソンに続いた。

「うわっ……。やぶ蚊だ」

「騒ぐな」

鳥の声に心を癒す余裕もない。

ガサガサと草を踏み踏み、わき道を進んでいくが、ここの場所  
で警戒しなければならぬのは『トラップ』だ。罠を張るのにもっ  
とも適した場所といえば、森の中だろう。

「そこだ。木の間に糸が張ってある」

草の中に巧妙に仕掛けてある『糸』。おそらく鳴子に繋がれてい  
るのだろう。グラソンはそれを慎重にまたぎながら、後ろのエンド  
ーにも警告する。

「こんなものより、園長のトラップのほうがもつと恐ろしいぜ……」  
トラップは人の心理を理解した上で仕掛けるものだ。どういう局  
面で、どんなスキができるかを読むのだ。

つまり、それを見破るには、仕掛けた人物の心理を理解するより  
も、自分自身の心理を感じなければならぬ。

足元に張ってある三つ目のトラップをクリアしたとき、エンド  
ーは思い出した。

それは、いつか園長が言っていた言葉。

『人はスキをつくらないように警戒したとき、まったく逆のところ  
で大きなスキをつくってしまふ』

今までの糸は、すべて足元に仕掛けてあつた。つまり、今もつと  
も警戒しているのは足元だ。

まったく逆のところ、大きなスキができて……。。

「……………！ グラソン、前……………！」

その言葉に、グラソンはピタリと静止する。首のギリギリのこ  
ろに細い糸が張ってあつた。

「油断した……………」

ゆっくりと体をもどす。

足元に警戒しすぎると、高い位置にある糸に気がつかない。施設  
で、何度か同じようなトラップに引っかかったことをエンドーは思  
い出した。

「助かったぜ、園長……………」

二人は深呼吸して心を落ち着かせた。

やぶの中だと、早く抜け出したいという心理が働いてしまふ。こ  
こで重要なことは焦らないことだ。

「……………帰りもここ、通るの？」

「他に道がないならな」

「……………」

このトラップ、何か変だ。

エンドーがそう感じたのは、すべてのトラップを潜ってやぶ道を抜けたときだった。

「お前も気付いたか。たしかに、このトラップは妙だった。まるで、“侵入者に対して”仕掛けたトラップのようだ」

「ああ。単に人が近づくのを警戒していただけなら、あんな裏をかいた罠は張らない。できる限り怪しまれないよう、気付かれないように仕掛けるのが普通だ。つまり」

「警戒すべき人物　オレ達がここを訪れることを、敵は知っているのかもな」

平然とグラソンが言った。

「やっぱり、逃げた手下が……？」

「それにしても警戒が早すぎる」

「うーん……、思い過ごしかあ？」

疑問で脳の思考領域がいつぱいになり、膨らんでパチンとはじけたところで、エンドーは先を見た。

「とにかくだ。　あれが例の山小屋だな？」

彼が視線を投げかける先には、古びた木造の建物が。

だが、不用意に近づいてもよいのものか。

「ヨツくんも連れてくるべきだったんじゃない？　観察するなら、あいつの魔力は便利だぞ」

「心配はないだろう。あの山小屋から人の気配はしない。確認するのは、地下通路の存在だ」

エンドーは「は？」とグラソンを見た。

「それだけ？」

「それだけだが？」

「どういうことだ？　もっと詳しく調べなくていいのか　おい、待てよー」

用心する様子もなく小屋へ近づくとグラソン。エンドーは、いやおうなく引きずられるようになる。

「落ちたな遠藤京助……。これじゃ、まるで忠犬じゃないか……」  
独りで嘆いていた。

忠犬はご主人様と苦楽をともにする。  
ご主人様がマヌケだと、犬もマヌケになるものだ。

エンドーはこの瞬間ほど、グラソンという男の勘を本気で疑うことはなかった。

小屋のドアを開けたグラソンと、その後ろのエンドーに向けられる何本もの刃物。

いつの間にか背後も、ぐるっと囲まれていた。

「『ニュートリア・ベネツへ』によつこそ」

手下の数は十数人。微塵でも抵抗する気を見せれば、『マル注R 指定的芸術作品』の出来上がりだ。

「（う……、なんかデジャヴ……）」

ホールドアップ。

その頃、『シラタチ』本部の休憩室では

宗萱、マハエ、ハルトキが、のほほんと茶をすすっていた。

「静かだねえ〜」

ハルトキが言うつと、

「平和だねえ〜」

マハエも言うつ。

「エンドーちゃんがいないと、空気が穏やかだねえ」

ズズズ……。茶をすすする音。

「今ごろ、登山を始めてるかな？ いいなあ、季節的にも最高の時期だし〜」

うらやましそうに宙を見ずえるマハエ。

本部に残った四人は、完全にヒマしていた。

グラソン達の報告待ちなのだから仕方がない。

少なくとも茶をすすする三人はそうなのだが、大林はテラスに出て自主トレーニングをしている。

そのうち、マハエが畳に大の字になり、つぶやく。

「それにしても 強敵との戦闘の後に、こうやってのんびりしちゃうと、なあんもする気が起きないなあ〜」

だがそのとき、グラソンとエンドーにくっついて行っていた案内人が、報告のために帰ってきた。

「ただいまもどりましたー」

「よおー、どうだった？ 隠し通路とやらは見つかったのか？」

「はい、バッチリです。例の手下が言っていたとおり、登山道の途中にわき道がありまして、その先で山小屋を確認しました」

宗萱がうなづく。

「わかりました。 グラソンと遠藤さんは無事ですか？」

「無事ですよ。今は窪井の隠れ家と思しき建物の中で、助けを待っているところです」

「……………」

「……………」

沈黙するマハエとハルトキ。

宗萱だけは恐ろしいほど冷静に、空になった湯呑みを、トンとテーブルに置いて、これまた冷静な声で言う。

「捕まっつてしまいましたか」

「はい。」

「わかりました」

立ち上がる宗萱を、マハエが慌てて引き留める。

「ちょ、ちよつと待つてくださいな、宗萱さん。……………なに、捕まっつたの？ 彼ら」

「そのようです。ですが、心配はいらないでしょう。すぐに始末されることはないでしょうから」

微かに笑い、休憩室を出て行った。

残されたマハエとハルトキは、大きな疑問符を頭上に浮かべ、互いの顔を見合う。

「……………まあ、大丈夫でしょ。“あの” エンドーとグラソンだよ」

そのハルトキの一言に、なぜか大きくうなずいて納得してしまうマハエだった。

17：寒い、暗い、ヒマ

窪井の隠れ家。 監禁室

「大人しくしてろ、マヌケめ」

窪井の手下が、あざ笑いながら立ち去った。

「言い返す言葉がございません……」

エンドーは鉄格子の中で、冷たい石の床に正座している。

上のほうで、鉄扉が閉じる重たい音が痛く響いた。

この監禁室は、母屋である広い建物とは別に建っている、監禁専用の建物だ。捕まった二人は、鉄の扉を開くとすぐ足元に現れた、地下へ続くらせん状の階段を乱暴に歩かされ、それ以上乱暴に牢にぶち込まれた。

エンドーは自分の悲運を嘆いていた。

いや、このチーム割を、心の奥底から嘆いていた。

「さて、と」

横でパートナーが、あくびをして床に横たわった。

エンドーのこめかみに血管が浮き出る。

「おい立てや、色黒男お……！ 誰のせいでこうなったと思うとるんじゃあ……！？」

グラソンはエンドーに背を向け、ひらひらと手首を動かす。

「あんたのせいだろ……！？ あんたの勘に従ったせいで、こうもあ

「つさりと捕まったんだらうがぁー！ー！ー！」

「……捕まったんじゃない。捕まってやったんだ」

「強がつてんじゃねえー！ー！ー！ー！ 完全にあんたのミスだよ！！！」

「寝心地が悪いのか、起き上がってあぐらをかくグラソン。足に肘をついて話し始める。

「結果、ここが窪井の隠れ家であることを確信することができた。

「オレ達が敵に捕まっても、案内人が本部の宗萱達に知らせてくれる」「あぁ、そういうことかぁ。つまり、捕まるのも計算のうちだった。そのおかげで情報の確信を得て、おまけに、無理なく内部に入り込むこともできた。なるほどぁ。………一発殴らせるや」

「怒りを宿した目をグラソンに向ける。「そんなら初めから、そう教えておけ！」と。

「……悪かったな」

「あん？ なんか言ったか？」

「ふん」

「………」

「エンドーは小さく息を吐く。吐いた息が、ろっそくの明かりの下で一瞬白くなった。

「寒い……」

「地下だからな」

「きつと、あんたがいるせいだ。この雪男」

「当然、手元に武器はない。捕まったさいに取り上げられ、今は鉄格子の外の保管庫の中だ。」

「さすがに衣服までは脱がされなかったが……。」



エンドーの服装は、シャツが半袖になったという部分を除けば、前回、前々回と同じ、黒ジャケットと真っ赤なズボンだ。そんなエンドーでも、寒さで露出した肌をさすっているというのに、上半身ノースリーブ一枚だけのグラソンは平気な様子で腕組みをして、壁にもたれて座っている。

牢に閉じ込められて数時間は経った。もっとも、エンドーにとっては二日経ったに等しい。

中学生時代に入っていたスポーツ部の大会で、自分の出番はなく、応援席に座って退屈な競技を延々と眺めていたときは、一時間がつつもなく長く感じられた。だが、今はそれ以上に最悪な気持ちだ。

寒い。薄暗い。おまけにパートナーは無口。

「（おっと……、腹も減ってる……）」

時間的には夕飯時だろう。が、ここの連中が彼らのために食事を用意してくれるという保証はない。

案内人でも声をかけてくれれば、少しは気が休まるだろうが、彼はいない。深夜近くになると、スリープモードに入るらしいが、まだまだそんな時間ではない。本部の宗萱達のところにいるようだ。

作戦のために捕まったことを、仕方がないな、と思い始めていたエンドーだが、腹の虫が鳴く声が、いよいよ悲鳴に変わり始め、自分を滅茶苦茶な作戦に引きずり込んだパートナーに対し、再びふつふつと怒りが湧き上がってきた。

エンドーの殺気に気付いているのかいないのか、グラソンは変わらず腕組み、静止状態。

奇妙な男だ。

一日そばにいて、エンドーは何度感じたことだろうか。そんな男に突っかかってもよいものか思案しているとき、上のほうで鉄扉がゆっくりと開く音が聞こえた。

「食事だ、食事だぞーっと」

パンが入ったバスケットを持って、手下が階段を下りてきた。

「ほらほら、腹減っただろうー？ 焼きたてのパンだぞー」

香ばしいパンの匂いに、煮え立ったお湯の火を止めたように、怒りは静まった。手下がバスケットを床に置く前に、カメレオンが舌を伸ばすが如く、エンドーの手が一瞬で温かいパンを口に運んでいた。

「おうおう、食い意地張ってんなあ。敵が出す食事だぞ、もう少し警戒したらどうだ？」

「……………おええ……………」

「吐くな吐くな！ 毒なんて入ってねえから！」

口の中の物をとりあえず飲み込んで、エンドーはほかほかのパンを見た。

「なんで、こんな親切な食事を？」

「頭領に言われてんだ。侵入者は“丁重におもてなししろ”ってなかつこつつけるように、ニヤリと笑うが……………」

「いや、意味が違っ……………」

ゴホン。と咳をして、言い直す。

「美味い。不良のくせに、腕のいいコックがいるんだな」

「ふ……………。そうか？ オレが作ったんだぜ。実家がパン屋なんだ」  
手下が自慢げに語る。

「へえー……………なんで、帰る家があるのに……………」

「オレは次男でな。店は兄が継いで、オレは居場所をなくした。…一年と少し前、頭領と出会って『ニユートリア・ベネツへ』に入った」

そこでいったん口を閉じてから、独り言のように言う。

「居心地が良かったな……。昔は……」

手下は立ち上がり、「オレ達もメシの時間なんだ」と、手を振って去っていく。

「ここ寒いな。後で寝袋でも持ってきてやる。オレのパンをほめてくれた礼だ」

「マジで？ そりゃ助かる」

ほっとした顔で手下を見送った。

どんなヤツにも過去はある。それはけっして否定してよいものではない。理由があつて、今に至るのだ。

早く終わらせたいたい。

このとき、エンドーは強く思った。

「……おい、グラソン。食わないならオレが食うぞー」

バスケットに残っていたパンを掴み、ためらいなく口へ持っていく。エンドーの腕が氷に包まれた。

「ッ、冷てっ!! 冗談!! 冗談だつて!!」

エンドーの手からパンを奪い取ると、グラソンは壁際にもどった。しもやけになりかけた腕を息で温めながら、エンドーは尋ねる。

「ふー、冷てえ……。さつきから何してんだ？ ずっと黙ってよお」

「地上にある建物の気配を探っている」

「はあ？ どうやって？」

「魔力は使いようによって、レーダーにもなる。集中すれば、敵の覇気から強敵がどのくらいいるのか知ることできる」

「器用だな……。それで、何かわかった？」

「さすがに地下からでは困難だ」

エンドーも同じように腕組みをして試してみるが、近くを駆け回るネズミの気配しか探れない。あきらめて横になった。

「早く寝袋プリーズ……」

固く冷たい床の上は、この上なく寝心地が悪い。

せめてパートナーがもう少しおしゃべりだったなら、会話で気を紛わすこともできただろうが……。

グラソンは、まるでエンドーなど存在していないかのように、ただただ自分の沈黙を守るだけだ。エンドーから話しかけられないかぎりは。

「……グラソン」

「なんだ？」

「……自分は独りだなんて思わないでくれ。……みんな、仲間なんだからよ」

背中をグラソンに向けて、少し照れくさそうに言う。

「馬車での話、聞いてたのか」

「オレにはいまいち自覚がないんだ。オレ達がミスれば、この世界の紐は切れてしまう。……だから、簡単に誰かに気を許したり、スキを見せたり、しちやいけのないのもわかってる。けど……、どう強がったって、やっぱりガキだから、理屈とかわかんねえ。信じたいと思えば信じるし、そのときはそのときだ、って思ってる」

「……それが普通なのかもな」

感情のこもっていない声でグラソンは言った。

彼は造られた存在。普通の人とは違う。いくら頼りがいがあるうと、人生経験はエンドーのほうがはるかに豊富なのだ。

だが、グラソンの困惑に対し、先輩として何かを教えることも、相談に乗ることもできない。彼らにしか理解できない悩みなのだ。

「……ん？」

グラソンが何かに反応した。

「どうした？」

「……今、大きな覇気を感じた」

18：到着、到着！

宗萱チーム、大林チームの四人は、早朝から乗合馬車を乗り継いで、正午少し前には『ネーベル山』のふもと町に到着した。

「さて……」

マハエは山を眺めて緊張で震える息を吐いた。

うす雲が広がる空の下に、『ネーベル山』は控えめにそびえている。

「ちょっと恐いな……」

マハエの横で、ハルトキも同じような心境だ。宗萱もあまり顔には出さないが、少なからずは二人と同じだろう。

だが一人だけ、彼らとは違う心境の人物もいる。

大林は、緊張する彼らよりも更に険しい表情で、山のどこか窪井がいるであろうどこかを探すように見つめている。

「まずはどこかで食事を。それからです」

あくまで冷静な宗萱が、マハエとハルトキの心を鎮めてくれた。

窪井の隠れ家、地下監禁室

昨夜と同じ手下が、昼食を運んできた。朝食もそうだったが、やはりパンだ。

このところ主食はパンだけだが、エンドーは文句一つ言わずに食す。寝袋にくるまって。

「お前はいいやつみたいだが、オレは頭領には逆らえない」  
去り際に手下が言った。

「これからお前達がどんなにヒドイことをされようと、助けるわけにはいかない」そういう意味だろうと、エンドーは理解した。期待はしていなかったが、それを聞いて少しばかり気が沈んだ。

「宗萱達がふもとの町に到着した頃だろう」  
グラソンは体内時計で時間を計っている。

「オレ達を助けるために、もしもあいつらまで捕まったらどうするつもりだ？」

「心配はない。あいつらは助けには来ない」

「……へ？」

呆氣にとられる。

「助けに来ないって……、なんで？」

「正確に言えば、助けられる必要がないからだ」

そう言うと、グラソンは牢の扉に近づき、鉄格子から腕を出して鍵穴に指を付けた。

氷が形成される、パチパチという音の後に、扉が　　たやすく開いた。

「……………」

呆氣を通り越し、頭の機能が一瞬、停止する。

鍵穴の中に氷を形成し、簡単な鍵をつくったというわけだ。

つまり、いつでも脱出できたというわけだ。それも数秒で。

目の前で起こったことがあまりにも簡単すぎ、エンドーは頭を抱えてしゃがみ込んだ。

「少しの間はここで待機だが、武器は持っておけ」  
保管庫からエンドーの武器を取り、投げ渡す。

「従いますとも。万能魔力様の後ろにいれば、怖いものなしだ」  
ナイフとかハサミとか、便利な七つの道具がワンセットになった  
サバイバルアイテムを思い出していた。

最初から何もかもが計画どおりだったことを、まざまざと思い知  
った。

### 登山道、入り口

その道が名ばかりの登山道だということは、入り口を見ただけで  
もわかる。

賊が身を隠すには打ってつけなのかもしれない。

簡単な昼食をすませ、同時に打ち合わせもした。

実際に行ってみなければわからないが、案内人の情報で、やぶ道  
を抜けたところに例の山小屋があり、中から地下通路を進んで地上  
に出ると、そこに大きな門があるということがわかった。

門にはおそらく見張りが何人かいて、そこを突破しなければ侵入  
はできないが、そこはマハエとハルトキに作戦がある。

雑草、穴だらけの登山道を、グラソンやエンドーと同じよう  
に気をつけながら登り、わき道にたどり着き、トラップだらけのや  
ぶ道を抜けて、三十分もかからず山小屋に着いた。

二人はここで敵に捕まったが、今回は誰もいないようだ。



宗萱がゆつくりとドアを開ける。

山小屋の中は、まったく何も無い。ところどころ穴が開いている。薄い木の壁に、床はコンクリートのようなもので固められている。

少し調べると、大林が床の一部に、七十センチ正方形の小さな溝があるのを見つけた。

正方形の端と端に、持ち上げるためのものと思われる穴があり、マハエと大林が協力して、重たいフタを持ち上げた。

現れた地下通路は四角い空間で、周りはすべて山小屋の床と同じ素材で固めてある。広さは、大人が中腰で歩けるほど。

奥へ奥へと続いているようだが、視界は完全に闇に支配されている。

「大丈夫、見張りはしない」

『暗視』を発動したハルトキが知らせる。

「案内をお願いします」

ハルトキにそう言つと、宗萱は彼の後ろについた。

「『ニユートリア・ベネツへ』って、どういう組織なんだ？」

マハエが思わず疑問をもちます。これはいくらなんでも、手が込みすぎだと思つたのだ。

それに対しては誰も答えることができないが、大林が一つ言つ。

「謎の多いやつらだ。それはこの組織が活動を始めた当初からそうだった。長い間、敵対している『田島弘之』でも、やつらの本質は見抜けていない」

「……なんかオレらって、そういうのとはっぴかり関わってる気がするな」

そう言つが、「『シラタチ』という組織も例外ではない」とは、思つても言わなかった。

ゆっくりと、十分ほど歩いて地下通路の終点。そこには長いはしごがあつて、木の板が上の穴を塞いでいた。

宗萱が先に上がつて様子を見てから、すぐに合図を送る。

入り口と同じように重たいフタで塞がれていたら大変なことだが、板は簡単に持ち上がつて、全員が地上に出ることができた。

いっせいに背伸びをして、森の中の小さな道のようなその場所を見回す。

いや、そうではない。三方を切り立った高い岩の壁に囲まれ、その内側の木々の間にできた道だ。

そして、壁のないもう一方には案内人が言っていた、大きな門が立ちただかつていた。

「見張りはいないな」

大林が確認する。

門の外側には見張りはいない。おそらく内側だろう。その両方ないなんてことは考えられない。

一歩一歩を慎重に歩み寄り、門の前で耳を澄ます。

すると、中から人の声が聞こえた。二人の少年が話をしている。

「ヒマだよなあ、見張りつて。早く交代したいぜえ」

「お前、それ何回目だ？ 聞き飽きたよ」

「三十七回目」

ため息の声。

「あの噂だけど、お前どう思う?」

「あの噂あ?」

「掴まえた二人のこと。わざと捕まったんじゃないかとか、噂が流れてるだろ」

「そうなのかあ? ははは、それはないと思うぜえ。そんなことして何の得があるんだ? どっちにしても、牢を抜けることはできないだろ」

「それもそうか」

納得し、それから思い出したように言う。

「……そういえば、“あの三人”帰ってこないな」

「捕まっただらうぜ、『シラタチ』によお。だいたい、たったの三人でどうにかできる連中じゃねえ。大林一人襲うにしても、二十人は必要だぜ」

「でも、例の『レッド・クロウ』も一体連れて行ったんだぞ? あの『地中兵器』も」

「あなどれない連中だ。それに、やつらに情報がもれてる。あの三人が吐いたとしか思えねえ」

「そうだな。　　ったく」

門を挟んで話を聞いていた四人。

門の向こうに、見張りは二人。それ以上の気配は感じられないが

……。

「さて、どうやって入るつもりですか?」

宗萱がマハエとハルトキを見る。二人は自信満々にニヤツと笑った。

そして彼らよりも一歩前に出て

「ちわ〜!!! 宅配屋ッス〜、開けてください!!!」

門の向こうへ 叫んだ。

……………冷たい沈黙。

「駄目か」

「当然です」

宗萱と大林は今までにないほどの、深い深いため息をついた。

だが向こうの見張りに反応は 向こう側で、かんぬきが外される音がした。

「まさか……………!？」

思わぬ出来事に、全員が身構えた。

ギギギ……………。と、門の片方がゆっくりと開いていく。

門の半分が完全に開いたそこに、二人の男の姿があった。

「よつこそ、『ニユートリア・ベネツ』へ」

グラソンとエンドーが怪しい微笑みで出迎えた。

## 19：魔王の真似事

気絶していた見張り二人を草陰に隠し、新たに侵入したマハ工達が、グラソンとエンドーを凝視した。門を再び閉じ、侵入の痕跡を消す。

「助かりました。二人が見張りを倒していてくれて」

宗萱が頭を下げると、エンドーがふんぞり返って、

「どういふ方向に考えれば、あんなバカな作戦で侵入できると思うんだ？」

ケラケラと笑う。

「……………」  
マハ工とハルトキは反省。　しながら、拳を震えるほど固く握っていた。

「そちらは大丈夫でしたか？　敵に気付かれていませんね？」

「ああ。監禁室入り口の見張りは、気絶させて牢に放り込んでおいた」

「　　ですが、気付かれるのも時間の問題です。早く隠れ家内部に侵入し、窪井を探し出してください」

案内人が言う。

全員、目の前にある木造の建物を眺めた。

しっかりとした造りの建物だが、二階はない。一階分の広さは確認できないが、どこかに窪井がいる。　　もしくは、地下があるのだろう。

目の前にドアのない入り口があり、そこからの侵入は容易だ。

「監禁されていた建物の付近にも、ドアがあった。おそらく、まだ何箇所が存在するだろう」

「……そうですか。ではチーム行動ですね。まとまって行動するのは目立ちますし」

「よし。クジで決めよう」

エンドーが地面に『アミダ』を描き始める。

「オレと京助は、もどって発見した入り口から侵入する」

「では、大林さんと春時さんは、反対側から入り口を見つけてください。わたしと真栄さんが正面から」

「あれ？　もしかして『アミダ』知らないの？　阿弥陀クジ」

エンドーはすでに自分の名前を書いている。

「行くぞ京助。オレ達はこっちだ」

グラソンはエンドーを引きずりながら建物の左手へ。

「おい待てよー。男というのは腕だけじゃダメだ。ときには運を頼ることも必要に」

「後で合流しよう」

「ええ」

グラソンとエンドーが左側、大林とハルトキが右側へ行き、それを確認後、宗萱とマハエは正面入り口から隠れ家　母屋に侵入した。

「……暗いなあ。昼間なのに」

正面入り口からまっすぐ奥へ続いている廊下に窓はない。建物の中央を突っ切っているのだから当然だが、そのために灯されるはずのロウソクに、火は灯っていない。

おまけに、壁は全体的にこげ茶色の木で、床は黒い石だ。

窪井という男は、デンテールと似たような趣味らしい。と、マハエは思った。

「真栄さん。入り口を見張っていた手下が話していましたよね。」  
あの三人が帰ってこない」と

「……そういえば、そんなこと言ってたっけ」

「『あの三人』とは、『ヘルプスト』の手前で我々を攻撃した者達でしょう。その三人がまだここへ帰っていない……」

「と、いうことは……」

「敵は、我々が侵入することをわかっていたようですが、それは彼らの報告によるものだと思っていました」

「……えっと、そうではないとすると　もしかして『シラタチ』

に内通者が……？　　八八、まさかね」

「まあ、敵がこちらの動きを知る手立てはいくらでも考えられます。我々が常時見張られているかもしれないということも」

マハエはギクリと身を固めた。

「だとすれば、オレ達はやつらの手の上で踊らされてるってことじゃ？」

「すみません、考えすぎですね。極めて低い可能性です」

それから会話をひかえ、今の行動に集中する。

廊下は突き当たりから左へ続いていた。突き当たりには引き戸があり、奥からは人の声が聞こえる。

「人の気配がある場所には近づかないように」

「了解」

廊下にしたがって左へ折れ、いくつかの部屋の前を通ったとき、すぐ横にあるドアのノブが、ガチャリと鳴った。

二人は飛び退き、数歩離れて構えた。

間もなくドアが開き、手下が一人出てきたが、二人に気付くことなくドアを閉めると、彼らが進もうとする先へ歩いていった。

「危ね……。全身黒の宗萱さんは暗闇に強いな」

「あの手下、どこへ行くのでしょうか？」

「付いて行ってみますかい？」

手下はすぐ先で、右に曲がった。少し間を置いてから、二人は角から顔をのぞかせた。

「……あれ？」

そこに、手下の姿はない。見失った。

だが、その廊下にはドアも曲がり角もなく、突き当たりの壁があるだけだ。つまり、行き止まり。

「どこへ……？」

「隠し扉でもあるんじゃない？」

マハ工は慎重に、壁に手をつけて歩く。宗萱も反対側の壁を調べながら。

行き止まりの位置まで歩くが、怪しい箇所はない。と、一番奥の壁に触れようとしたマハ工の手が、壁をすり抜けた。

「うわっ……！」

つい大きな声を出しそうになり、慌てて口をふさぐ。

「この壁は……、立体映像ですね」

壁に突っ込んだ手に、光が当たっている。

「そんな……、この世界にそんな技術は」

「窪井はデンテールのデータを持ち出したのですよ」

「あ、そうか……。その中にこういう技術の資料もあって、それを真似たと。……無理がない？」

「たしかにそうですね。この世界の住人に、超高度な技術を真似ることなど……」

本当に『ニュートリア・ベネツへ』とは、どういう組織なのか……。疑問は深まるばかりだった。

ともあれ、消えた手下の謎が明らかになった。

無駄話は置いておき、二人は虚像の壁の奥へ踏み込んだ。



建物の正面から右側へまわったハルトキと大林は、地下へ降りる狭い階段を見つけていた。

降りていくと、頑丈そうな鉄の扉があったが、カギはかかっていなかった。

「人の気配がないな……」

「建物が広いぶん、遭遇率は低いのかも」

「いや……、妙だと思っていたが、やつらにしては警戒が薄すぎる気がする。窪井はもっと、抜け目のないやつだ」

敵の気配はなくとも、大林は一瞬たりとも気を許すことはない。

そんな彼を前に、ハルトキも見習わなければと、後ろを警戒する。

「KEN 窪井って、どういうやつなんです？」

「……やつは恐ろしい男だ。体術に優れ、頭も勘もいい。……なにより、冷酷だ」

「なるほど。デンテールの“後継者”として、欠点のない男……」

まさに第二のデンテール。

第三、第四の魔王をつくらないためにも、『シラタチ』は戦わなければならぬ。

二つ目のドアを抜けると、また地下へ続く鉄の階段があった。左右の壁も、いつの間にか鉄板で覆われていて、床は金網になっている。

「なんか、中枢に近づいてるって感じ」

「……………」

大林は何も言わなかった。明らかに困惑している。技術発展世界の住人であるハルトキは別として、大林にとってはまるで異世界だ。

「デンテールに影響受けすぎだね……」  
心の中で苦笑いしながら、ハルトキは大林に続いて足音の響く階段を下り始めた。

そこは地下何階だろうか。そこからは左右に道がある。もう地上のような全木造の面影はなく、悪企業の地下工場という表現がピッタリだ。

カツン。

音がした。

大林は下りてきたばかりの階段を振り返る。誰もいない。

「（ネズミか？）」  
それ以上しつこく探ることはしなかった。

だが、“そいつ”はいた。

大林とハルトキの真上の天井を這う、太いパイプの上に。完全に気配を殺して……。

闇の中に黄色い眼が二つ。“そいつ”は、濃いブルーのマントの中から、キラリと光る片手剣を引き抜いた。

コツ、コツ……。

こんどは別の足音が廊下の左から響いた。“そいつ”は手を止め、様子をうかがう。

真上の存在に気付かない二人は、新たに聞こえた足音のほうを向く。

廊下は奥で『T字』のようになっていて、そこを赤いマントが横切った。

「対S A A P……」

ハルトキがつぶやく。

それが昨日、話に出た赤い対S A A P

新型S A A P第一部

隊員、それだとわかった。

だが、少し彼の想像と違った。ツノが二本あるという話だったが、横切ったその仮面のツノは一本だけ。それに、左肩に白い金属板を装着していた。

「追つか？」

「……大林さんに付いていきます」

二人がその場を去った後、天井にいた“そいつ”は舌打ちをし、跳んでどこかへ消えた。

## 19：魔王の真似事（後書き）

更新がいつもより遅れてしまい、すみません。

更新頻度がこのままではイカンとは思っているのですがね……；  
そう思いつつ、夏なのでホラーを書きたいと思い、連載を開始。今  
回はそれ関連で遅れてしまいました。

向こう側で楽しんでいるマハエらはこの際ほっっておいて……とはい  
きませんが、そちらのほうも読んでいただければと思います。

タイトルは『七つのしずく』。連載といっても、短編ホラー集です。  
興味がある方はぜひ。

あ、もちろんこっちの更新も忘れませんよ。

『七つのしずく』へ

<http://ncode.syosetu.com/n6942e/>

## 20：強行突破しかない

マハ工と宗萱は、地下へ続いている階段を下りていた。

虚像の壁からは短い一本道だった。先に行った手下がここを通ったことは間違いない。

地下だから真っ暗だろうと予想していた二人だが、階段の終わりに光が漏れているのを見て驚いた。

天井にぶら下がっている電球がこうこうと光を放って、地上のように明るくなっている。

「電気が通ってるのか」

電球は廊下の天井に、道案内をするかのように、点々とぶら下がっている。中枢へ導いているのかはわからないが、そうだとして仲間達が行った他の道も、そこへ続いているようにとマハ工は願った。

敵もトラップも見当たらないのを確認して、急こうと進む足を速め

ジリリリリリリ……！！！！

巨大な目覚まし時計が鳴ったのかと思うほどの大音量に、マハ工は仰天して飛び上がった。

「んなつ……！！　なんだ！？」

ベルの音が止み、どこかのスピーカーから声が響く。

「攻撃を受けた！　侵入者だ！　全員、警戒態勢に入れ！」

もう一度繰り返し返され、乱暴にプツリと切れた。

「……………」

「誰かが見つかったみたいですね」  
「……だいたい予想はつく」

地上 隠れ家左側の別の入り口、付近

「うおらあああ！！ もっとかかって来いやあああ！！！！」

「う、うわあ！！！！」

ダウン！

手下の一人が『発破鋼』の爆発で吹っ飛び、すでに気を失っている仲間の横に倒れた。

倒れた者は誰一人として起き上がってこない。意識がある者も、完全に“キレた”エンドーの前になす術なく いや、あまりの恐ろしさに気絶したフリをしている。

勇敢に立ち向かう者は、エンドーに触れる前に他の二の舞。あげく、逃げ出す者も。

「た、助け ぐああ！！！！」

最後の手下が倒れた。

だが、エンドーはまるで怒り狂った闘牛のように、歯止めがきかない。

壁を壊し、ドアを吹っ飛ばし、完全に乱射状態で前進する。その吠える様は、S級モンスターさえもたじろぐだろう。

隠れて巻き添えをまぬがれていたグラソンは、その光景に言葉を失っていた。

ふと思い出し、ズボンのポケットに手をつ込む。

取り出した『遠藤京助の取り扱い説明書』。マハエとハルトキに渡されたこの紙切れには、エンドーをうまく操るための裏技や注意事項などが細かに書き込まれている。

「（こつという場合はどうすればいいんだ？）」

さっと目を通すが、こつという事態に備えた対処法は書かれていない。

予想していなかったことなのか……。グラソンは思ったが、説明書の裏面を見て固まった。

下のほう　それも小さな赤文字で丁寧に

『保証できる範囲で記入』

「……………」

グラソンはしばらくその文字を見つめてから、説明書を細かに破り捨てた。そして向こうで暴れているエンドーへ歩を進めた。

地上の悲鳴と爆音は、地下までは響いてこないが、マハエと宗萱はすぐに状況を把握した。

「とにかく急ぎましょう。留まるのは危険です。どこか、隠れる場

所を見つけて様子を見ましょう」

「ああ。エンドーが騒いでるとして、たぶん敵はそっちへ集中するだろうから……」

廊下の奥から、バタバタと足音が近づいてくる。

「……敵がここを通る可能性もあるわけで」

見つかった。

「動くな！ ちっ、こんなところまで侵入していやがったか！」

「へっ！ 飛んで火に入る夏の何とやらだな！」

数は四人。それぞれが剣や棍棒を装備している。

「アレエ？？ ココハ、ドコデスカ？？ 森ノナカ、サマヨツテ、

変ナ所ニ迷イコンデシマイマシター！ 引キカエシマアス！」

「待てえい！！ 貴様ら『シラタチ』だな！？ 逃がすかあ！！！」

「シラタチ？ 知ラナイヨ、ソナナ系コンニヤク。ワタシト黒イノ、各地ヲ旅スル旅芸人。ワタシノ、オ名前『マハエコ・モーリ』、コツチノ黒イノ『ソーケン・ビツチャ』デエス」

「取り押さえろお！！！」

「ワツ、イタイ！ 野蛮ナ種族ネ〜！」

「強行突破しますよ！」

宗萱が刀を抜いて叫ぶ。

ガキーン！

手下が持つ剣の刃先が、ポトリと床に落ちた。

「くっ！ 気をつけろ、相手は手強いぞ！」

「クライナサーイ！」

マハエが床を踏みしめ、魔力の衝撃波を放った。



「な、なんだ……！？」

手下全員が足をすくわれて転倒。二人はそいつらを飛び越して奥へと走る。

「に、逃がすなあゝ！ 追え、追ええゝ！」

後ろで立ち上がって追ってくる手下へ向かって、マハエが『衝撃弾』を放つ。

「存分に戦えるだけ、モンスターのほうが楽かもしれませんね……」

「じゃ、モンスターが出たらお願いします」

「そこは協力しましょう」

走りながら、一時的にでも隠れられる場所がないか探した。

だが敵は前からも。

「いたぞ！ こつちだ！」

相手が人では、簡単にはいかない。

「こつちに行つたと思つたんだけど……」

ハルトキと大林は、赤い対S A A Pを見失っていた。

そこは通路が少し広くなった場所。赤い対S A A Pを追ってここまで来た二人だが、その通路の奥は行き止まりになっていた。

「迷つたんですか？」

案内人が声をかける。

「迷つたんですよ」

「迷つたときは、原点にもどれといいますが、そんな余裕はないでしょうね」

「おい、他はどうなんだ？ さっき警報が鳴っていたが」

「わかりません。わたしはずっとあなた達に付いていましたから。グラソンさんに、お二人をサポートするようにと　二人から離れるなど言われているんです」

大林は肩をすくめる。

「オレは戦闘に関しては素人ではない。勘にも自信はある。心配はいらぬと言っておいてくれ」

「そんな冷たいこと言わないでくださいよ。こんなわたしでも、何か役に立つことがあるかもしれませぬ」

ハルトキが鼻で笑う。

「『こんなわたしでも』ね……。自分の無能さをよくわかってるじゃないの」

「……ヒドイ。いつからそんな毒舌家に……？」

「とにかく、道がない以上は引き返すしかないな。どこかで赤マンが別の道を行ったとして　」

強い殺気と空気を切り裂く音、何かすごい勢いで迫ってくる気配に、大林は素早く身を引いた。

鈍く光る物がロープの袖を縦に切り裂き、床すれすれの位置でピタリと止まった。

攻撃を受けたことは明白。大林は敵の姿を確認するよりも早く、回し蹴りを放った。蹴りは何もとらえなかったが、何かその位置から身をひるがえして離れたのを、彼は見た。

濃いブルーのマントが舞う。

人の形をしたそれは、片足を軸にして二回ほど回ると、左腕を振り上げてマントをはらった。

「ククク……。オレ様の相手として、申し分ない」

そいつは狂喜に満ちた黄色い眼を光らせた。



## 21：謎の包帯男

そいつは振り上げた左手に、先が丸くなっている変わった片手剣を握っていた。

顔は包帯で覆い隠されているが、ゆいいつ隠れていない部分から、黄色く染まった瞳が大林とハルトキを凝視している。

ほっそりとした体つきだが、その筋肉は卓越していることがわかる。そしてそいつが男だということも。

「会いたかったぞ、大林鷹光……」

男が言った。

包帯ごしだが、口元が喜びで歪んでいるのがわかる。

「知り合い、ですか？」

ハルトキが尋ねる。大林は何か苦しそうに自分の胸をにぎりしめていた。

「……知らん。何者だ、お前は」

こめかみから汗が吹き出て流れ落ちる。

大林は激しく動揺していた。なぜかはわからないが、目の前の男の声を聞いていると、心がズキズキと痛み、えぐられる感じがした。

「オレ様の名は『モフキス』。ニーストリア・ベネツへの新人であり、幹部でもある。ククク……、お見知りおきを」

大林はめまいで膝をついた。

「大林さん!？」

さっぱり状況を理解できないハルトキが叫ぶ。大林には、そ

の声がとても小さく聞こえた。モフキスと名乗った男の声だけが、何度も何度も耳の中に響いて消えない。

とても不快だった。

「ククク……、まさか恐れているんじゃない、あるまいな？」

「ほざけ……！」

「ククク……。それならば、オレ様と闘え！ 大林鷹光！」

モフキスの剣が大林を襲う。

ハルトキは大林に気をとられ、反応が遅れた。

だが、剣は寸前で止まった。

大林が片腕で、剣を握り振り下ろされたモフキスの手を、低姿勢のまま受け止めていた。

そのまま押し返し、立ち上がりざまに放った蹴りが、モフキスを数歩後ろへよるめかせた。更に追い討ちをかける。

武器を持った相手と素手で闘う場合、一瞬でも優位に立てば、攻め続けなければならない。間合いをとられればいつきに不利になる。

「はあぁっ……！」

ガキン！

大林の拳が剣の側面を打って止まった。

「ククク……。面白い……。実に面白い男だ！ 大林鷹光……！」

「……うるせえよ、お前は。喋るな」

「クククク……。死をも恐れない覚悟。すばらしい」

そう言うと、顔の包帯に手をかけた。

「モフキス、何をしている」

突然、男の声が響いた。

その声に、モフキス　　大林とハルトキも目を見開く。

男は彼らの上　　通路の一部天井が高くなっているところに、小さなバルコニーがあり、そこから漆黒のロープを身に着けた窪井が、見下ろしていた。

「KEN　窪井！」

大林は牙をむき、殺気を込めた目でにらんだ。

「大林……」

窪井は大林を一瞥し、モフキスに視線を移す。

「いつオレが命令を下した？」

「……………」

「見当たらないと思えば、こんなところで……。部屋にもどれ、モフキス」

「……………」

モフキスは舌打ちをして剣を収めた。

窪井はそのまま踵を返し、消えた。ハルトキらが立っている場所から見れば、バルコニーの位置は高く、とても跳んで行けるようなものではない。

「窪井！！」

目標としている敵を目前にして追っていけないもどかしさに、大林は悔しみをにじませた。

だが、窪井はこの場所にいた。同じ建物の内部に。

「そういうことだ。やれやれ、オレ様は主人の命令にや逆らえん」

後ろを向いたモフキスは、数歩進んで止まると、ナイフを抜いて大林とハルトキに見せつけた。

「！！」

二人に向かって投げつけられたナイフが、間を抜けて後ろへ飛んだ。

それに気をとられた一瞬で、モフキスは姿を消していた。

「モフキス……。何者なんだ？ ニュートリア・ベネツへの新人であり、幹部……」

「……それより、見ました？」

ハルトキが背後の、突き当たりの壁を見る。

飛んでいったはずのナイフはそこになかった。壁をすり抜け  
ていた。

「行こう。KEN 窪井の野郎を追いつめる！」

さすがにこれは異常だ。

マハエと宗萱は思った。

敵に追われながら二人が行き着いたのは、鉄の壁と鉄の床、鉄の柱に囲まれた、前よりも更に地下にある通路。天井にはいくつものパイプと電線が這っている。更に驚いたのが、カードリーダー付きの電子ロックがかかった鉄のドア。

「一ヶ月でここまでできるものか？ 『シラタチ』よりもすげえよ」

「ここまでは、ほぼ不可能でしょうね」

「だよねえ……」

二人はとりあえず電子ロックのドアは無視し、通路を進んだ。

敵の気配はないが、どこからかブーンという機械のうなりが不気味に響き、妙な緊張感がにじむ。

足音の微かな反響音が聞こえ、二人は立ち止まった。

足音は少しずつ近づいてきて、広く響いていた音がはっきりと聞こえてきたとき、二人はとっさに武器を構えた。

ロックされたドアの他には分岐のない一本通路。その奥から赤いマントが歩いてくる。

「対S A A Pか。くそつ、こんな狭い場所で……」

マハエは『壊波槍<sup>かいはそう</sup>』を発動させた。

だが、そいつが近づいてくるにつれ、その異様さに首をかしげる。

「……あれは？ 何か様子が……」

二人の目の前で、赤い対S A A Pは止まった。一本ツノの仮面、左肩に白い金属板を装着した対S A A P。

「なんだこいつは？」

対S A A Pが一步踏み出す。そのマントの中で何かが動き、直後、空を切り裂いた刃物が槍をかすった。

「……！」

接近戦用の大型クナイが、連続でマハエを襲う。その対S A A Pには、腕と足、胴体があるようだ。

「何なんだ！？ クソツ！」

宗萱が相手の背後から斬りかかるが、魔力を込めた刀はマントをかすっただけ。対S A A Pは跳び上がると、マハエの頭を蹴って反対側に着地した。

「踏み台にしゃがんで……」

マハエは振り向いて槍を向けた。

だが対S A A Pはそのまま、二人が来た道を逆に歩き出し、去っていく。まるで戦意は見られない。

「待て！」

追おうとするマハエの目の前に、宗萱の腕が伸びた。

「止しましょう。やつは目標ではありません」

「でも……。……いや、まあたしかに戦いは避けたほうがいいよな」

「そういうことです。追ってくることを予測しての行動かもしれま



せん」

振り返りもしない対S A A Pをじっと見つめ、完全に見えなくなっ  
てから二人は肩の力を抜いた。

「ヘルプストのところで闘ったやつとは動きがぜんぜん違う。しかも  
胴体があったよ」

「……対S A A Pの隊長としてつくられたプログラムは、人の形を  
成しています。わたしのように」

「ということは、あいつ……、第一部隊の隊長？」

マハエはしばらく呆然と立ちつくしてから、ゾクツと鳥肌を立た  
せた。

「戦わなくてよかった」

「同感です。こんな場所でムダに足止めを食らうわけには、いきま  
せんからね」

「……それって、同感とは言わないと思う」      という言葉を、心  
の中でつぶやいた。

## 22…さむらい

通路をまっすぐに進んだマハ工と宗萱の前に、大型のリフトが現れた。

「もう何があっても驚けないな」

お次は格納されたUFOでもお目にかかれるのかと期待さえするマハ工だ。

操作盤をチエックした宗萱が、「動くようですよ」と声をかけると、マハ工はすかさず乗り込んだ。

大きな木箱を乗せてもまだ余裕があるほど、リフトは大きい。先ほど通ったまっすぐな通路を考えると、運んできた大きな何かを上に乗ぶためのものだろう。

「おそらくこの先が、『地下工場』の中核　ミサイルを組み立て、それを発射する設備が整っている場所だと考えられます。

……この上に“答え”があるのかもしれない」

宗萱はそう言うと、操作盤のスイッチを押した。

重々しい機械音を響かせながら、リフトがゆっくりと上へ動き、十メートルほど上昇したところで、ガコンと音を立てて停止した。薄暗い空間にコンピューターのディスプレイの明かりが膨張している。

カタカタカタ……

すみでキーボードを叩く音が耳に入った。

「……ここでもないのか……」

淡い明かりに照らされた銀色長髪の男が、「くそっ！」と両手でボードを叩く。

「……やはりここ他にも」

「グラソン」

背後から突然声をかけられた男は、はっとなって振り返った。

「ああ、お前らか」

グラソンはリフトが上がってきた音に気付かなかったようだ。

「何をしていたのです？」

「……コンピューターでこの施設の見取り図を探していた。ミサイル打ち上げのための施設はこの奥だ。組み立て工場の中を通っていく」

そう言って先に立って進もうとするグラソンに宗萱が、

「グラソン、やはりここは……」

グラソンはうなずいた。

「そうだ。ここはデンテールが所有していた施設の一つらしい。ここで調べて確信できた。オレさえも知らなかったデンテールの極秘データまで、窪井は持ち出していたんだ」

厄介な物を残してくれたぜ。そう吐き捨てて、グラソンは歩き出した。マハエと宗萱も彼の後ろに続いた。

横に広い通路を三人は歩く。

途中、通路が十字になった箇所もあったが、グラソンはまっすぐ進んで後ろの二人を導く。

ミサイル組み立て工場、入り口の大きなシャッターは、全開になっていた。そこから見える奥の出口は、おそらく打ち上げ施設へとつながっていると思われる。

「誰もいないなあ」

拍子抜けした様子でマハエが言う。が、それだけではなく、組み

立て途中らしいミサイルも見当たらない。大掛かりな機械や廃品の山があるだけだ。

「もう完成しているのでしょうか？」

宗萱がそう言ったときだった。

「ミサイルは完成してござらん」

機械の陰から、男が現れた。

黒いうろこ模様の着流し姿で、髪を後ろで結っている。侍のような風貌をした男だ。両の腰に、刀を一本ずつ差している。

「なんだ、お前は？」

グラソンは金属棒を抜いた。そのとなりに宗萱が並ぶ。

「拙者の名は『怒涛紅丸』。窪井殿にお仕えする、侍でござる」

「サムライだと？」

この場に合わせぬ異様さに、グラソンは微笑を込めた目を男に向けた。

突然、マハエが何かに気付いたように、はっと顔を上げる。

「……そうか。そういうことだったのか」

彼の顔には、驚きと薄い恥辱が現れている。同時にその中には、強い確信も見られる。

「妙だと思っていたのに、今になるまで気付けなかった。……窪井のあの異常な変身能力、山中に隠すように建てられた屋敷。そしてオレの予想のすべてを裏付けるのは」

侍 紅丸を見つめるマハエ。その頬を汗が流れる。

そして重々しく口を開いた。

「窪井は忍者だったんだ……！」

「……………」

マハエをのぞく全員が、「サムライだと？」まで、十数秒をリセ

ツトした。

「紅丸と言ったな。……窪井はどこにいる？」

「窪井殿は、この奥。だが、何人たりともここを通すわけにはいかぬ」

侍 紅丸が両腰の刀に手を持っていく。それに合わせて、グラソン、宗萱、マハエは一步引き、戦闘態勢に入る。マハエは『壊波槍』を発動させた。

「立ちはだかるのなら、容赦はしません。三対一は本意ではありませんが、我々は急いでいるので」

宗萱の刀が『風』をまとう。

「一瞬で終わらせませうよ」

「……拙者を斬ると？ 果たしておぬしらに、それができるでござろうか？」

挑発的な笑みを浮かべると、紅丸は二本の刀をゆっくりと抜く

宗萱はすかさず床を蹴った。

ガキイン！！

激しい太刀音が拡散した。

紅丸の二本の刀が宗萱の直刀を受け止めていた。魔力をまとい、鉄をも断つはずの刃を。

「くっ！」

宗萱はすぐに身を引くと、再び斬りかかる。だが刀の数もリーチも、宗萱が不利だ。何度振っても、ことごとく防がれる。

「見事な太刀筋なり」

今度はグラソンが斬りかかる。二本の金属棒は、固い氷によって剣の形を成している。

「そのような物で、拙者の刀を破られると？」

氷が散った。

刀がぶつかるたびに、氷の剣は削れていく。

「なるほど。侍と名乗るだけはある」

打ち込まれた刀が氷に食い込んだ。そこから氷が、刀を侵食するようになどわり付く。

「なんと……！」

そのスキに、反対側から宗萱が攻めるが、紅丸のもう片方の刀がその攻撃を受け止めた。

剣術を最も得意とする宗萱の一撃を片腕で止める 離れた場

所で見っていたマハエは、戦わずして圧倒されていた。

「今です！」

宗萱の言葉にマハエは反応し、槍をぐっと握り、突進する。

だが紅丸は

「ふんっ！」

「なに!？」

一瞬、炎が紅丸を包み込み、周囲にはじけた。

「これは……！ 牢の中で感じた強い覇気！」

グラソンと宗萱は吹き飛ばされ、床を転がった。

「うおおおおお!!!」

マハエの槍と紅丸の刀がぶつかる。同時に槍から『衝撃』が

発生し、刀を弾いた。

「ムッ！ この力は……!？」

弾かれた右手の刀が、紅丸の後ろに転がった。

「氷結ひんけつ……！」

いつの間にか空中を舞っていた、いくつもの氷の結晶が集結し、刀ごと紅丸の左腕を凍結させた。

これで相手は丸腰も同然

「……多勢に無勢でござるか」

氷が水に変わり、蒸気となる。

紅丸は刀を収め、ゆっくりと後ろへ下がっていく。

「どうということだ？」

「半端な戦いは好まぬが、このような場所では拙者の力を発揮できぬ」

もう一本の刀を拾い上げると、背を向けた。

「拙者は侍。主君に忠を尽くす存在なり。……さらばだ、愚かな者達よ」

炎の渦が紅丸を取り巻き、熱風が広がった。柱となった炎が、一秒後には細くなって消えた。侍の姿とともに。

三人は呆然と、ゆらゆら落ちていく火の粉を見つめていた。見えない何かの気配を探るように……。

あの侍は少しも本気を出してはいなかった。いや、“本領”を出してはいなかったのだ。

全員が直接感じ取った。

あの炎は、間違いなく『魔力』によるものだ。

### 23：ここは魔物の腹の中

マハ工達はミサイルの打ち上げ施設に侵入した。

広い部屋をぐるりと見ると、両脇は一段高くなっていて、階段がある。その通路はずっと奥へ　　大きなエントツがある円形の広場へと続いている。

部屋の床は歩くと足音が妙に響いて目立つが、相変わらず窪井や手下の気配はない。

「あれがミサイルを打ち上げるための装置だ」

グラソンがエントツをあごで示す。

打ち上げ装置がある広場と三人がいる部屋とは、肉厚ガラスの壁が仕切っている。広場へ行ってミサイルの有無を確かめるには、脇の階段からの通路しかないらしい。が、この部屋には他に気になる物があった。

ガラスの壁の前に、大人の身長ほどのカプセルが五つ並んでいる。そしてカプセルの前には、アーケードゲームの筐体に似た形のコンピュータが一台。

「あれは　　、ウイルスだ」

グラソンがコンピュータへ歩み寄る。

「ウイルス!?!　あのカプセルが?」

キーを叩き、ディスプレイに表示される文字の列を見つめながら、グラソンが言う。

「五つのカプセルにはウイルスが入っている。どうやら、まだミサイルには組み込まれていないようだ」

「それじゃ、今のうちに!」



「ああ。この端末でウイルスを破壊できるはずだが……」  
しばらくキーを操作し、『ウイルス破壊プログラム』を呼び出した。

「パスワードは……、デンテールのとおり同じか？」

ここはもともとデンテールが所有していた施設で、そのすべてを窪井が引き継いだ。パスワードが変更されていなければ、ウイルスを破壊するのは容易だ。

マハエがため息をつく。

「わかってるって。人生、甘くはない。そんな簡単に物事が進むわけ」

「パスワード認証。カプセルの完全滅菌を開始します」

「……まあ、人生、楽々が一番だよな」

カプセルが、プシューと音を立てた。  
ディスプレイに表示されたパーセンテージが上昇していく。

「滅菌進行状況 . . . 20%」

一番左にあるカプセルの緑色のランプが赤に変わった。

「滅菌進行状況 . . . 40%」

左から二番目も赤に変わった。

カプセル二つ分のウイルスは破壊され、残りは三つだ。

「 . . . 60%」

「 . . . 80%」

残り一つ

突然、ディスプレイが赤く明滅した。真ん中に文字が表示される。

「原因不明のエラーが発生しました。カプセルの滅菌を中断します」

数秒後、画面は真っ暗になり、電源が落ちた。

「……あと少しというところで……」

グラソンが舌打ちをして、一段高くなっている通路をにらむ。

「危ない危ない。もうこんな所まで侵入していたとは……」

漆黒のロープが揺らいだ。

青い髪の男が通路に立つて、体に合わないほど太い右腕を壁に突っ込んでいる。勢いよく抜かれた男の手には、引きちぎられ火花を散らすケーブルの束が握られていた。

「なかなかやるじゃないか、『シラタチ』」

ケーブルを横に投げ捨てると、男の腕は細く 体に吊り合う

大きさになった。

もともどつた手を何度か閉じ開きしてから、男 窪井はグ

ラソンを見た。

「グラソン……、まさかあんたが生きていて、それもオレに敵対するとはな……。デンテール様を殺したのはお前か？」

「……………」

「窪井さん、わたしは『シラタチ』の最高責任者、宗萱という者です。我々はあなたを止めにきました。デンテールの残した遺物をすべて放棄し、投降するというのなら、命は取りません。ですが」

「ほう？ この状況でよく言えたものだ。ここはニュートリア・ベネツへの……、「黒き魔物」の腹の中だということをお忘れか？」

窪井が低く笑いながら、通路を歩く。

そのとき、入り口の扉がバン！と開いた。

「窪井い!!!」

大林とハルトキが飛び込んできた。

窪井はゆっくりとそちらに顔を向ける。

「よお大林、お前も『シラタチ』に協力しているらしいな。まったくお前は……、相変わらず人の上に立つのが苦手らしい」

「黙れ!! 窪井、オレは」

「お前はオレを殺しに来たのか？ お前の宿主である『シラタチ』にその気はないらしいが？」

「……ッ！」

大林は言葉を詰ませた。

ギリギリと音がしそうなほど噛みしめた歯の隙間から、荒い息が漏れる。

「まあいい。オレもお前らとはやり合う気はない」

窪井は平然とした顔で、カプセルを見る。

「残ったウイルスはわずかか……。しかし重要な物だ。回収させてもらう」

「それをさせると思えますか？」

宗萱が刀を抜く。

「ははは、言っただろ？ ここは魔物の腹の中だってな」

カプセルをさえぎるように空間が赤く染まり、二体の赤い対SA APが出現した。

「あばよ、また会おう。お前らが運よく生きていられたら、な」  
ニヤリと笑った。

「自爆システム作動。至急、退避してください。」

機械のアナウンスとともに、赤い照明が点滅する。

「ここを消し去るつもりですか!？」

「はははは。じゃあな、『シラタチ』」

ミサイルを打ち上げる広場の天井が開き、聞き覚えのあるプロペラの轟音が入り込んだ。

デンテールの飛行船だ。

肉厚ガラスが上へスライドし、数人の手下がカプセルを運び出すとする。グラソンが金属棒に魔力を込め、即座に床を突いた。

氷がまっすぐ手下へ向かって床を這う。だが氷は途中で消し飛んだ。破片が水となり、蒸気と化す。

「それはさせないでござるよ」

蒸気の霧の中から、紅丸が現れた。

「くそっ!」

目の前には対S A A Pが二体、その後ろに紅丸。もはやカプセルを破壊するスキはない。

ただムダならみ合いが続き、ガラスの向こうへカプセルが運ばれると、紅丸も後ろへ下がる。そして再び肉厚のガラスで閉ざされた。

窪井は大林を一瞥し、背を向けて去っていく。

「待てよ窪井……」

駆け出そうとする大林に対S A A Pの真空斬撃が飛んだ。

「大林ッ!」

金属棒でそれを弾き、グラソンは大林の肩を押さえる。

「追うな! 今はここから脱出する術を考えろ!」

それでも足を進めようとする大林。彼にはグラソンの声など届いていないようだった。一心に窪井を目で追い、それを足でも追いか

けていこうとする。

グラソンは大林の左腕を背中であぐらで固め、前からハルトキが押さえつける。

「待ってくれ……」

大林はよろよろと右腕を伸ばした。

「待ってくれ！ ケン！！」

一瞬、窪井が足を止めた。

大林は肩で息をしながら、まるで自分の口から出た言葉が信じられないというように、目を見開いていた。しかしその目は、変わらず窪井を捉え続けている。

もう何も言わなかった。窪井が扉の向こうへ消えると、伸ばしていた腕を名残惜しげに下ろした。

「ウィルスの大半は破壊した。オレ達には時間ができたということだ。今はここから逃げることだけを考える」

耳元でグラソンが言うと、大林はあきらめたようにうなずいた。

本当は命を捨ててでも窪井を追いたい。彼が見せた眼差しはそう訴えていた。

## 24：ダツシュツ

飛行船のプロペラ音が遠のいていく。部屋に残された彼らを「逃がさないぞ」というように、二体の対S A A Pが挟み、ガバツとマントを広げた。

「まずい！ 斬撃の連射だ！」

前にそれを受けたことがあるマハエが叫ぶ。

「固まれ！」

指示を出し、グラソンは金属棒を一本に組み立てた。

それを頭の上で回転させ、空気中の水分を引き寄せ、集める。

「ひんしん氷壁！」

金属棒が床を突くと、彼らを取り囲むように氷が形成され、小さなドームが出来上がった。

直後、いくつもの真空の刃が壁を叩く。

「危なかった……」

マハエが安堵の息をもらす。

「いやあほんと、危機一髪でしたね。思わず目をふさいでしまいましたよ、わたし」

「お前にとってはリアルな映画を観てる気分だろうなあ」

「とても良い役者がおそろいですね」

「でもさ、その役者達はただ今、大ピンチだよ……」

ハルトキが言う。

刃の攻撃はなかなか収まらない。少しずつ氷が削れていつているのがわかる。

「このままでは持たないぞ……！」

氷に魔力を集中させるグラソンの表情は、もう一分も耐えられないと言っているようだ。

急いで形成した氷の壁は薄く、全体の強度を保とうとすれば魔力の消費は大きい。

「このままじゃ、ここから動くこともできない。どうする?」

大林が宗萱を見る。

「……一か八か、かけてみますか」

そう言うと、刀に魔力を込める。

「考えが?」

宗萱は微笑むと、靴の先で床を叩いた。

対S A A Pの刃が、とうとう氷のドームを砕いた。

一部が崩れると全体が崩壊し、激しい音を立てて無数の破片が跳ねる。

トドメをさそうと放たれた二つの刃が、崩れたドームの中心でぶつかって相殺した。

「……………」

誰もいない。そこには床に丸く開いた穴があるだけだった。

マハ工達五人は、部屋の真下にあった通路を疾走していた。

定期的に赤いランプが灯り、小さな音でサイレンが鳴っているが、爆発まであと何分の猶予があるのかわからない。

「せめてカウントくらいしてほしいよね」

ハルトキがとなりを走るマハ工を見る。

「この、いつ爆発するのかわからないスリルがたまらんですよ」

「キミはいつからそんな危ないキャラになったんだい?」

「まあまあ、本当ならさつき無くなってもおかしくない命なんだから」

「命は大切にしよう!?!」

今走っているこの通路が、出口に通じているのかは定かではない。

だが、あのまま氷の中で敵のスキをうかがうよりは、ずっといいと思える。

先頭を走る宗萱に、案内人が感心したように言う。

「それにしても、よくあの部屋の下にこんな通路があるって気付きましたね」

「足音が妙に響いていましたから、床が薄いということにはわかっていました。ですがさつきも言ったとおり、本当に一か八かでしたよ」  
「その後に、『つまりぬ物を斬ってしまった』とかいう決め台詞でもあればもっとよかったねえ」

と言って、マハエはふと思い出した。

「つまらないと言えば、エンドーがいないな」

「そついえば、なんか静かだと思ったよ」

グラソンも忘れていたのか、「ああ、そついえば」と手を打った。  
「あいつなら、手がつけれなかったから気絶させて置いてきたんだ」

「……ここ、敵陣ですが？」

表情を引きつらせるハルトキとは逆に、マハエはあっけらかんとしている。

「まあ、あいつなら大丈夫だろ。A Bだから」

「A B関係ない……」

ずっと後ろから爆発音が反響してきた。

「あーダメ。もう死んだー。オレ死んだー」

「しっかりするんだマハエ！ あきらめたら終わりだよ！」

半分“むこう側”へ行ってしまった友人の首に腕を回し、ハルトキは走る。

それから少しすると、二度目の爆発音が響いた。前よりも音が大きい。

「あれだ！」



グラソンが前方を指差す。

通路は先で行き止まりになっているが、上へ行くハシゴが備えてあった。

地上へ続いていますようにと願いながら、順にハシゴを上っていく。

三度目の爆発。今度は微かな揺れが感じられるものだった。

ハシゴはどのくらい続いているのかはわからないが、かなりの長さがある。その分、脱出への希望が見えるが

「ダメだ！ 向こうから閉ざされている！」

一番上に行き着いたグラソンが、ハシゴの穴をふさぐ四角い鉄板を叩いていた。

「宗萱！ とうにか斬れないか!？」

「この体勢ではムリがあります！」

「くそっ！ どうすれば！」

焦りと悔しさがこもった拳が、もう一度フタを叩いた。

引き返せば爆発に巻き込まれることは確実。この出口だけが、ゆいっつ脱出が望める最後の希望だった。

「ヨックくん、ゴメンなー。幼稚園の頃、ヨックくんは生ニンニクが大好物だって嘘をリエちゃんに吹き込んだの、オレなんだー」

「あれキミだったのかー！ あのせいでリエちゃん、ボクをさけるようになったんだ！ いやいや、ていうか最後まであきらめちゃダメだってっ!!！」

「オレの人生で二番目に大きな罪悪感がやっと今消えた……。よかった」

「一番は何!? まだあるの!？」

ガコン。

フタが開く音と同時に、強い光が射し込んだ。何が起こったのか理解するのに数秒を要した。

誰かが外からフタを開けてくれたようだが、逆光で判断がつかない。だが、それよりも先に降ってきた声は、誰もが聞き覚えているものだった。

「元気ですかー？」

やたら元気そうなエンドーだ。

「よう京助、無事だったか」

「無事だったかじゃねーよ、オレを置き去りにしやがって。閉めるぞ」

「いや悪かった。謝る。スマン」

エンドーの手を借り、グラソンが穴から出た。そこは屋外で、隠れ家の裏手にある森の中だった。

「なぜ、ここがわかった？」

「目え覚ました後、隠れ家の周りを散策してたら、いきなり爆破するとかアナウンスが入って、どうしようかなーって考えたすえ、とりあえず牢に閉じ込めてたやつらを逃がしてやることにしたんだ。そしたらそいつらに、この『非常口』のことを教えられて　いやそれより、デンテールの飛行船がどっか飛んでいくのを見たんだけど……」

エンドーは非常口から上がってきた全員の顔を見回した。

「……………結果は訊くまでもなく？」

「ええ、すんでのところまで逃げられてしまいました」

そうか。とエンドーも落胆する。

だが自分の知らないところでケリがついていたとなると、気に食わない部分もあるのだ。何より、自分だけ気絶していたなんてマヌ

ケすぎる。

「ところで、爆破何分前？」

エンドーがそう尋ねたとき。

ドガアアッ！！！！

強烈な爆音と地響きが辺りを支配し、非常口が火を噴いた。何十羽もの鳥が、何かといつせいに飛び立つ。

振り返ると、木造の建物があった場所から、もうもうと黒い煙が上がり、木片が舞っている。

「……あら、えらく派手にはじけたなあ」

中に残っていたら、まず助からなかっただろう。ふと、パン屋の次男を思い出し、無事に脱出したか心配になった。

「あーあ、何もかも丸こげかー。こいつらより先にパンのほうを救出しておくんだった」

後ろを見ると、マハエとハルトキが地に膝を付いてエンドーを拜んでいた。

「ありがとう、ありがとう。マジで助かった。遠藤君を産んでくれたお母様に心から感謝します」

「いや、ボクは遠藤君を産んでくれたお母様を産んでくれたお婆様、そしてお父様、お爺様に感謝します」

「ありがとう！ ありがとうAB型！！」

「素直にオレに感謝してっ！！」

「まあまあ、とにかく全員無事でほんとうによかったです」

いかにも嬉しそうに案内人が言うと、エンドーも肩の力を抜いて「ああ、よかった」とつぶやいた。

「帰るぞー。長く本部を空けるわけにはいかない」  
グラソンが歩き出す。

「ここ、調べなくてもいいの？」

マハエが言うと、

「もうここに窪井はいない。それに、今の爆発で軍の連中が駆けつけてくる。ばったり出くわすのだけは避けたい」

「そうだな。早く風呂にも入りたいしー」

エンドーがグラソンに続くと、マハエらも歩き出した。

「やれやれ、マイペースな人達ですね。　行きますよ、大林さん」

「……………ああ」

大林は小さく返事をし、ずっと見つめていた煙から目をそらした。

生きていてよかった。大林もその言葉に異論はない。

だが心のすみでは、生き残ることを優先してしまった自分に少しばかり後悔していた。

今度こそ、命をかけようと心に決めた。

## 24・ダッシュユツ(後書き)

最近、更新が滞っていることをお詫びします。  
すぐに、もとにもどると思いますので…。

## 25：もう一つの心

グラソンと宗萱は専用の馬車で。マハ工達四人は乗合馬車でと、別れて帰路に着いた。

それから四人が港町に帰り着いたのは夜。宗萱らは直接本部へ向かったのだろうが、そこへ寄る元気は彼らにはなく、宿へ直行した。

地下の浴場はさながら小さな銭湯のようなもので、広い湯船が一つと洗い場とに別れている。

壁に埋め込むように置かれている数本のロウソクと、天窓から入る月の光で、ムードとしては最高の薄暗さだ。

混浴なので、若いカップルが語り合う場としては最適だろう。

そこに男三人で入ってきたマハ工、ハルトキ、エンドー。すでに慣れているせいか、その雰囲気をぶち壊すように「ひゃっほ〜！」と湯船へダイブする。

この騒がしい三人の他に入浴者はいない。もっとも、人がいれば迷惑この上ないことだが……。

「ふい〜〜〜」

と、三人いつせいにため息を吐く。

「良い湯加減ですこと」

タオルを頭に乗せたエンドーが鼻歌を歌う。

その横で、マハ工とハルトキは真剣な顔で話を始めた。

「ヨツくん、あの後グラソンが言ってたこと、どう思う?」

「ネーベル山ふもと町で、グラソンはみんなを励ますように言った。ウィルスの八十パーセントは破壊した。たったの二十パーセ

ントじゃ、効果の及ぶ範囲はたかが知れている。頭のいい窪井なら、そんなムダなことはしないはずだ。ウィルスをもとの状態に増やすにしても、少なくとも数週間はかかる』と。

「……うん。グラソンが言うのなら、それは正しいと思うよ。ボク達には時間ができた」

「あとは、その時間内に窪井を見つけ出して阻止しなきゃいけないか」

マハエは壁に頭をあずけて天井を眺めた。

そのとき、誰かが浴場の階段を下りてくる音を耳にし、二人は顔を見合わせて話をやめた。

下りてきたのは大林だった。

腰にタオルを巻き、湯船に足を入れる。

これまで大林と風呂で会ったことはない。初めて見る彼の体は、三人とは比べ物にならないほど、がっしりと引き締まっている。年の差たった三つとは思えない。

だが彼の体に目立つのは、卓越した筋肉だけではない。

「……………」

三人は啞然とした。

ローブとシャツの上からではけっしてわからなかった、無数の傷。鎖骨の下あたりから横腹へ伸びる一番大きな切り傷の縫い痕。その他にも肩、腕、背中と、小さな傷をふくめれば、一目では数え切れないほどだ。

視線に気付いてか、大林はすぐに体を沈めた。

「大林さ……………」

ハルトキはつい傷痕のことを訊きそうになり、慌てて言葉を変えた。

「オツカレ様です……」

「ああ。ハル達こそ、今日は疲れただろ」

大林は天井へ向かって息を吐いた。

薄い明かりに照らされた大林の顔は、まるで泣いているようだ。表には出さず、心の中の、奥底で……。

まるで、三人に助けを求めてここへ来たかのよう。

「かまわず騒いでくれてもいいぞ。オレのことは気にするな。……  
そうしてもらえると助かる」

「……………」

三人は顔を見合わせた。

「いえ、オレ達もさすがに騒ぐ元気はないですよ。……これからのことも、考えなくちゃいけないし」

マハエが言った。

「時間があるって言うてもよ、相手は大悪党だぜ？ ウィルスを放たないにしても、何をするかわからないぞ」

エンドーの言葉を聞き、大林は微かに苦笑した。

「大悪党か……」

大林は目を閉じて首を横に振る。

「あいつは……、窪井はあんなヤツじゃなかった」  
「……………」

「昔の話だ。オレと窪井は同じ不良集団にいたんだ」

三人は息を呑み、黙って聞く。大林はうつむいて揺れる水面を見つめたまま続ける。

「オレと窪井は、その集団のリーダー　その人を慕い、彼の右腕としてともに生きてきた。心から信頼できる、オレ達にとっては兄のような存在……。そしてオレと窪井も、同じように信頼し合える親友だった」

少しずつ声が小さくなる。三人にではなく、まるで水面に映った



自分自身に話しかけているようだ。

大林も自分がわからなかった。なぜこんな話をするのか　だ  
が悪い気持ちはしない。溜まっていたあらゆる感情が勝手にあふれ  
出しているようで、彼はただ、そんな自分に身をゆだねていた。

「……ところがある日、窪井はとある組織から勧誘を受け、オレ達  
のもとを去っていった。その組織は『レッドキャップ』といって、  
金のためには人をも殺す極悪集団だ」

大林の頭には、そのときの記憶が鮮明に浮かんでいた。

ケン！　お前正気か！？　『レッドキャップ』といえば、最  
悪の殺人組織だぞ！

オレはいつだって正気さ、タカ。“高み”を目指すためには、  
こんなちっばけな不良集団なんぞに、いつまでも居座るわけにはい  
かない。

てめえ……！　まだ“高み”なんてもんにごだわってんのか  
！？

ああ。オレは平和ボケしたって、あのときのことは忘れやし  
ない。お前もそうだろ？

それは……。

じゃあなタカ、いや大林。お前とオレは、まったく別の道を行く運命だった、それだけのことだ。……すまない。わかってくれ  
……。

ケン！ ……ケンっ！！！！

「……………その瞬間から薄々わかっていた。いずれこうなることは……………」

話し終わると、沈黙がおとずれた。誰も微動だにせず、他の誰かが口を開くのを待つ。

何秒かすると、大林が大きく深呼吸をして顔を上げた。

「悪かったな、変な話をして。忘れてくれ」

「そう言うと立ち上がり、湯船から出る。」

最後にもう一度深呼吸をすると、大林は浴場から出て行った。

残った三人は、波の音が静まるまで、沈黙を守った。

大林は自分の辛い思いを心の中に閉じ込めることで、他人に弱みを見せないようにしている。そのことには誰もが気付いていた。同時に、仲間に妙な心配をさせたくないという思いもあることも。

だがすべてを完璧に秘めていられるほど、人の心は強くない。おそらく大林は、そこからにじみ出る感情が周りに伝わっていたことに気付いていなかったのだろう。

三人は窪井と大林の間には敵対している以外の何かがあると感じていたが、彼の気に障るかもしれないと、気付いていないフリをしていた。だから彼が自分からその話をしたことが、とても意外で驚きだった。大林と窪井が親友同士だったという事実も。

そして、少しでも内に秘めた辛さを明かしてくれたことが、仲間として嬉しかった。

「平気なわけ、ないよな」

マハエがつぶやくように言うと、ハルトキがうなづく。

「人が自分から辛い過去の話をするのは、その人自身、やりきれない気持ちだから。たぶん、限界まできてるんだよ」

親友が敵に……。その重みはどれほどのものなのか。

「でも、まだ何か隠してるな。黒猫騒動後の大林さんの眼、見たでしょ。本気で窪井を殺すつもりだよ？」

そう言うマハエの目を、ハルトキが見つめた。

「キミは殺せる？ ボクかエンドーを」

「……………」

マハエはとっさに目をそらした。

少しの想像だけで身震いしてしまふ。

殺せるわけがない。どんな過去があつたとしても、親友の命を取るなんてこと、できるわけがない。

「ま、もしもマハエが吸血鬼に噛まれて襲ってきたら、オレは一秒のためらいだけで心臓に杭を打ち込んでやるけどな」

エンドーが「ふふん」と笑う。

「上等だ」。オレもお前が墓場から蘇ってきやがったら、もう一度カンオケにぶち込んで海に沈めてやる」

「そしてボクは、そんなキミ達を生物学研究所へ売り飛ばす」

「一番ヒドイ……………」

親友を殺す。そんな選択、死んでもゴメンだ。

三人は心からそう思った。そして大林にもそれをさせたくはないと。

宿を出た大林は、夜の黒い海を眺めていた。

ぬるい風でも、熱くなった体を冷やすには十分だ。

「何やってんだよオレは……。あんな話をするなんて」  
今の自分は、とうてい頼もしい男とは言えない。

あの人はどんな気持ちだったのだろうか？ 窪井が『田島弘之』  
を抜け、外道の道へ進むのをただ見つめていたあの人は……。

「……………」

満月に近い月を見上げると、見せたくない内の自分が照らされて  
いるようで、せつなくなつた。

「やっぱりオレはお前を許せないよ、ケン。オレ達を裏切り、みん  
なを」

言葉がのどで止まり、一滴の涙が落ちた。

「田島さんを殺したお前を、許せるわけがないっ……………！」

## 26：トレーニング日和（前書き）

大変申し訳ありません。スランプでした。  
脱したと思いますので、がんがん更新していければな、と。

## 26：トレーニング日和

翌日。

マハエは昼前に目を覚ました。ハルトキはすでに起きていて、テーブルで本を読んでいた。

「早いな、昨日あれだけ大変だったのに。……エンドーは？」

「あいつなら本部だよ」

「本部で何をしてんだ？」

鏡の前で髪をチエツクしながら訊く。

「『バイオレンス・ブラッディ・トレーニング（VBT）』だよ」

ハルトキが口の端で笑った。

「……………」  
宗萱のトレーニング以来、『バーチャル・バトル・トレーニング（VBT）』のことを、ハルトキとエンドーはそう呼ぶ。明らかにマハエをからかうためだ。

「（ヨツくんだって顔面蒼白だっただろ！）」  
心の中で叫ぶにとどまり、相手にせず部屋を出た。

「暑いなあ」

空は快晴。強い日差しをさえぎってくれる雲は一つもなく、この暑さでは一歩も出歩く気になれない。

「……本部に着く頃には焼きマハエのできあがりだな」

そんな独り言を言いながら日陰のない大通りを歩いていると、木の陰にたたずむ一人の少年に気が付いた。

薄汚れた服とジャケットを着たその少年は、その場から身動き一つせず、深くかぶったベレー帽から目を覗かせ、通りを歩く人達を

観察しているようだ。

完全に気配を消している。

「(怪しい)」

マハエは通りのすみへ寄り、様子を見ることにした。

少しすると、サングラスとピアスを付けた、いかにもガラの悪そうな若い男が先から歩いてきた。熱気のためり場のような通りの中心を、まるで「涼しいぜえ」とでも言わんばかりに、股を横に広げてガニガニと。

「(どの世界でも、あれが不良形態のーか)」

呆れた汗を流して木陰の少年に目をもどす。

男が少年の前を通り過ぎたとき、ようやく少年に動きがあった。

歩き出し、男のすぐ後ろを通過する。堂々とした足取りだが、驚いたことに足音をいっさい発していない。

マハエはすぐにピンときた。

「(スリだ!)」

少年の手には、一瞬前まで持っていなかったはずの皮袋が握られていたのだ。

マハエの目の前を横切っていく男に、気付いている様子はまったくない。財布を盗られたことにも、おそらく少年の気配にさえも。

戦利品の中身を確認し、少年はかすかに微笑んで走り去った。

窪井の手の者かと心配していたマハエだが、ただのスリだとわかり、ほっとした。同時に、一見平和に見える町の裏側を見た気がして、気持ち少しばかり重くなるのだった。

『VBTコントロールルーム』では、グラソンと宗萱、案内人がホールで戦うエンドーを観察していた。

「十人組み手、開始します」

S A A Pがマイクに向かってしゃべると、エンドーの周りに十体、剣や棍棒を装備した『マネキン』が出現した。円形に配置されたマネキン達がゆっくりと時計回りに移動する。

エンドーは銀色の金棒 『発破鋼』をしっかりと、竹刀のように構え、三百六十度に神経を広めた。

マネキンの一体が輪から外れて打ちかかった。

エンドーがすぐに反応し、剣を防ぐと、移動していたマネキンがいつせいに中心へ集まった。

最初にしかけてきたマネキンを蹴り倒して金棒を後ろへ振る。触発するように爆発が起こり、二体が吹き飛んだ。

「あのマネキン一体の戦闘能力は、一般人と同レベルだ。この十人組み手を“致命傷”を負わずクリアできれば、あいつのレベルは十人力。まあ、単純な計算だとそうなる」

「それにしても、彼の成長は著しいですね。今ではドラゴン二体とまともに戦えるほどです」

「ただ単に適応能力がスバラシイだけです。どんな環境でも、ゴキブリのようにしぶとく生きていきますね」

エンドーは六体目のマネキンを破壊したところだった。

何度か攻撃を受けたが、致命的なダメージはない。

前から迫る棍棒を身を屈めてかわすと、相手の腹に拳、膝を叩き込んでトドメの頭突きを食らわせて破壊。二体が同時に剣を振り上げたが、金棒の一振りですべてそれを弾いた。そして片方を掌で突き飛ば



し、片方には金棒の突きを食らわせた。

「（もう一息！）」

背後のマネキンを振り向きざまに殴り倒すと、残りは突き飛ばされてよろめいていた一体　エンドーは『発破鋼』を解き、短剣をホルダーにもどした。

最後の一体が、無防備になったエンドーの背後から攻撃をしかける。

「お前はすでに、死んでいりゆ　」

ドオン！

突き飛ばしたときに接着しておいた魔力が爆発。ターゲットは全滅した。

だがエンドーは頭を抱えて悶えている。

「ちくしょー、最後の最後で噛んじまったあー！！　こっとなったらグラソン、もう一度だ！！」

「体力が限界なんだろ？　しばらく休憩しろ。体壊すぞ」

マイクに向かってグラソンが言う。

ちょうどそのとき、マハエがコントロールルームの階段を上ってきた。

「やあ、エンドー君はがんばってますか？」

「がんばりすぎですよ。いったい何が彼を突き動かしているのやら」

「あいつは気分の塊みたいなやつだからな。一緒に育ったオレらでさえ、わからない部分が多すぎる！　野良猫みたいなやつだ」

マハエは笑った。

「聞こえてるぞマハエー！　言っとくけどなあ、オレはそんなわけわからん動機でこんなことしてんじゃねーよ！」

エンドーが指差して叫んだ。

「すまん。マイクがオンになったままだ」

「……………」

マハエがグラソンからマイクを奪い取る。

「じゃあ何だ？ 何のために無理をする？」

「………… そうだなあ、トレーニングの後のメシが美味いからだな」

「そうか、訊いたオレがバカだった」

マイクを返し、マハエは近くに置いてあるファイルを手にとった。これまでエンドーがこなしたトレーニングの記録だ。

「げ。あいつこんなにな？」

マハエは驚いた。

「何度激しい痛みを体感してもなお立ち上がる。常人の精神力ではないですね。ですがその成果は確実に表れています」

その言葉を聞いてグラソンがうなずき、マイクのスイッチを入れた。

「少しは回復したか京助？ 次の訓練いくぞ」

疲労が溜まっているはずだが、エンドーは待つてましたと気合を入れる。

「真栄さんは遠藤さんとケンカしたことあります？」

「そりゃまあ、兄弟みたいなものだからな。小さい頃はよく取っ組み合いしてたよ。当然、いつもオレが圧勝だったけどな」

宗萱は「そうですか」と満足そうに微笑み、ホールを見た。

ホールの中央に前と同じマネキンが出現し、それに合わせてエンドーが短剣を構えて『発破鋼』を発動させる。

「次は何を始めるんだ？」

ハマエが訊くが、二人はニヤニヤと笑っただけいる。

エンドーと対峙するマネキンの背が少し縮み、全体のグラフィックが変化する。

一瞬後、エンドーの前には……、マハエが立っていた。

突然、友人を目の前にして、エンドーは戸惑いながらグラソン達を  
マハエを見る。マハエも目を丸くして、彼と対峙するもう一人の自分を見ていた。

「真栄の戦闘能力を分析し、データを入力して作り出した真栄の分身だ。どうだ？ 疲れが見えているが、その状態でこいつに勝つことができるか？」

グラソンがポンポンとマハエの頭を叩く。

「待って待て、あれはオレじゃあないぞ。今日のオレの髪型はもっとキマってる」

腕組み、への口で断固否定する。

だが彼の戦闘能力のデータをもとにしたのなら、あの虚像も少なからずはマハエだ。

どちらが勝つのか。いい勝負になるだろうとマハエは思った。エンドーを見ると、『発破鋼』を解いて短剣をホルダーにもどしていた。そしてパキパキと指を鳴らし、吐き捨てるように言った。

「つまらん遊びだ」

タオルで汗を拭き拭き、エンドーが階段を上ってきた。

「いい汗かいたあ。……あれ、マハエは？」

グラソンが親指で後ろを示す。

部屋の隅っこの黒々とした空気の中で、マハエがお経を唱えていた。

「開始十秒って瞬殺じゃないか、あれはオレじゃないけど、オレがあんなにも簡単に負けるなんて、しかも素手ってあんまりじゃない

か、あれはオレじゃないけど、でも前のトレーニングでエンドー疲れてたし、それに瞬殺されるなんて、あれはオレじゃないけど……」

「……やっぱり落ち込んだじゃった？」

「何とかしてくれ、こっちまで黒い空気が漂ってくる」

「大丈夫、ほっとけば立ち直るから」

その後「明日くらいには」と付け加え、笑いながらコントロールルームを出て行った。

テラスに出て、新鮮な空気で体を満たしたかった。

エンドーの心中は見た目ほど穏やかではない。先ほどのトレーニングで、昨夜の話を思い返していた。

『親友が突然、敵になったら……』

たったの十秒で終了した勝負の中でも、彼は必死に闘っていた。

重く苦しい時間を早く終わらせたくて……。

たとえバーチャルであっても、親友の姿をしたそれを殺す気で相手にするということは、想像していたよりもはるかに辛いことだった。

## 27：道化師は夜に笑う

深い沈黙の空間に、ピリピリと緊張が張り詰める。

ここは戦場。

マハエは頬を伝う汗にさえ気付かず、ひたすらに目の前の“敵”をにらみ続けている。

闇を照らすのは、ただ一本のロウソクに灯った頼りない小さな明かりのみ。

「どうしたんだい？ 早くしてくれよマハエ」

挑発するようなハルトキの言葉。マハエはつばを飲んで、恐る恐る手を伸ばした。

丸テーブルの中央で、ロウソクの炎がゆれる。

ロウが溶けて流れ、少しづつ寿命を縮めていく炎の下で、オレンジ色に照らされたカードの中では、道化師の絵が不気味に笑いながらその戦いを傍観している。

「よし」

二枚のカードが道化師のとなりに捨てられた。

次にハルトキがエンドーへ手を伸ばす。 慎重に指を動かす…

…、カードを一枚引いた。

「……さすがにここまで来ると、なかなかそろわないね」

手の中のカードを確認し、ハルトキは肩を落とした。

ハルトキの手札は三枚、マハエとエンドーは四枚。 トランプ

ゲームの定番中の定番といえは『ばば抜き』だろう。簡単なルールで覚えやすく、何より奥深い。そして一番大切なのは、必ずしも運まかせだけのゲームではないということだ。

「おいおい誰だ？ ジョーカー持ってるやつは？」

マハエが二人の顔を見回す。

「おっと、その手は通用しないぜ、マハエ。自分は持っていないとアピールしておいて、実はお前がジョーカーを持っているんだ」

エンドーは迷わずマハエの左端のカードを引いた。

「『7』か。残念」

勝負はいかにして相手を欺き、思い通りのカードを引かせるか、また相手の心を読み、思い通りのカードを引くかにかかっている。

マハエが慎重にハルトキの手札から引き、ほっとした表情でそろったカードを捨てる。

なぜ彼らがこれほどまで真剣になっているのか。それはエンドーの「ババ抜きしようぜ」の一言から始まった。けっきょくこの日は何もすることなく終わり、エネルギーの有り余った三人は眠れぬ夜を過ごしていたのだが、変にテンションが上がったエンドーが続けて放った、「負けたやつは一人称を『ボクたん』に変えること」という思いつきの一言から、この状況に。

なんと恐ろしい思いつきか……。自分のキャラを守るために彼らは全力で戦う！

現在はマハエが三枚、ハルトキが二枚、エンドーが四枚になり、次はハルトキがエンドーから引く番だが……。

「ここで良いカードを引けば、ボクの勝ちは決まりだ。“ばば”を引かなければ、ね」

ハルトキに目を見すえられ、エンドーは驚きで瞬きすらできない。

こめかみから汗が流れた。

「キミはマハエがジョーカーを持っているとにらんだわりに、カードを引く手に迷いがなかった。自分がジョーカーを持っているとボ

クに悟らせないよう、とつさにマハエの言葉を利用したんでしょ？  
同時に持つていないマハエはボクが持っていると思込んで動揺し、判断力を鈍らせてしまう」

「……………」  
エンドーは目をそらした。

「そして相手にジョーカーを引かせようとするには、どこに置くのがベストか……。一番引きやすい右端か、それとも おやおや、真ん中にあるのに不自然に取りやすい配置になっているそのカードか」

ハルトキはニヤリと笑った。エンドーはじつと無表情で、手元のカードに視線を注いでいる。

「その真ん中がジョーカーと見て間違いない！」  
右端に手を伸ばすハルトキに、エンドーが微かに笑った。

「これはフェイクだよ、ヨツくん。真ん中はジョーカーじゃあない」

「！？」

カードに触れる直前、ハルトキはピクリと手を止めた。

「……………う、嘘だ」

動揺するハルトキを見て、エンドーは満面のニヤケ顔。

「（嘘に決まってる！ 真ん中がジョーカーじゃないのなら、そんなことを言う意味がない！）」

二人のにらみ合いは続く。

エンドーは自分が優位に立ったのを感じた。ハルトキの推理どおり、ジョーカーはエンドーが持っている。そしてこれまた推理は当たり、ハルトキが疑ったとおりの位置にそれはある。

それでも、優位に立ったのを感じた。

なおもにらみ合いは続き、ヒマそうに眺めていたマハエが「ふあ

あゝ」とあくびをする。

「……無駄なあがきだったか。好きにしろ」

エンドーはため息をつき、大人しく手札を差し出した。

「悪いね。勝負は非情なりだよ」

エンドーを打ち負かして満足そうに、あらためて右端を引いたハルトキだが、カードをひっくり返して笑顔を凍りつかせた。

「ジョーカー……」

満足そうに笑ったのはエンドーだった。

「（どういうことだ？ まさか初めから真ん中は無関係だったということか？ いや、それではつじつまが合わない。なぜエンドーはあのとき　　そうだ、あのときまでは間違いなく真ん中がジョーカーだったはず。ということは途中ですりかえて……）」

ハルトキは気付いた。エンドーとにらみ合っている間、カードの位置をすりかえるチャンスを彼に与えてしまっていたことに。すべてはエンドーの計算だった。

「遠藤京助、恐るべし……」

ハルトキは力尽きるようにテーブルに突っ伏した。

その後エンドーとハルトキのたまし合い、読み合い合戦は続いたが、いち抜けしたのは意外とノーマルに戦っていたマハエだった。

「ちっ、マハエのくせにー！」

「さてさて、『ボクたん』はどちらかな？」

「見てろ！　すぐにケリつけてやる」

「すぐにだと？　ふん、それはこっちのセリフだ。泣きを見ることになるぜ？」

ハルトキはエンドー以上にメラメラと燃えていた。

「ヨツくんキャラ変わってる……」

よほど必死なようだ。



勝負はどちらがババを持つかにかかっている。現在はハルトキがババ持ちだ。

「さあて、キミは残り二枚、ボクは残り三枚、うち一枚がジョーカーだ」

ハルトキが引き、そろった『K』<sup>キング</sup>を捨てた。手元に残った『7』とジョーカーを見、エンドーに差し出した。

「『7』を引けばキミの勝ちだ。ちなみに、ジョーカーはキミから見ても左だよ」

左のカードを持ち上げ、挑戦的にニヤリと笑う。

「……陽動作戦か、オレには通用しないぞ。けっきょくのところ二分の一なんだ、たとえここでオレがジョーカーを引いたとしても、延長戦になるだけだからな」

「それじゃあ、これならどうだい？」

ハルトキは二枚のカードを裏の状態でテーブルに並べ、ジョーカーのほうを返してエンドーに見せた。それをもう一度裏返し、左右のカードを素早く動かし、シャッフルした。

「……………」  
カードの動きを目で追っていたエンドーは、テーブルに並んだ二枚を見て勝利を確信した。

ジョーカーは右。左を選べば、勝利する。

「（さらば、ヨツクんのクールキャラよ。今まで楽しかったぜ……）」

エンドーは思い出を振り返りながらカードへ手を伸ばす。そのとき、ハルトキにささやくマハエの声が聞こえた。

「うまくやったな」

瞬間、エンドーは手を止め、その言葉の意味を考えた。

「（うまくやったな？）」

エンドーはたしかにその目での確にシャッフルされるカードを追

った。動体視力はそれなりに良いほうだと自負している。　　自分が選んだカードが安全だと自信を持って言える。

「（……自信を持って言える？　本当にそうか？　そもそもヨツくんがこないかげんなことに勝負をかけるだろうか？　本気のヨツくんはそうじゃない。……これは何かあるぞ！　ヨツくんの正面に座るオレに気付かないところで細工があつたのかもしれない！）」

一瞬で考え、エンドーは逆のカードに手を動かした。  
「こつちだぁー！」

エンドーが選んだ、本来ならばジョーカーのはずのそのカードは、ひっくり返すと　　やつぱりジョーカーだった。

「……………おや？」

エンドーは不思議そうな顔でマハエを見た。マハエは知らん顔で天井を眺めている。

「ふー、危ない危ない。ひやひやしたよ。いかげんなことするものじゃないね」

「マハエくん。さっきハル君に何か言ってますでしたか？　うまくやったとか」

「え？　何のこと？」

そのときエンドーは気付いた。敵はハルトキだけではないと。なぜかはわからないが、マハエとハルトキは同盟を結んでいるらしい（当然ことだが、むちゃくちゃな思いつきをしたエンドーに味方はいない）。

気を取り直し、エンドーは作戦を思案した。だがこれといって良い方法は思いつかない。今の彼はあまりにも不利だ。

「（不利、か…………）」

しばらく、できる限り頭をフル回転させたが、今のハルトキを打ち負かす良い案は出てこなかった。運に任せても勝てる気はしない。今更「やつぱりナシにしようぜ」なんてのはプライドが許さない。となればここは　　エンドーはテーブルに、カードを表向き

で投げ出した。

「いい勝負だったよ、ヨツくん。もうオレに力は残ってない。……好きなほうを選べ。煮るなり焼くなり揚げるなり、な」

ハルトキはジョーカーと『7』のカードを見比べてから、エンドーを見た。

「負けてもいいの？」

「負けるのは悔しい。けど、オレの全力は出し切った。……運に任せるのも性に合わんしな」

いかにも悔しそうに天井を仰ぐ。

エンドーはよくわかつている。ハルトキは優しいやつだ。

困ったときにはいつも助けてくれた、頼れる親友だ。見捨てたことなど一度も……、少なくとも百度はなかったはずだ。

ここはハルトキの優しさにすぎるしかない。彼ならこの勝負をドロで終わらせてくれるはず。

ハルトキが「やれやれ」とため息をついた。それからカードを投げ出す音を聞いて、エンドーは涙を流しそうになった。

「ありがとうヨツくん……。何だかオレ……。オレはっ……」

「なに言ってるの？ 『ボクたん』でしょ？」

「……………へ？」

エンドーは耳を疑った。見ると、残っているのはジョーカーのみ。墓地には組になった『7』のカードが捨てられていた。

エンドーは負けたのだ。

「あのー、オレさー……………」

「『ボクたん』ね」

「……………」

残酷に笑うマハエとハルトキが、ジョーカーの中の道化師よりも

恐ろしく不気味に見えた。

「……オレは…… オレは……。 もうお前らとは絶交だあー  
ー！！！！」

ガンツ！と椅子を蹴飛ばし、エンドーは乱暴に部屋から出て行った。

「あいつの魂胆はバレバレなんだよ」

ハルトキはもう一度「やれやれ」とため息をついた。

どこかで、「ボクたんもう知らない！」というエンドーの音が小さくこだましていた。

「頭くんなあ、もうー！！」

エンドーは夜の闇に怒声を撒き散らしながらズズシと闊歩する。

「もう一生、口きいてやんない！！」

この怒りは明らかに自業自得なのだが……。

宿から少し離れたところで立ち止まり、振り返ってみる。誰も追ってこない。エンドーはさらに立腹。ハルトキかマハエでも追ってくるようなら、仕方なく許してやる気にもなれただろうが。

「もういいよ！」とぶりぶりしながら、本部にでも行こうと再び歩き出したとき、何かの気配を感じてもう一度立ち止まった。

「……なんだ？」

今まで何度か感じたことのある気配だった。怒りを隅に置き、エンドーはじつと前方を見すえた。

腕には鳥肌が立っている。何も聞こえていないのに、誰かの悲鳴を“感じた”。

少しすると、今度は本物の悲鳴。女の悲鳴が聞こえ、続いて数人の男の怒鳴り声が、闇の奥から響いてきた。

エンドーは短剣を抜いて声のしたほうへ走った。

建物と建物の間にある狭い路地。月の光はわずかしか入り込まず、大通りからは目立たないこの空間に、一人の少女が駆け込んだ。闇に紛れて逃げ切るつもりだったのだろう。だが路地に入った直後に、追ってきた男達に追いつかれ、細い腕を掴まれてしまった。

男の数は三人。少女は男の手を逃れようと必死にもがくが、ほっそりとした体つきの彼女が彼らに抵抗するにはあまりにも力不足だ。歳もまだ十四かそこらだろう。

少女の胸ぐらを掴み、壁に押し付けたのは、頭にサングラスを乗せ、耳にピアスを付けた若い男。その後ろに立つ二人も彼と同じようにガラが悪い。

「何するのよ！」

自分が置かれた状況にも関わらず、少女は威勢よく叫ぶ。

「静かにしねえか、このクズが！」

ピアス男は横にツバを吐き捨て、額と額が付くほど、少女に顔を近づけた。

「オレあよお、昼間この辺りで財布すられちまったんだが、知らねえか？ 知ってるよなあ！？ てめえの汚ねえお仲間のしわざだったこたあわかってんだ！」

「だったら何だったのよ？ 私にその仲間を連れて来いとでも言うわけ？」

少しも臆している様子のないその言葉にピアス男はイラついたのか、乱暴に少女を地面に押し倒した。

「てめえの体で落とし前つけてもらうしかねえだろお？」

後ろに立っていた男の一人が、ふところからナイフを取り出した。月の光を反射させてキラリと光るナイフを見て、初めて少女の表情が強張った。

「少々痛めつけて、二度と悪さできねえようにしてやる。てめえの

仲間への見せしめにもならあ

「や、やめて……」

「うらあ！」

脅すように、ナイフが振り上げられた。

「やめて!!!」

少女が両手を突き出した。

バチバチバチッ!!!

青白い光が闇を切り裂いた。電気のような細長い光は、ナイフを伝って跳ね、それを持つ男の体を貫通する。

「ぐああ！」

「なんだ!？」

ナイフを持った男がよろめいて倒れ、あとの二人がひるんだスキに、少女は走って路地から脱した。

「くっそ! 待てガキヤ!!!」

ピアス男ともう一人が少女を追おうと路地から飛び出す。そ

んな彼らを誰かが呼び止めた。

「あー、ちよいとそこのお兄さん方、夜道で迷ってしまったのですが、道をお尋ねしてもよろしい？」

「ああ!？ それどころじゃねえんだ、すっこんで」

男の顔面に拳がめり込んだ。

「ってんめこのっ!!! あにしゃあがる!？」

間近でゴゴゴ……、と音を立てる凄まじい怒りのオーラに、男達はモンスターと遭遇したかのように言葉を失った。

「ボクたん、今すぐく機嫌が悪いんだよね。口には気をつけといてね? 怒らせると怖いよ、ボクたん」

パキパキッと、エンドーの拳が鳴った。

夜の町に男達の悲鳴が短くこだました。

「胸くそ悪いぜ、まったくよー」

金棒が地面に転がったサングラスをグシャツと潰した。

あつという間に男二人と、その後よろよろと路地から出てきたナイフ男を伸してしまい、エンドーは東へ逃げ去っていく少女の背中を興味深そうに眺めていた。

重なるように倒れている男達に片足を乗せ、つぶやく。

「ボクたんオドロキ」

## 28：切り離された子供達

朝

エンドーは本部の休憩室で目を覚ました。といっても、ほとんど寝ていない。

畳の上で座布団をまくらに仰向けになると、ずっと天井ばかりを見つめて、昨夜見た光景を何度も思い返しては、それについての考えをあれこれと巡らせていた。

狭い路地に少女が逃げ込み、その後を三人の男が追って入った。エンドーはすぐに駆け出し、路地を覗き込むと、ちょうど少女が悲鳴をあげて両手を突き出していて

エンドーは起き上がって頭を振った。

「まさかそんな……」

だがあのとき感じた気配はたしかに エンドーが見た光はたしかに 少女の両腕から発せられ、男を倒した青白い電気のようなものは

「あれは“魔力”…… だった？」

一度頭の中を空っぽにし、ぼんやりと数分を過ごしていると、ドアがノックされ、S A A Pが皿に乗ったコーヒーカップを運んできた。

「すまんね、気を使わせて」

心づかいのコーヒーを受け取ると、S A A Pはお辞儀をしてすぐに休憩室から出ていった。

「働き者なこと」

ブラックのコーヒーに角砂糖を三つ、ミルクをたっぷり入れ、ぼーっとしながらかき混ぜる。



魔力と魔力は共鳴し合う。身近な場所であからさまに魔力が発せられれば、魔力を持つ者ならずくにそれを感じ取る。あのとき少女が発したそれも、宗萱やグラソンが戦闘時に発する魔力と同じように感じた。

熱いコーヒーを一口すすると、それまでさんざん考えていた謎が、すんなりと答えとして頭にしみ込んだ。

『だった？』じゃない。あれは魔力だったのだ。

だがそう考えると疑問は深まる。

「……魔力って何なんだ？」

今まで特別なもの、人間世界はもちろん、セルヴオ世界の中でも異質なものだと思っていた魔力が、“この戦い”とはまったく無関係の幼い少女に宿っていた。魔力って何なんだ？

自分の体の中に流れる力が 戦いの中で培い、理解してきたつもりだった力が、やはり底知れず得体の知れないものだと思改めて思い知らされた。

「（やっぱりグラソンか宗萱に報告しておくべきかな？）」

そう考えたが、まずは自分なりに行動するべきだと結論を出し、コーヒーを飲み干すと気合を入れて立ち上がった。

朝の港町は活気に満ちている。新鮮な魚介類が並ぶ港の市場、野菜や調味料などを売る店にも、仕入れや買い物をする主婦達でこつた返している。隣町からわざわざ出向いてくる人も少なくない。

そんな賑やかさは町の中心にかぎり、人々の声を遠くに聞きながら、エンドーは町外れの静かな廃墟地に立っていた。

夏だというのに寒さを覚えるのは、そこに人の気配がないだけではなく、港周辺の騒がしさからはあまりにかけ離れた、港町の裏側にいる気分になるからだろう。そこは切り捨てられた、町の要らない部分、人々から忘れ去られた、存在してはいない部分とさえ思わ

される。

エンドーは昨夜の記憶を頼りに、少女が逃げ去った方角へと歩き、この場所にたどり着いた。テレポート装置がある小屋からそう離れてはいない場所だが、今までとくに気にしたことがなかった。

こんな場所にあの少女がいるとは思えなかったのだが、ちょっとした冒険心もあって、立ち入ってみることにしたのだ。

黒く変色した壁やツタに侵食された壁、雑草が茂る庭には朽ちた犬小屋。空っぽの家々が不規則に並び、さながら迷路のようだ。「誰もいない、よな？」

このまま奥まで進むとモンスターでも出てきそうな雰囲気、エンドーは引き返そうとした。が、そのとき、近くで子供の話し声が聞こえた。

振り向くと、壁に囲まれた小さな廃工場があり、その中から子供数人の声が聞こえてくる。

表門から覗くと、ござっぱりした庭を隔てた向こうにある廃工場の前に、三人の子供が座り込んでいた。

なぜこんな場所に子供が？

そんな疑問が、まず浮かぶ。

エンドーはそろりと門から庭に踏み込んだ。

子供は女の子が一人、男の子が二人。いずれも小学校低学年くらいの子だ。と、工場の入り口からさらに三人出てきた。二人は高学年ほどの女の子。そしてその子達に両側から手をつながれた、あの少女。

エンドーは立ち止まって、「どういうことだ？」と考えた。この光景はどう見ても、この廃工場に住んでいるとしか思えない。

つまりこの子達は……。

「……！」

少女と目が合った。

庭の中ほどで立ちつくすエンドーを少女はいぶかしげに見つめ、子供達は不安そうな顔で彼女の後ろに隠れる。

「……何か？」

ぶつきらばうに少女が訊く。隠れる子供達を守るように、反射的に右手を横に出している。

昨夜は暗くてわからなかったが、少女が身につけている服はボロボロで、ひどく汚れている。少女だけではなく、ここにいる子供達全員が。

「……あー、えーっと、オレさー、昨日の夜キミが男に追われているのを見て」

少女の顔が歪んだ。本人にとっては思い出したくもないことだったのだから。

「スンマセン。……それで、あるときキミ、変わった力を使ってたよね？ あれってさ」

「帰ってっ！！」

突然響き渡った少女の叫び声に、エンドーは驚いて一步引いた。

「私は見世物じゃない！！ あんたも私を化け物みたいに見るんでしょ！！？ 私化け物じゃない！！」

「違う！ オレはただその力を」

「私にかまわないで！！ どうせあんたらは私達なんて人として見てないでしょ！？ ただのゴミだと思っただけでしょ！？

出て行ってよ！！ お願いだから私達なんかほっといてよ！！！！」

「ちょ……」

エンドーは半分開いた口を閉じた。

「（そうか、この子達は……）」

親に捨てられ、世間に捨てられた孤児だ。帰る場所も頼る人もな

い、辛い思いをかみ殺しながら自分達だけで必死に生きてきた……。少女は肩で息をしながら、血走った眼でエンドーをにらみ付け、必死に怒りを冷ましているようだった。子供達も驚いたようで、泣き出しそうな顔になって少女を見上げていた。

「……わかつたら帰って。話すことなんて何も無いわよ」  
「……………」

子供達に「ごめんね」と言い、エンドーに背を向けた。

今は帰るしかない。あの状態では何も聞き出すことはできないだろう。

エンドーは少しの間、少女と彼女を囲む五人の子供を見ていた。親に捨てられた、親を失った子供達なんて見慣れていたつもりだった。何より、自分がそうだから。しかし今、目の前にいる彼女達は、今まで見てきた誰とも違って見えた。彼女達からは笑顔を想像できない。一人ひとりが孤独を引きずっているような、悲しみや怒りや憎しみを消す術を知らず、ずっと引きずっているような、そんな感じがした。エンドーは親に捨てられた。でも施設に入って園長や先生、マハエやハルトキと出会って苦しい過去を忘れることができた。周りの大人達が、とても温かかったから。

「子供同士では、せいぜい傷の舐め合いしかできないんだ……………」

本当に子供の傷を癒すことができるのは、大人達の温かい手だけ。どうにかしてやりたい。

哀れみなどではなく、真剣にそう思った。

となれば、やることは一つしかない。彼の中で名案が浮かんだ。「よし」と、エンドーは踵を返そうとし、ピタリと動きを止めた。

背筋がゾクツとする。いつの間にか背後を取られた。

ざっと振り返ると同時に拳を構える。

「おっと！ ぶっそうはいけねえ！」

少年が立っていた。

背はエンドーよりも低く、歳も二つほど下らしい。あの少女と同じくらいだろう。薄汚れた服にジャケットを重ね、頭にはベレー帽をかぶっている。

「誰だ？」

「誰だ？ とは、そりゃあこっちのセリフだぜ」

「後ろに何隠してる？」

エンドーに指差され、少年は慌てて両手を見せた。

「何も持ってやしないって。ところで“家”に何の用で？」

「ああ、この人か。いや、別に大したことじゃないんだ、今すぐ帰る。悪かったな」

エンドーは少年の横を通り、足早に門から出て行った。

少年はしばらく警戒するように門のほうに目をやり、エンドーの気配が遠くへ行ったのを確認すると、少女のもとへ。

「おかえり、ジン」

「サーヤ、何かあったのか？ 誰だあいつ？」

ジンと呼ばれた少年と、サーヤと呼ばれた少女。二人は無表情で言葉を交わす。

「……何でもない。ただのゲス」

「ただのゲスか。それにしても何者だ？ オレあ完全に気配消してたんだけどなあ、あの野郎、感付きやがったぜ」

「偶然でしょ」

「ま。いただく物はいただいた」

ジンは笑顔になり、隠し持っていた物を見せた。

それは革製のソードホルダーにおさまった銀色の短剣。エンドーから盗み取った物だった。

「いい品ね。銀製？」

「いや、鉄製だ。でも見てみるよ、こいつにはまってる宝石はきつと高く売れるぜ。見たことねえ石だ」

サーヤが短剣を受け取って、キラキラと純粹な瞳で青い石を覗き込んだ。

「ほんと、綺麗……」

その石はまるで、海を小さく縮めたかのように底が見えず、吸い込まれそうになる。サーヤの魂はざわざわと波打っていた。そして、なでるように石に触れてみる。

「！！？」

サーヤはビクツと反射的に短剣を手離した。まるで短剣が突然高熱を発したかのように。

いきなり青ざめて固まるサーヤを、何かとジンや子供達が見やる。

「どうしたんだよ、サーヤ？」

「……何なの、これ？」

自分の手を凝視する彼女の声は震えていた。

石に触れた瞬間たしかに感じた、指の先から全身の力が流れ出る感覚。気のせいなどではない、形がありそうなほどにリアルな感覚だった。

「……………」

地面に突き刺さった短剣は、妖しい輝きを放っていた。

## 29：行動あるのみ

「グラソングラソングラソングラソングラソングラソン」

「何だ京助？」

「さて、今何回グラソンと言ったでしょう？」

「四回」

「……………空気読めよ」

「何のだ？」

『シラタチ』本部の廊下で、エンドーがグラソンを呼び止めた。

「今、時間あるか？ 実はな」

「オレの都合はお構いなしか」

「実は昨夜、町で妙な気配を感じたんだ」

エンドーは少女が使った魔力のこと、廃工場に住む孤児達のことを早口に話した。

グラソンはうなずきながらその話を聞いていた。

「あれは間違いなく魔力だったよ。そこで相談が」

「おや、遠藤さんも気付きましたか」

宗萱がグラソンの後ろから歩いてきた。

「彼らは、『存在しない子供達』と呼ばれる、親や親族に捨てられた子供の集まりです」

「……………存在しない？」

「大人に対して心を閉ざしてしまい、働き口など見つかりませんから、盗みや残飯集めで生活しています。ゆえに町民達からは忌み嫌われ、彼らを人として見ようとする者は少ない。…………ゴミと同じだと“人としての存在”を否定されているのです」

宗萱は気分悪そうに、「かわいそうな子達です」と言った。

話を聞いてもつと気分を悪くしたのはエンドーだ。彼はその目でしつかりと生きている彼らを見た。人に違いないのに、一番見捨ててはならない大人が彼らをゴミと呼び、その子供もまた彼らをさげすむ。

「……いつから気付いてた？」

エンドーが訊く。

「何度目かに港町へ行ったときだ。お前と同じように、微かな魔力を感じた」

何度目かに　それはエンドー達が、今回この世界へ来たときよりもずっと前からだろう。

「……何だよ？」

エンドーはにらむような目を宗萱とグラソンに向けた。

「何でそんな前からあいつらの存在に気付いてて、ほったらかしにしてんだよ？　見て見ぬフリしてんだよ？　お前らも町の冷たい連中と同じか！？　オレはお前らなら　『シラタチ』ならあいつら助けてくれると思ったから相談に来たんだぞ！」

エンドーは怒りをぶつけた。だがグラソンは表情一つ変えず、宗萱は帽子を下げてうつむいている　目をそらしている。信じていた『シラタチ』の、思いがけない裏切りに思えた。最高責任者がこれでは、組織全体が動くことはない。

「お前らセルヴォになって　人になって、人の心を理解できるようになったんじゃないのかよ！？　それなのに　」

「オレ達にどうしろってんだ？」

グラソンが冷たい表情でエンドーを見下ろす。

「どつつて、そんなこと決まってるじゃねーか！」

「やつらに食事を与え、住む場所を与えろと？　勘違いするな、『シラタチ』はよろず屋じゃないんだぞ。軍に属していない以上、軍からの援助はほとんどない。オレ達が組織として活動できているの



は、デンテールが残した遺産のおかげだ。いいか、『シラタチ』が救おうとしているのは、この世界そのものなんだ」

「……………」  
エンドーは歯を食いしばって憤怒を抑えた。

グラソンのすました顔にツバを吐きかけてやりたくなかった。

いかにも“大人の言い分”だったから。だが何も言い返せないのは、それが“大人の事情”でもあったから。悔しいかな、エンドーもその事情をよく理解できる。グラソンの言い分は正しいと。自分が言っていることが、“子供のわがまま”なのだ。

「……………けどよ、せめてあいつらに住む場所くらいは あんな廃墟じゃなくてさあ……………。そうだ、この城なら広いし部屋もたくさんある！」

「遠藤さん、よく考えてください。我々はテレポト装置のおかげで、簡単にこの城へ移動できます。ですが実際、ここと港町は離れた場所にあるのです。あの子達に廃墟を捨てさせ、町から遠く離れたこの城へ住めと？ それでは彼らの食料調達もままなりませんよ……………」

言い返す言葉がない。たしかにそうだ。子供達をここに住まわせれば、食料のめんどろまで見なくてはならなくなる。何か良い方法はないか。エンドーは冷静になって考えた。つまり、あの子達の保護が『シラタチ』にとってボランティア活動でなくなればよいのだ。

「……………あの少女が持つ魔力について、どこまで知ってるんだ？」

エンドーの問いに、宗萱もグラソンも首を横に振る。

「ほとんど何もわかっていない」

「それなら、彼女が持つ魔力について研究してみる必要はないのか？ 彼女の力を研究させてもらう代わりに、こっちは生活の援助をするっていうのは？」

いい案だと思った。これなら宗萱もグラソンも首を縦に振ってくれると。

「たしかに、魔力というものが何なのかを知るには必要なことだ。だがオレと宗萱は、とくに気にすることではないと思っている。オレ達にとつての魔力は、“戦うための力”。それ以外の何でもない」「そんな……、自分の力について少しも知りたくないってのかよ！？」

「遠藤さん、そんなにあなたは、あの少女を戦いに巻き込みたいのですか？」

宗萱の言葉は落ち着いていながらも、冷たく胸にムチ打つものだった。

「彼女の力を研究するということは、彼女を『シラタチ』に深入りさせるということ。この戦いの渦に巻き込んでしまいかもしれないということですよ」

「……………」

「この世界の人々は、この世界の平和が、たった一本の糸でかろうじて繋がっているだけだということを知りません。……この戦いがどういう結果に終わろうと、最後まで何も知らないままのほうが幸せなのでしよう」

今度こそ何も言い返せなかった。自分達の都合だけではなく、他人にとつて一番となることをも考えての結論だったのだ。宗萱達も、最初はエンドーと同じことを考えていたのかもしれない。

そう思うとエンドーは恥ずかしくなった。

しかし、少女の件をあきらめたわけではない。魔力というものが何なのか、それは『シラタチ』とか関係なく、エンドー自身が個人的に知りたいことだった。

「……じゃあさグラソン、活動費、前借りさせてくんない？ マハエとヨツくんの分も」

「かまわんが……。廃墟の子供達とは関わるんじゃないぞ」  
エンドーは何も答えず、二人に背を向けると適当に手を振った。

「エンドーさん、どうか二人を責めないでください」

「べつに責めてない。わがママを言ったのはオレのほうだからな」

「なぜあの子供達のためにエンドーさんがそこまで？ やはり自分と重ねて見てしまいますか？」

「……許せねえんだよ、大人を。身勝手な大人達をな。……それはそうと案内人、お前最近、影薄いぞ？」

「余計なお世話です。エンドーさんはわかってますか？ グラソンさんが言っていたように、あの子供達とは関わらないようにしてくださいね？」

エンドーは立ち止まり、腕を組んで少し考えるしぐさをしてから言った。

「それは無理だな。オレあそこに忘れ物しちゃったんだよねー」

正午になり日が真上に昇ったが、この日の港町は心地よい海風が通り、昨日よりはずっと過ごしやすい午後となることが予想される。町の大通りで子供達が嬉しそうに走り回る姿を、母親が、おばあさんが、家の窓辺で微笑みながら見守り、商店でも、お使いに来た子供におじさんやおばさんが「おりこうだね」と笑いかけ、子供も照れくさそうに笑う。

町の中心部は温かい笑いにあふれている。

微かに耳に入ってくる楽しげな声を、サーヤは少しもうらやましいなどとは思わない。

いつからかあきらめていた。今日を、明日を生きることとで精一杯で、夢も目標も何も無い。

サーヤは笑い声一つない廃工場を見回した。ここにいる子供達もそうだろう。ただ今を生きているだけ。生きることの楽しさも、喜びもない。……ただ感じるのは空腹と虚脱感だけだ。

「（ほんと、いつからだろ？）」

とうの昔に、笑顔の作り方なんかわすれてしまっていた。

「姉ちゃん……」

男の子がサーヤの服を引っ張り、門を指差した。門の外で人影が揺らいだ。

「あいつ……！」

大きなバッグを背負ったエンドーだった。

エンドーは躊躇なく工場の庭に入ると、重そうなバッグをドサッと地面に置いて一息つく。

サーヤのまわりに子供達が集まる。「何をする気なの？」と恐れられているが、エンドーはそ知らぬ顔でござごととバッグをあさり、木炭の束を取り出し、次に火鉢を二つ地面に置いた。

何かの嫌がらせに違いない。

そう思い、サーヤは子供達を背中にまわして叫んだ。

「出て行って！ 何をしたらってムダよ！ この子供達は私が守る！」  
だがエンドーは見向きせず、パタパタとうちわで火鉢をあおいでいる。

そこからはサーヤも何も言わずに、身構えたまま成り行きを見ていた。

数分後、火鉢の中ではパチパチと炭が音をたて、香ばしい匂いが辺りを漂っていた。火鉢の金網の上では、串に刺さった魚の切り身や貝やタコが、特製のタレを塗られてあぶり焼きにされ、したたる脂とタレがはじけてたまらなくおいしそうな香りを放つ。

「そろそろかな。お、これはもう焼けてる。」

子供達がいつせいにつばを呑む。

空腹を満たせない、空腹しか知らない彼らにとってはこの上なく酷な光景だ。

「やめなさいよっ！！ 何なのよあんたは！？ どうして私達をいじめるの！？ 悪いのはあんた達、町民でしょ！？ 私達に手を差し伸べてもくれない、振り向いてもツバを吐きかけるだけ！ 私達がこうなったのは全部あんた達のせいなの！！ 私達の気持ちなんか一つだってわかりもしないくせに！！」

「……ぎゃーぎゃーうるさいな。早く食べよ、うまいぞ」

「……………は？」

サーヤは呆気にとられて立ち尽くした。

エンドーの言っている言葉の意味がわからなかった。彼が嫌がらせでこんなことをしているのではないと気付いたときには、サーヤの周りにいた子供達は駆け出して火鉢に群がっていた。

「たくさんあるから取り合いするなよ、腹いっぱい食べ」

「ちよつと、みんな……………」

「お前も食べよ」

よく焼けた一本をサーヤに差し出すが、サーヤは警戒したままエンドーから視線をそらさない。

「……………なに企んでるの？ それとも哀れみ？」

「前に言っただろ？ 訊きたいことがある」

サーヤは少し考えてから鼻を鳴らした。

「取引つてわけ？ 悪いけど、私はのらないわよ？」

「そうか。でも、この子供達はもう食べてる」

「……………」

ニヤリと笑うエンドーに、しまったと顔を歪めたサーヤ。少しの間迷っていたが、やがてあきらめて肩をすくめた。

「……………」卑怯ね

### 30・少女の心

「あの子達が笑った顔、ほんと久しぶりに見たわ」

胃袋を満たしたおかげか、厳しかったサーヤの表情はすっかり和らいでいた。

並んで座るエンドーとサーヤの目の前を走り回る子供達は、元気な笑顔を見せている。これが本来あるべき子供の姿なのだと、エンドーは満足そうにうなずいた。

「ところでサーヤ、あの帽子がぶったやつが見当たらないが？」

「ジンのこと？ あいつは夜まで帰ってこないわ。どこかでドロボ―してるか、ギャンプルしてるか……。テキトーなやつなの。あいつはこの廃工場の中で一人だけ、自分からこの生き方を選んだ“家出者”なのよ」

呆れたように言った。

「孤児院とかはないのか？ 身寄りのない子供を保護する施設とか」「いくつか、軍が管理する施設があるらしいわ。でも、保護された子供は軍に属する運命。幼い頃から訓練を受けて、未来の兵士として育成される。……そっこのほうが、私達みたいな汚れた生活よりはマシかもしれないけどね……」

「……軍の施設か」

エンドーはこの世界の『守民軍』とやらが気に食わなかった。もともと、縦社会の上にいる大人にろくなやつはいないと思っていたのだが、その話を聞いて軍への不信感が強まった。つまり軍は、かわいそうな孤児達を利用しているのだ。果たしてそれが彼らにとって幸せなのか……。

鼻で笑うエンドーに、サーヤはツンとして、

「あんたみたいに、温かい家で生まれ育った人に、私達の気持ちなんて一つも理解できないわよ」

短くため息をついて、そっぽを向いた。

「……ところで、何者なの？ キョースケさん？」

向こうを向いたままサーヤが尋ねる。その声色は低く真面目で、変わらずエンドーを警戒していることを表している。

本当のことを教えるわけにはいかないと、エンドーは肝に銘じている。自分の好奇心で彼女や他の子供達を危険にさらすわけにはいかないから。

「ん？ んー、オレは タビビト」

「ふーん、そんなところだと思っただわ。旅人は物好き　そして、楽な人生に飽き飽きした人ほど旅に出るの」

トゲのあるサーヤの言葉は、まるで「心底バカらしいわ」と言っているようだ。

それでもエンドーは心の中で歓喜していた。まさか彼女がここまで打ち解けてくれるとは思っていなかったから。さすがにまだ警戒心は残っているようだが、それは微々たる問題。初めて会ったときに見せた彼女の強気な印象から、この廃工場に再び足を踏み入れた時点でケツを蹴られて追い出されるというパターンも想定していた。それよりはずっと、はるかにマシだ。

少し間を置いてから、エンドーは本題に入ることにした。

「そろそろ教えてもらえる？ キミの　あの力について」

途端に、横顔からだが、サーヤの顔色が厳しいもの変わったのがわかった。それは予想通りの反応で、エンドーは臆すことなく彼女を見つめる。

またヒステリーを起こされては万事休す。　だが、サーヤは何度か深呼吸をして、冷静にそれを抑え込んだらしい。

数十秒、エンドーは待った。そしてようやくサーヤは話し始める。

「あの力のことは、私にもよくわからないの。……感情が高ぶったときとか、たまにああなるの。体のどこかから腕を伝って電流が流



れる」

「今は出せる？」

「どうやって出してるのかさえわからないのよ。それに、できたとしても絶対にイヤ」

口調に怒りがにじみ出た。

「私はこの力が大嫌いな。あなたに見せてこの力が無くなるのなら、いくらでもやってあげる。でもそうじゃないでしょ？」

「何ですか？ 昨日だってその力に救われたんじゃないか」

「わかったふうな口利かないで！ あんたに何がわかるのよ？」

…何の力もない人にわかるわけないわよね。あんた達にとっては変わった力がうらやましいと思うかもしれないけど、この力のせいで私は……、私の人生はめちゃくちゃよ」

首を振って肩を落とすサーヤに、エンドーは「ゴメン」とあやまつた。軽い調子で言ってしまったのが悪かった。まだ幼さの残る少女が、未知の力を恐れうつとしく思うのは仕方のないことなのだ。だがサーヤが魔力を嫌う理由は、それだけではないらしい。

「……この力を初めて使ったのは七歳の頃。その頃は私にだってちゃんとした親がいた。父さんがいて、母さんも……。ある日、友達とのささいなケンカでこの力は現れたわ。私は友達に怪我を負わせてしまった。その光景を見ていた人が何人かいて、すぐに噂は広まって、たちまち私は化け物あつかい。父さんもその内の一人だった。でも、それでも母さんだけは必死に私を守ってくれたわ」

いったん、サーヤは口を閉ざした。

辛い過去を思い出しているのだ。エンドーは話題を変えたほうがいいかなと考えた。少女の心の傷痕をこじ開けるようなことは絶対にしたくなかったし、こんなことで苦しむサーヤを見たくもない。それにバカな自分を責めるのもイヤだから。

サーヤが再び口を開くが、エンドーの心配はよそに、吹っ切れたような落ち着いた声だった。

「当然、遊んでくれる友達はいなくなつて、私は独りぼっちになつた。悔しくて悔しくて、私は……、ただなくさめてくれようとした母さんに、つい力を使ってしまった……」

「……………」  
「怪我は大したことなかつただけどね……。さすがに父さんもぶち切れちゃつて」

「それで、追い出された？」  
サーヤは微笑して首を振つた。

「知つてた？ 子供つて、いい“商品”になるのよ」

「…………商品？ まさか、そんな…………」

さもあつさりと言うものだから、初めエンドーはサーヤの冗談だろうと思つた。人の子を商品と呼ぶなんて馬鹿なことはない。

「子供は奴隷として重宝するそうよ。“特技”を持つ子はなおさらね」

「マジな話？」

「当然でしょ」

「……………」

エンドーはショックを受けた。この暖かな平穩のある世界に、ある種の憧れを抱いていたから。これも時代の流れのほんの一部分にすぎないのだろうが、どの時代、どの世界でも平穩と悪夢はどこまでも絶妙に絡み合つていふことを思い知らされた。

そんな彼の様子に、サーヤは眉をしかめる。

「…………あなた、本当に旅人？ 旅してる人つてもつと博識なのかと思つてた」

「…………いや、それより、その後どうしたの？ 売られたキミが何でこんなところに？」

「逃げたのよ。私が生まれたのは東の『サラバック地方』。そこから、馬車でこの『フーレンツ地方』に連れてこられたんだけど、そのとき、休憩で馬車が止まったスキにね。…………でも、それができたのも、この忌々しい力を使つたおかげ」

「（忌々しい、か……）」

サーヤが魔力をそこまで嫌う理由は、その力が人を傷つけてしまうものだと思っ込んでいるから。友達を、母親を傷つけ、彼女からすべてを奪い、彼女自身にも深い傷をつくった魔力。

そうじゃないんだ！ とエンドーは言っつてやりたかった。彼女の気持ちを少しでも和らげてやりたい。

「なあ、サーヤ……」

ボソリと、ためらいながらエンドーは言葉を発した。

「あ、ちよつと待っつてて」

突然サーヤは立ち上がり、工場の中へ入っつていった。少ししてもどっつてきた彼女は、銀色の短剣がおさまった革のソードホルダーをエンドーに投げ渡した。

「旅人さんには必要な物でしょ？」

「よかつた。売られたんじゃないかつつて、ヒヤヒヤしてたぜ」

短剣を引き抜いてかざしながらエンドーは言っつた。

「ジンならすぐにもそうしたでしようけどね。私が預かつつたのよ」

「どっつつして？」

「それは……。ねえ、その剣つて……、何？」

恐る恐るといっつた感じにサーヤが訊く。

「何っつて訊かれてもな……」

エンドーは頭をかいてから、咳払いを一つする。

「サーヤ、キミの力のことなんだけどさあ……」

迷いつつても、エンドーは短剣を前に構えた。

グラソンや宗萱に起こられるかもしれない。しかし自分がサーヤの理解者であることを証明したかつた。サーヤは独りぼっちなんかじゃないと。

今度ははつきりと、エンドーは言っつた。

「サーヤ、話しておきたいことがある」

柄をぐつと握り、短剣に意識を集中させる。

「おい、エンドー!!」

短剣に魔力を注ごうとしたちよつどそのとき、後ろから彼を呼ぶ声に邪魔をされた。

マハエとハルトキが門の外から駆けてくる。

「タイミング悪すぎだなあ、お前ら。何だよ、何の用」

「うおらああ!!!!」

「んごふうっ!?!」

ダブルの跳び蹴りで、エンドーは五メートルほど吹っ飛んだ。

「てめえ、オレ達の活動費まで前借りして何に使いやがったあ!?!」

「ま、待て待て! これにはちゃんとした理由が……」

「ほおう? ちゃんとした理由? ここでバーベキューをしていた痕跡があるんだけど?」

ハルトキが火鉢の前にしゃがんで何も刺さっていない串を摘み上げる。

「このタレの香りは、園長特製の万能ダレだね。これのレシピを知っているのは他に遠藤君、キミだけのはず」

マハエとハルトキににらまれると、エンドーは顔をそらして小さく舌打ちした。

立ち上がってズボンの砂を払い、素直に降伏する。

「じゃあな、サーヤ。また来る」

サーヤに笑いかけ、ゆっくりと短剣をホルダーにもどすと、次の瞬間には風の如き素早さで走り去っていた。

「あ、逃げた」

マハエとハルトキは深くため息を吐くと、困惑しているサーヤと子供達に向かって頭を下げた。

「うちの京助が迷惑をおかけしました」

「え……？」

「待てやコラァー“ボクたん”ー！！！！」

エンドーを追って去っていく二人の後ろ姿を、サーヤは不思議そうに眺めていた。

「あの二人、“私達に”頭を下げた……」

変わった人達。

サーヤは心の中でつぶやいた。

三人の姿が見えなくなっても、まだそこには温もりが残っているようだった。あの三人から感じられたのは、サーヤの知らない不思議な温もりだった。

親友や兄弟のようでもあり、またそれとは違う温もり。それが力強く支え合って生きているような。それ

少しだけ笑顔を思い出した気がした。

### 31：夜の勉強会

その日の夜、夕食を終えた三人は、案内人の指示で本部の『勉強部屋』へ直行した。

宗萱とグラソンがたまに勉強していて、机の上に山積みになっている本や資料は前のままだが、代わりに学校の教室のように一人用の机と椅子が三つ並べられていた。

その正面にはホワイトボードと、S A A Pが一人。

何の説明もなしだったのだが、部屋に入って数秒で三人は目的を理解した。

「お勉強会でも開こうって言うの？」

一応、ハルトキは尋ねた。

「そのとおりです！！ さすがは吉野さん。勘が冴えてらっしゃる！」

高テンションの案内人の声が三人の耳にガンガン響く。

「いいから声を抑えて、抑えて」

「それでは、着席」

三人は言うとおりに席についた。

素直に従った三人に案内人は少し驚きながらも、満足そうに開会のあいさつを始める。

「この勉強会は、あなた達にこの世界のことを少しでも知っていたらこうという目的のもと、わたくし案内人が企画したものです。この勉強会の四十五分という短い時間で、多くのことを学び、それを今後の活動に活かしていただきたいと思います」

パチパチパチパチ。三人が拍手する（テキトーに）。

ホワイトボードの前に立つS A A Pを指して、マハエが言う。

「その企画はオレらとしても賛成だ。それで、そこに立ってるSAPさんが先生ってわけね」

「いえ、先生はわたし。それは助手です。なお、この勉強中、わたしのことは『先生』と呼ぶように」

ぎこぎこ椅子を後ろに傾けているエンドーが、後頭部に両手を回して、

「へー、案内人ってけっこう博識？」

言った直後、彼の眉間にチヨークが食い込んだ。

ズダーンツ！　と思いきり後ろに倒れるエンドー。

「わたしのことは『先生』と呼ぶようにと言ったでしょう。それに先生には敬語を使うこと！　質問の際は拳手！　しかもあなたは全体的に授業態度が悪すぎです！」

這い上がるように机にしがみ付いたエンドーは正面を見る。

どうやらチヨークを投げたのはSAPのようだ。眉間より上、一五ミリの位置に、白い丸がくつきりと残っている。案内人の命令で行動するらしい。

「授業態度が悪いと、オシオキしちゃいますよ」

「いや待ておかしいだろ！　なぜホワイトボードにチヨークが常備してあるの！？　ていうか至近距離すぎませんか！！？」

「何ですか遠藤君？　バケツ持って廊下に立たされたいのですか？」

「それは地味にイヤです」

エンドーは座りなおし、姿勢を正した。

ほか二人もそれにならう。チヨークではなくペンが飛んで来ようものなら、エンドーの二の舞どころではない。

「それでは授業を始めます。まずは基本から教えますが、その前に復習です。この世界の中枢的存在である組織の名称は？　遠藤君！」

「えーと、『守民軍』だろ　です」

「正解。よく覚えていましたね。そう、この世界のことを知る上で基本であり、もっとも重要と言えるのが、『守民軍』という組織です。軍について、あなた達は何も知らないでしょうから、このあ

たりに重点的に教えていきたいと思います」

三人は「はい！」と元気一杯に返事をする。

「……案内人、何かはりきってるね」

正面を向いたままハルトキが小声で言うと、エンドーが苦笑いをしながら、

「今日オレさ……、案内人に『最近、影薄いぞ』って、言っちゃったんだよね……」

「そのせいだ……」

マハエとハルトキが同時につぶやいた。

「『守民軍』という名の由来、わかる人は？」

三人いつせいに挙手。

「はい、吉野君」

「普通に、民を守る軍っていう意味なのではないでしょうか？」  
ほか二人もうんうんとうなずいた。

だが案内人は「チツチツ」と指を振る（チツチツと言ったのは案内人だが、指を振ったのはS A A Pだ）。この際、目の前のS A A Pにすべて教えさせたほうが効率が良いだろう。と、思っても口には出さない三人。

「ハズレです。実は『守民軍』とは、略称なのですよ。正式名称は『守護民統制軍』といます」

「守護民…… 統制軍？」

エンドーが復唱する。

「それを理解してもらうには、この世界に伝わる伝説から解いていかなければなりません」

すると、S A A Pがホワイトボードに絵が描かれた一枚の紙を貼り付けた。

「それは測量家が描いた、この世界の測量地図です。正確なものはありませんが、それがこの世界　この大陸の全体図です」



三人は身を乗り出して見る。

「これは……」

その絵は　この大陸の全体像は、まるで誰かが意図して形作ったような異様なものだった。

「……ドラゴン？」

ハルトキが目を細める。

まるで、ツノと翼を持つ子供のドラゴンが、縮こまって眠っているような形だ。

「そう、実に異様です。さらに不思議なのが、五つの地方を分ける境界線。ちょうどツノの部分が『ソレイアド地方』、その東、頭の部分が『フーレンツ地方』、さらに東の翼の部分が『サラツバック地方』。南の胴体部分が『クラウルル地方』、その南の尾の部分が『トーネリカ地方』と、はっきりと分かれています」

「ふーむ……」

三人はソレイアド地方の細長い地形を思い出していた。

「それで、それが軍とどう関係するんですかー？」

マハエが訊く。

「少し話がそれましたね。つまり、この大陸は五つの地方に分かれている。約五百年前まで、この地方というものは五つの“国”として区分されていたそうです。そしてそれぞれの国には一人ずつ、『聖者』と呼ばれる王のような存在がいました。その聖者達の名が『ソレイアド』、『サラバック』、『クラウルル』、『トーネリカ』、『風烈』<sup>ふうれつ</sup>」

「なるほど、この地名は聖者の名前が由来していたわけですね、先生」

授業態度のたいへんよろしいハルトキに、案内人の態度もよろしい。

「吉野君はほんと優等生ですねえ。先生ハナマルあげちゃいます」  
その横で「猫かぶりか」と舌を鳴らす二名。

「先生ー、地名の由来はわかりましたー、でもまだ軍との繋がりが  
見えてこないんですけどー」

「はいはい、話は最後まで聞きましょうね、小守君ー」

「（だんだん態度がでかくなってきてる……）」

「『風烈』という名前は、後に『フーレンツ』と呼ばれるようにな  
りました。フーレンツ地方の人々に漢字名が多いのは、風烈の国だ  
った頃の名残なのです。と、ここまででは前置きです。ここ  
からは、この世界に伝わる昔話ですが、真面目に聞いてくださいね」  
三人はうなずく。

エンドーの眉間にチヨークが食い込んだ。

「っ！？ いったああ！！？ 今、オレ何かした！？」

「S A A Pがヒマそうにしていたので」

「……先生にとって、オレって何？」

机に突っ伏すエンドーを、マハエとハルトキがよしよしとなぐさ  
める。

案内人はかまわず話を始める。

「五百年前、戦争もない平和なこの世界に、突如強大な力を持つ魔  
物が現れ、人々を、世界を壊し始めました。山を焼き尽くし、大地  
を割り、陸を沈めるその力に、人々は恐れおののき、逃げまどうば  
かり。それでも魔物の破壊は止まることを知らず、世界は滅亡への  
一途をたどっていました。逃げていただけでは無駄死にも同然。  
世界を守るため魔物を倒すべく、五つの国は結束し、五人の聖者を  
中心とした一つの国、『守護民』が誕生しました。戦うのは兵では  
なく、すべての民。……多くの民が散ってゆきました。ですが戦い  
の末、魔物は聖者達の手によって滅ぼされ、世界は平和を取りもど  
しました」

「……………」

おとぎ話のように話す案内人だが、マハエとハルトキはひたすら耳をかたむけている。エンドーは必死に額をこすってチョークを落としている。どんなに非現実的な話でも、この世界にいる以上否定はできないのだ。

「戦いが終わると、聖者達は守護民を　つまり世界を統制する組織を築き上げました。それが現在の軍の始まり、『守護民統制軍』です」

話が終わると、「質問はありますか？」と案内人が訊き、ハルトキが挙手する。

「先生、軍の創始者が聖者達だということはわかりました。そしてその戦いの歴史が真実だとして、聖者達って何者でしょう？　強大な魔物を滅ぼすほどの力を持っていたと？」

「記述によりますと、聖者達自身も特殊な力を持っていたとか。…なぜか聖者に関する詳細は不明なのです。守民軍本部がクラウルル地方にあるところから、クラウルルが五人の中ではリーダー的存在だったのではないかと考えています」

案内人に反抗しているのか、エンドーは気分悪そうに、思い切り顔を歪めている。

「ケツ、本当に実在したのかねえ？　怪しい話だ。五百年って、人間、がんばりゃそのくらい生きられるぜ」

と、今にも床にツバを吐き捨てそうだ。

「はいはい。あなたなら、もしかすると生きられるかもしれませんね。　とまあ、軍の由来はどうであれ、今の“平和”な世に守護民など必要ありませんし、軍の存在意義も変わってきました。今は平和維持を目的とした、ただの小さな勢力にすぎません。世界滅亡の危機になど、とても立ち向かえるものではないでしょう。このまま彼らの平和ボケが続くよう、あなた達にはがんばってもらわなければなりません。ですから……、よろしくお願いします」

案内人の代わりにS A A Pが頭を下げた。

「先生……」

突然下手に出られたものだから、マハエもハルトキも反抗していたエンドーさえも、言葉を詰まらせた。下がったままのS A A Pの頭に、案内人の気持ちが表れているようだった。どうがんばってもフォローしできないという悔しさと、この世界に対する愛情のよくなものがうかがえた。

三人は顔を見合わせ、「ふっ」と笑った。

「先生、キャラが不安定ですね」

三人の眉間上にチヨークが食い込んだ。

「おだまりなさい、授業を進めるわよ！ ちゃんとついてきなさいよね！」

「先生、スパルタなのかツンデレなのかはつきりしてください。ていうかどっちも極めてキモイです」

額をこすりながらマハエが言った。

エンドーがゆっくりと手を挙げる。

「あのさ先生、質問いいですか？ “噂”で聞いたんだけど、この世界の孤児院って、軍が所有してる施設だけだって……、その施設では子供を兵士として育成しているとか……。それってマジ？」

「民間の施設もいくつかはありますが、ほとんどはそのとおり、軍の施設ばかりです。身体や脳、精神に障害が認められない子供は、十歳から 才能があると判断された子供は七歳から戦闘兵や衛生兵としての訓練を受けさせられます」

「そうなのか……。でも、なんでわざわざ施設を設けてまで兵士を育てようとするんだ？ 平和維持のためだといっても、やりすぎじゃないか？」

「まあ、疑問を持つのも当然でしょうね。わたしにも詳しいことはわかりませんが、何かと事情があるのでしょう。人員不足かあるい

は、非常時に備えているのか。……軍は平和ボケしている、とは言いましたが、もしかすると五百年前のような世界の危機に備えているのかもしれないね」

「……………」  
だがエンドーは納得いかないという表情をしている。

「なんで子供を利用するようなことをするんだ？ 大人の事情で孤児になって、大人の事情で軍に服することになる。……何のために産まれてきたのかわかんねえよ」

マハエとハルトキも彼と気持ちは同じで。

「同感だよ。大人が子供のためにすることは、選択肢を与えてやることだ。無理矢理に手を引っ張って一つの道を進ませるなんてこと、ボクは認めたくない」

「そうですね。しかしそれがこの世界の現実です、仕方ありません。守民軍という組織は複雑で、外側から見れば、謎が謎に包まれて、高温の油でカラッと揚げられたようなものです」

「味付けは塩ですか？ 醤油ですか？」

「食いつくなエンドー。今は明らかにふざけるタイミングを間違えてたぞ、先生」

「守民軍について教えられることは数少ないのです。ですが、あなた達には少しでもこの世界のことを知っていただきたい」

### キーンコーンカーンコーン

S A A P が鉄琴を叩いた。

「ちょうど終了の時間です」

「お前が鳴らさせてんだろ」

エンドーの眉間上に黒板消しが貼り付いた。      バフン！と。

「……………」

「今日の授業内容、帰ってからしっかりと復習しておくように！

期末テストに出ますよ！ ……どうしましたか、遠藤君？ 顔色悪

いですよ？ テストの心配ですか？」

「顔面チヨークまみれだよ！！ つーか、ホワイトボードに黒板消し常備すんじゃないっ！ そしてなぜチヨークが付いてる！？」

エンドーが吠えるたびに粉が舞い、マハエとハルトキへ二次災害。「わたし、そろそろスリープモードに入りたいので。みなさん、早寝早起きは大切ですよ。では、また次回をお楽しみに〜」

スタスタとS A A Pが出て行き、三人を部屋に残して、パタンとドアが閉まった。

ハルトキがエンドーを見る。

「……次回あるんだって」

「ボクたん泣くぞ」

「ま、せいぜい期待しないようにしよう」

### 32：赤い雪

勉強会が終わり、宿へ向かっていた三人は、途中でふと進む方向を変えて港へやってきた。

夜の港には波の音しかない。近くの民家からもれ聞こえる人の声もあるが、楽しいな団欒を想像すると胸の中が空っぽになっている気がして、マハエはむなしくなった。

「オレ達がこつちの世界に来て、一週間になるか」

「ホームシックかい？ マハエ」

と、そう言うハルトキも、いつもと様子が違い、しんみりとしている。

「園長やみんな、心配してるだろうね。学校もあるのに……。前回  
は三人そろって風引いたってことにしたらしいけど、さすがに一週間はマズイね」

苦笑いをまじらせてハルトキが言う。

いくつも並んでいる木の棧橋の一つを、コトコトと歩いて先まで行くと、三人は月明かりでキラキラと輝く海を遠くまで眺めた。漁船の電灯も見当たらない、自然界の闇と光がそこにあった。

「よく施設を抜け出して、夜の海を見に行ったよな」

エンドーが腰を下ろす。

「ああ、部屋の窓からロープ使って外へ出て、一時間かけて海まで散歩する。海眺めて、浜辺歩いて、雑談して……。楽しかったなあ」

マハエとハルトキも腰を下ろすと、しばらくは無言で闇と光の海を眺めた。穏やかに揺れる波の音で、故郷を思う気持ちと戦いへの不安を洗い流すように。

「……あつちの世界に帰ったらさ、また見に行こうよ」

ハルトキが言った。

その提案にうなずきながらも、少ししてマハエはポツリともらした。

「……帰れるのかな、オレ達」

「……………」

マハエからすれば無意識に出た言葉だった。だがハルトキとエンドーの厳しい視線で、その言葉の残酷さに気付き後悔した。

いつもなら「バカなこと言ってんじゃねえ」とどつくはずのエンドーでさえ、口を閉じて表情を暗くしている。

「……悪かった。すまん」

「いや、いいんだよ。無事に帰るためにも、がんばらなくちゃいけない。こつちの世界のボク達には、頼りになる仲間もいるんだからハルトキのはげましにマハエは笑ってうなずいた。立ち上がった大きく伸びをすると、反対を向いて歩を進める。

「海を見に行く前に、園長のメガトンゲンコツから生還しないとなハルトキとエンドーは「ああ……」と頭を抱えた。

「ずっとこつちにいるのもアリかも？」

「アリだね」

二人が重大な選択に悩んでいる後ろで、マハエは足を止めて空を見つめていた。

「おい、あれ見てみる」

マハエにならって空に視線を向けた二人は、あんどりと口を開いたまま立ち上がった。

黒い空を背景に、ゆっくりと舞い降りる赤い光の玉。それは一つだけではない。次々と、いくつも、いくつも舞い降りて、遠くの森にしみ込むように消えていく。

「雪？ なわけないよね……………」

「赤い雪って…………、不吉だなあ」



「……………」

またマハエの一言が重くのしかかった。

何かが起こる。と、三人は思った。

舞い降りていた光の玉がすべて見えなくなっても、彼らの視線は空にとどまったままだった。

そのころ、ヘルプストの町にある小さな公園の木の下に、密会する怪しい三つの影があった。

「おいおいおいおい、どうするつもりだ？ このままじゃオレ達マズイだろ」

紫に染められた髪が風に揺れた。

「あれから何日経ったと思ってるんだー？ 頭領もきつと許してくれ  
るはず」

二つ目の紫髪が風に揺れた。

「そうだよ、だいたいオレ達に期待する頭領にも非があるの、さ」  
三つ目の紫髪がキラリと風に揺れた。

「何が『の、さ』だ。このナルシスト野郎が……！ 誰のせいでこ  
うなったと思ってるんだー？ “リート”！」

「落ち着きなよ“ゴトー”君。近所迷惑だよ」  
「んだとー!？」

『ゴトー』と呼ばれた紫髪と、『リート』と呼ばれた紫髪。二人  
の言い争いに、もう一人の紫髪が仲裁に入る。

「はいはい、そこまでにしよーぜー。どっちも悪うございましたっ  
てことではー」

「てめえはどういう立場なんだ!? “ツッキー”!？」

火に油を注いだけだった。

ゴトー、リート、ツッキーという三人の少年。彼らはヘルプストへ向かう『シラタチ』一行へ奇襲をかけた窪井の手下三人組だ。

「リート！ お前があのおとき大林に情報をもらしたおかげで、オレ達は頭領のもとへ帰れないでいる！ 空腹に耐えながらこの公園で野宿するハメになったのも、全部お前のせいなんだよ！」

「いいじゃんか、ゴトー。野宿楽しいしー」

「お前は黙ってるツッキー。発言するな」

ゴトーにきつくにらまれ、口をとがらせてそっぽを向くツッキー。

「今日耳にした噂では、つい先日、ネーベル山で原因不明の爆発があったらしい。シラタチの仕業に違いないんだ。まあ、頭領ならきつと逃げ延びているはずだが、それでもたぶん、きつと、いや絶対にオレ達を許すはずがない！」

頭突きをかます勢いでリートと顔を突き合わせる。だがリートはしれっとして、

「それなら帰らなければいいじゃないか」

サラリと言っ。

うんうんと、うなづくツッキー。

「何言ってんだ、そんな恩知らずなことができるか！ オレは頭領がいなけりゃ、野垂れ死にしていたんだ。あの人には、一生かかっても返しきれない大きな借りがある！」

「わかりましたよ、やれやれ。つまり頭領の機嫌なおしのために、胸張って帰られるような手柄を取ればいいわけだね。やれやれ」

ため息と同時に大きく肩をすくめるリート。そのとなりでツッキーも同じように肩をすくめる。

「なぜ、すべてオレの責任みたいな話になっているのかわからんが、そういうことだ。やれやれ二回もいらなくね？」

「シラタチへ乗り込む計画を立てよう。まずゴトー君が敵を引きつ

け、そのすきにゴトー君が組織の中枢に侵入する。最後にゴトー君とゴトー君が敵の主要をバツサバツサと

「あいにくオレは一人しかいない。お前らも協力しやがれ」

そう言われると、リートはツツキーと肩を組んで、

「オレとツツキーは忙しいんだよ。キミのカンオケをつくらなければならぬ」

「最初つから何も期待してねえじゃねえかあ!!!」

パシンパシン！ と二人の頭を叩く。

無言で頭をさするツツキーと、ふところから手鏡とクシを取り出して乱れた髪を整え始めるリート。ゴトーも頭痛で額を押さえた。

二人とチームを組んで以来、何百回と繰り返される、すでに慣れきつた頭痛だ。

「オレ、来年には死ぬと思う……」

それを聞いたリートとツツキーは悲しげな顔をして、並んで合掌する。

「お前らのせいだよ!!!」

「わかったわかった、そう怒るなよ。別に悪気はないんだ」

「余計たち悪いわ!!!」

ツツキーがゴトーの肩をつつく。右手を腰に置き、左手を突き出して親指を立てている。ニツと笑った口元に八重歯がのぞく。

「（心配するな。オレはいつだって悪気全開だ）」

「お前はいつペン地獄へ落ちろ」

「えーと、つまりゴトー君？　せめて大林だけでも倒すことができればいいのだね？」

「……やっと真面目な話をする気になったか。そう、せめて大林だけでも　って、それができれば苦労しねえよ。やつはオレ達の殺気を感じ取る。奇襲はムリだ」

そのとき、二度目ツツキーが肩をつつく。

「隊長ー、発言の許可をー」

「……何だ？」

「あれを」

ツッキーが指差したのは公園前の通り。そこを横切っていく一人の少女がいた。

大きなバッグを背負った栗色の髪の少女は、はたと立ち止まると、乙女チックに手を合わせて月を見上げた。

「月明かり降り注ぐ夜の旅立ち　　うん、絵になってるわ、私。ああ、さよならヘルプスト、この地の思い出、一生わすれませんわ」

独りにも関わらず、くるくると踊り出すミチル。

木の陰から頭を出してのぞき見ている三人に気付かないミチルだが、見ている側のゴトーは、見覚えのある少女をどこで見かけたのかを思い出した。

「……あれはたしか、“大林の”女だ」

「大林は一緒じゃないみたいだね」

「こんな夜中に何してんだろーな？」

と、視線に気づいたのか、ミチルは突然注意深くあたりを見回し始めた。

三人はさつと頭を隠し、恐る恐るもう一度顔をのぞかせる。

勘違いだと思ったようで、ミチルは首をひねって、再び歩き出した。

「……オレ、いいこと思いついちゃった」

ツッキーが言うと、ゴトーもうなずいて、

「奇遇だな。オレもだ」

三人は「ふふふふ」と肩をゆすって笑った。



### 333・雨に濡れた日

雨が降る。

赤い雨だ。

雨が赤い？

赤いのはオレ自身だ。

「レッドキャップ……！ レッドキャップが攻めてきた……！」

見張り番の仲間が、真っ青になってテントに駆け込んできた。そのあせり様はたちまち、周りに伝わり、テント内は半ばパニックにおちいる。

「レ、レッドキャップ！？ 攻めてきたって な、なぜだ！？」

「んなことわからねえよ！！ ……おそらく窪井のやつが……！！」

オレは言ったやつの胸ぐらを掴み上げ、どなる。

「窪井が何だと！？ バカなこと言うんじゃないやねえ！！ ケンが

あいつがそんなことするわけねえ！！」

「ほ、ほかに説明できるか！？ あのデカイ組織がなぜオレ達を！？ 窪井のやつがここを抜けてやつらに加わったのは数日前だぞ！！」

「バシンッ！ と拳が音をたてた。

オレは仲間を殴った拳をはい、テントを飛び出した。

「待てや、タカ」

すぐ横からオレを呼び止める声。

木箱に腰かけ、足を組んでいる長身の男がいた。

「田島さん……」

『田島弘之』のリーダー、田島慎治タシマシンジ。オレがこの世でもっとも尊敬し、信頼する人。

「タカ、お前、どうする気だ？」

「どうするって、決まっているじゃないですか。オレが直接たしかめて」

「やめとけ」

田島さんは少しも慌てる様子を見せず、真つ白な短髪頭を搔く。そしてゆるりと立ち上がると、オレの肩に手を乗せた。

その瞬間、オレの身体はその重みに支配された。この人には従わなければならない。この人はオレのすべてで、絶対的な存在だから。

「お前が行ったところで何になる？ オレも、ケンがオレ達を裏切ったなんて、思いたくはない。それなら、信じるしかないだろう、あいつを。……やつらが攻めて来たのには、他に理由があるのかもしれない」

「……………」

「オレが行く。話し合いなんかで止まるようなやつらだとは思えないが、だめでも“おとり”としてはオレが最適だ」

「行かせませんよ田島さん。やつらがその気なら、戦うまでです！ オレ達だけ逃げるなんてことは、できません！……」

爆音と悲鳴が響いた。

野蛮な叫び声と、狂った笑い声が近づいてくる。

周りには仲間達が集まっていた。みんなの決意は同じだ。例

え死んでも、田島さんだけを残して逃げることもなんかできない！

集まった三十数人、『田島弘之』の全員が、この人に救われた。行き場をなくした野良が人として生きていけているのは、この人が救ってくれたから。

田島さんはオレの横にいた男に顔を向ける。田島さんよりも一昨年下で、自分の中では最年長の男だ。

「赤瀬、夕方を連れていけ」

「し、しかしボス！」

「お前らの気持ちはありがたい。だがオレには、『田島弘之』のリーダーとして、お前らの人生に責任を持たなければならない。……いいか、オレのために死ぬことは許さん！」

「……………」

そんなこと関係ないと思った。オレなんかの命よりも、田島さんのほうが大切だ。『田島弘之』を率いていけるのは田島さんの他にいない。

「大林、逃げよう。たしかに、ここで全員が無駄死にするわけにはいかない」

「何言つてんだ赤瀬！ 田島さんを見殺しにしるつてのかわか！？」

「ボスは死なねえ！ お前はこの人を誰だと思っているんだ？ お前が一番よく知っているはずだろ」

「……………」

田島さんがオレに笑いかける。 “初めて出会ったとき”と同じ、温かくてとても心地よくなる笑顔だった。

「……………わかりました。田島さん、絶対に生きてまた会いましょう」

「ああ」

力強い声だった。

この人が死ぬはずはない。そう、思った。心から、思った。



雨が降る。

赤い雨だ。

誰かが吠えている。

吠えているのはオレだ。

三十数人いた仲間は、いつの間にか十人になっていた。敵はすぐに追いついてきた。オレ達は戦って、戦って、逃げて、逃げた。

田島さんが生きていることを信じて。生きて再会することを信じて。

ようやく敵が撤退した頃には、オレの周りは真っ赤に染まっていた。横たわる仲間、敵……。途中から降っていた雨で、赤い川のようになっている。

オレは赤い水を跳ね上げながら走った。叫びながら田島さんの姿を探した。立って歩く田島さんの姿を……。

「うぐっ！」

田島さんの悲鳴が聞こえた。

頭の中が真っ白になりながら、認識しているのは、ただひたすら走っている『自分』という存在だけ。

目の前に立っている人影を見つけ、反射的に足が止まった。

「……ケン……」

雨の音がやけに大きく聞こえた。

魂が抜けたように立ち尽くしているケン。その手には血にまみれた太い剣が握られていて、剣先から赤い水が滝のように地面に流れ落ちて

赤い水の濁流に呑み込まれていく。ケンが震える唇を動かして小さな言葉を発していても、雨の音にかき消されて聞き取ることが出来ない。

それよりも、流れる赤い濁流が気がかりだった。濁流はケンのすぐ足元の、誰かの肉体から流れ出ていた。

「……………!!!」

わけがわからなかった。木にもたれて動かないのは長身の男だ。真っ白な短髪頭の男だ。どこかで見たことのある男だ。毎日見ている男だ。もつとも近しくもつとも信頼できる兄であり師であり自分のすべてである男だ。

「田島さん……………」

頭の中は混乱と恐怖と怒りでごちゃごちゃで、でも　　妙に冷静だった。

「ケン、お前が……………」

自分でもわからなくなるほど矛盾していた。気持ちには冷静だと思っただが、発した声はおそろしいほど怒りにまみれていた。

ゆっくりと歩み寄るオレに対し、ケンは一歩、一歩と後ずさる。必死に唇を震わせながら。

雨の音は完全に頭の中から消え去った。　　そのおかげで、ケンの声が今度ははっきりと聞き取れた。

「　　違う」

ケンはずつと持っていた剣を投げ捨てると、一目散に走り去った。  
「ケンツ！……！」

雨の向こうへ消えていくケンを、オレは追わなかった。田島さんが微妙にうめいたのを聞いたから。

「田島さん！」

「……タカか……。無事、か……？」

「喋らないでくださいよ、田島さん！ 出血が……」

腹部と背中から大量に出血している。剣に貫かれたのだ。これではもう、助からない。

「……はは、は。約束……。守ること、できたようだ……。ままた……、生きてお前と……。あ会うことが……」

口から血が塊のようになって飛び出す。

「喋らないでください！！ お願いですから……！！」

「……いいんだ、もうオレは、助から……。いいいか、よく、聞け……。お前に頼みが……。ある」

「頼み……？」

田島さんは震えながら、ぎこちなくうなずくと、オレの肩をがしと掴む。その力強さに驚いた。

「二つだ……。声が、ふ震えるが、ちゃんと、き聞け……。一つは……『田島弘之』の、ことだ……」

「わかってます。あいつらのめんどろはオレが」

「違う……。『田島弘之』は……。今日限りで解散しろ……。おお前達は、もう立派に……。人として生きていけるはずだ……。オレに縛られて生きていくのは、やめろ……」

「田島さん……！」

「二つ目は……」

また大量に血を吐き、咳き込む。傷口を押さえるオレの手の隙間からも大量あふれ出す。

「二つ目は……」

肩を掴む手に、さらに力がこもった。  
数度呼吸し、田島さんは言った。

「ケンを、許せ」

時が止まったように感じた。

田島さんはまっすぐにオレの目を見つめていた。強い光を宿した  
眼だった。

最期に、ふっと“あの笑顔”を見せると、静かにゆっくりと、田  
島さんは力尽きた。

オレはしばらく立ち上がることができないで、温もりの消えてい  
く田島さんにすがっていた。

自分もここで力尽きてしまいたかった。

「田島さん……」

田島さんの最期の頼みを受け入れること。それがこの人の願  
い。……しかし

「すみません……！ オレには無理です……っ！」

仲間の声が出た。オレを探す仲間達の声。

オレは足を踏ん張ってどうにか立ち上がり、空に顔を向けて冷た  
い雨を感じた。

『田島弘之』は死なない！

雨が真っ黒に変わり、オレの視界も闇に染まった。

「ばやしさん……。おおばやしさん……」

暗闇の中で聞こえた声で、大林は現実に取り戻された。  
「起きてください、大林さん」

宗萱だ。

大林は目を開けて起き上がり、彼の顔を目にして、ようやく夢から覚めたのだと理解した。

ここは宿のベッドの上だが、寝袋や固い地面で寝た後よりも、さっぱり疲れは取れなかった。

「大林さん、部屋の前にあなた宛ての封筒が落ちていました」

「……オレに？」

渡された白い封筒には、たしかに『大林鷹光殿』とあった。その上には、『大至急確認されたし！』という文字があるが、差出人の名前はどこにもない。

「中は見ていませんが、緊急性を感じましたので」

大林は封筒を開いて、中の手紙に目を通す。数秒後、封筒にもどして宗萱に言った。

「何でもない。気にするほどのことでは」

「そうですか。わたしはこれから任務で出かけますが、問題はありませんね？」

「ああ」

宗萱は軽く会釈をして出て行った。

窓の閉じられたカーテン越しに、外の明かりが微かに入り込んでいる。

大林は手紙を握りしめると、椅子にかけてあったローブを羽織っ

た。

### 34：幹部の二人

宿の廊下で、ハルトキは眠い目をこすりながら、大林に差し出された手紙を見た。

「何ですか、これ？」

「オレと“ハルに”宛てられた手紙だ」

「ボクと大林さん限定？ 誰からだろ？」

筆で書かれた達筆な文字だ。ハルトキは小声を出して文章を読む。

「暑中見舞申し上げます。激しい暑さの続く毎日ですが、元氣でお過ごしでしょうか。” っ、こんな礼儀正しいお友達をつくった覚えはないんだけど……」

さらに先を読んだハルトキは頬を引きつらせた。

『この野郎う！！ 大林い！！！（とそのお供）。オレ達は数日前、お前らにボコられたニュートリア・ベネツへの三人組だあ！！！！ 忘れたとは言わせねえ！！！！』

突然、文字は殴り書きに。

「フェイクか……。ていうか、ボクがカッコ扱いなのが何よりムカツク」

青筋を浮かせながらも、ハルトキは読み進める。

『オレ達は名誉挽回しなければならない。というわけで、ここからが本題だ。いいか、よく読め大林！』

その下の十分な余白の後に、ひときわ大きな文字で、

『お前の女はあずかった！！！』

「……………」

『返してほしいければ、この前のトンネルまで来い！ 秘密兵器を用意して待っている！ 早く来ないと、この女をヒドイ目に遭わす！』

しばらく無言で何度か文章を読み返し、ハルトキは一言、

「大林さん、彼女いたんですか」

大林は首を横に振る。

「そこだ。オレは彼女をつくった覚えがない。突然『お前の女はあずかった』なんて言われても心当たりなんて」

二人は「あ。」と、同時に顔を見合す。

「もしも誰かを勘違いしているとしたら……………」

「最近、オレと一緒にいた女と言えば……………」

答えは一致した。

早く来ないとヒドイ目に遭わす。それは脅しなどではないだろう。

そのとき、ハルトキは手紙の一番下にあるシミに気付いた。

「大林さん、これ……………」

「……………まさかこれは」

大林はハルトキの手から手紙を取ると、頬に汗を伝わせた。

「血だ」

点々と紙に染み付いている赤いシミ。それは事の重大さを物語っていた。

「あいつら……………！」

グシャリと、大林は手紙を握りつぶした。





「あははははは、喋った！ オレに話しかけた！ あーはははははっ！！」

「どこがツボなんだ！！？ ずっとオレが喋ってる所にウケてたのか」

こいつの相手をするのは馬と話をするよりもバカらしいと、ようやく気付いたゴトーは、鼻の穴に紙を詰めなおし、咳払い一つしてミチルに目を向ける。

「なめ回すように見ないでくださる？」

「目を向けただけだろ。大人しくしてろ、お前は大林をおびき寄せするための大事なエサだからな、逃げられてはかなわん」

「え！？ 大林さんが！？」

途端に目を輝かせるミチル。

「大林さんが来るの！？ 私を！ 救いに！？」

「……なに興奮してんだ？ 大林は来るはずだ。さつきリート

に手紙を届けさせたからな」

「あははははは！ オレの、オレの名前を喋ったー！ あはあははははー！！」

「……届けた、はず……。届けたよね？ おい、ちゃんと届けたよなお前！！？」

「あはははははは……！！！」

ツッキーはというと、いつの間にか、松明の明かりも届かない隅っこで、うずくまって沈んでいた。

「なあ、ゴトー……。もうやめようぜー。オレは精神的にもボロボロで……。こんな状態で大林に挑んでも勝てる気しねえよー」

「ちよつとあんた、私に乱暴しなさい！ 少しでも“彼”の同情を買つたよ！ 災難を乗り越えるほど、愛は深まるのよー！！」

「ははははは……。オレ、今、こんなやつらと、同じ空気吸ってるー！ あははははははー！！」

「あああ！！ 何なんだこいつらはあー！！！！！！」

港町

大林とハルトキは、すぐに支度をして宿を出た。

「大林さん、やはりグラソンや宗萱に相談したほうがいいのでは？」  
話をしながら二人は歩く。

「いや、宗萱はこれから任務で出かけると言っていた。となると、グラソンまで本部を空けるわけにはいかないだろう？ それに、一刻を争う事態だ。報告している余裕もない」

「……そういえば、起きたときマハエがいなかった。あいつも一緒に行ったのかな」

「とにかく急ごう。ミチルさんの身が心配だ」

二人は足を速める。突然、路地から男が二人現れ、彼らの前に立ちはだかった。

立派な茶髪リーゼントと、テカテカのこげ茶オールバックが光を反射して輝いている。

「探しましたよー、ボス！」

リーゼントが、疲れ気味の声で言った。

「一瞬身構えていた大林だが、すぐに彼らが何者かわかり、安心して声を出した。」

「ああ、お前らか」

「お前らかつて……。ボス、今まで何してたんスか？ アニキも一緒で」

ハルトキはリーゼントに頭を下げた。

リーゼントは『田島弘之』の幹部、青島一斉だ。他のメンバーと同じく、サングラスを着用しているが、もう一人のオールバックは

鋭い眼をむき出しにしている。

「ハルは会ったことなかったな。こいつは赤瀬東晋<sup>アカセトウシン</sup>。青島と同じ、

『田島弘之』の幹部だ」

赤瀬が低い声で付け加える。

「……一応、な」

幹部の二人が並んでいるのを見て、ハルトキは青島と赤瀬はどこか吊り合っていないように思えた。大林と同じ歳らしい青島と比べると、赤瀬はあまりにも歳が違っているように見えたのだ。彼の顔は、どう無理をしても十代には見えず、人生経験豊富な、いかつい三十代のようで、どちらかといえば大林よりも不良グループのリーダーに向いている顔つきだ。

「アニキ、東晋はこう見えて、まだ二十三ですよ」

ハルトキの耳元で青島が小声で教えたが、赤瀬には聞こえていたようで、射殺するような眼光を放っていた。

彼らは吊り合っていないとハルトキが感じた理由は他にもあった。それは年齢や見た目などよりも根本的なことで、赤瀬東晋に会ったのは初めてだが、第一印象としてハルトキの中に残ったのは、孤独なオオカミというイメージだった。

そして思った。大林もそんな赤瀬に気付いているのだろうと。

そしてまた思った。……なぜ赤瀬はずっと、自分<sup>ハルトキ</sup>をガン見しているのだろうかと。

見えない何かハルトキの全身を刺しているのは明らかだった。顔を上げることができないどころか、指の一本すら動かすことができない。全身に嫌な汗が流れている。

「（まだ見てる……。まだ見てる……。あれ？ もう大丈夫？ いや、見てるっ……。！！）」

ホク口から毛が生えているとか、「あっ、十円ハゲがある！」とかいうレベルではない。

「（……ああ、そうか。ボクの“黒髪”が珍しいんだ）」

大林にも初めは不思議がられていたのを思い出したハルトキは、思い切つて、全身の力を振り絞つて顔を上げた。

「……………」

もう一度顔を下げる。

「（……違う！ 何か違う！ 何なの、この追いつめたネズミを見るような目は！？）」

「……ところで、お前達はなぜここへ？」

大林が幹部二人に訊く。おかげで赤瀬の“金縛り”から解放されたハルトキは、ほっと息を吐いた。

「ボスがソウシを探しに出かけて、何日ももどらないんで、オレ達が探しに来たんすよ。とりあえずボスが立ち寄りそうな町を回つて、ようやく見つけたところです。ボス達こそ、何を？ ソウシは見つかったんすか？」

大林はしばし沈黙し、うなずいた。

「だがここにはいない。オレが別の使いを頼んだから、またしばらくは帰らない」

「そうすか。でもま、無事でよかつたつす」

安心する青島の横で、それまで無口だった赤瀬が口を開いた。

「それで、お前はここで何をしている？ 大林」

怒っているのか、穏やかではない口調だった。

「そうだ。ちょうどよかった、二人も付いて来てくれ、説明は後です。急ぐぞハル！」

「えー！？ ちょっと、待つてくださいいよ、ボス、アニキー！」

「……………」

赤瀬は止まつたまま、通り過ぎるハルトキの横顔を見つめていた。

「……………兄弟分……………。“あいつ”の代わりのつもりか？ 大林」

ボソリとつぶやいた赤瀬の言葉を、ハルトキは微かに聞き取っていた。

止まりそうになった足を、無理矢理前に進めた。

### 35：小さな悪魔達

港町を東へ抜け、海沿いの道を四人は走る。

青島と赤瀬は先頭を走る大林の話をしつかりと耳に入れていた。急ぎながらの説明であったが、それで青島と赤瀬にも緊迫感は伝わっていた。

「ニュートリア・ベネツへ……、窪井の組織か。ボス、そのさらわれた知り合いとは何者で？」

「……説明しづらいのだが、窪井とのごたごたに巻き込んでしまっ  
てな」

「またやつと何か？」

「……ああ、ちよつとした小競り合いだ」

その一言で青島は納得したが、赤瀬は疑問を持ったようだった。後ろでじつと大林を観察するように目を細めている。

ハルトキはちらと赤瀬へ振り返った。先ほど彼がつぶやいた言葉が、ずっと頭に残っていた。

『あいつの代わりのつもりか？』

無二の親友だった窪井に裏切られた大林の、その心の穴を埋めるための　　自分は窪井の代わりなのかと、ハルトキは言いようのない孤独感に苛まれていた。

だから何だ。

今、大林の心は大きく揺らんでいる。人工島での戦い以来、ずっと。“黒猫”騒動、ネーベル山での一件から後の大林は、まさに崩壊寸前。戦いのために自ら命を投げ出してもおかしくはない。それがわかっているから、ハルトキはそんな彼を守りたかった。少なくとも

ともハルトキ自身は彼を兄のように思っているから。

落石現場に着くと、四人は息を整えてトンネルを見上げた。

石や土で塞がっていた道は、あらかた整備されていたが、崖の横穴はそのまま残っていた。

「厄介な場所つすね」

額の汗を拭い、サングラスを持ち上げる青島。黒くぼっかりと開いた横穴の内部構造は、外からではどうやっても窺い知ることはできない。

中の様子が探れず、敵の意図が読めないとすれば、計画など立てようがない。対決する相手は内部構造に詳しく、人質という切り札まで持っている。そんな状況で戦わなければならないのは、行動範囲が極端に制限されてしまうトンネル内。不利を越えて勝ち目など皆無と言える。

「……どうしやす？ ボス」

「……………」

全員が大林に注目している。選択は大林に任されるが、彼にも一番利口な案など見い出せない。

だが、その必要もなかった。そのときトンネルの中から聞こえてきたミチルの悲鳴で、全員が駆け出していた。

大林は宿の部屋から持ち出していたランプに火を灯し、トンネルの奥に目を凝らす。

「……どうだ、ハルには何か見えるか？」

『暗視』を発動していたハルトキはすぐに答える。

「奥は坂になってます。トラップのような物は見当たりません」

「そうか。よし、行くぞ」

四人は一列になって、前後に注意を配りながら坂になっているトンネルを進む。坂はらせん状で、上へ上へと四人を導いている。



「すんごく危険な気配がするんだけど……」  
「敵がこの場所を選んだのには、何か理由があるはずだ。十中八九、オレ達にとって危険な何かだろう。……それより、ミチルさんが心配だ」

悲鳴が大きく響いた。

「ミチルさん！」

坂を登りきったそこは、少し広くて明るい空間。パチパチと火を燃やす四つの松明の中央に、ミチルはいた。

柱に体を縛られて身動きのできないミチル。そんな状態でも大林の登場に目をキラキラと輝かせた。

「大林さあ〜ん！ やっぱり助けに来てくださったのですねえ〜！

ミチルは……、ミチルは感動で胸いっぱいです！」

大林は首をひねって、ハルトキも同じようにして、二人は顔を見合わせた。

「……元気そうだな」

「そうですねえ」

と、ミチルの後ろ 闇の中から三人の少年が現れた。

「ようやくご登場か、大林」

少年の一人、ゴトーが前に進み出る。

「大林さ〜ん、こいつらヒドインですよ〜。私が抵抗できないのをいいことに、あんなことやこんなことや」

「してねえよ！ どちらかと言えばオレ達のほうがヒドイ目に遭わされたわ！」

ツッキーも「うんうん」と深くうなづく。

大林は迷ったような顔をして、リートに話しかけた。

「おい、そこにいる二匹のしゃべるモンスターは何だ？」

「オレ達のことか？！……!?」

「ああ、こいつらかい？ ペットじゃないよ。ボクの美しい顔を、

より際立たせるためのサイドアイテムさ」

「オレ達も人なんですけどー！ー！！！」

叫んでふらつくゴトー。

「やべえ……、貧血だ……」

どう見てもまともに戦える容態でない三人。これならすぐにでもミチルを救出できそうなものだが、大林は動かない。そんな状態にも関わらず彼らが大林達を呼び出したのは、勝利を確信しているからだろう。不用意に動くのは危険だ。

何より大林は、彼らの周りにいくつか設置されている、円筒形の箱のような物が気になっていた。

おそらくは何かのトラップだろう。

だが、青島が真つ先に前へ出た。

「もういい。てめえらがモンスターだろうが妖怪だろうが関係ねえ」

「いや、だから人だって……」

「か弱い女の子をいじめたことに、変わりねえんだからよお！ ちくしょーっ！ 動けない女の子にあんなことやこんなことやそんなことまで……」

「だから何もやってねえー！ー！！ ってああ……、血が足りん……」

倒れそうになるゴトーをツッキーが支える。

「ボス！ こんなやつら、オレ一人で十分っす！」

「待て青島！ 何を企んでるのかわからないぞ！」

「ふふふ、かしこいな大林。だが、お前らがどう足掻こうと、オレ達に勝つことは叶わない！」

自信満々に言い放ち、ゴトーはニヤリと笑った。

胸を張り、ビシッ！ と親指を自分に向ける。

「ニュートリア・ベネツへ、第九班！ 班長、ゴトウノブヒコ後藤伸彦！」

「同じく第九班ー、サワタニシンゲツ 沢谷新月」

「と、美形ナンバーワン、南川リートでお送りいたします」

それぞれがポーズをとって声を張り上げる。

「泣く子もあ然！ オレ達や無敵の、リトル・デヴィルズ！！！」

シュパア〜ン！ シュパパパ〜ン！

その瞬間、円筒形の箱がいつせいに破裂 色とりどりの花火をドハデに噴き上げ、小さな空間はまばゆい光でいっぱいになった。光を背景にした三つの影は、「決まったぜ」と、満足そうに輝いている。

「……………」

大林は帰りたくなった。

「茶番に付き合う気はない。さっさとミチルさんを返してもらおう」

「まあ……、大林さんつたらっ」

「ふふふふ。やってみたまえ」

ゴトーがポケットから小さなスイッチを取り出し、ポチッと押すと、大林達の後ろで爆音が響く。

「なんだ!？」

大林達が上ってきた道が天井から崩れ、完全に埋まってしまった。全員がそちらに気をとられた間に、ゴトー達三人は姿を消し、縛られたミチルだけが残っていた。

「どこ行っただ？」

大林や幹部は三人を探すが、もうこの場にはいない。ハルトキだけは暗視で隅々まで見渡せるおかげで、奥の壁にある小さな亀裂を発見できた。彼らはそこへ逃げ込んだに違いない。

「大丈夫か、ミチルさん」

「大林さあ〜ん、ミチル、恐かったあ〜」

縄を解かれたミチルは真っ先に大林に抱き付こうとし、失敗。

「何で避けるんですか〜？」

「……体が勝手に」

ミチルがぶーと頬をふくらませる。

「それよりボス、何か変ですよ」

「ああ、あいつらがこのまま逃げるなんてことはあり得ない」

「大林さん」

壁の亀裂をハルトキが示す。

「ああ。青島、赤瀬はミチルさんとここにいてくれ。ハル、行くぞ」  
「待つてください大林さん。……何か聞こえます」

壁に近づいていたハルトキは、亀裂の向こうからうなるように聞こえる低い振動音に気付いた。

音は少しずつ、大きく、鮮明に聞こえてくる。

「ハル！」

危険を感じた大林がハルトキの腕を引く。

直後、壁がぶち破られるように吹っ飛び、ハルトキの正面一メートルのところに、巨大で尖った金属の先端が突き出した。

「なんだこりゃ!？」

ハルトキや、全員が反射的に飛び退いた。

固い石の壁を一瞬で砕いたのは、凶暴そうな二本のドリルだった。そしてそれを備えた“マシン”の全体がのっそりと現れる。

ちようどトンネルと同じほどの大きさ。紫色のボディはキャタピラ移動式、銀色のドリルから上部には、このマシンの操縦席らしい

空間がフロントガラス越しに見える。そこでニヤニヤと笑っているゴトー達三人の姿も。

外部スピーカーがゴトーの声を発する。

『覚悟しろお！ 大林と愉快な仲間達い！ この“光石エネルギー電池”を動力にした、秘密兵器“ホツキョクグマ1・9号”のえじきにしてやる！』

威嚇するようにドリルがうなった。

「おお、ホツキョクグマのかけらも見当たらないのに……、見事に“ホツキョクグマ”と言い放った」

「感心してる場合っすか、アニキ！ 何なんすかあの怪物は!？」

「それは後だ！ 早く逃げないとミンチにされるぞ！」

「そんな事言ったってボス……！ 逃げ場なんて……」

たしかに、出口へ通じるトンネルは塞がってしまい、もどる事ができない。青島がメイス、赤瀬がダガーを構えているが、小さな武器でこのマシンを破壊することは不可能だろう。

ハルトキも短剣を抜いたが、攻撃には適さない彼の魔力では、同じことだ。

「大林！ こっちだ！」

赤瀬が呼ぶ。

後ろの壁に小さな孔があった。もともと別にトンネルが掘ってあったのだらう。おそらく爆破の衝撃でそれをさえぎっていた壁が崩れかけていたのだ。赤瀬の一蹴りで壁は崩壊し、ミチルを含めた五人はそのトンネルへ駆け込んだ。

ゴトー達三人は、『ホツキョクグマ1・9号』の操縦席から、腕を組んでその様子を眺め、変わらずニヤニヤ笑いを浮べていた。

『ふふふ。逃げる逃げる。地獄の果てまで』



### 36・音無しの世界

『そおくれ、ミンチになあくれ』

ミチルを救出し、トンネルの中をひたすら逃げる五人。その後を『ホツキヨクグマ1・9号』がドリルを高速回転させて追う。

「1・9号って、0・1はどこ行ったのかな!？」

「アニキ! 今はそんな些細な疑問はどうだっていいでしょう!？」  
「気になるでしょ! 何があつたの0・1に!」

『ホツキヨクグマ1・9号』のスピードは、逃げる五人の足よりもいくらか遅く、少しずつ引き離していく。だが足を止めれば、たちまちドリルのえじきとなる。

大林は走りながらも手を考えていた。

先に出口があるとは限らない。このトンネルも敵の計画の一部だとすれば、その可能性はまずないだろう。その場合は、自分を犠牲にしても、この場の全員を救わなければならない。その覚悟はあつた。

それが、人工島で窪井を逃がしてしまった自分の責任だと、そう思っている。ミチルが巻き込まれてしまったのも、青島と赤瀬を新たに巻き込んでしまったのも、ハルトキ達が、生まれ育つた世界を離れ、命をかけて戦っているのも、すべて自分の責任だと。それは過去にさかのぼっても同じだった。自分なら、窪井を止めることができた。いつか敵対することになるとわかっていて、彼を止められなかったのは、単に自分が弱かつたから……。

マシンのうなりが近づいてきた。スピードを速めたのか、逃げる側に疲れが見えてきたのか。どちらにしても状況は悪化してい

る。

だがそのとき、まっすぐ続くトンネルの先の先に、小さな光が見えた。

「出口よ！」

ミチルが歓喜の声をあげる。

光は少しずつ広がり、外の世界が見えた。

「止まれ！」

先頭を走っていた青島が急ブレーキをかけて叫んだ。

「くそっ……！」

全身に風がきつく、きびしく吹きつける。

足を止めざるを得なかった。

そこはたしかに出口だが……、足場がない。三十メートルほど下のほうに、木々の頭が密集している。

ここは内側に反った崖の中ほどで、上にも下にも左右にも逃げ場などない。

スピーカーからゴトー達の笑い声を発しながら、『ホツキョクグマ1・9号』が追いついた。二メートルの間を開けて、ドリルを回転させたまま停止する。

『選ばせてやろう。ドリルで形も残らないミンチとなるか、飛び降りて針葉樹の串刺しになるか』

リートにマイクが渡る。

『オレとしては飛び降りてほしいね。ばらばらになっちゃったら、回収が大変だし。吐くし』

まさに絶体絶命。いくら冷静に知恵をしぼったところで何も出てきやしない。

ミンチか串刺しか。助かる見込みがあるとすれば、確率はほぼゼロだが、三十メートル下の林へ飛び降りる選択。

「……まさかここまで追い込まれるとはな……」



一度叩きのめした相手だからと、大林は甘く見すぎていた自分を恥じた。

大林はハルトキを、ミチルを、青島を、赤瀬を守るようにマシンの前に立ちはだかった。

ツツキーが申し訳なさそうに言う。

『すみませんー、一応オレ達も命かかってますんでー。本当は殺しとか嫌なんだよ。でも生きたままあんた達を運ぶのはムリなんで……』

『謝ってどうすんだ、ツツキー！ ときには残酷な心も必要なの！』

……そりゃあ、オレだってできればこんなこと……』

『あーもうメンドクセー、落ちちゃえー』

『あつ！ こらリート！ 勝手にアクセル踏むな』

キヤタピラが急回転し、ドリルがいつきに五人へ迫った。

『うわああつ！！ くっそあー！！』

『きやああああー！！！！』

青島、ミチルは悲鳴を上げ、赤瀬は目を閉じた。

大林は目を見開いていたが、やはり彼にはどうすることもできない。けつきよく、自分は弱いのだと思い知った。

『くそつ……』

動くことすらできず、素直に負けを認めて目を閉じるしかなかった。まぶたが下りてしまう直前に、誰かが視界に飛び込んできたように見えた。

キイイイン……。

耳鳴り。大林は最初、そう思った。

だがその高音の振動は、空気を伝わり、微かに肌に響いていた。

数秒経ったが、痛みはない。ゆつくりと大林は目を開けた。

「……………」

大林の前には少年が立っていた。彼を、その後ろのみんなを守るように。

そして、マシンは再び停止していた。

『あれ？ 動かない。どうしたのかな？』

焦ったようなリートの声。

少年　ハルトキはマシンを鋭くにらみ、微動だにしない。体中のすべての神経を集中させて、この巨体を“縛っていた”。

「ハルトキ……………」

「アニキ……………」

何が起こったのかを理解したのは大林だけで、青島達は目を見張り、この状況を把握できないでいる。

「アニキ、何をしたんで……………」

「……………」

誰の声もハルトキには届いていない。

機械という人の何十倍もの力を縛るには、膨大な魔力を消費する。持っているすべてが、ペットボトルをひっくり返したように消えていき、気が遠くなりそうだった。それでも、今何かできるのは自分だけだからと、ハルトキは必死に意識を保っていた。

だが限界は超えている。放出する魔力が糸のように細くなり、切れた。マシンを縛っていた“魔力の鎖”も解け、ハルトキの意識も消える寸前。そのときミチルや青島の悲鳴が聞こえ、はっと目を開いた。

後ろに倒れながらハルトキが目にしたのは、足元の土が体重に耐え切れずに崩れ、落下していくミチルと青島と赤瀬の姿。そしてそれを助けようと、とっさに手を伸ばした大林も、引かれて共に落下した。

「（助けなきや……！）」

ハルトキは身体が動くよう念じたが、倒れていく自分を感じながらも、視界から消えていく仲間達へ一言の叫びすら上げることでもできない。

みんな死んだ。自分ももう、死ぬ。

悲しみよりもショックのほうが大きく、背中を土の上に打ちつけた痛み、息が詰まる苦しみにさえ、かけらの感情も湧かなかった。

天井から剥がれた小石が、ハルトキの顔面へまっすぐに落ちてくる。

彼の体はバウンドして再び舞い上がり。そのとき彼は自分の中に異変を感じた。

以前、デンテールとの最終決戦で追いつめられたときと、同じ感じだった。危機に直面した命を守ろうとするような、魔力のざわめき。魔力が外から流れ込み、内にある器を満たす感覚。あのときはそのおかげでデンテールの“黒竜”を破壊することができたのだが、今回はどうでもよかった。“兄”や仲間を失い、自分だけ助かりたいとは思わなかった。

だからハルトキは、すべてをあきらめて目を閉じた。

まぶたの裏に、マハエとエンドーの顔が。怒りをあらわにした二人の顔が浮かび、ハルトキは自問する。

二人はここであきらめてしまった自分を許さないだろう。誰よりも長く共に過ごした二人を、ここで裏切ってしまったてよいのか、と。

もう一度土の上に倒れると、その衝撃のせいか、魔力が勝手にあふれ出し、鋭く高い音を発した。

急に体が軽く、ふわふわと浮いている気がした。全身に、指の一本一本、ツメの先まで魔力が満ち、まるで魔力と一体化したような。それは初めての感覚だった。

マシンのエンジンやドリルの騒音、周りにある一切の音が消え去り、ふと目を開けたハルトキは、顔面から四十センチのところまで止まっている小石を見た。

いや、止まっではない。ゆっくりと、落下してきている。

何をいまさら『動体視』など使っているのだろうか、とおかしくなったが、なぜか身体は楽で、いつも『動体視』発動中は自分の動きもスローになり、とても窮屈なのだが、“これ”は違った。

身体がいつもどおりに動く。それどころか、いつもよりもとても軽い。

ハルトキは試しに腕を伸ばし、小石を掴んでみた。

「……………」

小石は手の中にとどまったが、手から離れた瞬間、またゆっくりと落ちていく。

ハルトキは立ち上がったが、自分が発しているはずの音や、声さえも聞こえない。

『ホツキョクグマ1・9号』もゆつくりと、ほぼ止まっているに等しいスピードで前進してくる。高速で回転しているはずのドリルでさえ、手を置いてなでられるほどに遅い。

歩いてみても音のない、完全な無音世界。何秒か前まで自分が存在していた世界とは、とても思えなかった。

「（ここはどこ？ ボクがいた世界？ ボクがさっきまでいた……）」

大きな希望がハルトキの頭に湧き上がった。急いで大林達が落ちた場所まで行って、そこから見下ろすと、案の定、十メートルほど下をゆつくりと落下中の、四人の姿があった。

ほっと笑顔をこぼし、ハルトキは短剣を抜いて魔力を込めた。短剣は、柄の周りでとぐるを巻く鎖、『縛連鎖』に変形する。

鉤付きの銀色の鎖を『ホツキョクグマ1・9号』のドリルに巻き付け、ハルトキは柄をもったまま反った崖を“駆け下りた”。

足が崖肌を蹴ると、土や石の破片がスローで飛び散る。ハルトキはすぐに四人に追いつき、思い切り壁を蹴って跳び、落下中の大きな石を足場にしてまたジャンプ。四人まとめて鎖で縛った。

「よかった……」

キーン。と小さな音が鳴ると、空間のスローが解けて四人の悲鳴がもどった。重力に正しく、高速で落下し始めたが、鎖のおかげで空中で停止する。

「……………！！？」

吊られた拍子に四人は悲鳴を止め、言葉を失った状態で目を見開いていた。

死を確信した。それなのに生きていた。いつの間にか鎖が身体に巻き付いて。

「……………ハル……………」

大林は突然目の前に現れたハルトキに声をかける。ハルトキは『

縛連鎖』の柄をしつかりと握って、喜びと安堵の表情。だがその内には苦しみも見て取れる。魔力が限界でもなお、仲間を救うべく底から力を絞り出しているのだ。

大林には確かに聞こえていた。落下中、空気を貫くように迫ってくる鋭く高い音を。その一瞬後には、宙吊りになって助かっていた。

ハルトキが何かの力を使ったのは間違いないと大林は思うが、すでに理解可能領域を超えていた。それでも、また彼に命を救ってもらったことには、心から感謝した。

『おい、全員落ちたのか？』

ゴトーの声が降ってくる。そのとき、ガクンと、鎖が数十センチ下がった。

『何だ？ 何かに引つ張られて、おいおい、急いで後退させる！ オレ達まで落っこちるぞー！』

『そんなこと言っただって、パワーが……。あつ、光石電池がきれかかってるー』

『こんなときにー！！？』

ドリルに巻き付けていた鎖に引つ張られ、五人分の体重で『ホツキョクグマ1・9号』の巨体が少しづつ前進している。

『マズイぞ……！』

大林は視線を下げた。地上までまだ二十メートル以上あり、飛び降りるわけにもいかない。

『くっ……！』

ハルトキは余った力のすべてを放出して鎖を伸ばした。

地上まで十五メートル、十メートル、五メートル

頭上では、すでにマシンの半分がトンネルから突き出し、今にも

落ちてくるところだ。

「このままじゃ下敷きだぞ！！ ハル」

大林はハルトキを見て、息を詰まらせた。ハルトキの意識がない。

「おいハル……？ ハル！」

魔力の鎖が薄くなって消えた。

「キヤアアツ！！」

さいわい、地上まで五メートル。大林は空中でハルトキを担いでそのまま着地した。

『うわああああわわわわ……！！！！』

すぐにその場から退避した直後に、ドシンツ！！ と地を響かせてマシンが頭から地面にめり込んだ。

光石エネルギー電池が割れ、エネルギーが過剰に膨張する。

ドグオオンツ！！！！

炎が拡散し、空に真っ黒なケムリを吹き上げた。

マシンは原型を失い、沈黙。大林達が身を隠した木の根元に、空から降った巨大なドリルが突き刺さった。

### 37：戦う理由

針葉樹の林を抜けると、そこは広い平原だった。

林の中ではずっと誰もが無口で、大林は気が重かった。

恐ろしいドリルマシンに襲われ、命を落としかけた直後だ。この世界の住人　何も知らない彼らにとって、アレは理解しがたい物だっただろう。

「ミュートリア・ベネツへとはどんな組織なんだ？」　そう訊かれるのはあたりまえで、一番詳しく知っているハルトキに意識はなく、大林の背中であたりとしたりとしている。

訊かれても、大林にはうまく説明できない。いや、するわけにはいかないのだ。

しかし「知らない」などと言っても納得してくれるはずがない。赤瀬はとくに、そうだろう。

そう思っていたので、沈黙を破った赤瀬の一言目に、大林は驚いた。

平原の向こうにある空へまっすぐに視線を伸ばして、言う。

「大林、お前が相手にしている組織が、とんでもないやつらだということとは、よくわかった。何も訊くなと言つのなら、オレ達は何も言わねえ」

背中を向け、大林に向こうとしないが、それは呆れているわけでも怒っているわけでもなく、大林の心中を察しての、決心の表れ。

「何も言い返せねえからな。あんなもん見せられちまえば」

「……赤瀬……」

大林は申し訳ない気持ちだった。『田島弘之』のボスとして、幹部である彼らにさえ事実を伝えられないことに。



青島は何か訊きたそうにうずうずしていたが、赤瀬の言葉に打たれてあきらめたようだ。

「そうっすね。オレ達のことなら、気にしないでください」

「……すまない」

「謝るな。お前がオレ達を信用してないなどとは思っていない。よほどの事情があるということは、だいたいわかった。お前のその苦しそうな顔は、久しぶりだからな」

大林は自嘲する。心の内を隠し通せていなかったのかと。

「まあ、とりあえずボスも見つかったことですし、オレ達は帰りや。ですが、何かできることがあればいつでも言ってください。オレ達は“仲間”ですから」

ニツと、男らしい笑みを見せる青島に、大林は「ああ」と返した。

そのいうやり取りを後ろのほうで愉快そうに眺めているミチル。内容を理解しているのかいないのかは定かではないが、解決しておかなければならない問題がもう一つ。

「そうだ、頼みがある。ミチルさんを、送り届けてくれないか？ またニューヨーク・ベネツへに狙われかねない。ミチルさんが希望する安全な町まで」

そして大林はしっかりとミチルへ向き、頭を下げた。

「巻き込んでしまつてすまない。キミの安全のためなら、オレ達は何でも協力したい」

その男らしい態度にミチルはうつとりとしていたが、その後、困つたように首をひねつた。

「私は自由気ままな旅の途中なので 希望の町と言われても…

…

「そうか……。困つたな」

すると、青島が提案する。

「ボス、それじゃ『田島弘之』の本部に彼女をかくまっておくというのは？ 彼女の安全が保障されるまで」

「本部、ですか？」

「……うーむ」

大林は苦い顔をする。

名案と言えばそうではあるが、男のたまり場に女の子を放り込むというのは、いかななものかと。

部下達を信用していないわけではないが、やはり彼らも男だ。そして不良だ。腹をすかせたオオカミに変わりはない。

“身の安全のために”それは避けたほうが良いのかもしれない。却下しようとしたが、その前にミチルが、

「はい！ 私、本部へ行きまーす！」

元気一杯に手を挙げた。

「え。ちよつと待てミチルさん。よく考えてから」

「大丈夫です。私アレルギーとかありませんし」

「しかしなあ いや、まあ本人がそう言うのなら。（……アレルギー？）」

「よし、決まりつすね」

何か嬉しそうに赤瀬の背中をポンポンと叩く青島。赤瀬はやれやれと肩をすくめた。

こちらも何か嬉しそうに幹部二人の横に並ぶミチル。好奇心からの選択なのか、大林にはさっぱり理解できないが、どちらにしろ深く考えるのはよそうと思った。本能的に。

「それじゃボス、また“生きて会いましょう”ね」

グツと、青島が親指を向ける。

「ああ」

大林は力強く答えた。

「（生きて会いましょう、か……）」

青島達二人は去り、平原には風で木の葉がこすれる音だけが静か

に舞っていた。

いまだ意識の戻らぬハルトキを横に寝かせ、大林は空を仰ぐ。

生きて、また……。

その言葉で、昔の記憶がフラッシュバックした。

言われる立場になって、ようやく理解できることがある。部下の言葉に対し、今の大林には次に生きて会えると保証できる自信はない。自ら死へ踏み出して行く自分を制御できる自信も。

それでも大林は力強く答えた。

“あの人”と同じように……。

仲間に心配をかけたくないという理由と、何より、目前にある死への恐怖に対抗するため。あのとときの“あの人”も同じ気持ちだったのだろうと、大林は理解した。

空に広がる青から、雨粒は落ちてこない。

だが、あの日と同じ空に見えた。

「（雨が降るのか）」

あの人がいっつも言っていた言葉を思い出す。

『例え何があるうとお前は生きるんだ。生きて、仲間を守れ。大切な者を守りぬけ。お前にしかできないことだ』

仲間……、大切な者……。

大林はハルトキに目をやる。

十六歳というまだ幼い少年は、大切な人を亡くしたあの頃の自分

とそう変わらぬ歳だが、とても穏やかな表情をしている。たくさんの愛を知っているからだ。あの頃の自分はとうだったのだろう、人生で初めて出会った二つの愛を、同時に失った。

最愛の師と、最愛の親友を。

もう一つの言葉を思い出す。

『忘れるなよ。何があるうと、人の道だけは、外れるな。決して』

あの日、『窪井賢』は死んだ。優しく明るい、相棒であり親友であり兄弟でもあった窪井は死んでしまった。

完全に人として歩むべき道を外してしまった、かつての親友は今、大林のすべてを奪い去ろうとしている。

だからと言って、自分は今の窪井を止められるのだろうか？

やはりまだ、大林の心の中には親友、『窪井賢』が生きている。

最愛の師を殺した張本人ではあるが、憎みきれではない。それがいかに危険なことかは承知している。

中途半端な覚悟で闘っても死ぬだけだ。

「いや、違う」と、大林は首を振った。

「（憎しみなんて必要ない。復讐のために戦うんじゃない、仲間を守るために戦うんだ）」

もう誰一人として、仲間をソウシの二の舞にさせない。

仲間を救うためなら……。青島にはああ言ったが、自己犠牲

の精神は大林の中で静かに、だが確実にその炎を盛らせていた。

「……………」

そんな事を考えて勘が鈍っていたせい、暗い木々の陰で光る、

いくつもの眼光に狙い見されている気配を、大林は感知できていなかった。

#### 同時刻

港町の西、町に程近い場所にある小さな山の山頂に、大小二つの人影があつた。

背の高い男と小柄な男は、真新しい切り株の上で、語り合うでもなく、ただそこから見渡せる範囲の景色を望見している。

木が伐採されてできた、ちよつとした広場になっているその場所は、切り株と放置されたままの倒木を気にしなければの話だが

町と海を眺めるには絶好の展望スポットと言える。

ちようどそのふもとは広い敷地を有する寺院。象徴らしく高々とそびえる細長い建物の黒瓦が日光を浴びて美しく輝いている。

だが彼らの目的は娯楽ではない。

“そのとき”が来るのを待っているのだ。

背の高い男が体を揺らすと、髪が金色にきらめく。その男が身につけているのは、青い服と緑のマント。肩にかけている大きな皮袋から、一見すれば旅人のよう。対し、小柄なほうの男は、これまた対S A A Pのような全身黒装束。一見しても二見しても怪しい人物。姿は何もかも正反対な二人で、並んでいると特に異様だ。

この場に人が来たならば、その異様さに恐怖を覚えることだろう。そして物音を立てぬよう、この場を逃げ去るに違いない。人の本能が、彼らが垂れ流している黒々としたオーラから“同種”ならざる気配を感じ取るだろう。

小柄な男が長身男を見上げ、キンキンと甲高い声を発す。

「おい“ハクト”。そろそろ正午じゃねえか？ オイラあ、動きたくてしょうがねえや」

ハクトと呼ばれた長身男は、目の端で男を見下ろし　いや、

“見下し”、すぐに視線をもどす。それから少し間を置いて言う。

その口調は、彼を見下した冷たい眼とは反して、弟に話しかける兄のよう。

「そうだな、“クチバミ”。そろそろ向かったほうがいい」

「やれやれ、あんときハクトがミスらなきゃこな　」

「……………」

「何でもねえや。そんじゃあ後はオイラに任せときな」

「……………」

灼熱の殺気を熱光線のように放つハクトの眼光に送られながら、それに気付いているのか、いないのか、クチバミと呼ばれた小柄な男は平然と背を見せて歩み行く。

「急げ、一時間以内だ」

「へーへー」

後ろへ適当に手を挙げるクチバミ。それまで中腰体勢でいたのか、一瞬前よりもいくらか身長が高くなってしているようだった。

ガサガサと雑草を踏む音を最後に、“小柄だった”男の気配は完全に、溶けたように消えてなくなった。

「……………」

ドゴンッ！！！！

突然振り落とされたハクトの拳は、クチバミが立っていた切り株の中央をその下の土中まで深く貫いた。きれいな円形に開いた穴の周りは黒く焼け焦げて、穴からはケムリと異臭が吐き出されていた。その八つ当たり一発でハクトは満足したのか、ゆるりと拳を解い

て腕を下ろすと、地上へ目を向けた。

地上で巻き起こっている悲鳴と咆哮。

モンスターが人を追いかけて、襲いかかっている。

あわれ凶暴なツメやキバの餌食になる者、運よく町へ逃げ延びる者……。

どちらにしても、そこは地獄。

大きな何かが動き出した。

『シラタチ』内部は混乱していた。

突如港町付近に多数のモンスターが出現した、という情報が入ったのは、十分前。すぐにS A A Pの“イエロー部隊”が対処に向かったが、あまりにも突然のことで、組織全体は大きく動揺していた。

どれほどの動揺ぶりかと言うと、普段事務的で真面目なS A A Pが廊下を走るほど。

普段クールなグラソンが険しい顔で右往左往するほど。

普段能天気なエンドーがいつもの九割り増しに、のんびりと茶を飲んでいるほど（つまり、いつもと何ら変わらないエンドーの姿がそつ見えるほどに周囲があたふたしている）。

「現時点での被害状況は!？」

「不明です! イエロー部隊からの連絡は今のところまだ……」

「ちっ! なぜよりもよって、こんなタイミングで……!」

せめて宗萱が他の任務で外出していなければ、ここまで混乱することはなかっただろう。

シラタチのS A A P三部隊、『レッド』、『イエロー』、『ブルー』のうち、レッド部隊は窪井の手に落ち、イエロー部隊はモンスターの討伐へ。本部に残っているのはブルー部隊のわずか七名。プラス、グラソンとエンドー。

「案内人、大林と春時は無事か？」

「確認してきます!」

と、ちょうどレポート装置の小部屋から、何者かがドアを蹴り開けて出てきた。

息が詰まるのではないかというほどに呼吸を乱し、顔面から汗粒



を滴らせた大林。朱色のオールバックは崩れて長い前髪が顔にかかっている。そこから覗く眼には、険悪な影が。

彼の背には、意識のないハルトキが乗っかっている。

「大林！」

グラソンが駆け寄り、その背からハルトキを降ろす。

「ハルは力を使いすぎたようだ。ずっと、目を覚まさない……」

「お前は無事か？」

「ああ……、帰り道、モンスターに追われた……。くそっ、どうなっただ？」

大林は壁に寄りかかって床に尻をつく。

「とにかく、お前は休んでいる。オレはこれから各地へ飛んで、様子を見てくる。フーレンツの他にもモンスターの被害が認められた場合、今の『シラタチ』の勢力だけでは制圧が追いつかない」

大林とハルトキのひどくボロボロな帰還に面食らってか、グラソンは冷静を取り戻したようで、天井へ一つ息を吐いて頭をクールにする。

「おーい、ヨツくんは帰ってきた？」

「おう京助、お前もここに残ってる。本部の警備に当たれ」

湯呑みを片手に休憩室から出てきたエンドーと、そこにいたSAPに二人を任せて、グラソンはレポート装置へ。

グラソンを見送り、エンドーは倒れたハルトキに目を向ける。

「とりあえず……」

そしてその目をSAPへ。

「お茶、おかわり」

大林はしばらく動くことができなかつたが、休憩室で水を一杯飲んだおかげで少しはマシになった。

全身に酸素が行き渡ると身体は楽になり、もうろうとしていた頭

もよみがえる。

平原で突然モンスターに襲われ、大林は夏の強い日差しの下、ハルトキを担いで全力疾走。どうにか港町まで逃げ延びてきたのだ。青島は無事だろうか。赤瀬は、ミチルは、モンスターに襲われたりしていないだろうか。

そう考えたが、彼らならうまく逃げるだろうと、あまり心配はないことにした。二人とも幹部だけあって、強い。とくに赤瀬は状況判断に優れているし、勘も頭もいい。

それよりも心配なのは

大林は立ち上がった。

今、ハルトキは医務室のベッドの上。目覚めない彼の傍らにはエンドーがついている。

大林は思う。

もしもこのまま目覚めないということがあれば……。  
すべては自分の責任……。

「(ダメだな……)」  
自らの頬を叩く。  
いつも自分を責めてしまう。  
そうやって自分を追いつめてしまう。  
いつからか、そうすることが自身への慰撫いぶさとなっていた。

追いつめ、追いつめられ。それを『戦う』という選択へのきっかけにしたいのかもしれない。

休憩室を出て医務室へ足を運ぶと、ドアの前でエンドーとすれ違  
う。

「ヨツくんなら大丈夫だ。すぐに目を覚ます」

「……そうか」

「ああ見えて、かなりタフなやつだから」  
エンドーは一つ笑みをつくると、「警備言ってきまーす」と去って行った。

大林は踵を返す。

指示通り警備の任務につくエンドー。グラソンのほうも各地方への見回り中。みんな自分のやるべきことをやっている。

自分はどうだろう？ と大林は考える。

「（オレがやっていることといえば、人の心配をして自分を責めているだけだ）」

体力は回復した。

今自分にできることは……。

外ではモンスターがうろついている。人命救助くらいはできるのではないか。グラソンのように各地方の見回りでも

そのとき、はっと頭に浮かんだ。

一人の人物のことが。

「レック……」

武器商人のレック。町の外で商売をする彼は特に、モンスターに狙われやすいだろう。

といっても、彼も相当強い。武器を持たせれば右に出る者はいないほど。

だが彼は独りだ。大群に襲われでもすればひとたまりもないだろう。

大林は友人を無事を確認すべく、今でも彼が滞在しているであろう『ソレイアド地方』へ向かうのだった。

本部の一階へ降りる昇降機の上で、エンドーは案内人に話しかけ

る。

「それにしても、突然こんなにもモンスターが現れるなんてなあ。どう思うよ？」

「一度に大量のモンスターが出現する、というのは、前回と同じなのです。どうも自然発生とは考えがたいことでした」

「自然発生じゃないってのはわかってる。前のモンスターはデンテールが放っていたんだろ？　すると今回の件には間違いなく窪井が関わってるんじゃない？」

タイミング的にもそうだ。ウイルス培養の時間稼ぎに窪井がモンスターを放った。そう考えるのは理にかなっているが……。

「エンドーさん、それは違います。グラソンさんの話では、前回のモンスター発生の件にデンテールは関わっていないらしいのです。彼はそれを利用しただけで」

案内人は否定する。

「んなわけねえだろ？　だって実際、モンスターはこの城に」

エンドーの言葉は、前触れなしに城中に響き渡った爆音と、それにもなつて足元を揺さぶる振動にさえぎられた。

「何が起こったんだ？」という疑問を発する前に、エンドーは一階へ到着しかけていた昇降機から飛び降り、足を曲げて衝撃を流すと、そのまま床を蹴って爆音の発生源であろうロビーへ走った。

本部の正面入り口からモンスターが侵入してくる。

二足歩行トカゲが七体と、灰色体色のドラゴンが五体。

エンドーがフロントに到着した頃にはすでにS A A Pとモンスターが衝突していた。すぐにエンドーも『発破鋼』を構えてそれに加わる。

雑魚はS A A Pに任せてドラゴンへ。

「うりゃあつー!!」

鋭い爪を発破鋼で弾いて、掌に溜めた魔力を掌底で叩きつけ、爆発させる。

そして間髪入れずに発破鋼の大振りを繰り返す。その接触時にさらに大きな爆発を起こしてドラゴンを吹っ飛ばした。

「さすが!」

瞬殺。

『VBT』の成果は伊達ではない。

倒れたドラゴンはまだ生きているが、動けないのならそれで十分。すぐにエンドーは次のドラゴンに攻撃をしかける。

モンスターの半数以上が本部の奥へと進攻していく。やつらが上階の中枢へ攻め入ることはないだろうが、追っていくS A A Pの何人かでも犠牲になる事態は避けたい。

加勢しなくてはならないが、まずはこの場のモンスターを一掃するのが先だ。

ロビーのモンスターをすべて片付けたエンドーだが、魔力の消費によって、床に肩膝をつけてしばらく動けなかった。体力的にもまだまだ足りないというのもあるが。

それでも何とか立ち上がるうとするエンドーを二人のS A A Pが両側から支える。

「無理をなさらないで」

「大丈夫だ、まだまだいける」

戦いで傷ついた身体を魔力が治癒していく。

「便利な身体です」

「ある意味、モンスターよりも化け物かもな……」

「心強い化け物ですよ」

モンスターを探して暗い廊下を進んでいたエンドーと二人のS A A Pは、とある場所で足を止めた。

そこは以前、グラソンと侵入者が闘っていた、あの十字廊下。そこに数体のドラゴンとトカゲが倒れている。動く影はなく、S A A Pがすべてしとめたのだらうとエンドーは安堵した。だが動く影がないのは味方も同じだった。

壁にもたれて動かないS A A Pに、生気は感じられない。

「……相打ちか？」

追っていったS A A Pの数を思い出し、一人足りないことに気付く。

そして見回すともう一つ気付いた。グラソンが「地下室だ」と言っていた大きくて重厚そうな扉。その扉の錠前が破壊されていて、軽く開いていることにも。

戦いの際に破壊されたのだらう。ともかくモンスターの侵入を考えて、中を調べてみる必要がある。

エンドーはトカゲやS A A Pの亡骸をまたぎながら扉に近づく

すると、ギギ……と扉が微かに動いた。

中に何かがいる。

すぐに発破鋼を構えたエンドーだが、間を置いて中から出てきたS A A Pの姿に警戒を解いた。

一人でも生き残っていたことに、とりあえず一安心。

「なぜそんな所に？」

「地下室へモンスターが入り込んでいたもので。それよりも、この地下に何か置いてありませんでした？」

「何かって、何も知らないけど？」

「そうですね……。あ、いえ、地下室には、何も置かれていない妙な石の台座があるだけでしたので」

「そうか。まあもともとここはデンテールの城だったわけだから、

妙な物の一つや二つあって当然だ」

妙な物には触れないほうがいい。もともと頑丈に施錠されていた扉だ。何かが封印されていた可能性もある。

しっかり閉ざしておくよう、そのS A A Pに言うておく。

それからエンドーはため息をついた。

扉の一枚が破られた程度の被害ならば何てことはないが、数えて三人のS A A Pが犠牲になった。十分に、被害は大きかったと言える。

「これ以上、何事もなければいいんだけどな」

### 39：武器商人の死闘

本部の『医務室』

無人の室内でハルトキは目を覚ました。

すぐには起き上がれず、硬直している四肢に感覚を行き渡らせてから、ゆっくりと上半身を起こす。

鼻から深く空気を吸い、口から吐き出す。

それから、ここがどこなのかを理解すると、笑いがこみ上げた。

とても清々しい気分だった。

自分と仲間の命の危機　それが記憶に残っている最後の場面だがこうして助かっているところを見ると、自分のふんばりは立派なものだったと賞賛できる。

誰もいない医務室を見回すと、ベッドのとなりの小テーブルの上に湯呑みを一つ見つけた。その下に敷かれた紙切れには、『フアイト一発！』と太く書かれた文字。

「エンドーか」

言葉の意味は理解不能だが、彼の心づかいであろう冷めた茶を、ハルトキはありがたく飲み干した。

「（……みんなはどうしたんだろう？）」

気絶している仲間を独りベッドに残しておくほど、『シラタチ』の連中は冷たくはないはずだ。今ここに誰もいない理由は、トイレ中か、そうでなければよほど忙しいのだろう。

そう思ったが、ドアを開けても深い沈黙しか入り込んでこないことに気付き、

「（何かあったのかな？）」  
と、少し不安になった。



心配ではあったが、ハルトキには何もわからない。

テラスに出て涼んでいると、少しして奥にある階段からエンドーが現れた。

どことなく曇った彼の表情を見て、ハルトキは声をかけるのをためらう。

様子を見てみると、エンドーは何のつもりか短剣を抜いて、それを振り回しながら踊り始めた。

盆踊りの一種だろう。

「楽しそうだね」

歩み寄って声をかけると、エンドーは一瞬振り向いて、また踊り出す。

「おはようヨツくん。今、S A A Pは忙しくてな、『V B T』が使えないんで、自主トレしてんだ。やっぱこれからは“体術”も極めておかないと」

「へえー、体術……。斬新な動きだね……。ところで、ボクはどのくらい寝てたのかな？」

「ここへ運ばれて、ほんの一時間ほどだ」

「そう。……ところでどうしちゃったの、いつになく静かじゃない？」

「ああ……」

エンドーは盆踊りではなく、体術トレーニングを中断して、ため息をつく。

「吉野さん、現在の状況をお伝えします」

「……ん？」

案内人とエンドーによる説明で、ハルトキの清々しかった気持ちは吹っ飛んでしまった。

「モンスターか……」

ハルトキもため息。

「本部にまで侵入してくるなんて……。警備のほうは大丈夫なの？」

「ああ、正門は完全に封鎖して、外に見張りを配置してる。まあ、大丈夫だろう」

「そう……。でも悪かったね、ボクがもう少し早く目を覚ましてれば、犠牲を出すこともなかったかもしれない」

エンドーはポンツとハルトキの胸を拳でたたく。

「まったくその通りだよ。彼も心配してたぞ、なかなかお前が目を覚まさないからよ」

「大林さん？」

「彼はいつも一人だけで戦ってる。だから教えてやれ、吉野春時は強いんだってことを」

「……………」

頼れる仲間だということ。

そうしたいと、ハルトキは思う。

しかし果たして自分は、エンドーが言うように強い男なのか、わからない。自分が、背を預けられるのにふさわしい力を持っているかどうか。

それでも、少しは背を預けてもらいたい。次に共に戦うときには……………。

「……………で、大林さんはどこ？」

「え？ 医務室にいなかったのか？」

「……………」

すると案内人が、

「そういえば大林さん、テレポート装置で出かけましたよ。……………たしか、『ソレイアド』へ」

「ソレイアド？」

クリング・レックは旅する武器商人である。

十七歳のとき単身で旅を始め、そのうち武器商で生計を立てるようになった。

二十四歳現在では、その業界で少しは名の知れた商人となり、商売柄、野蛮な人物や組織などと幾度となく関わってきた。当然、その中で命の危険にさらされることも。

しかし今現在ほどのピンチにさらされたことはなかった。

レックは頬を垂れる濃い汗をごまかすよう、恐怖を強気に変えた瞳で目の前の“そいつ”を見つめていた。

クマと対峙したときと同じように、瞬きを抑えて目をそらさず……。

“そいつ”はケモノでも化け物でもない。だが同じくレックを見返す“そいつ”の瞳は、そのどちらよりも恐ろしい黒く濃い影を潜ませている。

衝突する“二人”の視線。

だがどちらが劣勢かは、明らかで。それでもレックはその“人物”に対して強気な心構えを崩さない。

「何の用だ？ 窪井」

青髪の男はその言葉に対して、眉をほんの少し吊り上げただけで、挑発的な視線を放ち続けている。

男　窪井の背後には彼の手下が五人。

数は問題ではない。レックが恐れているのは、その誰もが、“客”としてここを訪れたのではないことがわかったから。

「まあ、そう警戒するなよレック。リラックスしている、判断を誤ることになるぞ」

「何だと？」

「オレ達はこれから、デカイ戦いをおっぱじめる。その準備に、あんだの力が必要だ。あんだには、いろいろ世話になったからな。できるだけ話し合いで収めたいと思っている」

レックの眉がピクリと動く。

「話し合い、だと？」

「単刀直入に言う。……あんだの商品をすべて、オレ達に引き渡してもらおう」

「ハッ！　笑わせるな。オレの商品を引き渡す？　条件次第だ。オレにどんなメリットがあるのか、言ってもらおう」

窪井はその言葉を逆に笑い飛ばす。

「あんだのメリットは　あんだの命だ」

その眼が冷酷に光った。

レックは気付かれないよう、そつと腰に手を持っていく。

「……なめんなよ。　この若造が！」

ビュビュッ！　とナイフが窪井の腕へ飛ぶ。

だがそれは、軽く身を動かした窪井のローブをわずかに切り裂いただけだった。

同時にレックは背後に立てかけられていた二本の剣を取り、素早く向き直って片方を窪井に突きつける。

「……残念。そいつは誤った判断だ、レック」

「黙れ。手下をぞろぞろと引き連れて来りゃ、オレに勝てると思ったのか？」

「……………」

窪井は片手を挙げて後ろの仲間には指示を出す。

『決して手を出すな』と。

「悪いな。武器の回収を手伝わせるために連れてきたのだが、邪魔だと言うのならオレとあんた、二人だけで話し合おう」

「話し合いもクソもねえだろ。あいつら連れて、とっとと家へ帰れ」  
またにらみ合いが続く。どちらも一歩も引かない構えだが、レックの本能はそうではなかった。

例え一対一で“勝負”をしても、こいつに勝つことはできない。

降伏しろ！ という本能の叫びを、レックは無視し続ける。

「…………どうやら、武器の回収の他に仕事が増えそうだ。あんたの墓穴を掘るのに、一人では肩が凝る」

「窪井よ、お前どうしちまった？」

「どうもしていない。これが、今のオレの生き方だ！」

窪井は身を屈めて地面を蹴り、レックの懐へ飛び込む。

レックも同時に反応して後ろへ地面を蹴る。そして放たれた窪井の拳を片方の剣の側面で受け止め、もう片方を振り下ろす。

急所ではなく、利き腕の肩の筋肉へ。

だが間一髪のところ窪井の手刀に弾かれた。それでもレックは攻撃の流れを崩さない。急所を避けて、手や足の筋肉、筋を、治癒可能な程度に損傷させようとする。

「甘いな。こっちは殺す気で相手してんだ。あんたもオレを殺す気でかかってこないと、死ぬぞ」

「そいつはオレが決める！」

レックの剣の先が、窪井の腹部をわずかに傷つけた。続いて腕と肩。それでも、ぎりぎりかする程度で、窪井は少しもひるまな

い。

「たしかにあんたは強いが、手加減しながらでは、オレに勝つことはできない。言ってるだろ、こっちは殺す気なんだよ！」

レックの頬に強烈な蹴りの一撃。

声もなく吹っ飛び、地面を転がった。

「時間の無駄だな。悪いがゆっくり戦っているヒマはないんで」

レックに歩み寄る窪井。

レックは立ち上がって、剣をヌンチャクのように振り回し、構えなおした。

「よおくわかった……。今から本気で行く」

目を閉じ、ゆっくりと深呼吸する。

窪井は“商品”の中から百五十センチほどの槍を手に取ると、大きく振りかぶって、レックの頭部目がけて投げつけた。

瞬間、レックは目を見開き、自ら槍へ向かって疾走すると、

左の剣で槍を切り弾き、間合いを詰めて右の剣で窪井の左腕を切り落とす！

「……………」

土の上に赤い血が滴った。

だが、それは一滴二滴。

レックは自分の目を疑った。

剣が止まっている。

彼の技ならば、窪井の腕は完全に切り落とされていただろう。

切り落とせていたはずだった。

通常ならば。

振られた剣の刀身は、窪井の手中にあった。素手で剣の振りを止めたのだ。

いや、それでも十分に加速された刃なら、指の筋肉と骨でも切断し、腕に達する。

「……………」

レックは瞬きをして見た。

「窪井……………」

通常ではない。

窪井の左腕の筋肉は化け物のように発達し、右よりもひと回り大きな手が、残撃を完全に封じていた。

わずかな傷口から少しだけ血が流れ出ている程度の、軽傷。

「何なんだよ……………？ お前は……………？」

柄を手放し、よろよるとレックは後退する。

窪井は剣を投げ捨てて言う。

「もうオレは、あんたの知っているオレではない」

レックは湧き上がる恐怖を噛み潰し、一本残った剣を両手で構えた。

#### 40：曇天の下で

大林は空へ昇る“のろし”を見た。

『ソレイアド』へテレポートし、まっすぐにレックのいた『オアシス』へ向かっている最中、まさにその場所から立ち昇った赤いのろし。

大林はすぐに走った。

大林の仲間内で、赤いのろしは『SOS』。つまり、レックの身の危険を知らせている。

やはりモンスターの大量か……。

何があったのかはわからないが、あのレックが『SOS』を発するということは、よほどの事態に違いない。

「くそお！ レック……！」

無事でいてくれ！

切に願う。

空に少しずつ表れてくる陰りは、何を予兆しているのか。

不安は大きくなっていった。

もうそこから、夏の熱気は消えて、冷たい汗が全身から流れ出てくる。

小さな『オアシス』の緑が近くに見えたとき、大林は気が遠のくのを感じた。

動かない友の姿がそこにあったから。



「レック！」

倒れたレックの手元でケムリを発する発煙筒。最後の力で助けを求めたのだろう。

「レック！　おい、レック！！」

傷だらけのレックを抱き起こし、名を呼ぶが、反応はない。

だが、まだ息はある。

「なぜだ、くそっ……！！」

辺りにモンスターの気配はない。

いや、彼の傷はモンスターやケモノによるものではない。

打撲。

それも腹部や頭部　　沈黙させるための急所を突いている。

「まさか……」

見ると、どこにもレックの馬車が無かった。

からの木箱が散らかっているだけ。武器は、レックの商品はすべて、馬車ごと何者かに奪われていた。

「……………」

大林はレックを木の陰にかついで連れて行き、そこに寝かせる。

「すぐにもどる」

そうささやいて、大林は地面に残った車輪の跡を見る。　　それ

を追えばたどり着くはずだ。

誰に、かは決まっている。

キツと、鋭い視線をその向こうへはしらせた。

「大林……………」

かすれたレックの声。

だが大林は振り返らずに足を進める。

「大林……………、行くな……………」

「……………」

「大林……………」

「……………」  
「行くんじゃない……………」

大林は前しか見つめていない。

それでもレックは、どうにかして彼を引き止めたかった。

そうしなければならぬ。

そうしなければ大林は　　死ぬ。

身体が動けば、片腕と片足さえ動かすことができれば、手足にナイフを突き立てても彼を止める。　　それができないレックは、届かない声で彼を呼び続けるしかない。

「……………行くな……………！」

痛みと涙でかされる声で必死に。

遠くなった大林の背中も、もはや誰の制止も受け付けぬ。

孤独な背中も決意に満ちていて……………、とても、寂しげだった。

荒れた大地を馬車はコトコトと走る。

窪井は荷台に立って、進行方向と逆側を眺めて、その胸の内に虚しさとおわれみを宿らせていた。

「バカなやつだ」

つぶやく。

脅しをかけたところで、レックが大人しく従うわけがないことはわかっていたが、あそこまで本能を無視するやつだとは思っていなかった。

結果、瀕死の状態まで痛めつけることになったのは、とても残念

であった。

この先 『シラタチ』を滅ぼし、計画が滞りなく進むようになれば、今よりも大量に武器が必要となる。その際、武器商人と協力関係があれば事は楽に進むのが。

とくに、彼は昔からの知り合いだったから。

最初から馬車まで奪う計画ならば、五人も手下を引き連れるまでもなかった。財産をすべて失ったレックが商人として復帰するのは至難だろう。

窪井は雲に覆われてすっかり暗くなった空に目をやる。地には風も吹き始めていた。

「……雨か」

「あの日と、同じ空だった。」

ふと、通ってきた道の、その先に目を凝らす。

「……」

窪井は荷台から飛び降り、馬車の左右を小走りで付いて来ていた手下四人に指示する。

「先に行つてろ。野暮用ができた」

そしてもう一度、曇天を見上げる。

今にも雨が落ちてきそうで。窪井はもう少し待てと念じた。

せめて“これ”が終わるまでは。

ゴロロ……、と雲が光った。

見上げたまま、窪井はゆっくりりと、大きく息をする。

「……懐かしいなあ、大林」

横から吹く風で、窪井の青い髪が揺れる。いつの間にか窪井の正面に立っていた男の、乱れた赤い髪も。

「……ああ、懐かしい空だ」

窪井と、大林。両者はしばらく視線を合わさず、ただ同じ空を見ていた。

「……………」

先に相手に視線を向けたのは大林。窪井と道を分かって以来、大林は初めて彼の姿をまともに捉えた気がした。ようやくまともに、窪井を敵とみなすことができたおかげか。あの頃よりもずっと大きくなっている。ずっと強そうだ。

顔立ちも、変わった。

悲しげな顔に……………？

「一つ訊いていいか？」

そう言つて窪井も大林を見る。

「これから始めるのは、ケンカか？ 殺し合いか？ ケジメのための闘いか？」

大林は答える。

「ケジメのための、殺し合いだ」

「……………そうか」

迷いのない大林の眼。窪井は嬉しそうに眼を細めた。

窪井が一步踏み出る。

大林も、一步出る。

「始めようか。大林」

「窪井、ここで終わらせる。憎しみと悲しみのすべてを」

空がうなる。

二人の“殺し合い”を見守って、まるで楽しむように。

両者は地面を蹴った。

## 41：死の拳

大林の拳が空気を裂く。  
窪井の拳が空気を裂く。

同時に放たれた二つの拳。

両者が掌でそれを受け止め、防ぐ。

すかさず繰り出される窪井の回し蹴りを、大林は姿勢を低くしてかわし、そのまま足払いをかける。窪井はバランスを崩して背中から転がるが、すぐに首をバネにして跳ね上がり、体勢を整えた。

「バケモノにはならないのか？」

と、大林。

「それでは面白くないだろ？」

窪井は口の端で笑う。

再び大林がしかける素早い足払いを、窪井は宙返りで回避する。その際、空中で両足を放ち、その蹴りが大林の顔面にヒットした。

大林は仰け反って倒れ、窪井は反動で地面に転がった。

すぐに立ち上がる二人。

「効いただろ？」

窪井がニヤリと笑う。

大林は血の混じったツバを吐き捨てる。

「まだまだ。昔から、オレのほうが強かったら？」

「……昔は、な」

巨大な太鼓を叩いたような大きな音と共に、空が激しく光った。風も強まってくる。

窪井は表情をゆがめた。

「ちっ、降ってくるな」

「とつとつケリつけようぜ」

再び、両者が地面を蹴る。

二人の拳と拳が衝突。

脚と脚が衝突。

同じ技で弾き合う。

窪井は蹴り上げられた脚に手を着き、それを軸に大きく空中に舞うと、大林の背後に着地し、彼の後頭部へ拳を叩き込む。が、大林はかわし、その腕を掴んで一本背負い。

背中を地面に叩きつけられた窪井は、転がって追撃を回避し、両足で大林を蹴り飛ばした。

起き上がった窪井は思わず目を細める。

「（しまった！ 向かい風が……！）」

風上から、黒い物が飛んでくる。大林のロープが。

「くっ！」

ロープが顔と全身にまとわり付き、自由がきかない。そこへ大林が手刀で、頭、喉元、鳩尾みそおちを打ち、最後に回し蹴りで蹴り倒した。

「っ！」

ダメージは大きく、スキのできた窪井の喉元に大林は右足を置き、地面に押さえつける。いつでもトドメをさせるように。

勝負はあった。一見すれば。だが追いつめられても窪井は顔色一つ変えない。

それどころか逆に、

「懐かしいな……、あの頃が」

微笑する。

大林は何も言わず、ただ冷たい眼で彼を見下ろしていた。

「昔のオレは負けっぱなしだった。お前に勝つために、毎日努力したものだ。だが、お前もオレと同じで、オレに勝ちを取られないよう、努力していた」

「……………」

「互いが高め合っていたんだな……………」

「……………今更何だ？ 思い出話でオレを油断させようつてののか？」

「……………大林、お前もずいぶん強くなった。いろんなもんを捨てたんだな」

大林は足の裏に違和感を感じる。

足の下にある窪井の首の筋肉や筋が、見る見る発達していく。シヤツが破れて赤い肉体がむき出しになる。

まずいと思い、体重をかけるが遅かった。

その足首を、窪井の大きな手ががっしと掴み、太い腕が持ち上げる。

「だが、オレのほうが、まだ強い」

大林の体は軽々と放り投げられた。

地面で受身を取ったが、大林は立ち上がれない。

窪井に掴まれた足首が鋭く痛む。骨にヒビが入ったようだ。

「お前にはまだ、捨て切れていないものがある。すべてを捨てたオレに敵うはずがない」



「……………」  
大林は負傷していない左足を踏み込み、どうにか立ち上がる。今度は窪井がそんな彼を蹴り倒す。

「オレは何もかもを捨てた！ 誰の手も届かない高みを目指すために！」

「っ！ 何が高みだ！？ んなくだらねえもん、真つ先に捨てちまえ！ 大切なもの犠牲にしてまで目指す価値もないだろ！！」

雨が落ちる。

「…………たしかに、お前にとってはお前にとつてはくだらないことだろうな。だがオレにとつては、たった一つの、道だ」

また、雨が落ちる。

「だから大林…………、オレの、邪魔をするなあ！」  
窪井の大きな拳が襲う。

大林はとつさに両腕を顔の前に構えて防いだ。  
「ぐっ！！」

ミシリと音が鳴り、激痛が貫く。  
右腕の骨が破壊された。

常人ならば悶絶する痛みだが、大林は耐えた。

「…………オレの命くらい、惜しみなく投げ出してやろう。だが、それはお前と刺し違えるためだ。窪井、お前はオレが殺す。必ずな」

大林は立ち上がる。両足で、しっかりと。

彼は苦痛に顔を歪めたりはしない。彼の中にあるのは憎しみと悲しみにまみれた闘志だけだ。

空から激しい音が降り、地上が震えた。

雨がたくさん落ちてくる。

「おおあああああつっ！！！！」

大林は傷ついた足や腕を容赦なく振るう。

筋肉厚い窪井の全身を打つ。猛攻する。

己の苦しみ。 敵を殺す闘いに不必要なそれらの神経を遮断した今の大林は、まさに烈火の如き勢い。ヤケクソではなく、これが命を捨てた者の闘いなのだ。

「ぐっ！ 大林、てめえ……！ 正気か！？」

手刀が大林の首筋を強打する。

大林は止まらない。

「窪井、今までオレは迷っていた！」

強烈な膝が、大林の腹にめり込む。

血を吐きながらも、大林は止まらない。

「っ！！ お前を憎んでも、憎んでも、オレはお前を殺すべき敵だと認めることに、迷っていたっ！」

あばらが折れる。頭蓋にひびが入る。

意識が薄れながらも、それでも大林は止まらない。

「田島さんの、遺言どおり……、お前を許す覚悟もあつた！」

「……………！」

窪井の攻撃が止まる。

大林は止まらない。

「自分に死ぬ傷を負わせた張本人を許せなんて……、あの人らしい遺言だが……………」

「……………」

大林は止まらない。

「お前がその覚悟を消してくれた……………！ そしてオレは……………、お前を殺す覚悟を決めた！！」

大林の、ぼろぼろで血まみれの右拳が、雨で濡れた窪井の胸です

べり、横へそれる。

窪井は肘を叩き込み、その右腕にトドメを刺した。

「ったく、どいつもこいつも……」

窪井がうなる。

「バカしかないのか！」

胸部への一撃。重たい蹴りで大林は叩きつけられるように、背中から倒れた。

大林は止まった。

血を吐き、苦しげな荒い呼吸をしながら、毛ほども闘志を失っていない瞳を、ひたすら窪井に向け続けて。

まだ動こうと抵抗しているが、一度そがれた勢いはもう戻らない。

「……大林……、これは、殺し合いだったな？」

窪井は大林の顔の上で足を振り上げた。

「お前がオレを憎いというのなら、オレもお前に憎しみを持とう。

……二度目だな、死を受け入れたのは」

「……………」

「今度は、前のようにはいかんぞ」

「……………」

大林は意識が消え行くまで目を逸らさなかった。少しずつ、すべてが闇へ沈んでいく中、最後に聞こえていたのは、何重にもエコーのかかった声。

「あばよ。これでまた、オレは“高み”へ近づく」

痛みも何もなかった。

死んだのかどうなのかも、彼には理解できない。

ただ、冷たい雨に打たれ続けている。その感覚は残っていた。

まるで魂を地の底へ鎮めていく、天からの無数の刃のように。

## 42：血に濡れた日

何かがオレを染める。

オレを染めるのは、熱いしぶき。

オレを染めたしぶきは冷たくなつて、死の色に変わる。

また、しぶきがオレを染めた。

「田島さん……、オレはどうしたら……？」

気が付くとオレは、そこへ足を運んでいた。

オレの意思なのか、それとも何かに導かれていたのか……、ただ、オレの頭の中は黒く、黒く染まっているようだった。

「なっ……！ あ、あいつ、バケモノか！？」

「おい！ 早く頭かしらに知らせろ！ コイツはやバ　ぎゃああつ！

！！」

オレは斬った。

「何なんだ！？ 何なんだ！！？ まさかあいつ、田島の　う

ぎゃあつ！……！」

また、オレは斬った。

「うわああああ……！　ぐあつ……！」

何を斬った？

オレが斬った、人の形をした“物”は何だ？

オレはおたけびを上げる。

「うおおおおおおああ！！！！」

“これら”は田島さんと仲間のカタキだ！！！！

「オレは『田島弘之』幹部、大林鷹光だ！！ レッドキャップの頭領、アレモフ・キースを出せ！！！！」

オレは叫ぶ。

そのとき、後ろから誰かがナイフで斬りかかるが、わずかに斬られながらも、オレも剣を振ってそいつを斬り捨てる。

田島さんが殺された日から数週間、情報屋の知人から聞きだした情報をもとにレッドキャップの隠れ家を探し出し、オレは独りでそこへ乗り込んだ。 たった一本の剣を手に。

何度も斬られた、その度に斬り返した。 何人も何人も……。  
そのうち、一つのドアにたどり着く。

「ど、どうします、頭！？ あの大林とかいう男、正気じゃない！  
もうじきここへ」

「わめくんじゃねえ！！ んなやつ、てめえらでどうにかしやがれ  
！！ やつも不死身じゃねえんだ！！」

「しかしもう何人も」  
声のするドアを蹴り開け、そこにいたキースの手下を躊躇なく斬る。

「はあ……、はあ……。 見つけたぞ、キース」

オレは男に剣を向ける。

目の前はかすんでいた。だがここで倒れるわけにはいかない。返り血と自分の血で真っ赤に染まったオレを見て、キースは嘲笑する。

「お前が大林か。ククク……！ 何人殺した？ さすがにお前も死にかけてるな。どうだ、最後はオレ様に斬られて死ぬか？ ククククク……」

キースは剣を取って抜き、オレの剣と交差させて向ける。

「黙れよ……。オレはわざわざお前を殺しに来たんだぜ？ 大人しく命差し出せよ……」

「ククク、ふらふらじゃねえか。おいおい、ちゃんとオレ様が見えてるかい？」

「……はあ、はあ、ああ、すっかり見えてるぜ……。ところで、窪井の姿が見えないが……、まあいい、まずは、お前から、だ」

「クククク！ やめとけえ、お前にオレ様は斬れねえ。てめえも田島んとこへ送ってやるよ」

キースが剣を振り上げた。

オレは 動けなかった。

急に意識が遠のき、力が抜けていく。

「（こんなときに……）」  
キースは笑っていた。

あざ笑っていた。無謀なオレを……。

笑っていて、それが、

突然悲鳴に変わった。

「……………」

最後に見たのは、血を吹き倒れるキースの姿。

ああ、どうにか斬ることができた。そう思った。

さすがにオレもここまでだと、あきらめた。

「田島さん……」

でも、またあの人に会えるのなら、これでいい。

怒られるかもしれないが、それでもいい。

冷たい雨が身体を打つ。魂を地の底へ沈める無数の刃のよう  
に。

じわりじわりと沈められていく感覚が数分、数十分続いた頃、  
ふと声が聞こえた。誰かの声が。

魂を呼び戻す熱いしずくが降り注ぐ。

「……………」

大林の瞳に、微かな光が戻った。

視界はあやふやで、ゆいいつ鮮明に働いたのは聴覚。その耳が少  
年の声をはつきりと聞き取る。

「大林さん！……」

雨の中、ハルトキは泣いていた。

ぬかるむ地面に膝を埋めて。

無理もない。目の前で壊れかけているのは、彼が兄として慕って  
いる男だから。

「目を覚まして……！ お願いですから……！」



熱い涙を流して、必死に大林の名を叫び続ける。

それに答える、かすれた声。

「ハ……ル……」

「大林さん！」

見えない目でハルトキを探し、辛うじて動く左手をゆるゆると伸ばす。

あまりにも弱弱しく、頼りない大林の手を、ハルトキはギュッと握った。

これがあの大林だとは、信じられない。いや、今ここで死にかけているのが大林だとは、信じられるわけがない。死ぬわけがない、大林は最強の男だと、ハルトキは何度も心の中で繰り返す。口元を震わせながら、大林は言葉を絞り出す。

「ハル……、すまない……」

一言だった。

「大林さんっ……！」

そっと、ハルトキの肩に後ろからエンドーが手を乗せる。

「ヨツくん……」

涙を流しながら、すでに力のない大林の手を握り続けているハルトキに、エンドーは何の言葉もかけられなかった。

「どうすりゃいい……？　なあエンドー、ボクはどうすりゃいいんだ！？」

拳を地面に叩きつける。何度も、何度も。

「……………」

エンドーはとても苦い雨の匂いを、いっぱい吸い込んだ。

なぜこうなったのか、わからない。大林がハルトキを背負って本部へもどってきたのは、ほんの二時間前だ。その後、医務室の前で言葉を交わして、ほっと表情を緩めていた彼が、今ここで破れ

た人形のような姿で、動かない。

「オレ達は、無力だっ……！」

エンドーの頬にも涙が伝った。

力があつたつて、死にかけている人の一人も救えやしない。

目の前で命が消えてゆくのを見ていただけ。

そして、その命にすがって泣いている友に、励ましの言葉の一つも、かけてやれない。

感情のままに涙を流すことくらいしか……。

「（オレまで泣いてどうするんだ！ 今、オレがすっかりしなくてどうする！）」

涙を堪えようとまぶたを閉じたとき、エンドーは感じた。とっさに目を開く。

今、ここにはハルトキとエンドーの二人しかいない。だがエンドーが感じたそれは、誰かが誰かを呼ぶ声だった。

「（声を感じた？ 違う、これは……）」

魔力が、何かに共鳴したのだ。

わめき続けているハルトキは、共鳴に気付かなかったのだろう。

今は、エンドーも何も感じない。あの一瞬だけだ。

誰かが、誰かを、呼んでいた。

### 43：キノコ狩りへ（前書き）

今月は忙しく、更新がかなり遅れてしまったこと、お詫びいたします。

（あきらめませんよー）

### 43：キノコ狩りへ

時間は戻り、その日の早朝

マハエは宗萱に起こされ、寝癖でぼさぼさの頭をかきかき、部屋から出る。

眠っているハルトキとエンドーをちらりと見てからドアを閉め、宗萱に顔を向ける。

「……………何？」

「おはようございます、真栄さん。よく眠れましたか？」

「……………ああ、よく眠れたよ。……………できればあと五時間はほしいけど」

ぼそぼそと口を動かし、あくびをする。

「もう日の出の時刻ですよ。さっそくですが、任務です」  
口を大きく開いたまま、マハエはリリースする。

「……………にんむ？」

早朝からの任務とは、通常以上に乗り気のしない話だ。  
と言っても、マハエに拒否権はないのだが。

文句を言いながらも、従うほかはない。

顔を洗って宿の外へ出ると、S A A Pがバツクパツク（異様なほどパンパンに膨れている）を持って立っていた。そしてそれを差し出し、一言。

「お気をつけて」

「おきをつけて？」

何やら嫌な気配を感じつつも、それを受け取り、いざ出発。

の前にマハエは中身を確認してみる。

開くと、実にさまざまな物がムダな隙間なく詰め込まれていた。

ロープ、鉤爪ロープ、火付け道具、ランタン、油、非常食、救急箱、虫除けスプレー、……など。

「……………」

マハエは静かにバッグを閉じ、恐る恐る質問する。

「アナコンダ退治ですか……………」

「それくらい楽な任務だといいいのですけどね」  
さらりと言っ。

じつに清々しく命を危険を感じるマハエの、

「急に腹痛が……………」

を、無視して、宗萱はさくさくと出発していく。

いまさらだが、「こいつ何者だ？」という疑問を持ち出すマハエであった。

「……………ていうか、オレが荷物持ちですか」

重たいバッグを背負って、半ば引きずられるようにマハエも出発した。

港町を西へ出て、海沿いに進んでいく。

「どこへ向かっているのでしょうか？」

とても危険な仕事だということ以外、何も把握できていないマハエ。もつとも、バッグの中身からして、街へ繰り出そう！的な企画だとは思えない。

質問を変える。

「どこの“ジャングル”へ向かっているのでしょうか？」

宗萱は微笑む。

「ジャングルだなんて、まさか。それほど危険な場所だと思ったのですか？」

「ああ、すごく危険な場所だと思いましたよ」

なあんだ。とマハエも微笑む。

宗萱の何でもない言葉を過大視しすぎていたようだ、と胸をなでおろす。

「ジャングルではないですよ。我々が向かっているのは、“ものすごく危険な”ただの森です」  
「……………」

二人は微笑んでいた。

もう何も訊かないことにしよう。と、マハエは心に誓った。

「ただの森だもんな」

「ただの森ですよ」

ものすごく危険なマツタケを探しに行くと思えば少しは気が楽にはなる。

問題はそのマツタケが人食いキノコか猛毒キノコか、という点。つまりこの任務というのが、モンスターに関連することか、窪井の得体の知れないウイルスや化学薬品に関連するものなのか。

冗談はさておき、と宗萱は真面目に説明を始める。

「軍からシラタチ本部に要請があったのです。最近、この先の『ゾンマ』という町で、行方不明者が続出して、その搜索を任せたいと。どうやら付近にある森へ入ったきり戻ってこないそうで、その搜索に当たった住民も、次々と」

「それで、モンスター絡みの可能性があるから、『シラタチ』にその任務が回ってきたと」

「あくまで可能性ですが、やはりそう考えたほうが納得はいくでしょう」

「……………そうだな」

血生臭い任務になることは覚悟しなければならぬらしい。

行方不明者が何人居ようと、マハエは自分や仲間の命の心配だけで精一杯だった。

「頼りにしていますよ、真栄さん」

宗萱が笑いかける。心からの笑みだ。

「おう、任せとけ！」

……としか言いようがなかった。

それから五分ほど歩き、マハエは目の前に現れた建造物を見上げて「うはあ〜」と思わず息を吐く。

崖のような高い高い石垣の上に、高い高い塔のような建物。石垣を登る長い階段の先には朱塗りの大きな門があり、その片方は開け放たれている。

「何ですか、ここは？」

「ここは『グロス・トーア寺院』と言って、このフーレンツでもっとも大きなお寺です」

「寺って、何を信仰してんの、この世界の人々は？」

「もちろん、創造神『ペオーラ』ですよ」

「ああー」

「もともと、守民軍自体が宗教の本山のようなものですので、この寺院も軍の管理下にあります。ですが、一般開放されているので、誰でも自由に出入することができます」

そう言うと、宗萱は階段を登り始める。

「え、寺行くの？ 無事に帰還できるようにお祈りでも？ あ、オレ拜んでおこう。ペオーラさんには世話になってる、と思うし」  
後に続くマハエ。

「わたしも始めて訪れますが、ここはとても眺めが良いそうです」  
「だろうね。お年寄りにはきつい道のりだ。この階段を、野球部や陸上部がうさぎ跳びで往復するんだらう」

「真栄さんもウォーミングアップにどうですか？」

「いや。絶対に転げ落ちる」

急な階段をやつとこさ、と登り、門をくぐると、想像以上に広い敷地が目に入る。

下から見ていた高い建物と、その横にも巨大な建物が。高いほうはどうやら入場禁止らしく、扉は嚴重に鎖で封鎖されている。巨大な建物は人々が入り込んでおり、そちらが主要らしい。

「大聖堂です。瓦屋根で一見和風ですが、内部は教会と似ているようです」

「へえ。なんか、ややこしい」

「この寺院が建てられたのは、およそ二百年前。『永遠の生命』による助言のもとに軍が建築した、と記述にあります」

「永遠の生命？ それも宗教の一部か」

「さて、行きますよ」

大聖堂の横を素通りして、反対側にもう一つある出入口へと足を進める宗萱。

「え、何しに来たん？」

マハエはわけがわからぬまま、マイペースな宗萱の後を追う。

「わたしたちは任務で来たのですよ。寄り道をしている場合ではありません」

「……それじゃ、何のためにここまで登って？ 下に迂回する道があつたじゃないですか」

「言つたでしょう、ここは眺めが良いと。 あれを見てください」

あごで示し、マハエの視線を導く。

この寺院からあと十分ほど歩く距離の場所に、小さな町が見える。宗萱が示すのはその町に隣接した広い森。そこが行方不明者の続出する現場らしい。

「……これは想像以上に困難な任務になるかもしれませんね……」



宗萱がつぶやいた。

マハエには理解できなかったが、宗萱が何を見てそう言ったのかはわかった。

森の奥のほう　季節は夏で木々には緑の葉が茂っているが、まるで“その部分”だけ、時間が混乱しているかのように、枯れ果てた木々の群れが円形に広がっていた。

「UFOの着陸跡？」

「現時点では何も断定できませんが、とりあえず様子はわかりました。あちらで軍の方が待っているはずです」

とうとう宇宙人まで絡んできやがったか。と、さらに気が重くなるマハエであった。

「……そういえば前にエンドーもそんなこと言っていたな。大正解かもな」

「何か言いましたか？」

「……オレの魔力でレーザー銃に対抗できるかな？」

「……？」

『ゾンマ』の町を通り、目的の森へ到着すると、そこで独り待っていた軍人とおぼしき鎧姿の人物が二人に頭を下げた。

「軍の者です。あなたはシラタチの方ですね」

二人も頭を下げる。

「どのような状況ですか？」

宗萱が訊く。

「はい。こちらに報告されている行方不明者は九人。いずれも『ゾンマ』の人々です」

「軍の方も中へ？」

「いえ、すべてシラタチに任せるよう、上から指示が出ているので」

「ということは、内部の状況はいつさい分からない状態ということですね」

『毒蛇注意!』という看板が立てられている入り口から、暗い森の中を覗き込む。

何かが妙だ。と、マハエも宗萱も感じた。

青々と元気な木々が茂っていて、寺から眺めたような枯れ木群は見取れないが、まるで森全体が死んでいるような、とても異様な雰囲気漂っている。

「この森はキノコや山菜が豊富で、人が通るようかなり奥まで道が続いています。なので迷うことはないと思いますが」

「わかりました。あなたも我々と同行を？」

「い、いえ、わたしはここで見張りを。調査はすべてあなた方に任せるように言われていますので」

「そうですか」

「で、では、お気をつけて」

不安げな顔の軍人に見送られながら、二人は森へ踏み込む。マハエのテンションは、ガクツとマイナスへ下がった。

「何なんだよ、人任せにしてー」

戦いに属しているはずの軍人、彼の頼りない態度に対してマハエのブーイングはもつともだ。

「無理ありませんよ。先のモンスター騒動で、彼らの仲間にも死人が出ているのですから」

「にしても、非協力的すぎじゃないの」

マハエは「はあ」とため息をつく。

と言ったところでどうしようもない。二人だけでこの任務を片付けるしかないのだ。

「二人だけで、か……。宗萱さん、オレがはぐれないように十分注意してね？」

マハエは宗萱の服のすそを掴む。

すでに気付いている　巨大な何かに“呑み込まれていく”感

覚が、じわりじわりと濃くなっていくのだった。

#### 44：魔の森

この先に何が待っている？

その疑問がマハエの胸に不安を残す。

マハエと宗萱が踏み込んだこの森は、とても山菜やキノコ狩りに出かける気になれるような場所ではない。

不安や恐怖を感じるのは、この先にほぼ間違いなく危険が待ち受けていることを知っているから、というだけではなく。

森という場所は本来、生命にあふれた場所であるが、この森には虫の声も、鳥の声も、小動物の気配も感じられない。

「不気味だな……。自然の中が楽しくないと思うのは初めてだ」

マハエは落ち着きなくキョロキョロしている。

「魔力の働きはさまざまな感覚を研ぎ澄ましますからね。ですが注意してください。心をいつも平常に保っていないければなりません。

戦場ではいつも冷静に」

「……冷酷に？」

「冷静にです」

入り口の見張りをしている軍人が言っていたとおり、頻繁に人が出入しているようで、踏み固められた道が続いている。

途中、一人通るほどの狭いトンネルに入る。

何の補強もされていない頼りないトンネルだ。ランタンの明かりに照らされた壁にはびっしりと木の根が這い、足元までこぼこしている。

「このトンネルを抜けなければ森の奥へは進めません。ということ  
は、全員がここを通り抜けているはずです」

「引き返そうと思えば道をたどって簡単に森を出られる……。この  
トンネルが崩れたって言うなら話は別だけど、通常は迷うことない  
よな」

「そうですね。となれば行方不明者達はどこかで身動きできない状況にあるか、すでに亡くなっているか」

「うん、冷静だ……」

しかし搜索に当たる以上、後者の可能性は考えてはならない。

この任務の第一は、遺体の搜索でも原因の特定でもなく生存者の搜索なのだから。

トンネルを抜けても、そこはまだ何の変哲もないただの森だった。

いや、それは一見で、マハ工達の間接からすれば“生命の感じられない森”が更に深刻になった場所だ。

そこには生命どころか、風の通り道すら存在しないようで、その不気味さに悪寒さえ覚えるほど。

それだけではない。

「……何かさ、三百六十度に視線を感じるんだけど。気のせい？」

「いえ、わたしも感じますよ。しかし視線というよりは、何かに狙われている感じです」

「やっぱり、モンスターかな？」

ゴクリとつばを呑んで、短剣を抜く。

「お腹をすかせたオオカミの群れかもしれませんよ」

宗萱は「ふふっ」と笑いながら刀に手をそえる。

「あなたの冗談は毎回、オレの心臓をハンパなく握りつぶしてくれるねえ」

「オオカミのほうかマシでしょう」

「いや、微妙だ」

そのとき、背後の草むらがガサリと動いた。

二人は（マハ工はビクリと）その方向に武器を構える。すると、白くて小さな影が一つ飛び出した。

「……ウサギさんかあ」

マハエは安心する。一応生き物が存在していたことに。ウサギは二人を一瞥すると、逃げるように跳ねていった。

ガサリ。

今度は反対側の草むらが動いた。

そちらを向いた二人の目の前に、黒くて大きな影が一つ飛び出した。

「ぐがるる……」

と、とても可愛らしい声を発する大きな影。

「なんだ、クマさんかあ」

マハエは安心

「……………」

大きな影は鋭い眼をむいて二人を見ている。

「……クマに“さん”という表現は間違っていると思う」

立ち上がると三メートル近くある巨体、体重数百キロのケモノは、ランク上位のモンスターに匹敵する。

マハエは逃げの構え。宗萱は戦闘態勢。

だがクマには二人を襲うという気はないらしい。 というよりも、異常なほど、何かにおびえているようで、よく見ると全身傷だらけ。

何かから必死に逃げてきたような。

それゆえ、目の前に現れた小さな人影など一瞬の警戒の後には気にも留めない。二人のそばを横切り、逃げていく。

「何におびえてるんだ？」

マハエは逃げ去っていくクマから目を離さなかったが、宗萱は違う。彼は逃げていくケモノよりも、そのケモノが飛び出した草むら

の奥を凝視している。

「 来ます！」

宗萱が素早く刀に魔力を込める。

「 え、何が？」

と口にしつつ振り向くマハエを、宗萱が押し飛ばす。

「 ???？」

わけもわからず地面を転がったマハエの目の前 彼らが立っていた場所の地面が、数本の線でボコボコと盛り上がって、まるで地面の下を複数の蛇が這っているかのように、クネクネと高速で“何か”が移動している。

その先には逃げていくクマの姿。

接近する気配にクマが振り向いたその瞬間、地面からその“何か”が姿を現す。

土を舞い上げいくつも現れたそれは、長細い触手のよう。

その触手は、クマの身体を縛るように巻きつき、巨体を持ち上げた。

「……………」

マハエも宗萱も言葉を失い、悲鳴を上げるクマと、それを高々と揚げて地面に叩きつける恐ろしい触手の脅威を、見開いたその眼に映していた。

蛇ではないのは明らかで。「何か？」と訊かれても、それに該当する生物など存在しない。

全体的に黒茶色で、うろこや表皮ではなく、頭もない。何かの“触手”だという考えにいたるわけだが、そんな分析は後回しにしたほうがよさそうだ。

思い出す。

先ほど感じていた、何かに狙われているような視線を。

次はこちらに来る！

先ほどと同じように、地面の下を這って触手が二人を狙う。

地面から出現した触手を、巻きつかれる寸前で飛んでかわし、二人は攻撃に移る。

魔力を帯びた宗萱の刀が、伸びてくる触手を一瞬で切断。マハエの『壊波槍』に巻きついた触手が、槍から放たれた衝撃波で弾け散った。

しかし、それで終わらない。二人を捕獲すべく、次々と触手が現れる。

「真栄さん、ここはいったん引きましょー！」

「ああ！　って……！？」

二人は背中合わせで立ちつくす。

すでに囲まれていた。地面から突き出た触手に包囲されていた。

「くそ……」

斬り進むしかない。しかし逃げ切れるのか……。

そのとき、どこからか人の声が飛んできた。

「こっちだ！」

二つの火の玉が触手に突き刺さる　　火に包まれた投げナイフだ。

熱に驚いてか、触手が暴れながら引っ込んだ。おかげで包囲を抜けた二人の前で、一人の男が松明を振っている。

グリーンの服に黒のジャケット。グリーンのズボンに黒のブーツ。



一般人らしからぬ服装ではあるが、それはさておき、どうやら助け舟らしい男のもとへ二人は走る。

男は腰のナイフ入れから布を巻いた投げナイフを取り出すと、松明の炎で火を付ける。布に油がしみ込ませてあるらしく、すぐに引火し、すかさず“ファイアナイフ”を、追ってくる触手へ投げ放った。

ナイフは一直線、正確に目標に突き刺さり、動きを阻止する。

「走れ！」

男が片手を振る。マハエと宗萱は男の後を走った。

三人が逃げ延びて来たそこは、森の中でも少し開けた場所であつた。案内した男が設置したらしいテントが一つと、その前では夏だといふのに焚き火の炎がパチパチと燃えていた。

「……助かりました。ありがとうございます」

全力疾走の息を整えて、宗萱とマハエが頭を下げる。

「いや、よかった。人の悲鳴が聞こえたから間に合わないと思つたよ」

「それはたぶん、クマの悲鳴かと」

「ん？ そうか。いやしかし、救出できてよかった」

男は笑つて、松明の火を消すと焚き火を正面にあぐらをかいて座つた。

二十代前半。歳はそんなところだが、ほんの一分前の状況で現在の冷静さは、若さに相応するものではない。

「……いや、生き残るかどうかはこれからだ」

男がつばやく。焚き火を前に、鮮やかな茶髪を暑そうにかき上げて。

「……………」

異様な空気と熱気でマハエは近づけない。

「おいおい、もつと火に近づいたほうがいい。“捕食”されるぞ」「え?」

「やつは動物の体温を感知して獲物を襲うらしい。だが、やつの弱点は火だ。強い熱には近づかない」

「……やつ、とは? あなたはあの“触手”の正体を知っているのですか?」

宗萱の質問に男は微笑する。

「あれは触手じゃない。……“根”だ」

「根? 根つこのこと?」

男はうなずく。宗萱も何か確信を得たように数度頷いていた。

男も感じたのだらう、この二人の落ち着いた雰囲気から、只者ならざる気配を。

「あんだ達、『シラタチ』か?」

その言葉に驚かされたのはシラタチの二人だ。

「そうですね、なぜそれを?」

「オレは軍人なんだ。特殊部隊『イチリン』のチーム『ウルフ』、副隊長の『青葉シマ』<sup>アオバ</sup>。よろしくな」

「特殊部隊『イチリン』……。たしか、軍のエリート部隊でしたね。その副隊長がなぜこの森へ? 軍はこの件に手を出さないはずでは?」

男 アオバは立ち上がる。

「個人的な事情だ。それよりあんだ達、いつこの森に入った?」

「つい先ほどですが」

「もしかして、トンネルから?」

二人がうなずくと、アオバは表情を固くして言う。

「来てくれ」

人数分の松明に火をつけ、それを一本ずつ持たせて先に歩き出す。

「どうしたんですか？」

マハエが訊くが、アオバは「いいから」と一言だけ。

それ以上は何も訊かなかったが、マハエの中では一つの疑問から、ある不安がにじみ出てきていた。

なぜアオバはこの森がとても危険な場所だと悟った時点で、森から出て応援を呼ぶということをしなかったのだろうか。

数分後、まさに、その疑問の答えとなる光景が彼らの目の前に現れる。

アオバが案内したのは、二人が抜けてきたトンネルの前だった。マハエはあ然とし、宗萱は「やはり」と言うようにため息をついた。

トンネルの中には、まるで無理矢理詰め込まれたようにびっしりと木の根が　ゆいいつの出入口が完全に塞がっていた。

「……えーと、つまり？」

「完全に閉じ込められた、ということですよ。この“魔の森”に」

「……そう、だね」

苦々しく言うマハエには、ため息をつく余裕もなかった。

## 45：パルテラの枯れ山

「こんな話を、子供の頃に聞かされたことがある。ただの童話だ、と昔は思っていた」

トンネルからテントへ戻る途中、アオバが話を始める。

「とある賑やかな山のでっぺんに、高い高い木がありました。木は強欲で、友達の草木や動物たちの話し声もそっちのけで、空のまた上を見上げては、枝葉を伸ばすばかり。来る日も、来る日も。そのうち木は何よりも高く空へ近づきましたが、空はまだまだ見上げる先。ある日、ふと、木は足元を見下ろしました。いつの間にか静かになっていった足元を。そしてようやく気付きます。周りの木々は朽ち、生命が消えて山が枯れ果てていることに。木は独りぼつちになっていました」

「……………」

たしかに童話だ。とマハエは思う。だがそれを話した彼が何を言いたいのかはわかった。

「『パルテラの枯れ山』、ですね」

宗萱が言う。

「そうそう、そんなタイトルだった。よく知ってるな」

「モンスターに関連する童話の一つです。かつてモンスターとは、五百年前の大きな戦いで、魔物から飛び散った魔力のかけらから発生していたと言われていました。さまざまな形のモンスターがはびこっていたと。その中でもっとも危険なモンスターとされていたのが、その童話に出てきた“木”、『パルテラ』。正式には『ヴァルテュラ』と言います。『ヴァルテュラの魔木』と言えば歴史的にも有名なモンスターです」

「魔木……。アオバさんが話した童話は、そのモンスターがもとに

なっていたのか」

「ヴァルテュラは、戦後百五十年、人々を苦しめました。まれにですが、森や山、木々が密集する場所に発生しては地中からだけではなく、自在に動く根で動物や、ときには人をも捕食し、養分を吸収する。その暴食さは木々を枯らし、一つの山が丸ごと枯れ果てたという記述もあります。人々がヴァルテュラに対抗する手段は、人海戦術か、焼き討ち。最悪、山や森を丸ごと焼き払った例も」

「丸ごと……！」

マハエはゾツとした。たかがモンスター一体に、という話ではない。そこまで危険なモンスターだということだ。そのモンスターが

「この森にいるってことか？ その、ヴァルテュラの魔木が」

宗萱は肩をすくめる。

「断定はできません。しかし、この森にひそむものがモンスターというのは明らか。しかも、とても凶暴な。ヴァルテュラかどうかとはこの際どうでもいいことですよ」

「ああ……。危険度は変わらない……」

マハエは肩を落とす（思いつきり）。

「だが、なぜまた急にモンスターが現れ始めた？ モンスターは二百年前に殲滅したと軍の歴史資料にはあった。なぜ二百年も経った時代に、再び？」

「……………」

「『シラタチ』のあんたらなら何か知っているんじゃないか？」そんな目を二人に向けるアオバ。

だが宗萱は、

「……………我々にも、それはわかりません」

アオバは拳を握った。

「オレの父は、オレと同じ軍人だった。以前のモンスター騒動で、父は襲われている子供を助けるために、撤退命令を無視して飛び出し、死んだ。バカな、正義感のかたまりだった」

力なく笑う。口から漏れる息には悔しさがにじんでいた。

「今のオレも、親父と同じか……」

聞こえないような小さな声でつぶやいた。

一度テントにもどった三人。

アオバは自分のバックパックを背負うと、

「あんた達も戦闘に関してはプロだろ？ それなら、ここからは別行動といこう。オレはオレの目的を果たす」

「待つてくださいアオバさん。我々の任務は行方不明者の搜索と保護です。あなたの保護も、任務の一つです」

「あいにく、オレはそのリストに入っていない。軍にも黙ってここへ来たんだ」

「ですが」

「シラタチ！」

アオバはまっすぐに宗萱の目を見据える。

「……生きてここを出よう」

去っていくアオバを二人は追わなかった。

彼の中にある強い意志は揺るがない。何の目的で、軍の命令を無視してまでここへ来たのかはわからないが、それほどの理由があるわけで、それを邪魔するわけにはいかない。

アオバは前日の昼にここへ侵入したと言っていた。約一日、この危険な森で生き延びた彼に余計な心配は無用だという判断もある。

それに『シラタチ』にとっても、別行動という選択はありがたい。

心置きなく魔力を使って戦うことができるのだから。

「わたし達も行きましょう。まずは生存者の捜索が優先です」

「ああ。火を持ってればとりあえずは安心か。絶やさないようにならないとな」

頼みの綱である松明をしっかりと握り、二人はアオバとは別の道へ歩き始めた。

「なあ宗萱、この森にいるモンスターも、デンテールと関係あるんだろうな？ あのモンスター騒動の生き残り、だよな？」

「どうでしょうね？ そうだとしても、デンテールは関係ないと思います。グラソンの話では、モンスターとデンテールは無関係。突如城の周辺に現れたモンスターを利用しただけだと」

「デンテールじゃない？ それなら、どうして突然モンスターなんか……」

「それは、グラソンも知りません」

「モンスターをよみがえらせたのは、デンテールじゃない……？」

何にしても、モンスター関連の任務はこれ限りにしてほしいと、願わずにはいられないマハエであった。

「それで、オレ達はどこへ向かってんの？」

「寺院から眺めた枯れ木群      その中心に、モンスターがいるはずです」

「なるほどね。敵がヴァルテュラだとして、勝算は？」

「状況次第ですね」

「あ、そう……」

マハエは無性に、逆走したくなった。

「この松明のおかげでしょうか、殺気を感じますが襲ってくる気配はありません」

周囲に目を配りながら宗萱が言う。

「やっぱり狙われてるのか。どうする？」

「進みましょう。襲ってくれば斬り進むだけです」

「やっぱり……」

いつでも『壊波槍』を発動できるよう、マハ工は短剣を右手に持つ。

そのとき、前方で何かが揺れた。

木の陰からふらふらと現れた人影。生存者だ。

二人はすぐさま駆け寄る。

しかし、妙なことに気付き、立ち止まった。

「……っ！？ 何だ!？」

人影がゆるりと動く。

違う、人ではない。

形こそ人ではある。だがそれだけ。

その“物体”は、まるつきり

“木の根”。それも人の形をした塊。人の姿を成した、血のように真っ赤なモンスターの根だ。

「そんな……」

塊の左腕の部分が動いた。人のそれとはかけ離れた異様な動きで振り上げられ、振り下ろすと同時にバキバキと音を立てて伸び、二人を襲う。

宗萱がかわし、それを断ち切ると、断たれた部分は地面に落ちて動きを止めた。



「何てこと……！ 木の根が人の形を成すとは、このモンスターは  
かなり」

「右腕が宗萱を襲う。」

「それも断ち切ると、マハエが飛び込む。発動させた『壊波槍』を  
右手で握り、松明も手離さない。」

「頭から伸びてくる複数の根を槍で防ぎ、塊の腹部を凝縮波で蹴り  
飛ばすと、人の形をした塊はバラバラと散らばった。」

「倒したか」

「破片は普通の木片のように動き出すことはない。」

「よく見てもそれが化け物の破片とは思えない。動いて襲って  
くる木とは 三百六十度が木に囲まれた空間ではその存在を目  
視することは困難だ。」

「……つーか今のヤツ、火を恐れてなかった」

「思い出してください、今のヒトガタは自身で直立し、歩行してい  
ました。おそらくは、本体と繋がっていないのでしょうか」

「本体と分離した固体？」

「とにかく大変なことです。ケモノ並みの知能だと思っていました  
が、とんでもない。トンネルを塞ぎ、わたし達をこの森へ閉じ込め、  
人の姿を真似て人に対抗するとは……」

「彼らがこれまで遭遇したモンスターの中で、もつとも いや、  
それらとは比べ物にならないほど高い知能を持っている。」

「マハエは考える。そのモンスターを倒すまで生きていられるだろ  
うかと。いや、倒さなければならぬのだ。これほどのモンスター  
を野放ししておくわけにはいかない。」

「急ごう」

「マハエは歩き出す。」

「やる気が出てきましたか？」

「恐れてばかりじゃ、戦えない、よね」

それを聞いて宗萱は微笑む。

「シラタチらしくなりましたね」

「どういう意味？」

「真栄さんって、ときどき本当に頼りになります」

「……どういう意味？」

#### 46：勳は本能の羅針盤

マハエと宗萱は森の奥へ奥へと進んでいく。

ランタン油で松明の炎を維持しながら。 そのおかげで“根”の襲撃はまぬがれているものの、一時間歩いてもまだ枯れ木群は見えてこない。

だがその場所は確実に近づいていることを二人は感じる。強まる殺気と、死の世界のような沈黙の“気配”を。

この先の森は、すべての生命が吸い尽くされているのだろう。

完全にモンスターの領地。そんな中で戦わなければならないのだ。モンスターが『ヴァルテュラ』でないとしても、昔の人がこんな状態の森を丸ごと焼き払った気持ちも理解できる。

「オレから離れないでね？ くれぐれも」

「心配しなくても大丈夫ですよ。あなたなら独りでも」

「あ、小さな励まし……」

まだ余裕はあるらしいが、数秒後、その余裕も消え去る。

「……宗萱さん、これは？」

マハエは地面を見下ろす。

「白骨死体です」

すぐさま答える宗萱。

道の真ん中で、根に絡まれた人の骨。松明の炎を近づけると、根はスルスルと地中へもどつていった。

「この遺体は成人男性ですね。行方不明者の一人でしょう」

「人って、そんな簡単に白骨化するの？ 道の真ん中で」

「これが、この森に巣くうモンスターの脅威です。最後には骨も残

りませんよ」

「……他の行方不明者達も……」

「……」

宗萱は無言でその場から足を進める。

「残りは八人です。“救出”しますよ」

「……ああ、そうだったな」

人の死を目の前にしても、まだ一握りでも冷静さが残っていたことに、マハエは感謝した。

深呼吸をすると、心は平常にもどった。この世界の、戦いの空気に慣れてきている自分に気付く。

「（それとも、このパートナーに感化されたかな？）」

どちらにしても、彼にとって悪影響ではない。……好影響とも言えないが。

さらに数十分、歩き続けた二人。

途中の急な坂道を登り終え、一息つく。

「枯れ木群はこの先でしょう」

おそらく人が踏み固めたであろう道はここで終わり、そこからは代わって、新しくこじ開けられたような道が続いていた。

なぎ倒された木々と、大きく直線にえぐれた地面。

そんな道がまっすぐ薄闇へ伸びて、闇の奥から二人の顔面に死臭が吐き出される。

「誘っていますね、獲物を」

「悲しいよね。その誘いに乗るしかないなんて」

「いえ、真栄さん。我々は獲物ではありません。ハンターですよ」

宗萱は微笑む。つられてマハエも微笑んだ。

あと少しだ。とマハエはやる気を絞り出す。

こじ開けられた道に踏み入る前に二人は周囲を確認する。

二人が通ってきた道に異常はなく、火を恐れないヒトガタの気配

もない。背後は崖で、モンスターは存在しようがない。

「よし」と前へ振り返った二人には、ほんの瞬間だけスキができていた。

闇の奥から勢いよく伸びてくる“触手根”に気付いたときには、それを避ける余裕はなく、松明を弾き落とされて身体を絡め取られた。

先に宗萱が捕獲され、マハエにもその根が伸びる。しかし寸前に宗萱が彼を蹴飛ばしたため、根はマハエを捕らえ損ね、脱したマハエは後ろに跳んで追撃から逃れる。

「うわっ!?!」

だが背後の崖をわすれていた。

足を滑らせたマハエは、悲鳴を上げながら七メートルある崖下へ転げ落ちた。

「……………痛つてええええなチクショーツ!!」

数回バウンドしながら転がり、地面で最後一度跳ね、全身打撲。悪態を吐いた後、沈黙した。

数分後、ゆっくりと起き上がった彼の体に傷は一つも見当たらない。

「……………傷は癒えたけど、寿命は縮んだな」

マハエは崖を見上げる。

……………音はない。

自分の身を引き換えにして彼を救った宗萱の声も聞こえない。

すぐに助けに行こうと崖を登り始めるが、あいにくロッククライミングのスキルなど持っていないマハエに、急な崖を乗り越える力はない。

とにかくすぐにも助けなければ  
マハエは道の真ん中で白骨化していた死体を思い出して焦った。

「オレが助けるまで死ぬなよ!!」

聞こえているのかわからないが、崖の上のパートナーに向かって  
叫ぶと、すぐにマハエは走った。

松明はどこかに無くしてしまったが、幸い、荷物の入ったバック  
パックはマハエが持っている。

宗萱を捕らえた触手根は炎にも臆さず向かってきた。という  
ことはヒトガタのように本体とは分離した存在だということだろう。  
彼を助けにもどるまでに炎以外のモンスター対策も考えておかな  
ければならない。

そんなことよりも今の状況だ。このまま炎なしで根から逃れ  
続ける自信はない。

走りながらバックパックをあさり、使えそうな物を探す。松明の  
代わりになる物が何かないか。

火付け道具や油だけでは役に立たない。ランタンの小さな炎では  
モンスター対策としてはあまりにも力不足だ。

「(非常食 腹は減ったけど、食べている場合じゃない! 救  
急箱 かさばるだけだ! 唐草の大きな風呂敷 ……何に  
使えと?)」

パンパンに膨らんだバックパックに、今すぐ役に立つ物は一つも  
ない。

「だああああああ！！！！」

とりあえずマハエは走った。

同時刻、どこからかこだまする少年の絶叫に振り向く人物がいた。

木の陰を音もなく移動しながら、反響する声に耳を澄ます男。それからそっと背中の中の弓に手を伸ばし、構え、弓を引く。

バシユッ！ と放たれた矢が、道をうろつくヒトガタの頭部を射抜いた。

「……厄介な代物だ」

男の眼がギラリと鋭く光った。とても冷たく、まるで感情のない眼だ。

倒れたヒトガタが動かないことを確かめて、腰の矢筒から一本矢を抜く。

そして歩く向きを変え、歩調を速める。

聞こえた声の方向へ

マハエは落ち着いた。

松明にピツタリの太い枝を見つけ、それに救急箱の包帯を巻いて簡単な松明を完成させた。

「やれやれ、どうなることかと思った」

油をかけて着火すると、とても心強く炎が燃え上がる。

しかしもたもたしては、せつかくの松明もただの焦げた棒と化す。

まずは宗萱と通った道を探さなくてはならない。

「……………」

のだが…………。

「ここはどこだー??？」

迷子。

走っているうちに方向もわからなくなり、どう走ってきたのかさえも忘れた。

完全なる迷子だ。

一見万端に思える持ち物の中に『コンパス』という気の利いた（というより、もっとも必要と思われる）アイテムは入っていないかった。

そんな状況下で、あまり時間もかけられない。立ち止まったままでは危険。どうやって進むか？

このとき、平静を装った彼のパニック寸前の脳みそは、すばらしい一つの方法を

「勘で行こう！」

はじき出した。

が、馬鹿だったとマハエはつくづく思う。

勘で進むのはまだいいとして、バックパックの中の『鉤爪付きロープ』というアイテムの使い道を思い出して目眩を覚えた。

これを使えば、あの崖くらいがんばって登れたかもしれない。

後の祭りだ。



いつでも冷静さを失わないようにと、あれほど宗萱が言っていたのに、とマハエは自分の頭を叩く。

「（んなこと言ったって、オレは完璧な人間ではない）」

数ヶ月前まで普通の高校生、だったのだ。

「（とは言っても、この場に頼れる人なんてオレしかないじゃん！）」

普通と違うところは、モンスターのようには恐ろしく、たくましい“おっさん”を育ての親に持っているという点。

「（園長ならどう切り抜けるか。……たぶんオレが百年修行を積んでも修得できないくらいに離れ業で突き進むんだろうな……。こんな森、五分でクリアーだ）」

どうでもいい。

マハエも戦いに関して素人ではないが、前回の戦いでは基本的に誰かのサポートがあつてピンチを切り抜けた。独りで行動し、自分の判断に自分の命を預けなければならぬ状況には慣れていない。しかも今回は仲間の命もかかっている。

「がんばれよ、オレ！」

両手で頬を叩き、マハエは再び走り始めた。

勘で。

## 47：クールな心

勘に任せて森を進むマハ工は、近くで水の揺れる音を耳にし、その場所を探した。

宗萱の救出を急がなければならぬことを忘れていたわけではない。マハ工は宗萱と坂道を歩いているとき、下のほうに沼を見かけたのをおぼえていた。

「あつた……」

自分の勘はそれほど間違つてはいなかったと、安心する。

歪んだひょうたんのような沼は、さほど広くはないが、進むべき道は沼の向こうにあつた。

沼の片側は木が密集していて、もう片側は地面が高く盛り上がっている。その上を歩けば向こうへ渡れそうだ。

木の密集地帯を歩きたくないマハ工は、盛り上がった地面の上を行くことに決め、バックパックから鉤爪ロープを取り出した。

ロープを振り回して、鉤爪を頭上の木の太い枝へ投げ放つ。

一発でロープは枝に固定された。

さつそく松明を口にくわえて、ロープをよじ登る。

バックパックの重量もあり、疲れは三割増だが、休憩時間はない。魔力のおかげで多少は疲労も軽減されるのだが、精神的に叩かれる部分もあり、少しずつ芯に溜まっていく疲労は確実にマハ工を弱らせる。

登りきり、深呼吸をして沼を見下ろした。

濁った水面には朽木や水草が浮いている。それからプカプカと、黒い岩が一つ二つ……。

「ん？ 岩がプカプカ？」

岩が水に浮いて漂うわけがない。  
目を凝らしてみると、ごつごつした岩はある生き物の背中だと気が付く。

「あら、ワニがいるわ」

マハエは「あははー」と苦笑う。

「ん？ でも何でワニは生き残って」

ガサガサ。

近くの草が動いた。

「何だ？」

とつさに松明を向けるが、音は一箇所ではない。

「まさか……」

右から左から、マハエの周りに茂っている草が、“そいつら”の接近を知らせる。

「やばっ」

ヒトガタだ。

しかも相当な数。

松明を左手、短剣を右手に、『壊波槍』を発動させる。

『常に冷静に』

宗萱の言葉を思い出し、マハエは焦らず槍を構えたまま敵の動きを見る。

すべてを相手にしているヒマはない。最小限の戦闘で突破。実際、

何体か倒さなければ先へは進めない。

必要な撃退数は三体。　うち一体はすぐ近くまで接近している。　敵の攻撃範囲は広い。

「……よし」

一度まばたきをする。

目標以外のヒトガタが触手根を伸ばして攻撃してくるのを見た刹那、マハエは地面を蹴る。

一歩目で近くの目標を槍の衝撃で破壊。

二歩目は凝縮波で跳び、少し離れた二体目を蹴り飛ばす。

三歩目は姿勢を落とし、槍を横に振る。波打った刃に魔力を集中させると衝撃が小さな振動を生み、固い根の塊も、たやすく切断する。

包囲を突破した。

しかし、

マハエは地面に倒れ、手離された槍が転がり短剣の姿にもどる。地中から突き出した真っ赤な触手根が、彼の足を捕らえていた。

「くそっ！」

ヒトガタが地中に根を忍ばせていたのだ。

必死に短剣へ手を伸ばすが、届かない。

そうしているうちに、周りのヒトガタもよたよたと近づいてくる。

「クールに、クールに……。落ち着け……。」

呼吸が荒くならないように気をつけながら、冷静さを保つ。

地中に根を忍ばせているのはどの敵か。探す。

冷静に。

一番近づいたヒトガタが、両腕を振り上げてマハエにトドメの体勢をとる。

「（見つけた！）」

一体だけ、動かないやつがいる。そいつめがけて、マハエは片足で『衝撃砲』を放った。

魔力のこもった蹴りにより、衝撃の加わった空気が振動、衝撃の塊が飛ぶ。

衝撃がぶち当たったヒトガタは、吹っ飛んで転がった。

足を縛る触手根も解け、マハエは目の前で両腕を振り下ろさんとしているヒトガタを両足で蹴り飛ばす。

すぐに起き上がって短剣を拾い、再び『壊波槍』を発動させた。

「来い。何体でもたたき斬ってやる！」

その言葉に答えるかのように、茂みの中から、木の陰から、続々とヒトガタが現れる。

「……やっぱり一体ずつにしません？」

どこから湧いてくるのか、これではキリがない。

さすがにマズイ。そう思ったとき、

「沼に飛び込め！」

男の声が聞こえた。

同時に、目の前の地面に何かが転がる。

「え？」

それは細長い筒で、導火線が伸びていて、火花がジリジリとジリ

ジリと……。

「(ダイナマイト!?)」

それ以上を考える間もなく、「ぎゃー!」と悲鳴を上げながらマハエは沼へダイブした。

ドゴオン!!

という爆音が水中にまで伝わる。

水面に顔を出したマハエの周りに、焼け焦げた根の破片が降り注ぐ。

「んな無茶な……! さっきの声はアオ　　っつーかわニきたー

……!」

そこからは死に物狂い。

マハエは“無事”、対岸へ泳ぎ着いた。

「……………」

地面に頬を密着させ、ゼーゼーと荒く呼吸するマハエを足元に、アオバは彼を見下ろす。

「大丈夫か?」

「……仮にそうだとしよう。だとすればオレは真っ先にあんたをぶん殴っている」

「大丈夫そうだな」

差し出されたアオバの手を、マハエは乱暴に引っ張って起き上が

った。

「全身びしょ濡れだよ……」

「見ればわかる。すずしくていいじゃないか」

「だと思えます？ ……あんたはどうかしてる」

「助かったから文句はなしだ」

アオバは笑う。

マハエはため息を文句のしめにして、小さく礼を言った。

「アオバさん、なぜここへ？ オレ達と合流するつもりでしたか？」

「……ああ、こっちの用事は終わった。あとは、あんたらのサポーターだ。それより、厄介なモンスターが出てきたもんだな。炎が効かないとは」

マハエはうなずいて、はっとする。

せつかくの松明も水に落ちて使い物にならないことに気付いた。

「アオバさん、松明持つてます？」

「いや、こつちも火が消えた。つまり、二人とも無防備ってわけだな」

「……どーすんのよ」

頭を抱えるマハエ。

「そういえば、どうして沼のワニは捕食されてないんだろ？ こころもモンスターの根に侵食されてるはずだけど……」

そう思い、考えて「そうか」と手を打った。

バックバックを背から下ろし、中から唐草のふるしきを引っ張り出す。

「何をするんだ？」

そう訊くアオバにマハエは、

「オレ達が“透明”になればいいんだよ。ワニみたいに」  
満面の笑顔で答えた。

一度、宗萱とマハエが通った道。

マハ工とアオバはそれぞれ大きな風呂敷に身を包み、足を急がせる。

「考えたな。これなら根もヒトガタも襲ってこない」

「濡れた布で全身を覆ってしまえば、体温を感知するだけのモンスターへの眼には映らないってわけ」

「まさにやつらにとつてオレ達は透明ってわけだ」

これで楽に宗萱の救出へ向かえる。

「モンスターに捕獲されたあんたのパートナー、シラタチのトップだつて？ 強いのか？」

「かなり」

「そうか。それなら、何とか耐えているかもしれないな」

「ああ、大丈夫だ。あの人なら」

マハ工は自信を込めてうなずいた。

宗萱とはぐれてから一時間以上は経つたが、まだまだ彼がくたばるには早すぎる。

放っておいてももしかすると何日、何週間、生きていくかもしれない。彼が力尽きる場面など、とうてい想像できない。

「アオバさんが助けてくれてよかったです……」

「お？ どうした、怖いのか？」

「……………」

例えば自分が力尽きたとしても、仲間だけは助けたい。この世界を救うため、なんていうことは関係ない。簡単なことだ。

仲間を死なせたくない。

それだけ。

根の襲撃もヒトガタの攻撃にも遭うことなく、二人は坂を上り、例のこじ開けられた道にたどり着いた。

この道をたどればモンスターがいる。そして捕らえられた宗萱も、敵は相手強い。高い知能を持っているらしい。力押しだけでは勝てない。



マハエはアオバを見てうなづく。アオバはコンバットナイフを抜き、前に構えてうなづく返した。

言葉は交わさず、二人は中へ踏み込む。

すでに死臭が二人の顔をなでていた。

## 48：死の世界

死臭が強まる。

同時に、敵の気配も数を増している。

薄暗い中に目をはしらせると、いたるところにヒトガタの姿が。

「ここがあいつらの繁殖場所か」

アオバがひそひそと言う。

「ここで気配を悟られたら、かなりマズイよ……」

だから足元の枝を踏まないよう要注意だ。ヒトガタに聴力があれば、だが。

「それにしても嫌な臭いだ」

マハエは鼻を押さえる。

これが人の死が放つ臭いなのか。だとすれば、この場所に相当な数の死体が転がっているということだ。　　そうでないことを祈る。

ここの薄暗さ　　光をさえぎっているのは木々の葉だけではない。葉や枝に混じって、赤い根がそこら中に張り巡らされている。

この道の入り口から、五十メートルほどの場所。ほぼ直線の道で、奥へ行くにつれ、少しずつ闇は深まる。

まるで根の洞窟だ。真っ赤な洞窟……。

「腰の短剣は使わないのか？」

いつ襲撃に遭うかわからない状況下で、持っている武器を装備しないマハエに疑問を持ったアオバが訊く。

アオバはコンバットナイフを右手に持ち、瞬時に戦闘へと切り替えができる態勢だ。ナイフが得意分野らしい。

「ナイフ系は苦手なんで……」

マハエは答える。

慣れない武器を持っていても邪魔になるだけだからだ。アオバの前で『壊波槍』を使うわけにはいかない。

“不思議な力”に気付かれないうつ、戦闘時は魔力を抑えて。

正直、マハエはアオバをさほど頼りにしていない。

これほどの強大なモンスターを相手に“生身の”人が立ち向かっても歯が立たないことは分かりきっている。どれだけの戦闘技術を持っていようと、いくらここまで生き延びていようと、これ以上踏み入れれば真つ先に餌食となる。

闇に目が慣れ、戦闘に支障が出ないほど視界に光がにじむと、道が少し前方で行き止まりになっているのが見えた。

そこには人ほどの大きさはある細い根の塊が、横たわっていたり、宙吊りになっていたり、視界に入るだけでも五体。

「すごい臭いだ……」

マハエは悪臭に鼻を押さえる。その場所の死臭は尋常ではない。

アオバが近くの塊に寄り、舌打ちをする。

「これ全部、死体だ」

「……………」

目眩を堪えるマハエ。

「白骨化しているようだ。くそつ、ヒドイことを……………」

アオバはナイフを握る手に怒りを込め、絡み付いている根にナイフを向ける。

斬りかかればモンスターは二人の存在に気付くだろう。

だが彼の危険な行為をマハエは止めることはしない。いや、気付いてすらいない。マハエが目になっているのはたった一つ。一番奥にある、横たわった塊だけ。

その塊から、黒い服の一部がはみ出している。

「宗萱……………」

マハエは風呂敷がずり落ちていることも気かけず、その塊へ駆け寄った。

すぐに周囲が変化する。

根の天井が蛇のようにうねり、ヒトガタの気配が集まる。

「おい、真栄！」

その事態にアオバが叫ぶが、マハエは知ったことではないと、黒服に絡み付いている細根を両手でこじ開ける。

「今助ける！」

「急げ！ 時間がない！」

アオバは天井から伸びてくる触手根をナイフで切り払い、マハエを援護する。

力づくで細根を剥ぎ取るマハエの手が止まった。

「どうした、早く」

「……………」

腰が抜けたように、マハエは地面に尻をつく。

塊の中には、すでに白骨と化した死体があるだけだった。

「そんな、バカな……………」

遅すぎた。

宗萱なら耐えていると思っていた。絶対の自信があった。

だが今、こうしてパートナーの死を目の前にし、それがいかに愚かな期待であったのかを知った。

頭が真っ白になる。

「ああああああっ！……！」

絶叫した。

悲しみ、怒り、憎しみ、不安……………。

さまざまな感情で頭が破裂しそうになる。  
狂ってしまいたい衝動。今すぐ敵を破壊したい。自分からパート  
ナーを奪った憎いカタキを。

「くっ！ キリがないぞ！」

ヒトガタがアオバに触手根を伸ばすが、彼は体勢を低くして避け、  
その体勢のままヒトガタへ飛び込み、ナイフで切り裂く。

一体倒しても二体倒しても同じことだ。

次から次へと数は増える一方。

逃げなければ死ぬ。

そう判断し、マハエに声をかけようとしたとき、天井から伸びた  
触手根がアオバの左腕を縛り上げた。

「しまった！」

待つてましたと、一体のヒトガタがアオバへ攻撃をしかける。  
接近し、両腕を振り上げる。

ドゲンツ！

衝撃音とともにヒトガタが横へ消え、破片が散らばる。

「……これ以上、好き勝手させるかよ」

マハエだ。

アオバはほつと息を吐く。

彼が狂ってしまうのではないかと思っていたのだ。

父親を亡くした当時のアオバが半ばそうであったように。

「助かった」

一言言つて笑いかけてから、アオバは右手のナイフで腕を縛る触  
手根を切断した。

マハエは冷静だった。いや“冷静になった”。

宗萱の死に取り乱してしまえば、死んだ彼が悲しむに違いないと思っただからだ。

マハエの闘志に燃える眼差しを頼もしく見て、アオバは口の端で笑う。

「さて、まだまだこれからだ！」  
ビツと、ナイフを横に払った。

「……………」

だが周りが静かになった。残った七体のヒトガタ集団、その動きがいつせいに止まった。

「……………何だ？」

何かよからぬものを感じ、アオバは一步下がる。

動きがあつたのは天井の根。

ズズズ……………。と動き、ぽっかりと穴が開く。

ヒトガタに警戒しつつも、二人は反射的にその穴を見上げて身構える。

穴から何かが降りてくる。

「新手か？」

いつでも迎え撃てるよう構える二人の前に、黒い服の人物が触手根に吊られて降り立った。

「……………」

目を丸くしたのはマハエだけではない。

「……………ようやく来ましたか、真栄さん」

「……………はれ？」

マハエのアホ面を“宗萱”が力のない表情で見つめている。

しばらく宗萱と黒服の白骨死体を見比べ、大きく首を傾げる。

「……………え、えー？ 生きてたの？ それじゃ、あの黒服は？」

「ただの黒服の人です」

「…………え…………?」

呆然とするマハ工。

宗萱は微かに呆れた表情を見せたが、全身に力が見られない。まるで操り人形のように四本の触手根に吊られている。

「とりあえず、大丈夫ですか?」

とてもそうは見えないのだが、マハ工は一応訊く。

「気力を吸いとられてきているみたいですが…………。それよりも気をつけてください、こいつ、わたしを利用するつもりです」

「利用つて?」

宗萱がうめく。

彼を吊るしている四本の赤い触手根が解け、宗萱を解放する。うつ伏せで落下し、宗萱はもう一度うめいた。

「大丈夫ですか」

「待て、近づくな!」

「!?!」

アオバが宗萱の背中を指す。

彼の背には、人の頭ほどの根の塊が

まるで脈打つようにド

クドクと伸縮している。

「気を、つけて…………」

宗萱が言う。

ザワザワと周りの気配が変化した。

動きを止めていた七体のヒトガタ達が、いつせいに、溶けるように解け、蛇のようになって散らばる。そしてスルスルと動き出して、宗萱のもとへ 脈打つ塊へ集まる。

宗萱の身体にまとわって固まり、一つの形をつくり出すようにしている。

「何てことだ…………」

アオバが小さく首を振る。それは恐怖を表す動作だ。

ヒトガタ七体分の根の“蛇”が、円形の胴、胸部、頭部、左右計八本の触手と、“姿”を形成していく。

まさしく、巨大な赤いクモの姿を。

宗萱はクモの胸部に埋もれ、顔だけを背から外に出して苦しそうに呼吸している。

利用するという意味をようやく理解した。

このクモを攻撃するということは、宗萱をも傷つけてしまうということ。

それはとても、モンスターごときが考え付くような戦法ではない。「（モンスターが人並みの頭脳を持っているとでも？）」  
できれば否定したい可能性だ。

捕食のために別の生き物を利用するというのは、生物界で珍しいことではない。これは進化の過程で得た遺伝子、モンスターの本能に刻まれた生き残るための知恵の一つかもしれない。

何にしても厄介なことこの上ない。

アオバが心を決めたように一つ息を吐く。

「よし、オレがおとりになる。真栄はどうかやつ弱点を見つけてくれ」

「弱点、ですか。……わかりました」

できるかどうか。そんな細かい考えはいらない。やらなければならぬ。

二人は互いの目を見てうなずくと、

一、二、三！

の合図で左右に散った。



## 49：死の森の住人

マハエはバツクバツクを地面に下ろした。

重たいバッグを背負っていたおかげで、多少身が軽くなった感覚を覚える。

モンスターの触手根が形成した巨大な赤グモは、器用に四本の脚を動かし、本物のクモさながらにマハエとアオバを襲う。

二人は二方に別れて、おとり役を買って出たアオバがクモの気をそらす。

「来い、化けグモ！」

アオバはクモの脚をナイフで斬りつける。もちろん擬態した根だが、数ミリの傷口からは赤みがあったドロドロとした液体が流れ出る。

痛みは感じていないようだが、本能的にかクモの攻撃優先対象は決まった。

自分に尻を向けるクモを、マハエは注意深く観察する。

この時点で攻撃可能な部位は、四本の脚。だが、四本すべてを潰すのは骨が折れる。そうしたとしてもすぐに再生するかもしれない。それにマハエが攻撃してしまえば、アオバのおとり効果がなくなってしまう。

一撃で仕留められるような弱点を突かなければならない。

いや弱点はわかっている。宗萱の背にくっついていた心臓のような部分だろう。

その部分をどうやって攻撃するか。それが問題だ。心臓部への攻撃は、宗萱のダメージに直結する。

どうにかして、うまく両方を切り離すことができればよいのだが。

「アオバさん、弱点はそいつの腹部にあります！」

「腹部か……、だがどうする？」

アオバの足元にクモの太い脚が突き刺さり、土をえぐった。

「おい、ロープ持ってないか？」

「ロープ？」

マハエはバツクバツクを探り、ロープを引っ張り出す。それをアオバへ投げ渡した。

「真栄はそのままスキを待て！ オレはこいつの動きを止める！」

ロープを伸ばし、頭上から地面へ突き刺さる脚の下を抜けてすばやく移動する。同時に、クモの左右前脚にロープを絡ませていく。

図体の大きなクモ、それも複数の根で構成されているせいで動きはやや緩慢だ。

破壊力はバツグンだが、動きをよく見れば回避はたやすい。

アオバはクモの背を蹴ってジャンプし、近くの太い木の枝に飛びつくつと、ロープの両端を枝に撒きつけ、飛び降りる。

「今だ！！」

そしてロープを力の限り引っ張ると、クモの前脚、頭部、胸部と、徐々に持ち上がる。

急所が攻撃可能に。

そこへマハエが走り、クモの下へ滑り込むと心臓部を見つけ、ホルダーから短剣を抜く。

ここで魔力を使ってもアオバからは死角だ。それに宗萱を救うには『壊波槍』を使うしか方法はない。

短剣に魔力を込める。

「!？」

クモの脚がひと回り太くなった。

体の別の部分を構成していた根が、前脚部へ集中しているようだ。そのパワーもひと回り強大に。

「うわっ!!」

パワーアップした前脚は、ロープごと木の枝を折り、それを引いていたアオバを宙へ放り投げた。

そしてクモの巨体はそのままマハエを下敷きに。

「ぐべっ……」

マハエは沈黙。

背中を地面に叩きつけ、息を詰まらすアオバ。

「っ!! くそ……!!」

さらに、クモの前脚が勢いよく伸びて追撃する。

ちようど立ち上がったアオバを木の幹に押し付け、じりじりとその圧力を強める。

内臓が圧迫され、苦痛に悶えるが、人の力でどうにかできるものではない。

そのとき、どうにかマハエがクモの下から這い出してきた。

肋骨が何本か折れたようだが、すぐに魔力で修復していくのがわかる。

「……大丈夫ですか、真栄さん」

クモの背から弱弱い声で宗萱が訊く。

「アオバさんを……、早く助けなければ……」

言葉だけの宗萱。エネルギーを吸われ、体力がもう限界なのだろう。

「絶対に助けます。オレが」

マハエは握った短剣に魔力を込め直す。

横に振ると『壊波槍』が現れ、空気を振動させる。

その異変に反応したのはクモ。危険を感じたのだらう、残りの脚に体中の触手根を寄せ集め、マハエの捕獲にかかる。

その姿は、もはやクモと呼べるものではない。

「うりゃっ!!」

『壊波槍』の一振りは、襲い来るすべての脚を一瞬で断ち切り、二振り目でアオバを押さえつける太い脚も切断した。残りは宗萱の背にくっついてしている心臓部のみ。それを破壊すればクモは再生できなくなる。

脚に集中させていた根も落とされ、心臓部も無防備になっている宗萱へ槍を振り上げたマハエは動きを止める。

いつの間にか宗萱は地面にうつ伏せで倒れており、その背中から心臓部が消えていた。

「(逃げられた!?)」

「真栄っ!!」

アオバの声と同時に、背後に気配を感じた。

マハエを攻撃する際、それに紛れて心臓部は宗萱から離れていたのだ。そしてマハエが彼に気をとられた間に再び落とされた根を収集、反撃可能なまでに再生していた。

「くっ!」

振り返るマハエの眼に飛び込むのは、太い根の触手。

マハエの攻撃は間に合わない。

「(ちくしょう!!)」

心の中で叫んだ。

恐怖で目を閉じた瞬間、アオバの声が遠のき、それとともに耳元ではつきりと聞こえた。

空気を裂き、一直線に何かが飛んでくる音。

ビィィン……。

飛んできた何かが、すぐ横の木に突き刺さったらしい。

目を開けるとそれは長い棒で、まっすぐ幹に刺さっていて、細かくぶれてから静止した。

「(……矢?)」

どこから飛んできたのか、目をはしらす、誰の気配もない。

そんなことよりも。

目の前では矢によつて砕かれた触手が方向を見失ったようにゆらゆらと揺れていた。その向こうには、完全にあらわになった心臓部。マハ工はすかさず槍を振る。

あれだけの巨体を動かしていた根の心臓部だが、たったの一撃で滅びた。バラバラと崩れ、統制を失った根もいつせいに動きを止めた。

周りに張り巡らされていた根も死滅し、次々と折れて三人に降り注ぐ。

「早く出よう」

アオバが言う。怪我は大したことなかったらしく、力のない宗萱を担いで森の奥を示す。

根が崩れたおかげで、さらに奥へと進む道が現れていた。

そう、たった今倒したクモは本体ではない。この森を支配する大本が、まだ残っているのだ。

『壊波槍』を握ったまま、マハ工は先導する。

もう魔力のことを隠す必要はない。『シラタチ』の戦闘員としての本領を出さなければ、この先の森では生き残ることはできない。当然、誰を守ることも。

それに、アオバは信用できる。そう思った。

背後で根の洞窟が崩壊した。

倒木の上に宗萱を降ろし、アオバはマハ工を見る。

「……何が言いたいのか、わかりますよ」

マハエは言う。

「隠していたわけか。妙だと思ったよ、まだ十六やそこらの子供がよくこの森で行動できているものだな、と。となると、この黒服さんも同じか？」

「ええ……、そうです」

宗萱が自らうなずく。

「しかし、わかってください、アオバさん……。隠していたのは、あなたが信用できないからではないのです。……ただ、我々が活動するためには、軍の信頼を第一とし、あくまであなた方の補助的な存在でなければなりません。たしかに、我々が本気を出していれば、あなたをそのような危険な目に遭わすこともなかったでしょう」

「……………」

怒っているのか戸惑っているのか、アオバは言葉なくうつむいて、眉をしかめている。

『シラタチ』は軍に属する組織ではない。しかし、この世界で活動するために、軍部との信頼関係は絶対であり、どの面においても敵対するような事態は避けなければならない。『シラタチ』の戦闘員が特殊な力を操る集団であるということは、軍部が持つ“人”としての力を脅かす存在ということだ。

そのことが知られれば、軍部は間違いなく『シラタチ』を“敵”と見なすだろう。

そんな事情を、アオバは理解したはずだ。

「アオバさん……………」

その願いを込めて、マハエはアオバを見つめている。

そのとおり、アオバは理解した。しかし個人的な葛藤が残る。

最初から自分は邪魔な存在だったのか。

自分が『シラタチ』の力になると、彼らに協力した結果がこれだ。

アオバにもプライドはある。『イチリン』という軍のエリート部隊に属し、他の軍部からは期待の眼差しを受け、天狗にはなっていないものの、自分の力を信じた。そこに人という存在を凌駕する特殊な力を持つ者が現れ、自分の力が遥か及ばないと知り、軍の勢力として戦ってきた自分を否定された気がした。

エリートでなくても、怒りを覚えるのは当然のことだ。

「どうしますか？」

いくらか回復した宗萱が、アオバに訊く。

「この事実を知ったあなたは、すべてを我々に任せますか？」

彼に向けるその眼が、どこか厳しさを帯びる。

彼の気持ちを理解しているからこそ、彼の覚悟を知りたかった。

「……最後まで協力する。いや、オレに協力してくれ」  
頭を下げる。

怒りはある。しかしそれは自分の心の問題であって、『シラタチ』には関係ない。彼らに怒りを覚える必要はない。自分に力が足りなくても、自分の身は自分で守り、できれば少しでもモンスターの討伐に力添えをしたいと思った。“個人的な事情”もある。

黙って差し出された宗萱の手を握るアオバの眼は、しっかりと前を見据えていた。

「よし」と、マハエは満足そうにうなずいた。

「あ、そうだ。この森、まだ誰かいるみたいだよ。生存者かもしれない」

「見たのか？」

「姿は見なかったけど、クモとの戦いでオレを助けてくれた。どこから矢が飛んできてさ」

「“矢”だって？」

アオバはあごに手を当てる。

「心当たりでもあるのですか？」

「……いや、そんなわけではないか」

独り言の後に首をひねった。

「その“誰か”も気になりますが、相当の手練らしいです。一応、放っておいても大丈夫でしょう。さて、進みますよ。モンスタ

ーの本体はすぐ近くです」

「大丈夫なのか？」

「ある程度は回復しました。移動する分には支障ありません。それに……、何か嫌な“気”を感じます」

宗萱は空を見た。

時刻はちょうど、正午になったころだ。



## 50：ただ一つの命

枯れ木群

森の奥はもはや地獄。

すべての木々は枯れ、中には黒くなつてボロボロと崩れるものもある。

木、草、花、水。そこに本来の森をイメージさせる物は何もない。

かつてその場所に生息していた動物達の残骸がそこかしこに散らばつて、モンスターの根がその一つ一つにしゃぶりついている。

「なんてやつだ……！」

歩きながらも、アオバは周囲に広がるその光景から目を背けたくなつた。

魚が泳いでいた小さな水溜りも、今はただの浅い窪み。

すべてをしゃぶりつくす強欲なモンスターに対し、湧き上がるのは恐怖以上に激しい怒りだ。

「許さない……」

小さくつぶやいたアオバの言葉　そう思うのは誰でも当然のことだが、宗萱とマハエには、彼の怒りが、ただ人が殺されたというより、もっと重い憎しみから湧き出ているように感じた。

「ちゃんと訊いていませんでしたね。あなたが単独でこの森に潜入した理由を」

「……………」

アオバは若干のショックを表情に表したが、すぐに平静にもどる。本人にとつて話したくないことだと、質問した宗萱もマハエもわかった。しかしそれははっきりさせないわけにはいかない。　ともに行動する以上は。

それを承知しているのか、歩調をそのままに、アオバはしぶしぶ話し始める。

「オレがこの件の情報を耳にしたのは、昨日の朝だ。軍はこの件を『シラタチ』に依頼する決定を出した。しかしオレは黙っていられなかった。一昨日の夜ことだ、オレのところ知り合いの女性が相談に来た。その人の娘が二日前に姿を消し、行方が分からない。ちょうど近くのゾンマという町でも、同じように行方不明者が出ているという話を耳にして、知り合いは不安になったそうだ」

「あなたはその母親の依頼で？」

「いや、実はその行方不明になった娘というのが、オレの幼馴染で、二つ年下だが、子供の頃はよく一緒に遊んだ、友人だった。ここ何年かは、たまに顔を見るだけで交流はなくなっていたが、心配になったのはオレも同じで、『シラタチ』にすべてを任せるという決定に、オレは反抗した。だが、上層部の意思は変わらない。仕方なく休暇を取り、独りでこの森へ」

「それで“個人的な事情”ですか」

「で、その幼馴染は」

マハエは慌てて口を閉ざした。

答えはわかる。

「……見つかったよ。あんたらと別行動しているときに。骨で顔はわからなかったが、遺体が着けていた珍しい形の首飾りには見覚えがあった。彼女の母親が同じ物を着けていた」

表情は平静だったが、それが装いだということは一目でわかる。

泣きたいのだろう。だが人の前では決して涙は見せない。

マハエは胸を打たれた。何があるかと冷静さを見失わない彼の強い心に。

「カタキを討ちましょう」

宗萱が言った。

アオバは黙ってうなずき、その意志を宿した強い眼を行く先へと向けた。

戦う力があるうとなかろうと、三人の闘志は微塵と変わらない。

そして必ず生きて帰ろう。

三人の心は一つだ。

それから数分歩き、三人は一度立ち止まる。

「あと少しです」

魔力でモンスターの気配を探った宗萱が言う。

「ところで、おかしくないか？ オレ達が本体に近づいてるっていうのに、向こうは全然攻撃をしかけてこない」

マハエが首を傾げる。

「我々がここまで進攻してくるとは想定外だったのでしよう。ほとんどの勢力を外へ向けていて、対処が遅れているということですよ。」

つまり、チャンスは今。ですがあなどってはいけません、やつのは能は人並みです。完全に無防備にいるとは思えません」

「それなりの抵抗を覚悟しておけてことだな」

そう言うマハエの心に恐怖はない。

仲間の、自分の力を信じれば、必ず勝てると思う。

「アオバさんの装備は？」

「コンバットナイフの他は、投げナイフが一本に爆薬が一つ」

「となると、基本我々は接近戦タイプということですよ。危険な戦いになるでしょうが、互いにフォローしながら攻めればどうにかなるでしょう。　と言っても、相手の出かた次第ですが」

「作戦は任せるよ」

と言うアオバと、マハエも同じく。

宗萱はすでに何パターンか考えているようで、表情には自信がう

かがある。

とりあえず緊張を和らげるには、それだけでも十分だ。  
しかしそのとき、三人とは別の声が頭上から降りかかる。

「宗萱さんマハエさん、報告があります」

「案内人」

マハエはアオバに目をやり、咳払いをする。

「そのまま聞いてください。先ほどなのですが、突如フリーレンツの各所にモンスターが出現しました。すぐにS A A Pを送りましたが、現時点でも被害は拡大しているもようです」

「そうですか、わかりました。こちらはまだ終わりそうにありません。どうかそちらの戦力で間に合わせてください」

「ええ、健闘を祈ります」

報告終了。

「……モンスターか。どうしていきなり？」

「わかりません。ですが、今はこちらに集中しましょう。あちらにはグラソンもいますし、大丈夫でしょう」

加え、ハルトキとエンドーもいる。戦力が二人欠けたくらいでさほど支障はないだろう。

「どうしたんだ？」

ひそひそと話す二人に、アオバは眉をひそめている。

「何でもないですよ。さあ、気を引き締めて行きましょう」

「……？」

フリーレンツにモンスターが出現したという事実をアオバは知らない。父親をモンスターに殺された彼がこの状況でそのことを知れば、きつと戦いに油断が生じる。だからあえて、今は何も伝えない。もっとも、なぜそのことを『シラタチ』の二人が知り得たかと

というのが不思議なことでもあるから。

それからまた数分後、 枯れ木群、中央の広場。

広場と言えば聞こえは良いが、そこは養分を限界まで吸い取られ、姿が保てなくなった木々の墓場だ。

ただ、その中で一本だけ、生き生きと葉を茂らせた木がある。直径五十メートルに及ぶ墓場の中心に。

一番高い枝の先まで、ほんの五メートル。倒した根のクモのように、根が塊となったようないびつな姿だが、広げた枝から茂る緑の葉に、降り注ぐ日の光が反射して輝き、つい見とれてしまう美しさがある。

「ヴァルテュラ 姿は“木”そのものですが、れっきとしたモンスターです。ようやくここまで来ましたね。こいつが、この森を蝕むモンスターの正体です」

「魔木……」

マハエは目を見開き、まばたきすら出来なくなっていた。モンスターとは思えない美しい輝きに圧倒されている。

それは生命の、力の圧倒とも言える。

「恐れを抱けば、そこで終わりですよ」

「わかつてる」

流れ出る汗を噛み砕くように、マハエはニツと笑ってみせる。

アオバが言う。

「本体はただ突っ立てるだけだ。攻撃はできても、その場から動くことはできない。攻め続ければ勝てる」

コンバットナイフを顔の前に構える。

すると、その言葉に反応するように、ヴァルテュラの枝がざわついた。

「勝ツ？ ソウ言イマシタカ」

葉が揺れ、枝が揺れ、幹が揺れる。

「何だ？」

それから続く地面の揺れ。

そしてヴァルテュラの幹がパツクリと開き、人の顔が覗く。

「女？」

アオバは目を細めた。

木と同化した人の頭。その茶色い顔には、女の面影がある。

「私ヲ倒スツモリ？」

顔がしゃべった。

「あなたは何者ですか？」

一歩踏み出る宗萱。

「私ハ、ヴァルテュラ」

薄ら笑いを浮べて三人を見、それ以上は何も言わない。

「モンスターですか？ それとも人ですか？」

「……………」

何も答えない。

代わりに「フフツ」と嘲るように笑うと、幹が閉じ、再び木の姿に。

「倒シテミナサイ。私ガ、才前タチヲ吞ミ込ンデシマウ前ニ！」

そして笑い声が響き渡る。

「何なんだ、あいつは！？ 人なのか！？」

「アオバさん、落ち着いてください。今のあれはモンスターです。少なくとも、倒すべき対象に違いありません」

宗萱は刀を鞘から抜いた。

マハエも『壊波槍』をスタンバイ。アオバもナイフを構えなおした。

再び地面が揺れ、ヴァルテュラの周りに多数の触手根が出現する。

「作戦は？」

マハエが宗萱に訊く。

「アオバさんが言ったとおり、やつはあの場所から動くことができない。となれば、我々を近づけないよう、根を使って身を守るはず。おそらくは攻撃よりも防御を第一に」

「そうか。やつぱり攻めれば勝てる」

「いえ、やつも甘くはないでしょう。何と言っても、この森のすべての領域がやつとの攻撃範囲内です。本体に近づくほどの確な攻撃を仕掛けてくるはず」

「どうすればいい？」

アオバ、マハエもその答えを求める。

宗萱は彼らに微笑を向ける。

「アオバさん、今からわたしと真栄さんはあなたの“盾”になります」

## 51：美しきかな

地面から突き出した多数の触手根は、すでに三人に狙いを定めている。

ヴァルテュラは木のモンスター。それ故にその場から動くことはできない。

しかしその防御は鉄壁だ。地面から突き出て動く根はまさにヴァルテュラの“腕”。自らの根を自在に操る“彼女”の攻撃パターンは無数に存在する。

最強のモンスターと呼ばれる所以だ。ゆえん

「しかし知能があり、根を自在に動かす特性を除けば、やつの構造は樹木と同じはずです。樹木の根は本体から離れるほど無数に枝分かれますが、本体の周囲に存在する根はさほど多くはないはず」

その弱点をカバーするためか、触手根の半数を自らの周囲に盾とし、残りを攻撃に回している。

さっそく何本かの触手根が三人を挟むように左右から押し寄せ。宗萱は左を、マハエが右を防御する。

宗萱の刀が鋭い風を帯びて根を斬り、マハエの槍が衝撃を放って根を打ち砕く。

「！！！」

二人はとっさにアオバを押ししてその場から逃れた。

「思った以上に固い根だ……」  
「数が少ない分、硬度と強度は今までの根とは段違い。魔力の消耗も激しくなりそうです」

どうにかして本体までの壁を崩さなければならぬ。“アオ



バの一撃”のために。

「頼みますよアオバさん」

マハ工は『壊波槍』の力を増すべく、さらに魔力を注ぐ。

「あんたらこそ、頼りにしてるよ」

アオバはベルトに挟んでおいたダイナマイトに手をそえた。

硬度のある根を、攻撃に魔力を上乗せして破壊するが、先端が切断されくらいで根の動きは止まらない。痛みを感じているとすれば少しのスキはできるものだが、“彼女”にその感覚はないらしい。

根は短くなっても、その長さ分地面から伸びてくる。一つの森を丸ごと呑み込んだモンスターだ。蓄積されたエネルギーは尽きることを知らない。

一つだけ、ヴァルテュラを沈黙させる方法は本体を破壊すること。人の姿をし、言葉を発する中枢部分を。そのためにはまず、根の猛撃を突破しなければならない。

接近戦で本体を叩くのはほぼ不可能だ。だが盾に穴を開けて爆薬を投げ込むことができれば、相当なダメージを与えられる。

成功させるためにはシラタチの力と、アオバの“本物の戦士”の勘が重要となる。

プログラムによって備わった勘ではなく、修行や実践の中で自然と備わっていった勘。それは他の何者にも劣ることはない。

そして何よりも、仲間を信じることで成功する作戦と言える。

「おおおおりゃあっ！！！」

力を凝縮して研ぎ澄ませた『壊波槍』の刃が、まっすぐ向かってきた根を縦に切り裂き、振り払う。

本体に近づくほど攻撃は激しさを増す。

同時に二つ以上の攻撃を放たれれば対処は困難に。

右の根を切り裂き、即座に左の根を。そして正面から向かってく

る根

「っ！」

それに宗萱が捕縛され、高々と持ち上げられた。

しかし慌てる者はいない。すぐにマハエがその根を切断し、解放された宗萱は重力にしたがって落下する。

「桜舞灯さくらまいとう

『降風』」

宗萱の刀が帯びた魔力は、空気をかき回して真空を作り出す。

空中で刀を振り、魔力をヴァルテュラへ放つと、細かな真空の刃が風とともに降り注ぎ、盾の根に無数の傷を付けた。

膝を曲げて着地した宗萱の周りをヴァルテュラの葉が舞う。

「この程度の攻撃では、盾を崩すには程遠いようです」  
ひるまず向かってくる根を刀身で止め、それをマハエが切り落とす。

「でも、やつも焦り出したみたい」

彼らとヴァルテュラ本体との距離は約十メートル。

攻撃は激しいが、その分攻めの的確さが劣ってくる。

「相手が焦り出せば必ずスキが生じる」  
アオバが言う。

二人の魔力の消費も著しいが、相応の威力は発揮している。

いくらでも伸びてくる根だが、さすがに限度はあるようで、短くなつたものから地中へ戻っていく。

「桜舞灯

『這風』」

膨大な魔力をまとわせた刀を、宗萱が地面へ振るうと、三日月形の真空を発生させて、地を割り空中の根をも破壊しながらヴァルテ

ユラ本体へ突き進み、盾の根にぶち当たって消えた。

その威力は大きく、盾にはザツクリと深い傷が。 それでも、それを破壊するには力不足らしい。

ヴアルテユラが反撃する。

生き残った攻撃の根がまとまって一本の根となり、その太い柱のような“腕”を軽々と振り回す。

さすがにコレに対して防御は無意味だ。姿勢を低くしてかわしながら攻撃のチャンスを待つ。

太い触手根が一振りされるたびに、ブオンという低い音と風が全身をかすめる。

地面に叩きつけられれば大きな音と振動で身がすぐみそうになり、後に残る大きな溝を見ればその巨大な鈍器の威力に目が眩む。

食らえば半分不死身な肉体と言えど、ひとたまりもないだろう。

「……………あれ食らってまだ再生できたら、オレ逆に死にたくなるよ……………」

違う意味でも恐怖を覚えるマハエ。

ブオンと音が横から接近し、慌てて突っ伏す。

「斬灯ざんとう

『灯柱』!」

タイミングを見て宗萱がしかける。

目にも留まらぬ素早い一振り。縦に伸びた光の柱が、太い触手根を切り裂く。

完全に斬りおとすには程遠いが、根はそれに弾かれるように空へ急上昇した。

そしてまっすぐに伸びたかと思うと、急降下していっせいに先端から分裂し、鋭い根が幾本もの槍の雨が如く、三人の頭を狙う。

「桜舞灯」

『這風』よりもさらに膨大な魔力が刀に注がれる。

「『玉風』！」

突き上げられた刀から風が生じ、膨らむ。

マハエは苦しさを堪える宗萱の様子に気付いた。

風は直径二メートルの球体を成すと、高速回転する鋭い刃の塊となり、襲い来る根の雨をことごとく破壊した。

削られて散る細かな木屑。攻撃の根はすべて消滅した。

直後、宗萱が膝を付く。

クモに縛られていたときの消耗が、まだ残っていたのだ。

瞬き一つで消えてしまいそうな意識を必死に保ち続ける。

「あとはオレに任せる」

マハエは宗萱の背中をポンと叩く。

「おい、危ない！！」

「え？」

マハエがアオバの叫びを聞いたのは、ちょうど息巻いてヴァルテユラに目を向けたときだった。

おかしい。

ヴァルテユラを囲んでいた盾の根が消えている。

ふと足元を見た。

「うわあああああ〜！！！！」

絶叫が舞い上がっていく。

「くそっ！」

手を伸ばすアオバの目の前で、マハエと宗萱が足元から出現した根に捕らえられ、空中へ持ち上げられた。盾の根を攻撃に切り替えていた。

アオバは間一髪、突き出す根を回避したが、道を開いてくれる二人がいないことには

「……いや」

微かに笑うアオバ。

道は十分に切り開いてくれた。後は自分の役目だけだと。

捕獲にかかる根の気配を背後に感じ、アオバは走る。　　ヴァル

テュラの本体へ。

その手には火薬筒と火付け棒。

導火線に着火させると、本体の五メートル手前でブレーキをかけ、盾の守りのない本体へそれを投げつけた。

弧を描き、火薬筒は舞う。

導火線は残り半分　　ところが、途中で火は消えた。

「なに……！？」

突然地中から飛び出した根が、導火線をかすめたのだ。

爆発しないただの筒が、ヴァルテュラの根元に転がっただけだった。

ヴァルテュラの薄ら笑いが見えた気がした。背後から触手根に縛られ、アオバもシラタチと同じく。

「……………」

いや、そうではない。

薄ら笑ったのはアオバだ。彼の手には火の着いた投げナイフが。

「これで最後だ」

空中でアオバは狙いを定め、そして放った。  
ナイフは火の粉を散らしながらまっすぐ飛び、妨害にかかる根を  
すり抜け、火薬筒に突き刺さる。

アオバは女性の悲鳴をたしかに聞いた。耳をつんざく爆音の  
中で。

大量の青い葉が、風にさらわれていく。  
根から解放され、三人は地にもどった。

「やった……」  
マハエは宗萱を助け起こし、ヴァルテュラを見た。  
あの爆発だ。跡形もない

「……………」  
その木はそこに存在していた。  
大部分をそぎ落とされ、焼け焦げ、みすばらしい姿となってもな  
お、必死に生へしがみ付いているかのように。それでもまだ青い葉  
を茂らせて。

「…………グツ…………！ マサカ、コノ私ガ…………！」

潰れた女の声が微かに聞こえた。

削げ落ちるように“中枢部”を覆っていた幹が崩れ、女性の上  
身が現れる。

髪はなく、全身茶色。身体を細い根のような物で縛られ、ところ  
どころ肉体と同化している。

「マサカ……、貴様ラ如キニ……」

「お前は何者だ！」

牙をむくアオバを、『ヴァルテュラ』と名乗っていた女性は死  
人のような瞳で見つめる。

「私八道具……。貴様ラト八、相反スル存在……」

「道具だと？ 何のために」

「ニユートリア・ベネツへとは、関係ないのか？」

次はマハエが訊く。

「……何ノ話ダ？ ソンナモノ、知ラナイ」

「窪井じゃないのか。 その姿……。 あんた、もとは人か？」

「……人ダト？ フフ、アノヨウナ物ト一緒ニスルナ。 ……私八大イナル存在ノ、ヒトツ」

地面が揺れる。

「まだ抵抗するつもりか……！」

マハエは『壊波槍』を振るう。

「……貴様モ私ト同ジ、大イナル生命ノ欠片カ……」

マハエを映したヴァルテュラの瞳が、ギラリと光を放った。

「……！！」

そこから中から鋭い根が顔を出す。

「貴様モ還ルガ良イ！ 生命ノ御許へ……！」

根はぐんぐんと成長し、横へ傾いて三人にその切っ先を向ける。

発せられる女の笑い声は、狂い、壊れていた。途切れることなく怒りや悔しさ、苦しみの感情が吐き出される。

その嘔吐に終止符を打つかのように、聞き覚えのある音がマハエの頭の横を通り過ぎた。

ヒュンッ！

空間を貫いた一本の“矢”は、続いてヴァルテュラの眉間を貫く。

「……………」

ヴァルテュラ 女は涙を流していた。

あごからこぼれた透き通った粒は、紛れもなく人のものだ。マハ

工にはそう見えた。

「フアク、ト、リー……」

空を見上げ、見えない何かに手を伸ばし、女は静かに絶命した。突き出ていた根は枯れて折れ、ヴァルテュラの木も黒くしおれる。葉も茶色に染まって次々と落ちゆく。

マハエの肩の横で、薄っすらとまぶたを開けた宗萱が、空を見てつぶやく。

「綺麗な光……。森の生命が、解放されてゆくようです」  
澄んだ風が吹きぬけると、三人も緊張から解放される。  
「ところあの矢、クモのときオレを助けてくれた」

と、三人の背後で枯れ枝を踏む音がした。



## 52…トップの一下

もう一人、この森で生存していた人物が三人に歩み寄る。

「よう、生きてるか？」

大柄の中年男だ。どこか貫禄のある顔にアゴヒゲをたくわえ、クセのかかった黒い長髪をかき上げて、鋭い眼光を覗かせる。

単独のようだが、この森で生き延びていた割にはしっかりと精神を保っている。

「やはりあなたでしたか！」

アオバが真つ先に男の前に出て、敬礼する。

「シマ、無事で何よりだ」

男はアオバの肩に手を乗せ、ゆるく笑いかける。

威圧感のある男だが、笑えば悪くは見えない。

アオバの態度から軍の関係者であることはわかるが、男の服装からそれを判断できる要素はない。

上半身は袖なしの革ジャケット一枚というラフな格好で、背には大きな弓を背負っている。軍関係者よりも狩人と呼ぶほうが、じつにじっくりくる。

アオバが男を紹介する。

「この方はレオン副司令です。副司令、こちらが『シラタチ』のお二人です」

マハエに肩を借りながら、宗萱は重たそうに頭を持ち上げる。

「このような状態ですみません……。直接お会いするのは初めてです。シラタチの宗萱です。それと部下の小守真栄」

「よろしく。わたしはレオン・R・ロードだ。気軽に『R』と呼ん

「でくれ」

「……………」

「冗談だ。『ロード』と呼んでくれ」

そう言つて、口の端で笑う男　　ロード。

マハエは小声で宗萱に尋ねる。

「副司令つて、『イチリン』の?」

「いえ、『守民軍』の、です……。つまり軍のトップが総司令、その一つ下の階級が副司令です」

「……………軍のナンバー2?」

凍結した首を、ギチギチとロードへ向ける。

「この人が?」

疑いの眼。

それもそうだ。狩人のような服装や髪型やヒゲは別に置いておくとして、自ら武器を持って戦いの場へ単独乗り込んでくるナンバー2がいようか。少なくとも大勢の部下を動かす力を持つ人物が取る行動ではない。

「(まあ、一番軍服姿の似合わなさそうな人ではあるけど……………)」

「よう少年、よく頑張つたな」

突然、笑顔のロードに話しかけられ、マハエの凍結モードは一瞬にして吹き飛んだ。

「い、いえこちらこそ助けていただきありがとうございます……………」

「緊張するな。見事な戦いぶりだったぞ」

「え、あ、ありがとうござい……………　つてええ?　見てたんですか?」

マハエがギクリとした表情で宗萱を見ると、彼もあきらめたように首を振った。

しかし平然と接するロードから、シラタチの力に気付いた様子は見受けられない。

「いやあ、しかしまさか“手品”を戦いの中で活用するとは、驚いたな」

「……………」

天然さんで助かった。

シラタチはホツとした。

「ところで副司令、なぜこの場所へ？ オレ達、軍はこの件に深入りしないはずでは」

「散歩だ」

「散歩ですか」

納得した。

「（大丈夫か？ 守民軍……）」

マハエの疑いの念はさらに深まった。

「まあ、というわけで、わたしがここへ来たことは秘密にしておいてくれ」

ロードはアオバに言って、長髪を掻き上げる。黒い長髪を

マハエは少し考える。

この世界ではどこへ行っても黒髪を見かけなかったから、珍しいなと思ったのだ。

するとロードもマハエの髪に気付いたようで、

「おお少年、キミも黒髪ファンか？ 黒い髪はすばらしいよなあ、つやつやとしていて高級感がある。キミも染めたのだろうか？」

「……いえ、地毛です」

「なに！？ そんな……。うらやましい……」

「……………」

マハエはもう一度宗萱に尋ねる。

「この人、副司令？」

「驚きですね」

「黒髪と言つのは珍しいだけではないのだ。昔から語り継がれる伝説が」

「副司令、雑談は後にしましょう」

アオバが止める。放っておけば黒髪長編伝説話を延々と語るのである。

「む？ ん、そうだな。では、わたしは応援を呼ぶとしよう。シラタチ諸君、モンスターの討伐、ご苦労だった。あとは我々、守民軍にまかせてくれ」

背を向けて左手を振るロードの手首で、それまで気付かなかった銀色のブレスレットがキラリと光った。

「……変わった人だったなあ」

マハエがつぶやく。

「それでも、あの人はすごいよ」

ロードの後ろ姿を見つめるアオバの瞳は、尊敬の色にあふれている。

「まあ、腕はすごいよな。人は見かけによらないって言うけど」

助けてもらわなければ危ないところだったのだ。もう少しまでもにお礼を言うべきであったと、マハエは思うが、ロードとの縁はまだ繋がっている気がした。

「とりあえずここから出て、どこか喫茶店で休憩したい」

マハエが言う。力のない宗萱を担いで本部までもどるのは大変だ。ありがとうございます。シラタチ」

アオバは二人に一言言うと、すぐに背を向けた。彼は涙を流している。友人の死に。自分の手で仇を討てた喜びに。それだけではない。一番は生きているという安堵から。

一人の命だけでも救えた。それこそが自分達の戦う理由なのだ、マハエは実感した。

ヴァルテユラの 女の死体を一瞥してから、三人はその場を

後にした。

二人が帰路についたのは、日が沈みかけた時間。軍の馬車に揺られ、本部である城へ。

たった半日ほどの時間で、森の外は大きく変化していた。町から出ればモンスターがうろつく危険地帯。家々の明かりもほとんどなく、人の声一つない。

馬車の周りには、護衛の兵士が数人、馬にまたがり歩調を合わせている。

モンスターからの護衛 本来ならばシラタチの役目であるが、宗萱がいまだ本調子ではなく、ロードの親切に甘えるほかはなかった。

死の森の影響か、それとも無理が過ぎたのか、魔力の回復が遅々としている。

「あれから案内人の報告がないけど、大丈夫かな？」

「彼のことです。忘れているのでしょうか」

「だね」

マハエはやれやれと息を吐いた。

今回の件は、ただ単に“シラタチの任務”というだけではなかった。

ヴァルテュラが遺した言葉が、ずっと二人の頭に謎として残って消えない。

「大いなる存在……、大いなる生命、か……」

考えても解決しないことを、いつまでも引きずるのは無駄な労力だ。

別の事 できれば楽しいことを考えようと、馬車の窓から外

を覗く。すると、西の空に真っ赤な夕日が見えて、また不可解なことを思い出す。

「……赤い雪……」

昨晚見た赤い雪のような光、そして翌日に出現したモンスター。その二つは繋がった出来事なのか

宗萱に話すと、彼も腕を組んで考え込む。

「問題は山積みですね……。ですが、現在の最優先とすべきは、窪井の活動を阻止すること。グラソンの話では、ミサイル攻撃に必要な量にウイルスを増殖させるには、少なくとも二週間以上はかかる。どうにかしてそれまでに窪井を見つけ出さなければなりません」

「……そうだな」  
すべての物事や謎が一つにまとめれば良い。しかしそれが期待できない以上は

「頑張るしかない、な……」

馬車がガタンと揺れた。

マハエは仲間の顔が恋しくなった。共に戦ってくれる友人達の笑顔を見れば、きっと勇気も湧いてくるに違いない。

『シラタチ』の本部である城に到着した頃、外は闇に吞まれている。た。

そんな恐怖をにじませる表現が、今はとてもしっくりとくる。暗闇の中で、バケモノが襲い掛かってくる。そんな想像に恐怖した小学生時代を思い出して、マハエは真剣にバケモノに恐怖するのにも久しぶりだと、懐かしい気分になる。

そしてそんなことを考えられるほど余裕のある自分を笑ってやりたくなった。

恐怖に慣れすぎている。

馬車は城の正門前に止まった。

二人は兵士達に礼を言い、彼らが見えなくなるまで見送ってから、静まり返った城内へ。

「ああああー……」

ようやく帰ってこられたー、と、全身の力を解放してロビーの冷たい床に寝そべりたい衝動に駆られるマハエだが、そこで待っていた二人の人物を目にしたおかげで、それはおあずけとなる。

「おかえり」

グラソンが静かに言う。

一緒にいたエンドーが腕を組んだまま強張った表情で、マハエに一言「よう」と声をかける。

「……たがいま」

期待していた友人の笑顔などとは程遠い雰囲気だ。

それにエンドーがわざわざ出迎えてくれる珍事。すぐにただならぬ何かを察した。

「何かあったのですか？」

代表で宗萱が尋ねる。

何かを言いづらそうにしているグラソンとエンドーだが、それを伝えるためにわざわざここでマハエ達の帰り待っていたのだ。

「任務の報告は、後で聞こう。帰還早々、悪い知らせだ」

「……」

マハエは不安の眼をエンドーに向けて、何事かと訴える。目をそらして、エンドーは残念そうに首を振った。

再びグラソンに目を向けるマハエ。

「実は、大林が……」

重々しい。

言葉が、空気が。

「……大林さんが、どうしました？」



## 53・呼ぶ声

『医務室』のドアが開かれ、ハルトキはビクツと振り向く。

「……………」

「ヨツくん……………」

マハエが歩み寄ると、ハルトキはとっさに、涙で腫れた目をそむけた。

「ああ、おかえりマハエ」

いくら顔を隠しても、枯れた声はごまかせない。

「彼の容体は？」

宗萱が医療担当のS A A Pに訊く。

ベッドには全身包帯だらけの大林が、静かに眠っていた。生きているのか死んでいるのかわからない彼の状態は、眠るなどという安らかなものではない。

「現在は安定していますが、この先状態を維持できるかどうか」

ハルトキはずっと拳を握っている。

「……………窪井にやられたんだ。ずっと意識が、もどらない……………。ボクらが見つけたときには、もう……………」

S A A Pが言う。

「肋骨四本破損、右腕、右足首粉碎、筋肉損傷、打撲数箇所。内臓の損傷も見られました。自力で呼吸をし、生きていることが不思議なほどです。これまでも相当な無茶をされているようで、この方の

古傷を見る限りでも、命があることに疑問を抱きます」

マハ工は浴場で見た彼の身体を思い出した。

素人目でも、彼がどれほどの無茶をしてきたのかを理解していた。大林の友人、クリング・レックも、下の部屋で治療している。まあ彼の場合、左腕の骨折と打撲だけで命に関わる怪我ではない」

そう言うと、グラソンは大林を一瞥して医務室を出て行く。

「宗萱、仕事だ。任務の報告を頼む」

「ええ、すぐに行きます」

宗萱も最後に大林を目の中におさめてから、背を向ける。

「命があつて本当によかったです。ですが、完治してもこれまでのように戦うことは出来ないでしょうね……」

「……………」

宗萱も部屋を出て行き、ドアは沈黙を残して閉じられた。

マハ工達三人は何も言葉を発することなく、しばらく大林の苦しげな寝息に耳をかたむけていた。

再び大林が窪井と拳を交えることはない。だが三人にとってはそのほうが良かった。もう彼が命を危険にさらすようなことはないと思つたから。だが大林にとっては……、とても残酷なことなのだ。

「ボクさ、大林さんのこと、正直わからない。こんなにも身近にいるのに、この人の過去もよく知らない。この人の人生なんて、何も知らないんだ……」

ハルトキの拳に涙が落ちる。

悔しくてしょうがないんだ、と。

エンドーが「ふん」と鼻を鳴らす。

「そんなもんだろ、普通は。そいつが背負ってる過去や苦しみを全

部理解できるなんて、そんなわけはない。兄弟みたいに生きてきたオレ達だって、互いの事はよくわからない。……たぶん、親子でも兄弟でも親友でも、知らない事があるっていうのが重要なんだ」  
「……うん」  
ハルトキは涙を拭った。

医務室の外で、宗萱とグラソンはドア越しにその会話を聞いていた。

「知らない事」が重要、ですか。それが人と人を結ぶ一つの絆なのですかね？」

「たしかにそうかもしれんな」

グラソンは微笑して歩き出す。

「もつとも、オレ達の過去なんて短く、ろくでもないものだがな」

「それでも、我々も“人”なのだと言いたい。意味のない人生など存在しません」

「オレ達の存在理由か……。戦いの他に意味があることを願うよ」

「そうですね。それが『白剣』<sup>シラタチ</sup>に込められた本来の思い”ですか  
ら」

深夜。

城で活動しているのは見張りのS A A Pだけ。

月明かりが窓から入り込む医務室では、大林がベッドに。そんな彼をずっと見守っていたのか、ハルトキがベッド横の小テーブルに突っ伏して眠っている。

大林は深い眠りの中、時々うめいて、もがくように首を動かして、また一時静まる。

呼吸が乱れ、顔から汗が噴き出ても、彼は目覚めない。夢の中で何かに縛られているかのように、必死に眠りから覚めようとす

大林は夢の中で戦っていた。

この世界に音は無い。  
耳に入るのは“敵”の声。男の声。かつての親友の声……。

空が激しく光った。

オレは風で目の前を揺れる髪を、片手で退け、まばたきもなしに  
対峙する窪井をにらみ続けた。

窪井は天候の悪化に表情をゆがめて舌打ちをする。

「ちっ、降ってくるな」  
「とつととケリつけようぜ」

オレは地面を蹴った。

身体が自由に動かない。三步進んだつもりが、まだ一步を踏み出  
したところ。

オレの拳と窪井の拳が衝突した。

オレの拳はやわらかな粘土のように、簡単に潰され、ちぎれ、風  
で飛んでいく。

痛みは無い。

オレの脚と窪井の脚が衝突。

オレの脚は枯れた枝のように簡単に折られて、ちぎれ、風で飛んでいく。

それでも痛みは無い。

だがオレは窪井に一つの技も決められずに、ただ壊されていくだけ。

「……タカ!」

懐かしい声が聞こえた。

オレの後ろに田島さんが立っていた。

「タカ」

「田島さん……!」

「ケンを許せ」

「何を言っているんです!? 窪井はあなたを」

窪井が田島さんの背に現れた。

オレは手を伸ばしたが、切り裂かれて血だまりと化す田島さんをどうにもできない。

「……」

「……大林、お前もいろんなもんを捨てたんだな」

「黙れ! 誰がオレをこんなに苦しめていると思っている!？」

「だが、オレのほうが、まだ強い」

窪井の身体が膨れ上がって赤く染まる。

“バケモノ”は低い声でオレに言う。

「お前にはまだ、捨て切れていないものがある。すべてを捨てたオレに敵うはずがない」

バケモノの巨大な拳がオレの身体を粉みじんに変えた。

オレはまるで水の塊だ。

窪井の声がこだまする。

「自由を求めて高みを目指す黒き魔物は、赤く染まった道を見上げながら、ひたすらに這い登る。その腹が汚れてもなお、また、自らの赤で染まりながらも、たどり着けない高みを見上げ続ける……」

雨が落ちる。

オレは窪井の背後に確かに見た。  
黒き魔物を。

また、雨が落ちる。

「大林……、オレの邪魔をするな」

雨がたくさん落ちてくる。

「おおあああああっつ！！！」

オレは叫んだ。

すべてが闇へ沈んでいく中、最後に聞こえていたのは、何重にもエコーのかかった声。

「あばよ。これでまた、オレは“高み”へ近づく」

死んだのかどうなのかも、オレには理解できない。

いや、きっと死んだ。

冷たい雨が、オレの魂を地の底へ沈めていく。天からの無数の刃のように。

「……………」

オレは無力だ。死にたくない。強くなりたい。もっと強くなりたい。…………力が欲しい！

『こつちだ』

誰かがオレの腕を掴んだ。

『こつちへ来い』

オレは闇の中から引き上げられる。少年の声だ。

…………ハル？ ハルトキなのか？

…………いや、違う。誰だ？

大林は目を覚ました。

体を動かすと痛みが襲ってきたが、大林は無理矢理、上半身を起こす。

ここは本部の医務室で、すでに怪我が治療されていることに気付いた。

次に、ベッドの横で眠るハルトキに気付く。

「……心配をかけたな」

そつとハルトキの頭に左手を乗せて、彼の長めの髪を撫でてやる。それから大林は片足で立ち上がると、脇に置いてあった松葉杖と壁にかけてあった灰色のローブを手に、ドアへ歩む。

「オレはこんなことで止まるわけにはいかない」

誰かが大林を呼んでいた。

その声に導かれるように大林は部屋を出て、そして静かにドアは閉じられた。



## 54：崩れる心

パンツ！ とドアが開いた。

宿の部屋で眠っていたマハエとエンドーはその音で目覚め、呼吸を荒くして踏み入ってくるハルトキに目を向ける。

「……………」

二人は目を擦る。

外はまだ薄暗い、早朝。だがハルトキの様子からただならぬ事態を予想する。

「どしたの？」

マハエが訊く。

「大変なんだ、すぐに来て！」

「まず落ち着け。何があつた？」

エンドーはすでに起きてジャケットを手に取っている。

「……………大林さんが、いない」

ハルトキ、マハエ、エンドー、宗萱、グラソンは、本部『医務室』で無人のベッドを見下ろしていた。

「あんな体でいっただいどこへ？」

宗萱は呆れていた。

「ボクが起きたときにはもういなかった。部屋を出て行く気配なんてなかったし……………」

そのとき、案内人の声が。

「記録を調べたところ、深夜にテレポート装置が作動していたみたいです。転送先は、『ソレイアド地方』」

「ソレイアド？ 大林さんが窪井と戦っていた？」

マハエが言うと、ハルトキは脱力して膝をつく。

「まさか窪井を追ったんじゃない？」

「あり得るが、あの雨で痕跡はすべて消えている。S A A Pの捜索でもお手上げだったんだ。 もっとも、あいつならそんなことお構いなしに行動するかもしれないが」

「連れ戻しますか？」

「放っておけ。ムダに戦力を欠くわけにはいかない」

グラソンは冷たく言い放つ。

たしかにこの忙しいとき、別のことに気をとられている場合ではない。

「おい案内人、お前ならすぐに見つけられるんじゃないやねえの？ オレ達の居場所もすぐにわかるんだからよ」

「残念ですが、前もって登録済みの人物 つまりあなた達五人や一部S A A Pの位置情報しか調べられないのです」

「そうか。期待はしていなかった」

「……………」

グラソンの言葉で納得するハルトキではない。しかし彼は考える。

「ボクは……。信じるよ、大林さんを。無茶をする人だけど、あの人が決めたことだから」

「いいのか？」

マハエが訊くと、ハルトキはすぐにうなずいた。

「あの人の過去とか、あまり知らないけどさ。あの人の強さならよく知ってるから」

「……………」

グラソンは口元で笑うと、宗萱を伴って仕事にもどる。

「お前らは待機だ。指示を待て」

港町の端っこ、廃墟地の中にひっそりと存在する廃工場。

もともとの廃墟群は、十数年前に津波の被害に遭った場所で、たくさんの人が死んだ。残った町民はその記憶から、この場所を嫌い、以来放置され続けてきた。

『存在しない子供達』と呼ばれる孤児達が生活する廃工場も、その一例だ。

「じゃあ、大人しくして待っててね」

サーヤは子供達に手を振って、廃工場の門を出る。

笑って「いつてらっしやくい！」と送ってくれる子供達を、サーヤは気持ちよく眺めていた。

この廃工場にエンドーが訪れたのは一昨日のことだ。

彼のおかげでサーヤや子供達は生きる気力というものを少しでも取り戻した。

子供達も、当然サーヤ自身も、「また来る」と言っていたエンドーの言葉に期待し、翌日にでも訪れるものと思い待っていたもの、現れず、サーヤは少しばかり気落ちした。

反面、ほっとしていた。

サーヤが嫌う自分の力のことを、あまり詳しく問われたくはなかったから。

しょせんは彼も興味本位で近づいてきただけなのだろうと、サーヤは思うが、なぜか彼のことが気になって、一昨日の夜は眠れな

った。

不思議な気持ちだった。同じ異性であるジンにも決して抱かなかった感情であることは間違いなかった。

また会いたい。

いつの間にかそう思うようになっていた。

この日は、何ヶ月ぶりの買い物。ジンがギャンブルで稼いだ金の分け前（すずめの涙ほどだが）で少ないまでも食料を調達するのだ。ポロポロの買い物かごを持参して。

もとがスリやドロボーで得た汚いお金ではあるが、子供達が生きるためには仕方がない。

サーヤはこれまで、昼間の町へ出ることを避けていた。それは言うまでもなく、嫌われ者の中の一人であるから。

だが これもエンドー効果かもしれないが、何となく気持ち軽く、昼間の町に挑戦してみる気になったのだ。

モンスターが現れても、港町の活気は変わらない。できる限り表通りから目立たない路地を通り、町の中心へ来た。目を閉じて、深呼吸をして、サーヤは人のにぎわう商店通りへ歩み始める。

視線が気になったが、気付かぬふり。

傷みややすい肉や魚はあきらめ、パンを求めてパン屋へ行く。

「一番安いパンを買い取るだけ……、ください……」  
パン屋のおばちゃんに、買い物かごを差し出す。

「……………」

『存在しない子供』でも、商売人にとって金を持っている者は客だ。何も言わずに要望どおりのパンを、要望どおりの数だけ、かご

に入れる。ただ、その待遇は雑なものだ。たった一言も会話を交わしたくないのだろう。終始黙って、また、スキあらば商品を盗られるのではないかと、常に警戒している。

「（やっぱり町の連中は嫌いだ）」

サーヤも必要なこと以外は言葉を発さず、お金を渡すと足早に店を去った。

ちらりと振り向けば、パン屋のおばちゃんが店の前に出て、ホウキでその場所を掃き“清めている”姿が視界に入った。

「……………」

嫌われても仕方がない。最近ではそう思うようになっていた。

汚くて、残飯をあさって、ドロボーをする（実際ドロボーをしているのはジンだが、彼も廃工場の仲間に違いない。そのおかげでたった今もパンを買うことができたのだ）。

それだけあれば理由は十分だ。自分が裕福な生活をしていれば、同じような目を見ただろう。

しかし悪いのは自分達ではない。

自分達を捨てた大人が、手を差し伸べてすらくれなかった大人達が悪いのだ。

いや、サーヤ自身は少し違う。

「こんな力さえなければ……………」

これまで何度繰り返したか分からない言葉を、またつぶやいた。町を歩く若い娘は、みんなおしゃれな服を着て、首や腕にきらきららのアクセサリーを着けている。髪だってサラサラでツヤツヤだ。

鏡など見ないサーヤだが、彼女達と自分がどれほど違っているのかはよく分かっている。

服はボロボロで臭くて、顔は泥だらけ。薄オレンジの髪も伸びっぱなしでぼさぼさ。

彼女も思春期だ。「だからどうした、そんな関係ない」などと完全に自分をごまかしきれものではない。

やはり周囲の視線が気になった。

そのとき、サーヤは立ち止まる。

人の行き交う表通りに、覚えのある顔を見つけた。

エンドーだ。

なぜか胸が高鳴った。

隠れてしまおうかと物陰を探したが、エンドーはサーヤのすぐ正面。真っ直ぐに歩いてくる。

一人だが、誰かと話をしているように、ぼそぼそと口を動かしながら。

「あ……、キョースケ」

サーヤはエンドーの名を呼んだ。

「……………え？」

しかしエンドーは、彼女の横を素通りしていった。

何も言わずに。

それどころか、完全に無視していた。

どうして？

気付かなかっただけだろうか。しかし人が多いとはいえ、すぐとなりをすれ違ったのだ。それにサーヤの浮いた姿に目が行かないわけがない。

「……………」

人前で私なんかと話をしたくないんだ。

突然、人ごみが恐くなった。

後じさりしたサーヤは、誰かにぶつかる。

とっさに振り向くサーヤを、ガラの悪い男が見下ろしていた。

「よお、また会ったなあ」

いつぞやのピアス男だ。

逃げようとしたサーヤを、男の仲間が押さえつけた。

「そう恐がんじゃないやねえよ、乱暴はしねえからよお」

ウツヒツヒと気味悪く笑う男達。

サーヤは周りの人々に助けを求めたが、当然誰もが目をそむけ、中には楽しんで見ている者までいる。

ピアス男が言う。

「ちよいと、お兄さん達とお散歩しようや」

## 55：家族なんて

「うるさいなあ、わかってるっての」

エンドーは案内人に文句を言いながら、港町のテレポート小屋へ足を進める。

相変わらず暑い日で、太陽光だけでもお手上げなのだが、案内人の小言まで降ってきてはたまらない。

「本部で待機しているよういわれたのですから、ちゃんとその指示に従ってください」

「昼飯くらいゆっくり食わせろ。それにオレがいなくたって、マハエやヨツくんがいるだろ？」

「吉野さんは『クラウルル地方』にいます。守民軍本部の資料館でお勉強をしているのです」

「そつちこそさっさと連れもどせえ!!! ったく、どいつもこいつも勉強してるやつには甘いんだ!!! 外で元気に遊びなさいって昭和の精神はどこ行った!？」

エンドーは息を吐く。

そして立ち止まると、後ろを振り返った。

「……お前がうるさいから周りに気付かなかったけど、さっき誰かオレの名前を呼ばなかったか？」

「さあ？ 気のせいでしょう」

エンドーは首をかしげながら前を向く。

「あれ？ あいつは……」

エンドーは少し離れた先に、少年の姿を見つけた。

薄汚れたジャケットを着て、ベレー帽を深く被った少年、ジンド。建物の陰で、表通りの人々を観察するようじに、じっと帽子から目を覗かせている。



「あいつ、まあたスリか。忙しいことすな」

呆れた息を吐きながらも、エンドーはその場所で様子を見る。

「知り合いですか？」

「ああ。ちょこつと話をしてこようつと」

ジンは一人の女に狙いを定めていた。町では見かけない若い女が二人、その内の一人に。

東から歩いてくるのを見ると、ヘルプスト辺りから出かけてきたのだろう（モンスターが現れたという話はフーレンツ中に知れ渡っているが、港町とヘルプストをつなぐ海沿いの街道なら安全だ）。

日傘を差し、しゃれた服を着て、首にはネックレス、耳にはピアス、両腕にブレスレットを三つも付けている。どれも高価な品に間違いはないが、女は金持ちと言っわけでもなさそうだ。おそらくは男にせびり、買わせた物だろう。

ジンは気分悪そうに地面にツバを吐きかけ、行動に出る。彼女らはジンにとって、もっとも嫌いな人種の一つであり、もっとも好むべき獲物だ。

町の外から来た者は、この町で一番のスリとして名の知られた彼にとって“仕事”がしやすい相手であるから。女が二人だけというのも好むべき点だ。

話に夢中で注意力の散漫している女に、ジンは正面から向かう。当然、気配は殺している。

彼の手法は静かに、存在を悟られないよう、

ただ標的とすれ違っ。

それだけだ。

「ありがとうさん」

女を尻目に、ジンはニヤリと笑う。

気付かれてはいない。片腕のブレスレットが一つ無くなっていることには。

ブレスレットはジンの手に。純銀製で大きな宝石が埋め込まれている。この世界では純金よりも銀が高価で、このブレスレット一つでも相当な価値がある。

「さあて、こいつを売り払った金で、今夜は博打三昧だあ」

「！」

と言ったのはジンではない。

いつの間にか彼の横に立っていたエンドーだ。

「お前……！」

「よう、また会ったな。ギャンブルの前にその金でオレにおごれ」

「……何の用だい？ 悪いが、オレあ忙しいんで」

逃げようとするジンの腕を、エンドーは即座に掴む。

「まあ待てよ、話をしよう」

「んな仲良しになった覚えはねえよ」

「いいじゃんかよあ、お話ししようぜえ、おごれとか言わないからよあ」

「……………」

ジンは額を押さえてため息をついた。

「サーヤが言ってたのかい？ オレがギャンブルにはまってること」

「ああ。お前が家出者で、テキトーなやつだ、とも言ってたなあ」

「……………そうかい」

港で海を前に、二人は立ち話。

ジンは何か悲しげな表情で、海の向こうを見ている。

「あいつから見れば、本物の家族を持つやつは、みんな幸せ者なんだ。とくに金があるやつはなお更さあ」

「家族ねえ。いいじゃんか、他人でも一緒に生活していれば家族だ。

「……オレも、そうだからよ」

「そうなのかい？ まさかあんたも孤児？」

「今は家族がいるけどな。親に捨てられ、路頭に迷ってたつていうまでは同じだ」

「……………」

過去のことだ。今は関係ない。そう言うように平然とそれを話したエンドーに、ジンは少々とまどっていた。

過去を引きずって苦しんでいるサーヤや廃工場の子供達とは正反対だったから。

「いろんなやつがいるんだなあ」

と感心していた。

「まあオレも、家出者のお前の気持ちは、よく理解できないけどな」  
「……………」

漁船が港に近づき、漁師達が船を寄せようとロープを引いている。どうやら大量らしく、喜びの声が上がっている。

そんな光景を、ジンはどういう気持ちで見ているのだろうか？ エンドーは考えてみたが、簡単には理解できるものではない。彼らにとって心休まる景色というものがあるのだろうか？、疑問に思う。

エンドーは伸びをした。

「さて、廃工場まで送るぜ。お前がギャンブルですつからかんならないよう、オレが見張っておく！」

「余計なお世話でい。というか、なぜオレとこんな話を？」

「交流」

エンドーは笑う。

ジンは呆気に取られた。

「……というのもあるが、オレが言いたいの、少しはギャンブル

を控えて、あの子達のため 家族のために働けってことだ」

「……ギャンブルをやめろ、ってかい？」

ジンは鼻で笑った。

「嫌だねえ」

「……生意気なガキだな」

呆れ返るエンドー。

その後二人は並んで、廃工場へ向かう。

ジンは逃げたそうにしていたが、常にエンドーが目を光らせている。

「何で家を出た？」

エンドーが訊く。

「簡単な話さ。家族が嫌になった」

「……」

訊いた本人だが、その簡潔な答えに動揺した。

追い出されたわけでもなく、自ら家を出るといふ、子供にそんな決断ができるものか。

「親とちよつとケンカして勢いで飛び出した、って言うんじゃ？」

「そんなんじゃないやねえや。ただ自分が必要とされていないって、小さい頃のオレでもわかったからさあ。……オレも金持ちの家に産まれて育った。でもオレが九歳のときに母親が死んで、すぐに父親は再婚した。けど、明らかに財産目当ての女で、一度だつてオレに構ってくれたことなんかなかった。そんな女でも、父親は夢中だ。自分の一人息子なんかよりもな。耐えられると思うかい？」

「……」

エンドーは首を振る。「わからない」と。

廃工場に着くと、門のところに三人の子供が立っていた。

とても不安そうな顔をして。

「どうしたあ？ サーヤは？」

ジンが訊くと子供達は工場の中を指差して、ジンに何かをささやく。

「あんたは帰ってくれ。送ってくれて、とりあえずは礼を言っとくじゃあな」

と、一言の礼も言わず、ジンは子供達を連れてさっさと工場へ駆けていく。

様子がおかしい。

「ああ。じゃあな」

エンドーは手を振って踵を返した。わけはない。こっそりと裏へまわり、中の様子を探る。

「(サーヤに何かあったのか……?)」

割れた窓から覗くと、壁際に座って膝に顔を伏せているサーヤを見つけた。

泣いているのか、周りでは子供達が心配そうに見守っている。

「どうしたんだ？」

ジンがしゃがんでサーヤの顔を覗き込む。

「……何があった？ 町へ買い物に出かけてたって聞いたけど、町の連中に何かされたのか？」

サーヤは首を振る。

「ジン……、ある人からあなたに伝言」

「え？」

「“家賃は倍だ。納期を守れ” って……。ねえ、どういう事？」

「……やつらか」

ジンは絶望を混じらせた声でつぶやくと、何も言わずに背を向けて出て行く。

「ジン、待ちなさいよ！ 説明して！」

顔を上げて叫ぶサーヤ。彼女の左頬が真っ赤に腫れて膨れているのを、エンドーは見た。

誰の仕業か。それはジンが知っているはずだ。

町の細い路地 ほとんど日が当たらない、人目に付かない場所。

そこへジンが入っていくのを確認すると、エンドーは彼に気付かれないよう足音を消して後に続く。

ジンは路地の途中で立ち止まり、周囲を警戒するように見回す。とつさに近くにあった木箱の陰に隠れたエンドーは、そのまま彼の行動を覗き窺う。

コッソ。

ジンが建物の壁を叩いた。

「ドリアン」

「！？」

突然ジンがつぶやく。

「バンザイ」

「！！？」

すると、建物の壁の一部が回転して開き、再度周囲を確認してジンは建物に入ってしまった。

「ドリアン、バンザイ………？」

「どうやらそれが合言葉らしい。」

この人目に付かない場所で、合言葉と隠しドア……。

「ヤバイ連中のアジトか、闇取引の隠し部屋とかあるのかな？」

そんな場所へジンが入っていったということは、先ほどサーヤが言っていた言葉と何か関係があるのかもしれない。サーヤに怪我を負わせた何者か、とも。

エンドーがホルダーから短剣を取り出すと、案内人の声が。

「エンドーさん、わたしにはわかりますよ。あなたは今、シラタチに迷惑をかけようとしています」

「お前、ずっと見てたろ。このこと、グラソン達に話したか？」

「……わたしにあなたを止めることは不可能なのでしょう。あなたの性格上、彼らを放つてはおけない。……まだ誰にも何も話していませんよ。ですが、場合によっては　　です。よく考えて行動してください。それができないほど、あなたはバカではないはずですよ」

「なあに、何も問題はない。相手が話の通じるやつらなら、な」

案内人はため息をつく。

「あなた、可能性というものを考えて、ものを言ってます？」

「大丈夫だ」

「不安です」

## 56：心から一言を

カツン、コツン。

ロウソクの灯りだけの薄暗く狭い階段を、ジンは降りていく。

彼の前には大柄な男が一人。　　いわゆる“親分のところへ案内する”係が、先を行く。

ジンは高鳴る胸をぐっと握った。

ここへは何度か来たことがある。だが、いつも同じように緊張するものだ。　　今回はとくに。

痛い目を見ることは間違いない。しかし“今回は”、今回だけは直接あの男に頭を下げなければならぬ。

仲間を守るために。

一番奥、突き当たりのドアが開かれた。

光と派手な音楽と男達の汚い騒ぎ声が階段に漏れる。

「入れ」

案内係が低い声で言い、ジンを部屋の中へ押し込むように入れると、即座にドアを閉じた。

「その汚ねえクツをよく磨いておけ。床を汚すんじゃねえぞ」  
「……………」

男から渡された布で、言われたとおりクツをよく磨いてから、すでに真っ黒に汚れている石の床に足を下ろす。

天井に吊るされた燭台の灯りと、手回し蓄音機が鳴らす趣味の悪い音楽が満ちた小さな部屋。それだけでも気分は悪いが、さらに酒と葉巻の臭いまでもが鼻を突き、瞬間、吐き気をもよおす。

びっしりと酒が並ぶ棚横の丸テーブルでは、三人の男がカード遊びで騒いでいたが、入ってきたジんに気付くなりゲームを中断して、



何がおもしろいのか不気味なニヤニヤ笑いを浮べ始める。

「よおう、久しぶりじゃねえか、ジン」

部屋の奥の黄ばんだソファに座る男が、人を見下す笑みをジンに向けている。

ジンは足がすくみそうになった。

「何だ、直接オレに“家賃”の支払いに来たのか？」

黒いジャケットを着た幅の広い男だ。ヒゲヅラでオールバック、顔面に刻まれた大きな傷痕。一度見れば忘れない、恐ろしい顔だ。ここへ来て、ジンは逃げ出したくなった。

このボスらしい男は葉巻を灰皿で押しつぶし、改めてジンの怯えた顔を見る。

「てなわけではなさそうだなあ？ 文句でも言いたそうなツラだ」

「……今更、家賃二倍だなんて言われても、オレにそんな金が払えるわけじゃないじゃないですか」

「……………」  
ボスは眉の一つも動かさず、視線も逸らさない。  
先に逸らしたのはジンのほうだ。

「なぜ、いきなり……………」

「……………なぜ、だと？ おうガキい、てめえうちの息子から金すり盗って、よくんな口が叩けるもんだなあ」

「……………」  
ジンはボスの後ろに目をやった。壁にもたれて腕組みをしているピアス男が、ニヤリと口元をゆがめる。

「何のことだか、オレには……………」

「なあガキ、オレあなあ、この辺りのチンピラどもをまとめ上げるボスとして、やつらに示しがつかんだ。実の息子が、汚ねえ小僧に金を盗られたと噂が広まってみる、笑い話のネタにされらあ」

「……だからオレには」

「じゃかあしわ!!! てめえの言い分はどうでもいいんじゃない!! おう、きつちり金え払わなけりゃ、てめえの仲間がどうなるかわらない、前にも教えたよなあ? 子供は金持ちに高く売れるんだぜ? てめえが毎週稼いでくるはした金なんぞよりもなあ! そこを見逃してやってんだ。文句を言われる筋合いはねえ」

「……っ!」

ジンは唇を噛みしめた。

「金を盗ったことは、謝ります。どうか許してください」

膝を付き、両手を付き、頭を下げた。

「足りねえなあ、オレの前で土下座するんなら」

ボスがジンの前に立ち、彼の頭を踏みつけた。

「床を舐めろや」

部屋中にチンピラ達のバカ笑いが響く。

「ハハハッ! しかたねえ、息子の件は許してやろう。だから、今からお前に命令する。家賃二倍、これから死ぬ気で稼いできつちり払ってよこせ!」

「……っ!!!」

屈辱的な笑い声。

耐えられない。

「ちくしょおおおお!!」

ジンはボスに突っかった。

「ぎゃははは!! こいつ、ボスに牙を剥きやがったぜ!!」

「バカなやつだ!!」

「うあああ!!!!」

かなうわけがない。それは目に見えている。

「あれ？ 道に迷ってどこか妙なところに迷い込んでしまったー」

唐突に割り込んだ抜けた声。

いつの間にかエンドーが部屋の中にいた。

「……なんだてめえ！」

「あら恐い人達。んー、だめよ弱い者いじめは」

「お前……！」

ジンは目を見開いていた。

「ちっ！ デニムとヨーテは何をしてる！」

ボスが吠える。

「あー、あの見張りと案内係さん？ もうちょっと腕の立つやつに任せることをおススメするよ」

「……っ！」

「悪いけどおっさん、その子放してくれる？ オレの知り合いなんだよね」

「ああん？ お前も廃墟のお仲間かあ？ ハハッ！ 笑わしてくれ。多少はやるようだが、ここがどういう場所か、まだ知らねえみてえだ。おい」

ボスがあごでチンピラ三人に指示を出す。すると三人は嬉しそうにパキポキと拳を鳴らし、武器を構える。

「へー、三人がかり？」

「でえやあー！ ぐへっ！？」

すぐに一人がエンドーの背後から棍棒で襲い掛かるが、エンドーは振り向くこともせず短剣の柄頭でチンピラの腹を打ち、一撃で倒す。

「臭せえ臭いがするから、便所かと思ってた」

「んの野郎！」

もう一人が正面から向かう。

そいつの棍棒を短剣で受け止め、もう一方から来る別のチンピラ



ハハッ！」

ボスは長剣を横に振って、血を払い落とすと、切っ先を今度はジンの喉元に向けた。

「……そんな……」

目を見開いたまま動かなくなったエンドーを、ジンは震える眼に焼き付けてしまった。それが向けられた刃に移ると、次は自分の死んだ姿がその上に重なって焼き付く。

「さあて、てめえとこのガキの死体はあの廃墟にでも捨てるつもり。なあに、てめえの代わりなら、あのクソ娘がいる。餓死する寸前まで稼がせて、高く売り払ってやらあ。あの娘は磨けば上等な品になるだろうからなあ」

「た、頼む……。お願いします……。ちゃんと、稼いできますから……、もう、文句言いませんから……」

「ハハハハッ！！ 最初からそう言やあいんだ。よおし、家賃は三倍！ 忘れるんじゃねえぜ！！」

「……はい……」

ジンは涙を流しながらうなずいた。何度も、何度も。

「おいおい、お前らこそ忘れるなよ？」

「……何だ？」

消えたはずの音が再びもどった。

それは彼らにとって、恐ろしい違和感に違いない。

ドオンッ！

「ぐはあっ！！？」

ピアス男が爆発で吹き飛び、テーブルの上に転がった。

「な、なんだてめえ……!?!」

ゆらりと立ち上がったエンドーに、ボスは初めて  
ケモノを前にしたような怯えを見せた。 まるでバ

「一つだけだ」

「!?!」

「お前らにオレが言っておくべきことは一つだけ」

エンドーは左手で長剣の刀身を掴んだ。

掌の中で爆発が起こり、長剣はポツキリと折れる。

「この子達に手を出すな。二度とだ!」

右の掌底がボスの腹で爆発した。

「ぐああああ……!!」

仰向けに倒れたボスの胸部にエンドーは足を置く。

「一度でも、この子達に手を触れてみる、そんなときはオレが、お前  
らをぶつ潰す!!! わかったなあ!!!?!」

「は、はひい!?!?!」

「よし」

エンドーは短剣を納めた。

波の音が、ジンの体を心地よくすり抜けるようだった。

「なるほど、あいつらに渡す金を稼ぐため、ギャンブルにのめ  
り込んでいたわけか」

「……逆らえるわけがなかった。あいつらのために」

「家族のため、か」

「……………」

港の潮風が、二人の顔面を舐める。

「でも、これで一件落着だ。もうあいつらに怯えた生活をする必要はない」

「そうだな。……………」ありがとう」

ジンのお礼の言葉を、エンドーは笑顔で受け取る。

「……………」ところでよう、あんた」

すでにジンの視線はエンドーの血まみれシャツにあった。

斬られ、致命傷だったはずの彼の胴体に、傷など一つもない。裂けたシャツと、それを染める赤黒い血があるだけだ。

「オレをバケモノだなんて言うなよ」

「いや、そんなこと……………」

動揺したのか目を伏せるジンを、エンドーは悲しい顔で見つめた。

「（たしかに“オレは”バケモノだ）」

そして自嘲気味に笑い、ジンの肩に手を置く。

「今回のことは、お互い内緒にしてくれ。お前の家族にとってお前はただの、ギャンプル好きのバカ。今日、オレとお前は会わなかった。な？」

「……………」ああ」

それを聞いて満足そうにうなずき、エンドーは肩に置いていた手をジンに向けた。

「じゃあな」

一言言っただけで去っていくエンドー。まるでさっきまでの戦いなど忘れてしまったかのように、清々しい。

しばらくの間、ジンはただ棒立ちで、心に開いた穴を見つめていた。

明日から何をして暮らせばいいのだろうか？

穴を埋めてくれるのは、その答え。

だがそのおかげで、心が軽くなった。彼がジンの心の黒い部分を  
取り去ってくれた。

何をするかなんて、その日に決めればいい。ただ、当分の間はス  
リで稼ぐ気にはなれないだろうと思う。

「  
ありがとう」

心からそう言った自分が照れくさくて、でもとても気持ちよくて、  
もう一度その言葉を口にした。



## 57：赤と黒

「貧血だあああ……」

宿の丸テーブルの上に、エンドーは溶けていた。

「お前は、どこへ散歩行けばあんな状態で帰ってこられる？」

マハエが心底呆れた声で言う。

「まあマハエ、彼も彼なりに頑張ってたんだと思うよ。町の外で過激なトレーニングしてたんでしょ」

と言ったのはハルトキだ。

宗萱達から何の指示もないまま、日は暮れた。

エンドーは早めの夕食でいつもの二倍食べたが、昼の戦いでのダメージは消えていなかった。

傷はすぐに塞がるが、流れ出てしまった血液は、簡単には補充できない。

「案内人ー、何か言い訳を考えくれ。オレ、頭、ポーっと、しちよー……」

エンドーは崩れた。

「しょうがないですねえ。実はエンドーさん、走るステーキを追いかけていて、なんとバナナの皮ですべって転び、ちようど落ちていたトンガリ石の上に全力ダイビング！ いやあ、あれは言葉では言い表せないほど、痛そうでしたー」

「……おいおい、小学生でも信じねえぞ。つーかそれ、まるでオレがマヌー」

「へえ、そんなことがあったのかあ」

「ごめんね、エンドー君、過激なトレーニングだと勘違いしちゃって」

「過激なトレーニングだ。それ以上でも以下でもない」

それからエンドーは小声で案内人に、

「今日の件、報告したのか？」

「いえ、今回は特別目を瞑りましょう。あのジンとかいう子も救われたわけです。ですが、今後また相談なくあののような行動に出た場合、わたしも黙っているわけにはいきません。わかりましたね？」

「……………ああ、わかった！」

「その間はいつたい……………」

「なにに？ エンドー君、何してたの？」

マハエが食いついてきたので、エンドーは無理矢理、話題を変える。

「ヨツくんは軍本部の資料館へ行ってたんだろ？ 何を調べてたんだ？」

「うん、ちょっと過去の事件をね」

そう言って、ハルトキはポケットからメモ帳を出して開く。エンドーが訊くまでもなく、報告するつもりだったのだろう。

「ニュートリア・ベネツヘという組織について調べてたんだよ。やつらが起こした事件、レベル1の事件から調べていくと、数え切れないほど名前が挙がる。器物破損、暴行、窃盗、強盗。まあ、過激な不良集団の例だね。レベル4以上、つまり殺人とか凶悪な事件は、今のところ犯していない。軍の記録では、ね」

「まあ、今は誘拐、ウィルステロ、監禁、殺人未遂も加わる」

エンドーが鼻を鳴らした。

「軍から特別警戒されるほどの組織ではなかった。けど、調べていくうちに、とある別の組織の名前が挙がった。それが『レッドキャップ』」

「窪井が勧誘されたっていう、凶悪組織か」

「そう、それで次にレッドキャップについて調べたんだ。……………驚い

たよ、レベル5　つまり、超凶悪な組織。しかもその大半が、まだ十代の少年だったらしい」

「十代!?　オレ達と同じような子供が……?」

驚愕するマハエと、エンドーも、

「レベル5って、殺しをやってたってことだよな……」

「うん、大林さんも言っていたけど、金のためなら人を殺す殺人組織。厄介なのは、やつらに殺しを依頼する人達のほとんどが、有名な富豪や貴族。その中には軍を支援している名家の名もあり、軍は簡単に手を出せないでいた。けどレッドキャップは約二年前に壊滅。組織同士の紛争によるものと記されてる」

「……田島弘之や窪井が絡んできた?」

マハエが眉をひそめて言う。

「それはわからない。ただ、レッドキャップが関与していると思われる最後の事件は、フーレンツのとある道場の焼き討ち。道場主一家を含め、三十五人の犠牲を出したこの事件から一ヶ月ほど後に、レッドキャップの壊滅が確認されている」

ハルトキはメモの最後に、

「ニュートリア・ベネツへは、レッドキャップの残党によって結成された組織であると言われている」

そしてマハエとエンドーを見た。

「こう考えると厄介だよな。ニュートリア・ベネツへは、超凶悪組織、レッドキャップの血を受け継いだ組織」

「そうだな。二年前まで殺しを専門としてたやつらが、少なからずニュートリア・ベネツへに混じってるってことか。……そんなの、不良集団ってレベルじゃねえぞ」

「戦うときには、容赦しない。ってことか……」

マハエは目を閉じてうつむいた。

「(そんなやつらと、どう戦う?)」



翌日、早朝

場所はヘルプストのとある病院。

一人の若い看護婦と一人の初老医師が、急ぎ足で、病室へ向かっていた。

「意識がもどったのだな？」

「ええ、先ほど確認しました。思いのほか元気な様子で」

「そうか！ いやあ、よかった。なかなか目覚めんものだから、心配したわい。どこであのような怪我を負ったのか、ようわからんが、ここへ運ばれて早めに治療できたおかげじゃの」

豪快に笑う医師。

看護婦も喜びを表情に表す。

「本当ですね。恵まれているんですよ、あの“三人”」

「……………」

右端のベッド。ゴトーはうつろな左目を病室の天井に向けていた。

「……………生きてたよ、オレ達」

ぼつりとつぶやく。

「ここは病院かあ……………。誰かがオレ達を見つけて運んでくれたんだなあ」

となりのベッドで、ツッキーも同じように天井を見つめている。

ゴトーは頭と右目を包帯で覆われている状態。他に腕や足にも軽い怪我を負っているらしい。

ツッキーも頭に包帯を巻かれて、頬や鼻にも軽傷。左腕が骨折しているらしく、石膏と包帯で固定されていた。

「『ホツキヨクグマ1・9号』の緊急脱出装置のおかげで助かったんだな」

ツツキーは「すばらしい技術だ」と言わんばかりに感動しているようだが、

「スイッチ一つで外へ放り投げられるだけのアレが、緊急脱出装置だった？ もっとマシな物なら、オレ達軽傷で済んだはずだぞ」

「命があっただけでマシだと思おうぜ」。　　つつててて……」  
頭の怪我を押さえるツツキー。

「……ツツキー痛そうだな。お前が一番ひどい怪我じゃないか」

「うん……、落ちたとき、何か重たい物が上に落下してきて……」

「そうか、大変だったな」

そして反対端のベッドのリートに目をやる。

手鏡を覗いてニヤニヤ笑っているリートに。

「小さな痕が一つあるだけ。これなら目立たないな、よかったよかった」

ゴトーは沸騰してくる怒りを覚えつつ、

「そしてなぜ、お前は無傷なんだい？」

力の限りツツコミたい衝動を精神力で抑えつけた。

「いやあ、落ちたとき、ちょうど落下地点にほどよいクッションが落ちててねえ」

「……………」

「……………」

ゴトーとツツキーは再び天井に目を戻す。

「オレ達、どうなるんだ？」

ツッキーがゴトーに訊くが、それに返す言葉などない。

任務は失敗し、持ち出した兵器はバラバラ。おまけに包帯ぐるぐる状態。

名誉挽回のために立てた作戦のおかげで、彼らの名誉は挽回不可能などのマイナス値。のこのこと窪井のもとへ帰ろうものなら、どんな目に遭うか想像すら恐ろしい。

「いや、正直に話して素直に謝ろう！ 頭領って、あれでも優しい人なんだ！ 涙を流して必死に謝るオレ達を残酷な目で見るよな人ではない！」

「涙を流して謝るのか、オレ達……」

「オレは嫌だね。涙でこの美貌を汚すなんてそんなこと いや、美形は涙を流しても美形に変わりはない。むしろ輝きが増えて、より美しく成長するオレ!？」

「……全員、心を決めたみたいだな」

そのとき、病室のドアへ足音が近づいてきた。

「まずは治療費踏み倒して、この病院を脱出するぞ」

病室のドアが、ガチャリと開く。

「キミ達、先生を連れてきたわよ。ちゃんと傷を見てもらいなさ

」

「……………」

「……………」

誰もいない病室。空っぽの三つのベッド。看護婦と医師は言葉を失い、立ちつくす。

開き放たれた窓では、カーテンがそよそよと風になびいていた。

むなしく。

ここはヘルプストの十字通り。

大通りであるこの場所には、さまざまなジャンルの商店が軒を連ねる。

「うまく抜け出すことができたが、さて、どうやって頭領に会おうか？」

ゴトーはツッキーとリートに相談。

「その前に涙を流す練習をしておかないと……」

「美しい涙をね。まるで海の宝石のような、ダイヤモンドのような

……」

「もうええわ。お前らの脳ミソなんぞ当てにしてない」

この二人の性格ほど、傷にしみるものはない。

ゴトーは一人で考えることにした。

「その言い方はヒドイよゴトーくん」

「そうだそうだ。オレの脳ミソは、シワ一つない、磨きぬかれた真珠の輝きを放っているのだ！」

「知ってる」

今この三人がニュートリア・ベネツへに帰ったとしても、門前払いを受けることは見え透いている。

直接、頭領ヘッドボイに会う方法を考えなければならない。

たやすくそうできるほど、彼らの組織は甘くない。どれだけ難しいことか、ゴトーはよく知っている。

「よい方法は……」

と思索していると、

「むむ！ オレの美形センサーが反応している！」



突然リートがワケのわからないことを言いだし、アクセサリー商店に目を向けた。

「おどきなさあいや、チミいー。このボクちゃんがドアを開けようとしたでしょうー」

「うわーん！ こわいよー！」

ちょうど店から出てきたところらしい少年が、小さな男の子に絡んでいた。

「ボクちゃんの顔を見て怖いとは何事か！？ この美しい顔に怖いなどと　ああ、そうかあー。怖いほど美しいって意味だねえ？

よおしよし、良い子だなあー、チミはあ」

少年は男の子を見下ろしてニタリと笑うと、とうとう泣き出した男の子そっちのけで歩き出す。

「……何か見慣れた性格のやつだ」

リートを目の端にも入れないようにして、ゴトーは言う。

「あれ、美形かあ？　化粧濃いだけだよ」

「いや美形だぞ、ツッキー。オレのセンサーが反応したから間違いない」

「自分と同じ種族に反応しただけだと思う」

「……ん？　ていうかオレ、あいつ知ってる」

リートが言う。

「ニュートリア・ベネツへの美形クラブのメンバーだ」

「……リート、お前、生まれて初めて人の役に立ったな」

「失礼な。オレの存在そのものが世界の利益だ」

「はいはい。とにかくあいつを見逃すな。追っていけば頭領に会えるー！」

なぜニュートリア・ベネツへの一員がこの町にいるのか。ゴトー達はそんなことを気にも留めなかった。

「美形クラブって、お前みたいなのが何人もいるのか？」  
「オレが部長であいつが副部長。現在の部員は二名だ。キミは入れないよ、悪いけど」  
「頼む。絶対に勧誘しないでくれ」

それから三人は、ヘルプストの外れにある森の中へ。

少年は鼻歌を吹きつつ、警戒する様子もなく整備された道を歩いていく。

「うわあっ！ 蚊が、蚊がボクちゃんの美しい顔を……！ ぎゃあ  
ああ……！」

「……うるさいなあいつ」

騒がしいおかげで、尾行に気付かれていないのだが。

「ふ……、あいつもまだまだなあ。蚊に刺されたくらいで下がる  
美など、真の美ではないわあ！ 痛てっ！ 草の先っぽが！

ぶつぶつができてしまう……！」

「……ツッキー、こいつを黙らせてくれ」

しかしこんな森の奥に何があるのか。

それを想像するより先に、三人は驚きで立ち止まる。

そこにあつた物は

「……な、なんじゃこりゃあ……！」

同時刻、宗萱とグラソンは港町の展望台で、黒く曇っていく“空  
気”を感じていた。

「何でしょうか、この感じは？」

「……ああ、“嵐”が来るかもしれないな」

殺気と狂気が、どこからから風に乗って流れてくるようだ。

「調査が必要ですな」

「ああ、すぐにでも、な」

宗萱はうなずいて去っていく。

グラソンは手すりに寄り添って遠くを見る。

「……来るか、窪井」

## 59：白い剣と黒き魔物

また夜が来る。

早めの夕食後、マハエ、エンドー、ハルトキの三人は、宿の地下浴場でくつろいでいた。

「……………」

いや、くつろぐような気にはなれないでいた。

漂ってくる“黒い空気”を、三人も微かに感じていた。

「何だろうね？ 落ち着かない」

ハルトキは湯船から出て、少ししてまた入る。を繰り返している。案内人を通した宗萱の指示

「早めに食事を済ませて待機しててください」

それを聞いて落ち着くことなどできない（ちゃっかり風呂には入っているが）。

「戦いの準備、しといたほうがいいのかな？」

マハエが言う。

「そうかもな。ずっと感じるよくわからない“何か”を、宗萱とグラソンも感じているはずだ。それを今調査してる。たぶん、オレ達も駆り出される」

「じゃあ風呂なんか浸かっている場合じゃない！」

ハルトキは早々に出て行くこうとするが、エンドーが止めた。

「だからこそだ。……ここで気持ちを安定させて、落ち着かなければならない」

「……………」

エンドーが言っていることはもっともだ。とは、マハエもハルト

キも思った。

なぜかこういう場面だけに重みを感じるエンドーの言葉。彼はいつもマイペースだが、それはつまり、いつも本能に従っているという事だ。だからこそ、危険を察知する能力や、置かれた状況の深みを見抜く能力に長けていると言える。

「緊張は押し殺すよりも開放していたほうがいい。押し殺した緊張は、いざというときに暴発してしまう」

それは二人にとって言われなくても分かっていることだったが、言われなければその通りにできない。

「わかったよ……」

ハルトキは湯船にもどり、三人並んで精神を集中させる。

ゆっくりと心臓の鼓動を落ち着かせ、素の自分を取り戻す。静かに息を吸い、静かに吐き出す。

「みなさん！ 戦いの準備をして今すぐ町へ出ててください！」

突然、案内人が叫ぶように声を現し、三人の心臓は跳ね上がる。

「……お前さ、台無しだぞ今の空気。オレ達せっかく心を鎮めてたのに……」

あーやだやだ。と、マハエは湯船から出た。

「え？ あの、わたし何か？」

「キミもね。少しは戦いに参加してみなさい」

ハルトキとエンドーもマハエに続く。

「ちょっと、せっかく知らせに　　ここはわたしの話を聞くべきだと思えます！」

「わかったから、落ち着いて話そうね」

「吉野さん、冷静ですね」

すぐに服を着て、短剣のホルダーを腰に装備。

気持ちはともかく、戦いの準備は完了した。

何事かと、町へ出てみたはいいが、静まり返った様子から事態の把握は不可能だ。

「宗萱さんとグラソンさんからの報告です」

案内人が説明を始める。

三人はとうとう来たか、と、彼の声に耳をかたむける。

「報告によると、現在『ゾンマ』の町と『ヘルプスト』の町付近の森で、複数の敵兵を確認。見回り中のS A A P達にも、各町へ集結するよう指示を出したところです」

「敵兵つて？」

マハエが訊くが、答えを求めるまでもないことだ。

「窪井 ニュートリア・ベネツへです」

三人は目を見つめあい、同時にうなずいた。

「オレ達はどうすれば？」

案内人を“見上げる”マハエはすでに冷静だ。ハルトキもエンドーも同じく。

「宗萱さんの指示では ちよっと待ってください、たった今S A A Pとの連絡が……。みなさん、展望台へ向かってください！」

「どうした？ 何かあったのか？」

「展望台で待機中のS A A Pとの連絡が途絶えました」  
「……………」

三人は走る。

始まる戦いが恐くないわけではない。

恐いからこそ冷静でなければならないと、三人は知った。

そうでなければ、仲間や親友を守ることが出来ない。

薄闇をまとい、空へそびえ立つ展望台は、まるで不動の巨人見ようによつては恐ろしいのだが、三人がそこで目にしたのは、それとはまた別としての恐怖。

建物の足元では、たった今“戦いが”終わった後。二人のSAA Pが、赤いバケモノによつて撃破されたところだ。

「遅かった……！」

三人は短剣を抜いて、それぞれの武器を発動させる。

「いつは……」

赤いバケモノ 赤いマントのドク口面。三人の気配に気付いた新型対SAA Pが、ギョロリと三人に面を向けた。

ドク口面の目の部分から漏れる赤い光が、火の玉のようにユラリと揺れる。

「なぜここに対SAA Pが!？」

マハエは壊波槍に魔力を込めつつ、十分な警戒の眼を敵からそらさない。

相手は姿を消し、動きが素早いうえに遠距離攻撃をしかけてくるのだ。

「窪井の目的はおそらく、シラタチの殲滅。ゾンマとヘルプストへ兵を配置したのも、我々の戦力を分散させるため」

「ほかの町で待機してるSAA Pも、こんな状態かもしれないって!？」

「安心してください、エンドーさん。ゾンマには宗萱さんが、ヘルプストにはグラソンさんが待機しています」

「そうか、それなら安心だ。オレ達がここを片付けりゃな」

エンドーは発破鋼を振り上げ、敵へつつこむ。

ハルトキが止めようとしたが遅い。

「やれやれ、冷静なのに猪突猛進じゃあ、台無しだね」  
「けど、いいオトリだ」

マハエとハルトキは加勢するでもなく、黙って観察を始める。  
直前まで動かない対S A A Pは、エンドーの金棒がドク口面を打ち砕こうとする寸前に素早く後退し、大きく左右へ移動して攪乱させる。

エンドーは横へ腕を振り、三つの魔力球を飛ばして同時に爆発させた。  
その爆風に乗るかのように、対S A A Pはひらりと舞い上がると、空中で真空の刃　カマイタチを放つ。

「うわおっ！」

エンドーは金棒を前に構え、攻撃を防御。

「相手は風に強いみたいだね」

「ああ、宗萱の技もことごとく避けられてた」

「それじゃあ、ボクの出番だね」

カマイタチがエンドーの足をかすって地面を裂いた。

「ボデイに当ててみるー！」

挑発しているが、エンドーの攻撃は一つも敵にヒットしてはいない。それどころか今の攻撃で足を負傷し、地面に膝を着いてしまった。

「あ、ヤバイ」

対S A A Pは上空に留まったまま、マントを全開に。　カマイタチの連続攻撃に移る。

「ちよつ、オレまだ足が……」

そんな言葉にも容赦なく、放たれた連続攻撃。

だがその軌道は逸らされた。

エンドーの数メートル横の地面を切り刻み、すぐに止む。



ハルトキが対S A A Pを鎖で捕縛していた。

「エンドー君、傷の治癒にも時間がかかるんだから、無理はいけ  
いな」

「……お、おう」

「そつだぞ。それに」

マハエはハルトキの鎖を足場にして、足から凝縮波を放ち、空  
中に舞い上がる。

「お前はV B Tで痛みに慣れすぎてる！」

対S A A Pよりも更に上空から、凝縮波を込めた強烈な蹴りをド  
クロ面に打ち込んだ。

「ぐぐおおおお……」

面が割れると、低く恐ろしいうなり声を上げて、対S A A Pは溶  
けるように消滅した。

第一部隊の証である赤い宝石が地面に落下し、倒れたS A A Pの  
傍らへ転がった。

「お見事です」

「ふー、助かったー」

エンドーは地面に大の字。

「いきなり突っ込むやつがあるか」

マハエが彼の頭をピシッと叩く。

「フロローは任せたい！ っ聞こえなかったか？」

「それを声に出してたか？」

「……………」

ハルトキが短剣を納めて、

「でも、エンドーが引き寄せてくれたおかげで簡単に終わらせるこ  
とができたんだけどね」

それから案内人に指示を仰ぐ。

「みなさん、敵兵は港町から東にある『ヘルプスト』、西の『ゾンマ』の二つの町を襲撃するつもりでしょう。ですが」

「全滅させるって言うのか？」

マハエは言ってから、気付く。

「……まさか、その敵兵って」

「そう、始めにウイルス汚染のターゲットとなった町の住人。感染者達です」

三人は愕然とする。

エンドーが“黒猫”と呼ぶ、ウイルス感染者達。彼らは窪井に服従するしもべと化しているが、本来は普通の人で、誰かの親であり、娘であり、息子である。

“敵”と呼ぶのはあまりにも理不尽だ。

「ワクチンはまだ完成しないの？」

そう訊くハルトキは、大林の部下、ソウシを思っている。

感染者はもとにもどすことができる。だから排除するわけにはいかない。

「残念ながら、あと一步。……ですから今回の作戦は、住民達の避難を最優先とします」

「感染者には手を出せないか……。くそっ！ 窪井の野郎はそれをわかっていて！」

エンドーの歯がゆい気持ちは、マハエやハルトキ、案内人と同じ。大勢の住民だけならまだしも、敵兵までもを守らなければならぬのだから。

「……まあいいよ。それで、まずボク達がすべきことは？」

「まずは三人の配置。マハエさんは、大至急『ゾンマ』へ向かってください。宗萱さんがそこで待機しています。吉野さんは『ヘルプスト』へ行き、現地のグラソンやS A A Pから指示を。エンドーさんは『グロス・トーア寺院』付近の安全確保へ。この作戦はまず、東のヘルプストから住民達を移動させ、港町の住民と合流、そのまま寺院へ非難させます。ゾンマの人々も同じ場所へ。あの高台

の広い寺院なら、避難場所としては最適でしょう」

三人はそれぞれの行動を頭の中で再確認した後、

「わかった」

と、うなずいた。

「それから、これはわたし自身からの指示です。……何よりも、自分の命を大切にしてください」

「……………」

微かに笑っただけの三人。それが返答だ。

YESかNOか、それは彼ら自身の中にある。

「今日は満月か……………」

光を増してきた丸い月を見上げて、ハルトキがつぶやいた。

## 60：動き出す波

西の町、『ゾンマ』

まちの入り口には大量の松明が焚かれ、そこへ続々と町の住民達が集まってくる。

「できる限り荷物は持たないように！ お年寄りや子供への付き添いを率先してください！」

S A A Pが叫びながら住民達を整列させる。

「詳しく説明しろ！ 突然、避難だなんて言われてもどうすりゃいいか！」

「そうよ！ モンスターが攻めてくるって、それを退治するのがあなた達の仕事でしょ!？」

「守民軍の姿が見えないぞ！ どうなってる!？」

住民達の罵声や不安の声。その前に宗萱が立つ。

「事態は一刻を争います！ 詳しい説明は避難先の寺院でいたします！ 今はどうか落ち着いて我々の指示に従ってください！」

「ふざけるな！ 町の外はモンスターがうろついてるんだ！ オレ達をやつらのエサにするってのか!？」

「心配は無用です！ 我々が全力で被害を阻止しますので！ その人、写真を撮っている場合ではありません！」

住民達が納得しなくても、強制避難させるしかない。

「（窪井は感染者達をすべて放つつもりでしょうか……）」

そのとき、人の波をくぐってマハエがやってきた。

「小守真栄、ただいま到着！」

ビシッと敬礼する。

「意外と早かったですね」

「いやあ、遅れちゃマズイと思って、魔力フル活用して“跳んで”きた」

笑顔で「ふーっ」と“良い汗”を拭うマハ工。

「……これから戦いが始まるのですよ？ 無駄な労力でしたね」

「……うっ。そ、それよりも、オレの役目は？」

「真栄さんはわたしと共に、住民達を援護します。S A A Pが寺院へ避難する最短ルートの安全を確保しているので、それが確認できしだい、住民達を移動させます。その後から感染者達の進攻を阻止するのが、わたしと真栄さんの役目です」

「そう、それが厄介だな。ワクチンもなしに感染者を止めるのは……」

「そのための準備はできていますよ」

宗萱がマハ工に小さなスプレー缶を渡す。

「『気化催眠剤』です。強い催眠作用のある薬剤をスプレー式に作らせました。対ニュートリア・ベネツへ用開発していた物です。これを感染者の顔面に吹き付ければ、一瞬で動きを止めることができますが、ただ、風向きを考えてくださいね」

「……戦いの真っ只中で眠りこけるのは嫌だからなあ……」

そしてふと思ったことを口にする。

「眠らせた感染者をどうやって運ぶのかも、バツチリ考えちゃってるよね？」

「え？ ……あー……」

S A A Pが駆け寄り、宗萱に言う。

「チーフ、避難ルートの安全を確認しました」

「……さて、それでは移動を開始しましょう」

「『え？ ……あー……』の後は何？ ねえ」

「適当な場所に集めて保護します」

「適当な場所ってどこですかー!?」  
先行き不安だが、今は住民達の避難が最優先である。

騒ぎは収まっていなかったが、強制的に避難移動は開始された。

『ゾンマ』から寺院までの距離は最短ルートで約二キロ。年寄りのペースなら一時間近くかかる。

「軍からの支援は？」

「年寄りや障害者のために、馬車を何台か手配してくれるそうです」

「……それだけ？」

「極力、モンスターとの戦いには関与しない。それが彼らの新しい規律らしいです」

そう言うが、宗萱は少しも呆れたり怒ったりする様子がない。

軍がモンスターとの戦い自体には関与しない。『シラタチ』という“便利な”モンスター処理係が存在する上では、それも理解できることだった。

「感染者は、ヴァルテュラの森に潜伏しているのか……。動きがあればわかるのか？」

「……いえ、もう動き出しています」

宗萱が言った直後、森の入り口からユラリと黒い影が現れた。

黒いマントとドク口の仮面。感染者『黒猫』の一人だ。

「来た！」

マハエは右手に『壊波槍』を出現させ、左手に催眠スプレーを構えて一歩踏み出す。

先頭の一人に続き、後から続々と姿を現すドク口面。

一人ひとりが、殺傷のための武器を手に、振りかざして歩み寄る。

「一人残さず止めますよ！ 町の人々に近づけさせはしません！」

宗萱も刀とスプレーを構えた。

全身が覆い隠されて本来の姿は確認できないが、中には女性や老人もいる。手荒な扱いは避けたいものだが

「うわっ！」

大きなナイフをかわした直後、マハエは尻餅をついてしまった。

再び振り上げられて落とされるナイフを槍で受け止めるが、その攻撃力には微塵の容赦もない。

「手加減するのは難しいか」

一言「ごめん」と謝っておいて、マハエは覆いかぶさる人物を足で蹴って退ける。そしてすぐに起き上がるとその顔面にスプレーを吹きかけ、停止させた。

黒猫集団は目測でも十数人。

それだけの数ならば時間をかければどうにかなりそうだ。しかしS A A Pは皆避難民の保護に当たり、黒猫相手にしているのはマハエと宗萱の二人だけ。

“逃さず止める”というのは難しい。

さっそく三人の黒猫が町から出ていて、それをマハエが追おうとする。

「グルル……！」

不吉なうなり。

「くそ！ こんなときに厄介な要素が！」

町の外にはモンスターがうろついている。

移動開始前に一掃されていても、この騒ぎをかぎつけたのか、数匹が集まってきた。

まず現れたのはドラゴン。そしてそいつが真っ先に獲物として目を向けたのは、町を出た黒猫だった。

「まずい！ 宗萱、ここは任せた！」

言って、マハエは黒猫を助けるべく、『壊波槍』に魔力を込めて

ドラゴンへ走る。

黒猫集団を阻止しつつ、同時に彼らをモンスターから守らなければならぬ。

「泣きたいぞ、チクシヨウ！」

槍を振り、その刃でドラゴンの頭を一撃で落とした。

しかし安心はできない。その背後から助けた黒猫が棍棒を振り下ろしてきたのだ。

「人”にもどつたら、一言でもお礼を言ってほしいね！」

武器を弾き飛ばし、スプレーで三人を眠らせた。

「真栄さん！」

宗萱の叫び声にマハエは休む間もなく振り向く。

黒猫は次々と町の出入口を目指してきていて、立ちはだかるマハエに攻撃の構えを見せている。と同時に、モンスターの影も反対から彼に近づく。

「対処しきれないって！」

狭み撃ちの真ん中で迷うマハエ。

黒猫の数は多いが、モンスターのほうはそうでもない。さいわい、ドラゴンのように厄介なモンスターは見えず、二足歩行のトカゲや巨大なクモだけ。そちらを蹴散らしてから黒猫に移るほうが安全ではある。しかし、町から出た黒猫に分散されてしまったはその後の対処が面倒になる。

宗萱は町の中で戦っていてとても手を回せる状況ではない。

「ああ、くそおっ！！！」

一瞬で判断できない自分にもどかしさを覚えるマハエ。

だがそのとき、モンスターの悲鳴が響いた。



見ると、トカゲモンスターが倒れ、“何か”の痛みに悶えている。マハエはモンスターの後ろに立っている人物を見て驚く。

「モンスターはオレに任せてくれ！」

そこには男の姿があった。

巨大グモが男に跳びかかるが、投げられたナイフの一撃を頭部に受け、ひっくり返って絶命した。

「アオバさん！」

マハエは驚きとともに安堵する。

「よう！ また会ったな、シラタチ！」

「どうして、アオバさんが？」

いや、訊くまでもないことだ。

彼は行動していたのだ。ヴァルテュラの件と同じように軍とは別として。

「よし！」

この状況ではたった一人の加勢でも、とてもありがたい。やる気を出し、マハエも黒猫に向かった。

## 61：ハルトキとS A A P

東の町、『ヘルプスト』

到着したハルトキを、二人のS A A Pが出迎える。

「お待ちしていました。まもなく住民達の移動を開始します」

「グラソンが待機してるんじゃない？」

「副チーフはつい先ほど、寺院へ向かわれました。……すれ違いませんでした？」

「いや……、見てない」

「おかしいですね……」

S A A Pは首をかしげる。

「それは置いといて、ボクはどうすれば？」

「はい、あなたは我々二人とともに、感染者達を移動中の住民達に接触させないよう、ここで足止めを」

そしてマハエと同じように『催眠スプレー』を渡される。

「わかった。まずここを出発して、港町の避難民と合流するんだっ  
たよね。そこから大勢で寺院を目指す……。道のりは長いね」

「ここから港町まで海沿いの道を進みますが、そこにモンスターは  
確認されていません。問題は港町から寺院へ向かう途中。その  
道では以前、モンスターを複数確認しており、要注意です。まずは  
この場所ですべての感染者を阻止し、すぐに港町へ向かいます」

ハルトキはうなずく。

「うん。任せてちょうだい」

しかし彼の頭には、大林の存在が大きく膨らんでいる。大林  
がいれば、この状況でもどれだけ安心できるだろうかと。

「（いつまでも頼りにしているわけにはいかない）」

強くなつてやる。

ハルトキはそう決めていた。  
大林の弟分にふさわしい男になるため。もつと彼の力となり、守るために。

移動を開始する住民達を背に、ハルトキは身構えている。  
闇へ耳を澄まし、敵の気配を感じ取ろうとする。

町中に松明が焚かれて、灯りには不自由しないが、明るい中では少しの闇が際立って見える。

「……………」

ひとつ呼吸してから、ハルトキは『縛連鎖』を発動させた。

「数は、十数……………」

闇の中から黒マントが現れ、ドクロの仮面が不気味に揺れる。

「『黒猫』のお出ましか」

気を引き締めるため、「ふーっ」と深く息を吐き出す。

そのとき、たった今“到着”したらしい案内人が話しかけた。

「やはり来ましたね。吉野さん、同時刻に『ゾンマ』でも感染者達  
が出現しました」

「マハエは無事？」

「いまのところは、ですね。しかし、それを訊くまでもありますか？」

案内人が言うと、ハルトキは顔で笑った。

探った気配のとおり、黒猫の数は十と少し。

「“隕石”の町からいなくなった感染者は五十人。そのうち二十人は監視下にあつて、ここに今、十人以上いる……。マハエのほうも同じくらいでしょ。やっぱり、感染者のほぼ全員を放ってきたと見て間違いないね」

「そうですね。窪井にとっては、使い捨ての人形のような“物”なのでしょう」

「絶対に、窪井の計画を阻止する！」

じりじりと間合いを詰めてくる黒猫達へ、もどかしいと言つようにハルトキは自ら走り出した。

『縛連鎖』を握る手を後ろへ引き、前へ振ると同時に鎖が伸びて近くの二人を縛り、動きを止めた。

即座にハルトキはスプレーを構えて近づくが、縛った二人の後から、黒猫はずんずん進攻してくる。

「縛っても、そのまま近づくのは危険か……。それなら」

ハルトキは一瞬まぶたを下ろし、魔力を込めた眼をかつと開く。

彼の眼には、すべての物の動きがとても遅く映っている。

「（よし、『動体視』は快調だね）」

『音無しの世界』を体験してから、魔力の発動が前よりも軽く、より素早くできるようになった気がしていた。“魔力の真理”への、更なる一步を踏み進んだような感じだった。

『動体視』のおかげで、多数の攻撃への対処も容易い。

しかし視界が三百六十度を開けるわけでもなく、やはり背後からの攻撃には弱いのだ。その上、ハルトキの武器、『縛連鎖』も、基本は攻撃向きの武器ではない。敵を縛っている間は無防備だ。

敵の渦へ飛び込むのは自殺行為だが、そこから離れて少人数ずつを相手に戦っているのは、黒猫を町の外へ逃がしてしまう。

スプレー缶をしっかりと左手に持ち、『縛連鎖』の鎖を収縮させながら縛った二人に迫り、一秒で眠らせた。

すでに頭上二十センチのところまで別の黒猫が短剣を振り下ろしていたが、地面に倒れこんでそれを避けると同時に足を振り上げ、弾き落とした。そしてその姿勢のまま、鎖でまた二人を縛り、収縮

を利用して立つと、すぐさまスプレーを吹き付けた。

「次　五体目！」

鎖を手元に回収し、黒猫の一人が両手で振り上げる棍棒を片手で横へ反らせ、眠らす。その黒猫は体を崩すときに少女らしい呻き声を発していた。

素早く次々と眠らせていくハルトキにも、黒猫達はいつさい動かない。三人が左右前方から鈍器を振り上げたとき、とっさにハルトキは三方へ『金縛り』の魔力を放った。

魔力に縛られて動きを止める三人。　しかしハルトキも動けなくなる。

少しずつ敵の動きが速く感じてきて、視界がぼやけていた。

「くっ……」

気付けば膝をついている。

『縛連鎖』『動体視』『金縛り』と、一度に魔力を消費しすぎたのだ。

「（まずい……。こんな状況で……）」

だが、ハルトキは攻撃を免れていた。

見上げると、何人かの黒猫が眠らされて地面に倒れる。

「しっかりしてください。無茶はいけませんよ」

二人のS A A Pがハルトキを守っていたのだ。

「……ごめん、ありがとう」

S A A Pが盾となり、ハルトキはいったん集団の外へ逃れる。

「張り切り過ぎたね……」

「そうですね。しかし、そのおかげで三分の一は減りましたよ。あとはS A A Pに任せて少し休んでください。彼らも強いですよ」

そう言う案内人の言葉どおり、さすがは戦闘用として作られたS A A Pだ。一つ一つの攻撃を確実に防ぎ、かわし、眠らせていく。

「たしかに、強い」

これならあと三分しない内にすべての黒猫を片付けてしまっただろう。

「でも……。これだけのことなのかな？」

ハルトキの独り言だったが、案内人が反応する。

「敵のことですか？」

「うん。物足りない感じっていうか……。黒猫を片付けて終わり……？ いや、ボクにはそうは思えないんだ」

「わたしも同じ事を考えていました。窪井は、たった数十人の感染者に、我々『シラタチ』が屈すると思ったのでしょうか？」

「そうだよな。もしかすると、これも窪井の計算のうちなんじゃないかな、って思える」

それから少し間を置く。あまり口には出したくない言葉を、小声で言った。

「大林さんがここにいれば……。少しは窪井の考えも見抜けたのかな？」

言うてから、バカバカしいと思った。今は期待だけ話をしている場合ではない。

頭を振って雑念を払い、ふと空を見たハルトキは、西の空に何かを見つけた。星ではない何かの光が瞬いたように見えたのだ。

しかしそれに目を凝らすより先に、S A A Pの悲鳴が耳に入った。

S A A Pは松明の灯りが建物でさえぎられた暗がりの中に。

ほぼすべての黒猫は眠らされているようだった。見回しても動くマンツの姿はない。

しかしあと一体、S A A Pが剣を構えて警戒する暗がりの中に、潜んでいるようだ。S A A Pは一人。臆するように一歩、後ずさった。彼の足元には、もう一人のS A A Pが倒れている。

手ごたえのある黒猫もいたようだ。

まだ魔力が回復していないが、それでもハルトキは加勢へ走った。

と、そのとき暗がりの中で何か動く。闇が保護色になり黒いマンツは見えないが、ハルトキにはキラリと振りかざされる武器が見えた。

防御で剣の側面を前に構えるS A A P。                   しかし……、

「ぐあぁっ!!」

振り落とされたのは巨大な斧。

斧は構えた剣をまるで枯れ枝のように粉碎し、勢いそのままにS A A Pを切り裂いた。

ハルトキはとっさに急ブレーキをかける。

S A A Pの身を案じるよりも先に、強い恐怖を覚えた。

ずしんずしんと、斧を担いで暗がりから姿を現したのは、二メートル近い身長で筋肉の塊のような、超重量級の黒猫。ドク口面の下で、あらい息づかいが離れた位置からでも聞き取れる。

「……いい!？」

仰天し、ハルトキは回れ右。

『黒猫』ならぬ『ボス猫』は、ハルトキを見つけるや、体格を無視した機敏な動きで迫る。

逃げないほうがどうかしている（ハルトキ論）。

「うぎゃあああああ!!!!」

「ちよつと、何逃げているんですか!? 戦ってください!」

「ムリムリムリムリムリムリムリ!!!! あんなホラーゲームの中ボスなんて、魔力なしで倒せるわけがない!! 絶対無理! 素手で倒した人、勲章あげる!! ていうか誰か倒してえ!!!!」  
もはやハルトキには、魔力が回復するまで叫んで逃げることは出来ない。

「吉野さん! どこへ行くつもりですか!？」

案内人が言い、ハルトキは自分が走っている場所を確認する。

「あ。町から出てる!」

逃げることに夢中で、ハルトキは避難ルートを港町へ向かってい

ることに気がつかなかったのだ。

「でも止まらない!!」

「えええ!?!」

このままでは避難民に追いついてしまう。しかしすぐ後ろを巨大斧が追ってきていると思うと、振り向く気にすらならない。が、必死に逃げる中、ハルトキは二つの影とすれ違った気がして、慌てて振り向いた。

二人の男が並んで立っていた。

ハルトキの盾となるように、彼に背を向け、追ってくるボス猫を待ち受けている。

袖をまくり、拳を鳴らすリーゼントとオールバック。

「オレは足を“やる”ぜ、赤瀬」

「ふん、オレはどちらでもいい」

青島と赤瀬。『田島弘之』の幹部二人だ。

ハルトキはあ然としたまま息を整えている。

ボス猫が接近し、新たに現れた二つの獲物へ、斧を振り上げた。

「行くぜ!」

青島が叫ぶと、二人は同時にボス猫へ一直線に走る。

鈍く落とされる斧の脇を抜け、赤瀬はボス猫の首へ腕を回し、青島が足を払う。

「うごごっ!」

ボス猫は面の下で驚いた表情をしていたのだろう。その巨体ゆえに、後ろへ倒される際の重力に抗うことはできない。

ズシンツ! と音をたて、ボス猫は後頭部から地面に倒された。

「このバケモノ!」

青島がボス猫の顔面へメイスを振り上げる。

「青島さん! この人は一般人なんだ!」



「え？」

ハルトキが駆け寄るが、すでに赤瀬がその腕を掴んでいた。

「氣い失ってるぜ」

「……………」

青島は大人しく武器を下げた。

ハルトキにとって、この二人はとても心強い仲間だ。しかし安堵する気持ちの中には、「この状況で出会ってしまった以上、もういろいろと話してしまうしかないなあ」と、沈む部分があった。

早くも赤瀬は、ハルトキに睨みの眼を向けている。

「ああ……………」

大林のことも説明しなければならぬのかと思うと、今すぐ逃げ出したくなった。

## 62：山の向いじ

『ゾンマ』の住民は無事、寺院周辺の安全地帯へ入ったらしい。案内人による報告だった。

モンスターや黒猫による被害がなかったことを、マハエと宗萱は喜んだ。

アオバの加勢のおかげで、難なく黒猫の阻止は成功した。眠らせた黒猫達全員を町の安全な『酒場』に運び込むのはひと苦労だったが、黒猫達の身の無事も重要事項だ。

面をはいだ黒猫達の顔を眺めていて、マハエは戦いの中でそつちのけだった“怒り”という感情を思い出した。

戦場では不釣り合いな顔達がそこにはある。

「……説明してくれよ」

酒場のカウンターに座り、酒ビンをもてあそびながらアオバが訊く。

森での戦いでアオバはシラタチの“特殊な力”を知った。しかし

「こいつらは、何日か前にソレイアドの町で行方不明になってた人達だよな？ 隕石から発生した妙な“刺激”を受けて頭のイカれた連中が、自らの町を襲撃したって聞いたが？」

最初に出現した感染者達をソレイアドの軍支部に移送するさいに、シラタチが軍に吹き込んだ“デタラメ”がそれだ。

しかし今回、アオバはそれを疑っている。ゾンマとヘルプストへの襲撃とは、たしかに“頭のイカれた連中”にふさわしい。しかし、“隕石に毒された連中”が取るような行動とは思えない。

「オレはあんた達を信用した。だから」

「我々もあなたを信用していますよ。……ですが、話したところであなたには何もできません」

「たしかに軍の中であんた達の秘密を知っているのはオレだけだ。」

オレ一人が協力したところで軍人の域を超えるようなことはできない」

酒ビンをカウンターに置き、アオバは宗萱へ迫った。ナイフを抜くアオバに、マハエは座っていた椅子から立ち上がり、短剣を向けた。宗萱は動かない。

「あなた達は、オレを救ってくれた！」

ナイフを後ろへ放ち、カウンターの酒ビンを貫く。飛び散るアルコールやガラス片は、彼の怒りを表しているようだった。

アオバは目を見開いて宗萱の閉じたような目を見る。

「知りたいんだ。……友人として」

「……………」

顔には出さないが、宗萱は困っているようだった。それがわかってマハエにはフォローもできないし代わりに答えることもできない。

しかしそうするまでもなく、宗萱は自ら視線をそらす。

「……………話は後にしましょう。次の客が来たようです」

聞いてすぐにマハエは窓へ跳び、外をうかがう。そして舌打ちをする。

「新型だ……………！」

その言葉の様子だけで、アオバは強敵の出現を察知したらしい。サバイバルナイフを抜いて出口へ向かった。

外へ出ると生ぬるい夜風が鼻をくすぐる。恐ろしい敵の臭いが鼻を突くようだった。

赤マントは三人を探していたのか、酒場の周辺をうろついていた。三人を見つけた新型対S A A Pは、地面をすべるように移動してきて、威嚇するように面の下から、赤く強い光を放った。すると、

空間が歪んでもう一体の赤いマントが姿を現し、二体が並んだ。

「三対二かよ……、「こつちが」不利だな」

早くもカマイタチを繰り出さんとする対S A A P。

アオバは二人に質問を投げかけたくて仕方ないという顔をしているが、その前に宗萱が言った。

「アオバさん、こいつは明らかな敵です。手加減は無用ですよ」

「……え？　だがこいつのマントは」

もはや説明せざるを得まい。マハエと宗萱は思った。

「とにかく、手加減をすれば殺されます！」という宗萱の言葉で、

アオバはそれ以上何も言わないようにしたようだ。戦いに集中し、

「後でちゃんと話してもらうぞ」と、目で訴えていた。

アオバはサバイバルナイフと逆の左手の指に、投げナイフを二本挟んだ。

「アオバさん、やつらの弱点はドクロの面です！　マントに攻撃は通用しません！」

マハエが言った。

「そうか、的が絞られていれば楽だ」

不敵な笑みを浮かべ、アオバは投げナイフの一本を放った。

正確に面を射るはずが、対S A A Pがスルリと横に避けたおかげでそれは外れ、二体が同時にカマイタチを放ち、し返す。

マハエと宗萱は予測していたおかげですぐに反応したが、アオバは一瞬遅れて地面を転がり、腕を真空の刃がかすった。

「つつ！　何だあれは！？」

「あー、説明し忘れてました。やつらに武器は必要ないんです。マントが開いたら特に要注意ってことで」

「何だそりゃ！？」

適当な説明で納得するわけではないが、続いて放たれたカマイタチの一撃で、疑問は吹き飛んだ。

「（オツケー、いつもどおり戦えばいいさ）」

サバイバルナイフを指で回し、逆手に持つ。そして突進し、ナイ

フを振るが、対S A A Pはふわりと宙に浮いてそれをかわした。

「おいおい……、それもアリか？」

接近戦では効果がないと知る。

マハ工が『衝撃砲』を蹴り放ち、対S A A Pのマントに直撃させた。さらに一発、二発。対S A A Pは空中でよろめいた。

すぐさまマハ工は地面に凝縮波を放ち、大きくジャンプ。大きく振り上げた槍で対S A A Pを切り裂く。しかしさすがに素早い。槍の刃はマントに少しの切れ目を入れただけだった。

着地したマハ工に続いて、宗萱が跳び上がり、同じ敵へ刀を振った。魔力はまとわない、通常の刀だ。宗萱の『風』の魔力は、新型対S A A Pに通用しないから。

だがそれすらもかわされ、まるで遊ばれているようだ。

そのとき、もう一体の対S A A Pがマントを開いた。

「来るぞ！」

マハ工は宗萱と建物の陰へ避難し、アオバはただならぬ気配を感じて酒場のドアを押して飛び込んだ。

真空の刃が乱れ飛び、松明を切り倒し、建物の壁に爪あとをつける。

ひとしきりの攻撃の後、最後の刃が地面で碎け、マントは閉じられた。

宗萱が陰から飛び出す。魔力を込めない刀で敵を攻めるが、刃が仮面を破壊する寸前でカマイタチの一撃を食らい、背中から地面に転がった。

「くっ……、手強いですね……。どうにかしてスキを突かなければ……」

そのとき、酒場からアオバが出てきた。左手に酒ビンを持ち、それを対S A A Pに投げつけ、そして直後に放った投げナイフがビンを粉碎し、アルコールが対S A A Pに降りかかる。

「店で一番強い酒だ。味はどうだ？」

さらに投げナイフを三本。アルコールのしたたるナイフを地

面ではらけている松明の炎で引火させた。

「オレのおごりだ！」

三本もの火だるまナイフは、対S A A Pの素早い動きを確実に捉えた。

一本がマントの端をかすると、アルコールまみれのマントはたちまち炎に包まれ、熱に苦しむように空中で暴れながら、対S A A Pは灰と化した。

「アオバさん……」

宗萱は安堵と敬意の念を表情に表す。

「油断はできない。もう一体いるからな……。ん？ 真栄はどこだ？」

宗萱はあごで示す。残った対S A A Pの頭上を。

建物の屋根から仮面の頭、目がけてジャンプし、槍を振り上げるマハエ。

燃え尽きた仲間に気を取られ、完全なスキができている対S A A Pが、まして頭上のマハエになど気付くはずもない。

「はあっ！」

魔力で振動を与えられた槍の刃は、仮面を中央から真っ二つに、マントすらも同じように切り裂き、地面ギリギリで止まった。

膝を曲げて着地したマハエの背後で、仮面とマントがヒラヒラと舞いながら、闇に溶けて消えた。

「完了、っと」

マハエは立ち上がり、一息つく。

「さすがです。アオバさんも」

「どうも。さて」

眉を上げ、視線をマハエと宗萱に向ける。

「わかりました。……我々の目的、話せる範囲でお話しますが  
まずは寺院へ向かいましょう」

「逃げるなよ？」  
「逃げませんよ」

そのころゾンマから遠く離れた場所で、かすかな“戦いの気配”を感じ取る人物がいた。

一つ山の向こうから伝わるケモノの咆哮と太刀音を、その人物の魂は感じ取っている。

人物はその場所へ、ひたすらに地面を蹴り、急ぐ。

突き出した岩の上で一度足を止め、まぶしそくに満月を見上げてから、山の向こうへ視線を変え、見据えて、高く跳んだ。

満月の下、地面に写る人物の影は、まぎれもない“人”だ。

しかし、その動きは明らかに違った。

人ではとうてい及ばぬ速度、跳躍力　　地面を蹴るたびに土と草が舞い上がる。

人物はニヤリと笑った。

喜びに顔をゆがめていた。

また山の向こうで、太刀音がはじけた。

## 62：山の向こう（後書き）

お待たせしました。

更新が大きく遅れ、申し訳ありません。

さて、ペースを上げて更新しますよー、っと。



### 63：避難、そして

避難所、『グロス・トーア寺院』

エンドーは続々と避難してくる町の住民達を待機場所へ誘導する。グラソンは、エンドーが寺院周辺のモンスターを片付け終わった後に遅れて到着し、「モンスターに足止めを食らった」と言っていた。

一言二言の文句はあるが、それは後回しだ。

初めに『ゾンマ』の人々が寺院に到着。寺院には二つの主な建物があるが、高い建物は鎖で厳重に封鎖されているため、機能するのは大聖堂だけである。大聖堂は巨大な建物だが、数百人もの人々が夜を過ごすには狭すぎる。さいわい寺院は高台にあり、周りを高い壁で囲まれているため、モンスターや黒猫が敷地内に侵入するのは困難だ。大きな門を二つ閉じてしまえば、防衛は容易。

しかし……、とエンドーは考える。

「（何かがおかしい）」

だがそれが大きな疑問なのかどうかはわからない。よくよく考えてみるより先に、混雑を解消してしまわなければならない。すぐにも『港町』と『ヘルプスト』の住民達が到着するはずだ。

敷地内にはいくつもの松明が焚かれている。寺院は軍の管理下とすることで、剣を持った軍人が突っ立っているのが見えるが、彼らはシラタチと協力してこの騒ぎを収めようなどとは思っていないようだ。

そんな軍の態度にも腹が立つが、エンドーはたびたび門のところへ走っては港町からの行列が見えないものかとそわそわし、その到着が遅いことに言いようのない腹立たしさを覚える。

「おい、エンドー！」

マハエの声が背後からかかった。

「マハエ、無事だったか」

マハエと宗萱、それとエンドーは見知らぬアオバが、並んで歩いてくる。

「何とか、『ゾンマ』は完了だ。あと警戒するのは、新型対S A A Pだけだ」

「そうか……」

どこか上の空のエンドーに、マハエは首をかしげる。

「わたしは寺院周辺の警戒へ当たります」

言うなり、踵を返す宗萱。アオバも「もうひと仕事だ」と言っ、その後に続いた。

「どうかしたのか、エンドー？」

「……あ、ちょっと」

エンドーは近くにいたS A A Pを呼び止め、尋ねる。

「港町の避難民ですか？ 出発したばかりですので、彼らの足ではあと三十分近くかかるかと」

「……」

腕を組んで、エンドーはすでに到着している避難民達を見た。

誰もが混乱しながらも、とりあえずの安堵を見せている。

「どうされました？」

「……いや」

S A A Pに「もういいよ」と手を振り、港町とヘルプストからの避難民が入ってくる予定の門に目を向けた。それから離れた場所でS A A Pに指示を出すグラソンをチラリと見て、門へ向かった。

「おい、どうしたんだ？」

マハエが後に付いて訊くと、エンドーは、

「マハエも来てくれ」

と言っ、説明もなしに足を速める。

「どこへ行くつもりですか？」

すかさず案内人の声が降る。

「……お前の“目”を忘れていたぜ」

「グラソンさんから、今夜はあなた達、とくにエンドーさんから目を離すなど、言われていたので」

「やれやれ」

案内人を追い払うことはあきらめて、代わりに思いつく。

「そつだ、頼みたいことがある。ヨックくんは今、港町か？」

「ええ、吉野さんもすぐにでもこちらへ」

「いやそつじゃない。港町にいるヨックくんへ伝えてほしい」

寺院の長い階段を急いで下りながら、エンドーは言う。マハエも後を追いながら、耳をかたむける。

「何でしょう？」

「ある場所へ行ってみてほしいんだ」

## 港町

ヘルプストの避難民は港町と合流後、数分間の休憩を入れている。すぐにでも出発したいところだが、充満する極度の緊張のせいで、避難民の疲労は激しい。

出発を待つ間、ハルトキと青島と赤瀬は民家の壁にもたれて表情を固くしていた。

「……シラタチか」

赤瀬が微かに鼻で笑った。

「まさかアニキが、そんな組織の一員だったとは……」

青島は感心しているようだが、表情は別だった。どういう反応をしてよいのか、困っているようだ。

彼らはミチルを無事本部まで連れて行った後、やはり大林が気になり、すぐに引き返してきたと言う。モンスターが現れてから不安の一つが、彼らの安否だったのだが、無事でよかったとハルトキはようやく安心していた。

そしてほんの少し前、青島、赤瀬はハルトキからある程度の説明を聞いた。

自分達が因縁があり、窪井を追っていることやそれに大林が協力していること。それと

「……………」

三人はしばらく言葉をなくす。

それと大林が窪井にひどくやられたこと、もう戦うことができないこと、今は行方をくらし、おそらく窪井を追ったということ。

青島はもちろん、赤瀬までシヨックを隠しきれていない。こげ茶のオールバックをかき乱し、不安を振り払っているようだ。

「……………しかしまあ、ボスなら大丈夫！」

無理矢理に明るく言う青島。ハルトキも無理矢理にうなずくしかなかった。

大林が窪井を追ったとして、まず見つけることはできないだろうと、ハルトキは考えた。あのケガでは、普通ならばそこで野垂れ死にでもおかしくはない。しかしそこは青島の「大丈夫！」という言葉どおり自信はある。だがもしも、大林が再び窪井と対峙していれば、今度こそ命はないだろう。

そこでハルトキは自分がマハエに言った言葉を思い出した。

キミなら殺せる？ ボクかエンドーを。

なぜ窪井が大林の死を確認して去らなかったのか。もしくは、わざと生かしたとすれば、それは昔の親友としての心が残っていたのではないか。

「……そう、あいつはくたばらないさ」

とても小さく言った赤瀬の言葉を、ハルトキは聞き逃さなかった。

出発の号令。

伸びをしたり、深呼吸をしたり、しっかりと子供の手を握ったりと、全員が移動に備えている。

ぞろぞろと行列が動き出す中、ハルトキと青島と赤瀬はそのままの場所で最後尾を待った。

「オレ達は最後尾を守ればいいんですよ？」

「うん。ごめんね、巻き込んだじゃって」

「いや、このくらいどうってことないっすよ！ ねえ赤瀬！」

「……ああ」

赤瀬は乱したオールバックを整えながら答えた。

そのとき、案内人の声がハルトキの耳に入る。

「吉野さん、エンドーさんからの伝言です」

「ん？ ちよつと待って」

幹部二人から離れ、民家の陰に移動する。

「エンドーが？」

「ええ、あなたに廃工場を見てきてほしいと」

「廃工場？」

「東の廃墟群にある廃工場です」

「……ああ、あの子供達が居た？」

マハエと一緒にエンドーを探してたどり着いたボロボロの工場を思い出す。そしてそこにいた子供達と女の子を。

「エンドーさんはその子供達のことをとても気にかけています。もしかしたら避難民に加わっていない可能性もあると」

「……そうか、わかった。行ってみるよ」

「お願いします」

ハルトキはため息を一つついて頭をかいた。それから青島と赤瀬のところへもどって言う。

「悪いけど、ボク急用ができたので、先に寺院へ向かってください」  
「急用？ オレ達も手伝いましょうか？」

「待て青島、オレ達は三人で最後尾を守る予定だったんだ。しかたない、オレ達が二人でこいつの分まで働くしかない」

「すいません」

頭を下げて、ハルトキは町の東側へ駆け出した。

その後で青島が言う。

「おい赤瀬、今回は珍しく乗り気じゃねえか」

「……ふん、馬鹿なことを。　ぐずぐずするな」

青島は軽く返事をして、先に行く赤瀬に続いた。

そんな二人の様子を背に、ハルトキは走る。

急いで廃工場を確認し、誰もいなければそれでよし。もしも子供達が居たなら、急いで連れてここを離れなければならない。そう遠くない場所から発せられるモンスターの咆哮を耳にし、そう思った。

一度踏み入った廃墟群を、ハルトキは再び目にした。

そこは夜になるとさすがに不気味で、おっかない噂話の三つや四つは明らかにあると思われ、間違いなく有名な肝試しスポットだろう。本来ならば人が住めるような場所ではない。

ハルトキは踏み入る前に何度か深呼吸をした。

「肝試しなんて何年ぶりだよ？　うわぁ……」

……なかなか足が前に進まない。

「案内人〜？　………うう……、いないし……」

松明でも持つてくるんだって、とハルトキは泣きたくなった。

「……ん？　待て待て、バカだなボクはー、こんなときのための魔力じゃないかー」

こんなときのための魔力ではないのだが、ハルトキは仲間や自分の命を救ったときと同じくらい、力の存在に大いなる感謝を示した。

「ははは。『暗視』を発動させたぞ、これでもう恐く　いやいや、暗闇で迷わずにすむ」

ぶつぶつと言いながら、ようやく廃墟群へ踏み入る。

前回の記憶を頼りに廃工場を探すうち、それらしき崩れかけの壁を見つければ、今度は門を探した。

「おじやましまーす……。誰かいますかー……。？」

『暗視』状態で工場の入り口と壊れた窓を注意深く見回す。すると、ここそそと動く影を見つけた。まだ幼い男の子と女の子が、じつとハルトキのほうを見ている。

満月の下、夜中の廃工場に幼い子供　十分すぎるほどのホラ要素だ。しかしハルトキには、それが生きている人の子だとわかった。前回訪れたときに見た顔が、続いて現れたからだ。

「……………誰？」

サーヤが恐る恐る工場から出てきた。

好奇心でその後ろを子供達がくつついてくる。

「えーと、ボク、遠藤京助の友人で、吉野春時。……………覚えてる？」

「……………ああ」

エンドーに跳び蹴りを食らわしたうちの一人だと、サーヤは気付いたらしい。　と言うより、汚い自分に頭を下げた“珍しい人種”の一人として覚えていたのだ。

「どうして残ってる？　町みんなはとっくに避難してるんだよ？」

「……………避難？」

サーヤは首をかしげていた。

「……………あれ？」

「どうやら『シラタチ』の避難勧告はここまで届かなかつたらしい。シラタチさんのミスですか……………」

ハルトキはガクツとつつむくが、沈む気持ちを抑えて、サーヤに向き直る。

「すぐに逃げよう。モンスターが来る前に」

ハルトキは彼女らに手を伸ばすが、相手は一步も動かない。

「何してるんだい！？　はやく町の人達のところへ避難しよう！」

「……………」

町の人達のところ。その言葉が、サーヤを一步後ろへ引かせた。

恐れている。襲い来るモンスターなどよりも、町の人々を。ハルトキはそれを薄々感じ取った。

「あの、だから……、あのさ、向こうにはエンドーもいるから  
「嫌よ!」」

「え?」

はつきりと表れた激しい怒声に、今度はハルトキが引く。  
「嫌よ、あんなやつ……!」

顔を背けるサーヤは、離れた位置のハルトキでもわかるほどに、  
わなわなと悔しそうに唇を噛んでいた。

「(ははあん、ふられたな、エンドーちゃん)」  
などとニヤついている場合ではない。どうにかして彼女達をここ  
から動かさなければならぬのだ。

「……町の人達が恐いのなら、近づかなければいい。少し離れてい  
る場所で、外が安全になるまで待ってればいいだけだよ。ここに  
いるのは危険だ!」

「……………」

しかし動かない。彼女の目は強く訴えている。

死んだほうがマシだ! と。

「……………」

困った。そんな表情がハルトキの顔に表れる。

時間がない。 モンスターの咆哮がすぐ近くで聞こえた。

足音と荒い鼻息が、ほんのすぐ近くで聞こえた。

「あちゃ……………」

ハルトキはゆっくりと門を振り返る。

ドスドスと音を響かせ、微かに地面を揺らしながら、獲物の臭い  
をかぎつけたドラゴンが、ハルトキらを見つけた。



しびしび、短剣を抜くしかなかった。

子供が恐怖で騒ぎ、工場へ駆け戻っていく。しかし、サーヤはまだ動かなかつた。

「逃げるんだ！」

と叫んだハルトキの言葉で、我に返つたかのように、恐怖の呪縛が解けたようにサーヤも工場の中へ引き返した。

しかし、ハルトキはみんなの視線を感じていた。

廃工場を守らなければならないのに、ここでは魔力で戦うことができない。それに現れたドラゴンは妙だ。

現在、見当たるのは一体だけだが、そのドラゴンは見覚えのあるものよりも若干大きく、眼光もキバも鋭い。全身は血のように真っ赤で、明らかに通常よりも凶暴で力の強いことがわかる。

「（金縛り、ならどうにかごまかせるかな）」

ハルトキの魔力は、“見えない”というところが強みだ。『暗視』に『動体視』を重ね、ハルトキは短剣をぐつと構えた。

心の中でマハエとエンドーに助けを求めたが、彼らの到着を期待するほうが時間の無駄だ。

「赤でも何でも、言ってみれば大きなトカゲさ。しつぽをつまめば、切つて逃げ出す」

エンドーならきつと一人でも倒す。それなら自分にもできないことではない。ハルトキはそう考えて自分を勇気付けた。どうしても彼女らを守らなければならない。他でもない、親友の頼みならば。

## 64：赤い戦い

エンドーとマハエは十分ほど走り、港町とヘルプストの避難民を見つけた。

寺院へ向かう人ごみの中、エンドーは必死に目を動かす。

人の流れに逆らって最後尾。振り返って過ぎ行く人々を前に、エンドーは「ああ」とうなだれた。

「やっぱりいない……」

「廃工場の子供達か」

「ああ。……まったく」

「どうする？」

マハエも遠ざかっていく避難民達を眺めていたが、突然背後で聞こえた足音に振り向く。

「あれ？ あんたはたしかアニキと一緒にいた」

二人の不良が歩いてくる。

「……どちら様で？」

リーゼントの不良に見覚えがあったが、はたしてそれが城で大林に付いていた人物であったかは判別できない。しかしどうやらそのようだと、マハエはエンドーに説明する。

「青島さん、でしたっけ？ ハル君と一緒にだったんですか？」

「ああ、けどアニキ、急用ができたとか」

「なぜここへ？」

「あんた達も『シラタチ』なんだってな。今のオレ達は、ボスと同じく、あんた達に協力している」

『ボスと同じく』 その言葉の後、青島の顔が陰った。

「おい、役目を果たすぞ、もたもたしてちゃ護衛にならねえ」

赤瀬が言つと青島は慌てた様子で手を振って、マハエとエンドーから去っていく。

「どつする？」

マハエはもう一度訊いた。

「……まあ、ヨックくんが連れてきてくれるだろ」  
「任せるのか。そのほうがいいな」

青島と赤瀬の後ろへ、マハエは踵を返した。

しかしエンドーは子供達を気にし、その場から動かずに、マハエが肩をたたくまで港町のほうに目を向けてそらさなかった。

ドラゴンの咆哮を聞いた気がした。

サーヤは工場の外へ飛び出していた。

ドラゴンの咆哮とともに、むごたらしい場面が瞳に映っている。

血まみれのハルトキがふらふらと立ち上がった。

腕や足から血を流し、短剣を握る腕を持ち上げるのもままならぬ  
い。

赤いドラゴンに一人で立ち向かったハルトキだったが、ドラゴンの凶暴さは想像を超えていた。ハルトキがモンスターに付けた傷よりも、自らの体のほうがはるかにポロポロで、もはや『暗視』も『動体視』も切れている。

とっさにサーヤは飛び出していた。救えるわけもないが、工場の中でじっとしているなんてできなかった。

ドラゴンがサーヤに頭を向ける。サーヤは固まって息を止めた。

「待て、こつちだ……！」

なおも戦いを挑むハルトキだが、ドラゴンは爪の一振りですべてを斬り、木の幹に叩きつけた。

声もなく崩れるハルトキへ、ドラゴンがトドメの一撃を食らわそうと近づく。

「来やがれい！ オオトカゲ！」

小石がドラゴンの背にぶつかった。

サーヤは石が放たれた場所へ顔を向け、その目を疑った。

「ジン！」

「サーヤ逃げる！ こいつはオレが引きつける！」

「ダメよジン！ あなたなんか敵うわけない！」

ドラゴンはジンへ向きを変えた。

「こ、恐くなんかない……！ か、家族を守るんだ……！」

ジンは再び小石を投じた。しかしそれはドラゴンの怒りを増幅させたにすぎず、その眼はしっかりとジンを捉えていた。

「やめて！」

サーヤは叫んだが、ドラゴンのうなり声にたやすくかき消された。もはや彼女の足は振るえ、地面に吸い付いたかのように一歩も動けなかった。

大きな足で、ドラゴンはジンへ歩み寄る。ジンは敵から目をそらさず、後ろへ下がる。武器もなくどうやって戦うというのだろう。

ただ目の前にいる誰かのピンチに飛び出してきただけなのだ。サーヤと同じように。

サーヤのほうは武器を探すことも、逃げることも、思いつけなかった。どうすればよいのか。答えの出ない迷いだけが、ぐるぐると回っているだけ。

「すう……」

誰かの呼吸が小さく聞こえた。

同時に周りの草木のざわめきを、サーヤは感じた。風ではな

い。生命が揺れ動くのを感じている。自分の中の何かが感じている。

キーンという鋭い音の後に、ドラゴンの動きが止まった。

誰かが息を吐く。木の根元に倒れていたハルトキが体を起こし、立ち上がり、歩き出した。

それから足を速め、動かない。動けないドラゴンの背に跳び乗り、頭を踏みつけると、短剣を振り上げ、いきなり力を込める。

短剣はドラゴンの右目に突き刺った。それは頭を射たのと同じ。数秒の後、ドラゴンはドスンと地面に倒れた。

荒く呼吸しながら、ハルトキは袖で頭から流れていた血を拭き取り、剣を横へ振った。

サーヤもジンも言葉が出ない。とくにジンは、目を丸くしてドラゴンの背にたたずむハルトキの姿を見つめていた。

「ジン！」

ようやくサーヤが駆け出すと、ジンも彼女を見た。

「バカ！」

「バカとはなんでい！ 助けに来たっていうのに！」

「助けられてなんかないでしょ！ 無謀よ！ このバカ！！！」

サーヤはジンの胸を叩いた。

どつと脱力したように、ハルトキはドラゴンから降りて地面に座り込む。

「あなた、大丈夫？」

「……うん、どうってことない」

「どうってことないって、そのケガで」

「いや、大丈夫！ 全部がすり傷だから」

そう言いながら、ハルトキは全身の“無傷”の体を隠した。

「それよりも、早く逃げよう。子供達を連れて。……またモンスターが現れるかもしれない。」

サーヤは黙ってうなずいた。もう迷ってはいない。

「……あんた」

サーヤに聞こえない声で、ジンが喋った。

「ケガ、治ってんだろう？ その短剣、それにその力……、遠藤京助と同じなのか？」

ハルトキは絶句した。

「あいつ……、話したのか」

「ああ、助けてもらったよ。借りがあるんだ」

さらに脱力し、ハルトキは呆れた息を吐き出す。

「頼むから、誰にも言わないでくれよ」

「わかってる」

子供達が集まってきた。一人ひとりの顔を確認してから、サーヤはハルトキにうなずいた。

「行こう。しっかりとついてきてね」

さすがにサーヤもケガのことを訝しがっているが、ジンがうまくその目をそらさせた。

「サーヤ、調子はどう？」

「……最悪よ。ところで、どうしてあんたはここへ来たわけ？」

「そりゃあ、心配だったからに決まってるだろう？ 避難の途中で、

お前達がいけないことに気付いて助けに来たんだ」

「そうかしら？」

ジンをにらみつけるサーヤだが、その眼に怒りはこもっていない。

「あなたらしくもない。何かあったの？」

「いやあ、ちよつと心を入れ替えてみたり」

「は？ 何よそれ」

一行はハルトキを先頭にして廃墟群を抜けた。

ハルトキが幹部二人と別れてから、二十分は経過している。今か  
らでは急いでも追いつくことはできないだろう。

体力的にも、モンスターと出くわすことだけは避けたい。

だがそれも叶わなかった。

廃墟群から町の中心へ向かう途中、ハルトキはふと立ち止まり、顔をしかめた。また、ドラゴンのうなり声が聞こえたからだ。

ジンやサーヤや子供達も同じ声を聞いて怯えた。

うなり声に続いて、建物が突進によって崩れる音。地響き。それは背後へ迫ってくる。

「隠れて！」

ハルトキは短剣を構えて子供達の盾となる。

「グオオオオオ！！！」

満月の空に響く苦痛と怒りの咆哮。

右目を負傷した、先ほどの赤いドラゴンが、よだれをだらだらと流し、低く荒い息を何度も吐きながら一行を見つけると足音激しく迫る。

「生きてたのか！ しぶといー！」

『動体視』を発動させながらハルトキはその場にいる全員の身を案じた。

ここで自分が負けたらどうなるのだろうか、と。

ハルトキの後ろでサーヤは子供達に呼びかけていた。

「隠れるのよ」

ハルトキの盾から抜け、廃墟の一つに身を隠そうする。ハルトキの周りには邪魔になると考えたのだ。しかしドラゴンの片目は彼女らの動きを見逃さなかった。

ハルトキから、より弱そうな子供達へ目標を変え、地面を蹴ってもう突進した。

合わせてドラゴンの正面へ飛び出したハルトキが、頭のツノを両手で押さえ、ふんばる。しかし力の差は圧倒的だ。軽々と宙へ放られた。

もはやドラゴンの前に抵抗する獲物はいない。一度は立ち向かっ

たジンでさえ、今は腰を抜かしている。

品定めはしない。一番近くのサーヤへ、ドラゴンは凶暴な眼を向けた。

「縛連鎖！」

ジャラジャラとドラゴンの首に銀色の鎖が巻きつく。

空中で鎖を操るハルトキは、地面に着地すると同時に鎖を引き、ドラゴンを後ろへ倒した。

とっさの判断だった。この凶暴なドラゴンを抑えるには、フルの魔力で戦うしかないと思ったのだ。

鎖は一度手元に回収され、次の攻撃へ備えた。

彼らの力を知るジンでさえ驚きを隠せないでいた。サーヤはといえば、放心状態でハルトキを見つめていた。

何をどう解釈すればよいのか、わからずに、迷って。



## 65：不死身

ハルトキは『縛連鎖』を発動させた。

これで形勢は逆転する　　はずだ。

ドラゴンはのっそりと体勢を立て直した。驚いたように「グルル」とうなりながら。

「デカイだけかい？　そんなんじゃ、ボクには勝てないよ」  
『縛連鎖』を振る。

ドラゴンの全身に巻きついた鎖は一切の行動を不能にし、そのままジリジリと締め付ける。

隠れて見ているサーヤ達を横目で見てから、ハルトキは鎖を引いた。

締め付ける鎖はドラゴンを窒息させていく。

「……！」

しかしドラゴンに強烈な抵抗が見られた。ただでさえ魔力を消費しすぎていたハルトキは、鎖を引きちぎろうとするドラゴンの力の重みに耐え切れない。

魔力が弾け、その反動でハルトキは後ろ向きに吹き飛んだ。

手の中で短剣の姿に戻っていく鎖を再びもどす力はない。ドラゴンは息絶え絶えに、しかし十分に戦う力は残っているようだ。

ハルトキは立ち上がるうとする足が言うことを聞かないことに気付く。

「そんな……」

両手を使って後ずさりすることしかできない。

と、ハルトキは背中にぶつかる誰かの足を感じた。見上げると、二人の少年の姿があった。

「だらしなげ、ヨックンよう」

「あーあ、傷だらけだな。もう無理するな」

見下ろして笑っているマハエとエンドー。二人は楽しげな顔でハルトキとドラゴンを交互に見て、

「どうやら一味違うみたいだぜ」

エンドーが言った。

「二人とも、どうして？」

「愚問だね、ハルトキ君。キミの危険を感じ取って駆けつけたに決まってるじゃないか」

「冗談っぽく笑うエンドー。」

「いやあ、エンドーがどうしても気になるって言うって」

「……そうか」

ハルトキは二人から目をそらして笑った。情けない姿を見られてしまったことが恥ずかしいのだ。

エンドーは驚いて見ているサーヤを見つけて、優しい顔でうなずいた。

「見ていてくれ」

そう言うと、短剣をドラゴンへ突き出し、魔力を込めて、『発破鋼』を出現させた。

マハエもそれにならって、『壊波槍』を現す。

「……頼むよ」

「ああ」

ハルトキの言葉に、二人は力強く答えた。

エンドーは『魔力球』を放ち、ドラゴンの顔面で爆破させる。驚き、一歩引いたドラゴンへ、二人は突っ込んだ。

そのときサーヤは、夢を見ている感覚で、エンドーとマハエを眺めていた。それからニヤニヤと笑っているジンへ、目を向ける。  
「……知っていたの？」

「何を？」

ジンは、ふいっと顔をそらす。

「……………」

サーヤは気付いた。エンドーが彼女に伝えようとしていたことに彼はサーヤの不思議な力におもしろがって近づいたのではなく、自分も同じく不思議な力を持つものとして、彼女を救おうとしていたのだと。

バカなのは自分だった。

サーヤは唇を噛みしめた。悔しかった。誰も自分の気持ちをわかってくれないとひがんでいたくせ、自分も彼の気持ちに気付かなかった。そんな気にすらならなかった。

「泣くなよう」

涙を流し始めたサーヤに、ジンは不可解な顔を向ける。ジンも子供達も、サーヤの不思議な力のことは知らない。だから突然の涙に困惑していた。

「何でもない。何でもない……………」

彼女の涙は、嬉しさによるもの。自分は孤立してなどいなかったと。

「はあっ！」

マハエは魔力のこもった刃先でドラゴンの首部分を狙ったが、すばやい爪の一振りに妨害された。しかしエンドーの発破鋼の一撃は確かに命中し、同時に起こった爆発の衝撃で、ドラゴンは一声うめいた。

「……………赤いドラゴンか。たしかに普通のドラゴンより数倍手強い」

マハエは早くも呼吸を乱すが、エンドーは休むまもなく追撃をします。一度爪に弾かれても、次は体の回転を加えた一撃を。ドラゴンは徐々に弱っていくようだが、確実に怒りを引き出しているよう。数度の爆発にも耐える強靱な肉体。敵を倒す前にエンドーの魔力

が尽きるほうが早いかもしれない。

「うおおおっ！！！」

金棒を振り回し、ドラゴンの爪と弾きあう。

救える者は救いたい。自分の命など二の次でもよい。とにかくそれで誰かを守れるのなら。エンドーがこの世界で築き上げた強い思いだった。そのために、誰よりも『VBT』に励み、強くなってきたのだ。

横へ払われた爪を屈んでかわし、エンドーは強烈な一撃をドラゴンの横腹へ叩き込んだ。

「マハエ！」

一瞬、ドラゴンが白目をむいているスキに、マハエはその心臓へ槍を突きたてた。

「グオオッ！」

ドラゴンは一瞬うめいて、止まった。槍が抜けると力尽きた巨体がうつぶせに倒れた。

「やった！」

エンドーは短剣をホルダーにおさめ、ハルトキへ歩み寄る。

「ナイス！」

ハルトキはグツと親指を向ける。

サーヤや子供達が、おそろおそろ廃墟の陰から立ち上がり、彼らへ歩み寄った。

そのとき、

マハエは立ち上がる気配を背中を感じ、再び武器を発動させようとしたが、爪の一撃を食らってなぎ倒されてしまった。

突進してくるドラゴンへ、短剣を抜こうと手を動かすエンドーだが、腹部への頭突きで吹っ飛び、その手から短剣が離れた。

「……………何なんだよ？」

二度復活したドラゴンをハルトキは見上げたまま、武器を構える

ことすら忘れていた。そうしたところで、彼に力は残っていないのだが。

「逃げる……！」

地面を這いながら、エンドーがハルトキと子供達へ言った。

ドラゴンの内には、膨大な怒りがあふれているようだ。

「逃げろお！」

「やめて……！」

サーヤは叫んだ。彼らの犠牲を見たくはなかった。自分達を救うための犠牲など、決してあってはならないと。ふとサーヤは足に当たった何かを見た。エンドーの短剣だ。無意識に、それに手が伸びた。

何を考えているのか、自分でも理解は出来なかったが、サーヤは本能的に、短剣に埋め込まれた石に指を触れた。

マハエがどうにか立ち上がる。エンドーもよるめきながら。

そして彼らが目にしたのは、青い閃光を放つ短剣だった。サーヤの手の中で、彼女の魔力が短剣の『陰の石』によって実体化した、雷の長剣。

サーヤだけが、すべてを呑み込めたという顔で、一番驚愕しているのはジンや子供達だった。

「来なさい！ 私が相手になるわ！」

ドラゴンは怒りの矛先をサーヤへ向けた。

サーヤは恐怖を打ち壊し、迫り来るモンスターをまっすぐに見つめて、長剣を突きつける。

爪を振り下ろすドラゴンの腕を、雷の長剣がすり抜けた。刹那、怒りとは違う咆哮が響く。しびれた腕をふらふらと動かしながらドラゴンはもう片方の爪を振り上げる。

「はあぁっ……！」

サーヤは一声を発し、ドラゴンの胴を長剣で貫いた。

バチバチッ！ と、いつそう強い閃光。

全身を激しく痙攣させ、ドラゴンの咆哮は小さくなって消えていく。しばらく、完全に息の根を止めるまで、サーヤの魔力はドラゴンを貫いていた。

ドラゴンの命が消えると同時に、サーヤの長剣も力を失い、短くなって短剣にもどった。

今度こそ、完全にドラゴンの命は消滅し、巨体は三度目、倒れた。そしてサーヤも意識を失い、膝を付いて倒れた。

ジンとエンドーが駆け寄り、ジンが彼女の体を抱き上げる。

「……………」

「よくやった。ってほめてやるんだよ」

いまだに困惑しているジンに、エンドーが言った。それから彼女の手から短剣を取り上げ、ホルダーにもどした。

「オレがサーヤを背負っていく。寺院まで急ぐぞ」

力の尽きたサーヤを背中に乗せて、エンドーはマハエとハルトキを見る。二人は黙ってうなずき、先へ歩き始めた。

エンドーも子供達の後からジンと並んで歩き出す。

サーヤはとても軽かった。一瞬前に一人で凶暴なドラゴンを倒したとは思えないほどに。

「ありがとうな」

耳元で静かに呼吸をするサーヤへ、エンドーは小さな声でお礼を言った。

同時に、もうこれ以上自分達と関わらせないほうがよいと思った。宗萱やグラソンの言うとおり、そのほうが彼女達のためなのだから。

## 66：轟ク悶ノ歌

エンドーはサーヤを背に乗せ、マハエとハルトキの後を寺院へ向かう。

ジンは度々、サーヤを心配そうに見つめ、それからエンドーへ視線を向けてうつむく　　を繰り返している。

彼が何を訊こうとして迷っているのかエンドーは気づき、背中を揺すってサーヤを背負いなおすと、静かに口を開いた。

「黙ってて悪かった。オレ達は『シラタチ』だ」

「……シラタチって、この避難移動の中心組織の？ ……たしか、対モンスター組織」

「そうだ」

「……………」

ジンは納得した。

町の小規模な噂で、不思議な力を操る組織だと聞いたことがあるからだ。

「……悪い噂もある。シラタチには隠している顔があると。それは、例えば世界のバランスを崩すような、とんでもないものだ」と

「噂だろ。信用することはない。オレ達は純粹に、世界を守るために戦っている」

「……そうか」

しよせんは噂だ。エンドーはそう思う。“勘の良い噂”ではあるが、勝手な想像によるものだろう。

「（バランスを崩す……、か）」

それでも、ほんの少しだけ心が揺らいだ。

世界のバランスを崩すような存在　もともとこの世界に存在しない、“存在しなかったものを消すために存在している”自分達に、疑問を抱くのは当然であり、その気持ちはずっと前から変わらない。存在していてもよいのかどうか、彼らには出せない答えだ。

サーヤがぎゅっと、エンドーの首を抱きしめた。

「（こうして救えた命があるんだ。今はまだ存在していよう）」  
エンドーは歩きながら、サーヤの小さな寝息だけを聞いていた。  
と、エンドーの前で足を止めたハルトキが、ゆっくりと振り返った。

マハエも、エンドーもすぐにそれに気付いて足を止める。  
子供達を守ろうとハルトキとマハエは武器を発動させた。

男は山を駆け抜ける。  
木を蹴り、高く舞い、眼下の様子を探って着地。そしてまたすぐに地面を蹴る。

“戦いの気配”はもう目の前だ。すぐ目の前だ。男の眼に赤いマントが小さく映った。

数は二つ。



ハルトキの魔力は、『縛連鎖』を維持するだけで精一杯だった。マハエはまだ魔力が余っているようだが、これから戦う敵と対等だとはとても思えない。

「新型が二体か……。オレも参戦する」

「待ってエンドー。キミはそのまま、子供達を連れて寺院へ向かって。ここはボクとマハエで何とかする」

「おいおい、お前の魔力は残り少ない。ヨックンこそ、この子達と一緒に」

ハルトキは「ハッ！」と笑い飛ばした。

「ボクは十分戦えるよ。けどもしも、ボク達が倒れたら、頑張れるのはキミだけだ」

「……………」

空を舞って来た赤い対S A A Pが、ヒラリと地面に降りた。

「バカヤロウ。わかってんだよ、お前ら二人じゃ勝てるわけがない。オレも戦うしかないだろ」

ジンにサーヤを預け、エンドーも短剣を抜いた。

しかし三人はピタリと止まって動かない。

背中にゾツとする気配を感じたのだ。

後ろの背景を溶かして歩み寄ってくる禍々しい“何か”。

対S A A Pに武器を向けながら、三人は振り向いた。こめかみをドロリとした汗が伝った。

コツ、コツ

足音が近づくにつれ、禍々しい空気は次第に薄れる。

三人はただじっと、近づいてくる何かに目を凝らした。時間が止まったかのように対S A A Pも動かずにいる。

男の姿が見えた。  
灰色のローブをまとい、赤い髪を乱して、ゆっくりと三人へ歩み寄る。

「……………」

はじめハルトキはそれが大林だと気付かなかった。  
特徴的なオールバックが乱れているからでも、前よりもやつれた顔だからというわけでもなく、彼の異質な魂を感じたからだ。

異質　普通とは違うという意味だ。しかし三人と比べればそれほど異なった部分はない。

「……大林さん」

ようやく出た名前。その言葉からは、その事実を認めたくないというハルトキの懇願がにじみ出た。  
マエもハルトキも感じている。

大林の力を。恐怖を感じるほどに禍々しい魔力を。

サーヤも目を覚まして、ジンの背中で震えていた。

「ハルト……」

大林は顔にかかった赤い髪の間からハルトキを見据えた。その瞳が濃い紫色に染まる。

大林の手が背中の、武器の柄に伸びた。

彼は背丈の半分以上はある大きなソードホルダーを背負っていて、右手が柄を握り、少し引き抜くと、瞳と同じ濃い紫色の“魔力”があふれ出る。

「何だい、あれは……………」

魔力を持たないジンにも、子供達にも微かに見えているらしい。それほどに濃く強大な魔力だということだ。魔力を放つ大剣が半分引き抜かれた。

「這イ轟ケ悶ノ歌」

大林の口から出た呪文のような言葉が、大剣を鼓動させた。その瞬間、大林の姿が消える。三人は迫り来る魔力の渦を感じた。武器を構えるほんの少しの間もない。そうする理由すらわからない。

大林はどうしてしまったのかと、その時点で答えられる者はいない。

刹那、激しい“憎しみ”の感情が吹きすさび、三人を通り抜けていった。

対S A A Pが動く。形成した真空の刃を前方へ放ち、向かってくる渦へ対抗するが、刃は粉々に砕かれ、刃を放った対S A A Pも、それとともに打ち砕かれた。マントも仮面も関係なく、切り刻まれる。誰の目にも留まらぬ動きで。そこに大林がいるのかどうかもわからないスピードで。

一体は撃破した。残りの一体は地上から数メートル離れた上空でマントを開いていた。

たった今仲間が切り刻まれたその場所へ、カマイタチを連射する。大林はたしかに、その場所に姿を現した。自分へ放たれた無数の刃をにらむように一瞥した後、舞い上がった。

無数のカマイタチは大林を仕留めるに及ばず、大剣の素早い一振り一振りが、すべての刃を砕き、攻撃を中止して後退しようとして動き出した対S A A Pを、四つに切り裂いた。

悲鳴も音もなく消滅した対S A A P。空中のその場所を、地上の誰もが見つめていた。マハ工達の戦いを見た直後の子供達でも、今たしかに目で見た光景をとて信じられないと言うように。

大林は地面に着地していた。足を曲げた状態から立ち上がるさいに大剣を背中にもどす。

片刃で幅広、角ばった形の大剣。黒っぽい刀身には、いびつな模様がびつしりと刻まれていた。

「……………」

誰一人の言葉もない。

マハエもエンドーもハルトキも、大林の帰還を喜ぶべきであるとはわかつているものの、走って行って抱きついてよいものか困惑する。大林があまりにも、これまでの彼と違っていたから。

大林は顔にかかっていた髪をオールバックに整えた。そしてやつれた顔を優しい表情に変える。

「ただいま、ハル」

大林だ。そのままの彼だ。

彼の笑顔が、ハルトキ達の恐怖を吹き消した。

三人は武器を解除し、大林に笑顔を向けた。

「おかえりなさい」

ハルトキが言った。

「何が起こってる？」

現在の状況を把握しているものの、事態までは知らない大林。

「窪井が攻めてきたんです。感染者達を放って、シラタチを殲滅しようとしています」

「……………そうか」

大林は予想はしていたと言っているようだ。

「寺院へ行きましょう、宗萱やグラソンもそこにいます。それと、青島さんと赤瀬さんも」

「あいつらが？ ……もどってきたのか、バカなことを」

そうは言っているけれども、どこか喜んでいるような大林。それと、少し迷っているようだった。何も言わず出て行った自分を、シラタチが再び受け入れてくれるのかを心配しているのだ。

「おかえりなさい大林さん。みんな待ってますよ」

案内人が声をかけた。

「……ああ。心配かけた」

大林は頭をかく。

説明はするつもりだ。しかし、どういう経緯で力を手に入れたのか、それを詳しく話すことができるかはわからない。大林は背中の大剣を感じて思った。

そのとき、背中へ向かって飛んでくる物に気付いた大林は、後ろへ拳を振って“片手剣”を叩き落した。

回転しながら落下して地面に刺さったそれは、丸い刃先の変わった片手剣。ハルトキと大林には見覚えのある物だった。

「また会ったな、大林鷹光」

すぐ近くの高い木の枝に、包帯で顔を隠した男が立っていた。

濃いブルーのマントをはためかせ、男は枝から飛び降りると、刺さった剣をさつと左手にもどし、素早く大林から間合いをとる。

「……またお前か。何の用だ？」

「ククク……。今夜はどうやら、絶好調らしいな。どうした？ 前のように震えて膝をつけ」

「……………」

大林は再び大剣の柄に手を触れた。

「ハル、先に行ってくれ。こいつはどうかやら、オレだけに用があるらしい。……オレも、こいつに用がある」

柄をぐつと握り、瞳を紫に染めた。

「わかりました。すぐに片付けて来てください」

ハルトキは何の迷いもなく大林に背を向けた。

「いいのか？」

エンドーが訊くが、ハルトキはすぐにうなずいて、

「大林さんは死なないよ。絶対にね」

子供達の先に立って歩いていくハルトキ。マハエとエンドーは後ろを気にしつつも、彼にならうしかなかった。

「キョウスケ……………」

ジンの背中でサーヤが不安を表情に浮べている。

「大丈夫だ。もう誰も傷つかない」

力強くそう言った。

もう終わるはずだ。

エンドーは　　マハエもハルトキも、それを願い、信じた。

## 67：心の力

包帯男　モフキスは、包帯の隙間から笑いに歪んだ黄色い目を覗かせて、大林を凝視していた。

大林もその目へまっすぐに返し、一瞬たりとも逸らしはしない。「ずいぶんといい眼だ。そうでなくてはな、大林鷹光。それでこそ、鬼の眼だ」

大林は大剣を抜こうとはせず、モフキスを捉えたまま、すでに見えるようになるほど遠ざかったハルトキ達の気配を感じた。　それから口を開く。

「……オレはなぜお前を恐れていたのか、ようやくその理由に気付いた。お前のその声、間違いなく聞き覚えている、あの野郎の声だ」  
「ククク……。思い出したから、得体の知れない恐怖を感じなくなつたつてののか？　……そうか、それは嬉しいねえ」

「少し違う。思い出したから恐れないんじゃない。お前を恐れる理由がないことに気付いたからだ」

「……何を言っているのか、オレ様にはわからないぜえ？」  
大林は口の端を吊り上げた。

「すぐにわかる」

大剣を抜いた。濃い紫色の魔力があふれ出し、蛇のように刀身を巻く。

一振りで、魔力は燃える炎のようにモフキスへ襲い掛かり、素早く身を後ろへ反らせたモフキスの包帯を焼いた。

「ククク……」

黒い炭となつて落ちる包帯。その下の顔があらわになる。

モフキスは炎を恐れる様子もなく、ただ笑っていた。まるでそれを望んでいたかのように。

コバルトブルーの髪を短く刈り込み、顔はいかつく、狂喜に歪んでいる。

「アレモフ・キース」

ギリツと、大林は歯を擦った。

「お前は死んだはずだ。キース」

「ククク……。そう、死んだよ、アレモフ・キースはたしかに死んだ。二年前に、お前に殺された。……ところで、オレ様を恐れる理由がないと言ったが？」

「ああ、お前の言うとおり、得体の知れない恐怖があった。だがそれとは別に、お前はオレの大切な仲間を殺した。だからオレはお前を殺した。そんなムナクソ悪い記憶を心の奥に閉じ込めていたんだ。それを思い出すことを拒絶していただけだと気付いた。だが今のオレには、そんな過去も記憶も、すべてを切り裂くことができず」

大林は大剣の切っ先を突きつけた。

「オレは、そのために“信念”を捨てた」

ゴオツと、大林は紫の魔力を全身から発する。

「信念？　クク、人であることを捨てたことがか？　面白い。オレ

様は本気の貴様と闘いたかったのだ！」

「……何者だ、お前は？　本当にキースなのか？」

「今はそんなこと、どうでもいいだろう？」

モフキスは左手で剣を横へ払った。

「楽しませろ！　大林鷹光！！」

足の動きは素早く、地面から離れたかと思うと一瞬でモフキスは大林との間合いを鼻が付くほどに迫っていた。モフキスの剣が振られ、大林の“残像”を貫く。



大林はモフキスの背後へ移動していた。紫の魔力をまとった大剣が振り下ろされると、それに合わせてモフキスは体を回転させて跳び、距離をとる。しかし炎のような魔力はモフキスの腕をかすめていた。

「いいぜ、最高だ！ これこそ闘い、それでこそ燃える魂！」

「ごちゃごちゃと、わけのわからないことを」

大剣は振られるたびに刀身から魔力を放ち、追い討ちをかける。横払いを後ろへ跳んでかわした後、モフキスは魔力の炎を片手剣で切り払う。

「おらあ！！」

「……………」

大林は大剣を左手に持つ。

モフキスの剣が大林の首元をかすめた。そして静止する。

剣を右手で掴み止めた大林は、大剣をモフキスの武器とは逆の右腕へ振り下ろした。

「おおっと！」

ギリギリで避けたモフキスの右腕は、炎に焦がされた程度で、大剣が直撃した地面のほうは大きく割れ、土の塊が高く跳ね上がった。「恐ろしいねえ、ククク、だがそう簡単には、オレ様の心臓はえぐれねえ！」

大林の腹に蹴りをかまし、剣を奪い取ると即座に間合いを取った。

しかし大林のほうが早かった。

目を見開くモフキスのすぐ正面では、間合いを一瞬で詰めて迫った大林がすでに大剣を振り上げていた。

とつさに片手剣を横に構えて防御の体勢を取ることしか、モフキスにはできなかった。

それもまったく意味を成さない。

ひと太刀で片手剣はもろく砕かれた。

「……っ！」

モフキスは体を回転させながら素早く引いた。

「……………」

彼の左腕は無い。剣とともに斬りおとされていた。

「やるねえ……………」

痛みを感じていない様子のモフキス。大林もそれを不思議とは思っていない。

「てめえ、オレ様を殺す気はないのかあ？」

「殺す？ そうしてやるさ。二度とオレの前にもどってこれないようにな。……だが、その前にいくつか聞きたい」

「質問だと？ それにオレ様が答えることを期待しているのか？」

ククク

血が流れ落ちる左のわずかに残った腕など少しもかまわず、モフキスは笑う。

「こんなことでオレ様を戦闘不能にさせたつもりか？ あいにく、オレ様は両利きだ。左に武器を持っていたのは、単に相手を迷わせる手の一つであっただけのこと。武器のスペアも、本部にもどればいくらでもある。ここで殺らなけりゃ、オレ様はまた貴様の前に姿を現すぜ？」

「そうか、それは困るな。それならその助言どおり、ここで終わらせる」

「……………まあ待て。焦ることじゃない。いいだろう、質問に答えてやる。貴様が訊きたいのは、『お前は何なんだ？』 そんなところだろう？」

「……………」

大林は両肩を持ち上げて先を促した。

「オレ様は、モフキス。アレモフ・キースなどではない。ああ、違った存在だ。しかしまったく別というわけではない。オレ様の中には、アレモフ・キースの血が流れている。わかるか？ ククク……………、我が頭領、窪井賢は、とある人物の研究を引き継いだ。その人物が

残っていた薬によって、オレ様は生まれた」

「薬だと？」

「遺伝子を変異させる薬らしいが、さっぱりわからないことだ。だが、それによって、オレ様はアレモフ・キースの遺伝子つてやつを埋め込まれた。二年前から保存されていたものだろう。お前が殺した、その人の一部だ」

「……………」

「ククク……、わかるまい」

大林は顔をしかめた。理解しようなどとは思わない。だが彼には十分だった。

「お前はアレモフ・キースではない。それでいい。もやが晴れたぜ」

大剣をモフキスへ向け、大林は微笑した。

「ククク、次はオレ様を殺すか？ ……いや、どうあっても殺したいらしいな。それほど憎んでいた男か……………」

「…………憎んでいたと？ オレのすべてを奪った男をか？」

大林の周囲に轟く魔力の帯が、突然激しさを増した。

「憎しみなんて言葉で片付けられては困る」

大林は大剣を地面に突き刺し、唱えた。

「這イ回レ隠ノ影」

大林の周囲から大剣へ魔力が伝い、大きく上へ振り上げられると、魔力が蛇のようにくねりながら地面を割っていく。

モフキスは背後の木へ大きく跳び上がり、枝に着地。魔力はおかまいなしに木を切り倒したが、モフキスはもう一度跳び上がった逃げ去った。

「待て！ キース！！」

大剣を横へ払ってから大林は足を動かしたが、途端に力を失い、前のめりに転倒した。

「……………くそっ！」

受身を取ることもなく突っ伏した。 全身が動かなくなった。遠ざかっていくモフキスの気配を探ることも、今の彼には難しい。

『お前の心はそんなものか？』

少年の声が頭の中に響いた。

『お前の大切な人を殺したのは誰だ？ 思い出せ』

「……………」

『心を染めろ。 仇を討つときだ』

大林は手元の土を握りしめた。

「うるせえよ」

マハ工達は寺院の長い階段のもとへ到着した。

「この上が避難場所だ。 全員無事だな？」

エンドーが人数を数えて満足そうにうなずいた。

「もう少しだ」

ジンと、歩けるまでに回復したサーヤを先に、その後ろから子供達、最後にマハ工達三人が階段を登り始める。

「やれやれ、これでひと安心だな」

マハエはほつと息を吐いたが、エンドーはその言葉に眉をひそめた。

「ずっと気になってた。これが窪井のやりかたなのか？」

「どういうことだ？」

「たしかにS A A Pに数人の犠牲は出た。けどオレ達は生きている。……窪井なら、もっと徹底的に攻めると思わないか？ 窪井はオレ達の力を知っている。そんなやつが、あの程度でシラタチを殲滅できると考えたと思うか？」

「……まあたしかに、そうだな。一理あるが、それなら窪井の目的は？ これじゃあ向こうは戦力に大きな穴をあけて、町を空っぽにしただけだぞ」

「……………」

ハルトキが足を止めた。マハエとエンドーもつられて止まり、上から怪訝な顔で子供達が見下ろした。

「そうだよ、窪井の目的はそこにあるんじゃないかな？」

「どこだつて？ 町から住民を追い出すことが？」

「違うよマハエ。よく考えて、“今”その住民達はどこにいる？ マハエは階段の上へ親指を向けた。

「そう。そして本来の窪井の目的は？」

「ウィルスを町に放つて」

「あ。」と、マハエとエンドーは同時に気付いた。

「そういうことだよ！」

「マズイな……………」

エンドーはしかめた顔でハルトキを見た。

「……………どうしたんだい？」

数段上でジンも顔をしかめていた。

「何でもない。オレ達にかまわずに行ってくれ。門の向こうなら安全だ」

「……………」

ジンは一度首をかしげたが、そのままサーヤと子供達と寺院へ上っていく。サーヤはその中で心配そうにエンドーを見ていた。

マハエがあごに手を当てて、

「……ウィルスはほとんど破壊した。残りのウィルスで複数の町を感染させるのは不可能だと、グラソンは言ってた。……けど、その標的である住民達を一つの場所に集めてしまえば話は別だ」

窪井の目的はシラタチの殲滅ではなく、標的の住民達全員をこの場所へ集めること。シラタチは窪井の計画のうちに見事はまっつしまっつたわけだ。

「まだ決まっただけじゃないけど、一応宗萱達に報告しなきゃ。それと、住民達は」

「みんな、たった今避難したばかりだよ。それをまたかき乱すことができると思うかい？ それこそ大混乱だよ。……ボク達で止めるしかない」

マハエとエンドーはうなずく。が、彼らは窪井を見つけ出す術を知らない。

「そういえば……」

ハルトキは『暗視』と『望遠視』を重ねて西の空を見た。それからその下の小さな山を。

薄雲の中で光が瞬いているのを見つけたマハエが空へ目を凝らす。

「あんなところに……。何だ？」

雲の中に何か潜んでいるようだ。

「そういえば微かに何か低い音が聞こえる気が……。待てよ、オレは知ってるぞ、この音……。たしかデンテールの飛行船に乗り込んだときにイヤというほど」

「……………」

三人は顔を見合わせてニカッと笑った。

「異論はないな」

マハエが突きつけた短剣に、ハルトキとエンドーの短剣がかち合った。

「行くぞ」

## 68：山頂へ

「山登りか、まただ」

山の入り口に立って、エンドーはやれやれと頭をかいた。

三人は山を登る。足場の悪い山道は戦い後の疲れた体には厳しい運動だ。

「この世界での最後の山だと思えば、少しは愛着もわくんじゃない？」

「けっ、オレはまたこの世界が嫌いになりそうだぜ」

「いい思い出として残そう。自慢話のネタになる」

「頭がオカシイと思われるぜ」

崩れた道を飛び越えた三人は上空を見上げて飛行船を探した。

「ここからじゃ見えないなあ、どこだ？」

ハルトキの指示で山を登り始めたのだが、山頂へたどり着いたところで、この小さな山では飛行船に手を伸ばすことなど不可能だ。

「オレ達の推測が正しければ、一刻を争うぞ。宗萱とグラソンに知らせたほうがよかつたんじゃないか」

「案内人はグラソンの命令で、ずっとオレ達を監視するように言われてたらしい。たぶん、案内人がとくに知らせてるぜ。それよりヨックくん、ここからどうするつもりだ？」

寺院にウイルスを放つとして、その方法もわかっていないのだ。

ミサイルを投下するのか、飛行船から爆弾でも落とすか、どちらにしてもそれを止めるのは至難だ。

「言ってなかったね。飛行船の光を見つけたとき、この山の山頂を望遠してみたんだ。そこには人がいた。姿はぼやけてたけど、

こんな夜中におかしな話でしょ」

「ああ。山麓りだつて言うのなら別だけど」

エンドーが言った。



「てかそんなことより、道合ってんのか？ オレとマハエにはさっぱりだぞ」

「残念だねエンドー、それはボクも同じくだよ」

「マジかよ……」

エンドーは脱力したような表情で足を止めた。

「今の時間は？」

そして空の月を見上げる。

「まだまだ夜明けには遠い。でも仕掛けてくるとすれば、夜のうちだろうね」

「どうしてわかる？ ヨツくん」

「ニュートリア・ベネツへは、シラタチを恐れてる。できるだけ目立たない時間帯を選ぶのが普通だよ」

と、三人が月から視線を下げたとき、目の前の木々の中に何かの姿が動いた。ちょうど月の光が入り込んでいる場所ですぐにその存在を確認でき、完全に認識するよりも先に三人は短剣を手にとって武器を現す。

赤いマントに一本ツノのドク口面、左肩に白い金属板を装着した、これまでの対S A A Pとは少し違った装い。

「あいつは……！」

マハエはすぐに思い出した。

「窪井の隠れ家にいた対S A A Pだ！ ……たぶんS A A P第一部隊の隊長」

「隊長だと？ ……こんなときに遭遇しなくても！」

エンドーは発破鋼を苛立ちに任せて地面に突き刺した。

対S A A Pは仮面の穴からじつと三人を見据えて、動きはしない。同様に三人も。隊長を相手にしているのなら、簡単ではない。

三対一でも有利ではないことをよく分かっているから。

「どうする？ 戦うか？」

エンドーにしては慎重な発言。

「いや、今はどうにかして逃げることだけを考えよう。時間がない」

「それにしても、これで山頂にいる誰かさんがニュートリア・ベネツへと関わっていることがわかったわけだ」

マハエが微笑した。

「確実とは言えないけど、どうやら奥に道があるらしい。隠れて移動しよう」

マハエとエンドーはうなずく。

しかし、対S A A Pは三人から目をそらし、攻撃態勢に入るでもなく、まったく別の方向へと歩き始めた。まるで彼らに興味がないと言った感じに。

「……………え？ 無視？」

目を丸くするマハエ。拍子抜けというか、どこかがっかりというか。

「どうして？ ボク達に気づいてたはずだけど……………」

暗視で対S A A Pを追いながら、完全に目の届かない所へ消えてしまった敵をずっと眺めている。

疑問を残しながらも、少しして三人は歩き始めた。

ここが重要な場所なら敵は迷わず攻撃を仕掛け、排除にかかるはず。それがなかったということは、三人の推測は間違っているのか。あるいは敵はすでに三人の動きに気づき待ち構えているのか。どちらにしても彼らの目指す先は変わらない。

## 山の山頂

辺りの木々は切り倒され、さえぎる障害のない光を受けた二つの影が、切り株と倒木だらけの地面にくねくねと曲がってうつる。

「そろそろ時間かな？」

寺院を見下ろしていた影の一つが言った。

「ああ、準備にかかるぞ」

もう一つの影が、手に持っていた松明に火つけ道具で火をともすと、照らされた二つの顔。おそろいの紫頭。

窪井の手下二人は、傍らの小型砲台に目を向けた。

黒く輝く砲台。すでに照準は合わせてある。導火線に火をつけるだけで、ウィルスの仕込まれた砲弾が寺院へ着弾し、ようやく騒ぎの収まりつつある寺院と辺り一帯は、ウィルスにより完全な沈黙と化すだろう。そして数分間続いた沈黙は次の瞬間、悲鳴に変わる。

感染者はウィルス発症を免れた一部の避難民をすぐさま排除し、『シラタチ』の殲滅にかかるだろう。

「……………おい、お前はどう思う？」

「何が？」

「手が震えるんだ」

「……………統領の命令なら仕方がない。オレとお前も、死ぬわけにはいかないだろ」

「……………そうだな」

手下は松明を持つ手を、導火線に伸ばした。

ドオンッ！

爆音が山の木々に反響した。

砲弾が撃ち出された、のではない。魔力球が松明を吹き飛ばした音だ。

「つく……………！ 誰だ！？」

手下が振り向いた背後、そこには息を切らせたマハエ、ハルトキ、エンドーがいた。

「間に合った！」

三人はそれぞれの武器を突きつけて間合いを詰める。

「……………シラタチか」

手下はほんの瞬間、ほっとしたような表情を浮かべたが、すぐに武器を構えて対立した。

エンドーは腕に魔力をためて魔力球を構える。

「砲台に近づくなよ。吹っ飛ばすぞ」

「……っ！」

手下は戸惑っている。戦えばまず勝てる相手ではない。

そのとき、マハエ達三人が手下から目を逸らした。

感じていた。目の前に迫る大きな力を。

炎が上がった。手下と三人の間に火柱が。

「おぬしら、それ以上手出しはさせんぞ」

火柱がはじけた。

三人は降りかかる火の粉を手で払いのけ、武器を向ける。

「紅丸さん！」

手下が叫んだ。

炎の中から現れたのは、黒いうろこ模様の着流し姿、両の腰に刀を一本ずつ差した侍、『怒涛紅丸』。

「この炎、魔力か!？」

驚くエンドー。

「ということはこいつが？」

ハルトキはマハエを見た。

「ああ、窪井の幹部だ」

マハエは一步退いた。

「宗萱とグラソンでも、まともに対抗するのがやっとだった」

「ものすごく強いのか……」

エンドーは下がりかけた足を踏みとどまらせて、恐怖を払うように発破鋼を頭上で振り回す。

「どんなに強敵でも、だ！　ここで阻止しなきゃ、みんな死ぬぞ。

シラタチも、廃工場の子供達も、大勢の避難民達も！」

その言葉にマハエとハルトキも奮い立った。

「そうだな。お前だけを死なせるわけにもいかない」

マハエはエンドーの横に並びなおした。

紅丸は二本の刀を抜く。

「早々に終おうぞ」

三人が武器を構えた直後、紅丸は素早い動きで迫った。

右の刀がマハエの壊波槍と交わり、左の刀がエンドーの発破鋼と交わる。

ハルトキは縛連鎖で紅丸を縛った。しかし

「ふんっ!!」

紅丸の体内から炎がはじけ、鎖を砕いた。

三人は吹き飛ばされ、転がったが、すぐに起き上がって反撃。紅丸は槍と金棒の二つを一本の刀で受け止めた。尋常ではない力だ。

ハルトキが縛連鎖を再生させてそれを放つが、もう一本の刀がそれを止める。

紅丸は後ろの手下へ声を放った。

「何をしておる！ 拙者がこやつらを食い止めておる間に、役目を果たすのだ！」

「くそ！ この野郎！」

エンドーは金棒に力を加えた。

刀は少しだけ押されたが、紅丸はさらに、二本の刀に魔力を込めた。

炎が刀を巻き、じりじりと焼かれる痛みをこらえながら、マハエとエンドーは力を緩めなかった。

手下は戸惑いながらも、紅丸に従う。砲台の導火線に火がつけられた。

「くそおおおおお!!!」

三人はむなしくも叫ぶだけ。紅丸という圧倒的な力の前には。

二つの風が三人と紅丸の頭上を駆け抜けた。

消し飛ばされる導火線の火。手下二人は反応する間もなく、駆け付けた一人、グラソんに殴り倒され、もう一人、宗萱が刀を砲台の先に突き刺した。

振り向いた紅丸へ、氷の刃が飛ぶ。

「くっ！」

紅丸は刀をマハ工達から除けて氷の刃を切り落とした。

「おぬしらでござるか」

紅丸は炎をおさめ、刀を下げた。

五対一。

紅丸も戦意を失った、かに思えた。

## 69：燃える戦い

「まったく、映画みたいなたイミングで登場するなあ、こいつらは」  
安堵の笑みを浮かべながらマハ工は宗萱とグラソンを見た。

手下を蹴散らし、砲台を破壊。これで事態は逆転。マハ工達三人と宗萱、グラソンの間で、紅丸は両方ににらみを向けている。

「……何ということだ」

紅丸は浅く息を吐いた。

「情けなし。窪井殿も、さぞ嘆かれるであろう」

「……怒涛紅丸、でしたね。抵抗は無駄ですよ、前回のようにはいきませんからね。大人しく我々に従ってください」

「……………」

紅丸は宗萱を炎に燃える瞳に写し、片方の刀を向けた。

「……拙者がおぬしらに従うと？ ふん、わかっておらぬようだな」  
もう片方の刀をマハ工達に向けた。

「拙者は侍」

二本の刀が炎を帯びる。

「よかるう。この戦、負けを認るが、しかし拙者にはまだ果たすべき役目がある。そのウィルスは渡さぬぞ！」

炎が紅丸の全身を呑む。まるで炎の鎧だ。

彼の内から発せられる覇気　この力は魔力だけのものではない。

覇気という名の壮絶な“怒り”を、シラタチの五人は、その魂に感じた。

「前回よりも、“少しばかり”本気らしいですね」

「ああ」

宗萱は刀に『風』を。グラソンは二本の金属棒に『氷』を込めた。

両方に向けられた刀から炎のつぶてが放たれ、宗萱とグラソンはそれを横とびでかわした。マハ工達はかわさず、マハ工が壊波槍の『衝撃』でそれを粉碎した。

そのまま両側から紅丸を攻めるが、炎の鎧が勢いを増し、接近を阻む。

「近づけないか」

グラソンは二本の金属棒を回転させ、氷を形成。二つの円盤型の氷を続けて投げ放った。

「効かぬわ！」

氷の円盤は炎に包まれ、たちまち溶けて消えた。

「桜舞灯 『這風』！」

宗萱の刀が放った三日月形の真空は、倒木を削りながら紅丸へ向かう。紅丸の炎は真空の刃である『這風』を止めることができない。しかし紅丸は二本の刀を振り下ろし、『這風』を叩き割った。

瞬間、炎の勢いが弱まり、鎧に隙間ができる。

その一瞬をエンドーは見逃さず、すでに溜めておいた魔力球を飛ばし、爆発で炎を吹き飛ばした。

「なんと！」

紅丸は追撃から逃れるため、真上に飛び上り、炎の勢いを利用してさらに上昇。十メートル近く上空の位置で、紅丸は刀を、炎を振った。いくつもの炎の斬撃が地を襲い倒木を灰へと変える。

「氷壁！」

グラソンは氷のドームで五人を囲い、盾として炎を防いだ。

「甘い！ そのような物が何の役に立つと！！」

ひと吠え。それとともに繰り出された次の斬撃は重く、ドームを包み込むほどの炎となった。

五人を守っていた氷は薄くなり、砕け落ちた。

「！！！」



紅丸はドームの中から素早く飛び出した鎖に気づく。ハルトキの縛連鎖が蒸気と炎にまぎれて迫り、紅丸の片足を縛った。

「はああっ!!!」

ハルトキは力いっぱい鎖を引き、紅丸を地面に叩きつけた。

そこへマハエの衝撃砲、エンドーの魔力球、グラソンの氷の刃、宗萱の斬撃と、次々と紅丸へ撃ち込まれた。

「……恐いねえー」

ハルトキは苦笑いしながら、もうもうと舞う土煙に包まれた紅丸を眺める。

でもこれで倒したことは間違いない。

そう思ったとき、鎖に異変を感じた。

たしかに敵を縛り、自由を封じている。その鎖が断ち切られた。

「さすがに、この程度の力ではお主らに勝てぬか」

土煙が晴れる。

紅丸は 立ち上がっていた。

しかし間違いなく攻撃は効いていた。炎を失い、うろこの着流しはぼろぼろで、後ろで縛っていた髪も解け、傷も負っている。

だが二本の刀は折れてはいない。その闘志も。

「本気を出す気になったか？」

グラソンは金属棒に氷の剣を形成し、再び叩く準備を整えている。彼だけではなく、その言葉でマハエ達も身構えた。

「……いや、このような場所ではそうすることもできまい」

「前にもそんなことを言っていたな」

「……今回も、拙者の負けでござる」

紅丸は両腕を伸ばし、刀を掲げた。炎が再び吹き返す。

「だが、必ずや勝負をつけようぞ。拙者の“怒り”をその身に刻んでくれよう」

刀を振り下ろす。すると炎がはじけ、火の粉となって消えた。

紅丸の姿も、そこにはない。

「逃げたのか……」

エンドーは武器を下して見まわした。

火の粉の名残と地面の灰が風で巻きあがるだけで、覇気も殺気も魔力の気配も完全に消え去っている。

全員が武器を下し、宗萱は刀を鞘に納めると、

「怒り」ですか……」

何かを考えているふうにポツリと言った。

「けど助かったな。オレ達だけじゃ阻止は無理だった。案内人に感謝しなきゃな」

ほっと汗を拭くマハエ。

「いえ、案内人はS A A Pの補助でこちらにはいませんでした。窪井の目的に気づいたのはグラソンですよ」

「そうなのか。まあ、助かったからよかったけど」

「おい、それより窪井は！？ 飛行船の音が近くに」

と、エンドーは倒れていた手下がいなくなっていることに気づいた。

「ちっ！ いつの間に!？」

そのとき、プロペラの轟音が大きく聞こえてきた。上空から。

「飛行船だ！」

マハエが指で示した先に、雲を透けて見える飛行船の光が。それは少しずつ降下し、雲を破ってその巨体を現した。

耳の奥にまで低く反響するプロペラの音にまざり、スピーカーが聞き覚えのある声を響かせた。

『見事だ、シラタチ。まさかオレが一本取られるとは。……いや、ウィルスまで回収されては、オレの完敗か』

窪井の低い笑い声。苦しまぎれ、という感じではない。愉快さを滲ませた軽い笑い。

「理解できねえ。どういいうつもりだ？」

エンドーが言う。

ここまでの大きな戦い。窪井にとっては捨て駒だとしても、戦力ではあった黒猫達を失い、最重要であったはずのウィルスをも回収された。この戦いで窪井が得たものは何もない。S A A Pを数人失ったことは、シラタチにとって嘆くべき被害ではあったのだが、逆にシラタチの得は大きかった。

それなのに、窪井はそれを苦とも思っではないようだ。

『オレ達は退くでしょう。今夜はお互いにとって重要な夜かもしれない。とても疲れた夜でもあった』

「……………」

飛行船は動き始めた。

グラソンも宗萱も手を出すことができない。距離がありすぎる。

『シラタチが減び、世界が消えるか。それとも　潰せるか？  
今のニュートリア・ベネツへを！』

スピーカーが切れた。とたんに飛行船は速度を速め、遠ざかっていく。

「また見失いますよ」

「ああ。悔しいが、やつを追うことは　ん？」  
グラソンは眉をひそめた。

いつもなら、そこで騒ぐはずの三人の声がない。その場に残っているのが二人だけだということに気づいた。

「あの三人はどこだ？」

## 70：根性三倍の潜入

飛行船は少しずつ速度を上げていく。  
満月の下、地上にその巨大な影を落として。

「だぎゃあああああああ！！！！ 落ちる落ちる！！！！」

ハルトキはいつになく激しく悲鳴を上げていた。

そんなハルトキにしがみつくとマハエとエンドーも悲鳴を上げていた。

飛行船は動き出している。

グラソンも宗萱も手を出せぬまま、またもシラタチの前からその姿をくらまそうと。

しかしそうさせまいと、根性で飛行船を追う三人がいた。飛行船とマハエ達三人を繋ぐ縛連鎖。ぶら下がるハルトキはそれを両手で握りしめ、ひたすら落ちまいと魔力を込め続ける。

ハルトキにしがみつくと二人は、

「風が冷たい！ 足が浮いてる！」

「こらあヨツくん！ その鎖、大丈夫なんだろうなあ！？ 三人も  
の体重支えられんのか！？」

「股がすーすーする！！ うわっ！ 手が滑る！」

「ヨツくん！ ベルトはしっかり締めてんだろうなあ！？ このズボン  
ずり落ちねえよなあ！？」

「ぎゃー！ 揺れるー！！！！」

「うるっさいわあああ！！！！ 集中できないでしょうがあああ！！！！  
ズボンはベルトが支えんじやないの！！ 全部ボクの骨盤が支えて  
んの！！！！ てかなぜキミらまで付いてきたああ！！！！？」

「オレら、いつでも一緒だろう?」

エンドーが言った。照れつつ。

「だあああ!!!! 反論できないボクがいる!!!!」

「てかさあ、オレはこれ以上の別の世界までお前らと行動を共にするつもりはないよ。それよりヨツくん、早く飛行船に乗り込もう」

「う……、わかってるよマハエ、ちよつと待ってて」

鎖を巻き上げるように、ハルトキは意識を集中する。

「……! ヨツくん、あれを!」

エンドーが地上を見て叫んだ。

飛行船がちよと寺院の真上を通過する。

大林は高い塔の頂上に立ち、濃い紫色の瞳を光らせて飛行船を見据えていた。

「窪井……」

大林は背のソードホルダーから大剣をゆっくり引き抜くと、切っ先をまつすぐ飛行船へ向けた。

「駆キ貫ケ呻ノ鳴」

大剣が濃い紫色の魔力を放出し、切っ先で塊を成す。その凝縮された魔力は空間を波打たせる。

そして放った。

はじけた魔力の塊は細い矢となり、一直線に飛んだ。

飛行船の後部で爆発が起こった。

大林が放った魔力の矢は飛行船の装甲を一部吹き飛ばしたのだから。しかしハルトキ達はその揺れすらも感じない。巨大飛行船はその程度のダメージで落ちるようなことはないのだ。

「無茶するなあ、大林さんは」

ハルトキ達に当たっていれば微塵に吹き飛んでいたことだろうが、大林は彼らに気づいていない。

大林の瞳が遠くへ見えなくなったのを確認すると、ハルトキは再び縛連鎖に集中した。

「どこ向かってんだ？」

足のずっと下を通り過ぎていく地上の風景から、エンドーは飛行船の進行方向の先へ目をやった。

鎖はゆっくりと縮んで、三人はようやく飛行船に乗り込んだ。開け放たれたままの貨物室の搬入口から。

よじ登って首を回し、しばらくしてエンドーが言った。

「ああ……、オレここ知ってる」

「そういえば、前回ここで頑張ってたらしいね」

「懐かしいねえ……。ここ、モンスターがたくさん積み込まれてたんだ」

エンドーは歩いて奥のドアまで行くと耳を当てた。

「何も聞こえないなあ」

「飛行船経験者で内部情報に詳しいキミの意見が聞きたいね」

「……あまり内部は行かないほうがいいな。ドア一つ開けるにも、細かい圧力調整が必要なんだ」

「そうか。でもたぶんこの飛行船は窪井の本拠地へ向かってる。そこへ到着するまでずっとここにいるわけにはいかないね。ここがなぜ開け放たれたままなのか、たぶん」

突然、飛行船の速度が落ち、停止した。

「何だ？」

「隠れよう！」

ハルトキはとっさに、貨物室の隅に見つけたもう一つのドアを示した。

停止した飛行船は、次に高度を下げていく。

ガツン。と搬入口にカギ縄が引っかけられる音がし、誰かが上ってきた。

ドア越しに聞き耳で気配を探っていた三人は、話し声でそれが誰なのかを知った。

二人いるようで、一つは面にこもったような高めの声。

「ひどくやられたものだな」

「……くっ、なんと嘆かわしいことであろうか」

二番目は間違いなく紅丸の声だ。

二人の足音が移動する。三人はどうかこのドアへ来ないようにと願ったが、足音はまっすぐ、飛行船内部へのドアへ向かっているようだ。

そこでもう一人、搬入口から上ってきた誰かの足音。

「ククク……、無事で何より」

「包帯を取ったか、モフキス。何とも、不気味な顔だ」

「クク……、そりやどうも。お前こそ、その面を取ったらどうだ？」

「余計なお世話だ」

マハ工達を知っている二つの声と、聞き覚えのないこもった声。ただ、そこにいるのが誰も強者であることは、雰囲気から感じ取れた。

「窪井殿に、どう知らせようか……。拙者がいながら、このあり様とは……」

「傷に響くぞ」

「構わん。この程度、じきに癒えよう」

ドアが開く音と、足音がその向こうへ消える気配。ドアが閉じられると、三人は安堵から脱力した。

「もうここから動けないね。紅丸とモフキスと、あと一人はおそらくあのドク口面……。船内で、そんなやつらに出くわせばまず逃げられない」

「そうだな。……しかし、この部屋は真っ暗だ。明かりはないのか





三人はとつさにマントを頭からかぶり、フードで顔を隠す。

「ああ……、寝すぎた、超美スクールに遅れてしまう」  
起き上がった。

紫の髪、窪井の手下だ。

「おい、起きろツッキー、ゴトー」

手下はとなりに埋もれているのであろうドクロ面の主をばしばしと叩いた。

「いてっ！ やめるよリート、こっちは大ケガしてるんだぞー」

ドクロ面、ツッキーが起き上がると、続いてそのとなりのドクロ面、ゴトーも飛び起きた。

「いけね！ 寝ちまつたじゃないか！ だ、大丈夫か！？ まだ生きてるか！？」

面がポロリと落ち、頭と右目を包帯で覆われたゴトーの顔と、頭に包帯を巻かれてたツッキーの顔が現れた。

「……よかった、だれにも見つかっていないな。ふー、焦ったあ……。っておい、明かり付けたのリートか？」

「いやあ、オレではないよ」

「じゃあ誰が」

ゴトー達三人は固まった。そこに立っている三人の黒マントを目にして、だらつと口を開いて。

そして叫んだ。その場の全員が。

「ぎゃあああああ！……！」

飛行船は再び動き出していた。

## 71：巨大な基地

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！ オレ達スパイなんかじゃありません、ただ統領とお話がしたくてその」

「すみませんすみませんすみません！！ オレ達侵入者なんかじゃありません、ただの迷子ですお話聞いてください」

「……………あれ？」

マハエ達三人、ゴトー達三人、同時に叫びを止め、向かい合ったまま立ちつくした。

「……………まず、落ち着こう」

ゴトーの一言に、全員が同意した。 とりあえず。

小さな明かり一つで薄暗い倉庫。マハエ達とゴトー達はランプを挟み、向かい合った状態で座っている。

「あははー。そうか、キミらただの宅配屋かー、びっくりして損したぞ」

ゴトーが笑い、ツッキーとリートも一緒に笑った。

「ははは。いやあ、仕事完了してここから出ようと思ったら、いきなり動き出すから、びっくりびっくり」

ハルトキが笑い、マハエとエンドーも一緒に笑った。フードに隠れているが、その表情は苦い。

「ところで、なぜ顔を見せないんだ？」

「黒いフードでお馴染みの『クロネズミ宅配店』です。ご存知ないですかね？」

「そういえば聞いたことがあるような。ところで、どこかでその声

「気のせい絶対。ボク知らないあなた達」

「ああ、気のせいか。悪かったな」

「いっせいに全員が笑った。」

「（肝が冷えたぜ……、宅配屋でよかった。黒いマント着てるから、まぎらわしいんだよ、まったく）」

「（どうやらバレてないみたいだね、ふー。マントがあつて助かったよ。それにしても、こいつら生きてたのか）」

マハエがゴトー達に訊く。

「ところでキミ達さあ、見たところこの船のメンバーらしいのに、なぜこそこそしてるの？」

「うっ……、それは……」

その質問に胸を痛めたらしく、ゴトーはツッキーに説明を任せた。「何ともマヌケなお話ですが、オレ達三人、ボスに与えられた任務に失敗し、そのリベンジにと燃えたわけですが、それすらも失敗し、どうにか謝って許してもらおうと、この船に乗り込んだわけです。」

しかしどうやらここの同僚達、オレ達三人を敵のスパイだと勘違いしているらしくて「

「このオレの美しい顔があやうくボコボコにされるところだったんで、とりあえずここに隠れていたというわけだ」

ゴトーは床に伏せて泣き出した。

「あんまりだあー！ オレ達が、いやいやこの二人は別として、このオレが敵に洗脳されるわけがないじゃないですかー！ それなのに、スパイだとか言っただけで殺そうとするなんてー！ 統領に会わせるちくしょー！」

「……………」

マハエ達は言葉をかけられなかった。その泣き様を見て、少々胸

が痛む部分があった。

「だから！ オレ達は決めた！ このままこの船が本部に着くのを待ち、忍び込んで直接統領を探そうと！ きつと許してくれるはずなんだ。心から謝れば！」

「あー、訂正ね。“オレ達は”って言うてたけど、正確にはゴトーだけね。オレとツツキーはこいつに付きあつてやってんの。こんな出迎えされるんなら来なけりゃよかった」

ツツキーも腕を組んで何度もうなずく。

現在も飛行船はその本部とやらへ向かっているのだろう。マ

ハエは考える。この三人の事情は別として、この飛行船がどの方角へどのくらい進んだのかはわからない。つまり窪井の本部に到着したとしても、その場所の位置を宗萱達に伝えることができないのだ。宗萱、グラソン、大林 『シラタチ』の力がなくてはニュートリア・ベネツへと戦うことができないというのに。

マハエ達とゴトー達。困っているのはお互い様だ。

「はあ……」

やるせないため息が、場を支配した。

しばらくして、飛行船は停止し、着陸態勢に入った。

そこは広大な森の中に設けられた巨大な基地。黒々とした外見と巨大飛行船を格納するほどのスペースが備わった、超巨大なニュートリア・ベネツへの現基地。

ゆっくりと降下し、飛行船は格納スペースに着陸した。

「統領、お疲れ様です！」

飛行船から降り立つ窪井を出迎える大勢の手下達。黒いロープに身を包んだ窪井が、手下達の間を、基地内部への入口へと歩く。その後ろを紅丸、モフキス、彼らの後ろから一人、一本ツノのドクロ面が続く。

「（これが、ニュートリア・ベネツへ……）」

飛行船の貨物室から様子を見ていた黒マントのマハ工達は、これが自分達が相手にしている組織なのだと、あらためて気を引きしめることとなった。

とともに、ゴトー達三人もあからさまに驚いていた。

「すげえ……」

とくにゴトーは、憧れの念も滲ませているほど。

「やっぱり帰ろうぜ。見るよ、この巨大な基地。たぶん前の場所よりもずっと警備は厳しいぞ」

リートが言う。

「バカ野郎、帰ってきたんじゃないか。何としても絶対、統領に会ってやる」

「意地？」

「忠誠心だ」

「……………」

リートは呆れたため息を吐いてマハ工達を見た。

「あんたらはどうするんだ？ オレ達と一緒に行くわけにはいかないし、うろついてれば間違いなく排除されるぞ」

「うーん……………」

マハ工達は三人とも、まだ答えを出せていない。この新たな基地の様子を見てしまえばなおさらだ。

出迎えの手下達、飛行船に乗っていた手下達、そのほとんどが基地内へ消え、数人の見張りが立つだけとなった。

ゴトーが言う。

「よし、とにかくそっちはそっちで何とかしろ。さっきの倉庫に潜んでいれば、そのうちまた船が離陸することもあるだろう。そのときが、抜け出すチャンスだ。オレ達は行くぜ」

リートとツツキーの肩を叩くゴトー。二人は乗り気ではない顔だが、何だかんだ言いながらゴトーに付いて歩き出した。

「じゃあな、気をつけるよ」

後ろへ手を振りながら、ゴトー達は飛行船を降りて行った。

マハエ達はフードを取り、深呼吸してから顔を見合った。

「どうしようもないね。さっきの、リートが言っていたとおり、この警備はかなり嚴重だと思う」

エンドーはうなずくが、

「でもオレ達が今いるのは、やつらの現拠点だ。行動に出なくてどうする」

「……ここでオレ達が行動すれば、うまくいけばニュートリア・ベネットへの戦いはシラタチの有利に動く」

マハエとエンドーの意見は同じ。二人はハルトキに目を向けた。

「……わかったよ。でもどうする？　ここの正確な位置をどうやって知らせる？」

「……………」

「ご安心ください、手はあります」

「うお！？　案内人！」

「みなさん、大声出さないでください」

「ああごめん。そういえば案内人はボク達がどこにいるのか、わかるんだっけ。　ん？　それじゃ、案内人がシラタチにこの場所の位置を伝えてよ！」

その手があつたと、三人は案内人の登場に手を叩いて喜ぶ。しかし、

「無理ですね。たしかにわたしは宗萱さん達の所から、あなた達がいるこの場所へ跳んできました。ですがそれは正確な居場所を把握しているわけではないのです。わかりやすく説明すれば、わたしは仲間達の一人一人へ、常に『意識』を分散させているのです。そしてわたしの本体は、自分の意思でその『意識』へ跳ぶことができます。　“糸をたどる”でも言いましょうか」

「…………ボク達に糸をくつつけてて、それをもとに迷わず場所を移動している？」

「そのとおりです」

「つまりお前は、オレ達と同じく、なぜか知らないけどこの場所に

いると?」

マハエが言った。

「そうです」

「ていうことは、ここまでの道のりを知っているわけでもない」と

エンドーが言った。

「そうです」

「つまり、まるっきり役立たずか」

三人が言った。

「……そのような言われようとは……。いえ、ですから手はありません」

「どんな手が? オレ達を危険な場所で行動させず正確な位置を仲間に伝えられる、その方法を教えてみる」

「そんな都合のいい手があると思っただのですか?」

言ったエンドーだけではなく、三人が同時にうなずいた。が、それはどうやらまったくの期待はずれらしい。

「あなたが飛行船に乗り込み、ここへ到着するまで約三十分。そして飛行船の速度、進行方向から計算すれば、ここはフーレンツから東の地方、サラバツクの西部」

「おお!」

三人は案内人に対して、これまでにないほどの感心を覚えた。

ハルトキが言う。

「そこまでわかるのなら、その周辺を重点的に探せば、こんな大きな基地くらいすぐに見つけられるでしょ」

「いえ、ですが今述べたのはあくまで推測。途中で進路や速度を変更した可能性もありますし」

「……………」

無言のため息を吐く三人。

「で、ですから、あなた達に動いてもらうしかないのです。いいですか、まずはどこか内部への入口を探してください。正面入口は危険ですので、ほかの入口　　できるだけ目立たないような」



わかっていたように三人はうなづく。

「それから、テレポート装置を探してください。そこは間違いなくデントールの残した基地の一つです。それなら、テレポート装置がどこかに設けられているはずですよ」

「なるほど、それを見つけ出せば、わざわざこの場所を探し出す必要もないわけね、それで装置を見つけたとしてどうすればいい？」

ボク達は本部へ帰還するの？」

「いえ、それによって敵に装置の作動を悟られる可能性もあります。とりあえず帰還するかどうかは作戦しだいですよ」

「……ここにとどまってるのか？ 簡単に言うなあ」

マハエが苦笑いして言う。

「ベッドルームでもあればいいんだけどな」

冗談を言いつつも、その心中に穏やかさは微塵もない。

明日が最終決戦となるかもしれない。これまでならシラタチの勝利を信じてきた彼らだが、今晚の戦いで知った。窪井、紅丸、モフキス、一本ツノのドク口面、そして大勢の手下達。戦いに勝利するにはそれらと戦い、退けなければならぬ。シラタチの少ない戦力で挑むには不利なのではないか。

「シラタチの 仲間達の力を信じてください」

三人の思いに気づいたのか、案内人が言った。

## 72：休息？

「敵の本拠か……。こんな場所で戦うとして、本当に勝てるのかね？」

マハエのつぶやきに、ハルトキとエンドーは何も返さない。

三人は何とか、建物の陰にあった小さな入口を見つけ、基地内部への侵入に成功した。

黒い壁に黒い床、そして真っ暗な闇の中、ハルトキを先頭にし、『暗視』に頼って通路を進む。

途中、監視カメラのサーチライトを避けていく中で、デンテールを継いだニュートリア・ベネツヘという組織の巨大さに、またしても気持ちが悪退りしてしまう。

気持ちと同じだから、ハルトキもエンドーも言葉を返せなかった。

「（仲間の力か……）」

マハエはこれまでの戦いを思い返していた。

負けはしない。

これまでの戦いをもに切り抜けてきたからこそ、言いきれる。しかしそれは信じたいがこそ、そう言いたいだけなのかもしれない。ニュートリア・ベネツヘという巨大な生物の腹の中で、その力を十分に突き通すことができるのかは、わからない。たとえ相打ちを覚悟しても。

三人の不安を、エンドーが言葉にする。

「……仲間の一人でも、失うのは嫌だ」

「……」

「……」

エンドーはつい言葉にしてしまった不安に、はっとして言いづくる。

「もちろん、誰も死なせないけどね。このオレがいるから」

マハエとハルトキは小さく笑った。

「そうね」

人はいないが、監視カメラがそこらじゅうに設置してある。暗い通路、黒いマントに身を包んでいるおかげで、少しは行動にも自由が利く。

慎重にドアを開けて、人の出入りした気配のない部屋を見回し、次のドアへ　そしてとうとう三人は見つけた。

小さな部屋にそれだけ、ほこりをかぶったテレポート装置が一台。「大丈夫か？　長い間ほつたらかしにしてあったみたいけど？」

シートも何もかぶせられていない装置を、マハ工は不安げな表情で眺めた。

「装置の電源を入れてみてください」

案内人の指示で、マハ工はそれらしいスイッチを押した。するとコンピューターが起動する小さな音の後に、ディスプレイが明るく光った。

「大丈夫そうですね」

「それで、どうするんだ？」

「本来でしたら、本部の装置からここへ移動するには、この装置のコンピューターに人物の情報を登録する必要があります。ですが、本部の装置を親機としてこの装置とテレポートラインを繋げれば、その手間も省けます。ただし、未登録の人物もこの装置からテレポートできてしまうのが難点ですが」

「心配ないだろ。何カ月も誰も出入りしてないみたいだぜ」

エンドーが足元に積もったほこりを足でかき分けながら言った。

「それに、どうせこの基地に待機するかもしれないんだ。ほこりっぽくてベッドがないことを除けば、この部屋だって隠れ場所として役に立つ。オレ達が見張っておくさ」

「そうですね。では装置に本部のテレポートIDを登録し、ラインを繋げてください。本部からも登録が必要ですので、わたしはあち

らへもどり、宗萱さん達に指示を仰ぎます。作戦などの報告は後ほど」

「ああ。今夜のオレ達の働きを大いに称えてくれ」

「戦いが終わった後に、ですわね」

必ず、無事に終わる。

そんな言い方だ。彼は心から勝利を信じているのだ。剣を手に戦いに参加できない彼でも、必死に役に立ちたいと思っっていることを、三人は知っている。案内人の言葉には悔しみもあるのだろう。戦場で戦う三人やシラタチよりも、それを見守るしかできない彼のほうが、よっぽど辛いのもかもしれない。

「……そうか」

ハルトキがつぶやく。

案内人が本部にもどった後、三人は彼の心に気づいた。

シラタチ、そしてこの世界が失われてしまえば、案内人はたった一人だけ。仲間とともに生き続けたいと真に思っているのだ。

「あいつ最近さ、いい“顔”してるよなあ」

座ってぼんやりと宙を見つめていたエンドーが言った。

仲間とともに過ごす案内人は、たしかに“人”を感じさせる。嬉しさの表現、笑顔が浮かんでくるほどに。

「案内人にバカにされないように、頑張らなきゃな」

伸びをしながらマハエが言うと、二人は「ふん」と笑ってうなずいた。

世界ではなく、何より仲間のために負けるわけにはいかないと思うのだった。

少し前のシラタチ本部。

たった数人のS A A Pしか残っていない城に、宗萱とグラソンは帰還した。

「飛行船に乗り込み、ニユートリア・ベネツへの基地に到着か。まったくあいつらの根性には負ける」

「あちらで彼らがうまく動いてくれれば、この戦いにもようやく決着が付きそうです。それと今夜保護した感染者ですが、合わせて二十九人。行方不明者リストに載っている男性が一人、確認できていません」

「一人か、窪井のもとにいるのか……。だがそれよりも考えるべきは作戦のほうだ。今夜の騒動の直後なら、叩きやすい」

「そうですね。少なからず油断しているはずでしょうし、ですが、シラタチの消耗も考えれば、それは決めかねます」

二人の他に誰もいない廊下。宗萱とグラソンは壁に背を預けて向かい合ったまま、しばらく思索していた。そこに、レポート装置の小部屋のドアが開く音と、大林の声が入った。

「明日か、できればそれがいい。たしかにニユートリア・ベネツへを叩くには、一番のチャンスだ」

大林はドアを閉めて二人に顔を向けた。

「大林……、無事だったようだな」

大林が数日前に本部を出てから、彼らは初めて再び顔を合わせた。あれだけのケガが完全に完治している大林の姿。それだけではなく、宗萱とグラソンがまっさきに感じた大林の力。彼がそれまでの彼と明らかに違っていている部分に二人はすぐに気付いた。

グラソンは鼻で笑うだけ。宗萱は悲しげに帽子を下げた。

「その姿が、シラタチにふさわしいと思ったのか？」

グラソンは氷のように冷たい瞳で大林の目を見つめた。

対して大林も彼の瞳から目を逸らすことなく、口の端を微かに吊

り上げる。

「……そうではない。　　と言いたいが、そうかもしれない。あんなら、戦いを見ていて、オレは自分の力の弱さを知った。この戦いで命を捨てるか、人を捨てて力を得るか。オレは迷わず、“剣”を手に取った」

背中の大剣を目で示し、大林は自嘲するようにうつむいて首を振った。

「その大剣　　そいつが魔力の源か」

「『聖剣』と名乗った。こいつを手にしたのは、ソレイアドの隠された洞窟だった。オレを死の淵から踏みとどませたのは、こいつの『呼ぶ声』。聖剣はオレを求め、オレは力を求めた」

「……ソレイアド……、あの荒れた土地にそんな物が……。そうか、それで納得した。今は魔力を抑えているようだが、おそらくその大剣の力はとてつもなくでかい。あの不自然に荒れた地は、そいつが発していた魔力によるものか……」

グラソンはあごに手を当てたまま、少しの間それについて考えていた。そして大林に目を向け直すと、厳しい声で言った。

「気をつける。そいつの魔力はオレ達よりも強大だ。……心を食われるんじゃないぞ」

「オレを思つての言葉か？　　ありがたく聞いておくよ」

挑戦的に笑いかけ、安心した表情に変える。

「とにかくみんな無事でよかった。それを確認に来ただけだ、オレは寺院へもどる。話したい連中がいるからな」

装置の小部屋へもどっていく大林。その姿が視界から消えると、グラソンは呆れ気味なため息をついた。

「……あいつにとっては無用な言葉かもしれんな。あいつ自身、あの力の大きさは身に試みているだろう」

「しっかりしてますよ、彼は。前よりもずっと、目の前を見つめて

います。……しかし心配なのは、その見つめる先」

「窪井賢か……」

グラソンは壁から背を離し、テラスのほうへ歩いていく。

「もともと、あいつの目的はそれしかない。それよりも、オレ達には仕事があるだろ？ 大林の言ったとおり、敵を叩くチャンスは明日だ」

「ええ。真栄さん達をいつまでも敵陣地に置いておくわけにもいきませんしね」

帽子を整え、宗萱は深呼吸をする。

「（少し気が早いようにも思えますけどね……）」

大林やグラソンの意見に反対するつもりはない。しかしどうしても賛成、とも言い難い。

窪井との決着を望む大林の気持ちは理解できるが、グラソンの様子までもが、どこか冷静さを欠いているように感じたからだ。

「（きつと、彼なりの考えがあるのでしょう）」  
そう思うことにした。もうグラソンを疑うような考えを持たないように。

そのとき、廊下の角からS A A Pが現れて、宗萱を見つめるや早足で駆け寄り、周りを気にしながら小声で話しかけた。

「チーフ、お話があります」

それからもう一度周囲を見回し、さらに小声で耳打ちするように、

「福チーフのことです」

「グラソンのこと、ですか……」

耳を傾けたい話ではないということはずぐにわかった。無視してはおけない話であるということも。

目を閉じて、宗萱は素直に耳を預けた。

いつでも冷静なS A A Pの声が、宗蒼は冷徹に思えた。



### 73：満月の下

グロス・トーア寺院はようやく静けさのうちへ戻った。避難民達は敷地内の定められた場所で、それぞれじつと寝袋にくるまっている。

高い塔の頂上に満月が重なって、地上に大きな影が映る。そこから少し外れた場所、本堂の石段に座り、月を見上げていた青島は、隣に立っている赤瀬の顔を見たかと思うと、また空へと目を戻した。

「……何だ、さつきから」

「ははは……。赤瀬がいつになく、表情を暗くしてるからよ」

「……………」

同じく空を見上げた赤瀬のサングラスに月明りが白く反射した。

座る青島からは、微かに照らされた赤瀬の目元がうかがえる。

胸のざわめきを押し殺している強い眼差し。

「ボス……」

ため息とともに溜った心労を吐きだす青島。大林を心配する気持

ちは二人とも変わらない。

ハルトキの前では「ボスなら大丈夫だ」と自信を持っていた青島ですら、静けさに包まれていると、その自信に影ができてしまう。

風が落ち葉と砂利を転がした。

「よう、元気だったか？」

赤髪の男が二人の前に現れ、ニツと笑いかけた。

青島はあわてて立ち上がって目を丸くした。

「ボス！ 帰って来てたんですか！」

「少し前にな。お前達こそ、なぜまた？」

幹部二人の前に立つと、大林は赤瀬に向かって口の端を吊り上げた。

「お前まで。青島を独りにさせたくないってのか？」

「……無理やりだ。それに、オレに相棒なんぞいねえ」

赤瀬は鼻を鳴らして顔をそむけた。

「でもボス、本当に、また顔が見られてよかったです。アニキはボスが大ケガしたって言ってやしたから……」

「たいしたケガではなかった。今はこのとおり、いつもと変わらん」  
右、左の素早いストレートを放って見せる大林。それをサンングラス越しに、赤瀬は鋭い眼差しで見つめた。

「……いつもどおり、ねえ？」

大林の背中で、聖剣がガシヤリと揺れた。

大林は青島のとなりに腰を下ろすと、戦い後の静けさに浸るように目を閉じた。

窪井の飛行船を逃がしてしまったことを悔いる気持ちはない。ハルトキ達が飛行船に潜り込んでいて、今も窪井の本拠に身を潜めていることを案内人に聞かされていたから。三人の身を心配する気持ちよりも、逆に安心できた。彼らならよい隠れ場所を見つけているはずだと。

そして決戦は明日の早朝。

つい先ほど案内人が報告してきた。

「（……落ち着かない）」

静けさで頭を冷まそうと試みた大林だが、目を閉じれば過去の出来事が次々と頭をかけ回り、どうしても雑念を追い払うことができない。

困ったことに、蘇るのはどれもが楽しかった頃の幸せな記憶だから、腹立たしかった。

田島慎治と出会って、人生に希望を持った。田島、窪井、そして自分の三人で結成した『田島弘之』。あのときほど充実した人生はなかった。金はなく、空腹で倒れそうなきもあつたが、田島と窪

井がともにいてくれたからこそ、それすらも幸せに感じていた。

田島に教わった戦い。少しでも彼に近づきたくて、必死に訓練を重ねた。それから窪井との手合わせ。勝負がつかない戦いも多かったが、しだいに大林が窪井を越えるようになった。

『互いが高め合っていたんだな……』

ソレイアドの闘いで、窪井が言っていた。その言葉がはつきりと聞こえたようだった。

「（たしかにそのとおりだ）」

大林は悲しげに顔で笑った。あの頃は、真に闘いを楽しんでいた。そこに誰かへの憎しみなど、ほんの少しも存在していなかった。ただ、窪井を負かしてふんぞり返って、「よくやった」と尊敬するあの人にほめてほしかった。そのあとに田島は、倒れている窪井に手を差し出してこう言うのだ。「もう少しだ」と。

悔しい顔をしていた窪井も、田島の笑う顔を見ると、つられて笑っていた。大林も。

腹立たしい。

数時間後の戦いに備えなければならぬというのに、これでは油断を見せるハメになってしまう。

もう窪井は敵なのだと、自分に言い聞かせた。二度と親友にもどることはない。

「……ボス、疲れているのなら眠ったほうが」

青島の呼びかけに大林は目を開いた。

「そうだな。今夜はよく戦ってくれた。見張りはシラタチに任せてお前達こそ寝ろ。オレもそろそろ、もどって寝る。二人の顔を見ておこうと思って、ここへ寄っただけだ」

大林は立ち上がって門のほうへ戻っていく。

青島は彼の無事な姿に安心して、明るい口調で赤瀬に喋りかけた。

赤瀬も、大林の無事に安心していた。しかし、彼には大林の姿が、これまでとは明らかに違って見えていた。

「……寝るか」

去っていく大林から顔をそむけ、赤瀬は青島を置いて指定された就寝場所へ歩いていく。

「悲しいな、田島さん」

後ろから付いてくる青島の文句も赤瀬には聞こえていない。ただ悔しそうにうつむいているのだった。

S A A Pに門を開いてもらい、大林は長い階段を下りはじめた。その途中で立ち止まり、段に腰を下ろした。

もどつて寝るといったが、単に幹部二人と離れたくなっただけだ。とくに赤瀬から。彼は大林と古い付き合いで、田島とも友人関係だった。そんな彼に自分の弱さを見透かされていそいで。

大林は満月を見上げて息を吐いた。

「眠れるわけないだろ……」

なあ、ケン。

言葉の後に続いて出てきそうだった名前を、心の中だけにおさめた。

同時刻、ニュートリア・ベネツへ本拠。

窪井もテラスに出て満月を見ていた。

まぶしいほどの月明りを、まばたきもなしに見つめる窪井。大林もこうして月を見ているような気がしていた。

「大林……、今のお前から、オレはどう見える？」

月に呼びかけるが、返ってきたのは別の声。

「ここは風が冷たいでござるな」

窪井の数歩後ろに、紅丸が立っていた。窪井は月から目を下ろし、紅丸に問う。

「紅丸、お前からはオレがどう見える？」

「……どう見える、とは？」

窪井の後ろ姿に紅丸は問い返すが、どこかさびしげな背中では黙ったまま。また、窪井は月を見た。

「拙者にとつて窪井殿は、忠を尽くすべき主でござる」

「そうだな。では、なぜお前はオレに忠義を？」

「……それは拙者が己の意思で決めたこと。正しいと思う者を背に戦うのが侍でござる」

その言葉に、窪井はしばらく言葉を失った。月から目を離して、正面の深く黒い空間を見つめる。

「紅丸……、オレは正しいのか？」

「……………」

紅丸は一瞬戸惑い、沈黙した。それでも言葉を返す。

「窪井殿は、己に正直なお方でござる。迷っておられるのならいえ、それでも拙者の忠義は変わりませぬ」

「命に変えても、か？ このオレのために」

「無論」

「オレを正義だと信じるのか。……紅丸、人という生き物のほとんどは、他人に造られた意思しか持っていない。何が正義で何が悪かを決める肝心な部分は、ただ周囲の波に合わせているだけ。それと異なる意思は見向きもされず、対立する意思は、すなわち悪。……」

オレは今、道の行き止まりで立ちつくしているのかもしれない」

窪井は自分の手のひらを眺めた。

雨の中、大林と闘ったときの拳をつくり、その拳と、大林に勝つべく必死になつていたかつての自分の拳とを重ねて見た。

「今のオレか……」

ふと思ひ出された、楽しかった『田島弘之』。

くだらない記憶だ。

窪井はそう思う。ほんの二年と少し前の記憶がとても遠いものに感じ、今の窪井には心からそれを「くだらない」と言える。

「（だが、捨てきれない思ひ出だ）」

腹立たしい。

などとは思わなかった。

窪井はもう一度満月に顔を向けて、顔をゆがめて笑った。

## 74：チーフとして

夜明け前。

ニユートリア・ベネツへ本拠基地、テレポート装置の部屋

三人はほこりの積もった床で、マントにくるまって眠っていた。長い間誰かが出入りした形跡はないと安心していただけだが、ハルトキはふと人の気配を感じて目を覚ました。

「……………」

真つ暗な室内。窓もない部屋で、外の様子が見えないゆえに今の時間はわからないが、案内人からの目ざましコールがないところを考えるとまだ夜は明けていないらしい。

ハルトキは『暗視』で室内を見回した後、ドアへ目を向けたが、人の姿はない。

「……………気のせいかな」

薄目を開けたときの一瞬、ドアの隙間から誰かが覗いていたような気がしていたが、見間違いだらうと安心した。

「……………疲れが取れないな。ていうか、この状況で疲れを取るのは無理だよな」

ハルトキはすぐ近くで半ば重なって眠っているマハエとエンドーを見た。というよりも殴り合っている。

「(うわぁ……………、夢の中でも敵と戦ってるのか)」

ハルトキは寝相の悪さに巻き込まれないよう、二人から離れた場所へ移動した。

疲れは取れないが、再び眠れる自信もなく、起きたまま夜明けを待つことにした。

どんな作戦で行くのだろうか？

今のハルトキの頭の中はその考えでいっぱいだ。

あと一時間か二時間もすればシラタチは到着するだろう。案内人の報告で、早朝にこの基地を攻めることに決まったと知った。シラタチも敵も休む間はない　　というのも狙いであるが、どこか強引に思えた。それでもその場には自分が疑問を投げかけることはできない。けれど宗萱とグラソンが決めたことなら、無理ではないのだろうと思いなおした。

しかしこの基地のことを何も知らない彼らに、ちゃんとした作戦は期待できない。この基地にいるハルトキ達でさえ、様子を探ることもできないのだから。

「……………」

今は少しでも疲れを取るために目を閉じて、仲間達の到着を待つしかない。

夜明け。

シラタチ本部

宗萱とグラソンは戦いへ向かう準備を一時間も前に済ませ、身体を慣らすために『VBT』のバーチャルを相手にしていた。

「十五！」

グラソンがバーチャルのマネキンを倒し、

「こっちは十六です！」

宗萱も一体倒した。

敵の設定は人物、大人ほどの戦闘能力に、多種類の武器を装備させた。数は二人に対し五十。　　残りは十九。

ニュートリア・ベネツへの手下達との戦闘を想定して。二対五十



ただし相手に致命傷となるほどのダメージを与えずに倒さなければならぬ。

宗萱が二十六体、グラソンが二十四体倒し、五十体すべてを早々に片づけた。

「二体差か……」

グラソンは息を切らせながら残念そうに武器をおさめた。

「これは勝負ではありませんよ」

「たしかに、そうだな」

肩を持ち上げて、グラソンはトレーニングルームから出て行った。

「……………」

その姿を、宗萱は複雑な心中で見つめ、彼が扉の向こうへ消えても、しばらく見えない姿を見つめている。

「……………グラソン……………」

トレーニングの中でも、ずっと気になってしかたがなかった。

昨夜のS A A Pの話が。

「福チーフのことで」

S A A Pは言った。

「先ほどの戦いの中で、わたしは森の中で福チーフを見たのです」

「……………」

宗萱は何も言わなかった。

S A A Pはヘルプストの近くにある森の中で、グラソンを見かけたという。それはグラソンがヘルプストの町から寺院へ向かうと去った後だった。

寺院へ向かったはずのグラソンが森へ。 S A A Pは気配を悟

られないように隠れて様子を見ていた。

「そこで誰かを待っておられるようでしたので」

一言も、呼吸すら感じられないほど静かな宗萱に、S A A Pは続

けた。

「しばらくして、福チーフの前に現れたのは」

「……………」

宗萱は細く開いたまぶたからS A A Pに向ける緑色の瞳を、鋭く尖らせた。

「赤いマントと一本ツノのドクロ面　敵側のS A A Pのようでした」

空気が止まった。

宗萱はそう感じた。

S A A Pが言うのなら信じざるを得ない。

グラソンが敵の一人と会っていた。

一本ツノのドクロ面　宗萱はたしかに知っている。

それを考えれば、怪しい点はいくつかあった。

一本ツノの対S A A Pをはじめて見た、窪井の隠れ家でのことだ。その対S A A Pが現れた先にはグラソンがいた。そのときにも、グラソンと対S A A Pは会っていたのだ。

グラソンは敵と通じている。

いつから？

初めからだろう。

それでも、信用したかった。

通じているといっても、完全にではないかもしれない。これまでの様子では、たしかにグラソンは窪井と敵対しているように見えて

いた。

しかしそれもシラタチの信用を得るための演技かもしれない。だがグラソンには何度も助けられた。命を救われた。

信用したい。しかしシラタチの責任者としては信用できない。

そもそも『シラタチ』とは何なのか？ グラソンと二人で結成したこの組織は？

「つー！」

宗萱は力任せに刀を後ろへ振った。

風の魔力が壁を大きく傷つけた。

「ふー……」

刀を鞘におさめ、宗萱は扉へ向かう。

信用してはならない。シラタチの責任者として。

ゆっくりと扉を開け、外へ出た。

グラソンはテラスにいた。背を向けて首にタオルを巻き、トレーニングの汗を風で乾かしていた。

宗萱は彼へ歩み寄り、その背中へ声をかける。

「グラソン」

宗萱はぐっと、左手の鞘を握りしめた。

風が異常に冷たかった。汗のせいかもしれない。

グラソンは振り向きもせず、明けたばかりの空の向こうを見据えている。何の警戒もなく。

鞘を握る左手がさらに力を強めた。

宗萱は右手を動かしたが、

まだグラソンは振り向きもしない。

何の警戒も示さない。

「……っ」

宗萱は歯を食いしばった。

彼の右手は、帽子へ伸びていた。黒い帽子を下げて、言う。

「時間です。行きますよ」

グラソンは振り返ってニッと笑った。

「ああ」

宗萱はさっと彼に背を向けて先を歩いていく。

「グラソン」

「どうした？」

「あなたは、わたしの親友です」

「……ああ」

「勝ちましょう。必ず生きて」

宗萱も帽子で隠して笑った。

彼は責任者としての自分をねじ伏せたのだ。命をかけて。愛  
刀を親友の血で染める覚悟も彼にはある。

「チーフ！」

宗萱の前に一人のS A A Pが立った。

「わたしも同行させてください」

「……あなたを？」

「戦力は必要でしょう」

S A A Pは宗萱の目をまっすぐに見ていた。

「いいでしょう。あと二人、S A A Pを連れて行きます。本部の戦力は削がれますが、たしかに我々だけでは勝機は薄い。敵の数から考えも、何人かのS A A Pは必要です」

宗萱の後ろでグラソソもうなずいていた。

「すぐに招集、テレポート装置へ。魔物の腹へ飛びこみ、打ち破つてやりましょう」

## 75：夜が明けた巨大基地

テレポート装置のプレートが光を放った。

一人、一人、プレートの上に姿を現す『シラタチ』のメンバー達。

宗萱、グラソン、大林。それと三人のS A A P。

ニユートリア・ベネツへの本拠基地

夜明けが、決戦の幕を開けた。

「お待たせしました」

すでに小さな部屋に待機していたマハ工達三人に、宗萱が言った。

「……その前に、おはようございます」

元気がないマハ工が頭を下げ、

「……おはごさます」

元気がないエンドーが頭を下げた。

「どうしました？ 眠れませんでしたか？」

二人は頬をさすりながら答えた。

「ハルトキ君に殴られました」

方頬ずつ、真っ赤に腫れていた。

「え！？ 自分らの寝相の悪さをボクのせいにする！？」

勃発した騒ぎを、宗萱が一言で片づけた。

「よく眠れたようですね」

そして微笑む。

「まあ……、とても眠れたとは言えないけど」

マハ工が肩を落として言うが、ハルトキはとくに眠れていない。

「……………」

シラタチの五つの魔力　今は大林も含めて六つだが、その中でもっとも戦闘向きではないのがハルトキの力なのだ。廃工場の子供達を助けるためにドラゴンと戦ったときのことか思い出されて、ハルトキは不安だった。

「どうした、ヨツくん？」

エンドーが顔を覗き込んできて、ハルトキはあわてて元気に振る舞った。

「ちょっと眠いだけだよ。でも戦闘に支障はない」

ハルトキは宗萱を見た。

作戦の説明を聞くためだ。マハエとエンドーも。

そのとき、エンドーは宗萱とグラソンの後ろに控えているS A A Pの一人に気づいた。

彼は自らこの決戦に参加することを望んだS A A Pで、エンドーも彼を知っていた。それは本部にモンスターが攻めてきたときに戦い、生き残っていたS A A Pだ。あの中で生き延びた彼が、この決戦の場にいる。彼らは戦うために生まれたセルヴオで、戦いの中で消滅するのが本望かもしれない。S A A Pがどれほど強いのかわかっていないエンドーだが、この戦いの中で彼らは確実に倒れるであろうと思った。

S A A Pの能力は、人を相手には発揮できない。死者を出さないようにと命令されているはずだから。感情薄い彼らは自分の身を守るよりも命令に従うだろうから。

「まず、隠れ家のとときと同様のチームに分かれます。わたしと真栄さん、グラソンと遠藤さん、大林さんと春時さん。各チームに一人ずつS A A Pを付けます。そのメンバーを基本とし、行動してください」

全員が言われたとおりのメンバーで固まった。

エンドーが気にかけていたS A A Pがエンドーのチームに付いた。

「それだけです。これと言って作戦はありません。各チームの判断に任せます」

宗萱はエンドーに目をやった。

彼は何も知らず、グラソンを信頼している。本当は宗萱自信がグラソンと行動を共にし、見張っておかなければならないところだが、広い基地内で分散することや戦力のバランスを考えればこのチーム配分しかない。それに案内人にグラソンを常に見張っておくように前もって言っておいた。

「宗萱さん……」

案内人が戸惑っているような声を出す。彼もグラソンのことを聞かされたのだ。そしてそんな話は信じたくないと思っている。グラソンは仲間である以前に、案内人にとっては宗萱と同じくある意味では兄弟といえる存在であるから。

「さあ、行きましょう。ここまで戦い抜いたあなた達の経験を頼りにしています」

宗萱はマハ工達三人にそう言った。

不安が残るハルトキも、友人二人と同じように自信を見せてうなずいた。

部屋から暗い廊下に出た彼らは、左右に伸びている廊下の先を交互に見る。

マハ工が言う。

「右へ進んでいくと、飛行船の格納庫に出る。左へは行ってないけど、ここまではどれも空き部屋だったよ」

「そうか、それじゃあ左だ。格納庫はおそらく見張りが多い」

「そう言うと、グラソンはさっそく左へ歩きはじめた。」

「基地の中心部へ続いていれば良いのですけどね」



宗萱もグラソンを追って歩きはじめ、とりあえず全員がまとまって行動する。

少し歩くと、一つ開け放たれたドアを見つけ、宗萱が警戒しながら覗き込んだ。

「まっすぐな廊下です。奥にドアが一つ」

「開けられてるってことは、誰かがここを通ったのかな？」

ハルトキはふと、夜中の気配を思い出したが、それは気のせいだと頭から振り払った。もしもあのとき誰かが覗いていたとすれば、今この時、自分達が無事なはずはないと。

宗萱がグラソンを見て、グラソンはうなずいた。二人が廊下の奥へ足音を消して行き、ゆっくりとドアを開け、数秒後に手まねきで指示を出した。

そのドアは、小さいが廊下よりは少し広く明るい空間に繋がっていた。そこにはさっそく、三つのドア、三つの分岐点がある。正面、右と左に一つずつ。

すべてのドアが開くことを確認したのち、宗萱は振り返って言う。

「ここから先ほどのチームに分かれましょう。先ほども言いましたが、そこからどうするかはそれぞれの判断に任せます。しかし」

大林を向いて、宗萱は彼に対して言う。

「焦らないように」

少し間をおいてから、大林はうなずいた。

ここへきてから大林が一言も口を開いていないことがハルトキは気になっていた。大林の表情は、絶好調とはとても言えないものだ。この先で彼が窪井を見かけでもすれば、周りも見えず追って行ってしまうかもしれない。ハルトキはそんな彼に何を言うこともできない。

窪井と対峙したとき、大林はかつての親友をどうするつもりなのか、それは彼に任せるしかない。

「オレ達はこっちへ行く」

グラソンが右のドアへ親指を向けた。

「それではわたし達は左へ。大林さん達は正面へ」  
「ここからは別行動。」

マハエは友人二人に短剣を構えて向けた。

「また会おう」

「ああ、絶対な」

「もちろんさ」

顔と目をかわし、無事を祈った。

宗萱とマハエ、グラソンとエンドー、大林とハルトキ、その後ろから一人ずつS.A.A.P。それぞれの組がドアを開いて、その先へと歩を進めた。

広く、複雑な基地の内部へ、シラタチは散った。

今はまだ、巨大な建物は静寂そのもの。しかしすぐに、壮絶な戦いは始まる。

窪井は自室の窓から、巨大な基地を見下ろしていた。

昇ったばかりの朝日に目を細めて、何十分もずっとそうしていたかのように。何を見ているというふうでもなく、ただ虚ろに。

部屋のドアがノックされ、ドア越しに紅丸の声が入ってきた。

「窪井殿……！」

焦りを感じさせるその声に、窪井は虚ろから覚めた。

「ああ、わかった。モフキスを起こせ」

窪井は背伸びをしてから、椅子に掛けられたローブを取り、羽織った。

「全員へ知らせる。戦闘態勢だ」

## 76：独りぼっち

宗萱チーム。

マハ工は短剣を構えて宗萱の後に続く。その後ろからS A A Pが背後を警戒しながら。

鉄板の張られた灰色の壁に、天井の照明が反射して明るい廊下。

「目立つな、オレ達。あの黒マントでも着ていればよかった」

「どちらにしても強行突破です。それに敵も、我々の侵入にじき気づくでしょう」

「……………」

後ろのS A A Pを向いた。

彼は剣ではなく、対人用の短いこん棒を持っている。剣は腰のホルダーだ。

死者を出さず、この組織と戦うのは困難だろう。

窪井や幹部を除いた相手は、マハ工達とそれほど変わりのない年齢だ。マハ工はそんな少年達に戦場で散ってほしくはないと思う。

そのとき、彼らの前方、廊下が十字に分かれている場所で、彼らを待ち受け隠れる影がいた。

影は手に持った短剣を鈍く光らせ、現れた宗萱へ向かってそれを振り下ろした。

直後、影は目を見開いたまま崩れる。

突然攻撃をしかけた手下の短剣はきれいに刃を切断され、手下自身も宗萱の目にも止まらない太刀業により、気を失った。

「峰打ちか……、速い……………」

あ然とするマハ工。

「まだまだ来ますよ」

宗萱は刀を抜いたまま、数歩下がる。

十字廊下の左右から、複数人の手下がさまざまな武器を手に現れ

た。

「げ……」

「七人ですか。どうやら敵はとっくに我々に気づいていたようです」

「マジか」

「走りますよ！」

宗萱は手下達の壁へ走り出す。

襲いかかる武器をことごとく破壊し、峰打ちで手下を倒していく。マハエも凝縮波を込めた蹴りで一人をふっ飛ばし、その後ろにいた手下も同時に倒した。

S A A Pも応戦し、三人が走り過ぎた後の廊下には、うめきながら転がる手下達だけ。

「おお、なかなかいい感じ」

「これからですよ真栄さん」

三人が走る廊下に警報が響き始めた。

「大勢出てくる感じ？」

そういう感じ。警報で侵入者の位置を知らされた手下達が、目の前に押し寄せてきた。

「こりやまずいぞ！」

「こつちです！」

先頭の宗萱が右へ方向を変えた。

その通路はせまく、先にはドアが一つあるだけだ。

が、迷わ

ずそこへ飛び込み、内側からカギをかけた。

「どうするんの!？」

マハエは飛び込んだ狭い部屋を見回して、逃げ場のないことに気づく。ほとんど空っぽの棚が並び、倉庫のようだ。

手下達はすぐにでもドアをぶち破ってくるだろう。

しかし宗萱は落ち着いて、刀を鞘に納めると、ドアの反対側の壁を向いた。

「真栄さん、合図をしたら壁を蹴ってください」

「え？」

鞘を左手で構え、刀に魔力を込める。

「あー、はい……」

マハエも足に魔力を込めた。

宗萱の居合が壁を乱れ斬り、直後にマハエの蹴りが切れこみから壁を破壊した。

壁に開いた孔は、前とは別の廊下につながった。

「当たり前！」

マハエはその通路の存在に驚く。

「先ほどの廊下で、周辺の見取り図を見かけました。この倉庫を抜けて行けば、奥へ続いていそうです」

「おお！ オレはそんな見取り図なんて少しも気づかなかった！」

そのとき、後ろで倉庫のドアが悲鳴を上げていた。

「とにかく急ごう！」

マハエはついでにそこら中の棚を蹴り倒して、孔をくぐった。

「これで少しは時間が稼げるな。あとはこの通路がどこへ繋がっているのか」

最終的には仲間達と合流しなければならぬのだが、この広い基地の中に果たしてその地点はあるのか。そして窪井の前に戦うべき幹部達と、どう出くわすのか。窪井を指す前に立ちはだかるであろう強敵達と。ここは魔物の腹の中。不意打ちも考えられる中で、焦った行動は避けたほうがよいのかもしれない。

ここで一人きりになれば、たちまち胃袋で溶けて消えてしまうだろうと、マハエはぞつと肌をさすった。

無意識に走る速度が落ちて、宗萱とS A A Pの後ろにいた。

振り返ると、遠くから追ってくる手下達の姿が見えた。

「真栄さん！」

先頭の宗萱が、よそ見をするマハエに叫んだ。

見ると、廊下の先のほうで、シャッターがゆっくりと降下し始めていた。

「うおおおおおお！……！」

マハエはがむしゃらに足を速めた。

シャッターが閉じてしまえば袋の鼠だ。

床との隙間はちょうど滑りこめるほど。前の二人が床を蹴って滑りこむのを見て、マハエも思いきり隙間へ向かって床を蹴った。

ガシャン。

静かにシャッターは降りきり、廊下をふさいだ。

宗萱は帽子を押さえたまま床に伏せて、後ろで閉じた鉄の壁を見て「ふー」と息を吐いた。

間一髪、宗萱は無事。S A A Pも無事。マハエも無事

「……真栄さん……？」

宗萱は立ち上がって、自分の目を疑うように何度もそれを確認した。

宗萱達と鉄壁との間に、マハエの姿はなかった。

「……………」

しばらく、言葉はなかった。

そんなむなし静寂など、マハエは知らない。

手下達の足音と興奮の音が迫ってくる中、閉じられたシャッターに顔面を押しつけて、うつぶせにまっすぐ伸びていた。

「間一髪……………」

気持ちは仲間と同じくシャッターの向こう側。

現実には、逃げ場を失った孤独な子ネズミ。

「にゃはあああああ！！！！」

悲痛な叫びをシャッター越しに聞きながら、宗萱とS A A Pはただその場にたたずんでいた。

マハエのピンチだ。しかし魔力の刃でも、この壁は斬り裂けない。

二人は考えた末、その叫びを振り切るように背を向けた。

二人のあきらめなど知る由もないマハエは、仲間の助けを信じてシャッターを叩き続けるが、背後へ足音が近づく。

もう敵はすぐ近くだ。

そのとき、近くの壁の一部が一人通れるほどの孔を開いた。

マハエは迫る敵に圧倒され、迷わずそこに飛びこんだのだが……。そこがこの窮地を脱するためのものであるはずがない。

しかしマハエはその開かれた通路を進んでいくしかない。大勢に踏みつぶされるよりはマシだ。

グラソンチーム。

エンドーはグラソンの後に付いて、薄暗く狭い廊下を歩き続ける。まだ一人の敵とも遭遇していないのは、勘で進んでいるらしいグラソンのおかげか。

「こっちな」

グラソンは迷いなく見つけたドアを開けてはその先へと歩いている。エンドーとS A A Pはただその後を追っただけだ。

「福チーフ、どこへ向かっているのですか？」

エンドーの後ろからS A A Pが訊く。

「……当然、この基地の深部だ。訊くまでもないだろう」

グラソンはぶっきらぼうに答えた。

しかし彼の歩調から、そうは思えない。それはエンドーもS A A Pも同感だ。

S A A Pはこん棒を右手で構えつつも、左手は常に腰の剣に触れ



ている。

エンドーがS A A Pにささやく。

「どう思う？ 敵はオレ達に気づいてるかな？」

昨夜侵入した場所には、監視カメラがいくつか設置されていた。それをエンドーは思い出す。

「そうだとすれば、我々は待ち伏せされているかもしれませんが。確実に仕留めにかかるはずですよ」

「……待ち伏せか。先頭のグラソンが注意してくれないとな」

エンドーはS A A Pに、よりもグラソンに言った。

「安心しろ、敵に囲まれたとしても、お前なら一人で大丈夫だ」

励ましているのかほめていいのか。そう返されてもエンドーはふんぞり返ることができない。

「……安心しろって、オレは安心できねえよ」

「そうか。……それでも、戦う準備はしておけ」

グラソンはまたドアを開く。少し広い部屋で、向かう壁にもう一つのドアがあった。しかし部屋の中央でグラソンは立ち止まった。

「敵だ」

金属棒を抜くグラソン。

機械の音とともに、周りの壁の一部がまるでドアのように開き、大勢の手下が現れた。

数は十数人。完全に囲まれ、戦わずしての突破は無理だろう。

「あの人の言った通りだ。ここで待ち受けて正解」

手下の一人が笑いながら言った。

S A A Pは周囲へ目を回し、攻撃に備える。

エンドーも発破鋼を発動させた。

「待ち伏せ専用の部屋か……」

エンドーは動じず、金棒を近くの手下へ向けた。

「来いよ、勝てると思うのなら」

余裕の表情で言われ、向けられた手下は剣を振りかざして斬りか

かった。周りの手下達もそれにつられるかのように、いつせいに動き出す。

エンドーの金棒　発破鋼は、振り下ろされる剣を受け止め、それと同時に爆発を発生させてそれを吹き飛ばす。それから蹴りの一撃で手下を倒した。

二人が同時にグラソンの相手をしていたが、すぐに蹴散らされる。S A A Pも襲い来る者から確実に倒していく。

エンドーも負けてはられないと、金棒を右手に任せ、左手に魔力を込める。右から来る武器を金棒で防ぎ、左の手下へは掌底で魔力球を叩きこんだ。

気絶させるくらいなら、軽い魔力の消費で十分だ。

しばらく爆音が続いた後、部屋は静まった。

「よっしゃ、一丁上がり！」

エンドーはまだまだ余裕の表情で、グラソンへ振り向いた。

「……………」

しかしそこに彼の姿はなかった。それどころか、S A A Pの姿も。……………えー、と？」

床に倒れる大勢の手下達の中、エンドーは独り立ちつくしていた。

## 77：弟の思い

大林チーム。

薄暗い廊下、ハルトキは大林のとなりを歩きつつ、ときどき彼の顔を目で覗いては心の中でため息を吐いた。

とても恐い表情。

となりを歩くハルトキやS A A Pの存在など忘れていようだ。

ただ彼の瞳には、窪井しか映っていない。

話しかけるなどとうていできるわけもなく、重たい沈黙の中でハルトキは大林の心中を思う。

「……………」

しかし、もうハルトキに大林の心を理解することなどできなくなっていた。

大切な人の仇のために、親友を殺す？

ハルトキには考えられない。兄弟とも呼べる親友を殺すことなど、大林同様にそんな大切な“兄弟”を持つハルトキには。

「（でも、そんな半端な考え方じゃだめなんだ）」

大林と窪井の間にできた溝は、平和な世界で暮らしてきたハルトキには考え及ばぬほど深く、想像すらできないほどの暗黒にまみれているのかもしれない。

たった今、大林の心の中で渦巻く激しい感情は、やはり本人にしか理解できないものなのだ。

「負けないでください」

勇気を出して、ハルトキは声に出した。

大林は驚いたようにハルトキを見た。彼の、気持ちを抑え込む固い横顔を。

ハルトキにはそれしか言えなかった。それでも十分だと思っ  
た。

「負けはしない」

大林は前に向きなおって答えた。

彼の表情が少しでも緩んでくれたなら、ハルトキには十分だった。大林という兄の中に、少しでも自分のことが残っていてくれるのなら。

窪井との鬪いが終われば、大林には昔の彼にもどってほしい。ハルトキに心からの笑顔を向ける大林に。ハルトキが思う“兄”の姿に。

それは難しいことかもしれない。それでも……。

「（負けはしない）」

ハルトキも自身にそう言った。自分に戦う力が足りないとしても。

三人の正面で、大きな扉が左右へ開いた。

自動扉の向こう側には、横長の広場があり、天井のない屋外。

そこから見上げると、青い空へ向かって黒くて高い建物が。段を成して建てられた、城のような建物だ。明らかに、この基地で一番高く、基地の中枢を思わせる。

「！」

大林が何かに気づいたように、目を見開いて建物を見上げた。

ハルトキも望遠視をそこへ向ける。

そびえる建物の中ほどにあるテラスに誰かが立っている。

見つめる大林の瞳が、濃い紫色に染まった。

「……窪井？」

ハルトキの眼は、ロープに身を包む窪井の姿を捉えていた。

ギリツ、と大林が歯を擦る。音が鳴るほどに拳が握られ、彼の体

が紫の魔力をまとう。

「……………」

窪井も大林の姿に気づいている。冷たい目が見下ろしている。何も言わずに窪井はそこから姿を消した。

「クボイ……、ケン……！」

大林の低い声が、歪んで放たれた。

刹那、大林の姿もその場所から消えた。

ハルトキはすぐに目を走らせ、建物を跳び登っていく大林を見つけた。

「……………」

ハルトキは表情なく大林を見送った。

当然だ。大林は窪井と闘うためにここへ来たのだ。ここからは彼の闘い。

「（ボクは、見送ることしかできない）」

無表情のまま顔を下ろし、ホルダーから短剣を抜く。

「どうされます？」

S A A Pの問いに、ハルトキは言う。

「もちろん、この先へ」

少し先にある扉を短剣で指す。

その表情に、微かな笑いが浮かんだ。

味方はS A A P一人だけだが、それほどハルトキに不安はない。

彼の魔力は他に比べて攻撃に劣る。しかし戦いは攻撃力で決まるものではない。

ハルトキは自分の魔力の頼もしさに身をゆだねた。　　これまでと同じように。　　扉へ足を進める。

「……………」

「……………」

誰かの声が反響した。

直後、ドアを蹴り開ける音とともに大勢の足音が広場を賑わす。

横長広場の左右にある蹴り開けられたドアから、何人もの手下が現れ、ハルトキとS A A Pを挟んでいた。ジャラジャラと、武器を手に。

「……目ざましの戦いには、少し多いかな」

動体視と縛連鎖を発動させるハルトキと、背中合わせに棍棒を握るS A A P。

「片方は任せます」

ハルトキの言葉にS A A Pはうなずく。

「ぼこぼこにしちまえい！」

興奮のおたけびが響き渡り、手下達がいっせいに武器を構えて走り出す。

ハルトキは静かに目を閉じて、くわつと開いた。

キーン……、という高い音が魔力のこもったハルトキの眼から空間へ広がった。

魔力の鎖とともに、ハルトキは地面を蹴る。縛連鎖を振りかざし、手下達へ。

真つ暗な廊下には人の気配も音すらもない。

基地内部の複雑な通路の一つ。

壁に足音が反響して、重なった音が奥へと響いた。

センサーが人物を察知したのか、決まった間隔で埋め込まれている壁の小さなライトが自動で点灯し、通路を照らした。

足音の主は迷うことなく道を選び歩き進む。

「この辺りか？」

男の声。銀色の長髪が、彼が足を動かすたびに揺れ、青い瞳が微かな明かりで光った。

歩みを止めた彼の手には、この基地の見取り図が。男　　グラ  
ソンは見取り図に目を落として、また歩き出す。

若干、足音が速度を増す。それから止まった。

「……ここだ」

グラソンは見取り図を握りつぶし、正面に目を向けた。

微かな喜びの声。そんな彼の笑いは、見えない場所にいる一人の者にも聞こえていた。

「グラソンさん……、あなたはやはり……」

## 78：侍の力

たった一人のマハ工は、はぐれた仲間を探して暗い隠し通路をひたすら前進していた。

壁に現れた孔の中まで手下は追ってこなかったものの、本当にこの通路を進んでも大丈夫なのかと考えながら、足を前へ動かし続ける。

別れのない通路に人の気配はない。背後も同じく。

「何なんだよ？」

これ以上は進みたくはないが、ここで待っていても味方は来ないだろう。

自分から先へ行くしかない。

例えこの先に怪しい扉があつたとしても……。

「……怪しい扉だ」

真黒で大きな扉から十メートル離れた位置で止まっていた。

怪しい。

黒が基本のこの基地に、真黒な扉。とくに変わった部分はないのだが、正確には扉というより、怪しいのはマハ工が見下ろす床。そこには扉へ向かって白い大きな矢印が描かれている。

「……入らないぞ。入るわけないだろ」

マハ工は扉へ、べつと舌を見せ、向きを変えた。

後ろへ。

「……」

しかし足は動き出さない。来た道を見つけたまま立ちつくし、  
「……くっそ！ この、何と言う　　矢印め！ この矢印！ 引き返せないことを知っていて！」

しばらく矢印へ文句をぶつけたあと、マハ工は扉をにらみつけた。



何度も深呼吸をして、慎重に扉の取っ手を握る。それから、思い切って前へ開いた。

そこはやはり黒いながらも、明るいホール。

天井のいくつもの照明を腕で遮りながら、マハエはホールを見回した。

広い空間。高い天井。マハエが立つ入り口から五メートルほど上には、ホールを囲むように設けられた観客席のようなものが。

「これは……」

見るからに闘技場。

どうやらマハエは、闘技場の挑戦者入口から入場したらしい。

……しかし観客席から見下ろされる戦闘場にはマハエの相手らしき敵は見当たらない。

「ここはスルーか？ でかいモンスターでも出てくるかと思った」

後ろで閉じた扉が、嫌な音を立てた。

「ロックされました？」

振り返るが、内側からの扉には取っ手がない。

「……………」

マハエはしっかりと短剣を握りしめて、ホールの中央へ歩み進んだ。

見たところ観客席にも人の姿はなく

気配を感じて足を止める。

観客席の死角に隠れていた手下達が次々に姿を見せた。

何十人、数えるだけでも面倒くさいほど。

「なるほど。そういうこと？」

大勢の手下が武器を手に中央のマハエを囲み、見下ろしている。

「いい気分じゃないな。少なくとも」

不良達とケンカなど、人間世界でも経験したことはない。できるだけ不良などとはかかわらずに生きていたいと、常に思っていたほどだ。

学校のトイレで小便器の右と左を名の知れた不良に挟まれたとき

ほど、恐ろしいことはなかった。これまでは。

しかしこの状況のもとでは、そんな彼らと肩を抱き合って用をたすことさえ簡単に思える。

レベルが違いすぎる。それよりも、これは緊張感や恐怖などとは違う。不良達の威圧感に、そんな感情は押しつぶされるほど。

「ようこそ、お前の墓場へ」

手下の一人が声を上げる。

「せめて死に際まで、組み手を楽しんでくれ」

鼓膜を激しく揺すぶる笑い声。

マハ工は眉をしかめて目を閉じた。

手下達が観客席から跳び下りて、武器を振りかざし、マハ工に走り迫る。

「……こんな場所、オレの墓場には広すぎるな」

押し寄せる敵。しかしマハ工は目を閉じたまま顔を床に向けている。

マハ工は笑っていた。

「お前ら、オレと戦うのなら、命を賭けるよ？」

押し寄せる群れに呑みこまれる。マハ工は手下達の中に消えた。

「オレを殺るよりも先に、自分の命を守れよ！！！！」

床が、空間が大きく揺れた。

マハ工が呑みこまれて消えた場所から、すさまじい衝撃波が発生し、手下達を吹き飛ばしながら広がる。

「何だ！？」

波に舞い上げられ、落下する者、床を転がっていく者……。被害を受けなかった者もみな立ち止まった。

能力に動揺して。それだけではなく、マハ工が発する、彼らを超えるほどの威圧感に、全員が動きを止めた。

周りの手下達へ、マハ工は威嚇の眼を向け、声を低く言った。

「さっさと逃げる」

宗萱とS A A Pは基地中枢へ続く通路を探して、歩きまわっていた。

記憶していた見取り図の範囲から、別のエリアへ移動したらしく、そこに薄暗い廊下はない。

金網の床を歩きながら、発電施設のような広い空間を見まわして扉かドアを探す。

壁や床のパイプ。大きな蓄電池のようなものが、いくつも並んでいる。

「火力発電ではなさそうですね。風力か何かのエネルギーを『光の石』で増大させ、送電する、この基地の動力源……」

見まわして敵の気配がないのを確かめる。

「ここでの戦闘は避けたいですね。むやみにいじらないほうがよさそうです」

施設のすみにドアと昇降機を見つけた二人は、昇降機で上を目指す。

今自分達が基地のどこにいるのか、しっかりと注意していた宗萱だが、複雑な構造のおかげで、ここが地下なのか地上なのかさえ、わからなくなっていた。

昇降機にはレバー一つしかなく、簡単な操作で上階と往復するだけ。

窓でもあれば、だいたいの位置を確かめられるのだが、この基地の設計は彼らにとってあまりにも不親切。

ゆっくりと上昇する昇降機の上で、二人は何の言葉もなく停止を

待った。

停止した昇降機から近くの扉を開き、二人は冷めた空気漂う屋外に出た。

「貯水池ですね」

目の前には五十メートルプールほどの広さはあるコンクリートの貯水池が。池には真ん中に橋がかかっており、それを渡って向こう側へ行ける。

宗萱が橋の上から池を覗き込むが、さほど汚れていなくとも、目測できる深さではない。

「デンテールの人工島には、得体のしれない生物が潜んでいました  
が」

池の中に生き物の姿は確認できず、二人は気にせず橋を渡った。

「モンスターの合成……。窪井があのような趣味を持っていないことを祈りましょう」

「……………」

無言のSAAPと宗萱は扉を開いて再び屋内へ入った。

そこはただ広く何もない部屋。天井が高く、正面、左右の壁の五メートル上にはテラスが備えてあり、どうやら集会場かそうでなければ戦いを観賞するための闘技場。

しかしどちらでも関係ない。

宗萱はそう思う。

入ってきた扉に背を向けたまま、まっすぐ先の進むべき扉にも目を向けずに、探るようにテラスを見つめる。

「誰ですか？」

呼びかける。

すぐに足音が響き、一人の男が二人を見下ろした。

「やはり、ここで待ち構えたのは正しかったようですね」

紅丸がテラスに立っていた。

「あなたですか」

宗萱はいつでも刀を抜けるように、柄に手をかける。S A A Pは武器をこん棒から通常どおりの剣に持ち替えた。

紅丸はテラスから跳び下り、膝を曲げて着地すると、立ちあがって改めて二人を見た。それからS A A Pを外してまっすぐ宗萱を。彼も対して紅丸の鋭い眼を見返した。

「あなたとは、わたし自らもう一度闘わなければならないと思っていました」

「……ほう？」

その言葉に紅丸は微笑して首をかしげる。

先陣をきつて向かっていこうとするS A A Pを宗萱は手で制す。

まずは確かめなければならぬ。自分が闘う相手に。

「怒り」

宗萱はゆっくりとその言葉を口にした。

「あなた昨夜、そう言いました。怒りをその身に刻んでくれよう」

「……………」

「ずっと気になっていました。消えたS A A P第一部隊のことです。いくらニュートリア・ベネツへであっても、新型S A A Pの隊をどのように拉致できたか。窪井であっても無理な話でしょう」

宗萱は一度言葉を切り、相手の表情をうかがうが、紅丸は小さな動揺すら見せない。

「十人ものS A A Pです、戦闘能力はこの手下達と比ではありません。どのように窪井が十人ものS A A Pを手にしたか。簡単なことでした。とても考え難いことですが……」

紅丸は変わらず反応もない。ただ、次の言葉を確信している。

「あなたが、S A A Pの拉致に協力したのでしょうか？ “第一部隊の隊長さん”」

宗萱は改めて紅丸の表情をうかがう。

「……ふっ」

彼は目を伏せた。

「なぜわかつたのでござるか？」

「わたしも、昨夜あなたの言葉を聞くまでは、まさかS A A Pの隊長が魔力を得ているとは思いませんでした」

「……」

「“怒り”とは、S A A P隊長に組み込まれる特殊データです。戦闘時には怒りで自らの戦闘能力を上げ、戦う。本来ならば命を削る戦いです。しかしあなたの場合は、魔力によって自滅から身をカバ―している。それが、あなたの計り知れない強さの秘密」

話を終えると宗萱はため息を吐いた。

「魔力と怒り……。これほど、苦戦しそうな闘いはありませんね……」

「……」

「……拙者に勝てるか？」

紅丸も両腰の刀に手を置く。

「あれほどの人数で苦戦した拙者を、でござるか？」

「そうですね……。しかし、あなたとわたしは本来ならば共に敵と戦うべき仲間。あなたほどの力があれば、シラタチにとって心強いのですが、あなたはどうしても、窪井の幹部という立場を降りるつもりはないのでしょうか」

「無論。拙者は」

「侍……。そう、魔力を得てセルヴオ　人とした意思を完成さ

せたあなたの選択。わたしとは、選択がまったく逆だったというだけのこと。ですが敵対した以上は、あなたを排除します。あなたも本来、この世界に存在しなかった、我々の抹殺対象の一つです」

宗萱は刀を抜いた。

抜いた刀の切っ先を正面へ向けたまま、瞬間だけ目を閉じた。

「それが、我々です」

ドアが開き、男がその空間に足を踏み入れた。

鉄板の床がカタンと音を出す。

男はグラソン。彼が頭を動かして周囲を見回した後、静かな空間にドアの閉じる音が伝った。

見回す限りは、ここまでと同じような鉄板に囲まれた基地内部の一つ。淡い明かりのライトしかなく、不気味だ。この基地のどこにも心が晴れるような場所はないのだろう。しかしここはとくに変わっていて、部屋の床、中央に開いた手すり付きの大きな穴は、その上にあるクレーンで穴の中の荷物を引き上げるためのものだろう。底が見えぬほどに深い穴から冷たい空気が吹き上がってくるのか、肌寒さを覚える。しかしグラソンの気持ちはこれまでにないほど高ぶっていた。

彼の首にぶら下がった首飾り。銀色の金属で絡まれた装飾の小さな水晶玉。内では空気が激しく熱されているような渦が巻いている。グラソンはクレーンへ足を運ぶ。

彼の足音の他に人の気配は感じられない。だがグラソンは後ろを移動する微かな気配に気づいてふり返った。

「……………」

誰もいない。何でもないほんの少しの空気の動きを敏感に感じ取ってしまっただけだろう。しかし続いて耳に入った気配は明らかな人の足音。

赤いマントの人物が彼に近づいてきた。

## 79：仮面の下

「遅かったわね」

「ああ、慎重に行動しなければ、シラタチに気づかれる」

「シラタチね……。どう？ 平和のために働く気分は？」

「とてもいい気分だ、とは言えない。それはそうと、今夜は何だ？ シラタチの殲滅作戦か？」

「そうね。統領さんにとって、シラタチはとても目障りな存在だわ。でも、今夜の戦いは少し違う。ニュートリア・ベネツへは、ウィルスを放つわよ」

「ウィルスだと？ またずいぶんと急だな。……まあいい、今夜の戦いが終わった後、シラタチが基地へ侵入できるよう、明け方にテレポート装置を作動させる。お前には、もう少しがんばってもらう」

グラソンの前に現れた赤いマント。一本ツノの仮面の人物。その人物にグラソンはニヤリと笑いかける。

赤マントは彼に近づき、言った。

「いい調子みたいね、グラソン」

赤マントの顔から投げ捨てられる仮面。

「お前のサポートのおかげだ」

グラソンは仮面の下にあった顔に再度笑いかけた。

フードを取ったその顔。すみれ色の長い髪を左右に振る整った顔立ちの女。

「セレーネ」

グラソンを見つめる瞳に闘志の色はない。



赤いマントで身を包んだセレーネ。デンテールの手下であった頃の無表情な彼女とは違う。彼女の顔には笑みがあつた。

「シラタチのお仲間、さっそく暴れているようね」

「いいさ、もうオレはここに用はない」

そう言つてグラソンは顔を横に向けた。どこか強がつて、心の内を隠すように。

セレーネは眉を上げてグラソンの首飾りを見た。

「ひどいわね。仲間が戦っているのに、あなただけがここを去るの？」

「……この戦いが終わるまでは、とどまるつもりだ」

グラソンは表情を消した顔をセレーネに向ける。

「お前は どうする？」

「そうね。私はすぐにでも脱出するわ。統領さんが討たれる前にね」

セレーネはグラソンに背を向けた。

「仲間を気にしてるのね」

昔のグラソンからは見ることができない、今の彼の顔に、  
ずいぶんと変わったわね、とでも言うように。

眉をしかめるグラソンは自分の気持ちに疑問を抱いているようだ。

「まあいいわ、ここであなたと行動するわけにもいかないし」

グラソンに顔を向けて別れの頬笑み。

「セレーネ」

「なに？」

「……感謝する」

思わぬ言葉だったのだろう。セレーネはふり返りもせず、しばらく棒立ち状態の後、ふっと目を閉じた。

「借りを返しただけよ」

それだけを返し、セレーネの言葉は続かなかった。しかし去ろうともせずにそこに留まっている。

「じゃあな」

グラソンは彼女の背に手を振り、自分も背を向けた。

しかしセレーネは立ちつくして、そんな彼女を気にしてか、グラソンも足を進めようとはしない。クレーンの深い穴のそばで、手すりに片手を置く。

やがてセレーネが口を開いた。

「……ねえ、あなたはその“石”をどうするの？ それは何なの？」

「少なくとも、デンテールよりはこれのことをよく知っている」

「……………」

とたんにセレーネは言葉をなくした。

デンテールという存在は、いまだに彼女の心から消えてはいない。

「デンテールに命を救われた、か。オレはお前の過去を詳しく知らないが……………」

口を閉ざしたままのセレーネに、グラソンはそれ以上何も言えない。

そのまま去ろうと足を踏み出したとき、笑い声がこだました。

「ククク……………。そういうことが、女あ」

恐怖に目を見開くセレーネの足元へ、天井から片手剣が放たれた。セレーネはすぐに反応して右手にクナイを構えた。そしてグラソンのとなりへ素早く移動。グラソンも両手二本の金属棒を抜き、敵を探す。

その男はまさにセレーネが立っていた位置の真上にいた。細いパイプが並んで取り付けられた天井　パイプの上を足場としていたモフキスが、床に突き刺さった片手剣の前に降り立った。

「やはりお前はこちら側ではなかったか……………」

右手で剣を抜き、喜びに歪んだ顔を二人へ向けた。

「いつから……………」

セレーネのこめかみを汗が伝う。

天井を見回してからグラソンは、モフキスの黄色い眼をにらんだ。「気配を感じなかった……………。殺気さえも」

「統領さんの幹部、モフキスよ。あいつはまずいわ、戦闘用に極限まで改良されてる」

「あの黄色い眼……、まさか感染者を？」

「ええ。戦うことがあいつにとつてただ一つの快樂。もう“人”にはもどせない。救おうなんて思わないこと。片腕を失ってるけど、油断できないわ」

グラソンは冷や汗をかきつつも鼻を鳴らして口元を吊り上げる。

「黒い魔物の子　いや、あれは“トカゲ”か」

金属棒に魔力を込めて、相手の動きをうかがう。

「ククク……。女だとは思っていたが、仮面の下にいたのは思わぬ美女。……それにニユートリア・ベネツへの幹部まで昇るほどの実力……。最高の相手だぜ……」

狂喜に手を震わせ、声に出ない笑いを腹の中に押し込めて。モフキスの標的はセレーネのみ。

「甘い香りだ……。楽しもうぜ」

「オレをわすれるな、ゲス。お前がこいつを斬る前に、オレがお前を叩き殺す」

「クク……。悪いが、オレ様のほうが速い……」

モフキスが素早く身をかがめ、低い体勢で二人へ迫る。とても速い動きにも関わらず、足音は消えている。目の前にいても気配を感じさせない。

グラソンは金属棒で床を突き、足元から前を凍らせていく。足場を凍らせてしまえば素早い動きは不可能。しかしモフキスは寸前で床を蹴り、舞い上がった。

「上か！」

モフキスはグラソンの頭の上へ。すかさずグラソンは金属棒を構えて天井を仰ぐ。

「！？」

モフキスははいない。剣だけが天井に突き刺っているだけ。見失った。

「後ろ！」

セレーネの声でグラソンはふり返る。

「遅い！」

モフキスはすでに着地して、氷の張っていない床を踏みしめていた。そしてそのまま跳び上がり、グラソンへ蹴りを放つ。

「くっ！」

金属棒がモフキスの足をはじくよりも早く、グラソンは蹴り飛ばされる。モフキスは同時に天井の剣を右手でつかみ取り、着地した。剣の刃はセレーネへ向けられ

「悲鳴はナシか？」

モフキスの瞳が狂喜に歪んだ刹那、セレーネは恐怖に圧された。

ほんの一瞬だけ。モフキスの剣が彼女を貫くには、それすらも十分すぎた。

「セレーネ！」

グラソンが放つ氷の刃がモフキスを吹き飛ばす。

剣が抜け、セレーネは負傷した横腹を押えて穴の手すりに寄りかかる。

グラソンは走った。

気を失いつつあるセレーネの体が、手すりを越えた。駆け寄るグラソンを瞳に映して、最後の力でセレーネは彼に微笑んだ。

「セレーネ！」

目を閉じて、深い穴へ落ちていくセレーネ。

グラソンは手すりから上半身を乗り出し、彼女の手を掴んだ。

「意識を保て！ セレーネ！」

片腕で彼女を引き上げる。  
しかし

「ククク……、まさか防御もできず、たやすくオレ様の刃を受ける  
とは……」

立ちあがったモフキスが、再び剣を握りなおしていた。

「お前が選べ、男。ここでオレ様に斬り殺されるか、女を穴に落と  
し、生き延びるか」

「……………」

モフキスは剣を振り上げた。

「時間切れだ」

跳び上がり、振り下ろされる剣。

セレーネを守りながらでは抵抗することができない。      グラソ

ンは目を閉じた。

ガキンッ！

モフキスの剣が手すりを叩いた。誰を斬るでもなく、響き渡った  
金属音が消えていく中、モフキスは驚いた顔で正面を見つめていた。  
そこにグラソンの姿はない。

モフキスの周りにも、どこにも。

「……………あの野郎……………」

モフキスは剣を下ろし、うなづいた。

それからグラソンが消えた場所へ目を向ける。

深い穴の底へ。

「どちらにしても、この深さで生きてはいられまい」  
モフキスは後ろを向いて剣をマントの中へ納める。  
「む？」

手を止めた。

気配を探るように、ゆっくりと目を動かす。その目は、前方の壁、床と直角に伸びる太いパイプへ。

「誰だ？」

そこに隠れている人物に。

「……………」

数秒してパイプの陰から姿を見せた。

白い鎧の足。

「てめえは……………」

モフキスの表情が、再度喜びに変わった。

## 80：氷の瞳

穴を落ちていくグラソンとセレーネ。

気を失った彼女をグラソンは左腕でしっかりと抱きしめ、見えな  
い底へ目を向ける。

穴はとても深く、このままでは二人とも命はない。

しかしグラソンはここで死ぬつもりなどなかった。

「頼むぞ、力を貸してくれ！」

右手の平を首飾りの水晶に押さえつけた。

手の平から光があふれる。

瞬間、グラソンは自らの魔力が膨張し、あふれ出るのを感じた。

光はグラソンを包み、彼の背で翼を成した。

着地したグラソンの背から、氷の翼が砕け散った。

彼は両腕にセレーネを抱えて、ひざを曲げた状態で動かずに、し  
ばらくしてからセレーネを足元に下ろした。

氷の翼に助けられたが、グラソンの魔力は数秒間で大きく削られ  
ていた。

「……………くそっ」

グラソンは立ち上がるのをあきらめ、その場所を見回す。

冷たい鉄板の床。冷えた空気。そこは洞窟の入口らしく、鉄の床  
と土の地面の境から、真っ暗な横穴が伸びている。

「（光の石の採掘トンネルか？）」

近くには基地の内部へもどるドア。そのドアを照らす電球の明か  
りに、セレーネの顔も照らされる。

「くっ……………」

傷の痛みが、セレーネを目覚めさせた。

「セレーネ！」

「……………」

グラソンの呼び声でセレーネは目を開いた。

彼の左腕に支えられて、静かに息を吐く。

「……………グラソン……………」

小さな声で彼の名を呼び、彼の頬へ手を伸ばすが、傷の痛みにうめいて力なく腕を下げた。

モフキスの剣に貫かれた彼女の横腹からは、大量の血が滴り落ちている。グラソンは傷口に手を当てて、じつとセレーネの瞳を見つめる。

なぐさめる言葉も出なかった。

傷口を冷やし、出血を抑えてはいるが、命の炎は少しずつ、瞳の中で弱まっていく。

「……………セレーネ」

セレーネは傷口に当てられたグラソンの手に、自分の手を重ねた。そうすると少しだけ、瞳に温かさが揺れてきた。

「……………私は……………、両親に愛されて育てられた……………。私の父は、フーレンツで武道を教える、道場主だったの。私は兄とともに、父のもとで強く育った……………」

「……………」

グラソンは黙って、彼女のと息を肌に感じている。彼女がしゃべるときに傷口が出血を起こすが、グラソンは彼女の口をふさごうとはしない。

わかっている。もうセレーネに生きる力が残っていないということをと。

「……………でも二年前、両親と兄は死んだ。……………父の道場は、焼き討ちに遭い、全焼。稽古の最中で、何人も火の中で焼け死んだわ……………。私は必死に火の中から逃げ出した」

セレーネは口を閉じる。彼女の瞳から、涙があふれ出た。



「外に出た私が、夕焼けの下で見たのは……、数人の少年達に斬り殺される兄と門下生達。私は逃げて、木の陰に身を潜めて燃え落ちていく道場を目にしていた……。恐くて動けなかった……。殺される理由なんか知らないのに……」

呼吸が乱れた。

グラソンは彼女を抱き寄せ、セレーネは何度か小刻みに息を吐き、呼吸を整える。

出血をやわらげることしかできない。彼女の命はもう何分ももたないだろう。

セレーネは目を閉じて涙を消した。

「……………」

目を開いた彼女の瞳には、恐れの色はなかった。

「動けない私を、少年の一人が見つけた。剣を振り上げる少年を見て、もう死ぬんだと思った。……けどそのとき、“あの方”が私を助けてくれた。数秒で少年達を蹴散らすほど、強い方だったわ」

その言葉をグラソンはつらい思いで聞いていた。

「お前の中のデンテールは、命の恩人か……。しかし」

デンテールが人を助ける。気まぐれか、何かの目的のためか、どちらかだろう。しかしそんなことを今のセレーネに言うのは、気が引けた。

「でも、私はあなたにも助けられたわ、グラソン。……あの方は、私を実験のためのネズミとしか思っていなかったこと、気づいてたけど、私はあの方のためならと思ってた。今は、あなたのおかげで助かったと、思ってる……」

セレーネの明るい笑顔。彼女のそんな表情がグラソンには言葉よりも最高のお礼だ。

「……私の過去、あなたには知ってほしかった」

「……………」

「そう、忘れてたけど、マントの中を……。あなたが探していたもう一つのもの……」

セレーネはグラソンの頬へ手を伸ばし、彼の顔を自分に近づける。  
「今の私は、女に見える？」

「……ああ」

グラソンはうなずく。これまでの彼女よりは、ではなく、本当に彼女が美しく見えたから。

遅くなっていく彼女の脈を感じながら、心は熱に燻られる。

自分の心……。グラソンはその意味を理解できず、呼吸の止まったセレーネの体を抱きしめたまま言葉も出なかった。  
それでも一つだけふと思った。

「案内人……」

ずっと黙っていた案内人へグラソンは小声で話しかける。

「……はい」

「オレの心は……。氷ではなかった」

「……」

グラソンの手に重ねられたセレーネの手が、音もなく滑り落ちた。  
怒りとは違う、悲しみの痛み。

なぜこんなにも悲しいのか理解できない。それが苦しくてしかたがなかった。

しかし、その感情を押し込めておくことしか彼にはできない。

それには少しの時間だけ。すぐに心は落ち着き、片手でセレーネのマントを探って、それを見つけた。

手のひらに乗る小さなカプセル。それをズボンのポケットに入れ、小さな声でセレーネに礼を言った。

「……なぜ言ってくれなかったんですか？」

「……」

「いえ、まだ何も言ってくれていません。あなたの目的は何なので  
すか？」

「……」

グラソンはゆっくりセレーネを離し、立ちあがった。

「グラソンさん！ わたしも宗萱さんも、あなたを……！」

「オレを、信じていなかった？」

「信じていました！ だからこそ、今まであなたとともに戦ってきたのです！」

その言葉も耳に入れないかのように、グラソンは歩き出す。

「なぜ言えないのですか！？ 仲間にも言えないのですか！？」

「……………」

「どうして……、宗萱さんにも……！？」

グラソンは足を止めた。

「…………… お前達を仲間だとは思いたくない」

冷えた空気に、とても冷たい言葉が馴染んだ。

「グラソン……………」

どんな言葉も、出てこない。

発声機関が停止したかのように。

本心で言ったとは思えない。思いたくなかった。

グラソンは無心で前を見つめているようだ。

「……………」

空間が振動している。

基地内の戦いをグラソンは魔力で感受し、それから覇気も。

どこかの戦いで、覇気と魔力が強まった。

81：親友へ（前書き）

更新が遅れて申し訳ないです…。

## 81：親友へ

刃物がこすれ合う鋭い音と、斬撃のたびにはしる光のかけら。そして舞う火の粉。

力が弾ける。

風と炎が。

壁に寄りかかって倒れているのはS A A P。

紅丸の前ではS A A Pは無力であった。

宗萱と紅丸の闘いは呼吸一つの間もなく続いていた。

刀で相手を斬る。それを刀が阻止する。

武器の闘い。

どちらも全力ではない。互いが相手の力を試し合っているよう。その中で宗萱は自分の力が相手に劣っていることを再認識した。

「（素早さはわたしに有利がある。しかしパワーとスタミナは相手がうえ……。接近戦では勝ち目はないですかね……。？）」

紅丸の二本の刀を一本の細い直刀で受け止めるのは無理がある。刀を折らないように魔力をまとわせ、さらに刀をはじくために魔力を上乗せする。このままの闘いが長く続けば、魔力はもたない。

「うっ……！」

刀が宗萱の頬をかすめた。

「闘いに集中せねば、拙者には勝てぬぞ！」

頭上から振り落とされる二本の刀が、受け止めた直刀ごと宗萱を床へ叩きつけ、追い打ちをかける。

宗萱はすぐに腕の力でその場から跳び、床を割る刀から逃れた。

「（早さで勝るのなら勝ち目はあります！）」

宗萱は壁を蹴って高く舞い、刀に魔力を注いだ。

「桜舞灯 『降風』！」

細かな魔力の刃が紅丸へ降り注ぐ。

紅丸は跳んでかわし、両の刀に魔力を注いだ。

「む？」

コンクリートの塵の煙が視界をさえぎる。

床に降りた宗萱は同時に床を蹴り、煙の中で燃える紅丸の魔力へ。

「斬灯 『灯柱』！」

振り下ろされた宗萱の刀は、白い光を帯びて縦に柱を成す。

風の魔力は鋭く、鉄も断つ。しかし魔力で強化された紅丸の刀はそれを止めた。

衝撃で刀をまとう炎は散り、塵の煙もすべて吹き飛ぶ。

どちらの魔力も消えた。

互いを見合う瞬間もなく、すぐに後ろへ退く二人。そして魔力を込めなおす。

「火と風では勝負が見えぬな。しかし、拙者の炎は風で吹き消すことはできぬ」

「……たしかに、わたしが劣っています。しかし風の強みもある」  
宗萱の刀が風をまとう。

「ならば見せよ。拙者の炎を吹き消す技を！」

紅丸の二本の刀も炎をまとい、突き上げられると柱を形成して渦を巻く。

「灰と化すがよい！」

炎の柱、渦が宗萱へ向けて放たれた。

炎が呑みこむ寸前、

「桜舞灯 『玉風』！」

宗萱の刀から風があふれ、高速回転する大きな球体に。

『玉風』は炎を切り裂き、宗萱を守っている。

炎は細かに散っていく。

完全に防がれた炎の渦。紅丸は目を見開いて、自分の技を破った風の魔力を眺めている。

宗萱はさらに魔力を込めた。

「桜舞灯 『斧風』！」

おのかせ

『玉風』が別の風に砕かれて、重く鋭い魔力が紅丸へ放たれた。

紅丸は攻撃を炎で防ぐが、『斧風』に通用しない。

炎の守りでは消えない風を、紅丸は刀で受け、力で耐えた。

『斧風』は刀の刃に裂かれたが、その破片が紅丸の腕や胴にかすり傷を負わせた。

「っ！ なぜ……？」

完全に防ぎきれなかった刃。炎が風に劣ったように。

「魔力は己の力だけでは発動しない」

刀を下げ、宗萱は言う。

「グラソンの魔力は『氷』。しかしその魔力はそこに氷のもととなる水分が存在してこそ。あなたの『炎』も同じでしょう。炎は酸素がなければ燃えることはない」

「わたしの『桜舞灯』は、空気を乱して『真空』発生させるのです。真空では炎は燃えない」

口元でほほ笑む。

「余裕などとは思わないでください。命をかけましょう」

口を閉じていた紅丸もほほ笑んでうなずいた。

「そうでござるな。それが戦なり」

紅丸の刀が、炎に消える。それまでとは少し違って、炎は勢いを強めていた。

魔力に守られているはずの紅丸も、その炎の熱に若干、顔を歪める。限界を超えた魔力の炎だ。

「プログラムの力が、魔力の守りを越えている……」

宗萱は焦りを感じている。それもそうだ、紅丸の魔力は宗萱の力を圧倒している。

「ようやく力を発揮できる……」

「……しかしその力はあなた自身も……！」

「拙者が己の炎に焼きつくされる前に、勝負はついておる」

「……………」

触れただけでも焼き尽くされるような猛炎を前に「余裕などとは思わないでください」とはもう言えない。

紅丸がまどつているうるこ模様の着流しも、炎にあぶられて燃えてしまいそうだ。

「火トカゲの革」すらも、この炎には耐えられぬか」

どう闘おうと、宗萱に勝ち目は無い。

室内の温度は真夏の晴天すらも越える。おまけに酸素が炎に燃やされて、呼吸も苦しい。

どう闘おうと　それ以前に身体を動かすことすらも難しい。

「なるほど……、あなたがこれまでその力を隠していたのは、戦う場所を選んでいたから……。初めはミサイルの組み立て施設。大量の可燃物が存在する場所では危険すぎる。そして二度目は山の中でした。……窪井が近くに潜んでいる中で、大火事を起こしかねないその力はまた危険……」

「それゆえ、窪井殿が拙者の力を恐れたことであろう」

「恐れる……？」

恐れるべきは彼と対峙したシラタチのほうだ。

背を向けた瞬間に、焼き尽くされてしまうだろう。退くことも闘



うことも、死に通じる。

宗萱にできることは、自分を犠牲にすること。命と魔力のすべてを一撃に込めれば致命傷を負わせることくらいはできる。

「ここでわたしとあなたは消滅すべきでしょう」

「この世界に我らは存在すべきではないと……。それは少し違ってござろう。どのような世界においても、存在する者が存在してはならぬ理由などはない。……いや、存在する理由があるのでござろう」「わたしやシラタチが存在する理由は、この世界のバランスを守るためです」

「ならば独り散りゆくがよい」

紅丸が刀を　　炎を振り上げた。同時に宗萱も両手で刀を握り、集中した。

帽子が熱風で後ろへ飛ばされ、床を転がる。

常人では耐えがたい熱の中、吹き出る汗が目の横を滑り落ちて行く。

「……？」

全身の神経が熱を感知しなくなった。

紅丸の炎に呑みこまれたのだと、宗萱は思った。　　しかしそれは違った。

熱されていた空気が温度を下げたのだ。

宗萱の後ろで壁が崩れて破片が舞う。灼熱の空間に、外からの冷たい風が押し寄せた。

二人は戦闘態勢のまま、壁に開いた大きな穴を見る。

壁は爆発物で崩れたのではなかった。

床で逆を向いて揺れている宗萱の帽子を、男が手に取り、ほこりを叩いて払う。

「異常だな、この力は。来てみて正解のようだ」

現れた男を、宗萱は初め、幻覚かと思った。しかし彼に信頼を抱く自分が、その可能性を払いのける。

「……グラソン」

宗萱の前で口の方端を吊り上げる男は、間違いなくグラソンであった。

「どうして来たのです？」

「いけなかったか？」

「……いえ、来るとは思っていませんでした」

グラソンはひとつ鼻を鳴らし、歩み寄る。

「オレはお前達を仲間だと思いたくない」

「……」

宗萱は口を開いたが、言葉は喉で止まった。彼の言葉の意味が理解できずに。

「……“戦いのための仲間”など、オレはいらない。行く先に死しか存在しない、そんな仲間はいらない」

帽子を上げて、宗萱の頭に乗せる。

「親友だと思いたい」

グラソンの言葉は、宗萱の背中を力いっぱい押した。危険を承知で助太刀に来た仲間。二人が敵一人の戦いに散るわけにはいかないことをわかっていても。一番胸を突いたのは、そんな考えすらも曲げてしまふ、グラソンの「親友」という言葉。それが、彼の言う「親友」。

「オレはお前を死なせるつもりはない」

「……」

宗萱は何をどう言えばいいのかわからない。言えることは、彼も

同じ。

「わたしも、あなたを死なせません」

戦いに少しの勝機が見えたことよりも、グラソンの言葉のほうはずっと嬉しかった。どれほどの数の援軍よりもずっと心強かった。

体が軽くなったように、不思議と体中に力がこもった。

仲間を一人として死なせない。とは言っても、これは命をかけた戦いであることに変わりはない。誰かを守りながら戦う余裕などない今の状況でも、二人はその言葉に自信を持った。

「この戦い、生きて帰られれば」

## 82：戦いに尽きる（前書き）

お待たせしました。

何の予告もなしに更新を中断していたことを深くお詫びします…。復活しましたので、気合を入れて執筆いたします。週二回の更新を目指します。

## 82：戦いに尽きる

炎が動くたびに、激しい熱風が顔面を襲う。

宗萱とグラソンは武器を構えて魔力を込める。

グラソンの連結された長い金属棒は、氷をまとって先端を細い刃へと変えた。

「氷ごときで拙者の炎を防ぐとでも？」

「炎には勝てないが、この熱気を少しは抑えることができる」

「この炎を前に、まだそのような戯言を……。ならば楽も感じぬ間に焼き尽くしてくれる！」

両刀の一振りで膨れ上がった炎が二人へ押し寄せる。

「氷壁！」

グラソンの氷が二人の前でドーム状の壁となり、炎をさえぎった。しかし氷の壁は紅丸の強大な炎に耐えきれない。

魔力は大きく削られ、壁は数秒で蒸気と化す。

「桜舞灯 『這風』！」

真空の刃が薄くなった氷の壁を割って、炎を切り裂く。

紅丸は跳び上がって刃を避けると、壁を蹴り宗萱とグラソンの頭上へ。

「燃えつきよ！」

放たれた炎。二人は左右に散ってそれを回避し、グラソンは氷の槍を、宗萱は真空の刃を、紅丸が着地する前に彼へと撃つ。

「くっ！」

氷の槍は炎で焼き尽くされた。しかし真空の刃は炎では止められない。

紅丸は二本の刀ではじいた。

二人は次の攻撃へ。相手が攻撃を仕掛ける前に。

着地した紅丸は真空に削られた刀の炎を再び燃やし、壁をつくる。再度、グラソンの氷の槍が放たれた。

「氷なぞ効かぬ！」

氷の槍は紅丸にとどく以前に、彼を覆う炎にすべて溶けて消えてしまう。しかし、溶けない“物”もあつた。

溶けた氷に覆われていた短い金属棒が、炎を越えた。そしてそれをはじいた二本の刀は、紅丸本体の防御に大きなスキを生じさせた。ほとんど同時に放たれていた真空の刃が、隙間から紅丸を斬る。

「ぐうっ！」

身体をそらせて倒れる紅丸。

刀の炎が揺らいで、勢いを弱めた。

それでも、ダメージは小さい。宗萱の弱まった魔力では、大きな傷を負わせるほどの攻撃は出せない。

しかし少しばかりの効果として、紅丸を動揺させることはできた。手を付いて立ち上がる紅丸は胴体に軽傷を負っている。

氷の蒸気が白く目の前を覆う。二人は黒い影の紅丸へ、いつでも攻撃できるように構えている。彼の両手の刀は、弱い炎のまま。一度勢いをそがれたことで、無理な力の反動が身体を圧迫しているのだらう。

グラソンは床の金属棒を取り、両手に持った金属棒に氷の刃を。氷の長剣、二刀流で紅丸へ向かう。宗萱も刀で続く。

しかし紅丸のスキはほんの一瞬だけ。

「ぐおおっ！！」

吠える声。それとともに炎が再び強まった。蒸気を吹き飛ばす圧力に宗萱とグラソンも近づけず床を転がる。

腕や顔面が焼け焦げる熱に、歯を食いしばり耐え、目を閉じることなく紅丸を捉え続ける。

炎の帯がグラソンを包囲した。彼はすぐに氷の壁で身を守る。しかし熱気の中で空気中の水分を集めることは困難で、防御には氷がとても足りない。

「あがくでないぞ！」

炎がグラソンを縛った。氷の壁は無意味に。

「ぐ……」

身体が焼かれる。しかしグラソンは悲鳴を上げなかった。自分の身体にまとわせた魔力で、苦しいながらも炎にあらがっていた。

「グラソン！」

宗萱が真空の刃を紅丸へ放ち、炎は途切れた。

「……せめてもう少し水分があれば……」

「この場所ではとても勝ち目がありませんね……。しかし外へ出て戦えば、相手にとつても酸素が十分。更に勢いを強めてしまいです。それにしても……」

宗萱は炎の中の紅丸へ声を発す。

「無理すぎではありませんか？ これでは我々に勝ったとしても、あなたも生きてはいられませんよ」

「……構わぬっ！」

言葉と同時に炎が激しく震えた。

「……………」

「やはり場所が悪い。ここから出よう」

グラソンは熱気に負けないほどの魔力を一度に放出し、空気中にあるだけの水分を氷に変えて、小さく固まっていたいくつもの氷を紅丸へ放った。氷は炎によって一瞬で蒸気と化し、その蒸気を目くらましに二人は出口へ走った。

グラソンが開けた壁の穴から脱す。

「よし、ここなら」

そこは宗萱が渡った貯水池の近く。

後ろからは炎が迫りくる。二人は横へ転がって穴から吹き出た炎をかわした。

「とにかく、あの貯水池まで行けば申し分ない」

二人は貯水池まで走り、中央の橋の上で構える。

紅丸は炎の圧力で壁の大半を破壊し、姿を見せた。

「身が持たぬな……。我が身の滅びぬうちに……」

地面を蹴り、炎に吞まれて舞い上がる紅丸。

両の二本の刀が炎の翼のごとく。急降下して二人が立つ橋の半分を一撃で吹き飛ばした。

二人はそれぞれ反対へ貯水池にとび込む。グラソンの魔力が、水面に二人分の足場を形成し、不安定な氷の上に着地。紅丸はグラソンへ炎を振るが、厚い氷の壁がそれをさえぎった。反対側から迫る宗萱の真空の刃を紅丸は大きく跳んでかわし、地に足を着くと同時にまた蹴り上がり、攻撃を続ける。

グラソンは水面を凍らせながら滑り、宗萱のもとへ。

グラソンが立っていた足場は炎の塊によって大量の蒸気と化した。

「あの攻撃は……、威力で確実に仕留めるつもりだ」

「この滑る足場で、次をよげきれますか？」

「防御は得意だ」

放たれた炎を氷の壁が防ぐ。

しっかりとは言えない防御力。

「……しかしオレの魔力も限界が近いか……」

「そうですね……。相手はまだ戦えるみたいですよ」

炎が雨のように降り、水面で破裂して消える。紅丸は戦えるようだが、その攻撃は命中しない。次に放たれた攻撃も。

蒸気で標的を捉えられないのか、それとも意識が薄れ、力を制御できないのか。

「あいつの攻撃を防ぐのはやめよう。すべての魔力を次の攻撃に込める」

「たしかに、それしか勝ち目はなさそうですね……。わたしとあなたの力を合わせれば、威力は十分かもしれません」

紅丸の炎に命中すれば命はないが、この瞬間ほどのチャンスはない。一撃にすべての魔力を込め、彼を仕留めるチャンス。



蒸気の中で、二人は上空の紅丸の影を捉えた。

「宗萱、魔力はまだ残っているか？」

「心配しなくても、攻撃は可能です」

「よし」

グラソンは金属棒を振り上げた。魔力が注がれ、空気が冷やされていく。

「外せばオレ達は死ぬ」

「外しませんよ。仲間は誰も死なせません」

宗萱も刀に魔力を注いだ。

「いくぞ！」

金属棒と直刀が同時に振り下ろされた。

蒸気が、爆発したかのように、突然散っていく。晴れて目視できるようになった水面に標的の二人を見つけた紅丸は、振り上げた両刀をぐつと堪え、全力で意識を集中させて狙いを定める。

「……む？」

熱気と必死に繋ぎとめる意識で揺れる視界の中で、紅丸はその光景を見た。

押し寄せる二つの魔力を。

風の魔力と同調する氷の魔力。渦巻く風が、蒸気と空気中の水分を凍らせ、貯水池の水もそれに巻かれて凍り、紅丸へ押し寄せる。巨大な氷の柱、氷の渦が、大きな口を開けて紅丸を呑みこもうとする。

「くっ！」

振り上げていた両刀の炎を、紅丸は氷の渦へと放った。しかし真空を帯びた風によってそれはたやすくかき消された。

「（あやつら……！）」

宗萱とグラソンが最後の魔力をその技に込めたことは、紅丸にもわかった。その技を打ち消せば、彼の勝利は確実。しかし……、紅丸にそれだけの炎を今すぐに繰り出すことはできない。

「どの道、この命はすぐにも尽きる、か……。ならば……。！」  
刀を前で交差させ、紅丸は熱を高めた炎にすべてをかけた。

「拙者はたやすく散らぬ！」

氷の渦と、炎に呑まれた紅丸とが接触した直後、空中で大爆発が起きた。

氷と風は吹き飛んで散っていき、破片が宗萱とグラソンに降り注ぐ。二人は空中に紅丸を探した。

炎もすべて消え、ぼろぼろの紅丸が宙を舞っている。

彼に力は残っていないかった。それでも刀は握ったまま離さない。

「……………窪井殿……………」

紅丸は薄目を開けた。

拙者の正しいと思うこと……………？

『灰白の世界』が、紅丸の記憶に蘇った。

世界を救ってください。

女の声も……………。

窪井賢はとても強い者だった。最初に窪井賢と刀を向け合い、拙者は疑問を感じた。何のために刀を振るうのか、と。……………迷いが敗北を生んだ。そのとき、この男のために戦うというのもよいかもしれぬと思ったのだ。……………“正しいこと”を見極めるためにも。

「拙者は……、誰に忠を尽くした？」

紅丸は刀を持ち上げ、左右で両刀を振ると、落下していく下へ目をやった。宗萱とグラソンへ、彼の最期の敵へ。

魔力、炎もなしに。

「拙者の忠義は、つねに己の意思にあつた！！」

力の限り吠え、地上へ迫る。

宗萱はグラソンが両手で持ち上げた金属棒を踏み、跳び上がった。

空中で交差した紅丸と宗萱。振られたのは両者の刀。どちらも素早く、鋭いひと太刀だった。

宗萱は池の手すりの向こうへ着地した。その背後で、完全に力尽きた紅丸が、水の中へと落下した。

「……………」

黙って立ち上がった宗萱は、水面に顔を浸けて浮く紅丸を見て、彼に言った。

「立派な侍です」

それから手を伸ばして這い上がろうとしていたグラソンを引っ張り上げ、疲労の息をはく。

「勝ったな」

「……………生きてますね……………」

宗萱はそれを実感した。そして安堵した。

たった今決着のついた戦いで、二人の戦闘力はほとんど消費された。しかしまだ終わりではない。

「宗萱さん、グラソンさん」

案内人が静かに話しかけた。

「大林さんは、独りで窪井へ向かったそうです」

「…………やはりそうですか。彼らの決着は、彼らに任すしかないようですね…………」

宗萱とグラソンは、基地の上階のどこかで牙をむき出している大林の魔力を感じ取っていた。

休んで回復を待つような時間はない。二人はすぐに歩き出す。強者を退けたからといって立ち止まってはいけない。戦場にいる限りは。

人の影もない廊下。モフキスは壁にもたれてよろよろと足を動かしていた。

彼は体中に傷を負っていた。床に血を滴らせながら歩くモフキスの表情は驚愕にあふれている。

「何なんだあいつは……！ あれがシラタチのS A A P……！？信じられん、あんなバケモノが……」

モフキスは痛みで膝をついた。

「どうにか逃げてきたが……、くっ、この状態では満足に戦えはない。……このオレ様がなんてザマだ……！！」

息を吐きながら立ち上がると、再び歩き出す。

まずはこの傷を治療しなくては……。

と、そのとき、廊下の奥から空気を揺さぶる気配を感じて、モフキスはぼろぼろのマントの中で剣の柄を掴んだ。

「（この気配は……）」

廊下の奥に現れたのは、大林。剣を背に負い、険しい表情で駆けてくる。

そうか、この先には統領が……。

窪井との勝負を求めてここまで来たのだと、モフキスはすぐに気付いた。

「……ふん」

モフキスは剣を引き抜く。

戦うためではなく、この場から逃げるためだ。今の状態で大林と戦ったところで勝負を楽しむことはできない。

大林もモフキスを視界に捉えたようだ。しかし彼は剣を抜こうともせず、ただモフキスへ駆けてくる。

「ククク……、悪いな大林。今は貴様と闘っている余裕は」

「邪魔だ」

モフキスは指の一本も動かすことができなかった。

大林が彼の脇を抜け、後ろへと走り去っていく。大林は剣を抜かなかった。

いや、モフキスには剣を抜くのが見えなかったただけかもしれない。

剣を抜いたのか抜いていないのか、それはもうどうでもいい。

モフキスが手にしていた剣は黒い炭のようになり、崩れていく。それを目にした瞬間に彼は気付いた。

脇を走り抜けていったのは、重く激しい魔力だったということに……その魔力に自分は一瞬たりとも抗えなかったことに。

指の一本も動かせば、彼は手にした剣とともに崩れ去ってしまうだろう。黒い炭と化したその身体は……。

背後で崩れて消えたモフキスに、大林は何の感情もなかった。

あれほど憎かったアレモフ・キースという男を一瞬で葬り去った後も、振り向こうとはせずに歩調も変えずに走り続ける。

あれはキースではない。アレモフ・キースは前に自分の手で殺したではないか。

モフキスは大林の憎しみの対象ではない。何度でも殺してやりたい男の顔に違いはなかったが、今の大林にはただの“影”にすぎない。

いくら憎くても、古い昔の敵だ。死んだ敵が残した影も、今、完全に消えて無くなった。

あとは……、

廊下を駆け、階段を跳び、扉を破壊して大林は少し広い空間に出た。その先の鉄扉の向こうに、窪井の気配を見つけた大林は、背中の聖剣を抜き

聖剣の一振りです鉄の扉は鋭く発光し、大きな音とともに斜めに裂かれ、口を開いた。大林はそこから中へ飛び込むと、ようやく足を止めて剣を下ろす。

「よお大林、ずいぶんと乱暴な登場だな……」

窪井はいかにも落ち着いた様子で、黒いローブを身にまとい、部屋の壁際に腕を組んで立っていた。

二十メートル四方の広さに少し高い天井。一見逃げ場のないその部屋に、窪井はいた。それはすなわち、逃げることもせず大林の到着を待っていたということだ。部屋の片隅には、もともとこの部屋に設置してあったものらしい機械の残骸が山積みになっている。二人きりで闘うためのスペースを用意したかのように。

「やつと“けじめ”をつける気になったか、窪井」

大林は正面の窪井を紫色の瞳でじつと見つめる。

「けじめ？ バカを言うな、オレとお前の闘いなら、決着はついただろう？ “けじめのための闘い”だ」

窪井はそんな大林の瞳に少しも臆さず、見つめ返す。

「……あれはけじめのための“殺し合い”だったはずだ。オレは生きてるぜ、不思議なことにな。つまり、まだあの勝負はついていない」

「死の淵すれすれで命をとどめたお前がよく言う。オレには大いに疑問だ。……なぜお前は立ち上がることができた？ なぜ、何度もオレの前に現れる？」

「決まってるだろ。勝負をつけるためだ。どちらかが死ぬまで、オレは何度でもお前の前に現れてやる」

「……………」  
窪井は大林を観察するように、自分が壊したはずの彼の腕や足を眺めた。

「大いに疑問だ……。なぜお前は“立ち上がった”？」

「同じことを何度も」

「違う。なぜお前はそこまでして立ち上がる？ 人であることを捨ててまで……………」

「……………」

「お前も、オレと同じか」

二人の視線が沈黙の中で音を立てるように弾き合う。

「窪井……、お前との勝負は、まだオレのほうが勝率は上だ」

「昔の話だ」

「違うな。今も、だ」

ズドンッ！ と大林は聖剣を床に突き刺し、拳を鳴らした。彼の瞳からは魔力は消えている。

「来いよ。最後に人としての決着をつけよう」

窪井は少しあ然とした目を大林に向けていたが、そのあとには呆れたように、どことなく嬉しそうに口を歪めた。

「勝利条件を聞いておこつ」

「先に倒れたほうの負けだ」

「ふ……、懐かしいね……………」

二人は間合いを詰め、背を向け合った。



「そうだ。あの頃のルールだったよな。昔はたしか、互いに背を着けていたはずだが？」

「……友人として闘うことを前提にしたルールだ。今のオレ達は違う」

大林は無表情に正面を見つめて言った。

「そうだな……」

窪井も苦笑いの後は表情を殺す。それから互いに数を数え、

「サン」

の合図で同時に振り向いた。

## 84：闘技場、組み手勝負

自分へ向かってこん棒を振り下ろしてきた手下の一人を、マハエは素手で殴り飛ばした。

「いて……」

人を殴って傷んだ手をヒラヒラと振り、背後の気配へ蹴りを放つ。とっさにこん棒を前に防御した手下。しかしマハエの蹴りは防御のこん棒を簡単にへし折り、その衝撃を腹部に受けた手下はそのまゝ後ろへ跳んで倒れた。

「殴っても蹴り飛ばしても、いくらでも向かってくる……。きりが  
ないな……」

『壊波槍』を発動させず、少量の魔力で戦っていても、次々に襲いかかってくる大勢の手下達を前にマハエは疲れの色を顔に表す。

この『組み手』が始まって十分少し。中には気を失って倒れている手下もいる。しかしマハエはまだ膝をつかない。

軽症なら何度も魔力が治癒をした。それも魔力消費の大きな原因でもあるのだが、今のところ、かすり傷程度のダメージしか受けてはいない。

マハエの予想外の強さに臆している手下もいるが、周りの勢いに圧されて武器を振り下ろす。

マハエは凝縮波で高く跳び、攻撃を回避すると、闘技場の観客席に着地した。

「モンスターとは違う。殺す気で向かってくる大人数に、オレは致命傷を与えることを許されないなんてな……」

武器では加減が難しいから、できるだけ『壊波槍』の発動は控える。それでは勝てるわけがないとは、マハエもよくわかってい  
る。魔力がなければ十秒で勝負はついていただろう。

逃げ場はないかと探すマハエだが、入ってきた扉はもちろん、そのほかの出入り口も完全に閉ざされている。マハエが飛び乗った観客席は闘技場と五メートルの高さで仕切られていて、下にいる大勢の手下達はここへ登るのに苦労している。

「降りてこい、臆病者！」とのしる手下達の声が無表情で聞き流し、マハエは呼吸を整えた。

この勝負に勝ち目があるとすれば、それはマハエと彼らとの力の差。個人同士ではマハエのほうが圧倒的に強者である。大人数の一斉攻撃を受ければさすがに押し潰されるが、少人数ずつを相手にすればこの窮地をどうにかできるかもしれない。

それにマハエの『脅威』というものを彼らに身をもって理解させれば、戦意を喪失させられる可能性もある。

「……………」

マハエは目だけを動かして周囲を見た。

動ける手下達のおよそ半数が、観客席によじ登ってきたところだった。

「よし……………」

マハエは凝縮波で跳び上がり、空中で『壊波槍』を発動させると、闘技場に着地と同時に槍を横に振って、手下達に鋭いにらみの眼を向けた。

壊波槍の一振りは、空気を振動させて空間を微かに揺らした。

下に残っていた手下達はその力に少しだけ身ぶるいしたあと、武器を振り上げてマハエに立ち向かう。

今闘える人数は、先ほどの半数。観客席によじ登った手下達は今度は下りるのに手間取っている。

「（この数ならギリギリいける！）」

マハエは身を低くして、手下の足を蹴り、自分へと倒れ込んだ手下を片足で受け止める。そしてその後ろから二人折り重なった手下

もろとも、凝縮波の蹴りで吹っ飛ばした。　　すぐに態勢をなおし、立ち上がるにもう一人を蹴り倒す。

それから振り下ろされてきた短剣を槍ではじき、柄の部分を首筋に叩きこむ。

続けて一人、太ももに蹴りをくらわせて倒し、武器を蹴り飛ばす。

「（あと何人だ？）」

ざっと見まわしたマハエは、まだ立ち上がる手下の人数に驚いた。ほとんど減ってはいないのだ。

「くそっ！」

このままではまた同じこと。観客席からも下りてくるおかげで倒す数よりも増える数のほうが上回っている。

なぜ何度倒れても立ち上がり向かってくるのか、マハエには分からない。それは彼の予想に反していた。この大勢の手下達に戦意はあるのだろうか、マハエは疑問に感じた。本気で戦いたくてそうしているのか、それとも、本当はもう倒れて動くのをやめてしまいたいのではないか。

『ニユートリア・ベネツ』の手下達は、窪井を尊敬しながら恐れている部分もある。と、エンドーやハルトキが話していたことがあった。

この手下達は窪井の恐ろしい圧力に無理やり動かされているのだ。少し考えればそれに気付くのは簡単なことだった。

「くっ……」

マハエは横からの短剣を槍の柄で防ぎ、その腹に肘を撃ち込む。

違う。簡単なことではない。

彼らの心に窪井への恐怖心だけならば、逃げ出す手もあったはずなのだ。窪井を尊敬する気持ちは少しでもあるがゆえに、恐怖心を戦いの気力へと変えてしまう。

ゴトー達が逃げなかったのと同じなのだ。

どうすれば彼らを止めることができるのか、それを考えても仕方がない。

今のマハエは自分の命を守ることだけに集中しなければ。

観客席にはまだ下りられずにいる者もいるが、全員が再び戦闘態勢に入るまでマハエが生きていられるかはわからない。生きていられたとしても、全員を行動不能にするほどの力はもうない。

一人では到底勝てない。

そのとき、観客席で爆音が響き、悲鳴とともに手下達が落ちていく。

マハエは攻撃の手を止めた。彼の周りの手下達も驚いて手を止め、振り向いた。

拳の一発で倒れる手下。銀の短剣に武器を弾かれ、二人がかりも蹴散らされていく。

場は、しんと静まった。

現れた人物は観客席から飛び降りると、曲げた膝を立たせてズボンのほこりを叩いて払う。

それから独り言のように言う。

「道に迷った。どこだここ？」

マハエは、そして手下達も、そののんびりとした口調に言葉もなく、呆気にとられる。

友人との再会、何より頼もしい味方の登場にも関わらず、マハエは現れた“エンドー”の額に思いきりのチョップをかましてやりたくなった。

「マハエー！ 何か知らないけどグラソン達とはぐれて、狭い通路を歩きまわってたなら、こんなところにたどり着いてしまった」

「……なに、ここに迷子が集合する構造になってるわけ？」

戸惑っている手下達の間を、エンドーはマハエへ向かって歩く。

「でもよかった。また会えたな、マハエ」

「ああ、無事でよかった。オレもギリギリセーフでまだ死んでないよ」

安心したように口の端で短く笑ったあと、エンドーは後ろを向いた。マハエも背中を合わせるように向きを変える。

「団体さんだな。倒すしかないのか？」

「エンドーが入ってきた出入口は？」

「ああ、外からしか開かないらしい」

「……逃げるのは無理か……」

疲労で肩を落とすマハエの後ろで、エンドーは短剣から『発破鋼』を発動させた。

「全部倒せば、ゆっくりと脱出口を探せる」

マハエはさも簡単そうに言う彼に呆れながらも、力なくうなずくしかなかった。何と言っても彼はマハエよりも強い。戦力としては今のマハエにありがたい、大きな味方なのだから。

それでもエンドー一人ではこの集団に敵わないだろう。少し無理をしてもマハエも戦わなければいけない。それに消沈しかけていた気力も、友人の登場で力を吹き返した。

ここからが本当の勝負。

「エンドー、さすがに本気はダメだよ？」

「わかっている。さすがに人を相手に大爆発は起こさない」

エンドーは腕に魔力を込めて、魔力球を前方に飛ばした。

「向こうに死ぬ気がなければ、少々の攻撃で死ぬようなことはない」  
「……なんか、少し心配」

ドオンッ！

と魔力球が爆発し、二人の手下が爆風で床に転がった。

それを合図にマハエとエンドーは雄叫びとともに床を蹴り、走り出した。

手下達も少し遅れて、二人を叩きのめすべく押し寄せる。

マハエ一人の戦いよりも、勢いは増していた。当然、敵の勢いも、相手が一人なのと、さらに強者の加わった二人なのとは、敵の心構えも違ってくる。全員が本気で戦う構えで敵を潰そうとする。マハエとエンドーはその波を切り裂くように、手下達を倒していた。

エンドーの活躍も大きく、立ち上がるうとしない手下も大勢出てくる。それでも少し力が残っていれば立ち上がり、ぼろぼろの武器で立ち向かってくる手下もいる。

ふらつく足取りにマハエはあわれみを抱きつつ、魔力の『衝撃砲』で何人かを倒した。

「タフな連中だな」

マハエの背にエンドーの背が触れる。

倒したとは言っても、いくらでも向かってくる手下達に、状況は少しづつ不利になる。

だが勝てない勝負だと、二人は少しも思っただけだ。魔力は常に回復し、傷も癒える。冷静を頭に戦い続けられれば。

しかしこの数となると……。

「エンドー、こいつらを全員ねじ伏せるよりも、先に脱出口を探すべきじゃないか」

「何言ってるんだ。戦う気満々のやつらを前に背を向けると？」

「時間を無駄にできない。ここから脱出しても、この広い基地内の構造はまったくわからないんだ。みんながどこかで戦っている、その場所がどこなのか……」

「……ああ、魔力がざわめく。グラソン達が戦っているのか？ 何にしても、今は仲間と合流すべきだな」

エンドーもマハエの意見に賛成し、うなずいた。

「けど、扉は頑丈だ。そこからの脱出は難しいぞ」

手下の攻撃をエンドーは受け流し、その腕を掴んで振り飛ばした。「扉からしか脱出できないのなら、こじ開けるしかないだろ」

マハエは手下の首を槍の柄で押さえ、足を払って背から床に倒した。

振り下ろされたこん棒をエンドーは左手で受け、手の中で魔力の爆発を起こして握りつぶした。

「！」

それに驚いた手下は、エンドーの蹴りで尻を突き、後ろへ退いた。「おい！」

一人の手下が周りに声をかけると、手下達がいつせいに二人へ武器を振り上げて跳びかかった。

とつさに槍と金棒を上にも構え、武器から発生させた衝撃と爆発ではじき返すと、手下達は床に転がって、崩れた態勢で打ちつけた腕や頭をさすり、二人を見上げた。

マハエとエンドーも、防ぎきれなかった刃物で傷だらけ。痛みに顔を歪めて低く呼吸をするとともに、傷は癒えてふさがっていく。

「……………」

手下達は言葉なく、それでも恐怖を語っている。

二人はあまり彼らの顔を見ないようにした。自分でも己の身体から傷が一瞬で消えてしまう光景には、常に異様さを覚えていたから。きっとそれ以上に、慣れない連中にとってはおぞましい光景に違いない、と。

「お前ら、そのまま動くな」

エンドーが言った。

「オレ達と戦っても勝てないことくらい、わかってるはずだ」

金棒でドンツと床を突くと、黙ったままの手下達はビクリと身を



すくませた。

少しは戦意喪失したかと、マハエも動かずに突っ立った彼らを眺める。

そのとき、ギツと扉が開く音がして、聞き覚えのある声が静まった闘技場内に反響した。

「マハエ、エンドー、ここだったんだ」

ハルトキ、そして後ろからS A A Pが顔をのぞかす。

「戦ってるキミ達の魔力をたどって、ここにたどり着いたんだ。て、もう終わったの？」

「ああ、もう加勢はいらねえ。勝負はついた」

エンドーはそう言っただけで歩き出す。

「待てよ、まだオレ達は戦える！ 三人集まったのなら、オレ達にも都合がいいんだよ！」

尻を着いていた手下達もいっせいに立ち上がる。

やはり彼らはそう簡単に闘志を失くしはしない。

「……そうか、それなら」

エンドーはマハエに目をやり、それにうなづくマハエ。

二人はハルトキへ走り出す。

手下の壁が行く手を阻むが、二人の魔力を前にもろく崩れ、マハエとエンドーは組み手を突破した。

ハルトキとS A A Pが待つ扉へ、先にマハエが到着し、後からエンドーも。と、背後で一人の手下が短剣を振り上げ、斬りつける。

しかしハルトキがさかさず自分の短剣を突き出して、それをはいじた。

さらに魔力を飛ばして手下を縛り、エンドーが扉を抜けたのを確認すると、両手で扉を押して閉じた。

「……助かったぜヨツくん」

エンドーはハルトキの肩に手を置いて脱力気味に言った。

マハエは槍を短剣にもどしてから、ゆっくりと呼吸を整える。

「たしかに、ヨツくんが来てくれたおかげで脱出成功だ」

そして彼もまた脱力して壁に手を着いた。

「力を抜くのは早いよ。戦いは終わってないからね」

「わかってるよ、でも少しだけ休息を……」

「歩きながらゆっくり休めばいいよ」

「今まで戦ってたオレ達に、もうちょっとマシなこと言えね？」

「エンドー君、ボクもさつき窪井の手下達との一戦を終えてきたと

ころなのだよ。ねえ、S A A Pさん」

「はい、とてもお強うございました」

と、無表情で言うS A A P。

マハエとエンドーは「そうですかー」と声をそろえた。

「ボクの活躍をキミ達に見せてあげたかったよ。残念だなあー」

「うーん、とても残念ですなー」

と、また二人は声をそろえた。

ハルトキは、「もあいーもーん」と、膨れ面で先に歩き出した。

85：おなか減り……

三人とS A A Pはハルトキが来たという道をもどりはじめた。

マハエが闘技場に入った扉と向かい合っていた扉。もう一つの“挑戦者入場口”は“隠し通路”と異なつて、電灯が灯つたまともな廊下だ。

「おや、三人おそろいでしたか」

案内人の声に、三人は足を動かしたまま、口をつぐむ。

彼が一度も、何も言つてこないのは、何かと困りごとだった。

まずは仲間の安否が一番知りたいこと。

「宗萱さん、グラソンさんが、紅丸を倒しました」

三人はいつせいに息を吐き出す。

「無事？」

マハエはとつさに訊いた。

「当然です」

そのきつぱりとした言葉に、マハエはほつと微笑した。

ハルトキにはそれとは別に気にかけていることがある。しかし訊くよりも先に案内人が、

「大林さんのことはわかりません。前にも言つたように、わたしは大林さんの居場所を知ることができないので」

言葉が曇っている。案内人も三人も、大林のことが心配でならなかった。

力を手に入れた彼が窪井に負けるなど、考えられないことだ。大林の力はシラタチの誰よりも強大だから。しかし彼が力を欲したのは、窪井を倒すという目的のためで、それ以外の何でもない。強大な魔力で窪井を倒したあと、大林は自分達の、シラタチのもとに帰ってくるのだろうか。

三人は口を開かなかった。

しばらくして歩みを止めるまで、頭の中から余計な考え事を叩き出していた。

足を止めたハルトキが正面の登り階段を見て、

「この階段を登れば、いくつか道があるんだけど、さっきボクが戦ってた広場への道もある」

「また窪井の手下に遭遇するのも厄介だな……」

そう言うと、エンドーは自分の横の扉に顔を向けた。

「もうひとつある」

「……見取り図でもあれば楽なんだけど、広場が一階だとして、ここは地下だよ。その扉を進んで地上へ出られるとは限らない」

「でもさ……、悲鳴とか聞こえない？」

「……………」

マハエとハルトキは扉に耳を向けるが、首をかしげた。

「てか、悲鳴が聞こえても、ここは地下だ。絶対に行きたくない」  
マハエは思いきり首を横に振る。

「でもマハエ、もしかすると仲間が戦ってるのかも」

ハルトキも賛成し、マハエは仕方なしに小さくうなずいた。

「知らないぞ、大ノコギリを持ったやつとか出て」

「それが心配だったの……？」

「電灯が灯ってるから大丈夫だ」

エンドーが扉をゆっくりと開けて言った。

「戦いに支障がなきゃいいってわけじゃないだろ」

そんなマハエの言葉を無視して、エンドーは扉の先へ足を進め始める。

彼の後ろについた二人とS A A Pを、案内人は心配そうに見つめていた。

「んー、宗萱さんとグラソンさんは戦っていないみたいですけど……」

この先で誰かが戦っていても、もしくは敵がいたとしても、今は

三人がそろっている。三人がそろえば、どんな強敵も恐くなどはないのだ。そう思いなおし、案内人は見守ることにした。

三人とS A A Pが進む廊下の先から、人の声が響いてきた。

「何度言えばわかるんだ、まずはここから出る！ こんな場所で飢え死にするわけにはいかないだろ！」

三人は立ち止まり、腕を組んだ。

「……何か聞いたような声だ」

そこは適当な電球で灯されただけの、粗末な空間。冷たい石の床や壁や天井。どうやら地下牢らしい。

「そうか、さっきの闘技場とこの地下牢は繋がっている。ここで闘技用の猛獣でも飼育するつもりだったのか」

軽く手を叩いてつぶやくエンドー。それから牢が並ぶ奥の登り階段を見つけ、「あそこから登れるぞ」と、さっさと進もうとする。

「待てよエンドー、そんなことよりも今の声……」

マハエはエンドーの肩を掴んで止め、もう一度声に耳をかたむける。

「だから飢え死にしないように、飯を待とうって。ゴトー君もおなかすいたでしょー」

「オレも腹減ったよー、ゴトー」

「ほら、ツッキーは大ケガしてんだぞ。無理をさせちゃダメだよ」

「なら無傷のお前が飯どうで文句を言うな、リート」

「オレの心はずっと傷ついてんだ！ 風呂に入りたいよー！ 服着替えたいよー！ 手鏡取り上げられたせいで自分の美顔をチェックできないよー！！ 一日十回はチェックしたいよー！！！！」

「うるさい！！！！ てめえ、そうやって叫ぶから腹減るんだ！！ まずはその口を閉じて縫いつけちまえ！！！！」

「ゴトーにオレの気持ちはわからねえー！！！！」

「わかってたまるかよ」

「オレも腹減ったよー、ゴトー」

「……………」

三人は呆然と立ち尽くしたあと、顔を見合わせて声をひそめた。  
エンドーが呆れた顔で、

「あいつらこんなところに閉じ込められてたのか……………」

「けっきょく窪井に会ったのかどうなのか……………」

「何か可哀そうだね、どうしよう?」

「ていうか、お前が聞いた悲鳴って……………」

三人はいっせいにため息を吐き出したあと、もう一度ため息をついてゴトー達のもとへ。

エンドーがゴトー達三人に声をかける。

「おーい、相変わらず元気そうだな」

声を聞いたとたん、絶望的な表情をしていたゴトー達の顔が光り輝く。

「お！ その声は宅配屋！ 頼む、助けてくれ！ オレ達  
と、ゴトーは現れた三人の顔を見て、

「な!?! お前達はシラタチ!?!? ど、どういうことだ!?!?」

ゴトーは驚愕。ツッキーとリートは首をかしげた。

「まさか…………、まさかお前達……………」

「悪かったな、あの時は言えなくて。オレ達はシラタチだ」

改めてゴトー達に身分を明かすと、ゴトーは口を開いたまま固まった。しかしツッキーとリートは納得したという顔。

「シラタチって、宅配屋だったのか?」

その二人の頭をゴトーがスパンツとはたく。

「んなわけないだろ！ お前らの頭はどうなってるんだ!?!?」

「オレの頭は……、どうなってるんだ？ ツッキー、オレの髪、乱れてない？ ペチャツとしてない？」

「あー、ちよつとだけ乱れてる」

「何！？ おいシラタチ！ クシを持ってないか！？ それと手鏡！！」

暴れ出しそうなリートに、マハ工達は残念そうに肩を持ち上げる。リートは頭を抱えてのけぞった。声を失って。

「ところでお前らはなぜ閉じ込められている？」

エンドーがゴトーに訊く。

宅配屋がシラタチだったと知り、ゴトーは警戒して口ごもったが、少しして話し始めた。

「船であんたらと別れてから、オレ達は統領を探して基地の中に忍び込んだ。しかしこの広い基地の中、どこに統領がいるのかわ当もつかず、考えた末に導きだした方法が、自分達から名乗り出て、統領のところへ連れて行ってもらう、という」

三人は、うなずきながら話を聞く。

ゴトーは気が進まなさそうに、それでも静かに話した。

「……それでとりあえず統領には会えたんだ。……でも」

「ゴトー君の情熱は通用しなかったんだよね」

リートが眉をしかめて言った。いつの間にか復活している。

「もう統領は昔の統領じゃない……。オレの知ってる統領は、恐かったけど優しい人だった」

「何かオレ達で実験をどうのとか……」

ツッキーがうーんと考え込んで言った。

「けど！ お前達に助けってくれと願う気はない。統領の手下としてオレ達は死ぬ。敵に助けられるわけにはいかない」

「おいおい、ゴトー君、ここは助けてもらおう。お願いしよう」

「そうだが、オレはまだ生きたい」

「何言ってるんだ、シラタチだぞ、こいつらは！」

「じゃあ、宅配屋として助けてもらおう!」  
「だからこいつらは宅配屋じゃねえって!!!!」  
ゴトー達の言い争いを、マハ工達は呆れた顔で眺めていた。リー  
トヤツッキーのほうが正しい。しかしゴトーの気持ちもわからなく  
はない。彼の忠誠心がまだ窪井にあるのなら、敵に命を救われるほ  
どの屈辱はない。

ドグンッ!!!

衝撃音とともに、牢の鉄製のドアが破壊された。

「勝手に争つとけ。でも生きたいのなら出る」

凝縮波でドアを壊したマハ工が、中の三人に言った。

ゴトー達はしばらく驚きの表情を固めたまま、かるうじて繋がっ  
ているだけの、傾いたドアを見つめていた。

「……何者?」

ようやく状況を理解してから、三人がつぶやいた。

腕を組んで何かを考えていたエンドーが、三人に頬笑みを向けた。  
ハルトキもエンドーを見てから、うんと、うなずく。



## 86・田島とあの頃

マハ工達三人とS A A P、そしてゴトー達三人は、地下牢の階段から上階へ上がった。

「出たんなら、付き合え。どこで窪井と会ったのか、その場所へ案内してもらおう」

「まあ、助けてもらった借りは返すよ」  
エンドーにリートは素直に言う。

ゴトーだけは、気が乗らないという感じでマハ工達に付いてきている。やはり彼も命は惜しいのだ。しかしこれはシラタチに協力している形ゆえに、頭の中で葛藤しているらしい。

に対し、リートとツッキーはダンスでも踊りだしてしまいそうなのり。マハ工達はその二人に訊くことにした。

ゴトー達は、並んで歩くマハ工達の後ろ。その後からS A A Pが付いてくる。もっとも安全なポジションに立つ真ん中の三人は、とくに警戒もせずに、ただ道を教えるだけ。

「ところでシラタチって、みんな面白い技を使えるの？」  
ツッキーが軽い調子でマハ工に訊く。

「もしかして、オレ達のことよく知らなかったり？」

「……統領が言っただよような気がする」  
うなだれるマハ工。

一階は手薄のようだった。闘技場にあれだけの人数がいれば当然のことだろう。

「道は覚えてるのか？」

マハ工が訊くと、

「ばっちりです」

という二人同時の答え。

「でもかなり上階だよ、オレ達は昇降機で上ったんだけど、動くかはわからない」

と、リート。

「まあそこまで案内してもらえれば、後はオレ達だけで行く」

エンドーは両脇のマハエとハルトキの肩に手を置いた。

そこでハルトキの顔色に気付いて、首をひねる。

無言ですつと何かを考えている。

「……ちよつといいかな」

そしてリートとツツキーを、というよりも、ゴトーに声をかける。

「さっきの話、もう少し詳しく教えてくれる？」

「話？ オレは何も言っていないよ」

ゴトーは顔をそむけるが、

「地下牢での話さ。窪井のこと」

「……………」

表情も言葉もないゴトー。シラタチと話をするのは気が進まないらしいが、ハルトキが再度、昔の窪井のことを問うと、間をおいて話し始める。

「昔の統領は、たしかに優しくかった。この組織じゃまだ新米だったオレ達にも、あの人がどれほど凄い人なのかは理解できた。レッドキャップと呼ばれ恐れられていた、かつての凶悪組織を、ここまで“まとも”に育てなおしたんだ。そして飢えに苦しんでいたオレ達のような子供に食べ物と家族を与えてくれた」

マハエ達三人は眉をひそめていた。ゴトーが話す窪井像から、今の彼は想像できない。やはり大林やゴトーが言っていたとおり、窪井は変わってしまったのだ。

「デンテールと出会い、力を手に入れ、変わってしまった、か」

ハルトキは対峙する大林と窪井を思い描いた。大林が闘っているのは、かつての親友か、それともデンテールの残した脅威の一つか。「ニユートリア・ベネツへは……、オレ達にとってゆいいつの帰る家だった……………」

ゴトーはうつすらと涙を浮かべているようだった。

そんな彼の様子に、リートもツツキーも何も言わない。いつもの

おちゃらけた彼らとは違って真面目にゴトーを気遣っているようだ。

「ちょっといいか、シラタチ……」

突然リートが重く光る瞳をマハ工達に見せた。

「あなたたちは、統領を、ニュートリア・ベネツへをどうするつもりだ？」

「……………」

マハ工達は三人の視線に貫かれているようだった。ツッキーもリートも窪井に救われた一人として、三人にすぎる気持ちもあるのだろう。

「……窪井をどうするのか、それは大林さん次第だよ。それにニュートリア・ベネツへは、もう放っておけるものではない」

「だよな……………」

リートは肩を落とすでもなく、ハルトキのシラタチとしての言葉を素直に受け取った。ツッキーは口を開かないが、とくに反論を言うわけではなく、ゴトーだけは二人とは少し違って表情をより暗く落とした。

シラタチに助けを求めても、めちゃくちゃになったニュートリア・ベネツへはもうもどってこない。そう頭では理解していた。

ハルトキは胸を握りしめた。彼らの闘いが止められないのなら、大林には勝ってほしい。しかしそれでも、大林には止まってほしいと願って。

シラタチの本部は静まりかえっていた。

ほとんどのS A A Pは寺院を護るために出払い、ニュートリア・

ベネツへの基地へも付いて行っている。おかげで本部に残ったSAPはほんの数名で、全員が本部の警備に付いている。

一階の“仮”医務室で、クリング・レックは動けない身体をずっとベッドに預けていた。

彼は目を覚ましてから、ろくに眠っていない。

窪井と闘い、負けて、気を失う最後に覚えていたのは、窪井を追っていく大林の背中だった。二日前の朝に目を覚ますと、治療されてベッドの上にあった。ここがシラタチの本部だと知ったのは、そのときこの医務室に顔出した、グラソン、宗萱と名乗る二人の説明から。その中で、大林がシラタチと協力関係にあること、大林が重体でもどつてきたということを知った。

「……………無茶なやつだ……………」

レックは天井を眺めたまま、ボソリと口を動かす。

そして無茶をしたのは自分も同じかと、レックは包帯に巻かれて固定されている左腕を見た。それでも大人しく窪井に従えばよかったとは思っていない。客に武器を売るのが武器商であり、窪井の場合それは違う。商人としての誇りだけは守らねばならなかった。あまりにも人離れした窪井の姿がよみがえって、レックは顔を歪める。たしかに殺す気で闘うべきだった。彼が見慣れないただの賊ならば、そうしただろう。しかしどうしても、窪井に対してそれができなかつた。恐ろしかったわけではない。ただ、窪井を殺したくなかつたからだ。

腑に落ちない。

レックには、どうしても理解できなかつた。

そのとき、医務室のドアが開いた。

昨夜からSAPの出入りが極端に減っていた医務室だったので、突然音を立てたドアに、反射的に傷の痛みも忘れて振り向いた。

「いて……」

痛みに顔をしかめたレックが目にしたのは、ドアから入ってくる『田島弘之』の幹部、青島と赤瀬だった。

「よう、意外と元気じゃねえか」

赤瀬がニツと下手に笑い、サングラスを外す。

「お久しぶりつす、レックさん」

その横で青島が自然な笑みを見せる。

「あんた達か。メシの時間かと思って期待したじゃないか」

案内係らしいS A A Pは一礼して静かにドアを閉じた。

医務室にはレック、青島、赤瀬の三人。青島と赤瀬は近くの椅子を移動させてきて腰を下ろした。

「あんたが大ケガを負ったと聞いて、寺院から危険な道を通って来たんだ。わざわざ、な」

「危険な道？」

「ん？ 知らねえのか、またフレンチにモンスターが出やがった。

……いつものあんたなら、絶対に逃さねえ情報だろうが……」

「……残念だ。悪いタイミングでこんなケガを……。と言っても、

オレの商売道具は全部奪われちまったけどな」

レックはため息を吐く。しかし悔しそうな様子はない。

「知ってる。窪井だろ？」

「まあ、オレはあいつに負けた。ただオレに力が足らなかつただけだ」

「……………」

赤瀬はレックから顔をそむけて天井を見た。

そのまま黙ってしまった二人の顔を、青島は目の端で交互に見る。レックは『田島弘之』が昔から世話になつてる武器商人であり、

その関係は商売人と客という以上に親密である。田島慎治も、レックとは友人関係だった。『田島弘之』という不良集団ができたのは

七年前。田島、大林、窪井、赤瀬の四人がづくりあげた集団だ。

同じ時期に単身で旅を始めたレックが、武器商を始めたばかりの

ころに彼らは出会った。と、青島は聞いていた。

「慎治が死んでから、『田島弘之』は変わっちゃったなあ……」  
レックは言った。

「田島さんがなぜ『田島弘之』という集団を築いたのか、大林は忘れてるのかもな……。まあ、その頃のあいつは幼くて、ただ田島さんの背中を追いかけているだけのガキだったからな……」

「……昔話っすねえ。オレにはわからねえ」  
肩を持ち上げて首を振る青島。

「たしかに田島さんは、オレ達を救ってくれた。あの頃の『田島弘之』はもつと笑い声にあふれていたが、ボスが組織を継いだことには何の不満もねえ」

大林が悲しみを乗り越えて残された『田島弘之』のためにがんばってきたことは、青島も赤瀬もレックも知っている。だが赤瀬やレックから見れば、大林は無茶をしすぎている。

「レッドキャップが潰れたという話を聞いたとき、オレは驚いたよ」  
赤瀬もレックの言葉にうなづく。

「大林が一人である連中を片づけるとはな……。たしかにあいつの能力はオレ達の中でもずば抜けていた。年上のオレすらもかなわねえほどにな」

しかし赤瀬に、少しも大林をほめるという様子はない。

「あいつは田島さんや窪井がいれば、いつでも笑顔を絶やさない、ガキらしいガキだった。その二人が突然、一瞬にして自分の前から消えたんだ。まさに、壊れちゃまってたんだな。でなきや、一人であの凶悪組織を潰そうなんて考えるわけがねえ。何より、人を傷つける鬨いなんて教わっちゃいなかったんだからな」

苦笑いをまじらせて、赤瀬は息を吐いた。

「……すまねえな。見舞いに来たつてのに、しんみりさせちまった」

赤瀬は頭をかいてレックを見た。

「オレも寝てばかりでヒマだったから、ありがてえよ。……それよ  
りな、もう少し話をいいか？」

レックは先ほど考えていた、理解できない疑問を赤瀬に問う。  
「窪井の身に、いったい何が起こった？」

「……あいつの、異常な肉体のことつすか？」

「いや、それも理解できないが、一番は中身だ」

レックは自分の腕に巻かれた包帯に目を向けた。二人も彼のケガ  
に目をやる。

「……たしかに、あいつも大林のように、田島さんにくつついて笑  
っていた。同じガキだ、とばかり思っていた……」

「けど、慎治を殺したのは窪井だ。レッドキャップで何があったの  
かは知らねえが、あいつは自分の大事な人を切り捨てた。それがわ  
からねえ」

「なぜ殺したのかが？」

赤瀬は笑い飛ばすように言う。

「レッドキャップを潰した大林が、その後どうなったのか、それを  
今まで誰にも話してはいない。大林にもな」

レックが言うと、赤瀬は、

「どうつて、あんたがあいつを保護して治療したんだろ？ 一ヶ月  
後にオレが迎えに行った」

「そうだ、だがあいつは自分の足で歩ける状態ではなかった。それ  
どころか、何日も目を覚まさなかった」

「どういうことだ、じゃあ誰があいつをあんたの所へ？」

口を閉じて、レックは鋭い眼で赤瀬と青島を見た。二人の目を見  
つめながら、はっきりと重い口調で言う。

「窪井だよ」

「……………」

二人は口を半開きにして、その意味を理解しようとした。しかし

彼らの頭は、なかなかそれを認めようとはしない。

「あいつはオレに泣いて頼んだ。『頼むから大林を助けてくれ、死なせないでくれ』と」

「……………」

顔を見合わせる二人。

「窪井が……、ボスを助けたって、言ってるんすか？」

「あいつはオレにいきさつを話してくれた。窪井は何人かの仲間と、買い出しのために本部を離れていたらしい。そしてもどつたやつらが目にしたのは、血の海に染まった光景だった。大林が殺したキースの手下達が横たわり、扉が突破されていた。窪井はとつさに剣を取り、キースのもとへ走つたらしい。するとそこでは、ぼろぼろの大林が立っていて、キースが剣を振り上げていた。大林はもうほとんど意識のない状態で倒れるところ、すぐにでも殺されただろうな」

青島も赤瀬も、微かにも口を動かすことなく、話を耳に入れていた。

「窪井は手に持った武器で、キースを斬り殺した」

レックは深呼吸をして、

「キースを殺したのは窪井だ。だが、なぜ慎治を殺したあいつが、大林を助けた？ オレのところには大林を担いできた窪井は、とても必死だった。泣きながら頭を下げてまで、オレに大林を任せただ」

「……………」

二人は何も言えなかった。

「オレがこのことを誰にも話さなかったのは、あいつ自身の希望だったからだ。オレには複雑な事情はわからねえ。だが、あのときの窪井は、大切な人を殺せるようなやつには見えなかった。オレやあ



んたらがよく知る、優しい、仲間思いの窪井賢だった」  
「……ケン……」

赤瀬はつぶやいた。昔、彼が窪井をそう呼んでいたように。

思い出していた。昔の窪井賢を。

彼は優しく、とても仲間思いだったのだ。

## 87：バケモノの強化

大林の渾身の拳が、窪井へ放たれた。

窪井は身をそらせて拳を回避。ぎりぎりをかすめたその攻撃の重さに、窪井は一瞬たじろいだ。

今までの中途半端な攻撃とは違う。ケンカなどとは比べ物にならないパワー。

窪井は拳から大林へ目をもどし、すかさず反撃に移る。大林の側面から、頭部へ手刀を打つ。だが大林はそれを腕で止めた。

「それでも本気が、窪井、オレを殺すには、到底力不足だ」

「……そう思うか？」

大林は右ストレートを窪井にかわされた直後、左腕で攻撃を防いでいる。

窪井の強烈なひざ蹴りを避けられる態勢ではない。

膝を脇腹にくらった大林は、床で一度転がり、足を踏み込んでとどまった。その状態から蹴り出し、窪井へ跳ぶ。それから大きな振りで回し蹴りを繰り返した。

窪井は後退してかわし、スキのできた大林へかかとを振り上げる。スピードは人としての限界点だろう。しかし落とされたかかを大林は両腕で受け止め、その足を掴んで背中から床に転がり、自らの片足を窪井の腹に上げて、それを軸にして投げ飛ばす。

窪井は床を転がって即座に態勢をなおすが、彼の目の前に大林はいない。

投げ飛ばした勢いを利用し、窪井が起き上がる前に大林は立ち上がり、すでに窪井の頭上へ舞い上がっていた。

落下の勢いで窪井に両足の蹴りを食らわし、着地。しかし休む間もなく、転倒した窪井へかかとを落とす。その攻撃を窪井は倒れた

ままの蹴りではじき、間髪入れず起き上がると身体の回転を加えた拳を大林の側頭部に叩きこんだ。

大林は力なく床を滑って、機械の残骸に背中を打ちつけた。

「……………」

ぼやける視界の中、大林は追撃に移るはずの窪井を探した。しかし窪井は変わらぬ場所に立ったまま、動かない。

「………… 『威嚇』、 『威力』、 『意表性』、 だつたな」

くちびるの血を手で拭いとって、窪井は言う。

「田島流。窪井、お前との闘いでは、できるだけ意識しないよう心がけていたが」

大林も頭の血を拭った。

「本来は“ケンカ”のための闘いだからな」

視界も回復し、大林はまっすぐ窪井を見る。

「しかしオレは、『田島』としてお前と闘うことに決めた。それが、“人”としての大林鷹光だから」

「……………ならばオレも、窪井賢という『田島』を抜けた“人”として、この決着がつくまで闘い抜こう」

窪井は拳を構え、大林は足元に力を込めた。

先に大林が間合いを詰める。

窪井はその場を動かさず、接近した大林へストリートを放つ。大林は首を動かして拳を回避し、勢いを弱めずに窪井の首元を掴み、腕の力で押し倒す。窪井は大林の力に乗り、その場で宙返り。首を掴む手を振りほどき、姿勢を落として足払いを掛けた。だが大林は前方へ跳んで両腕を軸に床を一回転し、床で向きを変えるとふたたび窪井との間合いを縮める。姿勢を落としたままの窪井へとび蹴りをかます。窪井は顔の前で両手を構え、その足を受け止めると、自分の肩へそらす。攻撃を外した大林の腹へ拳の一撃を入れた。歯を食いしばってひるんだ身体を蹴り上げた足でふっ飛ばし、立ち上がる。

床に倒れる大林を見て、窪井はひとつ息を吐いた。

だが自分に放たれている鋭い眼光に気付き、窪井は目を下に向ける。

大林は少しも止まっていなかった。すでに窪井の真下からまっすぐに足を蹴り上げている。

「くっ……」

身体を反らすように伸ばして攻撃をかする程度に避けたが、反撃の態勢に入ったところにはすでに大林は窪井の目の前に立っていた。放たれた拳を腕ではじいて、窪井も肘を放つ。

大林は片手で止め、窪井の身体をねじって彼の首に腕を回す。

「前よりもずっと強いな……」

窪井は後ろの大林に言う。

腕に力を込めて首を固定し、大林は耳元に喋りかける。

「一つ訊いておくことがある」

「何だ？」

窪井は大林を背負い投げ、彼と間合いをとる。

投げられた大林はゆっくりと立ち上がって、言った。

「……なぜオレを殺さなかった？」

「……………」

一瞬目を閉じただけで何も答えず、窪井は攻撃を再開した。

回し蹴りを大林はかがんでかわし、頭部への蹴りを放つが、窪井は首を傾けてかわした。窪井は姿勢を落として腹へ肘を食らわせにかかるが、これも大林は後ろへ下がって回避した。

そんな闘いを続けるうちに二人の疲労は溜り、身体を動かし続けられ、それは積み重なっていく。

それでも攻撃を止めるわけにはいかない。片方が膝を着くまでは。攻撃のキレ、速度、威力、それらを少しでも弱めるわけにはいかない。

大林は身体を反らせて拳の横振りを避け、大きく一回転させた大ぶりの拳を窪井の腹へめりこませた。

「……………！！」

窪井は声もなく口を開き、前に崩れかけるが、それでも歯を食いしばって踏みとどまる。

機械の残骸が固まっている部屋の端。大林は連続で窪井の胴に蹴りを放ち、最後の強烈な蹴りを打ち込んで止まった。

抵抗なく、窪井は残骸の中へと倒れる。

大林はふり返って足を進め、床に刺さった聖剣を掴んで、引き抜くと同時に飛び上り、その刃に魔力を込めた。

残骸の中に横たわる窪井に、魔力の刃を振り落とす。

ドズンッ！！！！

という轟音が部屋中に響き渡る。

魔力が爆発したように、残骸はさらに形を失ってとび散り、壁や天井で跳ね返って落下する。

立ち込める煙の中、大林の瞳は紫色に染まっていた。

何もかもを塵へと変える魔力の一撃。たとえ変身した窪井であっても、これに耐えられるわけではない。

一撃で吹き飛んだ。

「勝負は終わりだ、窪井。オレの勝ちで……、終わりだ……」

大林は胸の痛みを手で握った。そのまま、剣を動かすこともできずに、固まった。

煙が消えていく。

そこに窪井の姿はかけらも残っていないはずはない。

「そうだな。“人”としての勝負は終わりだ。ここからはバケモノ同士の闘いというこつ」

窪井の声が、煙の中で、振り落とされた剣の下で聞こえた。

「これは……」

信じられない。大林は一撃に魔力を凝縮させていたはずだった。

その威力を受けて窪井が生きているはずはない。しかし今、その剣を右の片腕一本で止めているのは窪井だ。ほとんど無傷で、ダメージの一つも受けてはいない。

片腕だけが異常に赤く、太い。たしかに重たい剣の一撃ならば彼の筋肉は受け止めるだろう。しかし魔力を込めた聖剣の一撃を受け止められるはずがない。

自分の目を疑った。

大林がこの状態の窪井の力に勝てるはずはない。彼と対等にそれ以上の力が必要だったから、魔力を手にした。魔力さえあれば、力を十分に補うことができる。

もう一度、大林は剣に魔力を込めた。

しかし窪井の怪力を腕の力だけでは抑えきれない。刃に魔力が満ちる前に、窪井は上半身を起こしていた。

「……………」

大林は彼の腕に装着されているものに気付いた。黒い金属、右腕の肘から下を覆うように、指先まで黒一色の鎧。

剣を前へ押しながら、窪井は左腕を残骸に突っ込み、両腕に鎧を装着し終えた。

大林が魔力を放とうとしたとき、脇腹に重い打撃を感じる。鎧の重さもプラスされた強烈な腕の一振りに、綿人形のようにたやすく吹っ飛ばされ、天井近くの壁で跳ね返って落下した。

「……………」

体中の内臓が潰れたのではと思う衝撃。大林は倒れたまま動けなかった。

ガシャン、と窪井が残骸の中で立ち上がる。彼の全身には、真っ黒な鎧が装着されていた。頭だけは外に出しているが、それ以外の防御は完ぺきらしい。なにしろ大林の一撃を完全に防いだ金属の鎧だ。普通の金属などよりも比べ物にならないほどの強度だろう。

それを機械の残骸の中に備えていたのだ。

「何だそれは……………」

窪井……………」  
床に肘をついて、離さなかった聖剣を床に突き刺し、それを杖に立ち上がる。

口から流れ出た血を手で拭きとりながら、大林は窪井ににらむような目を向ける。

「『Rey・MAX』……………。デントール様が開発を進めていた超強化金属の鎧だ。いかなる攻撃でもこいつは破壊できない。ただ、重量もとてつもなく、オレにしか扱えない代物だがな」

窪井は鼻を鳴らし、自分の身体に目を向ける。

「オレのこの身体も、こいつを扱うために改良されたものだ。デーン  
テール様の薬によってな」

金属の装着された手を力強く握る。

「これがオレの切り札だ。さあ、お前のその力が、このオレを越え  
られるか？」

「……ほざけ。すぐに叩き割ってやるよ、そんな鎧」

大林は突き刺さった聖剣を握り、魔力を込める。そしてそのまま  
大きく振り上げると、魔力が蛇のようにくねりながら床を割り、窪  
井へ突き進む。同時に大林は自らも走った。

ふたたび聖剣に魔力を込め、高く跳び上がる。

窪井は床を割って迫る魔力を、両手を交差させて受け止め、力ず  
くで払いのけた。それから頭上の大林を追う。

ガシインツ……！！！！

聖剣と鎧の両腕が触れた瞬間、凄まじい衝撃波が広がった。

「……どうということだ？」

ギリツと力で押ししながら、大林は、二度も魔力の刃を止めた鎧を  
見つめる。それから一度離れると、すかさず魔力をまとわせて、鎧  
の胸に一撃を打ち込んだ。

窪井は足を踏み込んで圧力に耐えているが、やはり鎧にダメージ  
はない。

「ふんっ！！」

窪井の拳が迫り、とっさに構えた剣の側面にぶち当たり、その重  
みで大林はまたしても吹っ飛ばされた。



「この鎧は、デントール様の開発途中の試作品だった。あの人は完成させる前に死にしまったが、それをオレが受け継いだのさ」

「……………」

大林は床で足を曲げたまま、静止していた。

「この金属、『Rey-MAX』には、『陰の石』が組み込まれている。……………よくはわからないが、どうやらその効果もあるらしいな」

「……………」

『陰の石』は魔力を吸収する。つまり、魔力の攻撃は効果が薄れるということだ。

「……………そういえばお前はオレにこう訊いたな。なぜオレを殺さなかったのか、と」

窪井は部屋の奥へ歩いて行き、壁の隠しスイッチを拳で叩いた。機械音が響き、窪井が立つ床の一部が上昇する。真上の天井には、その床と同じ大きさの穴が開いていた。

大林は立ち上がることができない。一度に魔力を消費しすぎて、回復するまでは剣を振り上げる力も出ない。

「オレがお前を殺さなかったのは、お前をオレの手下にするために」  
窪井はロープの中から小さな球状のカプセルを取り出し、放るよ  
うに落とした。

天井の上へ消えていく窪井は、表情のない顔を大林に向けていた。大林は彼をにらみ続けるしかなかった。  
また窪井に逃げられてしまう。と大林は悔しくてしょうがない。

カプセルが床で跳ね上がる。

一度、二度、それから大林の右手側で転がりながら煙を噴きだした。

それが何なのかは、大林にもわかった。

ウィルス。デンテールが残した、感染した者を洗脳し、統率者のしもべへと変貌させるウィルス。

このまま感染してしまえば、自分は仲間達をこの力で滅ぼしてしまうに違いない。かと言って、大林はその場を離れることができない。仲間とだけは戦いたくない。

倒すべきは一人だけ……。

「窪井……!!」

しかし大林にはどうしても自分に理解できない部分があった。

胸の痛みが、まだ消えていないことに気付いた。窪井にとどめの一撃を食らわせたときに感じた胸の痛みだ。

それがどうしてもわからなかった。昔の思い出がよみがえったせいかもれない。田島さんと窪井との楽しかった思い出は忘れることなどはできない。

過去も記憶も、自分自身も、覚悟はあってもその瞬間には切り裂けるものではないと。自分が生きてきたあかしだから。自分が生きているのは、田島や窪井がいてくれたおかげだから。

それでも窪井を野放しにしておくことはできないことも分かっている。

田島を殺したのも、仲間を殺そうとしているのも、窪井なのだから。

『そんなものか?』

少年の音が頭に響いた。

『力が足りないのなら、わけてやるぞ。もっと心を染めるのだ』

「……………」

『思い出せ、お前の敵を。仲間を殺そうとしている者を』

## 88：魔力の目で

マハ工達三人とS A A P、そしてゴトー達三人は、上階へと登る昇降機の前で立ち止まっていた。

「この上に、オレ達が統領と会った部屋がある」

リートが言った。

「これで恩は返せたってことで、オレ達は退散するんで」

ツッキーが言う。

ゴトーはまだ黙ったまま、マハ工達三人をじっと見つめていた。

「オレ達を進ませるのに、まだ抵抗があるか」

エンドーがゴトーに言う。

「……いや、もういい。もう何も言わない、ていうか、オレごときが干渉できないことは理解してるから……」

それを聞いてエンドーは、ほほ笑んでうなずいた。

干渉すべきではない。これ以上、デンテールが残した脅威に近づけさせてはいけない。そう思うのはエンドーだけではなく、マハ工やハルトキも同じ。

「そんじゃ、オレ達はさっさと逃げるとするよ。基地の中うるついても、ろくなことないし」

リートは言つて、三人とS A A Pに背を向けた。

ツッキーと二人でゴトーの背中を押しながら、何の言葉もなく来た道をもどっていくのだった。マハ工達も、彼らに何も言葉も発さなかった。シラタチと彼らは、まだ敵同士であり、リートもツッキーも、少なからず心を痛めているはずだと思っただけだからだ。それでも彼らが素直に案内役を受け入れたのは、シラタチの意思を感じ取ったからなのだろう。

シラタチの目的は窪井の悪事を止めること。彼らも、思いはシラ

タチと同じだったのかもしれない。マハ工達はそう解釈していた。

「行くか」

マハ工が言うと、二人もうなずく。

昇降機は電源が落とされていたが、近くに登りの階段を見つけ、三人は気合を入れる。

どれだけ登ればよいのかはわからない。それに宗萱やグラソンと合流したいという気持ちもあるが、進むべき道が目の前にあるのなら、迷っているヒマはない。

一段目に足を置き、もう一度気合を込めてから暗い階段を進んでいった。

もう基地の全体を見渡せるほどの高さまで登ったのではないかと、

三人は一度足を止め、一つ息を吐いた。

S A A Pは周囲を警戒し、三人は進むべき道を考える。

ここま階段を登って行っても、けっきょくは窪井の居場所を知らないゆえにどうすることもできない。しかし立ち止まってもいられないのだ。窪井が何かしらの動きを見せる前に、彼を見つげ出さなくてはいけない。

いくつかある廊下を一本一本、部屋の一つ一つを探し回れば、何かしらの手掛かりは見つけられるかもしれない。それから人の気配を探すこと。静寂につつまれているこの場所のなら、それは簡単だ。

誰か人が居ればの話だが。

そのとき、廊下の奥で足音が聞こえた。

三人とS A A Pは武器を構えて振り向く。

現れたのは足取りの優れない二人組。体力を消耗し、険しい表情

のまま警戒しながら歩いてくる宗萱とグラソン。

三人はその姿を確認してほっと気を吐き、すぐに笑みを浮かべて二人へ走り寄った。

宗萱とグラソンは立ち止まって、表情を緩めて三人の顔を眺めた。

「よくここまで来たな」

グラソンが三人のぼろぼろの服を見て、微笑した。

そう言う彼らも人のことは言えない格好だが、この戦場に屈することなく戦い、生き抜いた仲間の顔、変わらず明るい顔を再度確認することができ、誰もが疲れを忘れてそれを喜んでいた。

しかし……。

大林の姿は、まだ確認できていない。

だが少し前、どこかで魔力が放たれたことに彼らは気付いて、大林が闘っていることを悟った。

相手が窪井であることは、確認するまでもない。

それを感じたからこそ、彼らはその場を動かなかった。

大林に加勢は無用だ。

あとは窪井の生死。彼を生かすも殺すも大林しだいなのだが、やはり今すぐ駆け付けて大林を止めたいと、それが今のマハ工達の本心だ。

複雑な気持ちだった。「だから止めに行こう」と誰も口に出さな  
いのは、それが無理だとわかってしているから。親友で、兄弟で、同時  
に大切な人を殺した憎き敵……。大林の心はマハ工達よりも複雑で、  
考えられないほど辛いはずだ。

だから苦しみ抜いた大林の決意に何者も異を唱えることなどでき  
はしない。

「……………」

気持ちを堪えることしか、三人にはできない。

ゴトー達の話の聞かなければ、窪井の身を案じるなんてことはなかっただろう。

数分、誰も動かず、誰も声を発さなかった。

先ほどから大林の魔力が認識し難いほど弱まっていることに、グラソンや宗萱は気付いていたが、続いてそれに気付いたマハ工達は、不安を表情に見せた。

それはつまり、二人の闘いに早くも決着がついたということなのだろうか……。

強大な力を得た大林が窪井に負けるとは誰も思っていない。しかし魔力が弱まっているということは、大林自身も危うい状態である可能性がある。

「大林さん……」

今彼らがいる場所よりも少し階下での闘いだっただった。

予想に反した状況に、全員が戸惑っていたが、ハルトキが先に駆けだしたのを見て、マハ工とエンドー、グラソン達も続いた。どこをどう進めばその場所にたどり着けるかはわからないが、とりあえず走った。階段を降りようと向かったとき、何かの電源が入るような音で全員が足を止めた。

そばにある動かないはずの昇降機。その電球が点灯している。そしてこの上階へ上がってくる。

全員が固唾をのんだ。

姿を見せたのは黒い鎧姿の窪井だった。昇降機の乗降口、その仕切りの向こう側に。

窪井はシラタチに気付くと、昇降機を止め、ふっと笑う。

「窪井！ 大林さんをどうした！？」

ハルトキは短剣を『縛連鎖』に変え、窪井へ構える。  
しかし仕掛けようとするとハルトキの肩をマハエが掴んだ。

「待てヨツくん。……あの鎧……」

マハエの言葉で、それが“あの金属”だということに気づく。デ  
ンテールが開発した最強の金属。マハエは以前に闘った『Rey  
Proto』と呼ばれた敵を思い出した。宗萱もそれを思い出して  
いる。グラソンもよく知っているデンテールの研究の一つ。

「……くっ」

グラソンは歯を噛みしめた。

大林が本当に窪井に負けたのか。それを確かめるよりも先に、シ  
ラタチは窪井を退けなければならない。

「大林さんは……！？」

ハルトキは窪井への攻撃の姿勢を崩さない。

「大林が気がかりか？ ……すぐにわかるさ」

その言葉のすぐ直後、階下で何かが爆発したような破壊音と、  
空気を伝って衝撃が轟いた。

「なんだ！？」

マハエ達は眉をひそめた。

同時に今までに感じたことのない強大な魔力の圧迫をその身に受



けた。

「……………」

窪井は自分に装着されている鎧の腕を持ち上げた。

鎧が微かに振動している。普通の振動ではなく、組み込まれている『陰の石』がそれに反応しているようだ。

「……………ちっ!」

窪井は顔をしかめてから、昇降機を再び上階へ上昇させた。

そして……、

マハ工達は“それ”を捉えた。

上昇していく昇降機を追う、

紫の魔物。

縦に伸びた穴を這って上がって来た。

一瞬、シラタチを一瞥したその眼は、濃い紫色に染まっ  
ていて、よく見ると紫色の魔力をまとい、魔力自体がその体の一部  
のように動いている。その姿は、魔物と言う他に言いようがない。

「……………」

誰もその力を前に口など動かせるはずもない。

何よりも、おぞましい魔力をまとっているのが、大林の身体であ  
ったから。

新型の対S A A Pを一掃したときよりも、今の彼の魔力は何倍も強力だ。その右手に『聖剣』を握りしめて、再び頭上へ目を戻す。大林は頭上の昇降機をにらみつけたまま、上へと這い上がって行った。

窪井を追って。

「……………」

ハルトキは口を開いていても、名を呼ぶことができなかった。今そこに大林はいた。にも関わらず、そこに彼の心を感じなかったから。心の虚無に聖剣の強い力が満ちてあふれているように。その力は魔力とは別の、窪井に対する感情であるようだ。

「大林……………」

グラソンがつぶやいた。  
とても重たい声で。

「とにかく追いましょう。……………彼が完全に魔力に呑み込まれる前に、我々にできることがあるかもしれません」

全員が目を合わせ、それから武器を強く握った。

## 89：刃の五体

昇降機の停止とともに、窪井はすぐさま外へ飛び出した。

そこはこの基地で最も高い建物の屋上。

重たい鎧の脚を持ち上げて、昇降機をじっと見つめたまま数歩後ずさる。

一秒後、凄まじい破壊音とともに昇降機が破壊された。下方向から吹っ飛ばされた。

そして現れたのは紫の魔物。

触手のような魔力の腕がのっそりと現れ、よじ登ってくる。

窪井はまた一步、後ろへ下がった。

「……………どうということだ？」

窪井の頬には汗が伝っていた。

得体のしれないバケモノ

窪井自身もそうではあるが、それ

さえも圧倒する魔物。

破壊された昇降機の下からあふれてくる魔力の中で、聖剣を石の

床に突き刺し、大林の身体

本体が姿を現す。

剣を支えに立ち上がり、うつむいたまま大林は低く、息を吐きだした。すると、大林のまもっていた魔力が、彼の身体に取り込まれるように薄らいでいく。

いくらか魔力がしぼんだところで、大林が顔を上げた。

「……………」

窪井は身を震わす。

窪井をにらむ大林の瞳は、変わらず濃い紫色に染まっていた。剣を抜いた大林。彼の右腕には、聖剣から伸びた魔力の触手が絡みついている。

「ふっ……。ウィルスは効いていないようだな……」

窪井は苦笑い、ゆっくりと首を横に振る。

「どうやら、お前を止めることはオレにはできないようだ」

「……………」

大林は動きなく窪井をにらみ続けている。

「当然か……。オレは憎い敵。何度も立ち上がり、オレが死ぬまでこの争いを続ける」

窪井は腕を持ち上げ、闘いの姿勢に入った。

「だがこれで最後だ。……もう終わらせよう」

魔力が空間を歪ませている。

大林が聖剣を右手で横へ振り、床を蹴ると、その圧力が床を削った。

窪井は迫る大林に両手の鎧で受けて立つ。

聖剣と鎧が衝突し、空間に衝撃が広がった。

「……………大林さんっ！！！！」

案内人は何度も叫んでいた。

姿を変えてしまった大林の耳に自分の声を届かせようと。

だが大林はほんの少しの反応も見せない。

これがあの心優しい大林とは、とても信じられなかった。無表情で、ただ敵を打つ、魔力に動かされるだけの人形となってしまうたかのように。

「大林さん……！」

今の大林に対して、自分達仲間は何もできないのかもしれない。どうしても案内人には、大林が苦しんでいるようにしか見えなかった。

大林の聖剣が窪井の鎧に一撃を入れた。その威力は先ほどとは違う。大林自身の腕力も増している。

鎧には、いくつも傷が付いていた。しかしまだ鎧に打ち勝つほどの威力ではない。それに腕力も窪井のほうが勝っている。窪井は聖剣を力づくで払いのけ、鎧の重量を遠心力にし、重たい腕振りを繰り出す。それを瞬間的に聖剣で防いだ大林は、威力で吹っ飛んだが、空中で一回転して着地、と同時に姿を消した。

目では追えないほどの素早い動きで窪井の背後にまわり、無防備な鎧の背中に斬りつける。それからよろめいた窪井に魔力をまとわせた強烈なひと蹴りをかまし、前のめりに倒した。

窪井は倒れるのと同時に床を転がり、すぐさま大林のほうへ身体を向け、すかさず斬りかかってきた聖剣の縦振りを、両腕で受け止めた。

「……っ！」

一太刀を繰り出すたびに、威力が上がっているようだ。それだけではなく、鎧の重さだけでも身体に負担がかかっている

のだ。窪井は聖剣を腕でのけることをあきらめ、代わりに大林を足で蹴飛ばした。

体勢を立て直したばかりの窪井に対し、すでに攻撃体勢に移っている大林。聖剣を後ろ方向に構え、魔力を集中させて、紫色の瞳で窪井を見据えている。

それを避けるべきか防御するべきか、

避ける間などなかった。

その瞳が一瞬で窪井の目の前に迫った。

窪井はとつさに左腕を身体の前に構えていた。それから気付く。左腕はすでに聖剣の一撃を防いでいた。

「……………」

大林はまっすぐに窪井の目に視線を向けている。

いや、防いだのではない。

防御した左腕に負荷などがかかっていないのだ。窪井は聖剣の一撃を防いでなどいなかった。

攻撃部位を確実に破壊するために、魔力をその部分に集中させて放ったのだ。

左腕の超強化金属の鎧にヒビが入り、もろくも砕け散った。

「くそっ……………」

組み込まれた『陰の石』すらも、この圧倒的な魔力に敗れた。それだけではなく、窪井の左腕も無傷ではすまなかった。魔力によって腕の筋肉にいくつもの深い傷を負った。

窪井は負傷した左腕を右腕でかばい、大林を蹴り飛ばした。すきができているのか、大林は窪井の蹴りを避けることはしなかった。

蹴り飛ばされて転がった勢いで床を滑り、大林はすぐに立ち上がる。

いくら強烈な一撃を食らおうと、大林は痛みの表情ひとつ見せない。

こんな大林を、窪井は見たことがない。

すでに人ではない。これまでの大林ならば……、死を覚悟し、己の命を捨ててまで闘っていたあのときすらも、大林は己の闘志をしつかりと宿していた。だがここにいる大林から感じられるのは、闘志などではなく、ただ一つの“憎しみ”という感情。

今の大林は、本当に窪井を見ているのか、対峙する窪井ですらそれを疑問に感じる。大林は　　いったい誰を見ているのだろうか。

憎き仇？　それとも殺された田島慎治？　親友であったかつての窪井賢？

違う。

破壊対象だ。

もう大林は痛みで止まることも、感情で容赦することも、いつさいない。

窪井はそれを悟った。

大林は再び聖剣に魔力をまとわせる。

窪井は瞬き一つたりとも大林から目をそらさず、一瞬で間合いを詰める大林を見逃さず、次の一撃をすれすれでかわした。　振り下ろされた聖剣が鎧をかすって地面をえぐったとき、窪井は剣を握る彼の腕を右腕で押さえつけ、左の拳を頬に叩きこんだ。

左腕の傷が血を吹いても、窪井は力を緩めなかった。

一度床に身体を叩きつけて、大林は転がった。  
すかさず窪井は床を蹴る。

走って間合いを詰め、右手で大林の首を床に押し付けた。

「大きな攻撃の直後は、すきができるらしいな」  
窪井は右腕に圧力を加える。

「……………」  
だがそのとき、大林の身体を魔力が包み込む。

「ちっ……………」

魔力に吞まれる寸前に、窪井は大林から離れる。

再び立ち上がった大林は、剣を構えて、窪井に接近した。聖剣の一太刀を右腕で弾き、蹴りを放つが、大林は身を逸らして回避し、また剣を振る。その攻撃に鎧を破壊するほどの威力はないが、重量のある窪井を後ろへ退かすほどの圧力はある。

防御する窪井だが、連撃の最後に体の回転を加えた一振りに、とうとう後ろへ倒された。

ズシン！ と、鎧の重量も合わさり、完全に倒れるまで窪井は抵抗すらできなかつた。そして自らの重さですぐには動きが取れない窪井へ大林が剣先を下にし、振り上げる。

鎧の守りのない頭部へ、聖剣が下ろされた。

ズグンッ！

石片がとび散る。

窪井は寸前で首を横に曲げ、どうにか回避した。頬に石片を浴びながら、大林の左腕に右拳の一振りをお見舞いした。

大林が吹っ飛んだところで、窪井はすばやく身体をねじらせて重い鎧を持ち上げ起き上がった。

見るとすでに大林は次の攻撃態勢に入っている。

窪井の一撃ならば大林を軽く吹っ飛ばすことはできる。しかし何度攻撃を受けようとも、大林は少しも攻撃を止めることはない。

「ちっ……………」今のためえは何のために闘っている？」



「……………」  
「ケジメのための殺し合いだって？ 笑わせるなよ大林！ お前はただオレを殺すことさえできればそれでいいってのか！？」

「……………」  
「違はずだろ？ 大林、オレは“お前と闘いてえんだよ”」

大林は魔力をまとわせた聖剣を振り上げた。

「聞こえねえか……………」

窪井は右の拳をパキパキと鳴らした。  
迫る大林へ、窪井も自ら間合いを詰める。

大林が聖剣を振った。

窪井も拳を振った。

バシイインツッ！！！！

拳と剣が衝突した瞬間、鋭い爆音と衝撃波。

窪井の右腕の鎧は微塵に弾け飛び、聖剣をまとった魔力も弾け飛んだ。

大林は即座に後退し、間合いを取る。窪井はその場で右腕を力なく下げた。

大量の汗が額を流れ落ちる。

窪井の右腕は、左と同じように負傷していた。もはや攻撃を繰り返すことは難しい。

だが窪井は気力で腕を持ち上げた。

それを大林は、やはり無表情で眺めていた。

しかし窪井には、その瞳に少しだけ大林の闘志が瞬いたように感じた。

## 90・見えない己

大林は“そこ”で、闘っていた。  
ニユートリア・ベネツへの基地の最上。目の前にいるのは窪井。  
闘っているのは、自分の身体。

大林は“別もの意思”で闘っているわけではなかった。自らの意思で闘っている。そう自覚していた。

ただ、自らの中にうねる強大な感情に吞まれているようだった。

“憎しみ”という感情に自分の身体を操られている感覚。痛みはなく、恐れもなく、あるのは“憎しみ”という感情のみ。

大林は聖剣を大きく振った。

窪井は身体を後ろへ反らせて回避したが、バランスを崩して床に尻を着いた。

両腕を負傷し、出血している身ゆえに、相当な疲労を覚えている。しかし大林には、その感覚すらもない。

振り下ろされた剣を窪井は横へ転がって逃れた。

剣の速度は常人が避けられるものではない。窪井の動体視力が並はずれていようと、重量のある鎧を装着した身体で機敏に動けるはずもない。

少し違う。と大林は思う。

自分の攻撃が先読みされているのではないか。

たしかに標的を追ってそれを破壊するために一直線な攻撃をしかけている。目の前にあるモノを、ただ破壊するために。

窪井はそれに気付いている。すきをうかがっているのだ。単調な攻撃に必ず生じるすきを。

どうでもいいじゃないか。

標的の逃げ場は限られていて、体力も明らかに削れている。今はスピードも威力も、どれも大林が圧倒している。何より、彼にはそんな複雑なことを考える頭がない。

ズドンッ!!!

大きな魔力を込めた一撃が床を大きくえぐった。

砂煙に飛び込み、剣を横に大振りする。

姿勢を低くしてかわした窪井は大林の真下から腹を蹴り上げ、その足を軸にして大林を飛ばし、背中から倒れた彼へ拳を叩きこむ。

しかし窪井の拳は床にぶち当たった。

大林はすでに窪井の頭上で剣を振り上げていた。しかし窪井はすかさず大林の腹に蹴りを入れ、攻撃を阻止し、間合いを取った。

だが大林は剣を振り上げたまま素早く接近し、刃と魔力を叩きこんだ。

床で弾けた魔力だが、仕留めてはいなかった。

今の大林の攻撃はたしかに威力も速度も窪井が太刀打ちできるものではない。しかし窪井には、今の大林の攻撃を回避することはそれほど難しいことではなかった。

大林の闘い方だとは信じられなかった。

少しの間合いさえあれば、迫る大林をぎりぎりで見視し、少しの動きでかわすことができる。

これまで幾度となく拳を交えた窪井には、今の彼の闘い方は別人にしか見えなかった。本来ならば、こんなにもずさんな闘い方をするはずがない。

「…………っ！」

窪井は齒を食いしばり顔を歪めた。  
今の大林の姿が、なぜか悔しかった。

窪井は刃を横にかわした直後、右の拳を大林の頬にめり込ませ、彼を床に叩きつけた。

大林は床に倒れながら、横目で窪井の拳を見ていた。  
そのとき、ふと思いついた。幼いころ田島に見守られながら窪井と拳を交えていたときのことを。  
今闘っているのも、自分の意思に変わりはない。

しかし

これは、自分の“闘志”ではない。  
闘志とは、対峙した相手を倒すという揺るぎない意志のこと。相手が敵であっても敬意を持って闘うこと。

「……………」

『どうした？ 心を染めろ、力が弱まるぞ』  
すぐ身近に聞こえる少年の声。

「………… オレに闘わせろ……………」

大林は心の中でうなった。

『闘っているではないか。オレはお前に力を貸してやっているだけだ。お前はお前の意思で闘っている』

「違う……。これはオレじゃない……」

大林がまとう魔力が揺らいだ。

窪井はあらく息をしながら様子を見ていた。

今の一撃で腕は激しく出血し、もうほとんど感覚はない。視界もぼやけ、足もふらつく状態。もうあまり闘えないことを自覚していた。

大林が腕を動かした。

下から上へ、振られる聖剣。その刃と魔力が胴の鎧に溝を残した。窪井は何もできずに後ろへ退く。

彼に向けられた大林の瞳は……、

何も、変わらぬまま。

大林は自分の心が魔力に染まってしまったのを感じた。

『終わらせる。それはお前の敵でしかない』

大林は心の中で雄叫びを上げていた。

それは苦しみか、喜びか、悔しさか……。

本人にすらわからない。

ただその口は言葉を発していた。

「鼓 ヲ 貪 レ 霧 ノ 角」

聖剣にまとわれた魔力は、大林のひと突きとともに、切っ先から強大な魔力の塊となり放たれた。

金属音は響かなかった。

剣の先はわずかに鎧と接触しただけ。

しかし魔力は、

鎧の守りなど関係ないかのように窪井の胸を貫いていた。

## 91：魔物が見上げる道

窪井は後ろ向きによるめきながら大林から離れ、昇降機横の壁にもたれて崩れた。

大林は剣を下げる。

もう魔力はまとっていない。この闘いの終わりを、無言で示していた。

大林の瞳からも、紫の魔力は消えている。

「……………」

窪井を見つめたまま、大林は剣を背におさめた。

「……………、もどつたか大林……………」

窪井がかすれた声で喋りかけた。

赤く、筋肉隆々の体から、もとの姿にもどる窪井。鎧の胸部には、丸い穴が穿たれていて、窪井の胸には焦げたような痕が。傷はないが、彼の内側は深い傷を負っている。少しずつ、魂を、命を削るように。

「……………窪井、とうとうお前もここまでだな……………」

大林はじつと窪井の顔を見据えている。死にかけた敵の姿を。

窪井は微かに笑って、苦しげにうめくと壁に頭を預けて空を仰いだ。

「死ぬまでに、いろいろと答えてもらおうか……………」



「……冷たいねえ……。どこまでも、オレを憎んでいるらしい……」

窪井はまた微笑する。

「当時のオレには、信じられなかった。……あれだけ尊敬し、愛した人を、なぜ殺すことができた？ 何がお前をそこまで変えてしまった？」

「……………」

窪井は無表情で、青い空を眺めていた。

そしてふと、悲しげな、辛そうな表情を見せる。

「……オレは、オレを小さいなどと思ったことはない……。ずっとあの人の背中を見て育ったから、ずっと、あの人に憧れて育ったから……。いつかあの人のような、大きな背中になりたいと、思っていた……」

「そうだ。誰だって、あの人に憧れていた、『田島弘之』には、誰一人、あの人を尊敬しない者などはいなかった！」

「……それだけじゃない。オレの中には、ずっと消えないものがある。……“高み”というオレの道だ。オレの目指すべき、場所だ……」

「『田島弘之』にいるかぎり、その高みは遠のいていく……。だから、お前は『レッドキャップ』に身を売った。そしてキースに代わり、この極悪集団を率いるボスになり下がった！ それがお前の“高み”だったというのか!？」

「……………」

窪井は長く息を吐き出し、目を閉じた。

「自由を求めて高みを目指す黒き魔物は……、赤く染まった道を見上げながら、ひたすらに這い登る……。その腹が汚れてもなお、また、自らの赤で染まりながらも……。たどり着けない高みを、見上げ続ける……。魔物がその頂上で見たものは、何だったのか……」

涙が、窪井の閉じられたまぶたから流れ落ちる。  
それはしだいに、あふれ出て、頬を伝っていく。

「すまない大林……。やっぱり、オレには無理だ……」

悔しげに、歯を食いしばり、窪井は泣いていた。

「違うんだ……。違うんだよタカ……。ッ！ あのととき田島さんは……、田島さんを殺したのはオレじゃない……。！！！」

「……なに……？」

## 92：独り見上げた道

「すまないタカ……」

『田島弘之』を抜けることを決心したオレを止めてくれた親友の  
声が、いつまでも胸に残って消えない。

ずっとともに生きていきたかった。田島さんや、タカや、仲間達  
と。田島さんの右腕として、あの人を支えつづけることができれば、  
それだけでオレは幸せだった。

いや、だからこそ、オレは『田島弘之』にはいけないと  
思ったんだ。

オレの心の中でずっとくすぶっているもの……。

“高み”という道。

オレにとっての高みとは何だろう？ そう思ったときにいつも頭  
に浮かぶのは、田島慎治さんの姿。オレも、ああいう姿になりたい  
と思っていた。いや、決めていた。

だからこそ、あの子の背中を見続けているだけじゃダメだと思っ  
た。

『レッドキャップ』は、たしかに悪い噂しかない凶悪組織だ。で  
も、そういう場所だからこそ、オレはオレを磨くことができる。組  
織に毒されてしまうなんてことはあり得ない。いつだって、目の前  
にあるのは田島さんの姿だから。

オレを見込んで組織に誘ってくれたのは、『レッドキャップ』の

統領、アレモフ・キースだ。

この男は、オレの目指す高みからはかけ離れた存在でしかない。でも、もっとも名の知れた凶悪組織の内部を身をもって知ることこそが、オレの“高み”へ繋がる道だと思う。

オレは『レッドキャップ』に心までをも売るつもりは毛頭ない。

さすがに、凶悪組織だけあって血走った連中が大勢いる。これがこの組織の中身。

それでもその中には、まともなやつだっている。オレにはわかる。誰もが親を失くし、親に捨てられた人達だ。世の中の汚い泥を塗られてしまった孤児達だ。

まともなやつは、しかたなく組織に身を置いているのだろう。ここを出てしまえば、生きるすべを失くしてしまうから。

ほとんどが、オレと同じくらいの歳。

悪いのは組織か世の中か。正直オレにはわからない。

「おいてめえら！ 今日から新入りが一匹加わる！ かわいいがつてやれよ」

キースが全員の前でオレを紹介する。そのとき、彼の眼が気味悪く歪んだのに気付いたが、オレは疑問に思わなかった。

その数日後……。

オレは走った。

仲間達のもとへ。『田島弘之』の仲間達のもとへ。

任務から帰還したオレは、ほとんど空っぽの本部を目にした。いつもはバカ笑いや怒声に満ちている『レッドキャップ』の本部が、不気味なほど静寂に包まれている。

立ちつくしていると、一人の少年がオレに声をかけた。

彼はオレよりも三つ年下の、雑用係。震えていて、涙を浮かべた瞳でオレを見つめていた。

「窪井さん……、早く行ってください……。頭達は、あなたの仲間を。『田島弘之』を滅ぼしに行っただんですよ！」

「……………」

オレは何も言葉を返せずに、しばらく呆然としていた。だが何かを考えるよりも、足は走り出していた。

なぜ『田島弘之』が……？

吐き出しそうな吠え声を、歯を食いしばって耐え、ただ走り続けた。

曇天の下、数時間走って、オレはふらふらになりながらも、どうにかそこに到着した。

その頃にはすでに雨が舞い、土砂降りへと変わっていた。

『田島弘之』がテントを構えていた馴染みある広場。そこはもう見る影なく、めちゃくちゃに壊されていた。だがその場所に仲間達の姿はない。いち早く気付いて逃げ伸びていることだけを願い、オレは地面に残る大勢の足跡を追った。

すぐに人影を見つけた。

引き返していくキースと、幹部、その後ろから手下達。笑いを混じらせながら、物陰に隠れたオレの姿にも気付かず、去っていった。オレは必死に冷静を取り戻そうと、混乱した頭を殴る。

そのとき、どこかから声がした。  
誰かはわからないが、キース達が歩いてきた方向から。

オレはすぐに走り出した。

雨の中に二人の影。剣を振り上げるキースの手下と、もう一人は、木にもたれて尻を付いている、真っ白な短髪頭の男。

「……………ああ……………！」

オレは言葉も出なかった。  
抵抗しない田島さんへ剣を振り上げているキースの手下を、どうにか止めようと手を伸ばした。

でも、遠すぎた……………。

「うぐっ！」

田島さんのうめき声。

……………剣は無情に、田島さんの腹へ突き立てられた。

オレの頭の中は、真っ白に染まった。

自分でもわけがわからず、体が動いていた。

田島さんの腹に刺さった剣を抜くと、キースの手下を斬り殺した。そして、意識のない田島さんに目をやる。

崩れてしまいたかった。

でも体が動かなかった。

オレの頭は、完全に思考を停止していた。

ふと、聞き慣れた声で我に戻る。

「……ケン……」

タカ……。

そこには息を切らしたタカの姿。

「よかった……。生きてた……」

オレは声を発した。だがタカには、その声が聞こえていないようだった。

それでも、心から安心した。親友が生きていたことに。

タカが田島さんの姿に気付いた。

死にかけている田島さんの姿を見て、タカは息を詰まらせていた。

「田島さん……」

タカが弱弱しく、声を出す。

オレは押し込めていた悲しみを吐き出したかった。タカの胸にすがって、泣きたかった。タカのもとへ足を進めようとしたとき、タカがオレの顔に目を向けた。

「ケン、お前が……」

「……………」

そのとき見たタカの瞳は、冷たく、怒りに震えていた。  
オレは右手に持っているものに気付いた。

田島さんを貫いた剣が、握られている。

まぎれもなく、オレの手に。

これはキースの手下を斬った剣だ。オレが斬ったのは、キースの  
手下だ。でもタカは……、そのことを知らない。

「 違う」

オレは剣を捨てて逃げ出した。

そうするしかなかった。

いや、そこでオレがタカに説明すればそれで誤解は解ける。なの  
に……。

オレは逃げてしまった。

田島さんのもとから、タカのもとから、仲間達のもとから……。

恐かったんだ。田島さんの死を再び目にするのが。何よりも、親  
友になんて言葉をかければいいのか……。もしもタカがオレに刃を  
向けたら、と思うと。



「……オレは『レッドキャップ』の本部にもどり、キースの部屋へ駆け込んだ」

窪井は目を閉じたまま、語り続けた。

呆然と、その話を聞く大林へ。

「そこで、オレは聞かされたよ……。すべてがあいつらのもくろみどおりだった」

「……もくろみ？」

「キースがオレを組織に誘ったのも、けっきょくは、人質を手に入るためだったんだ……。田島さんを確実に殺すための、その人質が、オレだった……」

「……そんな……」

大林は口元を震わせた。

「それじゃ……。なぜお前はそれでも組織に？　すぐにでもオレ達のところに帰ってくれば……」

「もう、親友達を失いたくなかったんだ……。キースの野郎、今度はお前達を人質にし、オレを組織に留まらせた。仲間達を失いたくなければ、オレの命令に従えと……。別に、あいつにとつてはオレなんて駒の一つにすぎない。でも、そうすることで、自分に忠実な駒をつくり上げる。それがキースのやり方でもあったんだ……」

「……」

大林はうつむいて目を閉じた。その頬には涙が伝っている。

「何で……。どうして『レッドキャップ』は田島さんを殺したんだ……？」

「……それはオレも知らない。誰が田島さんを殺すように依頼したのかは……」

大林は頭を振って脳みそを整理した。

窪井の言ったことは、すべて真実だろう。そう大林が思うのは、

今の窪井が、昔の“ケン”そのままだったから。ただ、大林にはどうしてもまだ納得できなかった。

「キースが死んだ後も……、お前は何も言わなかった。なぜオレ達を敵に回すような……」

「お前は……、オレを恨んでいただろう。だからオレは、何も言わなかった。オレはお前達を敵に回すことで、田島さんの死の重みから逃れていたんだ。……でも、もう耐えたくない……」

窪井は真つ赤な涙目で大林を見た。そして、震える声で言った。

「死ぬまで、言うつもりはなかった。お前と本気で敵対してしまつた以上、オレもお前も退くことはできないだろう。だからオレは、お前の敵として生きることを決めた。……でも、お前を敵にしたまま死ぬのは、やっぱり耐えられない……！」

そして、声を押し殺して言う。

「すまない、大林……！」

### 93：瞳に映した青き空

風が穏やかに吹き抜ける。

数分前までの闘いをつゆも知らぬかのように。または二人の心を冷ますかのように……。

「オレがデントール様に初めて会ったのは、『レッドキャップ』が『田島弘之』を壊滅させたあの日……。キースは邪魔な要素であるオレを、とある任務に向かわせた。仲間を五人連れて、人を殺す武器を持たせて、だ……。それはフーレンツにある、とある道場で、多くの優秀なボディガード、賞金稼ぎなどを輩出するその道場は、『レッドキャップ』にとつて障害でしかなかった……。といっても、それほど大きな存在ではなかったのだが、道場の焼き討ち、および道場主とその家族、門下生全員を討ち滅ぼすことが、その内容だった……」

大林は怒りを耐えつつ、その話に耳を傾けていた。

キースの残虐性は、窪井の言う通り人としての心など皆無だ。

そんな組織に、命を狙われていることなど、誰が思うものか。まして小さな不良集団のリーダーに、止められる相手ではなかったのだ。

田島は『レッドキャップ』が攻めてくると知ったその瞬間から、子分達の盾として死ぬ覚悟を決めていたのだ。

「……正直オレは、何もできなかった……。仲間が標的を斬り殺していくその中で、オレはつつ立っているだけしかできなかった……。感じたことのない恐怖だった。とても、恐ろし光景だったんだ……」

そこまで話をして、窪井は苦しみにうめいた。

魔力が体を蝕む中、話を続ける。大林に、かつての友へ、彼が伝えるべきことがあるからだ。

「……そんなとき、その場所に現れた男がいた。それが、デンテール。……ほんの一瞬の出来事だった。オレ以外の仲間全員が、たった一人に蹴散らされ、倒れた」

「たった一人だと……？」

「それは人を超越していた。頭がどうかしてるのかと思って……、オレはその場から逃げるしかなかった……」

「そして、『田島弘之』のことを知った……？」

「そうだ……。そして、数週間後、『レッドキャップ』は壊滅した……」

微かに、大林へ笑みを放つ窪井。彼に「ありがとう」とでも言うかのように。

「……デンテール様と再び会ったのは、その日のことだ。彼は自ら、オレの前に姿を現した。そしてオレに手を差し伸べて言った。『オレの仲間になれ』と……。オレは圧倒されたんだ、その人の強い眼差しに。そのときオレは、新たな“高み”を見つけた」

「“高み”か……。それは、田島さんを越えるものだったのか？」

窪井はギツと歯を擦り、また涙した。

「田島さんを越える者など、いるわけがない……！ あの人は、オレ達の恩人だぞ……！ オレはすべてを失っていたんだ。師も友も、居場所も……」

「だから、デンテールの仲間になり、『レッドキャップ』を引き継いだのか？」

「……………」  
窪井はうなずいた。

「…………… オレには仲間が必要だったのかもしれない。オレが欲しかったのは、力だ。お前達との絆を振り切つて、“高み”を目指すための力が欲しかった……………」

「それで手に入れた力が、それか」

「デンテール様の力は、何もその強さだけではなかった。オレ達が見たこともないような技術、そしてあの人の頭脳、すべてに圧倒されていた。これ以上の“高み”はないと思つたよ……………」

そして窪井はまた苦しげなうめきを上げる。

「はあ……………、はあ……………、もう、そう持たねえ……………。まだ、話したいことはたくさんある、が……………」

「……………」  
大林は窪井から目を逸らして拳を握りしめた。

「すまない……………、ケン……………」

「…………… 大林……………、いや……………、また昔のように……………、『タカ』と呼ばせてくれ……………」

「……………」  
唇を震わせてうなずく大林。床に一滴、二滴……………、涙が落ちる。

大林は膝から崩れてしまいそうになった。

自分の選択が間違つていたことに、はじめてはつきりと気付いた。

しかし、すでに遅い……………。一番大切だったはずの親友は今、目の前でその命を終わらせようとしている。自分がそう願っていたから……………。

「…………… 自分を責めるな……………、タカ……………。この道を選んだのは、他でもなく、オレなんだよ……………」

「……………」

「黒き魔物が“高み”で目にしたのは……………、自分の理想などは遠く、切ない世界だった……………。自分自身も、真つ赤に染められていたんだ……………。自分の周りのすべてが壊れていくことに、オレは気付いていた……………。だから誰かに　お前に止めてほしかったのかもしれない……………」

「オレがもつと強い男だったなら……………！　田島さんのように強ければ……………、復讐なんて選択はしなかったはず……………っ！」

「……………タカ、それは違う……………。お前がこうしなければ、オレは止まらなかつただろう……………。お前やお前の仲間も、すべてを壊していたと思う……………。だがオレはもう……………」

窪井は目を閉じてほほ笑んだ。固まっていた精神が軽くなったように。

「……………オレはお前を守らなければならなかつたのに……………っ！　親友だったのに……………」

「……………親友、か……………」

窪井は目を開き、その瞳に青い空を映した。瞳の中に宿すように、この世界の最期の景色を……………。

「あの世で……………、田島さんに会えるかな……………？」

「……………」  
「タカ……………、仲間を連れて、すぐに逃げろ……………。オレが死ぬとこの基地は爆破されるようになって……………。お願いだ……………。その前に逃げてくれ……………」

窪井は目を開いていたが、もうその瞳は何も映していない。  
それでも言葉だけは強く、大林にこう言った。

「精いっぱい、生きてくれ」

それから窪井は、笑顔のまま、まぶたを閉じた。

「ケン……」

大林の言葉が、窪井の名が、静けさの中に溶けて消えた。

大林は一度息を吐き、空を見た。

とても美しく、青く輝いていた。

「青空か……。お前らしい空だ」

大林は微笑した。

『警告。 爆破装置が作動しました。この建物から退避してください』

機械の女の声が、基地中に響き渡る。

「大林さん！」

ハルトキの声に、大林は振り向いた。

「無事でよかったよ、ハル、みんな」

階段で屋上まで駆け付けた仲間達へ、大林は笑顔を向けた。

ハルトキは涙を目に浮かべていたが、彼のいつもの、無事な姿を見て目を拭った。そして安堵の顔を見せる。

「決着がついたようだな」

グラソンが壁にもたれて息絶えている窪井に目をやる。それから、

大林へ視線を向けると、じつと彼の顔を見据える。

笑顔の中にある悲しみを見透かされているようで、大林は顔を逸らした。

窪井の死に顔に、誰もが疑問を感じている。

窪井のことは、あとでみんなに話さなければならぬと、大林は思った。彼が悪党のままこの闘いを終わりにするのは、とても耐えられないから。

「さてと……、それじゃ、脱出するわけだけど……」

エンドーがグラソンと宗萱を見る。

「ここは屋上です。どうやって基地を出ますか？」

「……確実な脱出口は、もとのテレポート装置なのだが……」

「その前に爆発しちゃうと思うけど！」

マハエの言葉に、グラソンは腕を組んで考える。

「警告のあと、S A A Pに基地内に残っている手下達の誘導を任せただが、やつらなら最短の脱出口を知っているだろう」

どちらにしろ、まずはこの屋上から階下へ向かうのが先決。

そのとき、どこかからプロペラの轟音が聞こえてきた。

それは彼らの真下から

屋上に風が押し寄せせる。

真下から姿を現した巨大飛行船。格納してあった飛行船を、誰かが操縦しているのだ。

飛行船はゆっくりと上昇して、シラタチ一行の真上で止まった。



『恐えええ!!! しつかり操りたまえよ、ゴトー君! さつき壁に衝突するところだったじゃないか!』

『うるさいなあ、こんなもの、動かしたことないんだからさ』

聞き覚えのある二人の声が、外部スピーカーから響き渡る。

『おいシラタチ! 乗れ! 今はしごを降ろす!』

ゴトーが言うと、開きっぱなしの貨物室の搬入口から、ツッキーが顔をのぞかせて、縄はしごを放った。

「あいつら……!」

エンドーと、マハエ、ハルトキは飛行船へ向かって笑いかけた。目の前に縄梯子が降りると、エンドーとマハエが手を伸ばし、先に登った。グラソンは宗萱へ、先に行くように顔で言って、窪井へ向かって立ちつくしている大林のとなり立ち、彼も窪井の顔を見た。

「苦しいのか?」

大林へ、声をかける。

「……いや、もう、こいつに弱いところは見せない」

「そうか……」

上から宗萱の声が降る。

「ああ、すぐに行く!」

そう言って、グラソンはもう一度窪井を見て、言う。

「オレも、わかったことがある」

「……何を?」

「親友を失うということがどれほど恐いのか。失うと、どれほど悲しいか……」

グラソンの脳裏に、セレーネの最期の顔が浮かんだ。

窪井と

同じように、笑っている顔が。

「初めて、自分の心というものを知った気がする」

「……………」

大林の肩に手を置くグラソン。

「行くぞ。お前を待ってるやつらがたくさんいるだろ」

「ああ」

グラソンの後から、大林もはしごへ向かう。 はしごの前で立ち止まると、もう一度、窪井へ顔を向けた。

「オレは生きるよ、お前や、田島さんの分まで……………」

自身も、その言葉を胸に込めた。

## 94：心に宿すもの

飛行船はニュートリア・ベネツへの基地から、遠く離れていく。小さな爆発音が船の内部まで響き、その後の大きな爆音とともに基地は吹き飛んだ。

操舵室の扉の外では、ゴトー、ツッキー、リートの三人が、暗い顔をしてしゃがみこんでいる。

「統領……」

ゴトーがぼそりとつぶやくと、ゴトーとツッキーは同じように涙を流した。リートは、二人から顔をそむけて、黙っている。

その頬にも、涙が伝った。

「リートまで、泣いてんのか？」

ツッキーがリートの肩を思いきり押すと、リートは力なく床に倒れる。

「……おかしいな……。何でオレまでこんなにも悲しいんだ？」

涙を否定するでもなく、リートは倒れたまま首をひねっていた。

扉の内側　　操舵室の内部では、その扉越しにマハエ、ハルトキ、エンドーが壁に寄りかかって座っている。

扉の外から聞こえる男泣きの声を聞きながら、天井をぼーっと見て、ときどき長い息を吐く。

「あの三人のおかげで、どうにか無事脱出することができたな……」  
マハエが言う。

「まさか、わざわざ助けに来てくれるなんて思わなかったな」  
エンドーが口の端で笑う。

「……どんな心境だろう？ 最終的にあいつらは、ニュートリア・ベネツへとしての意気を捨てたんだろうか？ 恩人だからと言っても、窪井と敵対していたオレ達を救ったことに、抵抗はなかったのかな？」

マハエが言うと、エンドーもハルトキも腕を組む。

「もしかしたら、窪井のためにボクらを助けたのかもしれないね……」

二人は首をかしげる。

「彼らは、昔の窪井を心から尊敬していたみたいだよ。だから、今の窪井に、これ以上壊れてほしくなかつたはず。従うだけじゃなくて、リーダーが道を外しかけたら、ときには命令に背いてでも助け出す。彼らは最後まで、窪井のことを想っていたんだよ……」

「……そうかもね……」

「しばらくは、そつとしておいてあげようね」

マハエもエンドーも、無言でうなずいた。

「大林さんは、大丈夫だと思うか？」

エンドーが言う。

大林はこの操舵室にはいない。まだ貨物室に一人でいる。船に乗り込んでからは、誰も今の彼に声をかける者はいなかつた。誰もが心配をしても、今の彼にシラタチの仲間が必要ではないと思つたからだ。今は一人にしておいたほうがいいのだと、全員がすぐにその場から離れた。

「大林さんは大丈夫。強い目をしてたね、今までになく」

そう言うと、ハルトキは笑って見せた。

マハエもエンドーも、その言葉と笑顔に、安心した。大林のことだけではなく、ハルトキを思つて……。ハルトキも、ずっと苦しんでいるように感じていたから。しかし、もうハルトキは苦しみを捨てたようだ、安心した。

ハルトキは何よりも、苦しむ大林を見たくなかったのだ。この戦いの結果がどうであっても、もう大林の心から苦しみは消えているようだったから、ハルトキも苦しむのをやめた。

突然、エンドーがハルトキの肩に腕を乗せた。

「……………」

反対側から、マハエも同じようにする。

「……………」

ハルトキは口元で笑って、一つため息を吐いた。二人の心がとても温かく感じた。

ともあれ、兄弟達が無事でいたことが、三人にとって一番嬉しいことなのだ。

「シラタチは……………、これからどうするだろうか……………」

エンドーは操舵室の前方　　舵の前で船を操縦しているグラソンと宗萱を見た。

「前にも案内人が言ってたよね。『シラタチ』はこの世界の平和を守るためにつくられた組織だって。ニュートリア・ベネツへ

デンテールの脅威が終わったからといって、シラタチの役目が終わったわけじゃない。……………まだ、モンスターの処理も残ってるし、モンスターのことが根本的解決したわけじゃない」

「そうか……………。オレ達が帰ったあとでも、やっていけるのかな？

S A A Pもずいぶん人数減らしちゃったし……………」

「……………」

それから、しばらく何かを考えていたエンドーが、二人に話しかける。

「少し、オレの考えを聞いてくれるか？」

操舵室の前方

グラソンが舵を握る横で、宗萱はそつと愛刀の柄をさすった。

この刀をグラソンの血で染めなかったことに心から安堵して。

「基地に残ったS A A Pは、窪井の手下達を誘導し、基地外の森の中へ無事に避難したようです」

「そうですか……。安心しました」

「あとは彼らがどう生きていくのか。ほとんどが孤児だけに、それも心配です。統領を失ってしまったのですから」

宗萱は言葉なくうつむいた。

それからゆっくり顔を上げる。

「彼ら次第でしょう。少し心は痛みますが、我々には彼らが人らしい人生を歩んでくれることを願うしかできません」

そう言ってから、宗萱はまた床に顔を向けた。

そして数秒後、グラソンの横顔に喋りかける。

「シラタチに込めた“本来の思い”、忘れていませんよね？」

「……。ああ。オレ達の存在理由だ」

「わたし達の存在理由……。造られた者達がこの世界に存在する理由……」

「白い剣は、赤く染まらない真つ白な剣。それはすなわち、平和、戦いの終わり、シラタチの役目の終わりを意味する」

「そうです。戦いが終わった後、我々は、真つ白な剣を掲げ、どういふ人生を送ればよいのか……。その疑問こそが『シラタチ』です」  
グラソンはうなずく。

「前に三人で話をしたとき、造られし存在である我々は、正しいことと悪いこと、その区別に疑問を抱いていました。今我々が正しいと思っていることが、己の意志なのかどうかを。……。ですが今回、気付けたことがあります」

「……？」

「何です？」

「あまり考えないことです。何が悪で何が正義か、それは他人から受け継いだ意思に、自分の意思を重ねて導いたものを信じることに。それが人それぞれ正しいと思うこと、そしてそれを信じて生きる。」

それが、人という生き物なのです」

微かに口の端を吊り上げるグラソン。彼の首に下がっている首飾り　銀色の金属に絡まれた小さな水晶玉の首飾りに宗萱は目をやり、強めの口調で言う。

「すべてを話してくれますか？　わたしを信じてくれるのなら。わたしは、あなたを正義だと信じたいのです」

「……………」

グラソンは黙ったままで、表情も変えない。

そっと右手を、ズボンのポケットに入れた。そこにある、小さなカプセルを握りしめ、力を込めて息を吸う。

「ああ、後ですべてを話そう」

仕方なく言ったのではない。その言葉は彼の決心、そのものように、宗萱、案内人には思えたのだった。

もうそれまでは何も問うまいと、二人は決めた。

#### 飛行船後部、貨物室

大林は、開け放たれたままの搬入口に立ち、煙の上がるニュートリア・ベネツへの基地を眺めていた。

窪井の魂を見送るかのように、煙が見えなくなるまで、立ちつくしていた。

## 95：これからの表情

飛行船は、『シラタチ』本部の広場にゆっくりと着陸した。

貨物室の搬入口からシラタチ一行、大林、ゴトー達三人は地面に降り立った。

ゴトー達は深呼吸をした後に、マハ工達三人のもとへ。

リートが三人に言う。

「さて、無事にあんたたちが帰還したことだし、オレ達はこれでおさらばするよ」

それからツツキーが三人に軽く頭を下げた。

二人はもう調子を取り戻したよう。ゴトーだけはまだ顔に曇りを残しているが、少しは立ち直ったらしい。現実、泣いているだけでは先へは進めない。三人ともこういう結末は覚悟していたことなのだ。

「お前達は、これからどう暮らしていく？」

エンドーが三人に言う。

「そうだなあ、とりあえずはまず、眠りたいね。肌がかさかさだからさー」

「リート、そんなこと言っても、オレ達に行く場所なんてないんだ。どこへ向かうつもりなんだ？」

「ゴトー君、ゴトー君、旅をするのもいいよね。三人で楽しく世界を冒険しよう！」

「オレは一刻も早く一人になりたい」

「どうしてだい？ 一人で思いに浸りたいのかな？」

リートがツツキーと腕を組んで、ニタツと笑う。

「オレはただお前達二人と、さよならできればそれでいいんだよ！」

「……………」



リートとツツキーは腕を組んだまま、ふくれっ面でゴトーを見つめた。

それからいつせいに彼に飛びかかる。

「うわっ！ やめるおい！」

「ゴトーくうくん！ そんな悲しいこと言わないでおくれよあ〜」

「オレかオレが悪いのか！？ オレのこの美しさにすべての責任があると言っただな！？」

「あああ！ テメエらといるとオレは日に日に寿命を削られてんだ！ー！ 頼むからもうオレに関わらないでくれ！ー！」

ゴトーは二人を力づくで払いのけた。

「この野郎！ オレはお前を見そこなった！ー！」

リートが地面にあぐらをかいて言う。

「オレ達はチームじゃないか！ そう思っていたのはオレ達だけだったってのか！？」

「……もう統領はいないんだ。ニユートリア・ベネツへを失ってしまった以上、お前らとのチームも解散だ」

「……………」

リートとツツキーは言葉をなくして、うつむいた。

そしてゴトーに飛びかかった。

「うお！？ なぜまた！？」

「ゴトーくうくん！ オレ達を二人ぼつちにしないでくれよ〜！ オレ、リートと二人だけなんて考えられない！ いや、考えたくない！ー！」

「……………」

「ゴトー、頼む！ 美しすぎるオレには中和役のお前が必要なんだ！ だから離れるとか言わないでくれ！」

「……………」

ゴトーは耳元の騒ぎに顔をしかめるだけ。

そこへマハエが声を張って言う。

「三人とも、その辺で静まって、オレ達の話聞いてくれ」  
「……………」

一言で静まり、ゴトー達はマハ工達に顔を向けた。  
「話って？」

リートが訊く。

「茶でも飲みながら、ゆっくり話そうや」

エンドーが顔で笑って、本部の入口へ歩き出す。

ゴトー達は顔を見合わせた。

三時間後

戦いで汚れた服を着替えたマハ工、ハルトキ、エンドーは、住民達の避難場所となっている寺院の門をくぐった。

避難民達は、モンスターへの恐怖からか、できるだけ騒がないように心がけているらしい。誰もが寺院の屋根の下やらで雑談している。

「おい、昨夜よお、空をでっかい船が飛んでるのを見たんだが、あれは何だったんだ？」

「船だと？ 船が空飛ぶって……、そりゃ雲かなんかを見間違えたんだよ。船が空を飛ばば、魚だって空を飛ばなきゃおかしいだろうよ」

「むむ、たしかにそうか……。雲……。かあ？」

「……………」

三人は寺院の広い敷地を歩きまわり、一番目立たない隅っこに、ジンとサーヤ、そして子供達の姿を見つけた。

サーヤはエンドーの姿を見ると、すかさず立ち上がって歩み寄る。

「サーヤ、みんな、調子はどうだ？」

「調子？ いいと思うの？ わたし達はこの場にふさわしくない存在よ」

「まあまあ、そんなこと言わずに、外が安全になるまでは我慢してくれ。それより、体には何も異常ないか？」

「……………」  
サーヤはじつとエンドーの目を見つめた。

エンドーが訊こうとしていることを理解した。昨夜、自分が“あの力”でドラゴンを倒した。雷の長剣がドラゴンを貫き、倒した瞬間を、彼女は忘れてなどいない。

「……とくに変わったことはないわよ。……清々しいくらいにね」「それならいいんだ」

「……………」  
自分に笑顔を見せるエンドーに、無言と愛想のない顔を向けているサーヤ。

しかし、彼女の拳は強く握られている。

本当は訊きたいことがたくさんあった。

エンドー達が持つ力について、自分の中に確かに存在する、この力とは何なのか。

しかし訊けなかった。誰も、サーヤの力について直接訊かないから。彼らがそれを目的で来たわけではないことに気付いたから。

ただ、様子を見にただけなのだ。

だからと言って、それを迷惑などとは思わない。それどころか、とても嬉しかった。エンドーの顔をまた見ることができただけでも、不安な思いは消えていく。

彼ら三人は町の人達とは違って、自分達を人として見てくれて、笑顔を向けてくれる。サーヤだけではない、ジンも子供達も、とても温かな気持ちにさせられていた。

「よう、シラタチ」

そのとき、マハ工達の後ろから聞こえた声。

アオバが、彼らのもとへ歩いてきた。

「お疲れ様です、アオバさん」  
マハ工が笑いかけると、アオバも「おつかれ」ときこちない笑顔をつくる。

彼も相当、疲労が溜っているらしい。おそらくは一晩中眠らずにモンスター討伐に励んでいたのだろう。

「そっちの戦いは、終わったのか？」

「はい。無事、帰還しました」

「よかった。こっちも何事もなく夜を越えたが、まあ、事態が収拾するまでここにいれば、まず安全だろう」

「すみません、何か、いろいろと手伝ってもらっちゃって……」

マハ工が頭をかくと、アオバは後ろへ向いて歩き出す。

「お前達には恩があるし、住民達を守るのは軍の仕事でもある」  
そう言うつと後ろの三人へ手を振った。

それからサーヤ達へ、

「その子供達も、強い眼差しを持って」  
言っつて、歩き去っていった。

「……どういう意味だ？」

エンドーが眉をしかめる。

「きつと……、前を見ろつてことね」

サーヤは鼻で笑った。

それでもどことなく、嬉しさをふくませて。

「そつだ、サーヤ。言っつておくことがある」

エンドーは言いづらそうに、少し目をそむけて言つた。

「オレ達、しばらく用事でシラタチを離れる」

「……え？ どういうこと？」

「いつまでかはわからないけど、ここへも顔を出せなくなるから……」

「……」

「どこへ行くの？」

「……うまく説明できないけど……。まあ、そのうちまた会えるよ」  
エンドーはほほ笑んでサーヤを見つめたあと、歩いてきたジンへ  
右手を差し出す。

「しっかり、守ってやれ」

「言われなくても」

自らも右手を差し出し、握手を交わすエンドーとジン。

「……………」

サーヤは少しの間うつむいたが、すぐに顔を上げてエンドーの目  
を見る。

「絶対、また会えるよね？」

「ああ」

「わかった」

サーヤは深くは訊かなかった。何かを堪えるように、ぎゅっと口  
を閉ざしていた。

太陽が沈む、夕暮れ

ゴトー、リート、ツッキーの三人は、シラタチ本部から少し離れた場所にある小高い丘の上で、沈む夕日を眺めていた。

数時間前に本部の一室で、マハ工達三人と宗萱、グラソンの『シラタチ』責任者から、その話を聞かされた。

それはエンドーの提案。

シラタチの戦力が大きく不足している今、責任者二人もそれに同意し、ゴトー達に選択を与えた。

「オレ達に、『シラタチ』のメンバーに入れて……」

リートがつぶやく。

「どうかしてるよな。昨日まで敵同士だったんだぞ？」

ゴトーは声では笑っているが、その顔はいたって真剣だった。

「どうしようかー？」

ツッキーも、悩んでいる。

たしかにゴトー達に帰る場所などはない。もともと窪井に捨てられた身で、本当の家族など、彼らにはいないのだ。

「こいつらなら、信用できる」と言っただのは、エンドーだけではなく、マハエもハルトキもうなずいていた。その熱意もあって宗萱もグラソンもゴトー達にこの提案を進めてきたのだ。

「どうも……、よくわからないな……」

ゴトーはため息を吐く。

もしも『シラタチ』に入る決心がついたなら、また城に戻ってこいと、グラソンに言われ、三人はそれから時間も忘れて座り込んでいる。

「本当は……、もう決めてるんじゃないか？」

リートがぼそりと、訊く。

「……………」

ゴトーは黙っていた。

風が穏やかに、昼間の熱気を冷ましてくれる。

緑色の木の葉がこすれて音を立て、それは自然のしらべのよう。

思えばニユートリア・ベネツへに入ってから、これほど落ち着い

た気持ちになったことはなかった。

心の霧が吹き消されていくような気がした。

ツッキーが伸びをして立ち上がる。

「夕焼けがきれいだなー」

日が沈めば夜になり、また日が昇って朝が来る。

それが自分達にとっても自然なことであるのだと、ゴトーはそれを思いだした。

もう自分は黒き魔物の一部ではなく、後藤伸彦という、一人の人間なのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1162e/>

---

造られし空の下で（3）～正と悪の均衡～

2011年6月29日22時25分発行